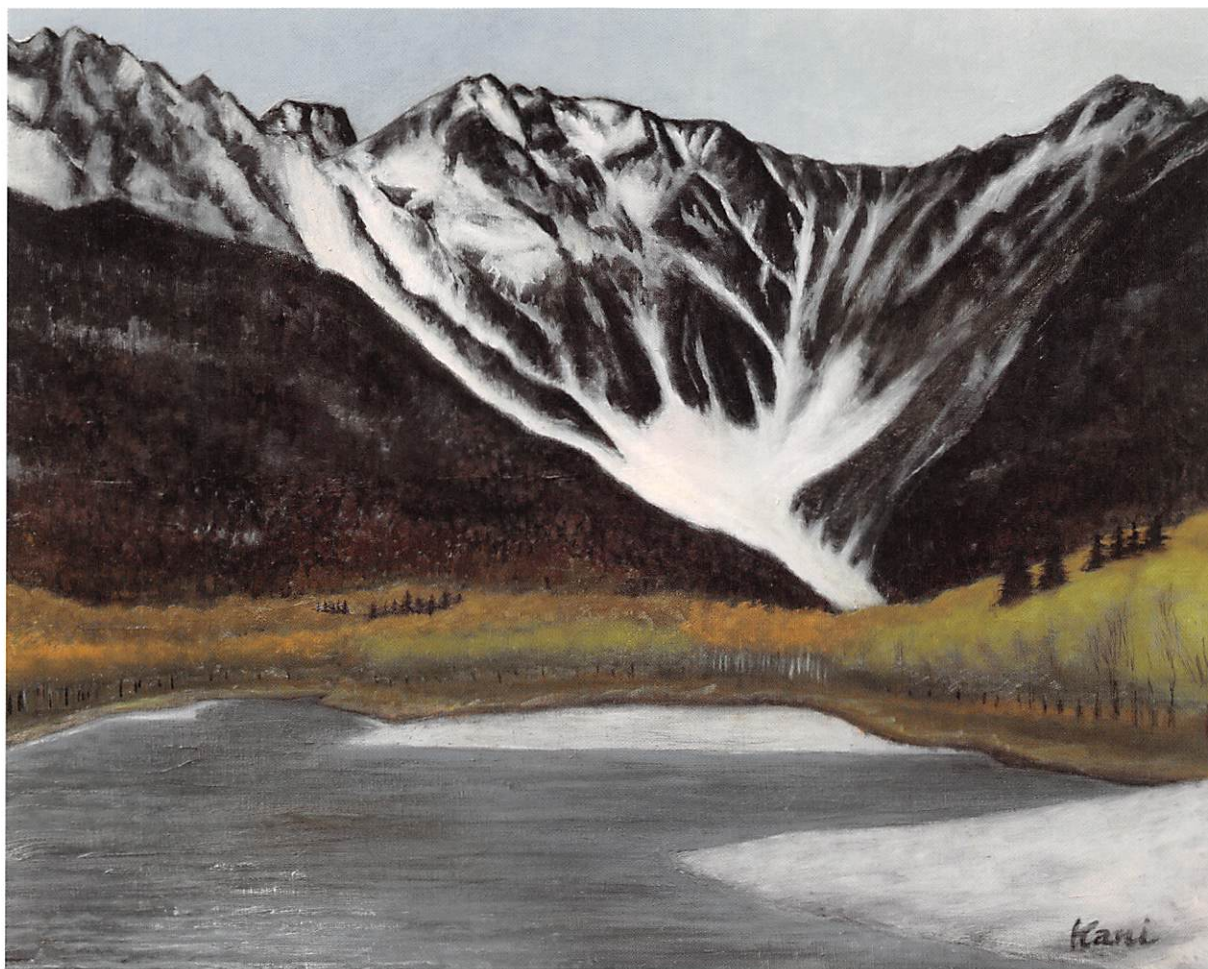


青春の彷徨

埼玉県立川越高等学校山岳部
創立九十周年記念誌OB会編

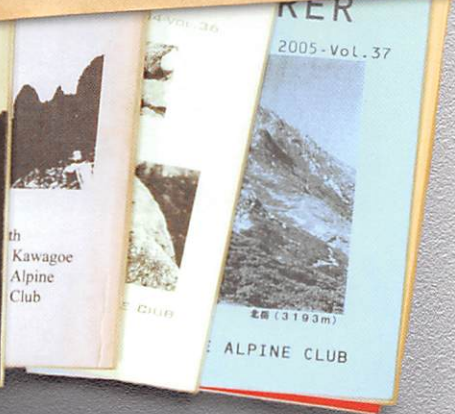
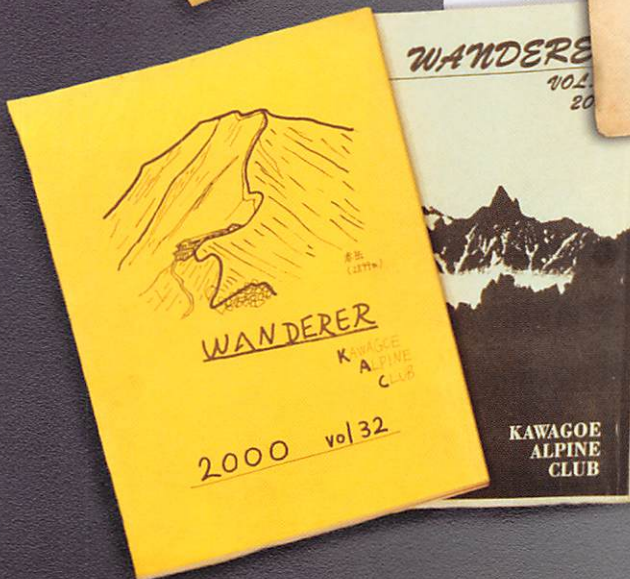
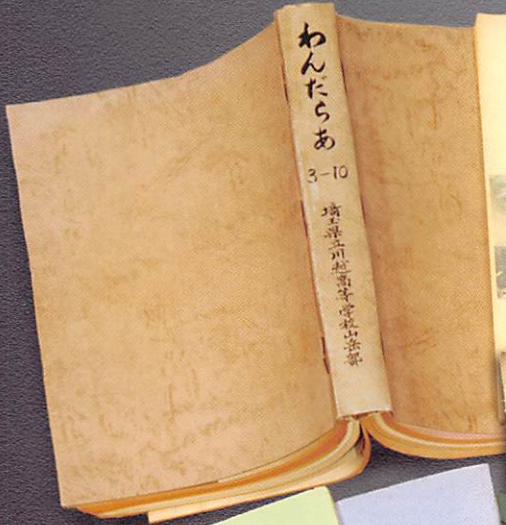


初夏の薫り 穂高岳 (油彩)

可児一男



部報 秩父峯 1号からWANDERER 40号





1992年11月 OB会総会



1988年11月 OB会発足



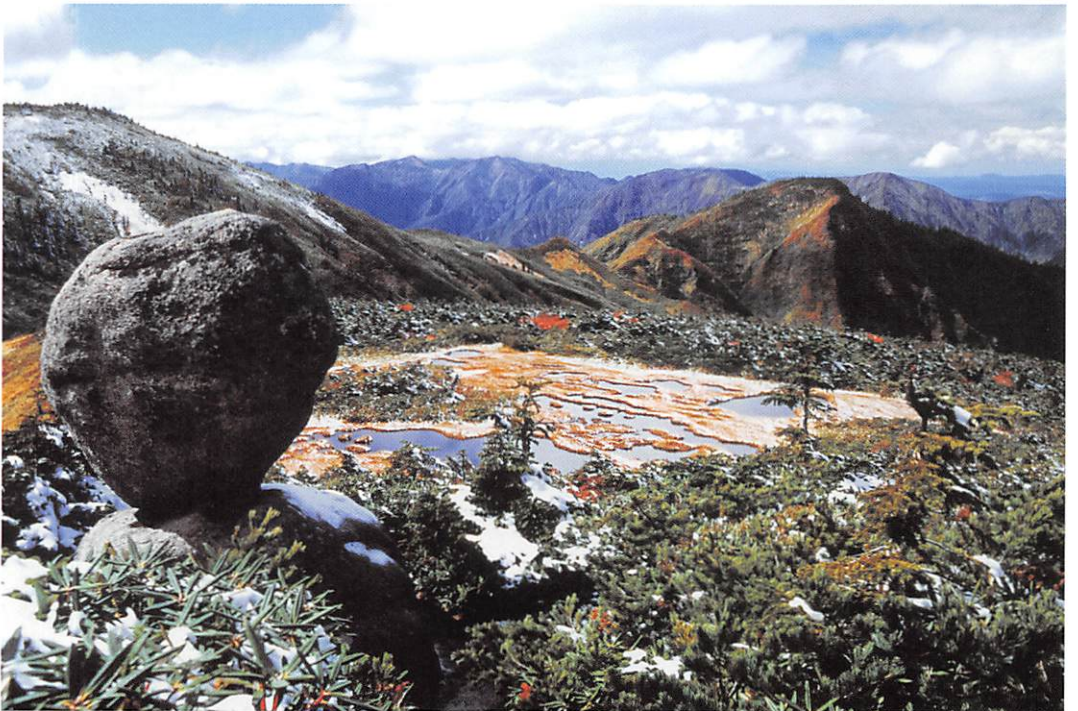
2003年5月 日光高山 OB会山行



1958年5月 鳳凰三山 新人歓迎山行



1999年10月 富士山 北岳から (撮影・関口洋介)



2005年10月 晩秋の平ヶ岳 ラムダ賞受賞作品 (撮影・関口洋介)



1946年 雲取山 山小屋前 後方右に佐藤徳四郎先生



1951年 春の奥武蔵クラス遠足 佐藤徳四郎先生を囲んで

1957年8月 夏山合宿 木曾駒ヶ岳 千畳敷カールにて
岡田潔先生と現役



1959年7月 夏山合宿 奥穂高岳山頂にて
内田一正・岡田潔先生と先輩・現役



1960年12月 武甲山麓にて 石川正明・岡田潔先生と現役一同



1990年7月 夏山合宿 槍ヶ岳を背景に
三俣蓮華岳にて



1961年7月 夏山合宿 岡田潔先生を囲んで
奥穂高岳山頂にて



1970年6月 歩荷訓練 奥武蔵 蕨山～武甲山



1999年8月 埼玉新聞に川越高校山岳部の歴史が特集された



1947年 夏山合宿 燕岳から槍ヶ岳 河童橋から穂高連峰を背景に



1954年 当時の北岳肩の小屋



1959年3月 1年生の春山合宿 奥秩父縦走 金峰山山頂にて



1969年4月 春の八方尾根 (撮影・松崎中正)



1970年7月 夏山合宿 農鳥岳から間ノ岳・北岳を見る

初冬の雷鳥 まだ夏服が少しのぞいている



雷鳥の家族 母親はいつも警戒を怠らない (撮影・松崎中正)



1978年7月 夏山合宿 塩見岳～北岳 間ノ岳にて

青春の彷徨

埼玉県立川越高等学校山岳部
創立九十周年記念誌OB会編

はじめに

川越高校山岳部OB会会長 可児 一男

「快拳」です。ここに期待通り見事に上梓された埼玉県立川越高等学校山岳部創立九十周年記念誌には快拳という言葉しか思い浮かばないのは私だけではないでしょう。

我が母校は明治三十二年（一八九九年）埼玉県第三中学校として設立され、川越中学校、川越高等学校として名称は変わりましたが、埼玉県西部の中心高校です。男子校で伝統的な質実剛健の気風が今でも続いています。平成二十一年（二〇〇九年）には創立一一〇周年を迎え、同窓生は三万余名の多さに達し各方面で活躍されております。

歴史的にみて、日本の登山はヨーロッパよりも古く、山は崇敬の対象として宗教上の登山が形成されてきました。文献的記述も七世紀半ばにあり、九世紀には「富士山記」に山頂の様子が記され多くの人の登頂が窺えます。明治維新後は、外国人による近代登山の紹介と、測量のため山岳地帯の地理・地形・地質調査・植物研究などの登山として発達してきました。明治三十八年（一九〇五年）日本山岳会が誕生し、大正二年（一九一三年）に参謀本部による五万分の一地図の市販や、鉄道省による「日本アルプス案内」などが登山熱を高めることとなったのです。

我等が山岳部は大正八年（一九一九年）登山部として創設、学友会に設置されました。設置の目的は「自然の美を穢さず流行的なものではない雄偉剛健の気を養い又學術の研究」とされました。夏休みに希望者を集めて実施されたもので、初登山は富士山でした。生徒二十五名、引率六名の参加でした。翌年は木曾御嶽山、次は白馬岳と続いています。

日本国内では、世界的大恐慌（一九二九年）から昭和二十年（一九四五年）終戦の間は登

山熱も低下し、我が母校も昭和十七年（一九四二年）から昭和二十年（一九四五年）まで活動を休止して居ります。終戦の翌年から運動部の山岳部として、その活動は現在まで脈々として続けられています。

私は昭和三十年七回卒でまだ戦後の物の無い時代に山岳部を過ごしています。靴は軍靴に鋌を打ったものを履いたり、寝袋は米軍の払い下げを使ったりと、かなり苦勞をしていました。多感な若者パワーだけがたよりの無我夢中登山でしたが、何事にも変えがたい良い山岳部を経験させていただきました。

高校時代の山岳部は山の魅力を初めて経験する機会が多いと思います。卒業後はさまざまな方向に分かれ、さらに高度の山に挑戦する方、海外まで出かける方、毎月のように近くの山行に憑かれる方、雪が降ると落ち着かない方、家族が中心の山行になる方など、様々な変わっていくものでしょう。しかし、山岳部に属していたと言う経験は、実社会での活動に大きな影響を持ち意義深いものと推察されます。

山岳部OB会は昭和六十三年（一九八八年）に発足しましたが、平成四年（一九九二年）に川越プリンスホテルで大集合の会が開催されました。三百名からなる山岳部OB会の名簿が出来、顧問の先生二名と会員七十名の出席者が一堂に会して共通語の「山」を語り合い大きなまとまりとなりました。爾来、春と秋にはOB会の山行が定期的に企画、実施され、大勢のOB達が参加しています。全国的にも珍しいと思います。二〇〇一年にはホームページが開かれ活動の報告、記録が掲載されています。リンク先には更に独自の世界を披露している優れたものもいる程です。

この度の編集、出版は、岩堀弘明代表幹事はじめ数名の人達の熱意と、OBの皆さんの協力により完成にこぎつけたものです。この場をお借りして心から感謝し、御礼を申し上げます。現在活動している山岳部の皆さんにエールを送ると共に、次々と個性のあふれる後輩が現れ、このOB会を引き継いでくれるものと確信しています。

埼玉県立川越高等学校 山岳部部歌

山男の歌

作詞 小沢俊郎
作曲
編曲 牧野 統

世の偽りを 知りしより
我が魂の 故郷を
求め彷徨う ワンダラー
われらは永久の 山男

霧こめきたり 霧流れ
尾根に一本 花浄き
八汐つつじの ぬるるとき
もののあわれを 知るわれぞ

風に紛るる せせらぎや
谷間の空の せまければ
いよいよ蒼き 星辰は
深き黙示を もたらすか

ああ置々と たたなわる
翠巒越えて よくぞ来し
ベルクハイルを 叫ぶとき
極まる若き 生命かな

若き心の 憧れは
山に來りて 山に生き
里に歸りて 山を恋う
われらは永久の 山男

山男の歌

作詞 小沢俊郎
作曲
編曲 牧野 統

♩ = 82

よ の い つ わ り を し り し よ り

わ が た ま し い の ふ る さ と を

も - と め さ ま よ う ワ ン ダ - ラ -

わ れ ら は と わ の や ま お と こ

青春の彷徨／目次

第一部 旧制中学校登山部（山岳部）の記録

一九一九年（大正八年）～一九四二年（昭和十六年）

一九一九年（大正八年）	山行	富士登山	奥田武甲	13
一九二〇年（大正九年）	山行	木曾御嶽山	関根勇一ほか	18
一九二一年（大正十年）	山行	戸隠から白馬岳	吉田司馬之助	22
一九二二年（大正十一年）	山行	富士山	久下敏治ほか	26
一九二三年（大正十二年）	山行	北アルプス縦走記	内田静馬ほか	28
	山行	浅間山から碓氷峠	仲正一郎	31
一九二四年（大正十三年）	山行	白馬岳の登攀	遠藤真三	33

はじめに	可児一男	2
山岳部部歌	凡例	4
		12

一九二五年（大正十四年）	山行	不二登山記	石川信雄	36
一九二六年（大正十五年）	山行	木曾御嶽	村本達郎	38
一九二七年（昭和二年）	山行	立山登山記	市川宗貞ほか	41
一九二八年（昭和三年）	山行	北アルプス裏銀座	横山 清ほか	45
一九二九年（昭和四年）	山行	富士山	浅海弥一郎ほか	51
一九三〇年（昭和五年）	山行	白馬岳登山記	矢沢修次ほか	53
一九三一年（昭和六年）	寄稿	鐘釣温泉へ長い下山道	田中 進	59
	山行	燕岳から槍ヶ岳へ	浅野四郎ほか	60
	寄稿	岩稜帯の山が好きだった	浅野四郎	65
	寄稿	毎月登山の実践	田中 進	66
一九三三年（昭和八年）	山行	乗鞍岳から上高地	鹿島鶴ほか	69
一九三四年（昭和九年）	山行	北アルプス常念岳		74
一九三五年（昭和十年）	山行	富士登山	吉田敬一ほか	74
一九三六年（昭和十一年）	山行	乗鞍岳登山記	加藤 熙	75
一九三七年（昭和十二年）	山行	木曾御嶽登山記	駒野良樹ほか	77
	山行	白馬岳登山記	三重藤三郎ほか	81

一九三八年(昭和十三年) 山行 燕・槍登山記 深田ほか 84

寄稿 槍沢雪溪の命拾い徳田一郎 86

一九三九年(昭和十四年) 山行 立山登山記 小峰三郎ほか 88

一九四〇年(昭和十五年) 山行 槍ヶ岳から穂高岳 坂西登ほか 92

寄稿 召集直前の白馬岳 牛窪友次郎 96

一九四一年(昭和十六年) 山行 奥秩父縦走記 山口茂ほか 98

寄稿 登山を奨励された時代 川村正雄 100

第二部 高等学校山岳部の記録

一九四六年(昭和二十一年)～一九六九年(昭和四十四年)

凡例 104

一九四六年(昭和二十一年) 寄稿 武甲山への吊い登山 斎藤金作 105

寄稿 学徒動員の経験 滝沢茂樹 106

一九四七年(昭和二十二年) 寄稿 真夏の上高地 滝沢茂樹 108

寄稿 徳本峠からの長い道のり 斎藤金作 109

寄稿 佐藤徳四郎先生 岩堀弘明 110

一九四八年(昭和二十三年) 寄稿 登山で出会った山師たち 佐久間春男 113

一九四九年(昭和二十四年) 山行 甲武信岳登山記 赤星 謙 116

寄稿 山への憧れ 金子勇二 118

寄稿 山岳部初めての南アルプス 糟谷 熊 120

一九五〇年(昭和二十五年) 山行 南アルプス北部縦走 糟谷 熊 122

随想 山の一観 木村信寿 127

寄稿 岩魚の手づかみ 駒井 昭 128

一九五一年(昭和二十六年) 山行 北ア裏銀座(抄) 中根甚一郎 131

記録 秩父三峰他(抄) 内田忠仁 132

寄稿 満喫している別荘生活 川口 泰 133

寄稿 禅寺の山歩き 傘松祐三 136

一九五二年(昭和二十七年) 山行 八丈島雑感 和田喜一郎 138

一九五三年(昭和二十八年) 山行 両俣の朝 内田一正 140

寄稿 ジャヌー七七一〇峰の頂上 市川章弘 141

寄稿 山といくつかの出来事 可児一男 145

一九五四年(昭和二十九年) 山行 南ア北部 櫛笥亮介ほか 149

寄稿 世界独り旅へ 川上康夫 151

寄稿 私の南アルプス 岩堀弘明 152

寄稿 青春時代の山登り 岩崎清彦 154

一九五五年(昭和三十年) 寄稿 入部と夏山合宿 関口洋介 157

一九五六年(昭和三十一年) 寄稿 半世紀ぶりに妻と登った武甲山 木村良次 159

一九五七年(昭和三十二年) 寄稿 春の安達太良山・夏の中ア 関口洋介 161

一九五八年(昭和三十三年)
寄稿 六甲山アラカルト 吉原哲夫 164
山行 夏山合宿・蝶から常盤岳 岩沢龍男 166
寄稿 部報「わんだらあ」創刊
と部歌の制定 井上雅弘 170

寄稿 若月洋三と小沢俊郎・
郁郎兄弟との交流 長沼友兄 174
寄稿 消えた武甲山の岩壁・思い出の人 長沼友兄 178

一九五九年(昭和三十四年)
山行 春山合宿・奥秩父・金峰山 長島威 182
山行 夏山合宿・北ア燕岳から 槍ヶ岳(抄) 高野七郎ほか 183

寄稿 増水した奥多摩の山 石井秀世 185
寄稿 勤務先で訪れた世界の山々 斉藤雄二 187

一九六〇年(昭和三十五年)
山行 冬山合宿・甲斐駒ヶ岳 大石一博 190
山行 春山合宿・赤岳・硫黄岳 小久保英夫ほか 191

寄稿 山は人生 高野七郎 194
寄稿 長島先輩お元気な理由 染谷 明 196
追悼 大石一博遭難 編集者 198
寄稿 あの年の夏、故大石一博の記憶 長島 威 200

一九六二年(昭和三十七年) 報告 白馬岳・五竜岳 編集者 203
一九六三年(昭和三十八年) 記録 山岳部に入って 中沢晴夫 203
寄稿 遠見尾根へ再び 森田孝一 204

寄稿 自慢の山岳部 斉藤 憲 206
報告 湯俣・三俣蓮華岳 編集者 208
山行 新人生歓迎登山(抄) 桜井理喜 209

一九六六年(昭和四十一年) 追悼 初冬の白馬乗鞍岳に散った命 編集者 211
記録 文化祭 江田 正 213
寄稿 山岳部の思い出 河原俊昭 214

一九六八年(昭和四十三年) 山行 武甲山カモシカ山行 藤井亮助 217
一九六九年(昭和四十四年) 山行 春山合宿・苗場山 山崎和達 219
随想 雪の登りで考えたこと 森田英和 220

第三部 高等学校山岳部の記録

一九七〇年(昭和四十五年)～二〇〇八年(平成二十年)

一九七〇年(昭和四十五年) 記録 合同山行 蔵山 森本克之 224
寄稿 遠回り好きな山仲間たち 小沢忠男 225

一九七一年(昭和四十六年)	山行	春山合宿・武尊山	山田俊也	227	一九七九年(昭和五十四年)	寄稿	元山ザルの独り言	黒沢資到	263
	寄稿	三日停滞した南ア光岳	戸部秀明	228		追悼	ある山男の不本意な死	黒沢資到	265
一九七二年(昭和四十七年)	山行	北アルプス縦走記	万灯章雄	230	一九八〇年(昭和五十五年)	寄稿	四半世紀の私の山	加島篤人	268
一九七三年(昭和四十八年)	寄稿	残雪期の鹿島槍ヶ岳とスキー			一九八一年(昭和五十六年)	随想	上州武尊山について	野村正宣	270
			鷹狩勝之	233		寄稿	顧問のザック	小峯昇	271
一九七四年(昭和四十九年)	寄稿	山岳部レジスタンス運動	渡辺直治	238	一九八二年(昭和五十七年)	記録	合同山行	川越女高登山部	273
	山行	冬山合宿・日光白根山(抄)			一九八三年(昭和五十八年)	記録	部報巻頭言	野村正宣	275
			編集者	241		山行	春山合宿・白毛門(抄)	伊藤正宏	276
	山行	第二回ボツカ川苔山(抄)				随想	登山観	小峯昇	277
			粕谷伸男	242	一九八四年(昭和五十九年)	寄稿	南極観測へ	名和一成	280
一九七五年(昭和五十年)	山行	夏山合宿・飯豊連峰(抄)	東海林均ほか	243	一九八五年(昭和六十年)	記録	部報巻頭言	大山正直	284
	寄稿	川高山岳部顧問今昔	松崎中正	244		山行	春山合宿・白毛門(抄)	三瓶達生	285
	記録	部報第十号巻頭言	大槻晴男	250		寄稿	無理を重ねた夏山合宿	内野成礼	285
一九七六年(昭和五十一年)	記録	同編集後記	小畑勝利	250	一九八六年(昭和六十一年)	山行	平ヶ岳(抄)	山本高義	287
	山行	春山合宿・日光女峰山	柳雄	251	一九八七年(昭和六十二年)	山行	春山合宿・白毛門(抄)	古田茂	290
	山行	夏山合宿・聖岳から赤石岳(抄)			一九八八年(昭和六十三年)	報告	八ヶ岳雪崩遭難(抄)	斎藤雄一	290
			奥沢正士	252		山行	夏山合宿・会津駒ヶ岳から平ヶ岳		292
一九七七年(昭和五十二年)	山行	夏山合宿・北ア薬師岳から烏帽子岳(抄)	土田由紀夫	253	一九八九年(平成一年)	山行	第一回歩荷訓練山行	小野徹生	296
	報告	沢ヶ岳行方不明事件		255		随想	山の恵みを体に浴びて野口孝	孝	297
	寄稿	沢ヶ岳遭難の記憶	作美幸宏	257	一九九〇年(平成二年)	山行	夏山合宿・北アルプス(抄)		298
一九七八年(昭和五十三年)	寄稿	武甲山での気絶	一戸清	259		山行	三本槍ヶ岳(抄)	編集者	299

一九九一年(平成三年)	山行	冬山新人大会・巻機山 小林靖広	300
	山行	春山合宿・根子岳・ 四阿山(抄) 編集者	301
一九九二年(平成四年)	山行	春山合宿・笈ヶ岳 蛭田亮介	302
	山行	冬山合宿・西吾妻連峰 長島俊行	305
一九九三年(平成五年)	記録	部報巻頭言 吉田 哲	307
	寄稿	川高での顧問十一年 野口 孝	308
	随想	三度目の正直を願って 吉田 哲	310
	追悼	吉田哲遭難死 編集者	311
一九九四年(平成六年)	追悼	吉田哲君の死から現在に 至るまで 小野徹生	313
一九九五年(平成七年)	寄稿	川高山岳部の十年 熊井昌男	315
一九九六年(平成八年)	山行	上高地から薬師岳 合田知之	318
	寄稿	大荷物 of 夏山合宿 合田知之	320
一九九七年(平成九年)	山行	北ア・真砂岳 関根俊彦	321
	随想	軽量化と山の楽しさ 矢谷真二郎	322
一九九八年(平成十年)	山行	第四十二回全国高等学校 登山大会 上辻秀治	323
	随想	さむらい山脈 上原佳久	325
一九九九年(平成十一年)	寄稿	山岳部過渡期の登山 渡辺耕祐	326
二〇〇〇年(平成十二年)	寄稿	現代川高山岳部の気風 吉田立志	329
二〇〇一年(平成十三年)	山行	夏山合宿・剣岳 村松直裕	331
二〇〇二年(平成十四年)	山行	武甲山登山競走大会 梅沢佑介	333

OB会合同山行の記録

一九九一年(平成三年) ～ 二〇〇八年(平成二十年)

二〇〇三年(平成十五年)	報告	夏山合宿・白馬岳等 編集者	335
二〇〇四年(平成十六年)	報告	夏山合宿・穂高岳等 編集者	336
二〇〇五年(平成十七年)	報告	夏山合宿・北岳等 編集者	337
二〇〇六年(平成十八年)	報告	夏山合宿・立山等 編集者	338
二〇〇七年(平成十九年)	記録	南部北部地区新人大会・ 両神山 葛森翔悟	340
二〇〇八年(平成二十年)	記録	部報巻頭言 津森賢士郎	341
	随想	駄物 吉田立志	342
		川高山岳部用語集から	343

主な山行記録一覧

OB会の誕生から合同山行へ	岩堀弘明	351
山への誘い	金子勇二	352
編集後記		390

題字 松崎中正

第一部

旧制中学校登山部（山岳部）の記録

——一九一九年（大正八年）～一九四一年（昭和十六年）



凡例

埼玉県立川越中学校登山部（山岳部）の戦前の、すなわち一九一九年（大正八年）から一九四一年（昭和十六年）までの記録を、次の方針に基づいて収録する。これらは、主に学友会年報などに掲載されたもので、夏季休業中に希望者を募って、教員の引率のもとに実施された登山の紀行である。

1 冒頭にタイトル、文末に筆者、出典を記した。

卒年において、例えば「七〇年卒」とは、「一九七〇年三月卒業」を意味する。

2 貴重な記録として原文の香気を保つよう努めたが、統一性や読み易さに配慮して、漢字、仮名遣いを改めたり、ルビ、注（编者による注記）を加えたり、表現の一部に最小限度手を加えるなどした。また明らかな誤りは正した。

3 当時の登山に参加した部員の取材寄稿（談）を何編か、編集委員による聞き書きにより収録した。

一九一九年（大正八年）

旧制川越中学の登山部は、一九一九年（大正八年）に創設され、その第一回の登山は、七月二十三日から二泊した富士登山だった。

「このとき、校長ほか五名の引率教師のもと、生徒二十五名は制服制帽を着用して登山に臨んだ」

と、一九九九年発行の「くすの木」（川越高校百周年記念誌）には再現されている。大正八年の学校行事の中では、登山部の創設と、第一回の富士登山が特筆すべき事柄になっている。設立目的も、

「自然の美を汚さず、雄偉剛健の気を養い、學術の研究をする」

と記されている。計画された富士登山については、

「山と民族の清浄を代表した富士山」とある。

こうして旧制中学恒例の夏の催し物が学校行事として定着した。

当時旧制中学では学友会が組織されていて、現在の生徒会がそれに当たるだろう。年に一回発行される学友会「会報」は充実していて、二〇〇ページを超える冊子となった年もあった。そこに部活動の記録も詳細に掲載されている。この最初の富士登山の報告がある大正九年発行冊子を見ると、学友会加盟の部活は総数で五クラブ。武道部、徒歩部（陸上競技）、水泳部、文芸部、それに登山部ですべてである。創設されたばかりである登山部という部活は、現在数十から百を超えるであろう部活の中で、五指に入る老舗だったとい

うことになる。

当初は年間にわずかに一回、それも夏休み期間中だけの登山だったのだが、こうした部活の実態は、おそらくどの部でも似たり寄ったりで、他に野球部、庭球部、相撲部の三部活は当時も存在していたが、「めだつた活躍がないため、活動報告の提出がなかった」と、この大正九年発行の会報には記載されている。

登山部の創設とその後の活動は、旧制中学の活動の中でも実に大きな意味があったと思わざるを得ない。

当時の会報から転載する。

山行記録 富士登山

七月二十三日 川越（富士） 吉田

近年、登山は心身の修養として、たいへん盛んになってきたと思われる。ところがその多くは、わが国の溪谷を汚したり、不慮の災いに遭遇する者が多くなっている。

本校登山部は、自然の美を汚さず、雄偉剛健の気を養おうという目的で新設され、また學術の研究を目的ともされている。

その第一回目の登山として、大和民族の清浄を代表した富士山に登ることになった。一行は校長、金子、鍋島、能代、西村、渚の諸先生と生徒二十五名からの編成となり、服装は制服、制帽。携帯品は冬シャツ、金剛杖、ゴザ、草鞋、手拭、水筒、懐中用薬、案内書等である。

七月二十三日午前八時十八分、川越駅を出発し、国分寺駅で中央線に乗り換えた。車内には、すでに先達と襟に書かれた人に引き連れられた団体が、白衣を着て腰に振鈴をつけて大勢乗車していた。恐らく皆富士登山へ向かうものと思われる。彼らは登山談議に花を咲かせていた。そのうちに汽車は多摩川を渡り八王子駅を過ぎ、浅川駅では高尾山登山の大体が下車していった。さらに小仏峠をはじめとして大小十あまりの隧道を通過し、猿橋駅に着いた。ここで我々は下車する。駅から十町（注・一町は約一〇九メートル）余りの、日本三奇橋の一つである猿橋を見学する。

橋は全部木造で長さ十間（一間は約一・八メートル）、幅二間くらいで、見渡せば数十丈（一丈は約三メートル）の断崖絶壁を切り開いて、桂川の溪流に架けられていた。兩岸の岩石は富士の溶岩で、距離が富士から実に十里に達しているのだが、火山の爆発で溶岩はここにも流れ着いたということだろう。下流には鉄道の大鉄橋が架けられてあって気分は削がれるが、文明の橋と昔の橋とのよい対称である。橋の際の神社には猿の像が安置されてあった。

見学が終わると大月まで徒歩で移動する。桂川の岸を通り、遠く東京市に送電する桂川発電所の大鉄管の大車輪が回転している。その大きさには驚かされる。大月に到着したのは、午後一時頃であつた。

大月には東京、関西、長野地方からの登山者が多い。誰もが富士山を目指している。私たちは混雑のために馬車に乗れず、吉田まで六里の道を歩くことになった。道の右側は奇石が多く、桂川で採取

した石を庭石にするためか、石を巻き上げていた。田倉、四日市場の村家では、甲斐絹を織る音が聞こえ、また道路の両側は豊富な清流を利用して、各家で小さな水車を運転させている。二里半ほどで谷村町に着いた。谷村は郡内地方第一の都会で、戸数一千。南都留群の群衛があり、甲斐絹の集散地である。

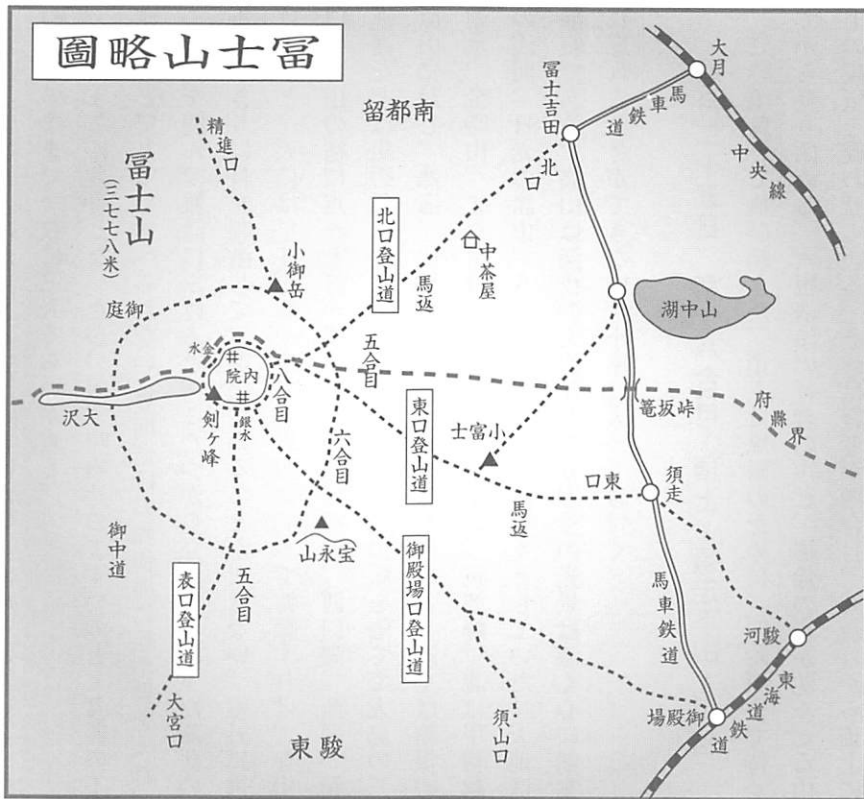
ここで校長先生、熊代先生と僕ら八、九人は一台の馬車に乗った。小沼辺りにくると、富士の毅然とした山容が望遠できる。時刻は夕方近くになった。暮もやの富士を眺めていると、薄藍色の天にそつと月が出たが、間もなく黒雲に被われた。稲田には無数の蛍が静かに飛んでいた。吉田に到着したのは午後八時になっていた。しかも本日の宿泊予定であった芙蓉閣には断られ、町端の小さな旅館に九時頃着いた。谷村町で別れた徒歩隊は二時間も前に到着していたという。金剛杖、絵葉書を宿で買い、雄大な富士の裾野で十一時、一同は夢を結んだ。

七月二十四日（富士）吉田↪富士山八合目

三時起床。「六根清浄、御山快晴」という勇ましい行者の声と共に、腰にぶら下げた振鈴をチリンチリンと響かせて、大勢が通り過ぎていく。

五時出発。まず富士浅間神社に参詣して登山無事を祈り、金鳥居を潜って歩き始める。神社の裏には馬車の待合所があった。この吉田の北口登山口は最も古くから開けた登山道で、行者をはじめとする登山客がとても多い。富士講社はこの口から登ることを正当とし

大日本帝国測量部、5万分の1地図を基に作成。
大正4年2月（富士山）、大正7年7月（山中湖）より



ているようで、八合目まで四里半ある。

神社から松林を越え広漠たる原野に出ると、富士が秀麗な容姿を

現した。裾野は遠く延びて、壮大な感じがする。一里で中の茶屋につく。ここは馬返しである。古来は馬でここまできて、ここで馬を返したという場所であるが、今では五合目まで乗馬ができるように、道路の開発が進んだらしい。今は名のみとなった。そこから一合目鈴原神社、二合目御室神社に参拝し、杖室で杖印を受け、三合目、四合目を経て四合五勾御座石神社に参拝し、五合目に着いた。

ここはいわゆる天地の境である。十時昼食をする。一合目から五合目までは森林帯で、落葉松、松、榎、樅が鬱蒼として、幾百年を経過しているかしない。三十分の休憩の後出発した。

森林帯を過ぎ六合目までは、落葉松がところどころにあるが、六合目以上は灌木帯、草木帯で、灌木帯には石楠花が全盛を極めている。草木帯にはフジハタザオ、ツガザクラ、オンタデ、イワヒゲ、オトコヨモギなどがある。金剛杖を頼りにして登っていくと、光景は無趣味な焼山と一変した。道路にはゴロゴロと焼石があつて、小さい石塊を強く踏むと、簡単に崩れた。右側は絶壁となつて、吹き落とされたら命がないという危険な場所である。

この辺りでいきなり天候が急変してきた。麓から霧が非常な勢いで上ってきた。夏服では寒い。すると間もなく大きなヒョウが急に降ってきて、気候は十二月頃となった。ようやくのことで六合五勾の石室に逃げ込んだ。

石室を出ると雨に濡れた険しい道は滑る。鎖につかまりながら八合目に到着した。八合目には石室が三つある。一行は和光ホテルという石室に宿泊した。中は三十畳敷きくらいで、中央には一間四方

のこたつが掘ってあり、出入り口は二つあって周囲は石で囲まれている。左側は畳の縁が見えないほど布団が敷き詰められている。着のみ着のまま一枚に三人くらいが寝る。

そのうちに食事となったが、飯、味噌汁のまずいのと、食器の不潔なとでとても食べられない。夏期だけの郵便局に絵葉書を入れ、こたつを囲んで雑談にふけると、こたつから立ち上る濛々たる薪の炎がしきりに目を刺激して、開いていることができない。室外に逃げ出すと、天には星斗が鮮やかで、岩頭に立って俯瞰すれば、登山口の吉田の宿に点々と灯が瞬いていた。山中湖、河口湖、西湖、精進湖などは紺碧色に沈んでいる。南は相模の山脈を隔てて大島の三原山に対し、熱海、伊豆の東海岸、江ノ島が望める。近くは箱根の湖水、金時山。また東は大山、おみやま遠くは東京湾、筑波峰。北は甲信越の浅間、日光の諸山、八ヶ岳を望み、山河脈々としていた。天地は静寂である。高山は深夜の大沈黙となり、その光景は深く心に刻まれ忘れることができない。小屋に入って寝付く。

七月二十五日 富士八合目く頂上く須走下山く川越

三時頃驚いて飛び起きた。頂上は風雨のために、四時頃まで待つてから登り始める。六根清浄の行者の声と、振鈴の音が沈々たる山の上の夜気を震わせている。それは行者が四合目、五合目から頂上に登ってくる行列だ。空気は重く沈んで、冬シャツを着た肌に冷え冷えと迫ってきて、金剛杖を握る手もかじかむ。

「ご来光を拝むのは、この辺がよいのです」

と親切に教えてくれる者があった。ござを頭から被って風を避けて、一生懸命に東の空を見つめていた。眼下の山川は綿を敷いたように、雲海で一带は覆われている。その雲海から頂上だけを覗かせている山は、島のようなのである。横雲の間から、薄光が幾条となく、空天に放射された。御来光である。雲は紫色に染まり、白銀色となり、黄金色となり、真紅の美麗な現象になった。今や雲の下には日輪が六龍に乗って、世界を駆け巡ろうとする道程にあらうと想像される。

その後、金矢が中空を射るように見えるかと思うと、一大円盤がその旭光を回転させて、さん然と輝き出した。天の岩戸を開け、莊嚴な現象に皆で喝采し、ご来光を迎えた。煌びやかで目が眩み、直視することはできない。この天地の壮観を見ることができたため、勇氣百倍で九合目に着いた。ここでは二、三十人の行者が神官と共に何か唱えて太陽を拜んでいた。

ついに頂上の久須志神社前このはなまくやひめに出た。祭神は木花天耶姫尊である。神前に参拝して、金剛杖、扇子等に参拝印を頂く。神側には数戸の石室があって、甘酒、力餅、細工を売っていた。山頂を一周、すなわちお鉢回りには道が二本あって、噴火口の内縁に沿って回るのを内輪回りと称し、噴火口の周囲に切り立つ八つの崩頂を伝わり回るのを外輪回りと称し、絶頂の外輪は周囲がおよそ五十町、その内輪はおよそ三十六町である。その中央部が噴火口であって、およそ十三、四町で、常に千古の雪を貯え、穴から風が吹いてくるのは富士鳴沢といっている。噴火口の周囲には、金明水、山頂第二の高さ海

拔三七七三以上の白山嶽、雷岩、西安河原、山頂の最高点三七七八以上（約三千四百三十九間余り）の剣ヶ峰、奥宮、銀明水、熱気ある荒巻、成就岳、伊豆岳、大日岳等がある。一行中十数人の者は内輪回りをやる。

こうして一万二千四百七十尺の富士山頂に無事登山して、山の靈氣に接することができた。八合目まで下って記念写真を写し、東口である須走口から下山に着く。須走口は北口八合目より分かれていて、七合目から砂走りがある。砂走りは砂礫よりなつて、一足踏むと二、三間は下るといふ杜快なるところで、前面の山中湖の美景を眺めつつ、砂煙を立てて下り、一時間くらいで三合目に到着し、石楠花、白樺の灌木の間を下り、二合目で登山成就の焼き印をもらい、さらに樹林帯の下を通過して、馬返しにつき宝永年間に噴出した砂礫の原野を、一里十二町の間、雨に降られ浅間神社に到着した。神社は県神で木花天耶姫尊を祭り、境内は鬱蒼としている。また当社は元弘法寺浅間と称し、空海上人登山の時、大神を友にしたという。鳥居を出れば須走村である。村は駿東郡の北部で、籠坂峠を越え甲州吉田に通じているから、甲駿二州貨物運送の町に当たつて人馬の往来が多く、戸数百余戸で市街には米山館甲州屋犬米谷等がある。

この地は盛夏であつても、正午気温八十五・六度（注・華氏、摂氏約三〇度）に達するのは稀だという。ここから自動車馬車が御殿場に通じているが、我々は歩いた。村を離れると四方が開けて野花が咲いている。柴怒田、水土野の村落を過ぎ、二里半で御殿場駅に

着く。一時五十九分発の列車に乗り、ついに午後十時川越駅に一行は無事について万歳を三唱して解散した。

富士登山の所感

一 富士山は靈山であるために、高潔な心を養うことができるばかりではなく、身体を強健にし、また雄大な眺望は精神を清浄にする。

二 富士山は高山であるために、山麓から頂上に至る間に見る植物分布の状態は、熱帯地方から寒帯地方に移るに従つて、緯度に応じて植物分布の模様に変化を見ると、第一森林帯、第二灌木帯、第三草木帯、第四地衣帯と明瞭で、また地層が広いため数量が極めて多く、採取し研究するのに便利である。

三 富士山は富士火山帯脈の中央に巨然として立つて、その形状が円錐形で模範的な火山とされ、寄生火山が多く、また溶岩流は世界の模範であるから鉱物学研究にはよい。

四 富士山は麓まで鉄道の便があり、また登山道は大いに改修されて五合目までは乗馬ができ、登山道には困難なところがあるが、一般の人の登山に適している。

「日本はその国土の真中から生に出て、無限の大空に聳えている白雪の富士のごとく、自分の偉大な理想が衆人の眼に映ずるようになければならぬ。万山の上に立ち、美しいこと処女のごとく、しかも強く静かに雄大な富士、これは日本の理想であろう」タゴール。

（四年 奥田武甲）「川越中学校・学友会会報」十六号

一九二〇年（大正九年）

山行記録 木曾御嶽山おんたけ

第一日

大正九年七月二十二日、試験が終わって早々、登山部は日本アルプスの一角・御嶽山を踏破するために川越を立った。

一行は生徒二十五名、金子、久保、原口の三先生、他に中島君、都合二十九名。

五時三十分、川越を出発して国分寺で乗り換え。汽車は富士登山の白衣たちで満員。大月で富士行者が皆降りた。富士登山者の多いのには驚いた。甲府盆地に入ると急に景色が広々となった。さらに韭崎の眺望は雄大で、高原気分が深くなった。やがて諏訪湖が見え、岡谷から天竜川に沿って走り、塩尻に着いた。さらに汽車は木曾谷に入り、鳥居トンネルを抜ける。（木曾）福島も近くなった。五時四十五分、時計の短針が一周するまで汽車に揺られたわけだ。この晩、私たちは岩屋旅館に泊まった。裏には木曾川が流れ、隣部屋には行者が泊まっていた。宿で金剛杖、草鞋を求めて、明日の用意を整えた。ある者は街へと見物に出たりした。ちようどお祭りで通りは賑やかだった。蚊帳も張らずに寝た。

第二日

空には一点の雲も無かった。絶好の登山日和である。五時、チリンチリンと勇ましい同宿の行者と一緒に、宿を出た。

木曾川に架かる橋を左へ曲がった。黒沢への道は、御影堂みえいどうから王滝との道を分かれて右の山の中へ入っていった。黒沢への道に入る。かなり急な登りであったが、上には茶屋があった。そこから下りとなる。行者とすれ違おうと「ご苦労様」「お早う」の挨拶を交換した。足はまだ疲れない。気持ちよく進んだ。道は合戸峠あいどに向かう。この峠の頂上からは御嶽が見えると聞いていた。峠の茶屋の前には富士に次ぐ高山、木曾の御嶽が一点の雲も帯びずに威風堂々、鎮座しているではないか。白く日光に当たって輝いているのは雪である。千古溶けない万年雪である。

「ああ、山そのものがすでに神である」

と私は叫んだ。

そこから黒沢へ下る。福島からここまで二里半ある。ここは王滝川の谷にある部落で、宿屋、郵便局などがあった。田の間、家の前などを通っていく。橋を渡ると黒沢口御嶽神社里宮があった。神殿は高壮ではなかった。しばらく行くと道はそろそろ登り気味になり、金文字の石塔があった。松尾滝が見える。ここはもう四合目になっていた。ここまでは楽なものだったが、いきなり急勾配になった。面食らった。

間もなく辺りは一面の草原となり、御嶽は峠で見たときよりもさらに高く迫って聳えている。その頂は白雲二、三片。悠々としてゐる。遙か前方には五合目の小屋が見える。千本松の原がこれだった。暑い。風はかなり吹いているのにジリジリと暑い。涼しいところで一休みした。御嶽の悠然として迫る態度に、恍惚として我を忘れた。五合目の小屋で腰掛けてサイダーを飲み、この味は忘れられない。小屋から少し登ると、乗鞍岳と前方の硫黄岳が、群を抜いて光り輝く白雪を頂いていた。所々に「寒中登山何某」という府があつた。木の階段の道を過ぎて、楡、樅の鬱蒼とした森林に入る。熊笹が一面に地を埋めて、灌木帯に入った。道は随分急になつて、ときどき休んで英気を養う。行者の

「懺悔、懺悔、六根清浄」

の声か、チリンチリンと音を交えて聞こえる。灌木帯を過ぎると、火山灰、火山礫の滑りそうな斜面。もう暑くはなかつた。上着も五合目で着ていた。けれど喉はからからで、水筒はとつくに空になっている。氷砂糖ももういやだ。早く頂上に着きたい、万年雪を頬張りたい。小屋が目に入って急に元氣付いた。大きな岩に行者が立っていて、雪の塊を持っている。

「一口かぶりつきなさい」

という。その声が神の声に聞こえて、ざくりとばかりに噛み付いた。ああその味は、頭の前から足の先まで染み込んだ。

これで元氣百倍になつた。頂上に達せられたのも、この雪の一口にあると思える。ここはもう八合目になつてゐた。六合目も七合目

も氣が付かなかつた。小屋から少し行くと、脇に万年雪があつた。汚れてはいたけど、私たちはむさぼつた。

ゴロゴロした焼石を踏みつけていくと、石碑や像が建ててある。そこに草鞋が沢山捨ててある。腰掛けて休んだが、上はまだ続いている。這松が一面に這つてゐる。見上げる急勾配の上にも小屋がある。呼吸も苦しくなつた。這松を越えると、九合目の小屋は半分雲に閉ざされていた。しかしすぐに雲は千切れた。十歩踏み出して、一休する。辛うじて上に登つて行く。苦しみと言つたら一通りではない。しかし下界を見ると、私は天上界にいても分かる。そう思うと、己の貧相な心も雄大になりかかつてきた。岩の間からは桔梗も花を覗かせてゐる。愛らしい姿だ。

周囲の雲が私たちに襲い掛かつてきた。振り返ると登つてきたところも見えなくなつてゐる。急に寒くなつた。風が吹きつける。高山の霧の恐るべきを聞いていたので、少なからず驚いた。あれが来ないうちにと急いで、やつと九合目の小屋に入った。先に入つていた友はもういなくなつた。

霧の合間を見計らつて小屋を出た。道は焼石、踏み外すと岩はカラカラ落ちていく。また小屋があつたが、ここにも友はもういない。少し行くと平坦になる。前方は下りで、右は盛り上がりがある。一団はたと止まつた。先の者はいつてしまつたし、後からはまだ来ない。

「山に全く経験のない私たちだ。うっかり行つて間違つては大変だ」それでも岩に土が付いている、左が道らしい。少し行くとまた二

つに分かれた。気が滅入ってきた。霧は深い。風は吹く。

「よし、試しに呼笛を吹け」

とピーッとやった。前方から返ってきたようだ。歩き出すと、霧が薄くなってきた。やれやれと思うと、前方が黒い。

「やつ、頂上だ。道を間違えないでよかった」

黒いものは頂上にある沢山の地蔵様。頂上の祠。下の小屋が眼に入ってきた。頂上の小屋だ。私たちは呼吸の苦しいのを我慢して、もがくように急いだ。上から頑丈な土地の女が、朗らかな声で歌を歌いながら下りてきた。これには度肝を抜かれた。

やっと頂上の小屋に飛び込んだときは、息絶え絶えになっていた。時計を見ると三時半。早いものは三時に登頂したという。しばらくして剣ヶ峰の頂上へと登った。小屋の脇の石段を登ると剣ヶ峰だった。行者は一心に祝詞のりとを奏していたが、自分は参拝して早々に戻った。最高峰は海拔三〇六三メートル。一万五千尺。中央が火口丘である。絶頂の郵便局でスタンプをもらい、手紙を出し、小屋で焼き印を押してもらった。寒暖計は華氏四十度（注・摂氏四・四度）を示した。福島からここまで八里半。

下界の霧はまだ晴れていない。風は益々強いが、一旦降ろした腰は容易に立てられなかった。天候は次第に険悪となった。その中に金子先生が登ってこられた。先に来た者は原口先生と一緒に下ることになった。

重い腰を上げる。帽子を額に縛り付ける。山賊のように頂上から逃げ出した。偉大な自然の前で人間は惨めで、哀れだった。私たち

は王滝口へと下るのであった。

相当下った。足を乗せた石が崩れたりもした。ちょうど登ってきた行者に、

「王滝はじきですか」

と問うたが、

「まだ三里ある」

と言われた。雨がポツリポツリと降ってきた。もう黄昏たそがれである。いくら行っても同じ野が続いている。先へ行った者は数人である。原口先生は王滝で宿の手配があると、先の後を追った。残された私たち十数人は一団となって歩いた。誰も一言もいわぬ。黙々として進む。もう語る元気はなくなった。日は正に暮れようとしている。雨は降っている。こんなところへ自分だけ残されてはたまらない。忍耐の養成もあるものか。頭の中には王滝しかない。

そろそろ足元が暗くなった。小さい祠が見える。人里はまだか。その中に一軒の小さい家があった。が王滝まで一里五町と言われたときは、がっかりした。それからときどき出てくる家の前の水で喉を潤した。日は暮れた。雨は降りしきる。後二、三町だろうと、また聞いてみるが一里だといわれて、泣きたくなった。S君の五万分の1の地図、O君の懐中電灯で辛うじて進む。時々つまずくが痛さは感じない。「ああ、まだかあ」

という仲間の悲しい声。止まってしまったら残されるのみ。

王滝村の上島に着いて、宿に腰を下ろしたのが夜の九時過ぎだった。頂上から五里。行者が、日帰りしたことを誉めてくれたときに

は嬉しかった。遅れた者も、一時間後に帰ってきた。普通人の二日の行程を一日で走破した。天候も上出来だった。天に感謝せねばならぬ。
 (五年 関根勇一)

第三日

昨夜は雨だったが、今朝は上天気で疲労も忘れてしまった。しかもまだ山道五里が残っていると思うと、辟易へきぎした。ゆっくり支度をして七時半に出発した。三年のY君は頭痛がすると、金子先生と後からくる。御嶽に別れるのかと思うと、名残惜しい。信者の鈴の音もなんだか悲しい。

途中二度休憩して、鞍馬橋に至った。茶屋で休んで奇景に見惚れた。橋は吊り橋である。福島はなかなか見えぬ。大道にでると灼熱の暑さになった。谷川の音を聞くと、重い足も忘れて冷水をむさばった。ようやく福島に着いたのは十二時半になっていた。今日は宿から弁当を取らずに、町の中で食うことにした。予定の二時二十分の汽車で長野に向かう。長い犀川さいがわの鉄橋を渡ると長野市に入った。午後六時五十分到着。予定の旅館白木屋で草鞋を脱いだ。

夕食の後は町にでる。市内のファースト・インプレッションは、清潔なことだった。塵紙一つ落ちていない。有志は明朝早く普光寺を参拝する。

四日目

午前四時、参拝する者は宿を出た。宿から三町ほど坂を上って

く。宿に戻って朝食後、車中の人になった。中島君とはここで別れた。佐渡に渡る計画らしい。汽車は上田を過ぎ、軽井沢に到着した。一同は下車して旧軽井沢方面に足を向けた。昔は中仙道の要所である。今は避暑客で活気があった。西洋人も四、五百人いるという。英字の看板もある。別荘地を回って元の駅前茶屋に戻り、食事をして十二時七分の汽車に乗る。浅間山登山の帰り客で、構内は一杯になっっている。客車は満員で立錐の余地もなくなった。次の列車を待つ者もいたが、先生の努力で全員が乗車し、三十分遅れで出発した。横川で少し客は減った。大宮に着いたのは午後四時十八分。川越に五時半に着き、万歳三唱で解散した。

(五年 沢辺 浩)「学友会会報」十七号

「木曾御嶽山」

木曾御嶽山は、中央線木曾福島駅下車。東京飯田町駅より木曾福島まで一六九哩八分、三等賃金三円五十二銭、約十一時間半。

木曾福島は木曾路第一の繁華地で木曾川の兩岸に跨っている。東西両京の中央に当たり、昔は関所が設けられていた所である。御嶽山路は、黒澤口と王瀧口とがあり、普通は王瀧口から登り黒澤口に降りるのである。駅より頂上まで黒澤口によれば九哩、王瀧口からなれば十哩である。

福島の旅館は一泊二円・弁当三十銭・草鞋十銭である。王瀧の登山者の為の旅館が数軒あり、一泊二円六十銭・弁当二十銭・草鞋十二銭とある。(因みに当時米一俵十七・八円―戦争起因の米騒動により三〜四割高騰)

(「日本アルプス案内」大正十四年鉄道省発行による)

一九二二年（大正十年）

山行記録 戸隠〜白馬岳

よく博物の時間に、アルプスの話で煙に巻かれて、癢かゆに触っていた。その金子道啓先生から、今年には日本北アルプス踏破というのを聞いて、躍り上がった。参加希望者も非常に多かつた。最近では登山熱も盛んになって夏になると皆山に出かける。さも山か海へ行かなければ人間らしくないような世の中となつた。包みきれぬ青春の元氣発散に、基づくものであろう。今後国家の中堅として活躍すべき前途ある者が、外国の地理に精通するのもいいが、その前に生まれ故郷の山河を知らなければ灯台下暗ととなる。これも青年の元氣の試験の一つである。

七月二十二日 戸隠まで

朝七時の電車で川越を出発、校長、諸先生の見送りを受けて一行四十名は大宮に向かう。八時四十一分の汽車は午後二時半長野駅着。町を上り詰めたところが善光寺。昔は「牛に引かれて善光寺」だったが、今は自動車の後から参る。本堂で休憩した後には戸隠を目指す。急坂を行き、湖を越え、神秘的な高原にでた。落葉樹が点在して

いる。軽井沢によく似ているが、成り金の一攫千金に俗化されている。軽井沢に比べれば、ここは極楽といふべき。馬の背に荷をつけて進んでいくのが、粹だ。日夜黄金崇拜している者には、味わえないことだろう。雑草を分けていくと大鳥居に出た。そして戸隠中社ちゅうしゃに着いた頃は、日も暮れた。山の夜は静かで雄大だ。神官の家に宿る。大きく二階建てで宿屋兼業。涼しく冬シャツに着替えて寝た。

七月二十三日 白馬山麓へ

六時起床だが雨。奥社までの予定を辞めた。鬼無里町きなしへ向かう。赤土でぬかるんでいる。行き交う子供たちは、袴のようなものを着ている。「雪越え」だという。そして「お上がり」という。何かかれるのかと思うが「こんにちは」くらいの意味だ。土地の人の氣質だ。急坂を下っていくと、鬼無里町に着く。家は宮式の造りで、十数軒並んでいる程度だ。ここで食事をすする。サイダー一本十八銭という破格の安価に驚く。

しばらく行くと二股にでた。道の方に行くが、数町行った後に、畑の人に間違いの宣告を受け、戻る。増水している川を渡るときに、膝くらいまで水に浸かった。これより柳沢峠に至る四ツ谷街道になった。

柳沢峠は難所である。川を渡った罰として膝が冷たい。曇り空は雨となり霧が立ち込める。谷も深い。鳥の鳴く声も寂しい。どうか峠に近い小屋に着き休んでいると、長谷川先生が油紙一枚で上がってこられた。そこから数町下りると、前面に日本アルプスが開け

た。白馬の名のごとく白雪を抱いて悠然として悠々している山容が目映る。下には今夜の宿がある四ツ谷（注・白馬）が見える。

下りきって白馬館に入る。旅装を解く。どこかの中学生が大町に向かう自動車を待っている。下ってきた彼らは登山に成功したのだろうが、我々はこれからだ。府立第一高女の一行と同宿になった。食事を済ませると明日の注意があった。（注・白馬）鑓ヶ岳の小屋は二十人以上は宿れぬらしいから、その日に下山すること。強力は二人頼んだから、必需品は強力に持たせるが良いとのこと。金剛杖から金具まで、一切の準備を前の店でする。絵葉書、羊羹、登山餅、缶詰、フオーク。明日の白馬踏破を想像してみた。

七月二十四日 白馬岳

今日も雨。九時頃小降りになるのを見計らって出かける。二人の強力を先頭に、ギリシャ古代の武士のような格好で、金剛杖を手に



白馬嶽登山準備所「四ツ家」

四ツ家（本山行に最も近い時期の五万分の一地図「白馬嶽」大正四年四月大日本帝国陸地測量部発行の地名。後駅名信濃四谷、現白馬）より白馬嶽頂上間四里半、午前七時に四ツ家を出発すれば午後四時頃頂上小屋に達する。四ツ家口登山準備所には、旅舎白馬館（館主松澤貞逸氏は頂上小屋も経営）他がある。宿料一泊一円五十銭・弁当二十銭・人夫（強力）二円・草鞋十二銭・鉄樵七十銭以上・杖四十銭以上・頂上小屋は一泊一円四十銭・握飯弁当四十五銭・毛布損料十銭・木炭一貫目七十銭とある。

（前掲書「日本アルプス案内」による）

白馬岳に足を向ける。強力は随分重い荷物のようだが「今日は軽い方だ」というには驚いた。お客と一緒の時には、五貫目の荷を背負うという。少し遅くてもいいなら九貫目までは負えるという。

濃い霧の間から雪が見えた。旅館から半里で二股。白馬の雪は千年溶けぬ。これより北股沢に入る。道幅は三尺ほど。ヒバリの声も聞こえる。山は水に乏しいというが、ここではコップ一つあれば水筒は要らぬ。いくらでも万年雪から水が流れている。

中山沢を過ぎて猿倉に着く。その小屋で休憩する。白馬館からの弁当を食べる。小屋を出ると恩師の熊谷中学の先生が下ってこられた。生徒を引率されている。

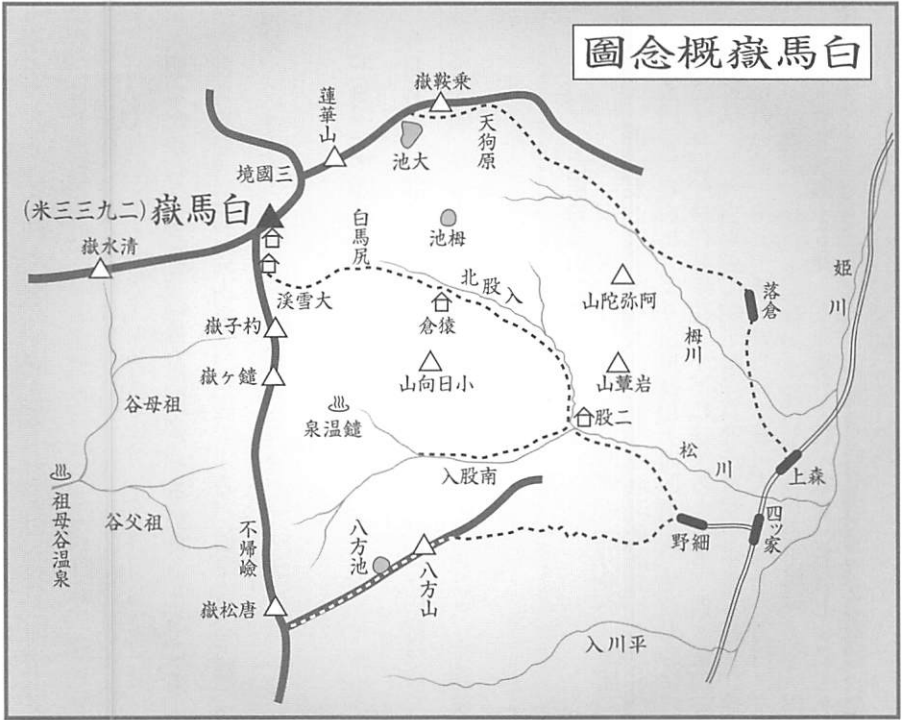
「大雪渓は大分苦しいぞ」

と教えられる。濃い霧の中に、大雪渓が少しずつ見えてきた。白馬尻小屋は四、五十人も宿れるだろうか。ここで防寒の用意をしていく。ああ寒い。

ついに大雪渓を踏みしめた。川越を立ってから幾度か胸に想像してみた大雪渓は、今日の前にあるではないか。心臓が鳴らずしてられるか。一歩誤れば谷底かもしれない。高低ある雪の波に足をかけていく。雪渓は平坦に見えるが、なかなか急坂である。手を伸ばせば前の雪に手がつく。足は滑る。窪んだところに足を入れて踏ん張る。

真東を見ると、浅間山が少し低く見えた。その左には戸隠の山が同じ位置に見える。真西には杓子岳の奇岩。いくら歩いて雪渓はなかなか尽きない。足は冷たい。三十町余りの大雪渓を、三時間半

白馬嶽概観圖



大日本帝国陸地測量部、5万分の1地図を基に作成。
大正4年4月（白馬嶽）、昭和2年6月（黒部）より

もかかってようやく終えた。過ぎて見下ろせば平坦にも見える。そのうち霧も晴れてきた。天は味方してくれただか。パノラマのような大自然。しかしこれより先は一層急である。小雪溪も急で、大雪溪

は怖かったがそれ以上だ。

そこを越えるとお花畑になった。深山キンポウゲ、紀州梅桜、岩ヒバリや岩ツバメも飛んでいる。すべての生き物が大自然を棲家にしていった。

長野県営小屋を過ぎると、頂上はすぐである。日は西に傾きだした。吹き上げてくる風も冷たい。頂上は戦の跡のようで拳大の石が散らばっていた。吹きさらしの中に高山植物が咲いている。登ってきた方角が霧に包まれた。前には朝日岳。その向こうは深い谷。即ち秘境、神秘の谷。水源は誰も極めたことのない黒部の渓谷である。その向こうに剣岳、立山連峰、遠くに槍ヶ岳が見える。遙か右には黒ずんだ能登半島。

白馬嶽へ行く道は、赤茶けた馬ノ背の斜面で、一步誤れば谷底だし、山も荒れてきた。鐘は中止して小屋に戻った。摂氏五度。川越の冬よりも寒い。小屋では炭を山のようにおこして暖を取る。臭いのする硬い夕飯には腹が立ったが、赤い火を囲んで談笑に花が咲く。冬の長い夜のような。夜更けだと思ったがまだ八時。二人に一つ配布されたチクチクする毛布に包まった。

閉め切った小屋で五、六貫もある炭をすっかり焚いてしまったためか、五、六人の病人が出る。介抱も容易じゃない。冬のメリヤスシャツを二枚着て、その下に夏シャツ。それでも寒くて寝られない。小便で外に出てみると、遙か越中富山の電燈が見える。高山の夜は物凄く寂しい。目の前の穴倉では、巡査と小屋番が酒盛り。中は狭

くて苦しいが、外は寒い。昨日は百人が泊まったとか。今夜は七十人くらいだろう。

七月二十五日 下山

御来光を拝む予定であったが、濃霧で出来ない。早々に下山する。不味い飯で腹を肥やして出発。二度と来るか分からないこの頂上に名残を惜しんで下る。さらばよ……、白馬山頂よ……。

登りには大分苦しんだところも、下りは足も止まらぬ速さとなる。だが足をさらわれると、三間も滑る。杖を離しては大変だ。カンジキは必要だ。十数回も投げられた。富士などは足元にも及ばぬくらいに危険だ。それでも皆無事に下っていく。先着は一時間十五分を下りきった。

白馬尻の先に崩壊しそうな雪渓があつて、ここが最も危険だった。小雨の中を猿倉へ下る。途中第一の女学生とすれ違ったが、多分絶頂まではいけるまい。女としては少し無理だ。

午前十一時頃、白馬を降りてしまつて四ツ谷で昼食。早速自動車で大町に向かう。車窓から霧に霞んでほんやり見える白馬の、あそこまで行つてきたのかと思うと、誇りに思う。青木湖、木崎湖を通つて大町に四時に着く。ここから信濃鉄道のマッチ箱のようなボギーで、松本に向かう。六時松本の養老館に入り九時頃飯となつた。松本は天神様の御祭りで賑やかだった。町を遊び回つて深夜十一時に宿に引き揚げる。明日は早朝二時半の汽車で立つとのこと、あわてて寝る。

七月二十六日 川越まで

信越線經由で帰る。途中妙義にも登る予定だったが、白馬に比べれば子供だましのような気がして中止となる。新聞によれば関東は豪雨で荒川は増水していると。正午大宮に着いて、二時に川越。「百聞は一見にしかず」と言われ、この登山の刺激は大きく、同輩には誇りとなつた。我々年少者にも日本アルプスを踏破できる文明の利器に感謝し、北アルプスだけでは満足せず、日本世界全山を探らねばならない。

（五年 吉田司馬之助）「学友会会報」十八号



「代馬岳か黒馬岳か？」

一般的に白馬岳といえば、大抵白馬岳の一角に馬の形と耳にする。しかし駒形が現れる位置は二カ所とも三カ所とも言われる。頂上より西側にかけて玢岩よりなつて居る。ハクバと謂うのは誤りで、昔から暮春の頃になると、此の山の頂上から北の方に當り、雪が消えて岩が黒く現れる所がある。里人は之を農事暦として田の代掻きをしたといふ、馬が前足を挙げた様な岩もある。

残雪の雪形には白い馬形より黒い馬形の方が多く、色から言えば黒馬岳である。国土地理院（大日本帝国陸地測量部）は、まず「地名調査」を配つて、その回答により地元を優先する。

白馬岳に関しては、大正三年の初調査で地元では「代馬」と回答したのに、どう間違つたのか最初の地図に「白馬」と掲載されてしまったのが事の起こりと言われている。（山の名前で読み解く日本史—青春出版社平成十四年、「北アルプス博物誌」大町山岳博物館編昭和四十七年による）

一九二二年（大正十一年）

ここ数年間、旧制中学の登山部は、登山隊を二班結成した。この年は上級生は富士山に下級生は赤城山から榛名山に登行した。

下級生二十二名は三人の先生に引率されて、七月二十三日の朝に出発。赤城大沼周辺を三里散策し、湖畔の旅館に宿泊。二十四日は徒歩で渋川まで五里の下山をして、さらに伊香保まで二里歩いてそこに二泊目。二十五日には榛名を登頂して散策し、午後渋川から帰郷し夕方七時過ぎに川越に戻っている。下級生の登山とはいっても、ロングコースである。

山行記録 富士山

七月二十三日 川越から吉田

富士登山隊は、一行四十名。高松、西川、間中、三先生の引率の元に、校長、諸先生の見送りを受けて朝五時三十分、川越停車場出発。国分寺からの列車は、盛夏の登山者を満載して九時三十分大月駅に到着した。一行はここから一里引き返して猿橋を見学する。桂川の上流の断崖上に架せられた三大奇橋の一である。橋上から水面までは百五十尺。下は深淵となり小石を落とすと、一秒、二秒、三秒……、しばらくして下方で僅かな音がする。ここから一里を戻り、

大月から（富士）吉田まで五里余り。道は自動車電車が通じているが、我らはこの道を歩いた。日が照り付けて暑い。

途中に桂川発電所がある。山の急斜面の四大鉄管は、水一滴もらずに東京市の電車の動力を供給する。溪流沿いには稀に避暑客がいるが、大きな魚網を下げて漁夫もいる。

谷村を通過して富士山が見えてくる。「心当てに見し白雲は、麓にて思わぬ空に遙か富士の峰」

近づくに従って雲はいつしか晴れた。大自然の絶景に感嘆し、吉田の宿に午後六時着。（五年 久下敏治）

七月二十四日 吉田から頂上まで

午前四時に起きる。天気はいい。六時に出発。爽やかな朝の氣に、鈴の音が響く。浅間神社の裏に馬車の待合所があつて客もいる。その森を出ると富士道。中の茶屋を経て馬返しまでの一里半は草原だった。馬返しの先は山道になる。一合目の鈴ヶ原神社、二合目の小室浅間と役行者堂、二合五勺の伏室、三合目の食堂を経て四合目大黒天を過ぎ、五合目に達する。その上室で十時四十分昼食にする。

五合目は「天地の境」で森林から灌木帯になる。地形は一変して開け眼下に河口湖、西湖。山中湖は三日月形をしている。六合、七合は更に険しく「六根清浄」を唱え、「頂上へ」の野心も消え、心は無心になる。八合は須走口と合流するところで、名ばかりのホテル救護所がある。傾斜三十度の道は「胸突き八丁」だ。

難関を突破し九合目へ着いたのは四時。ここで休憩し水筒のサイ

ダーを飲む。見れば互いに顔面蒼白となり、唇は紫色になっている。白衣の登山者は遙か下まで列をなしている。再び出発すると、頂上の久須志神社の鳥居はすぐ上に見える。しかし稲妻型の道はなかなか尽きない。少し足を早めるとようやく四時四十分、頂上に達した。この嬉しさは何とも言えない。日本アルプス連峰が見え、関東の山はひれ伏している。「聞きしより、思ひしより、見しよりも、登りて高き宝は富士の峰」。この歌の意味が初めて分かった。頂上神社に参拝して、印をもらい、石室名物の甘酒で腹を温める。思わず二、三杯続けた。一杯十銭は少し高い。

室を出て、今夜の宿舎山口屋ホテルに行く。すぐ隣の木賃宿だ。荷物を置いて噴火口へ行く。深さ百五十^{メートル}。直径約十三町。周囲に八峰が巡る。夕食後寝た者が多かったが、有志で噴火口の内輪回りに出た。大日岳の河原は静寂として、噴火口に近い石の上では、富士講者らしい夫婦が落日に向かって祈禱している。神社まで戻って金明水へ降りる。ここで西川、間中先生とも一緒になった。空は雲に覆われて星一つ見えないが、金明水も静かだ。雪を取ってかじりながらいく。西安河原から外輪道へ登る頃、夜の帳が山を覆ってきた。剣ヶ峰の背後から大日岳を経て戻ったのは八時頃だった。床に就いたがむさ苦しい。

七月二十五日 下山

混雑して寝苦しい夜だったが、四時にもう起き出すという元氣のいい連中もいる。入り口を開けると冷たい空気が入ってくる。高山

(五年 小山太郎)

の朝は静寂だ。かまどの甘酒で腹を温めた。「日の出を拝むのだから起きないか」

急いで小屋を出た。入り口の寒暖計は華氏六十度（注・摂氏十五度）。強力も番人も皆起きていた。

「もう直きですよ」

東の空が明るい。間もなく水平線が赤くなり、真紅の海と化した。火山岩の山肌が赤く照らし出された。下から行者も登ってくる。突然「ドドン、ドドン」という勇ましい太鼓が神社から鳴り響く。見よ、ご来光だ。太陽光線は雲海の上に投げられる。箱根の山は雲海の上に少しだけ顔を出していた。

朝食後、剣ヶ峰を背景に写真を写して、お鉢周りをする。木曾の山脈から槍ヶ岳、針ノ木峠、白馬、御嶽など日本アルプスの山々は清らかだ。その昔の噴火では、一昨日の猿橋までこの溶岩は流れ出していた。溶けない万年雪を杖で突いて、喉を潤す。

剣ヶ峰の最高点に立つ。最高点よりも、私は五尺さらに高い。快哉を叫ぶ。

七時二十分、下山を開始する。八合目からは有名な砂走りで、草鞋を幾重にしても、切れるし、滑る。二合目辺りまで草木はない。太郎坊に着いた。ここには馬車が通っている。御殿場までは三里。正午過ぎに御殿場に着く。一時五十分の汽車で、午後七時四十五分に川越に着いた。校長先生、その他の先生に迎えられて解散した。

(五年 浅見幹雄)「学友会会報」

一九二三年（大正十二年）

この年、喜作新道が開通したその年に、この表銀座のルートから槍ヶ岳に登っている。今でも北アルプスで最も賑わうだろうその登山路を、八十年も前に山岳部の先輩たちがトレースしたので、私もはや我が国の登山史にも登場させたいほどの快挙だと言っているかもしれない。

山行記録 日本北アルプス縦走記

七月二十三日 中房まで

恵まれた長い夏休みを、海に山に思い思いの日々を送っては心を躍らせるのだ。今年の休暇、私は槍ヶ岳の登山隊に加わった。卒業生二人、朋文堂からご主人と岡田店員の二人、それに我ら十二人は、五名の先生に引率されて前日の七月二十二日の夕刻川越駅を出発した。中央線の国分寺から大月までは混雑して立ちっぱなしだった。松本に着いたのは朝の七時二十六分。市内で果実、氷砂糖、わらじなどを用意する。再び八時四十分の信濃鉄道で有明に向かう。車内は登山客ばかりで皆元氣そうだ。左窓には目的の山々が見え、鍋冠山、長嶺、蝶ヶ岳、常念岳であるという。有明に到着しパンを食べる。

有明村の道はまだ普通の道だった。ただ何となく邪魔なのは肩のリュック。歩きながら流れの水で喉を潤わせ、パンをかじる。中房川を横断すると道も急になり、宮城の茶屋にでる。この茶屋で三十分の昼食を取る。ここを過ぎると山道に入る。こんな山中によくも立派な道を作ったものだと感心するほどだ。金子先生の植物の説明など聞いていると、いよいよ溪流は深く小滝の連続となった。深い谷底を見下ろし、朴峠は難なく過ぎた。途中で木暮理太郎、楨有恒の両氏と出会ったようだが、後で聞かされた。

信濃坂に差し掛かる。こんもりと白樺、蝦夷松が直射を覆い隠すように生い茂っている。一丈もある熊笹も物寂しい。坂を下って清流に戻り、十数町でいよいよ温泉が近くなった。硫黄の香り、地下から噴出する煙。温泉宿が見えると嬉しくなった。旅装を解いて部屋に入り、霊泉に浸る。

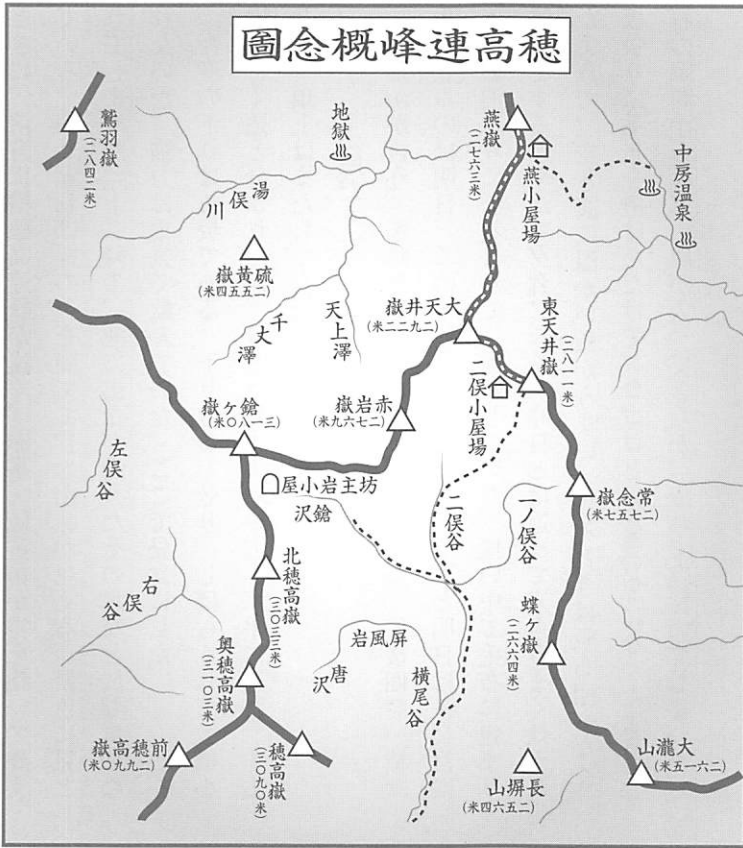
中房温泉は海拔五千尺。正面に有明山が聳えて、温泉家屋も新設で立派なものだ。アルプス登山熱の勃興で、この温泉も賑やかだ。

七月二十四日 中房から燕岳まで

谷川の音に夢を破られ、障子を開けると生憎の雨。美しいと思っていた中房の清流も、どうにも騒々しく聞こえる。しばらく天候回復を待ったが、逸る心を抑えきれずに昼の十二時出発する。

「先ずは競わずに同じ歩調で」

先生に言われる。小雨の山道は不安だった。合戦尾根に上がると道も険しい。白樺の根、落葉松の根をまたぎながら、ようやく合戦



小屋に着く。極めて簡素な小屋では薄暗くランプが一つあるのみ。水筒の水と氷砂糖で喉を潤す。

もう燕岳も間もないか。左手森林の間から、大天井、東大天井の黒く汚れた雪溪が見える。富士見松を過ぎて三角点に出ると展望が開けた。雲の切れ間からぬっと富士が首を出した。さらに這松、石楠花の中を進むと燕のお花畑であった。ミヤマキンバイ、イチヂ

キスミレ、ハクサンチドリ。いずれも美しく愛すべき花だ。思わず二、三種を採って手帳に収めた。そのまま一気に燕の小屋へと焦った。到着は四時。小屋の中には大勢いたが、ここで一夜を明かすと思うと心細い。リュックを置いて山頂へと向かった。気持ちのいい小砂利をザクザク踏み鳴らして、途中一、二の雪溪を越えて、岩の間を攀じるともはや頂であった。風が強くて吹き飛ばされそうである。烈風の中、野山忠幹校長先生の音頭で槍ヶ岳に向かって万歳三唱をした。

展望は、戸隠、妙高はもちろん、針ノ木、爺、蓮華。西には烏帽子、立山、三ッ岳、槍の秀峰。野口五郎、赤岳、鷲羽、双六、大笠。日本北アルプスの大観を一望の内に秘めている。到底筆舌の及ぶところではなかった。（五年 内田 静馬）

七月二十五日 燕小屋〜殺生小屋

小雨が降っている。昨日の大展望も霧で全く見えない。煙の中で朝食を済ませて、今日は強力も加わって八時半小屋を出発した。南尾根沿いに進む。高瀬の谷から吹いてくる風は強い。蛙岩にくる。だんだん青空になるが、大天井にかかるところには相当な風になった。九時四十分、槍と常念に行く分かれ道にきた。一休みした後喜作新道を通って槍ヶ岳に向かう。強力の話では、少し行くと水場があるというので、そこで昼食の予定にする。歩きにくい道を下って赤岩岳に来た

ときに、前方に槍穂高連峰が遠く、赤岳・硫黄岳が雪を抱いて聳えている。振り返れば梓の谷を隔てて常念山脈が見える。景色に見とれてしまった。十二時半、池に出たが濁ったその水など飲む気にならないが、強力は平気で飲んでいた。ここで昼食にした。

今度の下りは急坂である。下りきると登り。しばらくして大槍小屋に行く道と分かれたが、我々は殺生小屋の方へ水平に進む。すると雨。頂上はまたしても見えなくなった。

「もうすく小屋だあ」

と誰かが言う。本降りとなった頃小屋が見えた。午後四時。槍ヶ岳へ登るのは明日。この小屋は石室だった。なんと明日は秩父宮殿下がお泊まりになるとかで、混雑していた。煙い中で毛布に包まり雑談をする。やがて夕食になる。昨日とは違って米もうまく炊かれたようで、空き腹に温かい飯がうまい。寝るときは敷布団もなく、板張りに毛布を掛けただけでゴロゴロと、魚屋の魚になったようだ。石の隙間からは寒い風が入ってきたが、疲れて寝付いてしまった。

七月二十六日 槍ヶ岳へ上高地

今日も雨は止んだが霧が深い。リュックを小屋に置き八時四十分岩道を頂上へ向かった。案内記で見ると、槍は二百尺直立し、頂は二坪しかないと書かれていた。そのように、肩というところから急になった。杖も雨具も置き捨てて登る。手をかけた岩が崩れれば一命もない。一本の針金を頼りに登るところもあった。

そしてついに九時二十分、大槍の絶頂に達した。ただ小さなお宮

がある。我らの周囲はその二坪の平だけ。濃霧で何も見えないし、物音一つしない静けさである。校長先生の音頭で今度は川越に向かつて、万歳を三唱した。川中登山隊は他の登山者よりも元気だった。こうして目的を達し小屋に戻った。十一時前。上高地へ向けて下山するとき、秩父宮様御一行がお着きになった。金子先生の号令で敬礼。宮様も帽子を取られて御答礼あそばされた。

そこから二、三町で雪渓が始まった。下の方には大槍の小屋。傾斜は急である。岡田萬雄先生が滑る。見ている間に小さくなった。高松鶴吉先生も無事に滑った。岩に当たったら大変である。私はカンジキを着けている者に道をつけてもらい、恐る恐る下る。

大槍小屋を過ぎて清流の流れのところでは昼食にした。そこを過ぎると雪にもなれて、愉快になった。板に乗って滑る者もいた。さらに下ると割れ目には六尺以上もの雪が積もっていることが分かる。その下を水が轟々と流れる。落ち込めば出ることは出来ない。

間もなく雪渓もつきて林の中に入る。槍沢の小屋を通り二ノ俣の合流点にくる。橋を渡って左岸に出ると牧場があった。子馬や牛が白樺林の小川で遊んでいる。ここばかりはのんびりとしていた。白沢渡で右へ折れ、丸木橋を渡ると上高地もすぐだ。一里くらいで河童橋にでた。五千尺旅館がある。穂高連峰がよく見えるが、ここは氷河の跡だといわれた。我々の泊まる清水屋は六、七町先にある。着いたのは五時半頃であった。ゆっくり温泉に浸かって、夕食は岩魚のご馳走で、寝室も明日は秩父宮様のお泊まりになる新築の下座敷で、ゆっくり寝ることができた。

(五年 横田半三)

七月二十七日 上高地へ下山

槍ヶ岳踏破の疲れが身に沁みて、夏の太陽がキラキラしてきても、皆休んでいる。どうやら岡田先生だけが五時起きで大正池に行かれたようだが、他の者は三時に起きるといふ昨夜の予定も無視している。

同宿した神戸商業の一行は、僕らより少し前に出た。太陽がカンカンと六百山と水平になる頃宿を出た。河童橋まで戻り、徳本峠への道に差し掛かる。槍穂を振り返りながら峠の茶屋に着くが、ここから先は紆余曲折の曲がっては下り、曲がっては下る道。足に任せてドンドン走った。

ここは鳥々谷南溪の道だ。激流を利用して流す木材は、浮き沈みしながら白い泡と一緒に流れている。岩魚止の茶屋からはトロッコのレールの上を辿って、他の登山者と競争になった。その中、荷馬車が二、三台続いて、ガタゴトきた。馬子は車上に涼しい顔で納まっている。幾つもの吊り橋を渡って、数知れぬ曲がりくねった道を通って、ようやく鳥々の村に着いた。太陽はジリジリと暑い。せみの声を聞いていると盛夏だなあとと思う。

鳥々駅で昼食にして、三時十分まで待つことにした。長谷川誠一先生はこの先、乗鞍の神秘を探って健脚を試されるとのこと。我々は電気鉄道で松本に向かった。右手には北アルプス連峰。ああ、あの偉大な山の奥に踏み入って、万歳を絶叫したかと思うと、何となく嘉悦の情が胸に浮かんできた。

（五年 島田武）

山行記録 浅間山から碓氷峠

七月二十三日 火山館まで

下級生を中心とした浅間登山隊の十一名は、西川、榎本、長谷川の三先生の引率で、朝七時の電車で川越を出発した。

碓氷峠での有名なアプト式隧道で通過すると、四方は再び広々し、車窓から浅間山が見えてきた。正午近く汽車は小諸駅に着いた。駅を降りて停車場通りの坂道を曲がると社にきた。そこに浅間山登山の標識がある。そこから登りが始まる。一里半で清水館という休憩所があつて、婆さんが茶をくれた。

「ここから浅間館まで随分あるかね？」

「いいえ、幾らありませんえー。もうちゆくですよ」

信州言葉でやり取りした。「もうちゆく、もうちゆく」と唱えて歩いて、三時に浅間館に着いた。するとお爺さんが出てくる。

「真に済みませんが、今一時間半登ると、やはり私が持っている火山館という小屋があります。今日はそこが空いていますから、どうかそこへ行ってください」

丁寧な言葉に、私たちはまた登りだした。蛇堀川に沿って登って行く。その狭い道は川の中の石の上を登って行く。水は冷たい。火山館に着いたのは四時半だった。ここは元の標識から三里六町にある。高くて寒い。小屋は簡素だったが見晴らしはいい。小諸の町は遠くに小さく、電燈が綺麗だ。七時貧相なお膳であるが腹一杯にな

り、九時半就寝した。

七月二十四日 浅間山登頂

ゴロゴロという音は何かとっていると、大風が吹いて霧がひどい。これでは頂上は無理だろうといわれ、落胆する。しかし気の早い連中は頂上を目指したい。朝飯もそこそこに一列で登りだす。

風が強くて帽子を飛ばされた者がいた。上にいくとさらに強くなり、呼吸も苦しい。雲の切れ間に日本アルプスが少し見えたが、山の名を指示されるばかりだ。山は青く、田は黄色い。さらに進むと頂上に出た。噴火口の周囲はどのくらいだろうと首を伸ばしてみたが、噴煙と霧と風で分からない。休憩すると噴煙の硫黄臭さで難渋した。風がやむと今度は寒い。もう小屋へ降りよう。

下りは急いだ。小屋で荷物を受け取って、小諸まで急いだ。予定より早く着いた。先生にも、

「早くなったねえ」

と誉められた。列車に乗り、午後三時軽井沢で下車する。停車場通りを真っ直ぐに進むが、別荘の多いことと、外国人が多いことに驚いた。草津軽便鉄道を横断していくと、旧軽井沢の要屋旅館である。要屋は三階建てで町第一の旅館だそうで皆喜んだ。二階の部屋に入って浅間の思い出を語った。

七月二十五日 碓氷峠

今日はいよいよ帰る日だ。七時に宿を出て一ノ字山の中腹の峠町

に八時に着く。その熊の神社に参拝し、熊ノ平停車場に続く道を辿っていった。この山道は一里くらいであったが、急なので足袋の先をすり減らした。私は先頭で下ったが、皆は続いて、十一時、碓氷山中の熊ノ平駅（注・アプト式の廃止と共に一九六三年・昭和三十八年廃駅となった）から車中の人になり、磯部に正午前三十分に着いた。下車して磯野館で休憩した。有名な磯辺餅を土産に買い、磯部温泉を見て、午後一時二十七分の列車で大宮乗り換え、川越には五時に着いた。

（仲正一郎）「学友会会報」二十号



S.N

一九二四年（大正十三年）

山行記録 北アルプス白馬岳の登攀

猫も杓子も登山登山と騒ぎ回る世の中に、せっかくの暑中休暇をムザムザ潰すのも惜しいと、私も一行に加わって日本アルプス登攀に出かける。付き添いは岡田、高松、久保の三先生。一行二十二名。日程は七月二十二日夜から二十七日朝まで。費用十八円。

七月二十二日 出発

みんなの「御機嫌よう」の言葉を後に、川越から乗り換えて、国分寺から午後十一時四分の長野行きに乗る。鮪詰めまぐろの汽車には自称大登山家も乗っていた。誰もが金剛杖を持って、「我こそは日本アルプス通で御座い」の連中が多い。

「まあ旅は道連れ、お掛けなさい」

東京の者らしいデツプリ肥えた御仁ごじんに言われた。木曾御嶽参りの白装束しろしょうぞくにも話しかけられる。

七月二十三日 四ツ家（編注・白馬）

松本から信濃鉄道に乗り換える。どうも信濃鉄道沿線にはチフス

流行の噂があつて、一切この辺では飲食物を求めないことにした。触らぬ神に祟たたりなし。

車窓からは大天井、常念、燕。お江戸見物の田舎者と同じで、地図片手に大はしゃぎ。十時五十分大町下車。金剛杖に登山服は浮世離れした格好だ。大町から四ツ谷までは景気よく自動車で突破する。木崎湖を通り四ツ谷の白馬館へ。

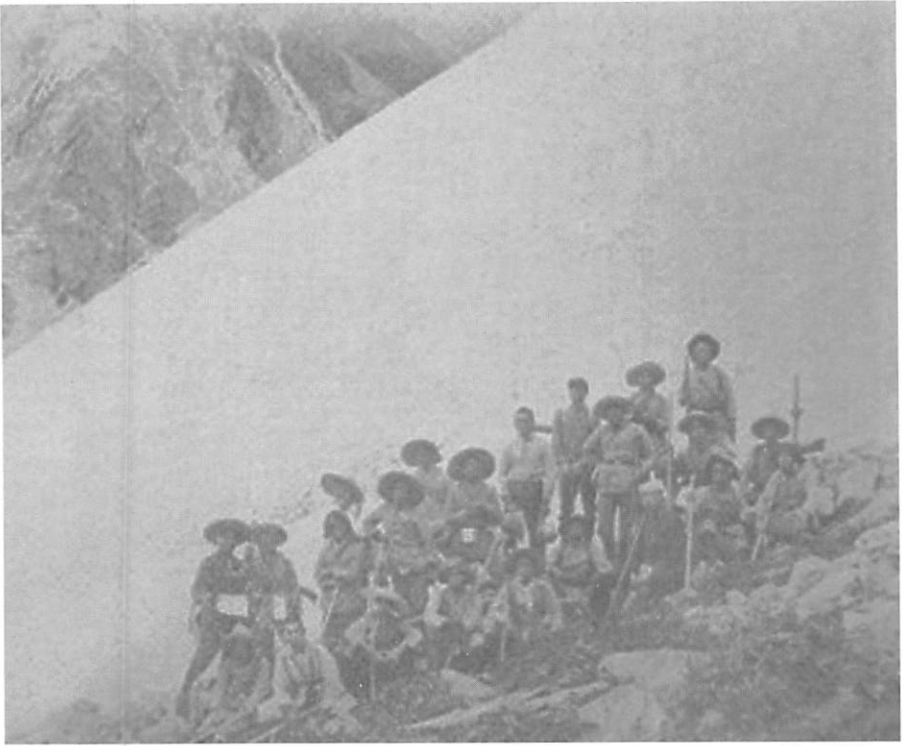
七月二十四日 頂上小屋

白馬館を出て登山に入る。皆食料は大分買い込んだ。チョコレト、氷砂糖、食パン、缶詰。二股から南股入りへ。猿倉のカルピスはうまかった。白馬尻でコンビーフを切つて昼食にする。温度は七十六度（注・華氏）。

白馬尻を出たのが十二時。オーバーセーターに手袋、手拭を被つて登り始める。ガチャ、ガチャとカンジキで大騒ぎして登る。ハートと吐く息も白く眼鏡も曇る。大雪溪の雪はあまり硬くはない。端の方は岩が落ちてくると、強力の指導に従つて真ん中を行く。

これまでで、二十五町の雪溪のおよそ半分。楽や冗談じゃ登れない。油断すると命がフイになる。大雪溪を渡つても小雪溪がある。傾斜がきつい。S字状の小雪溪を横断して、一列になつて蟻が這うようだ。そこを過ぎるとホッと一息。ポケットのチョコレトを食べる。

さてそれからお待ちかねのお花畑となる。クルマユリ、ウルツブ草、白馬タンポポ、ミミナ草。今が盛りだ。やれやれドツカリ腰



1924年 夏の白馬岳 大雪溪にて

を降ろして、右手には杓子岳の断崖。左手には小蓮華の尾根が続く。ここが「二目千両」^{ひとめせんりょう}だった。草鞋履きの写真屋がいた。毎日頂上から降りてきて、ここの商売も楽じゃあるまいに。記念写真を撮る。

天氣が危なくなってきた。

霧が足元から上がってくると、一寸先も見えなくなった。霧が雨になる。頂上までは二、三町なのだが。やっとのことで頂上小屋に入ったのが四時四十分。炭火で暖まる。

小屋で三個十銭の白馬饅頭^{まんじゅう}を頬張る。毛布を頭からスッポリ被って、暗い石油ランプで語り合う。山の夜は更けて、外の暴風は激しくなってきた。

七月二十五日 風雨の下山

四時半に目を覚ましたが、嵐は物凄い雨の音になっている。強力は首を振って、

「こりや、いかん」

と黙り込んでしまった。籠城^{ろうじょう}か下山か。同宿八十人ばかりが額を一つに集めて思案する。小屋を出た二、三人が、再び引き返してきた。強力から、昨日鏈岳^{くづがき}で一人亡くなりましたよと聞かされて、なおさら怖い。八時まで待ったが天候は変わらず、意を決して下山することにする。万一を期して三組に分ける。豪雨を突いて外に出た。

凄^{ひど}い唸りと風。身に着けるゴザがバタバタいうが、それでも下る。ネブカ^{ねぶか}平^{ひら}までに体が冷えた。休めない。大雪溪の上で濃霧のため隣の顔も見えなくなって、嵐の中をしばらく立ち往生した。地獄の上の釜だ。少し霧が薄くなって動き始める。大雪溪を慎重に下るが、もう一体なんど転げたか分からない。それでも十一時三十分、白馬

尻に着いた。三時間半のこの苦い経験は、おそらく一生忘れないだろう。

白馬尻で昼食にした。このとき三高の登山部四人が登ってきた。この雨の中を登ろうという、元気なことだ。食事を終えて十二時四十分に出る。増水した北股入りが凄まじい音を上げて流れている。四ツ谷の白馬館には三時に着いた。風呂へ入って早く寝る。

七月二十六日 帰郷

山荒れで残念だったが、本日は帰郷する。しかし濡れた衣服が乾かない。朝から晴天で旅館の屋上に干すことにした。そこは一大展覧会になってしまった。服に、ズボンに、オーバーセーター。リュックも、麦藁帽もずぶ濡れ。

ほんの二時間ほどで乾いて、九時半に自動車で四ツ谷を離れる。

「運転手くらいいい商売はありませんよ。ここ（大町〜四ツ谷）はほんの夏の登山客だけです。でも月に百円は稼げます。お客さんにチップや何やかやと百五、六十円は確かなところですよ」

いい気持ちになって南へ走る。青木湖、木崎湖。時間があるのでここで遊ぶことにした。

木崎湖には有名な学者村がある。湖面の対岸に九つ並ぶ玩具のような建物が、学者村。食料品はこちらのモーターボートで運ぶようだ。

岸に係留されているボートに乗ることにした。先生がリーダーでスーッと小波を立てながらオールを漕ぐ。遠くアルプス連山が湖面

に映る。木崎から大町までは一里。ボートから上がって新鉄の停車場へ急いだ。

大町発零時三十五分。ちょうど神戸商業の登山隊と一緒に。一行は立山から針ノ木峠を突破して大町へ出たのだと大分鼻が高い。松本から長野へは寝ていた。

「姨捨だ」

という声に飛び起きた。

窓から首を突き出すと、なるほど素晴らしい景色。篠ノ井線の姨捨は、なるほど日本三大景観の一つである。

長野に着いてから乗り換えの四時間の間に、善光寺参りをした。出発は午後十時三十一分。翌朝、七時二十分に母校に着いた。

（遠藤真三）「学友会会報」二十一号



姨捨の絶景

千曲川の河岸段丘の急な斜面に、今でもスイッチバックの引き込み線の駅があるのは、篠ノ井線の姨捨駅。そこから眺める千曲川の沖積平野は、小諸方面から上田へ更埴と、広大な景観を満喫できる。

鉄道が開通したのは明治後期のことで、東京から塩尻までは中央本線が整備されるよりも、信越線篠ノ井線の開通が四年早かったとされている。万葉の時代から、この姨捨は絶景だとされて、棚田に映る月明かり（田毎の月）として有名だ。姥捨は伝説も残る。長野自動車道の姨捨SAからも同じ景色が眺められ、最近また人気ビューポイントとして話題になっている。

一九二五年（大正十四年）

山行記録 不二登山記

昨年までは上級生、下級生の登山隊を分けていたが、今年から一組に編成することになった。今年は富士で応募者が多かった。何せ箱根よりも高い山に登ったことがない僕が行くくらいなのだから。学校は納めた旅費十円のうち、九月の新学期に一円いくらか残金があると、我らを喜ばせた。メンバーは四先生以下、生徒二十七人。

七月二十四日 吉田の朝

一日目は猿橋を見学してから大月まで徒歩で昼食。後に小さな電車に二時間揺られて吉田に三時到着。吉田は町全体が傾斜している。その一本坂道を上り詰めたところに浅間神社があった。そこから夜の名峰富士の姿を見た。星屑の光を浴びて、山の弧線を浮かび上がらせている。稜線のすぐ上にきらめく星は、乙女の瞳ではないかと思われた。私は宿に飛び込んで、金剛杖に一句書き込んだ。

「新月や 大荒れの後の 山黒き」

実は我々が出発した前日は、富士は大荒れだったようで、女学生幾百人が何合目かに籠城せざるを得なくなり、頂上への食料が途絶

えたとかで新聞が大いに騒ぎ立てていた。おかげで家の者が心配して止められそうになったものだった。けれど今日、吉田に着いたときには誰もこんな話はしていなかった。昼間厚い雲がまとわりついていた富士も、今は美しく晴れている。宿の夕飯に刺身がでた。「山の中で珍しいですね」というと、「皆さんがくるから、自動車で沼津から取り寄せました」と女将さんが言っていた。夜半には、坂道両側の小川が、雨の音に聞こえて不安になった。

七月二十五日 朝の裾野

空にまだ残り星がチラチラしていた頃、もう出発した。浅間神社にお参りする。足の弱いものは馬を雇っていた。日光杉並木のような松並木を歩く。並木を通した空き地では月見草が金色に光っていた。少し行くと薄紫の釣鐘草が咲いていた。行者の一団も鈴の音を鳴らしながら、先を行く。後ろから乗合馬車も近づいてきた。

間もなく朝の光が差し込んでくる。淡藍色は寝巻きを着ていたような富士の色だが、茜色に着替えたようだ。点々と見える石室を、稲妻なりに貫いて登山道は頂上に続いているのである。裾野の道にはまだ傾斜がない。新しい草鞋に元気な若い足が弾む。

八合目の眺望

八合目には石室が二つあった。真ん中に小さな郵便局を挟んで並んでいる。吉田口から登ってきた人も、須走御殿場口でも、ここに集まって頂上を目指す。石室の前の見晴らしに腰を降ろして遠くを

望む。関東山脈は数十里も向こうであるうか。関東平野の上空は流れ雲。手前には甲州山脈がある。箱根勢は甲州と相對している。伊豆半島は雲に隠れ、眼下には山中、河口、西の湖面。一時間も遅れて登ってきた仲間が着いて、いよいよ「胸突き八丁」の剣へ行こう。山頂は大地が空と接するところだ。西洋の古城のごとき石壁は、暴風から石室を保護する防風壁だということだった。

頂上の一夜

夕飯は十分に蒸れきれない高山独特のポロポロ飯ではあったが、旺盛な食欲でお汁と、香の物と、お茶だけで、腹いっぱいになった。飯が済むとこの二十畳ばかりの石室のなかに、囲炉裏だけ残して布団が敷き詰められる。疲れた我々はすぐ床に入って休む。しかし眠れない。私は囲炉裏にいつて、山男と強力の話に加わった。

「さつき八合目の室を出かけてからすぐ、婆さんと娘さんの二人を追い越したが、まだここへは着かれねえか？」
「ああ、そんな連れはまだ着てねえよ」と小屋番がいう。

「なにしろこのガスではなあ。女子供ではひどかんべ」
「どうだ、チョックラその辺りまで出てみてくれんかね」

追い越してきたという強力は提灯ちようちんを持って外に出た。まさかこの霧で、行き尽きてしまったわけじゃないだろうと、不安になった。男は帰ってきた。

「やっぱり室をでるとすぐに、八合目に帰ってしまったらしい。何

しろこの先が悪いからなあ」「たいがい大丈夫だんべ」

仲間の吉崎がおきてきた。眠れないという。私たちは草鞋を突っかけて外に出た。霧が舞って冷え冷えしている。防風壁のところまで出たが、何も見えない。

「昼間あまりにも眺望がよかったからなあ」

吉崎がいう。石室に戻った。皆の寝顔を踏み越えて、寝場所へ割り込んだ。まだ話をしている山男の声を聞きながら、天井の薄暗いランプを見つめているうちに、いつか眠りに落ちてしまったらしい。

七月二十六日 御来光と砂走り

四時半だというのに、我々は身支度を整えて石室の前に整列した。目の前の白い雲気の中にかすかに光るものがあつた。それは霧を割って現れた橙色の大日輪の姿。御来光だ！

歓喜を送った後、我々は石室のすぐ前から間道を下り始めた。眼下に見える黒い山の背は、昨日登ってきた本道だ。そこを登ってくる人は、八合目を早朝に出発した人たちであろうか。消えかかった裾野の霧の底に、キラリと光った鏡は山中湖か。八合目を過ぎて、二つの岩山の尾根に挟まれた、砂走りに入った。見事に弓形に反った火山砂の傾斜の、絶大な長距離の連続である。我々は一列になって滑った。金剛杖を突いて、漕ぎ下った。草鞋がつま先だけ残して千切れた。長い松林を過ぎて、須走の宿に着いたのは、午前十時頃。自動車四台に分乗して裾野を二里半ドライブして御殿場着。十二時半の汽車で家へ帰った。（五年 石川信雄）「学友会会報」二十二号

一九二六年（大正十五年）

山行記録 木曾御嶽

七月二十四日 木曾福島まで

「木曾の御嶽山は夏でも寒い」と歌われるほど、御嶽登山は有意義だと思ふ。僕はそう思つて登山部の一行に加わつた。一行は久保先生、吉村先生、相場先生および、卒業生の伊藤さんと僕ら六名の合計十名である。

朝川越を出発して、国分寺から名古屋行きに乗り込む。車中は登山客で膨れ上がつていた。一番嫌なのは中央線のトンネルで、すし詰めの中に人の息で蒸されてしまう。福島に到着したのが午後五時四十五分。旅館に入つて九時就寝する。

七月二十五日 王滝登山口から田の原まで

山の裾野を削つて通じた道を、王滝口へと五時半に出発する。福島から一里半で常盤橋を渡る。八時半に八幡滝。そのまま沢渡峠。真正面に初めて御嶽の山容を見ることができた。その右に乗鞍岳。檜の穂先はその奥に見える。いずれも残雪が多い。一旦峠を下ると、「本多博士が天下の絶景と嘆賞せられし裏鞍馬入り口」

とある。早速そちらへ急な階段を下つていく。そそりたつ十数丈の絶壁。枝を張る老松。紺碧の深淵。ここに架かつている鞍馬橋はかなり高い吊り橋だった。十一時。橋のたもと茶屋で昼食にした。王滝登山口についたのは十二時。強力を一人雇つた。

田の原へ向かう。途中王滝と清滝を見る。三合と四合の間で、川中の講中こうちゆうが下山するのに会う。お互い元気で挨拶を交わした。四合目の小屋で休憩し僕は先生方より一足先に登る。強力の話では、ここから先がお花畑だという。黒百合、鈴蘭すずらんが咲き乱れる。五合目からは針葉樹林となる。やがて道は二つに分かれた。左は三笠山（注：標高二二六五尺）を回つて田の原へ、右は直に田の原へでる。右へ行く。強力が、「もう小屋はすぐだよ」

という。道は少し下りになつて、開けると田の原小屋が見えた。午後五時。

小屋はかなり広くて真ん中を登山道が通つていた。部屋は両脇だが先着の人たちで混んでいる。遅れてきた先生たちは、高山植物を採集していた。赤々とした囲炉裏に煮えたぎつてお汁を、強力がよそつてくれた。ご飯の御櫃おひつも出てくる。昼は二個の握り飯だけだったから、腹は減つている。ご飯の盛りもどんどん崩されていった。高山の飯は不味いと聞いていたが、ここは熟練の小屋番かうまい。

小屋番や強力は田の原を公園といつてゐるが、なるほど気持ちのいい高原だった。外は夕陽があせて、大空も澄み渡つてゐる。小屋には寢床が敷かれていた。ランプの光は暗いが淡い。十二時頃まで

寝付けずに外に出たが、沼に月影が映り、上には月明かりで白銀が輝き、星の群れも大きく近い。少し寒い、立ち去りがたいほどだった。



当時の木曾御嶽地図

七月二十六日 木曾御嶽山頂上

午前一時、目を覚ます者がいた。リンリンという鈴の音で白装束十人ばかりが小屋に入ってきた。少し雑談するとまた登っていった。二時、千切れるような冷たい水で顔を洗う。温かい朝食が出た。弁当をもらっていいよ二時半、小屋を後にする。傾いた月明かりで登って行く。

平原が終わると、はいまつ 這松の山道になった。七合目まで来ると田の原小屋は遥か下になった。八合目でもう一度休む。その上で月明かりの雪溪に出た。一握り口に入れると腹の底まで染み渡って冷たい。九合目からは這松も消えて、岩と短い草が生えているだけとなった。やがて目の前に小屋が見える。王滝口頂上だった。剣ヶ峰は間近に聳えている。午前四時。小屋から一時間半だった。

小屋の傍らに御嶽神社がある。その石垣が巡らしてある内側は穏やかだが、一歩外に出ると猛烈な寒風が怒号している。頂上はいつでもこんな烈風なのだろうか。東の空は次第に紅を増してきた。西の空に残る月は輝きを失っていく。とてもじゃないが寒くて御来光まで待つていられない。小屋に入る。五時、他の人と一緒にまた外に出た。まさに夜明けだ。雲を破って目を射る金線が閃光せんこうとなる。居並ぶ人は口々に祈りを上げ始めた。そしてついに金の円盤は浮かび上がった。山々も目覚めた。雲の海に光が走って、紅に、紫に、緑に、橙に変化極まりない。何たる荘厳ぞ！崇高ぞ！

風が穏やかになってきて剣ヶ峰へいく。西の方に柵引いた雲に山

の影が映っている。神秘的な映像だ。頂上の小屋では写真を買、スタンプ、焼き印をもらう。「海拔一萬二百八十八尺」という印だった。小屋の側の石段をさらに登ると、いよいよ絶頂である。祠が祭られた頂上は石垣が巡らせてあった。その突端へ出ると日本アルプスの高峰は一望だった。写真屋が説明する。

「あの一番高いのが槍ヶ岳、右が大天井、左の霞が焼岳、それに加賀の白山と、そこには乗鞍」「ここに一日いては寒いでしょ」「ええ、まあ。でも商売ですからねえハッハッハッハッ」
槍の方を見て話をしていると、もうパチリと音がした。すぐ下には二ノ池、一ノ池には水がない。お鉢周りは風が強いから辞めた。

六時、寒風の中紅顔の学生が頂上から黒沢口へ下って行った。それこそ我が川越中学校登山隊の下山姿である。二ノ池には雪渓があった。九合目に差し掛かるとまた雪渓があった。下山は早い。草鞋で岩の上を飛ぶように走る。それにしても草鞋はよく切れた。七合目からの大森林は御料林にもなっているほどだ。

「木曾のナー ナガノリサン 木曾の銘木 ナンジャラホイ 槍にさわら ヨイヨイヨイ」

歌いながら下る。小屋に休憩して草鞋を履き替え、他の下山組と競争になった。五合目をすぎ、四合目には高山植物が綺麗だ。この黒沢口からも登山客は大勢登っている。

「お早う様ごわす」という挨拶はいい。信者の登山者は親切だった。二合目の茶屋では一時間半も休んで昼食にした。頂上から四時間

予定よりも早い。一里先の黒沢村からは自動車に乗る。ところが黒

沢は混んでいた。歩くことにした。木曾川沿いに、三尾、日向といくが小雨が降り出した。対岸には木曾材木の森林運搬列車が黒煙を吐きながら、トンネルを出たり入ったりしている。午後五時につたや旅館に着いた。

七月二十七日 見学

宿の主人に見送られて福島から汽車に乗り、上松で降りる。臨川寺という寺の下に、浦島太郎が釣りをしたという景勝地「寝覚の床」がある。奇岩の景勝だ。近くで寝覚そばを食べた。

上松からは長野に出る。善光寺を参拝して、午後十時の夜行で戻った。
(五年 村本達郎)「学友会会報」二十二号



「値段の移り変わり」

大正中期から昭和初期の登山に関わる、旅費・宿泊・弁当の値段について触れた。今の値段に比較してみよう。物の価の対象とする「米」は政府による価格統制があり適切とは思えない。加藤文太郎は、甘納豆・羊羹・干柿を携帯し非常食にした。甘納豆は歩きながら食べられ、火をとおせばしるこになる。羊羹は美味であり疲れをとり腹の足しになる。虎屋の羊羹は、大正八年から昭和十年頃まで概ね一円五十銭であった。昭和四十年ころ千五百円、昭和の終わり頃四千二百円、今六千円程度である。参考になるでしょうか？

本誌でも触れている秩父宮殿下は、一九二六年スイスの山を十座以上登攀されています。同行された松方三郎さんは宮様だからと言って特別扱いせず、マッターホルン登攀の時、準備された重い羊羹を宮様自身背負って登られ、頂上で皆さんにご馳走された由。さぞかし美味で有難かったと思われます。

(参考)「新値段の風俗史」週刊朝日編平成二年

一九二七年（昭和二年）

山行記録 立山登山記

暑い暑い夏季休暇を関東平野の片隅で過ごすのは惜しいと、登山部の一員に加わって日本アルプスに出かける。全部揃って九人。余りに少人数となった。参加は久保、原口両先生。卒業生一人、町の有志一人、在校生五人。費用は二十円となった。

七月二十四日 立山温泉

前日の夕刻、大宮発午後七時三十一分の金沢行き急行に乗る。列車は満員。座れない。雨も降っている。

信越線を走り、直江津で日本海に出る。波静かな日本海と、アルプスは見えたり雲に隠れたり。午前六時四十分富山に着く。乗り換えの出発までに水の用意をするが、この辺は井戸も浅く水はろ過してやつと飲めると言っていた。二、三合の水筒を一杯にするだけで手間取る。駅には多数の登山者。乗車一時間で千垣ちがきの駅に着く。我々は常願寺川じょうがんじに沿ってなだらかな道を行く。この辺は山といっても田あり、畑あり。しばらく行くと立山事務所があった。アルプスの銀座通り。なかなかの混雑で事務員も応接に忙しい。さて強力

を雇うことができたのは九時半過ぎになった。

道はいよいよ狭く左右は断崖絶壁になった。常願寺川の濁流は猛烈に岩を砕かんばかりに流れていた。山のことだ。一雨ごとに道は変わり、崩壊し、土砂崩れを起こす。間もなく十一時に藤橋に着いた。早速裏の清流で喉を潤し、岩の上でカメラに入る。冷や飯でも仕方がないが腹ごしらえ。

進み出すとおぼつかない吊り橋を渡る。行けども行けども、大岩の道で傾斜は増してくる。天気も不穏になってくる。ついには牛歩のごとくになった。電柱の番号が次第に減っていくのを励みに、番号が消えて長い吊り橋の対岸に温泉を汲むポンプの音が聞こえた。立山温泉（注・標高一三三〇㊦・今は消滅）である。

七月二十五日 立山登頂

昨日の疲れでぐっすり眠っていたが寒さで目が覚めた。五時半に起床すると晴れている。寒い廊下を通って湯に行く。六時半に出発した。道はまだ常願寺川に沿っている。川の中に道が入っている。川を渡るといよいよ登りだ。「静かに、休まず、同じ歩調で」

モットーは守る。急坂を登っていくと眼下に美しい湖が二つ現れた。一は新湯といい熱そうな蒸気を立てている。一は刈込池といい真っ青に輝いている（注・標高一六〇〇㊦）。この辺は暗き森林で、道は落ち葉が堆積したままだ。上の道は蛇のようにくねっている。喉が渴いてどうしようもなくなったころ雪渓に到達した。その雪渓を横断するところに出た。時間は早いが昼食にする。久保先生は雪

の割れ目に水筒を入れて冷やしていた。三十分で出発する。雪渓は五丁余りで、急斜面を渡る。ここでカンジキをつけた。小川君がピッケルを持っていたので、足場を切ってもらった。恐る恐る横断した。雪渓の頂上は海拔二六〇〇メートルあった。一気に視界は開けて、雄山おやま、大汝おわたし、別山、浄土。空には一点の雲もない。遥か下には室堂がある。ここから小屋までは下る一方だ。十一時半に室堂に着いた。

立山温泉から二里半と言われていたが、五時間かかった。道は近いが困難だ。途中に小屋は一軒もなかった。普通の人の通る道ではない。小屋にリュックを預けて雄山に登ることにした。

室堂周辺は一面の雪だった。大雪渓が二十丁も続いているが、緩やかでカンジキはいらない。雪渓が終わると岩。浄土山との間(注・一ノ越)を登って途中で別れる。そして馬ノ背のようなどころを登る。頂上近くは急傾斜だった。富士、御嶽山の比じゃない。一方は断崖だ。ついに五ノ越(注・雄山社務所)にきた。

「これより上、草鞋をはいて登るを禁ず。社務所」

という立て札。頂上へ午後二時十分に着いた。室堂から一里余といわれ海拔二九九二メートルという標識がある。頂上は岩が積み重ねてある。午後になって少し曇ってきた。神社の前で神主がお神酒を振る舞い、祝詞を上げた。

「登山者の家内に、雄山を吹きまわす風のごとく、悪魔病魔を退け給え」

神主は早朝登って、午後三時に下山するという。神社に錠をして賽銭箱は畳んで持っていくという。五銭、十銭、五十銭玉が沢山入

っていた。雄山には登山者がいかに多いか分かる。記念撮影をした。頂上の石には逸話があった。昔、加賀の白山と高さを争ったが、草鞋一枚分立山は低かった。そこで信者は石を一つ運び上げて積み出した。ところが山頂の石を持って帰ると力石になるといわれ、また誰も運び下げた。それでいつまでたつても山は高くはならなかったという。一時間いて三時に下山する。下山は早い。室堂では、

「今一度雄山に登ってくれば、千円やる、一萬円やる」

とか言っている客がいたが、本当にくれるなら五百円でもいくが、どうせくれないから行かない。地獄谷は室堂から十町のところにある。緑ヶ池、美久里池を経て、這松を縫いながらいく。美久里池は水が透き通っていて、塵一つない。御伽話にある底なしの池らしい。小屋に戻ると大混雑していた。さっきのリュックは端の方に追いやられている。けれど強力の計らいで寝る場所は取ってあった。夕食はテーブルで食った。寝るのは雑魚寝ざごね。それでも交代で食事をする。全員で行くと寝る場所が取られてしまう。先客に優先権はあるのだ。ろろが、すぐに横取りされる。島国根性の籠城的な態度では駄目だ。立山たちやまに降り置ける雪を常夏とこなつに見れども飽かず神かみからならし

大伴家持

(四年 市川宗貞)

七月二十六日 平の小屋

室堂から浄土山く五色ヶ原く平小屋へ。毛布一枚では寒くて四時半目が覚めた。もう出かける一団がいる。そろそろ支度をしよう。強力に朝飯だと呼び出され、食堂に入った。食事を済ませスタンプ

を押して六時に小屋を出た。

浄土山は室堂に近い。四十分ほど雪溪を渡って、岩に移って登る。綺麗な高山植物に吸い寄せられそうだ。七時五分、頂上に出た。谷一つ隔てて向こうに雄山。渴ききつた喉を雪で潤す。稜線沿いにいくと、鬼ヶ岳に出た。この急傾斜の下りは怖い。天に聳えている。さらに進むと獅子ヶ岳。ここの頂上でも休んだ。ここで早めの握り飯を食ったが、旨かった。水筒の水も全部飲んだ。獅子ヶ岳を下るとザラ峠。リュックを峠に残して、五色ヶ原へ登っていった。晴天の時にはいい景色だと思いが、霧が深い。小屋の裏に雪水が溜まっています、有難い。その小屋で焼き印をしてもらっている間に雨になった。峠に戻る。

ザラ峠から下っていくと、大雪溪になった。十町くらいあるという。強力はこの雪溪を降りるのに、這松の枝を折ってその上に荷物に乗せ、枝を引いて降りていった。我々はカンジキを着けた。雪溪が消えると清流になる。その清流の脇で休憩をした。ここでしばらく先生たちの昔話を聞いた。疲れも大分抜けた。この辺りは人跡稀な密林で、寂しいところだ。稲妻型の道を、千畳も下らなければならぬ。その先で二、三の人家を見つけたときには、ほっとした。それが平の小屋だと聞いたときには嬉しくなった。午後三時二十分。リュックを降ろして小屋の前の清流で顔を洗う。汗を流し終えた頃にはもう日が暮れようとしていた。小屋の中に入って手足を伸ばす。今日の旅も無事に終えた。そして静寂な大自然は眠りについた。

（四年 小川広吉）

七月二十七日 針ノ木峠く大町

黒部川はどうとうという音を立てて流れている。今日の予定は針ノ木越えただけから、ゆっくり起きる。六時に朝食。温かい飯を腹いっぱい食う。快晴だ。籠かごの渡しを渡る。ここは昨年までは、通り籠で渡ったというのだが、今は針金を谷に渡した吊り橋になった。間隔を置いて棒が羽目板代わりになっているだけで、梯子の横倒しのようなものだ。これを渡ると対岸には長野県人が建てている小屋がある。少し行くとまた別の溪流に出会う。これが針ノ木谷だった。黒部川の支流でもある。

今日はこれに沿って登る。難所の一つ。天候はいい。針ノ木を越そう。少し登って振り返ると、昨日征服した立山連峰が朝日を浴びて輝いている。雪が白く光って綺麗だ。稜線の景色ばかりに憧れている僕らは、この鬱蒼とした溪流沿いの道には、根負けしそうになる。所々にキャンプの焚き火跡がある。道しるべの石も所々に置いてある。ときどき強力に何処が針ノ木かと聞くが、

「まだ見えませんが、向こうの谷が左に折れると、すぐに峠です」

と言うのには、何だか先が長そうな気がする。十時頃、溪流の木陰に寄って昼食にする。冷やかな谷川の水がお茶代わりだ。小屋で握った大きい握りを遠慮なく食べる。さていよいよ峠に登ろう。

峠が近づくとつれ、雑木が頭に覆いかぶさってきた。登るにつれて周囲の木が低くなる。後ろに雲が見える。今日もまた眺望を雲が邪魔するのか。一時間ほどで峠が見えるところに出た。右が

蓮華岳（二七九八^尺）、左が針ノ木岳（二八二〇^尺）。ここで休む。頂上が目の前にあると、馬鹿に足が早くなる。

雲が頂上を巻いてきた。心配になって強力に聞くと、「つかえませんか」

聞きなおすと、「心配はいらない」ということだった。急斜面に小石が多くなった。這松にすがって登る。苦しい道もここが最後だろう。ちょうど十二時、針ノ木峠の頂上に出た。昼食の残りは風の通らない西側で食う。大沢小屋に寄らずに一氣に大町まで下ろう。

ここは富山と長野の県境だし、針ノ木岳と蓮華岳の分岐でもある。いよいよ十二時四十五分、下山を始める。針ノ木雪渓は急傾斜だった。四十五度くらいありそうに思える。白馬よりも急だ。カンジキをしつかりくりつけ、杖を頼りに慎重に下る。最初に岡田氏が滑る。はつと思つ間に二十間も下の方で、足を踏ん張って止まった。次に中里君が足を滑らして、やはり二十間も下に落ちる。まったく懸命である。思わず汗が出る。小川君も頂上近くで滑ったと後で聞いた。始めは怖かったが、雪渓も長くなり傾斜も落ちてきた。最後には駆けるように下り始めた。一里以上もある雪渓も終わって灌木帯に入る。そのまま二時、大沢の小屋に到着した。

針ノ木雪渓を降りきった僕らは、ここで強力と別れた。

「皆はん、どうも有難うがした。皆無事で何よりでしたなあ。またお出でなはりませ」

僕らは大町まであと五里ばかりと聞いていて、

「強力さん、いろいろお世話様、もうここまで来れば大丈夫だから」

と別れた。小屋で休憩して、大町へ向かった。電光型の急な小道を通過して、灌木帯に入った。そうやって樹林を抜けると、籠川の支流に出た。そこで休憩し再び川に入る。そのうち大町が一望できる地点に出た。元氣百倍になった。間もなく一小村に入った。大沢の小屋から無人の辺境を五里半。二、三回休憩したが、五時間四十分。人家が散在し村人が鋤仕事をしていた。乙女が桑摘みをしていた。近所の茶屋で休む。

「爺さん、町までは近いかね」

「はあ、一時間で出ます。手を上げれば乗せていってくれるでしょう」不思議に思った。敷設されているのは木材運搬のトロッコ。奥の村人のために、乗車もできるという。茶屋の中には獅子の皮が敷いてある。村では熊狩りも行われていて、

「熊退治も面白がすよ。見ていったらどうです」

御伽話ではないかと思つた。昭和の時代に珍しい話だ。三十分ばかり休んで町に向かう。午後六時を少し過ぎた。太陽は姿を隠し、やがて大町の灯火がはつきり見えてきた。山は夜の帳だ。午後七時、ようやく対山旅館（注：百瀬慎太郎が経営していた小屋）に着いた。美味しい膳に舌鼓して、暖かい布団に横になる。

七月二十八日、朝九時五十分の列車で松本に向かう。そこで一旦下車し松本高校を見学した。長野に向かう列車も登山客で満員だ。長野では善光寺を見る。午後十時四十五分上野行きで帰途に就いた。翌日の午前七時川越で解散した。

一九二八年（昭和三年）

旧制中学の生徒にとつて、初めての登山が槍ヶ岳というのは、およそ難しい登山になった。しかも裏銀座といわれる、烏帽子岳からの縦走だった。浅海弥一郎（一九三〇年卒）の記憶では旧制中学三年生の夏の合宿だ。一級上の市川宗貞（一九二九年卒）も、この山行にも同行した。

浅海弥一郎はこんな話をする。

「とにかく私は、水泳も好きだったし、登山も好きでした。旧制中学を卒業した後のことですが、坂戸や小川町の山に一人で入ったこともあったし、テントを担いで赤城の小沼のほとりで、一人でキャンプしたこともありました。一人でぶらつと、そんな旅に出るようなことが好きだったのです。だから中学のときにも、久保堤多先生に引率されて、好きな山に登れたのだから、私は幸せ者でしたよ。

久保先生というのは、芸術肌の寡黙な先生でしたね。でも怒ると怖かった。

あのときの縦走では、地下足袋にワラジを持っていったのですが、地下足袋だけで通したんじゃないかなあ。もちろん雪渓もたくさん残っていましたよ。

それに朝から晩まで、毎日毎日よく歩かされたものでした。確かにへばりましたが、だからといって落伍する者はいない。最後まで

歩き通せるという自信があるものだけが、参加した登山だったわけですからねえ」

山行記録 北アルプス裏銀座

（葛温泉～烏帽子岳～三俣蓮華岳～槍ヶ岳～上高地）

七月二十五日 川越出発

二十六日 大町～葛温泉～濁小屋

二十七日 濁小屋～烏帽子小屋

二十八日 烏帽子小屋～水晶岳～鷲羽岳～蓮華小屋

二十九日 蓮華小屋～双六岳～槍肩小屋

三十日 槍肩小屋～槍ヶ岳～上高地・清水屋

三十一日 上高地～徳本峠～島々～松本～長野～大宮～川越

引率は久保先生、橋本先生。部員は卒業生二名、在校生六名

七月二十六日 川越～大町～濁小屋

当初七月二十三日出発の予定だったが、アルプスが暴風雨のために出発を二十五日に変更した。前日の夕刻、校長、加瀬先生に見送られて新田町（注・本川越）から西武電車に乗る。飯田町（注・飯田橋）に着くと大勢の登山客がカーキ色の服に、大きなリュックを背負って並んでいた。午後十時発の松本行きに乗る。車内は登山客で大混雑。汽車は汽笛と共に出発した。

大月で大分降りた。諏訪湖を通って午前七時十二分、松本に着い

で大町行き信濃電車に乗り換える。大町の対山館で昼食を取り、強力案内でトロッコ道を進む。途中流れの水を一口飲むのだが、

「槍で別れた梓と高瀬」

の歌を思い出し、ここは高瀬の清流に沿って進む。所々に発電所の貯水池がある。そこで水を飲むと、

「これから葛まで休みなしです」

と強力。

「これから休みなしは、行軍こうぐんよりひどいや」

と、仕方なく付いていく。途中トロッコ電車にすれ違うが、四、五人乗っている。小学校の生徒たちが先生に写真を撮ってもらっているのにも出会った。葛温泉に着いた。予定ではここに泊まるはずだったが、対山館の海苔巻きの大握りを二つ食ってまた歩き出す。休んでいると、空のトロッコを引いた馬車がきた。馬方と強力が話をしている。

「濁小屋泊まりか？」

「うん」

「御達者で」

「あれが高瀬の首です」

と強力が指した。覗き込んでみると果たして首のようだ（注・溪谷の景勝地）。「高瀬川景勝の地・神沢の紅葉」に着いた。溪流で頭や顔を洗う。午後五時十分、神沢の吊り橋を渡って工事中の道を進むと、濁小屋（注・ブナ立尾根取付にあった小屋）に着いた。スタンプと焼き印を押す。

（四年 横山 清）

七月二十七日 濁小屋く烏帽子岳

小屋の中で聞く水音に雨か雨かと思っていたが、それは清流の音で天気は快晴だった。小屋は山に囲まれているから展望はない。ただ遠く南の谷間に牛首山（注・大天井岳の西二五三峰）が浮かび上がっているだけ。川の流れは温泉硫黄の臭いがする。

五時半朝食ができた。向かい合って五人ずつ十人しか食事のできない食堂。大根おろしがどんぶり一杯入っていて、キャベツの味噌汁と福神漬。六時半、早速出発する。今日は行程は短いが時間を要する。小屋前の案内杭には烏帽子岳まで一里半、七時間とある。これは身軽な達者なものの時間だそうで、我々は十二時間行動の予定を立てた。

出発して後から来たのは、昨夜キャンプをした二人連れの会社員だった。しばらくは溪流脇の花崗岩の崩れた白砂の上を歩く。道が急な坂になると電光石火の登山道がついている。五分登っては五分休み、歩く時間と休み時間が相半ばする。バナナ、キャラメル、チョコレートを食べるのは爽快だ。五、六回休憩した後に、標高二二〇八の三角点に着いた。槍ヶ岳、大天井岳、燕岳、餓鬼岳、烏帽子岳が手に取るように近い。遥か東の麓の中に大町の家並みが見られる。北側に五十坪下ったところに飲料水が得られた。その冷たい水を水筒に用意する。ここで昼食。昨日買って置いた林檎りんごもうまかった。一時間後また登りだす。

だんだん高くなると冷たい風も吹いてきた。白樺の生えている平

らなところに、雪が溜まっていた。四年の伊藤君が真っ先にほじってきた。その先、岩山の地形を這い登る様子は、まるでピラミッドを登るようだ。洞穴には光苔も生えている。二時半に烏帽子岳と烏帽子小屋の分岐に出た。そこには高山植物が咲き乱れている。イワウメ、ツガザクラ、ゴゼンタチバナ、ヨツバシオガマ。荷物は卒業生の伊藤さんの案内人、飯田君に小屋まで運んでもらって、我々は丸山君の案内で烏帽子岳に向かう。山高帽のような烏帽子岩が、のつきり突っ立っている。槍ヶ岳と間違えそうだ。悪いこととは知りながらも、高山植物を十数種採ってしまった。

烏帽子岩の直下まで来ると、ピッケルや水筒は置いていく。花崗岩の裂け目に岩乗りになるが、我々は軽業師ではないから深い谷を見ると恐ろしくてならない。足に、手に、目に、すべてぎゅつと力いっぱいになって登り、ついに頂上に出た。周囲の諸山は一望の下だった。南面に数峰離れて、平らな岩が出ている。そこに寝そべり思う存分高山の気分を味わった。空模様が怪しくなつて戻った。小屋に四時五十分に着く。

小屋の前には雪解け水が溜まっていた。向かいには薬師岳、赤牛岳の高峰が重なっている。左には水晶岳。昨日会った二人はキャンプをしている。小屋には同じ埼玉の浦和町の人とか、朝日新聞社員、中学生くらいの子供連れもいた。夕方六時頃に霧が出て夕陽は見られなくなつた。その後キャンプの二人が先生を呼んで、ご馳走ができたと言つて来た。先生は僕らのために、缶詰の豆とコンビーフを鍋に持ってきてくれた。夕食は六時半、正座して食べた。わらびの

漬物に、わらびの味噌汁、海老の佃煮、さっきの豆とコンビーフ。芯のある飯だがうまい。案内人の話を聞きながら食つた。七時に人夫が布団を敷く。
(五年 小川広吉)

七月二十八日 烏帽子小屋く蓮華岳

夜半の雨は朝になつたら晴れた。霧の中から太陽の光が小屋に差し込む。六時二十分、強力を先頭に一列で進む。赤い牛が寝ているような赤牛岳は気に入つた山だ。今日はゆつくりだ。三ッ岳の中腹で休む。そこを越えたところで雷鳥に出会う。石の上で日向ぼっこをしているようにうずくまり、周りに四、五羽の子供がピョンピョン跳ねている。写真を撮ろうとしても逃げる。ついに丸山君(強力)は雷鳥の子を捕まえようとして競走を始めた。五分後、彼は雷鳥をつかんで持ってきた。これで久保先生は手帳に写生ができるし、他の者は写真に撮れた。

野口五郎岳に着いたのは十時。ここで握り飯を食べる。遙か下の五郎池に日本アルプスの倒影が映るなどは、どんな形容詞で伝えたいのだろう。極楽と地獄が一緒にきたようだ。腹いっぱいになって出かける。遠く見えた水晶岳も手近になる。岩の尾根をかじりついて登つた先に高山植物が一面に咲いていた。久保先生と市川君は、植物の缶詰を作つた。

水晶岳は尾根から分かれて三、四町のところにある。荷物を置いて水晶を取りに行く。残念ながら水晶はあまりよいのが見つからなかった。話によるとこの山は国有林ではないそうだ。引き返して残

りの握りも食べる。伊藤君は水晶岳には行かずに先に出かけた。これで半分の行程は終わったが、一時にここを出発することになって、今日の規制は二十分ごとに休めるのは十分となった。強力もこれが本日の登山だと賛成した。

鷺羽岳の麓まで来ると、霧がもくもくと湧いてきた。そのときに、霧に我々の影が映った。「御光だ」と誰もが叫ぶ。回りも紅で囲まれている。昔如来が現れたと言うのも、不思議ではないと思う。この山を登って下れば、前にかすかに小屋が見えてくる。伊藤君が途中でまで迎えに来てくれた。腹も減ってほうほうの体で小屋に駆け込んだ。

(水島重郎)

七月二十九日 三俣蓮華岳く槍ヶ岳肩の小屋

起きたときには大部分の同宿者は前の小川で顔を洗っていた。夜明け前に雨でも降ったようで、這松はしつとりと濡れている。上方の山は朝霧に包まれている。六時二十分に出発したときには、ほとんど最後になった。今日もまたアルプスの一角を征服しに行く。

大付君、小川君、市川君と、足に覚えのある者は、案内者などそちのけで先頭に立って歩き出す。三俣蓮華岳の中腹で、

「あそこが東京の蛙と、大阪の蛙が出会ったところですよ」

と案内者が説明した。なるほど小学校の教科書を思い出し、妙な形の二つの岩が、峰の上で顔を合わせていた。久保先生は鉛筆一本でそれを描き、伊藤、石川氏はコダックで撮影している。東西南北すべてに山が連なっている。

蓮華岳を走破して、双六岳を越えて、双六池の湖畔で休憩した。付近は百花繚乱のお花畑。先年秩父宮殿下がアルプス登山の際の宿泊所が、そのまま残されている。ここで昼食をして、伊藤氏ご持参のカルピスを一本平らげた。

再び出発し目の前の峰の頂上に立つと、同宿の朝日社員の一行為が休息していた。私たちが彼等に付いていく。ここから先は西鎌尾根を経て、槍の肩に到着できるわけだ。左方にある赤褐色の赤岳や硫黄岳、遠くには牛首岳や大天井岳が続く。やがて峰への向きが変わって、足元に岩が続くようになると、すでに槍ヶ岳に足を踏み入れたことになった。案内人がいう。

「先年、秩父宮様がおいでになられてから、この道はこんなに歩きやすくなったのですよ」

それでも砂利で滑りやすく命がけだった。この辺りで東京のテント隊二名を追い越した。先生は遅れ、生徒は早い。私は案内人の後を「エッサ、エッサ」と追っていく。この岩稜は恐らく四十五度くらいの傾斜はあるだろうか。

午後四時十分、太陽が西に傾く頃ついに肩の小屋に到着した。ここは二階建てで売店もあるような洒落た小屋だった。お客も男女とも大勢いる。久しぶりに我が家に着いたような気持ちで夜はぐっすり眠れた。

(四年 浅海弥一郎)

七月三十日 槍ヶ岳く上高地

山の朝は早い。三時だというのに雑談が始まる。やがて朝食の支

度が始まると、煙は容赦なく部屋に立ち込める。二階建ての小屋にはさらに煙のご馳走が充滿する。

御来光だと皆戸外に繰り出した。晴天。絶好の青空に防寒着をおつて小屋の前に陣取る。穂高の垂壁、笠ヶ岳、東鎌の大山井岳、遠くに白山。徳本や上高地や松本平は雲海の下にある。太陽は朝焼けの雲間から現れた。

朝食は温かい味噌汁を何倍も流し込んだ。そして槍の頂上に行く。荷物をすべて置いて防寒着だけ身に着ける。ちよつと西鎌を覗き込んだ後は、安山岩の大石柱に攀じ登る。凍える手で体をしつかり支え、小石が落ちる度にはらはらする。一度転がり始めたら止まらない急傾斜。下る人に道を譲りながら手間取る。

それもつかの間、いよいよ三一〇八の三角点。奥の北の端に祠がある。僕らは眺望を楽しんだ。強力の丸山が一々指差して説明してくれた。白馬連峰、五竜、針ノ木、蓮華。今日までに征服した烏帽子、水晶、西鎌尾根。小槍が北側に張り付いている。さらに剣から立山連山、さらに薬師から三俣蓮華。北鎌の險路を下れば高瀬の溪谷、さらに下れば濁へ行ける。小槍には未練があるが、小屋に戻る。

大半の縦走を終えて、六時半に槍肩小屋に別れて山を下る。岩のざらざら、ゴロゴロの危険な道が殺生小屋まで続いている。大槍の小屋からは雪溪となる。第一、第二の雪溪は無事に通過。中にはゴザを敷いて滑って降りた者もいた。第三の雪溪は槍沢雪溪といって、十町もあり、相当急傾斜になっている。大付君は上手に下る。

橋本先生は二十日も滑ってしまった。久保先生は滑り出してからピッケルも捨てて、頭が下になったが五十日下でようやく止まった。案内人が「危なかった」とつぶやく。その案内人は誰かの杖を故意に滑らして、人に当たりそうになって本人も青ざめていた。小川君はピッケルを後ろに突いて滑り出した。永島君はカンジキを付ける。私は静かに行つたが、二、三回滑つた。どうにか雪溪が終つたところで、濡れたシャツとズボンを脱いで日光浴をした。

それから先は、道も広く木立があつて歩きやすい。二ノ俣で昼食にする。食事をしながらこの山行の原稿を少し書いた。槍見河原で槍を見て、これが最後の別れかと思うと寂しくもあつた。

「槍よ槍、また来るときを待っていてくれ」

十一時半に牧場に出た。一方が山で一方が川に遮られて、親馬と子馬が仲睦まじく遊んでいる。ここで一生を送りたいような気がするが、冬の寒さを考えると嫌になる。徳本峠への分かれ道まで来て、道を右に細い道に入り明神池に着く。池の前には穂高神社があり、岩魚が沢山泳いでいる。先年秩父宮様が穂高、槍を縦走されたとき、この池に糸を垂れたそう。足が疲れたのに案内人はどんどん行ってしまう。後ろの方では、

「何処へ連れて行く気か」

と怒鳴っている。上高地へ近づくにつれて、木の合間にテントが見えてくる。新聞社主催のキャンピングだ。そのうち河童橋に着いて、清水屋に四時に着いた。予定では大正池まで行くことになっていたが、もう歩けない。曇天になり風も吹いてきた。焼岳にも登れ

そうにない。

今日は初めての旅館宿泊で、田舎者が東京に行ったように、見るものが皆珍しい。障子、床の間、座布団、畳、電燈、浴場が珍しい。風呂に入ったのは六日振りだった。日焼けで体が痛い。お膳での夕食も初めて。梓川の清流の向こうは学生のキャンプが多いようだ。それでも雨が降ってきたようで、雨具を被りながら旅館に逃げ込んできた。テントでは雨が一番恐ろしいらしい。

(四年 大付幸定 五年 市川宗貞)

七月三十一日 上高地く徳本峠く下山

北アルプスの縦走の疲れが出たのか、体中がいやに重苦しい。ふっくらした布団からなかなか抜け出せない。今日は雨だ。がっかりしたが今まで降らずに、今日だけの雨は幸いだった。焼岳は辞めにして大正池だけいく。六時頃、雨具に身支度して大正年間に生まれた大正池に出た。雨の中の池は、写真のように美しくはなく、古戦場のような白けた木立が空を指しているだけにしか見えない。いよいよ引き返して徳本を越える。

河童橋から五千尺旅館を通って、徳本に差し掛かる手前で休憩した。強力は今日は一回しか休まずに、峠まで登り詰める。これには少なからず参った。頂上の茶屋で弁当を食う。強力は一つにしろとは言ったが、腹が減って握りを二つ食った。雨では展望もない。穂高の頂上が霞んで見えただけだった。

ここからは九十九折りの下りが待っていた。やがて岩魚止へ出て、

そこからは相当な木材が切り出され、積んである。トロッコのレールが敷かれていて、これを辿っていく。ゴザの雫が襟元に落ちて、いやに冷たいのが気になる。その先はもう夢中で、話をする元気もなく、ようやくの思いで午後四時に島々に着く。こうして六日間の山生活も終わって、今は車中の人になった。山の生活は暑中休暇の一事ではあったが、人生哲学とでも言おうか、高山の偉大なる教えを学んだような気がする。汽車の音を聞きながら、翌朝午前七時に川越に着いた。

「槍で別れた梓と高瀬 巡り合うのが押野崎」 安曇節

(注・槍ヶ岳北面の水源は天上沢から高瀬川へと流れ、南面の水源は槍沢から梓川へと流れ、安曇野市穂高の押野崎で合流し犀川となる。下流は千曲川から信濃川へ流れ込む)

(四年 伊藤省蔵)「学友会会報」二十四号



イワウメ K.O

一九二九年（昭和四年）

旧制中学の夏休みに、千葉の岩井海岸での水泳教練に参加した者は、水泳部。続いて行われた登山に参加した者は登山部といわれた。水泳教練では、旧制浦和中学が赤ふんどしを着用していたため、川越中学は対抗して白いふんどしで、遠泳教練を行っていたそうである。大正から昭和にかけての卒業アルバムには、水泳部と登山部は集合写真が並べて掲載されている。

浅海弥一郎（一九三〇年卒）は、中学四年、五年と二年続けて、水泳にも登山にも参加している。

「体の丈夫なものは、できるだけ参加するようというようなことでした。同級生は百人ほどでしたが、その半数は水泳や登山に参加していました。この年の富士登山にも、大勢で登りましたよ」と遠い過去の思い出を話す。

山行記録 富士山

七月二十四日 川越く吉田

川中登山部四十二名、暑中休暇の第一日目を日本一の富士山征服の名譽を勝ち取らんと、金剛杖を持って集結する。新田町から西武線を乗り継いで、立川で汽車に乗り換える。猿橋で下車。断崖と断

崖の間に、支柱なしで掛けられた黒木造りの橋。その奇橋を鑑賞してここで昼食。そこから自動車で吉田の旅館へ午後二時四十五分到着。休憩の後に富士五湖へ車に向かう。湖畔には富士を背にして梨本宮の別荘もあった。船で遊覧する。旅館に戻った後には、明日の食料のパン、力餅を買い込み、就寝する。（浅海弥一郎）

七月二十五日 富士山七合目

午前三時半過ぎ、月明かりの中で出発の用意をする。宿を出たのは四時半。夏の朝の薄霧の中を進む。富士には一点の曇りもない。浅間神社に詣で、松林の一本道を進む。馬返し茶屋から振り返れば、河口湖が遥か下に光っている。

「六根清浄、懺悔懺悔」

という白装束の行者も脚絆、草鞋、金剛杖で強力の後から一団となって登っていく。二合、三合と進んでいけば汗が流れてくるが、一休みすれば冷風にひんやりとする。五合に十一時頃に着き、昼食にする。仰げば紺碧の中に絶頂が見えるが、まだまだ高い。雪渓も近くなった。ちよつと歩いては休む。道は一列で進む程度の幅になると六合に着く。殺風景な溶岩は赤く、小砂利は踏みつけると崩れる。七合目の小屋には赤い旗が翻っている。

ついに杖を持つ手が冷たくなった。今日中に頂上まで進むつもりだったのだが、一行の疲労で七合目の小屋に泊まることにした。午後三時半、脚絆を解く。ずっと下の方から白い線が、うねうねと続いて来ている。登山者たちが、引きも切らずに登ってくる様子だ。

我々の小屋の前をほとんど通り過ぎていく。異常な人数だと思える。小屋の中で不味い夕食を食べて、薄い布団に横になる。夜になって月明かりで薄明るい。夜通し登る登山者の鈴の音は、清い音として響いてくる。

(宇田川明正)

七月二十六日 富士山頂上

寝られぬまま小屋の外に出てみると、真冬のような冷たい風が毛糸のジャケットを通してくる。月明かりとキラキラと光る星。頂上が墨絵のように見えている。午前二時半だというのに、我々は登り始めた。間もなく手探りで鎖をつかんで、急坂を登るようになってきた。辺りが薄明るくなつてくると登山者も増えてきた。

遙か下に雲が明るく見えてきた。我々は八合の小屋で御来光を拝むことにした。眼下は壮大な雲海となっている。苦しうに登ってくる後続を見ると、我々も同じように苦しんできたのかと愉快になった。

「校歌をやろう」

「賛成、賛成」

橋本先生の音頭で、四十数名は声の限り武蔵野の歌を歌った。薄桃色だった雲は、黄金色に染まってきた。誰もが偉大な自然の誕生を待ちわびる。

「おお、御来光だ」

雲間に輝かしい一点が現れたかと思うと、ぐんぐん大きくなって、ほんの数秒間の間に雲を離れて勢いよく太陽は昇った。

「我らに、躍動するその生命を与えよ」

思わず驚嘆の叫びを挙げる。我々はまた杖を突き始めた。頂上はすぐそこに見えるのだが、しかし遠い。やがて頂上の鳥居が見えてきた。そこをくぐると、やっと辿り着いた山頂。浅間神社の拝殿は大勢の人で賑わっている。

石室で甘酒やぼた餅で腹を満たす。ゴザの上を草鞋で構わず入っていくので、変に思つて足を返してみると、土は少しも着いていない。土産物を買った後、最高点の剣ヶ峰へ登る。大きな噴火口の端では、一心に御経を読んでいる二、三人がいる。その頃には雲が湧いてきて、下界の様子は見えなくなった。惜しいようだがすぐに下山にかかる。

案内人が岩のゴロゴロしたところで、皆を休ませた。腰の辺りが妙に暖かい。溶岩で暖まっている岩だった。砂漠の中のオアシスカ。「富士山の雪が一番早く溶けるのは、ここです」

と案内人が話す。御殿場の下り口で案内人と別れた。「お大事に」の声を後に、どんどん下る。登っている人に会うと可愛そうに思う。右に雪渓が見えたところで、頬張る。富士の万年雪を食べたということだ。

砂走りに入ると、ガスで一先が見えなくなった。下つても下つても砂ばかり。四方一面に擦り切れた草鞋が捨ててある。懸命に駆け下つて四時間ほどで太郎坊へ出た。そこから馬車で御殿場に行く。日本人として、富士山へ登ったという安心感で満足する。

一九三〇年（昭和五年）

白馬大雪溪からの白馬岳登頂……、しかし下山は黒部川の祖母谷温泉から樺平へ。さらに宇奈月まで歩き通した合宿。まるで冠松次郎の黒部峡谷縦断のような山行だった。日本電気が敷設したトロッコ列車は、今では黒部峡谷鉄道になったが、当時は作業用の軌道。黒部川の下流から電源開発が進められていた時代の山行である。

山行記録 白馬岳登山記

参加 十三名（久保、桜井両先生。卒業生一人、生徒十人）

旅費 十七円十八銭

七月二十三日 川越→池袋→飯田町

七月二十四日 松本→大町→四谷→白馬尻

七月二十五日 白馬尻→白馬大雪溪→白馬岳頂上

七月二十六日 白馬岳山頂→杓子鑪ヶ岳→祖母谷→猿飛→鐘釣温泉

七月二十七日 鐘釣→新鐘釣→宇奈月→三日市→直江津→長野

七月二十八日 大宮→川越

七月二十四日 川越→白馬尻

アルプス連峰を前に、快く電車で揺られることしばらく「大町」

に着く。案内者が駅に迎えに来ていた。いかにも快活そうな人だ。ここで少し休憩し弁当その他の準備を整え、自動車二台に分乗。折からやってきた小雨の中を全速力で四谷（注・白馬）へと進んだ。

雨は間もなく止んだが相変わらず危険な空模様だ。人跡稀な高原を北へ北へと進み、急なカーブを幾つか曲がり、次第に左手に崖が迫って木立の中へ入る。

「湖水だ」

反射的に左方へ目を転ずる。蒼然たる湖面がちらりと目に入ってすぐ視界から消えた。カーブの多い険路を行くことしばらくしてまた見えた。今のは「木崎湖」だろう。この辺から広くなった湖水は、北へ長く延びている。鏡のように穏やかな水面には小波さえ立たず、濃い碧玉の面には鬱蒼たる対岸の樹木を浮かべている。しばらくするとまた湖水だ。

地図を見たら「中網湖」だ。崖を走り「青木湖」も後にして、間もなく平坦な地に出た。もう四谷だろう。間もなく左方に街道をそれた。「白馬登山路」の標識がちらつと見えた。もう道はかなり険しくカーブも多い。所々で荷馬車にあった。

やがて「二俣」に着いた。小屋が二、三軒ある。ここで車を捨てて。意外にも太陽がでた。暑いほどじりじり照り付けていた。目を転ずればすぐ前方に白馬連峰の雄姿。雲の間に白雪が谷を彩っている。我々はこの山を征服するのだ。こみ上げる歓喜の情、燃え立つ意気。茶屋のベンチで案内者から受け取った、大きな握り飯にかぶりついた。うまくない。絵葉書を買って盛んにスタンプを押した。

家や友へ手紙を出す者もある。僕も、

「天気がよい、元気で登山の途につく」

と書いた。時に正午。一同支度を整えて登山の一步を踏みしめた。

案内者らしい人が一人下りてきた。下り足は速い。すぐすれ違つて見えなくなつた。少し遅れて女学生が下りてきた。元気なもので、もう休もうかといったが、案内者が水のところまでと言つたので、そのまま歩き続けた。道は羊腸のごとくうねりだした。幅も狭くぬかつてきた。

「こちらは昨日大夕立がありましただよ。一時は随分ひどうがした」

快活な案内者が後ろの方で口をきいた。ひどい、もう泥海のようだ。所々にある石や横木を頼りに、滑りそうな足を踏みしめながら進んだ。

「さあ、休もう」

しばらく休憩。もう一時間近く歩いたろう。大分喉が渴いた。

「この水は飲めますよ」

案内者が真つ先に小川の水を飲んだ。リュックサックはベンチの上に置いて、コップで二、三杯飲む。

道が急になつた。電光形の道が続くと、やがて山の峰らしいところへ出る「猿倉」だろう。小屋と二、三人の登山者が見えた。そこを通り越すとキャンプ指定地と標柱が立っていた。水の音が近づいてくると「長走沢」だ。先刻から危ないと思つていたらついに雨がぱらついてきた。それとばかりにゴザを取つて身に着けた。雨は益々激しくなつてきた。幾度か転びながら急いだ。雨避けになる木は一

本もない。仕方なく急ぐ。

「早くこーい」

何時の間にか自分一人になつてしまった。幾度か止まつて下の方へ、

「早くこーい」

と怒鳴つてやつた。少し止まっていると桜井先生が見えてきた。急に前が開けて川に出た。一面の大石だ。雨でもうかなり焦つていたので、危ない橋も夢中で渡つた。針金に危うく足を取られるところだった。石が転がつているばかりで、どつちへ行つてよいか見当もつかない。気が付くと広い標柱に「白馬尻」と書いてある。

トタン屋根の小さな小屋で、下にテントが一つあつた。入り口に入つてほつとした。中がごつた返している。多分この雨に追い込まれたのだろう。自分も濡れねずみ。ほつとしたら寒くなつてきた。手もつけられないほど濡れたゲートルや足袋を取つてとにかく座敷へ上がった。

小屋の人がきて釘を打つ。そこへ荷物を吊るす。シャツを着替える。炭火を土間におこす。火の上へ濡れたものを吊るす。杖を片付ける。そんなことが終わつてようやく小屋の中が落ち着いてきた。夕食は先刻のテントの中で食べるのだそうで、二回目はこちらの番になつた。ライスカレーはちよつと気が利いている。白樺のベンチに腰を下ろして溪の樹海を見ながら食事をするのも、全く山でなくては味わえない。夕飯を食べれば寝るばかりとなつた。

七月二十五日 白馬尻より白馬頂上小屋へ

ひやりとした寒さに目を開いた。まだ寝ている者もあったがやがて皆起きた。雨はまだ降っている。心配して案内者に聞いたら、「大丈夫ががす」

と平気な顔。山の朝食は不味いと聞いたが、今朝もかなりうまくいった。但し塩辛い味噌汁には閉口した。水もゴミが浮いていて飲めなかった。あわただしい出発だ。

小屋のすぐ裏から、雑木の茂みの中の細道を辿って黙々と進む。次第に水の音が高くなってくる。しばらくで昨日の川上らしい所이었다。谷間に出了たので木立は無く、冷たい風は容赦なく雨を吹き付ける。前面は全くの霧の海。そこが「大雪溪」なのだ。白雪は溪谷を埋め、その末は霧に及んで海面のごとく小波打って続いている。すぐ前に雪溪の末端が口を開いている。

足がもう冷たくなった。雪の上を滑りそうな足を踏みしめ登った。亀裂を避けて左方を進んだ。雨は止んだが霧は四方を包んで全く視界を遮っている。傾斜が増して危険になってきたので、左側の岩の上でカンジキを着けた。小屋で一緒になった女学生の連中が滑っている。

カンジキを付けたものまで滑っている。こちらも危ないので力を入れてカンジキを氷に踏みつけ、杖を頼りに一歩一歩登った。先に行った見目らが、行き悩んでいる近くまでいくと、あっという間に二、三人滑った。腹ばいになってやっと止まったようだ。急いで近

くへ行くことも出来ず、見ているとまた滑った。

「左の方へ出る」

と怒鳴ってやった。やっと岩に辿り着いたようだ。他人事ながらほっとした。あのまま滑って亀裂に入れば、人間の氷漬けになってしまう。カンジキをつけないのだから無理はない。皆休んでその者もカンジキを着けた。

約二十町の大雪溪を、カンジキと杖を頼りに登って「ネブカピラ」に着く。ここで一休みしてカンジキを取った。さらに電光形の道が続く。高山植物の一带が続き、その後這松が斑に地面を覆っている。「小雪溪は何処だろう?」

案内者が首を傾け始めた。しばらくで先頭に追いつき、小雪溪らしいところに出た。案内者の言うがままに右の雪の無い方を細い流れに沿って登った。そこが小雪溪のところになる。いつの間にかやら辺りは全くの高山植物帯、お花畑だ。先ず黄色いのが目に付く。「御山^{みやま}さんばい」と言うのだそうだ。お花畑は正に春だ。

約一時間登っていくと、県営小屋の前に出た。あと二、三町で頂上小屋だと言う。幾度も腰を下ろしてようやく辿り着いたのは十一時。小屋に駆け込んでほっとした。温かい昼食に蘇生の思いがした。ここで手紙を書いて出した。小屋は幾棟もあった。

霧が深い頂上までは行くことにして、杖だけ持って登った。所々に這松と高山植物があるだけで、崩壊した岩石ばかりゴロゴロしている。「すぐ」と言ったが、なかなかである。やっと頂上らしいところに着いた。三角点があった。確かに頂上だ。しかし何も見えな

い。寒くてたまらないので、見目と二人で先に引き返した。半日を小屋の中で、案内者の経験談、それに明日下る黒部の話に花を咲かせた。

七月二十六日 白馬岳頂上から白馬鑪ヶ岳鐘釣温泉

午前五時猛烈な寒さのため、山頂の夢は早くも破られた。密閉された小屋の中に大勢寝たためか、頭がづきづき痛んで実に不愉快だ。冷え切った濡れ足袋を履いて洗面に行く。

六時十分、せっかくの期待を裏切られて少なからず落胆した僕ら一行は、それでも望みを抱いて小屋を出発した。今日は杓子、鑪ヶ岳を経て黒部の秘境を踏破するのだ。僕らの意気は当たるべからざるものがある。強力を先頭にして昨日登った道を引き返す。黒部小屋の下で右にそれた。間もなく雄雌の雷鳥を見つけた。道はこの辺から山の背を走っている。しかし霧は相変わらず深く立ちこめ、その上雨さえ降ってくる。

周囲は一带に赤褐色をした径五、六寸大の石で、杖の金具がこれに当たるたび毎に「カチーン」と高く響いて静寂を破る。約四十分も歩いたかと思われる頃、また雷鳥に出会った。今度は親鳥一羽にヒナ七羽。母親に連れられたヒナの姿は、どう見てもヒヨコそっくりだ。早々にカメラに納める。やがて「杓子岳」にかかった。電光形の坂道をあえぎ登っていくと、間もなく頂上に着いた。但し眺望は全然利かない。

小憩の後出発し、岩石の間を上下すること約三十分にして「鑪ヶ

岳」に着いた。道は頂上より五十坪下の山腹にあるのだ。そこでリュックを下ろし、有志の者のみ頂上を極めることにした。頂上から戻るとき、霧が次第に晴れて右手の山が僅かながらも見えてきた。「この分では……」と大いに喜んでみると、また濃霧がやってきた。しばらくして一寸した山の頂近くにきた。

ここで白馬尻小屋以来、常に僕らと前後してきた二人連れの女の人と別れた。彼女たちはこれから白馬（鑪）温泉へ行くのだ。僕らもここで白馬山脈に別れを告げ「中背」道を通って、第二の目的地黒部峡谷へと向かうのである。

道は下り一方なので、足は自然に進む。やがて草原に出た。連日の雨で土も草もすっかり湿っているため、実によく滑る。お花畑を過ぎると雪溪の麓に出た。強力の話によれば、これが最後の雪溪で、ここから祖母谷まで三里の間は水が全く無いとのこと。昨日以来雪溪には度々出会っていたので別段珍しくは感じないが「これが最後だ」と言われると、やはり何となく懐かしい。

下るに従って道は悪くなったが、雨も止み霧も晴れてきた。見れば左手には中ノ谷が深く入り込み、その向こう側の山は一带に樹林で被われ真っ白な岩壁を露出している。一時間で中背山を過ぎる頃にはすっかり腹が減り、元気がなくなってしまう。早速昼食を取る。十一時。十一時半に出発。

さらに下っていくと、梯子渡りの難所も現れてきた。強力に尋ねれば、この道は四年前に開いて以来未だ一度も修繕していないと言う（注・現在は廃道）。一時頃、右手頂の丸い大岩石の坊主岩が見

えた。非常に喉が渴いてきたが、水筒の水は昼食のときに飲み干してしまつて、一滴も残っていない。足の疲労も増してきた。

「祖母谷までどのくらいありますか」

と強力に聞いても、ただ笑つてゐるばかりで返事をしてくれない。「まあ、言わんでおきましょう。皆の衆ががっかりするによつて」

と心細い。猛烈な渴きと疲労に悩まされながら下ると、何時の間にか先に行つた強力が、水を持つて迎えに来てくれた。「有難い。我を忘れて水筒に飛びつき、続けざまに四、五杯飲む。実にうまい。こんなにもうまい水を飲んだのは生まれて初めてだ。そこからしっかりした足取りで下り、二時祖母谷へ着いた。

おお、何という美しさだ。兩岸には真つ白な花崗岩が滑らかな肌を現し、その間を青綠色に澄み切つた水が、矢のように流れている。黒部を暗い陰深な谷と信じていた僕らにとつては、それは全く予想外な光景であつた。

ここで最初の吊り橋を渡つた。数本の針金に二尺間隔で棒を結びつけたもので、縄梯子を張つただけのようなものだ。数分して温泉跡に着いた。ここは明治四十四年の出水までは温泉宿もあつたそうだが、今は荒れ果てて小屋が二棟と野風呂があるに過ぎない。前の川に入つて思ふ存分水を飲む。熱い番茶をすすり、焼き印を押して二時半に出発した。

下るに従つて谷は深くなり、両側の断崖はその高度を増していく。吊り橋を渡り、梯子を下つて難行を続けること一時間で、樺平吊り橋く祖母谷、宇奈月間で第一の難所に着いた。橋の長さは四、五十

間もあろうか。その遙か十数丈の絶壁の下で、黒部の激流が雪波を蹴り立てている様は実にものすごい。勇気を出して一人一人渡り始める。祖母谷以来すでに三つ四つの吊り橋に出会つたが、こんな恐ろしいのは初めてだ。皆夢中で渡つてしまつて、

本流になると「猿飛びの奇岩」に着いた。ここで強力が足を止めて、

「さあ、皆の衆、これが猿飛びががす。よく見ておきなはれ」

覗きこむと、十間もあつた川幅が、いきなり二間ほどに縮められ、清流は渦を巻いてこの間に吸い込まれていく。

「どうががす、皆の衆。畜生の猿でさえやる、あの岩を跳んでみては」臆病な僕らは驚かされた。

だらだら坂を下つていくと、立山道との分岐に出た。目の前に大きな吊り橋が見える。小黒部の吊り橋だ。これは傾いていたので随分危険だつた。さらに下り対岸の絶壁を眺めると、日本電力会社の高圧線に出会つた。道はこの辺りから断崖の中段を走っている。この道はダイナマイトを爆破させて作つたそうだが、随分危険なところだ。十分歩くと道下の窪地に鉄道工用の小屋があり、そこから道に沿つてレールが敷いてあつた。強力が、

「日電の専用軌道ががす」

と教えてくれた。やがて「ウド谷」に着いた。鉄橋を渡つて休憩する。皆がゲートルを外して足の疲れを抜く。

「さあ皆の衆、後四、五町で鐘釣ががすぞ。元気を出して歩きなはれ」かなり歩いた後、道の屈曲点になると、目の前に数軒の人家が見

えた。強力が、

「あれですが。あれが鐘釣です」

ようやく鐘釣へ来たのだ。そう思うと今までの疲れも何処へやら消えてしまった。誰かが、

「何だい、馬鹿にあっけないじゃないか」

と云って笑わせた。ここには相当な宿屋もあって、小屋はあれど人はあらずという案内書、これは五、六年前のものだが、を読んできた僕らを面食らわせた。

直ちに指定された宿屋へ行く。六時二十分。二階に案内され旅装を解いたときには、蘇った気がした。間もなく夕立の豪雨で、小降りになるのを待つて風呂に行く。恐ろしく長い電光形の道を下つて、黒部川の河原に出ると天然の一大浴槽があり、温泉が沸きだしていた。思う存分手足を伸ばし、雨に霞む夕景色を眺めていた。宿屋に戻つて夕食と登山話に花を咲かせる。九時に布団に入った。

(五年 吉沢源一郎)

七月二十七日 鐘釣温泉より故郷へ

午前五時、平和な鐘釣温泉の一夜は明けた。澄み切つた青空だ。それでも上流地方には昨夜かなり雨が降つたとみえ、あれほど澄んでいた黒部川の水も、今朝は黄褐色に濁つている。水量も随分増したようだ。

六時に出発した。気が付いてみれば、杖には「猿飛び」「黒部鐘釣温泉」の焼き印が押してある。対岸の絶壁が相変わらず凄。

西鐘釣山の東麓を迂回すると道は急に下つて、新鐘釣温泉の対岸に出た。長い吊り橋がある。ところが中ほどまで渡つたところ破損して、戻つてきた。仕方なく先程の道を登り返して、線路沿いの鉄橋を渡る。対岸の強大な東鐘釣山と、絶壁の中段に建てられた新鐘釣の温泉の絶景は、図画のようだ。右岸に着くと今度は東鐘釣山の西麓を迂回して、対岸の「似合谷」を眺めながら進む。線路に沿つて十町も下ると「猫又谷」の堰堤に着いた。黒部川の水はここで二本の大鉄管に吸い込まれ、十町ほど川下の猫又発電所に送られる。

しばらく行くと先頭の者が、

「汽車だ、汽車だ」

と叫ぶ。あわてて線路から飛び出すと、玩具のような機関車がトロッコ客車を三両引つ張つている。それは午前五時宇奈月発、午後五時宇奈月着。一日一往復というのだから、随分のんびりだ。

猫又からサンナビキ谷の落ち口までが「七谷越え」の仙境で、川が幾重となく屈曲している。一足ごとに変わる川景色を眺めながら歩いていると、やがてサンナビキ谷の正面にきた。

ここで休憩するが、七、八人の人夫が登つてきた。搜索隊だ。聞くと数日前に黒部峡谷を探検に来た京大生が、鐘釣以来消息を絶つているという。

八時半頃、雄大な黒薙川の鉄橋を渡つて、黒薙温泉へ出る。今朝はあれほど暗れていた空も、大分怪しくなつてきたので歩を速める。「嘉々堂」「野坊瀬」「尾沼」の谷を対岸に見ながら進み、九時半頃「柳

河原」の発電所に着いた。トンネル番号が少なくなって、さらに三十分で「宇奈月」の鉄橋に出た。宇奈月の町はすぐ目の前に見える。ようやく帰りの汽車に乗れる。「学友会会報」二十六号

取材寄稿 鐘釣温泉へ長い下山道

田中 進（一九三二年卒）

旧制川越中学四年（一九三〇年）のときの登山が、白馬岳。五年（一九三二年）のときが槍ヶ岳だった。

大正三年生まれの私たちは、昭和二年の春、十二歳で川越中学一年生に入学した。夏休みにどういう催しものに参加するのかが部活だったような気がする。

中学二年、三年のときには、千葉の岩井海岸で行われた水泳教練に参加した。二週間近くの合宿で、アルパムにある集合写真を見ると、櫓やぐらに登って全員がふんどし姿で勇ましい。総勢で四十人も参加しただろうか。遠泳ができるということは軍事教練の一環で、青年には必要なことだった。

そして中学四年の夏、六月生まれの私は十六歳になっていた。山岳部の顧問に久保先生がおられて、喜多院山門前左手にある日枝神社の神主さんであったと思う。

「この夏は白馬岳に登るぞ」という計画を聞いて、それじゃ私も参加してみようかということ

になった。

今となっては登ったことだけしか覚えていない。何しろ今年で九十五歳だ。ただ雪溪で少し滑って、おっかない思いをしたことは、どうにか思い出す（翌年の登山のときだったのかもしれない）。ずっと下までつながっている雪溪の、もし滑って止まらなかつたしたら、私は雪の中に潜ってしまうのかもしれないという、そういう怖い思いがした。私にとっては初めての登山がこの白馬岳だったのだから。

こうして苦勞して、白馬岳の頂上に間違ひなく到達したのだろう。多分頂上付近の小屋で宿泊して、黒部川の鐘釣温泉に下山したことは確かなことだ。延々と眼下に見える黒部川の溪谷に向かって下り続けると、その温泉があった。ひなびた温泉に宿泊して、翌日は電源開発のトロッコ軌道に沿って、富山の滑川の方に降りて、戻った。

山岳部という部活が、どのように旧制中学のなかで存在していたのかは、正直あまり定かではない。しかし私は、その年の学校で出版した年次報告のようなものに、山岳部の活動として、この白馬岳登山のことを記録した。もはやその本は手元にもないのだが、しかし夏休みのこの唯一の催し物が、私の部活動だった。その記録を書くときに、実は前年の年次報告も参考にしたのだが、そこにはやはり久保先生が生徒を引率されて、どこかの登山を行っていた。部活は私の前の時代からも、延々と継続していたことだけは確かなことだ。

一九三一年（昭和六年）

北アルプスの焼岳が大噴火したのは一九一五年（大正四年）。梓川がせき止められて、そこに忽然と自然湖（大正池）が生まれた。当時の合宿では、その大正池の風景を見ようと、槍ヶ岳から下山した者は必ず立ち寄ったが、それは徳本峠への下山路から、往復四時間の回り道でもあった。上高地に最初にバスが乗り入れたのは昭和八年。しかし一雨降れば土砂崩れ。林道がすっかり完成するのは、戦後になってからである。

山行記録 燕岳から槍ヶ岳へ

参加 九名 久保、橋本、桜井三先生。卒業生一名。生徒五名。

旅費 金十七円二十五銭也

第一日（八月一日）川越～池袋～飯田町

第二日（八月二日）松本～有明～中房温泉

第三日（八月三日）中房温泉～燕岳～大天井岳～殺生小屋

第四日（八月四日）槍ヶ岳～一ノ俣～徳沢～上高地～大正池

第五日（八月五日）上高地～徳本峠～島々～松本～長野

第六日（八月六日）大宮～川越

八月三日 中房温泉～燕岳～槍ヶ岳殺生小屋

硝子戸を通して、薄い霧に包まれた山肌が見えている。北アルプスの懐、中房温泉に夜が明けた。谷川の水が小雨のような音を立てている。そうだ、今日はいよいよ燕岳を越えて一気に槍ヶ岳までゆくのだ。山の冷気と共に心は一層引き締まった。

朝飯を済ませて直ちに準備、昨日の雨で濡れた脚絆は、まだ半乾きのところもあるが、昨日ゆつくり温泉に浸って休んだのですっかり新しい力があふれた。五時二十分中房に別れを告げる。

宿のすぐ前から今日の第一行程、燕を目指して熊笹の生い茂った合戦沢林道を登ってゆく。天気にも恵まれ一行は元気で張り切っている。最初の道連れは穂高小学校の子供たち。燕岳一泊遠足の一群で、何やら盛んに喋りながら小さな体を身軽に動かしては、熊笹の中の近道に潜り込む。有明山は後に段々低くなってゆく。

やがて森林帯に入ると、樹の根、岩の陰には高山植物が珍しい花を咲かせている。橋本先生の実地教授に与るが、なかなか覚えられないものではない。ただ可憐な寂しいつつましい美の存在である。一気に急な坂を登り詰めると白樺が明るく並び立って、その林の中から絶え間なく鶯の音が聞こえてくる。われわれには珍しい鶯の谷渡りを聞きながら、ここで先ず休んだ。三人の先生の写真を誰かが撮った。倒木には苔が生え、白い霧がときどき押し寄せてくる。森林はよほど続いた頃、少し低くなったところに合戦小屋があった（六時二十分）。水桶に一寸触って音を立てると、小屋の中から小屋番

が飛び出してきた。

森林を抜け出ると灌木を交えた草原の尾根で、東は谷が深く、山腹にはシナノキンバイの黄色い花が静かな朝の光を受けて、繚乱と咲いている。お花畑の続いている傾斜を今まで汗を流したことも忘れて、恍惚として横切った。

やがて草原も過ぎるとそこに燕山荘がある。八時四十分、中房から三時間余りで着いた。小屋はまだ新しく、岩に囲まれて暖かそうである。「ヒュッテ・燕」とローマ字で書かれていて、設備も整っているらしい。小屋からは正面に燕岳の頂上が見えている。

頂上まではなお十町の尾根を行くのである。リュックサックを小屋の前に置いて、岩と白砂を踏んで、軽快に登っていく。北アルプスの連脈は大きな展開を見せているが、今日の目的槍ヶ岳は、ちょうど雲に隠れて見えなかった。

九時十五分、二七六三坪の燕の頂上の白い岩に腰を下ろした。不断に湧いては峰を包んで動く雲の壮观、高瀬の深い溪からは疾風が寒々と吹き上げてきた。アルプス征服の第一歩を燕に印して、壮快を叫ばざるを得なかった。

再び燕山荘の前に戻り一休みする。小屋から遠くない斜面にただ白く雪が残っている。厚い雪を掘って指の感覚が無くなるまで水筒に詰め込んだ。これから槍ヶ岳までの大圏コースにおける、唯一の飲料となることと思つて。

燕山荘から大天井への道は、這松、石楠花の生い茂った尾根のすぐ下を帯を連ねたように、延々と続くアルプス銀座の立派な道であ

る。燕山を後にし、野口五郎、黒岳、鷲羽岳、(三俣) 蓮華岳等の一連の眺望を欲しいままにしつつ、黒い岩を踏んで進む。五時に朝食を食べた腹は十時だというのに、ほとんど空になった。衆議一決、蛙岩で昼食。中房で作ってくれた饅頭型の大きなむすびは、外觀は粗末であったが、霧と一緒に頬張るとその味は決して悔むことはできなかった。どこからか蠅がきて缶詰の周りをうろろしている。しかし不思議にも蠅が汚く見えないのも山の功德だろう。

再びアルプス銀座を行く。ちょうど尾根の北側からは強い風が吹きつけ、南側からは真つ白な雲が押し寄せ、それが尾根を境にして沈黙の中に激しい衝突をしている。渦巻く雲は千切れ飛んでは押し寄せる下を行くのである。

正午、大天井への道と大槍小屋への分岐点にきた。我々のコース大天井への道は、目の前にひどい傾斜の岩山に稲妻型に登っている。ここを登るために我々は随分汗を出してしまった。大天井を越して岩と砂の急な坂を、杖を頼りに怪しげに下りきつたところに雪が深く残っていた。手を凍えさせ、雪を掘って渴きを癒やした。

それから幾つの峰を越えたことか。一峰越すと峰が連なり、黒い岩山を過ぎると灌木の原である。途中にわか雨に襲われたり、開けた高山植物のスロープを横切ったり、這松の崖の岩角を攀じ登ったりして、三時五分、西岳の小屋に着いた。かなり大きな小屋だった。霧雨が少し降っていた。ここで一休みして、ゆで小豆とサイダーを賞味した。あと槍までは一踏ん張りである。

ここからが喜作新道の険しい道で、こちらの山脈と槍ヶ岳の山脈を

つなく唯一の新道であると、強力が話してくれた。雪崩で哀れな最期を遂げた喜作に、新たに敬意を表さねばならない。

小屋の裏から止めないほどの下りである。稲妻型に深く下って、十日ばかり前に雨で崩れた跡は修理されている。この間大学生の遭難したという雪溪も、まだ残っている。その前で、案内から死亡捜索の話聞くのは、余り気持ちが良くなかった。

一旦下りきると再び槍への急な登りである。針葉樹林を抜けて灌木帯を過ぎると、また岩ばかりで足に硬く堪えてきた。左側に恐ろしく尖った前穂高、奥穂高が斑に雪溪を帯び、厳然と聳えている。岩角に腰を下ろして水筒の雪解け水を飲んでみると、右はさらに壯観である。目の前には大山脈がうねうねとして、夕日に映えた山ひだがはつきりと浮き出ている。今日の行程も手に取るように見える。西岳の小屋も小さな屋根をかすかに見せている。槍、北鎌、西鎌尾根の大きな影が、遠く西岳、大天井の山腹にそのまま黒く印している。今日の足跡に夕陽は赤い。そして今日の行程も終わろうとしている。和やかな気持ちにならざるを得ない。

アルプスの宵闇が来ようとする少し前、六時十分ついに殺生小屋に着いた。槍の鋭鋒をすぐ後ろに仰ぎ、槍沢を眼下に見下ろして立っている。

一行は続々と到着し今晚はここに一泊することに決まった。

この殺生小屋は大正十二年に我が山岳部が、秩父の宮様にお目にかかることの出来た懐かしい小屋である。小屋の主人が野山先生をまだ覚えていたことも言い知れぬ親しさを感じた。

早速脚絆をとり足袋を脱いで、熱くなった足を冷たい風に当てる。小屋の前の空き地に長いテーブルが横たえてあり、大勢で夕食を済ませる。温かい味噌汁と生煮えの飯だったが、体がすっかり暖まった。

次第に黒ずんでいく山の姿、冷気は肌を刺すほどになった。遠くの山は見えなくなり槍岳だけが真上に真黒に空に向かう。間もなく星が現れ始めた。

小屋の中は薄暗い。満員の登山客で実に騒々しい。ランタンにアセチレン・ランプが幾つか灯っているが、何れも怪しげな光である。簡単な二階建てができてはいるが、何処もぎつしり詰まっている。どのグループも明日の計算やら何やら勝手に喋っている。我々の一塊は割合におとなしく、先生方はときどき「気付け」というものを飲んでおられる。さあ、これで明日は下りさえすれば上高地の温泉に伸び伸びと寝られるのだ。足らない布団をかぶって静かになったのは八時頃だった。

雲の上、槍ヶ岳のユートピアへ眠りは安らかに八月三日を消していった。
(五年 浅野四郎)

八月四日 槍ヶ岳く上高地

槍ヶ岳殺生小屋 午前三時四五分

槍ヶ岳頂上 五時二十分

殺生小屋発 七時

一ノ俣小屋 九時五十分

上高地温泉着 午後二時四十分

午前三時半、殺生小屋の一夜も猛烈な寒気のため早くも破られた。四方は未だ暗いが、月や星は煌々と黎明の空に輝いている。防寒着に身を固め一行は槍ヶ岳の頂上を目指して出発した。

小屋から続いているゴツゴツした岩石の平坦面を足場として、登って行くのである。狭い小屋に寿司詰めにされたためか、激しい頭痛を感じる。三十分くらい登れば初めて小道となる。しかし一歩ごとに石が崩れ落ちて危険だ。何時の間にか薄明かりとなり、槍の輪郭もはっきり現れてきた。四時四十分、槍肩に到着。ここにも小屋がある。予定ではこの槍肩の小屋に泊まるはずであったのだが、天候に災いされて殺生の小屋に泊まったのである。僕らはその付近で御来光を待つことにした。下から吹き上げる寒風に身は凍えるが、五十人近くの人がいた。

やがて曙光は益々広がり、四方の山々、東の空は白ばんできた。一瞬一瞬息に金光射出し、見る見る真紅の一端いずる。真紅の一端は出現と見る間もなく、一片の弧となり金光射出してまばゆく早や見ることは能わず。

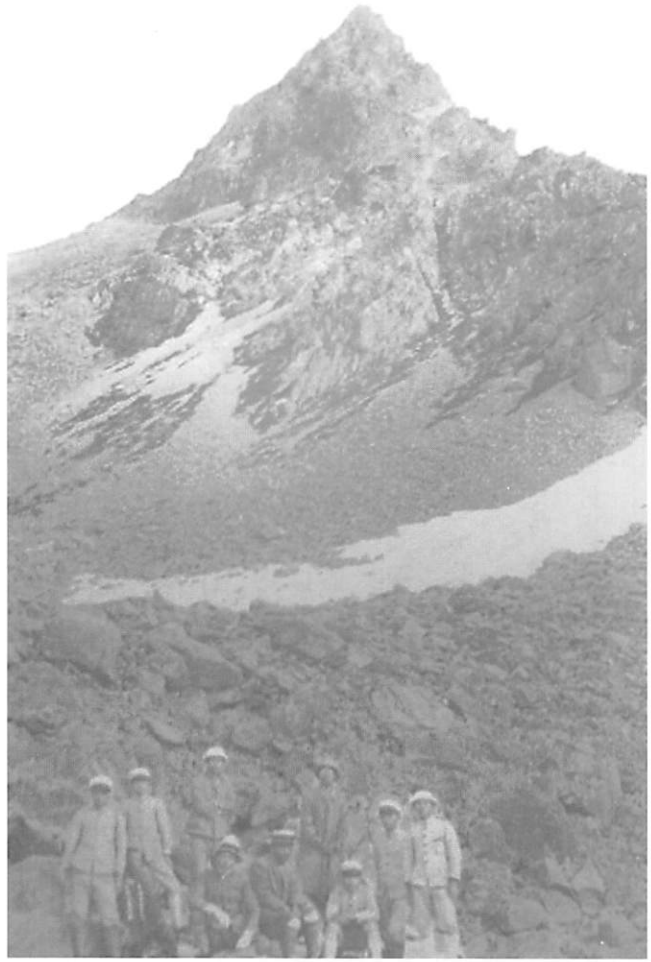
直ちに最後の目標槍ヶ岳頂上へ。ここからは一層険しくなる。両手で岩につかまり全身を託して掴むようにして登るのである。一歩でも踏み違えようものなら、それこそ一命を捧げねばならぬ絶壁である。午前五時二十分、僕らは海拔三二八〇以上の頂上の人となった。北隅の一端には小さな祠がある。幸いにも好天に恵まれ展望をほしのままにすることができた。見渡せば関東山脈、東方遙かに続き、

それに続いて南アルプス連峰長蛇のごとく、富士の幽峰その間に起立する。目前には昨日走破した、燕、大天井など互いに雄姿を競っている。さらに南方の眼下には槍沢の雪渓を隔てて穂高の峻峰、瀧沢、奥穂高何れも三千以上的高峰絶壁を持って、その緑や黒の岩肌を遠慮なく現している。それが延びて白煙棚引く焼岳に至り、木曾の御嶽は雲表に頂上を現している。後方即ち西方は雲海となり、神秘の潜在しているかのように見える。その雄大な雲海のため、付近の視野はほとんど妨げられ、わずかに薬師、立山等の連峰が現れている。北方には独り白馬岳が群を抜いて立っている。

小憩して下山した。途中未練がましく小槍の真下まで行ってみた。下りは大分早い。それでも傾斜が急で走ると危険だ。浅野君は断然トツプを切って真つ先に下ってしまった。途中下駄履きにとどらで登って行くのや、一人で穂高の縦走に出かけた豪傑に出会った。六時頃殺生小屋に戻る。そこで初めて顔を洗う。この水の冷たいのは驚かされる。

人数が多かったため交代で朝食を取らなければならなかった。朝食は飯に味噌汁、海苔、漬物と持参したパイナップルである。空きつ腹に味噌汁とパイナップルは好適で出来るだけ詰め込んだ。それから槍の山頂をバックに記念写真撮影。

午前七時コースの大半を終えた僕ら一行は、悠々最後の宿泊地の上高地温泉に向かった。大槍の小屋を右手に見て少し行くと、第一の雪渓がある。田中と案内人が最初に滑り出した。僕ら初心者は一歩最後から、しかもゆつたりと滑らなければどうにも出来ない。時々



1931年 燕岳から槍ヶ岳 槍沢にて

の中に落ち込もうものなら、それこそ一大事である。これは翌朝一緒に下っていた東松山中学校の先生に聞いた話だが、彼らが休んでいたとき、ある人がこの中に落ちたが幸い彼等に助けられ、上高地にある東京慈恵医科大学の上高地出張所に収容されたということだ。槍沢の小屋を過ぎると、木橋も多くなり水量も次第に増して、平地の川は比較にならぬほど清く、底の分からぬところは無いほど浅くなった。

十時十分前、一ノ俣小屋に到着。ここで記念スタンプを押し、昼食のうどんを食べる。この小屋は普通の山小屋とは思われぬ立派なものである。ほとんど全部白樺を材料として作った二階建てで、壁は一切使用してなく、暗室、食堂、売店、寝室など相当の施設が施されている。五十分間休憩して再び溪流に沿って出発した。幾度か白樺の棧道さんどうを越えていく

滑り転ぶと、ついに面倒になり尻を付いて滑り出した。

第二の雪渓で、先輩の浅野さんが先ず杖を折った。そして第三の雪渓だ。これは槍沢の雪渓といって非常に大きくて有名なものだ。

ここで鹿島が杖を折り、余儀なく岩伝いに下りなければならなかった。皆水泳で急ピッチを上げるように、雪を跳ね飛ばして滑っていく。その中、足袋はぐしょぐしょになり、足は引きつれるように痛くなる。

所々に大きな岩石があり、その下には大きな口が開いている。そ

と全くの平地のようになった。やがて「槍見ヶ原」という立て札がある。即ちこれより先では槍は見る事ができぬのである。間もなく黒沢の牧場に入る。ここへくると登山道も三間道路となり、これがずっと上高地まで続いているのである。牧場といっても普通のものとは趣が異なる。自然の大林中に放牧されているのである。公園の芝生のような広い草原がある。牧場を横切ること一時間で初めて子馬に会う。それからは牛や馬があちこちに散らばっている。僕らも牛や馬のように、こんな閑静な刺激の少ないところにおつたら、

あるいは天寿を全うすることも出来るであろう。

「この山の奥には、数百の牛、馬がいるのだが、草が少ないのであまり出てこないのだ」

と案内人がいった。

牧場が過ぎれば間もなく徳本峠への分かれ道にくる。そこには古城屋という大きな茶屋がある。所持品は全部そこに置いて明神池へ行く。古城屋で名物の力餅を一皿頬張る。

一里の道も何時の間にか過ぎると、白樺林の中に「キャンプ指定地」という立て札があり、間もなく河童橋だ。雨も降り出し疲労していたが、大正池行きを決行する。水晶のような川を渡り、熊笹の生い茂る白樺の林を抜けると大正池がある。この地は大正四年、焼岳噴火の際流れ出した溶岩流が、梓川の流路を遮って出来た堰止湖である。再び道を引き返し清水屋ホテルに戻る。最後に上高地は一般に温泉として知られているが、事実は温泉ではない。しかしこの一帯が国立公園第一候補地に選定されたが、その真価は十分に認めることが出来る。

（五年 鈴木正将）「学友会会報」二十七号

取材寄稿 岩稜帯の山が好きだった

浅野四郎（一九三二年卒）

昭和六年夏の槍ヶ岳登山の、右から二番目に写っているのが私ですね。立ち姿の左から三人目は、先年亡くなった六歳年上の私の兄

の誠一（一九二六年卒）で、当時は慶応大学の医学部に進んでいました。在学中の兄は剣道部だったと思いますが、登山が好きで、あちこち登っていたように思います。だから久保先生とも親しかったのでしょうか。

その画家の久保先生も、銀行勤務をしていた私の父親が、小仙波にある光西寺を立ち上げるときに、檀家世話人として私も寄付を集める家の手伝いをやらされたことで、先生にはお世話になりました。お堂に唐紙を貼り付けるときに、久保先生に絵柄をお願いしたものでした。家の手伝いを通じて、私も先生のことは存じていました。

その兄に、この年の槍ヶ岳の登山の話を聞いて、私は連れて行ってもらったというような登山でした。覚えているのはわずかなことだけです。槍の肩までは、疲れ切つてどうしようもなかったのですが、頂上近くの鎖場になったと思つたら、急に元気が出てきて、私は先頭で登っていたのではないのでしょうか。元々運動では鉄棒が好きだったものですから、鎖を鷲づかみにして、身軽にぐいぐい登つていったことだけ、それを覚えているだけです。それと、下山中に大正池を通つたことですね。

いったい私たちは、どの道を通つて、この槍ヶ岳にたどり着いたのでしょうか。あれが常念岳、向こうが燕岳と途中で説明を聞いたような気がしますが、槍の他には覚えていないような頂上はありません。この槍ヶ岳は実は私の二回目の登山で、最初は富士山でした。これも兄に連れられたものでした。

槍ヶ岳の印象というのは、痛烈に私の記憶の中に残っていたのか



1931年 槍沢にて

の影響だったのだろうと思っています。

仕事も家庭も落ち着いて、槍ヶ岳の次の登山のチャンスは、六十歳を過ぎてからのことになりました。足腰が弱っても登れる山を探して、妻と一緒に新穂高ロープウェイから、お花畑まで進んで、新穂高温泉に戻ったこと。翌年の六十一歳の年には大町から室堂に入って、弥陀ヶ原に泊まって富山方面に下りました。

もしれません。

中学を卒業して以降は登山の機会もなくて、就職して、徴兵されて、復員して、仕事に忙しくて、相当長い期間登山はできませんでした。しかし樹林帯の山よりも、その上の灌木帯や、ハイマツ帯や、岩場の山が好きなったのは、間違いないこの登山

さらに十年後の七十一歳のときにも再び同じ場所を訪れて、そのときは西穂山荘から独標まで到達しました。岩稜帯やハイマツの感触は、五十年以上も前の槍ヶ岳とまったく同じでした。稜線から見下ろす上高地の眺めというのも、素晴らしかった。

ただ上高地に行ったときに、以前に見た大正池は立ち枯れが池の中に何本も残っていたのですが、それは少なくなっていました。焼岳の噴火でできたというこの自然湖も、堰堤で補強されていて、昔とは変わりました。

その年にはまた室堂に入って、一ノ越山荘に宿泊してついに念願の雄山頂上まで達することができました。夜明け前にご来光を見ようと登山したのです。それもまたハイマツと岩稜の山に登ってみたかったからです。昭和六年の槍ヶ岳というのは、少年の心に大きな残像を宿しました。

取材寄稿 毎月登山の実践

田中 進（一九三二年卒）

旧制中学五年の最上級生になったときの夏の登山が、槍ヶ岳だった。手元のアルバムに、当時の山登りの唯一の写真が残っているが、それがこのときのもの。晴天の槍ヶ岳を背景に、「昭和六年八月四日・朝・殺生小屋で撮影」と当時の注釈が付いている。殺生小屋で宿泊して、翌朝の出発のときの撮影でしょう。近影は総勢で十人。引率

の久保先生のほかに、桜井先生、橋本先生と三人の先生がいる。桜井先生はロングコート姿だ。いいや私たち生徒も、通学の服装のまま槍ヶ岳に登っていた。詰襟の上着、学生帽。ゲートルを巻いていた。なんだか下界の町にいるときの写真のようだ。

生徒は右端に私。隣の浅野は兄と二人で参加した。その隣が鈴木で、彼は広島で今でも健在である。そのほかに鹿島、丸木とあるが、一年下の者だったかもしれない。生徒は総勢六人。この年の山岳部は六人いたはずなのに、名簿にそれだけの人数がそろっていないのは不思議だ。そして「大町山案内者・日本アルプス」という法被を着て、煙草をくゆらせているのが、強力の町田さんだった。山の案内人を連れなければ、槍ヶ岳などには登れなかった。

それにしても、どうして遠景と近影が上手に映っている写真があるのだろうか。中学の先生にしても、カメラなどは持っていないかっただと思う。多分、殺生小屋には写真屋が待機していて、記念に撮影させたのだと思われる。

槍ヶ岳という山には、それ以前に、秩父宮様が登山されたということだけは聞かされていた。誕生日が私と同じ六月二十五日という偶然のめぐり合わせだ。崇高な山だったのだろうか。登山客も多かったのだろうか。この撮影した日は、殺生小屋から槍沢の長い道を下って、上高地の大正池のほとりに出た。下った日は、そこに泊まった。

そして翌日には、徳本峠を登り返して島々に下山した。当時の上高地は牧場だった。

帰郷は長野から大宮に出た。川越へは、大宮駅の西口から出ていた路面電車に乗って戻った。川越の久保町が終点となっていて、今の中央公民館のところにある。その駅があった。

気の毒な話がある。この路面電車は、荒川の河川敷のところ複雑線となつて、上り下りが行き違っていたのだが、そこでその頃に事故があった。車両が横転して、デッキに乗っていた野球部の五年生が事故に巻き込まれて亡くなった。野球部はその日、栃木の方で試合があつて、その帰りだったらしい。

槍ヶ岳の登山で覚えているのは、それだけだ。どこから登ったのか、その肝心なことを忘れてしまった。それに今思い返すと、食料などはいったいどうしたのだろうか。小屋に泊まりながらの登山だったから、山小屋で食事をして、弁当も持たせてくれたのだろうか。他にどのくらいの登山客がいたのかも、分からない。

私はこの年に川越中学を卒業して、鉄道省の専門学校に進んだ。実はそこでも登山をやる仲間に出会った。富士山には、都合三回の登山を行った。昭和十一年の夏、昭和十四年の夏。当時はもちろん富士吉田から歩いて頂上まで登った。その三回目の登山の予定は、今でも覚えているが昭和十六年七月十八日の日曜日の予定だった。なぜなら、その日私は赤紙で召集されて、津田沼の部隊に入隊することになって、三度目の富士登山の計画は実行できなかつたからである。

ちなみに私は、鉄道部隊として召集され、しばらく国内にいた後、部隊は満州に移る。今の北朝鮮と中国国境の鴨緑江おどりよんこうに鉄道の橋を

架ける作業などに付いた。終戦後ロシアに抑留されて、森林伐採をさせられて、舞鶴港に復員したのは昭和二十三年になってからだ。そして不実行だった三度目の富士登山は、五十五歳になってから、子供連れでようやく達成できた。それが生涯最後の私の登山になっっている。

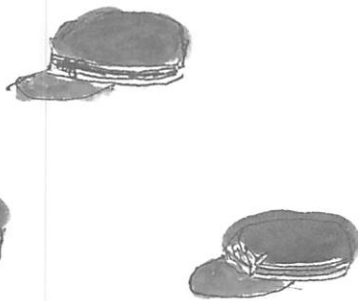
実は兵隊に行く前には、鉄道学校の仲間と、谷川岳、妙義山、尾瀬と毎月のように登山を行っていた時期もある。一歳年下の弟も影響されて、木曾の御嶽山にも登った。中学の裏山に御岳山があるが、あそこは富士見櫓と呼ばれ、御岳山神社がある。その神主の伊藤さんという人は、毎年夏に本山の岐阜の御嶽山に登山すると、私の弟の参加も許したようだ。伊藤さんの兄弟は、私が復員したときには川越市の市長をしていた。地元の名士である。

なんだかこんな話をしていると、昔のことを思い出して本当に楽しいなあと思う。

山小屋に何泊もして、山の案内人を雇って、山岳部は贅沢な部活だったのだろう。川越中学の月謝は、当時三円五十銭だった。あの頃は、年齢と同じだけの給料があれば、二十歳なら二十円の給料で、夫婦が借家で生活できるといわれていた。今で言えば二十万円くらいなのだろうか。だとすれば月謝は割高だ。現在五十円の葉書は、一銭五厘だった。

ちなみに同じアルバムの中に、昭和十七年発行の十円の戦時国債もある。七円でそれを購入して、十年後に償還されると書いてある。勤務先の賞与の一部が、このような戦時国債で支払われていたとい

うことだ。昭和十八年の二十円国債は、十四円の賞与が当てられていた。その頃、私は満州に召集されていたが、鉄道部隊の士官として、少尉から中尉に昇格して、七十円くらいの給料をもらっていた。白馬岳も槍ヶ岳も、その後は一度として登ったことはない。写真で見かけるだけとなった。しかしそこへ自分が旧制中学の時代に登ったという過去は、なんだか愉快だ。大正池の辺りに車で行けるようになって久しいが、やはり自然は残していかなければならないと思う。



一九三二年（昭和七年）

山行記録 乗鞍岳から上高地

一行は九名（久保、桜井、川田、三先生。卒業生一名、生徒五名）
旅費は十八円

七月二十一日 川越く飯田町

七月二十二日 松本く島々く沢渡く白骨温泉

七月二十三日 白骨温泉く乗鞍岳小屋

七月二十四日 乗鞍岳く平湯く中之湯く上高地

七月二十五日 上高地く徳本峠く松本く長野

七月二十六日 大宮く川越

七月二十二日 川越く白骨温泉しらほね

前日夕刻、川越を出発した。池袋で川田先生、市川さんと一緒に
なつて直ちに飯田町（注・飯田橋）へ向かう。登山者の雑踏は予想
外で、ここから中央線で松本に向かう。松本で強力丸山さんが出
迎えてくれた。昨日白馬から下ってきたばかりといい、元気なも
だ。ここから筑摩電鉄（注・松本電鉄）に乗車して島々へ向かう。

島々で朝食。ここで主人の説教をいくさりやられる。親爺もこれ

でいい加減煙草を減らしたろう。九時松本から来た乗合自動車で
奈川渡ながわどに向かう。この車は梓の断崖絶壁をどんどん進んでいく。車
掌の声で右手を見れば、ヘットナーの石。奈川渡の終点に九時四十
分。ここから歩くのかと思っていると、タクシーに乗り換えさせら
れた。二台に分乗する。崖つぶちのこんなところを自動車が通れる
のかという道を行く。遙か右下の梓の流れは急峻だ。運転手
の話では、彼が大阪の道頓堀でタクシーをやっていたときよりも、
気楽だという。しかし、狭い崖の道で危うく対向車と衝突しそうに
なつて、肝を冷やした。十時十分、沢渡さわどに着く。強力もいう。
「自動車は危ないね。冷や冷やする。一、三年寿命が縮まった」

歩いた方が早いという口ぶりだった。

ここから徒歩。梓の流れともお別れだ。昨日川越を出発してから、
一切土を踏んでいない我らは、こうして大地を踏みしめて登れるこ
とが楽しい。ここでは聞こえるものは溪流の音のみ。しばらく行く
と木材小屋があった。付近に道案内の地図がある。「大岩屋旅館」
は島々の親爺が紹介した宿屋だが、溪流沿いに見えるのは、旅館の
露天風呂。湯の香りがする。家並みの中へ入っていくと、古ぼけた
看板の大岩屋があった。ちよつと憂鬱にも感じるがここに決めた。
主人は七十歳を超えたかと思われる爺さん。

「よく来た、入れ」

という無愛想な挨拶に度肝を抜かれる。島々の親爺との関係を聞
くと、

「島々の深沢とは兄弟以上の親密な関係だ」

「でも、おっかない小父さんです」

と答える。あのクワエ煙草では怖い。この主人も変わった爺さんだ。泊まることにしてしまつたが、まだ正午。天気もいい。それでも風呂に入ったが、他の客は誰もいない。湯から出て昼飯を食べたが、何もすることがない。どうして世間はこうも「白骨」と誉めちぎるのだろうか。家で見つた十年前の絵葉書と何も違つてはいない。中里介山氏の「大菩薩峠」で有名になつたとも言われる。

散歩をした後に、先の露天風呂へ行つてみた。材木小屋まで引き返し、木につかまりながら川へ下る。四人くらいが入つてゐる。平岡さんや金子さんと一緒に入つたが、出る頃になると暗くなつた。景色がだんだん恐ろしくなる。谷を包んでいたあの穏やかな風景は、夜になると魔の山かと思われてくる。

帰りがけ白樺の中にテニスコートや喫茶店らしきものがあつた。

七月二十三日 白骨温泉へ乗鞍小屋

今日も山は朝日に映えている。七時五分に出発する。主人の配慮でゆで卵をポケットに入れる。金剛杖には初めて焼き印が押された。材木小屋まで引き返し、ここから登りになる。少し登ると、

「ああ、雪が見える」

と立ち止まる。朝日に残雪がくつきりと白い。思えば随分高く登つて来たものだ。草鞋が朝露に濡れて冷たいが、それが気持ちがいい。白樺の林で一休みする。ここで東京のタイプライター屋と一緒に道連れ。目指すは冷泉小屋。昼飯は樹林の陰で食つた。あの宿屋

の主人はなかなかの経験者らしかつた。握り飯が焼いてあつてとても食べやすい。ハエがブンブン飛んで来てうるさいのだが、「例年なら土用に入った今頃は、もういなくなるのですが」

と強力が言う。しばらくして冷泉小屋に着いた。しつかりした建物だつた。それもそのはずで、冬専門のスキー小屋だそう。スキー場はここから上へ登つた乗鞍山腹。こんな高いところまで登つてきてスキーをする人がいるのだろうか。眺望は素晴らしかつた。

ここには冷泉があつた。飲むと頭が痛くなるそう。何枚か写真を撮つてさらに進む。関西方面から来たという一人の青年と言葉を交わす。山は人と人との隔たりをなくすようだ。雪渓を飛び石伝いに登る。上から降りてくる一人に、先のタイプライター屋がいた。

「早いですねえ」

「いやー」

「明日は何処に泊まるのですか？」

「上高地ですよ」

「じゃ同じですね。また上高地で」

その先に、乗鞍開山という碑があつた。角心という人が乗鞍登山の草分けらしい。這松の美観は日本一だそう。その這松帯を進んでいくと、不意に山小屋の前に出た。ここが今日の宿泊予定の肩小屋であつた。「筒木小屋」とも言うそう。白骨を出てから六時間半。午後一時半に到着した。主人に聞けば客は女連れ三人だけ。リュックを置いて頂上を極めることにした。

リュックのない身は軽い。這松の間の石の道が上がっていく。肩



1932年 乗鞍岳から上高地 乗鞍岳中腹にて休息

の小屋の屋根は小さくなった。いよいよ頂上が見えてきた。御宮がある。手前の小屋を通り過ぎると、頂上付近にもう一軒の小屋があった。そこからすぐに頂上。午後二時四十分。これで今度の旅行の目的は半ば達せられた。帽子を脱いで汗を拭えば、山の風が気持ちいい。後ろから頂上小屋の主人が登ってきた。
「槍はこの方向です」

と教えてくれる。群峰の中に一際目立って天に突き上げている。その右に穂高と、左手遠くに見えるのは立山らしい。他にも野口五郎、笠ヶ岳。浅間山。一大パノラマになっている。秀峰御嶽はほんの指呼の間で、紫色の山麓を長く引いて悠然と聳える。その向こうに点々と光るのは飛騨高山の町だ

った。頂上の西側に権現池があるが、反対側の同じ目の高さが高天原という丸い山があって、そこは天然記念物になっているそうだ。その平原の砂の並びが、大きい粒と小さい粒が並列して自然に並んでしまふという。人為的にいくらかき混ぜても、翌年の雪解けの頃になるとやはり綺麗に並んでいるらしい。珍しい現象だ（注・亀甲砂礫）。

歸りに平岡さんと頂上小屋に寄って、焼き印を押した。

「この乗鞍頂上の印は百二十円かけて登録してあるものだから、確かなものだ」

この話は信じてよいのかどうか、それは分からないが。下りは駆けけるように早かった。日も傾いてきた。小屋の夕飯は想像以上に美味しかった。数人の登山客が後から来たが、今日は二畳に三人寝られるから広い。
(四年 鹿島 鶴)

七月二十四日 乗鞍小屋へ上高地

四時に起きて御来光を見に、雪渓を登った。まだ残月が青白く輝いている。乾ききっていない足袋で、足の指がピリピリしてくる。小屋の人の話では、御来光は浅間山の方から昇ってくるということだ、そちらを見つめている。しばらくすると、浅間の左側が真っ赤に輝いて、次第にその濃さを増してきて、お日様の顔が現れた。二、三分すると、真ん丸い鏡餅のようなお日様になった。四時四十五分である。我々は思わず頭を下げってしまった。今日も雲一つない快晴だ。愉快な気持ちになる。思い切り山の空気を吸い込んだ。

小屋に戻ると、五時半に朝飯になった。昨夜の飯もうまかったが、朝食もうまい。六時肩の小屋を出発する。

三十分ほどで鶴ヶ池に出る。三つの小高い丘に囲まれている小さな池で、上から見下ろすと鶴が首を伸ばしているような格好に見える。この火山湖周辺にも天然亀甲状砂礫があつて、世界にたった二つという珍しい現象だ。池のほとりの古い立て札にそれが指摘されていて、そこを探すと、あつたあつた亀甲状が幾つも並んでいる。これも雪解けの際に自然にできるものだ。

さらに稜線を歩けば、桔梗原ききょうがはらに出る。穂高・焼岳が朝日に輝く。高山植物が咲いているその草原で寝転がった。そこから一時間ほどで四ツ岳の麓で休憩。這松の上を横断するのは、バネの上を歩いているようで楽しい。失敗すると胸まで没してしまふが。さらに姫ヶ原を通過して雪溪の残る沢に入っていく。平湯はこの下らしい。

そこから平湯まではまだ二、三時間あるが、脇に流れている冷泉はサイダーのような味がした。中には「毒水」と注意札が立っているものもあつた。どんどん下ると平湯大滝の上に出た。途中幾つもある横断した小川は赤茶けた水が流れていて、川底の石も真っ赤になっていた。大滝には、「垂直七十メートルあり、轟き打ちしぶく水煙。岩燕の飛翔する筆舌のごとく」

と立て札にあつた。遠くに飛んでいる岩燕はかげろうのように小さく見えた。カメラに納める。間もなく県道に出て平湯に着いた。六、七軒も温泉宿があり、自動車が行きかう部落で、水田も青々としていた。稲だと思つていたら、ヒエだつた。

まだ昼前の十時二十分だったが、平湯の舟津屋旅館で休憩する。草鞋を脱いで上がりこんで、名物の粟あわちまきを食べ、先生方は宿の湯に浸かった。生徒は町を見物して共同浴場で汗を流す。昼食後十二時に出発した。目的は難物の安房峠あほうだ。

出発すると、増田君が杖を忘れてきたというから、強力のおジサンだけ残して、皆は先に行つた。なだらかな勾配が続く。四、五十分登ると「篠原無然水遭難」の碑がある。氏は安房峠から平湯道開発の恩人である。広いところで休んでいると、五、六名のお爺さんたちが登つてきた。地元の人だろうが声高に話をしていて、そろそろ腰が曲がる年だというのに、下駄履きで疲れた顔もしていない。「この先、二、三町行くと休むに格好の場所があるよ」

と教えてくれる。その通りにいくと、小川が流れていて実に美味しい水が飲める。強力のおジサンが追いついてきた。少し下に兎が死んでいるというのと、

「ナーニ、水は三寸流れれば、神様が自然に清めて下さるのだ」

と面白いことを言つた。平湯から二時間で安房峠の頂上に出た。目の前に焼岳が噴煙を上げているが、自分たちの立っているところが焼岳よりも高く見える。ここから下つてしまうのは惜しい。尾根でもつながつていけば焼まで征服するのだが。

急勾配を下っていくと、自動車の警笛の音が聞こえた。梓川の南岸をマツチ箱のような車が走っている。そこに中ノ湯があるのだが、道がらせん状でなかなか着かない。三時によく中ノ湯に着く。すぐ下には梓川が轟々と流れ、風呂場は新築したばかりの温泉だ。

一風呂浴びたいという希望者だけ風呂に入った。

三時四十五分、また出発する。ここから梓川に沿って登る。少し行けばトンネルにかかる。真つ暗の中に幾つか電燈が点いていて、天井から雨のように雫が落ちてくる。そこを抜けるとようやく上高地の入り口になった。大正池があり、焼岳が大きくなる。今日一日は焼岳を見続けた日になった。大正池は大正四年の噴火で出来上がった。国立公園の第一候補として、最近はよく新聞で紹介されている。風雨にさらされた無数の木立は、奇観である。池を回っていると、船を浮かべて岩魚釣りをしている人がいた。少し上流に出れば、テント村もある。目的の清水屋は満員で断られ、上高地ホテルに入る。ここでもやつと狭い一室が借りられただけで、上高地の繁盛は驚くばかりだ。五時半に到着した。煙を吐いている焼と隣に穂高。梓川の反対側には六百山。温泉に浸かって汗を流して夕飯を食べる。この上高地温泉ホテルは、隣の清水屋と六ヶ敷事件が起きているようで、清水屋のみ電燈が点いていて、そこから先には送電されていないという変なことになっていた。暗いランプの下で九時半に寝た。

七月二十五日 上高地へ徳本峠

今日一日で今年の登山も終わってしまうのかと思うと、哀愁が湧いてくる。朝の霧も晴れて穂高がよく見える。六時四十分に出発した。梓川の林道を行き、河童橋を渡る。この辺りの鉄道省指定のキャンプ場は、あらゆるものが完備して日本一のキャンプ場ではない

かと思われる。林道を抜けると明神に着く。強力の小父さんの案内で明神池を見る。ここだけは岩魚の禁漁らしい。嘉門次の小屋を見る。ここから徳本峠までは四千四百メートル。二百メートルごとに杭が打つてあるという。茶屋で休む。

清流で休憩を取りながら徳本へ向かう。疲れきった頃徳本に着く。九時三十五分。我が登山部は過去に二回この峠を踏破して、今回は三度目。過去は何れも雨天で見晴らしが利かなかつたようだが、今回は穂高の素晴らしい展望に恵まれた。峠の茶屋に関西方面の女学生がいたが、出発して席が空いたからそこに休む。少し休憩して十時に出る。下りでは「宝水」「力水」の泉が湧いていて、その度に一休みした。少し行くと先刻の女学生が二列でのろのろ歩いていて、追い越すのもできなくて牛よりも始末が悪い。十一時、岩魚留小屋で休んで、女学生が来たから出た。十二時十分「涼瀧」の丸太のベンチで昼食。その先は島々谷を下っていくトロッコの道となる。単調な枕木の配列は、過去三日の山行に比べれば惨めだ。一時四十分「長命水」に着く。そして二時半にようやく島々の部落に出た。足のマメも痛み出し、駅までの車の道は長い。

三時五十一分の電車に乗る。ほとんどが登山客。松本から長野に向かう。六時五十八分、長野に着き駅前の食堂で夕飯。それから善光寺。長野は川越の町とは少し違っていた。午後九時四十分の信越線で大宮に向かった。始発で川越に向かうと、駅には校長先生が迎えに御出で下さった。後輩たちに思う。「行け山へ！」そして質実剛健の徳を養え。

（五年 平岡重郎）「学友会会報」二十八号

一九三三年（昭和八年）

山行記録 北アルプス常念岳

川越高校百周年記念誌の年表に、この年の登山部の活動が一行残っているだけで、詳細は不明である。

一九三四年（昭和九年）

山行記録 富士登山

第一日 朝八時に川越駅に二十七名が集合して出発。猿橋で下車して猿橋見学。溶岩流の上に橋を掛けたものだ。橋の脇の大黒屋で休憩して、ぼろ車で吉田へ向かうが、途中パンクしたため、換えの車に乗り換える。午後三時に吉田の旅館に着いたが、また車で河口湖へ向かった。船で湖を一周する。九時半に就寝。（水村八郎）

第二日 東の空が白んできたが、まだ四時前である。五時の出発に少し遅れた。外は霧が深く、少したつと雨になってきた。ここ

から頂上まで十三キくらいだそう。一行は中ノ茶屋、大石ノ茶屋、馬返しへと急ぐ。馬返しから道は急になった。三合目から五合目まで宮田先生は馬に乗られた。五合目の昼食は実にうまい。六合目、七合目は長く感じられたが、十四町くらいだそう。そこから八合目までには、経ヶ岩、屏風岩、鎌岩、雷岩、烏帽子岩の溶岩壁がある。八合から上は胸突き八丁。予定した八合からさらに登って、午後五時に八合五勺に着いた。（加藤）

第三日 今日もまた雨。六時の朝食を済ませて雨の中を出発した。頂上付近の鳥居は小さくぼんやり見えるだけ。白橋袷に美濃笠をつけた登山者が鈴を鳴らしながら、電光形の道を登っている。我々も負けずに続く。右には雨にかすんだ雪溪が見える。七時三十分、ようやく頂上に出た。

頂上の東京館という小屋に入った。天井が低くて皆頭をぶつける。ここで甘酒を飲んで噴火口を見に行く。雨と濃霧で僅か先しか見えない。七時五十五分、頂上を後にして下山する。

八合目から砂走りにでる。強力の見送りを受けて桜井、平野両先生を先頭にして一列で下る。下るにつれて霧が晴れてきた。

「晴れた」

と、誰かが下のほうから叫んだ。太陽が一面を照らす。眼下の山々、太陽に光る湖、遙か彼方には海も見える。着ゴザも脱いで身軽になる。

そのまま元気に十一時頃に太郎坊に着いた。そこから自動車に乗って御殿場に出て帰った。（吉田敬一）「学友会会報」三十号

一九三五年（昭和十年）

山行記録 乗鞍岳登山記

七月二十日～二十四日 出発

元気はつらつたる登山部員一行は、橋本先生、葛宗先生、宮田先生に引率され、二十日午後七時頃諸先生に送られて、乗鞍岳登山の途についた。新宿の駅は、すでに山に憧れている人にて一杯だった。大きなリュックを背負い、たくましい登山靴に身を装したアルピニストもいれば、富士山へでも登るのだろうか、無数の印の付いた白衣に金剛杖と鈴を持った信仰的な老婦人団体もいる。

僕ら登山部一行も混じって、十時の汽車へ乗る。汽車中は十二両も付いているのに皆一杯である。僕らは最後の車室へ乗った。幸いばらばらではあるが腰掛けることができた。あまり列車が長いので最後の方はホームへ入らず、僕らは夕食を食べることができない。甲府辺りで前の車室の方へ乗り換えた。

トンネルでも通ったのか、開いていた窓から入ってきた煙が、車内をぼーとさせている。大分眠くなってきた。車内のそここで眠る者が多くなってきた。

七月二十一日

ふと目が覚めた。車内にはもう数人、起き出した者がいる。誰も赤い目をしている。眠いのだろう。外の方はまだ薄暗い。汽車は灰白色の煙を出しながら高いところを走っている。所々山の上の方に白樺が幾本か見えてきた。大分進んだらしく、やがて諏訪湖が見え出す。お昼ごろ松本駅に着く。ガイドの太田さんと一緒になって駅前で昼食を取り、一気に島々に赴く。島々から上高地行きの自動車で白骨温泉へ向かう。ヘットナー石を右に見ながら、数百尺も高い断崖の上を通る。冷や冷やしてきた。道は非常に曲がっていて良くない。そのうちに前川渡に着く。自動車より降りて、いよいよ歩き出した。道は次第に坂道となって深い谷から轟々という、水の音が響いてくる。一時頃白骨温泉へ着く。所々に露天風呂などあって非常に良い。温泉は硫黄泉なので変だ。悪臭がむつと鼻をつく。

七月二十二日

皆が目を覚ます頃、宿もざわつてきた。まだ五時だ。今日こそいよいよ乗鞍の頂上だ。出発のとき女医さんが一行に加わって、十二名となり六時頃出発した。白骨温泉が遙か谷底の方に小さく見えるようなところに畑があつて、作物を作っている。橋本先生がここで高山植物を教えて下さる。やがて冷泉小屋に着く。

良い見晴らしである。この辺は乗鞍のスキー場だそうだ。良いスロープだ。スキー場を通過して少しいくと大きな木が無くなってくる。



1935年 乗鞍岳から上高地へ 上高地にて 背後に穂高連峰

この辺から道がジグザグになってくる。所々に雪渓が見えてくる。雪渓の下で昼食を取って元気をつける。大きな蠅が沢山飛んできて気持ちが悪。一つの大きな雪渓を越えて肩の小屋に着く。一時頃だ。女医さんはここから一行と別れて白骨へと降りて行った。一行は小屋の中にリュックを降ろして、

頂上へ登る。ひどい雲が出てきて一寸先も見えなくなる。

頂上には、五ヶ四方の広いところがあって、神が祭つてある。頂上で約三十分くらい休む。肩の小屋で宿る予定だったのを、一気に平湯の温泉まで下ることに決めて、元気に出発した。大きなお花畑を通った。幸い黒百合などという珍しい高山植物を見ることができた。桔梗ヶ原、鶴ヶ池を通って進んでいくうちに、雲はいよいよひ

どくなつて、ついに雨さえ交えてきた。しばらくジグザグの道を降りて、ちよつと元鉱山だったところくらいまで来ると、雨も止んだ。所々に毒水というのがあつて気味が悪い。少し下ると大きな滝がある。平湯の大滝というのだそう。いよいよ平湯の町へ入る。十二時間も歩き続けたために、皆非常に参っている。明日こそ上高地だ。

七月二十三日

実に良い天気だ。六時頃出発する。露を分けて安房峠を登る。峠は割合に低いが今上高地から平湯を抜けるドライブウェイを作っているので歩きにくい。九時半頃頂上へ着く。少し下ればすぐ中の湯温泉だ。中の湯温泉では梓川の轟々と音のする流れが見える。川を渡つてトンネルを抜けたところで昼食を取る。左に焼岳を見ながら宮田先生と五年生の二、三人が大正池までマラソンをやる。非常に元気だ。大正池の穂高、いつ見てもよい風景だ。帝国ホテルの庭を通じて温泉ホテルに赴く。今度の宿はここだ。大部分の者は案内さんに連れられて明神池へ行く。温泉の水は実に清らかだ。これで三日間とも温泉に入ることができた。

七月二十四日

今日は皆元気に出発する。所々川の中に岩魚がいる。徳本は思ったより楽に頂上へ着いた。明神、穂高の雄大な景色を眺めて、いよいよ岩魚止めの茶屋へ下る。ジグザグな道だ。皆元気を少し失ってきた。二時半頃島々へ到着。(加藤 熙)「学友会会報」三十一号

一九三六年（昭和十一年）

山行記録 木曾御嶽登山記

第一日（七月二十三日）

足袋ゲートルに身を固め、背中のリュックサックも軽やかに新田町駅に集まる。空は晴れやらす、その上ラジオの予報では御嶽は荒れているといわれてすっかり憂鬱になった。午前七時十九分、校長先生、岡田先生のお見送りに深く感謝しつつ、橋本先生、葛宗先生、宮田先生に引率されて生徒十一名元氣に川越を後にした。

七時四十七分東村山着。直ぐに自動車で国分寺に行く。そこから立川に向かい、同地にて汽車に乗り換え、立川八時三十四分発、川口市の団体の御嶽登山の信者もいて汽車は非常に混んでいた。小仏トンネルをくぐり、猿橋を右手に見て益々速力を出して行った。何時の間にか葡萄畑も過ぎて、一時二十五分塩尻着。その頃からポツポツと残念なことに雨が降り出していた。葛屋支店で小憩し、途中まで自動車で行く。幸い雨もひどくなく、足も軽やかに歩を運ぶ。山沿いの清流の瀬音を聞きながら、また川中の鉾泉とかに道草を食いつつ進む。鞍馬の奇景を探勝し、平家の落武者の住家とも思える村落を通って、夕暮れて松原館に着く。（駒野良樹 矢島俊良）

第二日（七月二十四日）

「おいもう起きろ」「もうかい」

と誰かが言ったので皆笑いこけた。南アルプスの夜明け、五十灯の電燈が平地の二灯くらいの淡い怪しげな光を放っている。五時頃だ。窓の隙間から寒いアルプスの冷気が流れ込む。

「おお、寒い」

思わず身震いした。昨日の雨で冷たい服のことを思うと閉口したが、僕らは元氣だ。急いで食事を済まし張り切って宿を出発した。一陣の寒風がどんよりした朝の空気を震わせて去った。残念だ！

僕らの目指す御嶽山の頂上は天候険悪のため、さっぱり見えない。登山にかかるのと憎らしい霧雨が降り出した。四合目で疲れたので一寸休んだ。

「さあ、行こうぜ」

一同元氣を入れ替えて頂上へと向かう。足が少々痛み出した。途中で一寸太陽が顔を出した。その一瞬！ どんなに我々が待ち焦がれていたであろうか。下界は一面の雲海だ。僕らの足元を一団の雲が、さっと過ぎ去った。

この瞬間の光景は実に雄大そのものである。やがて疲れた足を引かずつて六合目に着き、ここで昼食を済ませた。時に気温は十六度（摂氏）を示し、出発する頃より霧雨が降り出し風も伴ってきた。これより這松あるいは岩石のいわゆる灌木帯を攀じ登るのであるが、雨のために地面が滑って危険この上なしだ。一度足を滑らせた

らもう命がないのは当然だ。八合目辺りより雨は下方より吹き上げられて、油紙は破かれ、雨具は用いられず、全く身に着けるものはなくなった。今は夢中だ。足は無意識的に一歩一歩頂上へと運んだ。

ここで人が墜落して死んだという案内人の話を聞いてぞっとした。見るとなるほど人の落ちそうなところだった。次第に一隊が分かれば分かれなくなってきた。我々はその中間に属していたが、中途で道を間違えついに道無きところを、頂上に通じていると思われる唯一の電柱を頼りに進んだが、ともすればそれも見失いがちであった。霧深く一寸先も見えず、かつあまりに疲れたので岩陰に休んだが、体がぞくぞくして寒さ身に応え自由が利かなくなりそうだった。これはいかんというので早速歩き出した。すると頂上が霧の間に朦朧として現れだした。僕らの足は頂上に近づくに従って元気を取り戻し、次第に早まっていった。

「頂上だ！」

このとき、この感じ、この愉快さはさらに登山する者にもみ許された味わいであろう。山小屋に入って暖かい炭火を囲んで雑談に浸った。しばらくして地獄谷とも呼ばれる最難コースもつつがなく終わった。しばらくして山小屋の外では荒れが、まだ治まらぬらしい。

(細淵記)

第三日 (七月二十五日)

四時半に起きる。薄暗い小屋のガス灯の下で、御来光を見る支度をする。寒気に曇った窓ガラスを手で拭いて外を見る。暗い中に真

つ白に立ち込めた霧は、窓ガラスをすぐまた白くする。うまく晴れるだろうかと心配をしながらも、皆厚着をして外へ出る用意をした。いくら外が明るくなる。ミルク色の霧が風に烈しく動いていく。すーっと目の前の霧が動くと、その後にオレンジ色にほんのり染まった霧が現れた。

「そらッ」

と皆が窓から離れて外へ飛び出す。寒気が烈しく身にしみる。風が強い。小屋を後に岩陰を三十メートルばかり進む。風、霧、霧が飛ぶ合間に紅の点が見れる。時に四時五十分。辺りが「サーッ」と明るくなる。霧はどんどん消えていく。青空が現れる。紫の山の背が見える。紅の光は広がって行く。東の空に輝く雲、少し目を下げるとそのところには大きな雲海の広がり。白雲を羊の背のように連ねて、山々の頂をその上に浮かべている。東から北に南アルプス、北アルプスの山々が連なり、少し南寄りには富士が頭をもたげている。真紅の月輪は連山の頂から離れていく。しばし皆惚と我を忘れてこれに見入った。

やがて小屋に戻って朝食をし、六時に頂上を出発した。そして登りとは反対の道を下る急な岩の坂を下った。行くと左手には乗鞍が青空の下、すぐ手前に横たわり、雪溪が緑の山肌に見つ白に遠く、雲の上には浅間山が煙をたなびかせている。一行十四人の一列に続いた下りからは、白衣の登山者の群れが「六根清浄」を唱えながら登ってくる。やがて灌木帯、針葉樹林帯を降って九時頃百間滝の小屋に着く。遙かな山腹に白く一条かかっている大きな滝が百間滝で

ある。少し休んで滝の近くまで行かずにまた下る。

二時間ばかり下ると素晴らしい檜の原始林に入る。御料林だそう
だ。皆一抱えは充分ある。ここを通りししばらくすると道がだんだん
良くなる。ここで昼食をし、木曾川の上流である王滝川を右手に見
て山峽を辿る。目の前には木曾駒ヶ岳が雄姿を見せている。この川
沿いの六里はかなり長く、福島に着いたのは午後五時半。宿に着い
たときは皆へとへとに疲れていた。
(渡邊記)

第四日（七月二十六日）日曜日

昨日隣での騒ぎが少しは影響したのであろう。六時十分の汽車に
乗るといのに、五時十五分頃起きる。大急ぎで支度をして六時十
分頃、それでもすつかり終わる。もう下の通りでは自分らが起き
る前頃から登山の人たちが通る。昨日の強行軍がすつかりたつて、
足がとても痛い。階段の上り下りが大変である。宿屋の者に送られ
て宿を出、駅に行く。御嶽山などへは古めかしい金剛杖を持ってい
くのが大体であるので、川中のようにピッケル、リュックサックを
持っていたのがかなり珍しいと見えて、道を歩いている人など振り
向いて見ている。

駅に着くと汽車はもう着いていた。これは大変とばかり大急ぎで
汽車に乗り、今日の見学の第一番目の寝覚の床（注・「ねざめのとこ」
木曾八景の一つ）のある上松へと向かう。昨日今日と同じように良
い天気である。汽車の中から御嶽山の頂上辺りを見ると、すつかり
頂上の辺りだけ雲で覆われている。この分だと今日も昨日と同様素

晴らしい雲海が見られたことだろう。約十分して上松駅に着く。そ
こから徒歩で寝覚の床に向かう。約十五分着く。思ったよりも良
くない。これが有名な寝覚の床かと、ちょっと当てが外れた感があ
った。自動車で駅に帰る。上松駅を八時十六分の汽車で第二番目の
見学地である恵那峽に向かう。

九時五分、所在地の大井駅に着く。今度は集合自動車で行く。案
内説明付きである。しかしせっかくの名文句もその説明の終わりに
この地方の方言である「なも」で随分台無しにしてしまう。かなり
高い丘を登っていく。

「この下にずっと見えますのが、有名な恵那峽ですなも」

つという調子である。登り切ると急に眼界が開けて、満々と水が
湛えた恵那峽が展開する。ちよつと景色の良いところである。今度
は下りである。下りきると、そこは売店の四、五軒ある恵那峽遊覧
船の発着所で、そこで自動車が止まる。皆降りて約四十分くらい
予定で自由行動が許される。ある者はボートに乗り、ある者は水辺
にいたり、ある者は売店にある土産物など色々冷やかしている。
そうこうしているうちに時間が来たので先刻の自動車に乗り駅に帰
る。

大井駅から十一時三十一分の汽車で待ちに待った日本ライン見学
へと向かう。多治見駅でガソリンカーに乗り換えて、日本ラインの
遊覧船の発着所のある美濃太田駅に着く。そこで駅の人に遊覧船の
具合を聞くと、乗り合いですと犬山城まで一人前六十銭で、貸し
切りは十二人で五円であるという。総勢はいにく十四人。二人く

らいは大丈夫だろうと聞くと、駄目でしようと予言をいう。まあ何でも行ってみようかとハイヤーに分乗して遊覧船発着所に行く。そこで集合などの都合を聞いてみると、どうも悪いらしい。ついに貸し切りに乗ることにする。皆切符売り場のところでサイダーを買い込み、そして河原の石の上を一丁くらい、船のあるところに行く。足の豆が石に当たってかなり堪える。もうこちら辺りにくると川幅は随分広く、河原を入ると三丁くらいある。七人ずつ、細長い天幕で日除けした船に潜り込む。

普通の船とは異なっていて、ずっと板も薄く船椽もずっと長く座ると首辺りまでくる。船頭は前と後ろに一人ずつ二人で漕ぐのである。前の者は進む方に背を向けてただ漕いでいるだけで、後ろの者が舵を取っている。相当の激流を乗るのは皆初めてらしく、黙って見ているだけである。水はあまり綺麗でなく濁っている。船もだんだん早くなっていく。兩岸は今まで何も無かったのだが岩が段々増えていく。その岩には皆夫婦名が付いていて、船頭が一々教えてくれる。もう昼過ぎなので弁当を食おうとしたが、少し石油のような臭いがあるので皆食べるのはよした。しかし他の船に乗っている者は食べたらしい。

段々進んでいくと、進む方向に向かって左岸に何時の間にか切り立つ断崖が聳えている。物凄く渦巻いているところがある。こいつは危ないと思っていると、それを巧みに避けて進む。遙か向こうに犬山橋が見えてくる。こちらの船は貸し切りなので二人で漕いでいるので、乗り合いなどの一人で漕ぐよりずっと速く、先に見えた二、

三艘の船も抜く。左を見ると断崖の中途に桃太郎誕生の地とか、桃太郎公園とかいう看板が見える。この大きな木曾川なら御伽話にあるような大きな桃は流れてきたかもしれない。乗船してより約一時間くらいにして、目的の地、犬山に着く。遙か高く山の上に犬山城が青空の中に聳えている。相当に暑い。船より降りてモダンな犬山橋を渡って、岸辺の涼しいところで岐阜行ききの汽車に乗る。

午後五時八分岐阜着。一同皆元気で川田先生の御兄さんに案内され岐阜見物をする。先ず公園に休んで食事を取り、皆で一昨日と昨日との登山の話をしている中に日も暮れて、花火が美しくなり川船も提灯で美しくなっていて、御祭り気分が出てきた。何しろここは皆登山姿なので、祭りの町中には体裁も良くなかったが「関東武士、何織田勢に負けるものか」と金華山城を右手に川見物に出かけた。

川は屋形船で一杯であり、方々から舟歌が聞こえてくる。歌が始まったかと思うと、あちこちの船から花火が上がりが、その光景はここでは東京の隅田川の川開きの他、あまり見られないであろう。また音楽隊がやってきては演奏を始めた。そのうち珍しい鵜飼の船も段々に近づいてきたので見に行った。その中目の前に来たのでよく見ると、なるほど一人の漁師が多くの鵜を操っていて、鵜の首は絵や写真に見られるように凄く太くなっている。時間も十時近くだったので、長良川に別れを告げた。川田さんの御親切に御礼をいい、十一時十一分の夜行で岐阜駅を立ち帰路につく。僕ら一同の夢は辛苦を共にして、征服した御嶽山の頂上に走った。

(北田、佐々木)「学友会会報」

一九三七年（昭和十二年）

山行記録 白馬岳登山記 白馬岳はばたにく祖母谷

七月二十三日 川越く信濃四ツ谷

地下足袋、巻きゲートルにリュックサックで身を固めた元気はつらつたる登山部員一行は、午前六時四十分、新田町駅に集まる。やがて橋本、葛宗、三上の三先生に引率され、午前七時待望の北アルプス連峰の盟主、白馬岳踏破に出発したのである。

新田町駅より村山駅へ。そこから自動車で国分寺へ行く。そこから立川に向かい、同地から松本行きの電車に乗り換えた。車中は確かに御嶽山にでも行くのであるう、白装束の登山客で身動きもできないほどの超満員であった。我らは車中で昼食を取りながら、数時間乗り続けている中に松本に着いた。そこから一行は大町行きの車に換え、さらに四ツ谷行きの汽車で四ツ谷（注・白馬）まで乗った。その間車窓から我らの憧れの山々が、山ひだを近く、遠方に現している。中には雪溪のある高山が雲に中腹を包まれて、山頂が見えるものもある。

北アルプスの午後の太陽はさんさんと照っている。やがて四ツ谷駅に着く。駅前で明日の雪溪登りに用いる「カンジキ」を買う。ま

たある者は油紙を買い、明日の用意を整えて、第一日目の宿場、二股の白馬館へと歩を早めた。約一里半の小石のゴロゴロした道を行く。夕暮れは次第に濃くなってきた。やがて白馬館に着いたが、宿はもう下山した者や、明日我らと行程を同じくする登山客たちの元気な笑い声で一杯である。我ら一行は今日の疲れを洪茶で癒やしつ、十時半頃明日の予想を語りながら床に入った。（三重藤三郎）

七月二十四日 信濃四ツ谷く白馬岳

四時半に目が覚めた。昨夜の山には珍しい蚊の襲撃に一晚中悩まされていたので、布団の上で起き上がった誰もが眠そうだ。

宿の者が、「今日は上天気だ」

という。外は霧が白くまだ薄暗い。外へ出て小川で顔を洗う。しばらくすると霧が消え始めた。うすぐ見えてきた白馬連峰は刻一刻とその山容を明らかにしていく。下界はまだ薄闇が残っているのに、山はもう朝日を浴びて輝いている。樺色の山肌、真っ白に輝く大雪溪、何と素晴らしい色だ。形だ。あの山を今日征服するのだと思うと我々の胸は躍る。六時半、身作りも厳重に一行十名、目の前遙かにそそり立つ白馬の頂上目指して二股の宿を出発する。

素晴らしいブナの原始林を辿ること三時間、満ちた水の音に歩みを早める。昼なお暗い森林地帯が尽きて、日の光がかつと目を射る。足元には大石がごろごろしている沢に、急流が真っ白い飛沫を上げている。氷のように冷たい大雪溪の雪解け水だ。眉を上げれば大いなる山のひだを縫って、大雪溪は白布のごとく続いている。この沢

で小憩を取りつつ、今朝宿で頼んできた案内人を待つ。やがて案内人の丸山君が追いついてきて一緒になる。丸木橋を渡って対岸へ登ると白馬尻の小屋へ着いた。午前九時半だ。ここで弁当のむすびを半分食べる。十時出発。一町ばかり登るといよいよ大雪溪へかかる。しっかりとカンジキを足へ着け、第一歩をザクツと硬い雪の上に踏み出す。この万年雪の表面は風雨で波状の紋を描いている。長さ二十数町の雪溪は二十度または三十度の傾斜を保って、真つ直ぐに上に延びている。ともすれば滑りがちで歩きにくい。ピッケルの足をザクツザクツと叩き込んで、カンジキの三本の爪を叩き込むように踏みしめて登る。雪溪の途中まで登ったとき霧が出てきた。太陽は隠れ枝のように分かれている。小雪溪の方から暖かい風と冷風が交互に吹いてくる。霧は煙のように雪の面を這ってくる。我々は喉が渇くとピッケルの頭で雪を削って口に入れる。左手に雪溪を根に下ろしてそそり立った数百呎の岩山がある。杓子岳だ。そのそそり立つ大絶壁からはときどきガラガラと岩の欠片が崩れてきて雪溪の縁に止まる。幅二百呎を超える雪溪の中央にも、ときどき大岩が転がってくる。やはりあの崖から転がり落ちてきたものだろう。

十二時に大雪溪を登りきる。実に二時間を一回も休まずに登ったので相当こたえた。下を振り返ると遥か下まで続いた真つ白な雪の上を、ポツリポツリと蟻のように人が登ってくるのが見える。一息入れてまた登る。今度は小雪溪にかかる。幅約三十呎ばかりの雪溪を横切るのだが、傾斜は四十度近く両縁にはクレバスが口を開いている。雪が緩んでいてカンジキの効きが悪い。滑れば百呎下まで一

気に落ちてしまふだろう。

案内人の足跡を一つ一つ踏みしめ、ピッケルを用い、やっと横断する。ここを過ぎるともうお花畑だ。赤、黄、白、紫とりどりに、その鮮やかな色を競っている。高山植物の美しさは下界の花の比ではない。これこそ天上の花園である。この花の中で残りのむすびを食う。後は頂上まで比較的なだらかな道だ。一気に小屋まで重いリュックを運び上げて登る。霧がまた辺りを包み始めた。しかしもう頂上の小屋は向こうに見える。自然に元気が出て足が速くなる。

小屋へ着いたのは二時。ここでリュックサックを下ろして身軽になり、頂上を極めに行く。頂上まで約二百呎。なだらかな石ころと這松の多い斜面だ。霧は益々深くなる。ふと前方の這松の間をひよこひよここと歩いていく褐色の鳥を見つめる。雷鳥だ。追いかけても羽が弱いのであまり飛べない。頂上へ行つたが霧が深くても見えない。小屋へ戻って疲れた足を伸ばしたのは三時だった。四時頃夕立がきたが、夜はすっかり晴れて山の満月が美しかった。(渡辺太助)

七月二十五日 白馬岳く祖母谷温泉く宇奈月

「おい、起きるんだってよ」

という声に目を覚ましてみると、もう仲間の者は皆起きています。時計を見ると三時半少し過ぎ。薄暗い中で支度をして靴を見つけて履く。外へ出ると寒くて思わず身が引き締まってくる。さすがは二九三三呎、群がるアルプス連峰だ。まだ早かったので辺りは見えなかつた。私たち一同は顔を洗いにいった。しかし一人一人小さなヒ

シヤクに一杯の雨水で洗うのだ。だから顔もそこに洗い、飯を食べて支度を終えた。四時十五分いよいよ頂上出発だ。皆一夜で元気を回復したらしい。案内人を先頭に一同一列になって岩石の道を下り始めた。見上げればうつすらと明るい空に未だに眠る崇高なる山ひだ。何という荘嚴な姿だろう。何という気品高い大自然の沈黙だろう。山、山こそ確かに美しいところだ。彼の都会の埃の中に住む人たちには、実に味わわせてみたいところだ。朝の山は特によいのだ。その落ち着いた偉大な美。今やまさに明けんとする山の崇厳さに対していると本当に何ともいえない気持ちがある。

下りは実にスバシク早いスピードだ。四、五十分も下ったであろう。足の関節が痛くなってきた。もう辺りはいつの間にか明るくなり、前方には悠然と横たわっているのは北アルプスの代表格、槍（注・剣岳）の雄姿だ。尾根が平らに連なっているその中に、一人群を抜いて立っている雄姿の槍。今や開け放たれた今日の運命の前に、紫色濃く浮かび出されてきた。また雲海を隔てた向こうには、立山連峰、怒涛のごとく重なる北アルプス、南アルプスの山々の雄姿。一同はこれをカメラに納めて一休み、この辺一帯は可憐な高山植物の黄、赤、紫色とりどりの草花が今を盛りと咲き誇っている。やがて白樺や熊笹の小道を約一時間半にして七時半清水小屋に着き、三十分休む。祖母谷温泉に向かう途中、黄色い煙りを吐く噴口を見ながら道を急ぐ。この辺から道は実に危険を極め筆舌に記し難い。足を削るような溪流の響き、その上に架した吊り橋。ちよつとでも足を滑らせたら千尋の谷底。この辺一帯の谷は泉の出るところと聞く。水量も次第に増し、清い水が玉と碎け落ちる様は、実に

と聞く。水量も次第に増し、清い水が玉と碎け落ちる様は、実に壯観だ。一人一人順次に渡るあの吊り橋。これがこの登山最大の苦手だ。谷君を先頭に、細淵君と自分と順次に渡った。間もなく小屋に着く。一同はここで昼食。電車の都合上昼食後直ちに出発。鐘釣へと強行軍。途中より日本電力軌道に沿って通っている鉄道に乗った。約二時間半にして宇奈月駅に着き、宿へと急ぐ。（大河原文三）

七月二十六日 宇奈月へ帰郷

九時半頃我々はこの町のはずれにある鱒の養殖場を三十分わたり見学する。十時頃この町にもさよならして電車で三日市（注・黒部駅）に向かう。ここで我々は直江津行きに汽車に乗り込み、途中車中から親不知の断崖を見、昔日の面影を偲ぶ。

直江津着が十一時半頃であった。長野行きに乗り換えるには三、四十分時間があった。その間に先生や一行の二、三の者は、構内で売っている美味しそうな名物そばを見るや、直ちにパクつく。先生たるや四、五杯は悠々である。我々は先生の健食振りに驚嘆した。

その中に長野行きの列車はホームに入った。我々はこれに乗り込み、長野に着いたのが午後四時頃。直ちにタクシーを使って善光寺に参詣する。やがて駅前食堂で夕食を済ませ九時半ここを出発して川越に向かう。車中の一夜は皆あの晴れ渡った中の名山を偲ぶ夢であつたらう。大宮に着いたのが四時半頃。ここから自動車で川越久保町に向かう。久保町着が六時頃。私たち一行は諸先生に深くお礼を述べて元氣よく解散した。（喜多信之）「学友会会報」三十三号

一九三八年（昭和十三年）

山行記録 燕・槍登山記

七月二十二日

午後一時我ら一行は久保町駅に集合し、葛宗先生、川田先生、三上先生に引率され、橋本先生の力強い御見送りに感激しつつ、臨時バスで久保町駅を出発し、約三十分にして大宮駅に着き、高崎線で一路アルプスに向かった。

(深田)

七月二十三日 有明く中房温泉

横川……、横川という声で目が覚めた。外は未だ薄暗い。ひんやりした風が頬に当たる。高原地方へ掛かったのだろう。汽車の速力は非常に遅い。七時半頃小海に着き町を見物した。

小海を出ると汽車は高原地方を進むので、非常に気持ちがいい。菖蒲のような花が咲いている。高原一面に青い草が生えている。汽車は限りなく続く草木の間を、自分と自分の夢想とを乗せて走る。落葉松と矮小の白樺が沢山ある。中央線に入ると間もなく諏訪湖が見え出した。午後二時頃松本に着き先輩荻野さんと一緒になった。二時四十四分有明に着く。

山のガイドと一緒にいる。窓ガラスの少しもない小さい自動車に乗り、凹凸な狭い山道を行き、四十分くらいで北アルプスの登山口に出た。登山路は山腹を崩して作ったので、登山に相応しい景色を展開する。所々に水が湧き出している。

一時間くらい登ると村落が見えた。そこから路は非常に狭くなった。少し行くと煙が見え出した。五、六町行くと中房に着いた。皆家や友達に手紙を書いた。夜は非常に寒い。明日はいよいよ待望の槍つげだなどと思つて安らかに寝に就いた。

七月二十四日 中房温泉く殺生小屋

未明四時半に起きる。外は暗く山の朝とはいえ室内の温度は七度である。中房から燕まで約六料路は急坂で、一同大変苦しんで登った。雑木が生い茂つて木の葉の間を美しく日光が透かしている。梢の間に遠く霊峰富士が隠見し、ときどき山やま鶯の鳴く音が我らの疲れを癒やす。

合戦小屋に着いた時は八時半で、雑木はなくなり這松が姿を見せていた。間近に雄峰燕の姿が眺められ、四方の展望が開けてきた。九時半に燕山荘に着いた。頂上からの展望は非常に雄大である。東には浅間の噴煙が見え、南には南アルプスの銀嶺が連なり、西には北アルプスの主峰槍ヶ岳が天に向かっていている。山荘を出発しいよいよアルプス銀座に入った。

尾根伝いだから歩くに楽だ。一同元気で正午十二時に大天井に着き、ここで昼食にした。彼方に燕が見え、今きた道が隠れたり見え

たりしている。昼食後直ちに出発し、再び雑木の中へ入った。午後
の太陽はいやが上にも照り、水は少しもない。高山植物を踏みつ
つと西岳小屋へきた。ここで水を求め、少し休んで今日の最後の
難コース殺生小屋へと猛進した。少し下って稜線を進む。道は難所
の連続で、所々鉄鎖を伝って登った。足元に白雲が広がり、寒くな
ってきた。日が暮れかかったので、急いで登った。岩の間を抜けて、
やつと六時殺生小屋に着いた。周囲も暗くなり、ただ日本のマッタ
ーホーン槍岳のみが聳えている。明日の頂上登攀に備えて早く床に
入った。

（野村）

七月二十五日 槍ヶ岳く上高地く中ノ湯

午前三時半起床。支度を整え、四時槍岳征服に出発。外は実に寒
い。頂上まで二キロ外は真つ暗だ。ガイドを先頭に登る。道は急傾斜
だ。五十メートル登ると一休み。健脚揃いに一同、昨日の疲れが癒えぬら
しい。やがて大槍の真下にある肩の小屋の近くまで来た。ここにも
二、三の客がいた。大槍征服の用意をしているらしい。岩にへばり
付いて登る。または鎖に一命を託して登る。早や東天は紅色だ。頂
上は間近になった。

岩の間を通って終に頂上に辿り着いた。嗚呼偉なるや、槍の先端！
ついに征服せり。広々とした山上の蒼海真黒の重層を貫いて、天高
く躍り上る紅の閃光せんこう。がぜん雲はどよめき乱舞する空。我らはただ
自然の魅力に酔った。指呼の間にある焼・穂高・立山の雄姿、四方
に呼応する山々、荘嚴無比な御来光。山頂に名残を惜しみつつ、元

気に小屋へ帰った。

朝食を取り、七時上高地へと下った。途中雪渓滑りの杜快さを味
わいつつ下った。付近の山々にこだまするクレバスの雄叫びを聞き
つつ、益々元気に歩いた。休むたびにクレバスの流れを汲んで飲ん
だ。自然の味、女神からの賜物だ。槍沢小屋を通過し一路小屋へと
進んだ。ここからは平地と変わらない平坦な道で、右手に流れる清
流の雄叫びに歩調を合わせながら歩いた。

正午上高地の入り口とも言える徳沢小屋で昼食して、一時半ここ
を出発し、明神池で一休みした。とても美しい風景だ。やつと河童
橋に着き、ここでガイドと別れた。三時頃最後のコース中の湯へと
進んだ。途中大正池、焼岳の美しさを称えつつ進んだ。山を切り開
いた道、またはトンネルを通って中の湯温泉に五時半頃着き、温泉
で疲れを癒やし、愉快に夕食を取り、十一時頃床に入った。

（三重藤三郎）

七月二十六日 中ノ湯く島々く長野

六時頃全員起床。梓川の流れが耳に入る。流れの音は山の温泉情
緒を多分に含んでいる。

朝は寒い。今朝は珍しく雨が降っている。起きて直ぐ湯船に浸り、
朝食を軽く取って、八時頃外被や油紙を着て出発した。懐かしの上
高地を後に、梓川の流れに沿って、大馬力で沢渡さわたまで行くのだ。我
らはときどき未練がましく後を振り返った。そこは雨に煙って、ほ
んやりと穂高・焼の山々が名残惜しそうに見えた。清水山吹のトン

ネルを通り、九時五十五分に辛うじて沢渡に着いた。ここからバスで四里、先の島々に向かった。バスガールの説明する屏風岩、親子滝を車窓より眺めつつ、島々へと向かった。バスガールが地方訛りのある言葉で、

「ここにありますのは、世界学会に一大センセーショナルを起こしましたヘットナー博士の発見しましたヘットナー石で、氷河研究に重要な資料で御座います」

と説明した。(注・当時この岩はモレーンと断定されたのだが、後に否定された)車が一寸停車したので、十分見学することができた。やっと島々に着いて土産を買い、松本行きの電車に乗り、十二時近く松本に着いた。食堂で昼食をした後、松本城址深志公園を見学した。ここで先輩萩野氏に別れた。

午後三時三十分長野へ行った。五時半駅前食堂にリュックサックを預け、バスで善光寺に向かった。善光寺に参拝し、駅前食堂に戻り夕食をして、八時四十分までの自由行動で土産を求めた。午後九時二十七分長野を立ち、一路大宮に向かった。長野にて萬宗先生と別れた。

(横関越)「学友会会報」三十四号

取材寄稿 槍沢雪溪の命拾い

徳田一郎(一九四〇年卒)

四年)と、三回も登山部の山行に参加しました。白馬の大雪溪を登ったとき、槍ヶ岳へ登ったとき、針ノ木峠から立山に登った帰りには下呂温泉にも回りました。私は山登りが大好きでした。二級上の先輩に飯能の寺院の萩野さんという人がいて、この人に連れて行ってもらったようなものでした。萩野さんとは一泊で近くの山登りにも行きました。

それにしても、川中の登山部というのは、若い世代の集団だといふこともあって、無茶な登山をやっていたものだと思いますよ。

槍ヶ岳の雪溪から滑り落ちたことが、今になっては思い出すことです。あの雪溪の下りはどうにも難しかった。途中でゴザを敷いて腰を降ろして休もうとしたのです。そのとたん私の体は雪溪を滑り落ちてしまつて、全く止まることができない。体の左側には大きな岩があつて、そこに雪溪がパツクリ口を開けていました。滑り込んでは大変なことになる。

私は必死になつて、滑り落ちながらもんどりうつて、反対側に転がったことだけを思い出すのです。そして雪溪が切れて岩になつたところで、私の体は大きくジャンプしました。そして見守っていた強力に抱きかかえられるようにして、ようやく止まったものでした。

あれからしばらくは、そのことを思い出すたびに身震いがしたほどです。

私は旧制三年(昭和十二年)、四年(昭和十三年)、五年(昭和十

旧制中学を卒業してから大学に入って、富士山にも何度か登りましたが、槍ヶ岳を超える怖い思いはありません。よくぞ事故もなく、



1938年 燕岳から槍ヶ岳 槍沢にて

皆が無事で三度もの夏の長期の山登りを成功させたものだと、感心いたします。

普段の私は陸上部に所属していました。短距離の二百メートル走では、埼玉県の代表になって、神宮大会に出場しています。あの頃は二十

三秒くらいで走れたでしょうか。陸上競技にしても登山にしても、私はそういうことが大好きでした。

大学は早稲田に進みましたが、その三年秋に、大学のリーグ戦を見に行こうと、講義を午

野球場に向かったことがありました。ところが球場では空襲警報が鳴って試合は中止、私はまた大学に戻りましたが、なんと昼飯を食べた食堂が、空襲で焼けてしまっていたのです。

東京に最初の空襲があったときでした。もし早弁をしなければ私はあの空襲で命を落としていたでしょう。槍ヶ岳の時といい、私は悪運が強く恵まれていたのだと思っています。

兵隊に召集されたときも、九段の近衛第二連隊では、皇居の北門から宮中を護衛するのが任務で、外地へ召集されることもなかったし、終戦から数日間は、貯えていた残りの食糧や衣類を持ち出して、悠々と川越に戻れたものでした。旧制中学では、陸上競技と登山と、楽しい思い出ばかりでした。



ミヤマキンバイ K.O

一九三九年（昭和十四年）

昭和十五年は、皇紀二六〇〇年である。転載している山行記録が載っている学友会（生徒会）会報の表紙は、それまでの西暦表示から、皇紀の表示に変わった。戦時色が強くなった頃である。

この年の山行は、針ノ木谷から黒部へという、大クラシックルートだった。針ノ木越えは、戦国大名・佐々成政ささなりまさの冬の針ノ木越えの逸話として今でも紹介される。明治になると、このルートは馬車で通行できるように拡張され、日本最初の有料道路として整備されたようだが、数年で雪崩れと共に崩壊した。大沢小屋が、交通の要所として大繁盛したらしい。

登山者にとって「黒部を越える」というのは、大きな登行意欲を掻き立てられる。しかし今の時代に、このような登山をする人は少なくなつた。立山へ下山しても、帰郷まで三日かかっている。

山行記録 立山登山記

七月二十二日

指折り数えて今日のこの日を待っていた我々一行十名は、いざとばかりに地下足袋、巻きゲートルにリュックサックで身を固め、張り切つて午後七時二十分新田町（注・本川越）駅に集合した。

やがて葛宗先生、三上先生に引率せられ、吉村先生、小松先生をはじめ諸先生の力強い御見送りに感激しつつ、午後七時五十分川越駅を後に勇敢に出発した。

新田駅より高田馬場、そこから引き返して新宿に行った。新宿に着いた頃はもはや時計は九時を指していた。同四十分我々は臨時の準急列車で一路アルプスに向かったのである。我らは明日からの登山を空想に抱きつつ、あれやこれやと雑談にひたっていたが、何時しか眠りについてしまった。
（四年 小峰三郎）

七月二十三日 針ノ木小屋へ

朝四時大町駅に着く。町の旅館で朝飯を取りカンジキ、ゴザ等を買っている中に、桜井さんという強力が来たので、いよいよ出発である。今日即ち第二日の予定は、大沢小屋までである。もうすつかり日が照り、大町を囲む雪を頂いた山々が朝日にくつきりと浮かび出し、とても美しい。

約一時間半歩いて登山口に達する。傍らの社で休む。綺麗な清水がこんこんと湧いている。非常に冷たく、氷のようである。小憩の後出発。まただらだら坂である。我々は前途多難なるを思い黙々として歩む。

一時間、二時間と歩いては休み、冷たい清水を飲んで進む。次第にリュックサックが重くなる。腹がすいてくる。十一時半河岸で昼食を食う。全くうまい。零時半頃出発。次第に道が険しくなる。我々の位置が高くなる。皆次第に疲れてきて、小屋はまだかまだかと強

力さんに聞くようになる。

背が汗でびっしょりになる。二時頃ついに大沢小屋に達す。小屋で番茶をもらう、また別格の味である。一時間くらい休み、また眠る。

すると途中で追い越した天王寺中学の一行が来る。はじめは小屋で泊まる予定であったが、まだ時間も残り、疲れも治つたので、我々は大いに張り切つて針ノ木小屋まで行くことにした。小屋は峠の上にあるのである。二、三十分進むと大雪溪に出た。ここを上り詰めれば峠である。皆カンジキを付け、武装よろしく雪の上を進む。三上先生が傾斜を測ると、二十三度であった。二十三度といえば緩いようだが、どうしてなかなか登るには骨が折れる。しばらく登ると上から霧が下りてきた。のどが渇くと雪をほじくっては食べながら進む。次第に霧が深くなる。先が見えなくなり、疲れて息苦しくなる。トンボがばたばた落ちる。寒くなる。眼鏡が曇る。難行軍だ。

下の方からオーイ、オーイと呼ぶ声がする。道が分からなくなつて呼んでいるのであろう。こちらからもオーイ、オーイと呼び返す。霧がますます深くなり、傾斜が強くなりつる滑つて全くの難行軍だ。

約二時間後、目の前がパツと明るくなって霧が晴れると、すぐ目の前が峠だ。万歳。ついに到着したのだ。我々は疲れも忘れて、雪中を滑つて遊ぶ。それから小屋に入って毛糸等を着て夜に備える。八時頃に寝付く。

（四年 谷進）

七月二十四日 針ノ木峠より五色小屋まで

午前四時起床。スエターを着込んで外に出てみる。夏とはいえ海拔二五四一メートルの針ノ木峠では、まだ冬と同じで思わず身が引き締まる。まだ太陽は出ず、雲海を隔てて彼方には白馬岳、南方には日本のマッターホルン槍ヶ岳が鋭い穂先を見せ、続いて常念、燕、水晶、赤牛とそれぞれ三千メートル級の山々が連なっている。御来光は山の陰で思うように拝めなかった。

五時小屋出発。ガイドを先頭に二列になつて急坂を下っていく。下りは実に物凄いスピードで、四、五十分も下ると足が痛くなる。やがて沢に出た。これを針ノ木谷といい、雪溪から流れ出た水は次第に水高を増し、川幅も広くなり、川の中の散石伝いに右岸から左岸へ、左岸から右岸へと十数回も徒渉する。

途中にて岩魚釣りに興じている人に会う。やがて黒部川の本流に出、有名な平の籠渡しに着く。名は昔のままであるが、今は吊り橋となつている。吊り橋を一步一步渡るとき、足場の板は揺れ、脚下の激流は青黒く矢のような速さでうねりつつ流れる。実際足はおのき、心臓は口まで躍り上がってくるようである。

やつと橋を渡れば、右に平ノ小屋に出る。針ノ木峠より四時間。そこに一時間休んで昼食をする。平ノ小屋に別れを告げ、西を指して電光形に森林の中を登る。谷川の響きは左下の方から和やかに聞こえ、銀鈴を振るような駒鳥のさえずりは登山者の心を慰めてくれる。

一時間近くの登りで刈安峠かりやすに出た。ここまで来て初めて北方に立山本峰の雄姿を仰ぐことができた。なおも一時間半ばかり森林帯を行くと、雪の間に這松が点在している緩傾斜の高原に出た。ここが天上の楽園といわれる五色ヶ原で可憐な高山植物が美しくも風に震えている。

高原を漫步すること三十分、やがて二階建てのなかなか立派な小屋が見え始めた。我々より先客が大分来ていて、我々は二階の薄暗い部屋に陣取った。

窓から外を見ると、テントが散在していて、テント場には夕飯の煙が立ち上っている。その中に雨が降り出し、山々は雨にすっかり煙つて霞んで見える。我々は明日の天気を心配しつつ床に入った。

(五年 松本勝輔)

七月二十五日 五色ヶ原く立山・雄山く富山

本日のコースは五色ヶ原く富山。

フト目が覚めると赤いランプはこの古臭い小屋に、ポーツと鈍い光を放っている。窓を開き、本日の天気はと空を覗くと、目の前に立山は中腹を雲に覆われながらも、天空高く槍のごとき頂上を現している。昨夜から心配の天気はどうやら心配には至らないようである。窓より進入する寒気に思わず身震いする。朝だけは下界が恋しくなる。

間もなく食事を済ませ、午前六時にはリュックサック、ピッケルに身を固め、いよいよ本年度登山の本望たる立山頂上に向かつて足

を速めた。竜王山より浄土山に向かう途中、我々が願っても見られなかった雷鳥が、真っ白き雪の上に飛び歩いているのが見られたことは、我々にとつて忘れられぬものとなった。

後、雪中あるいは岩の間などの難路を征服し、十時には立山直下に到着。荷物を置き最後の登りに向かった。三日間の苦節報いられて、一時間後には全員無事に頂上に到着。神社を参拝及び、川越中学校万歳を声の出る限り叫び、三十分休んだ。その間に我々はピッケルの柄に「立山頂上」等の焼き印を押した。

間もなくして後ろ髪を引かれる思いで頂上を後に、一路富山に向かった。途中道を間違えた。しかし葛宗先生の御判断の下に、我々は登山中最大の難路を征服して、ついに午後七時富山に到着。十時頃まで散歩市内見物した。そして十時半には立山を征服した喜びに、また明日の希望に満ち満ちて、各自思い思いの夢路を辿った。

(五年 徳田一郎)

七月二十六日 富山く下呂温泉

六時起床。支度を整えて我々一行は富山の町を後に、十時四十分発の汽車で一路下呂温泉に向かった。我々を乗せた汽車は海拔一千メートルある高地をあえぎあえぎ進んだ。途中数十もの大小トンネルを通った。この辺は山といつても大した山はなく、雪を頂いた山などは一つも見当たらなかった。午後の三時頃辛うじて下呂駅に着いた。

生徒を停車場に待たせて、葛宗、三上の両先生は旅館を見つげに

行った。間もなく我々は水明館という大きな旅館に案内された。直ちに温泉へ入って疲れを癒やし、館内にある売店で各自思い思いの土産を買い、愉快に夕食を取った。

夕食のとき雷雨があったが、直ぐに止んでしまった。女中の話によると、この地方では毎日雷が鳴るのだそうだ。十一時頃安らかに眠りに就いた。（四年 牛窪友次郎）

七月二十七日 下呂く多治見く伊那溪谷

午前五時全員起床。直ちに湯槽に浸る。泡まで澄み切った湯、肌に壮快の気分を浸透させる湯、及び窓越しに清流に対峙した。対岸の岸から山腹にかけて発達している温泉町からは、数条の白い湯気が立ち上っているのが見渡せる。それは山間僻地の温泉情緒を多分に含んでいる。軽く朝食を取り、最後のコース下呂く中津に向かうべく停車場へ行く。昨夜の夕立後における夜景が余りにも美しかったので、すっかり心を奪われてしまったのか、後ろ髪を引かれる思いがする。

しかし明日は一週間ぶりに故郷に帰れるかと思うと、足の軽いのを覚える。七時発の列車に乗り込む。御嶽山から下山した人々か白装束の人々で車中は一杯だ。やがて汽車は谷川を右に左に阻まれた山間を切り開きつつひた走りに走る。

車窓からの風景は実に気持ちが良い。川幅も大分広くなってきた、真っ青に淀んだところさえ見せている。これを山水の美というのかしら。走ること三時間にして美濃太田に着く。さらにガソリンカー

に乗り換えて多治見へ一時間、何処にもありがちな平凡な景色。

多治見はさすがに陶磁器の都だけあって、近代的大工場のあるのが目に付く。ここより中央線に乗ること約二時間、車中では皆予定コースが大部分終わったので熟眠した。中津駅に着く。すぐさま駅前食堂にて腹を作り、最後の見学地たる伊那溪に向かう。

だから坂を下り、やがて待望の伊那溪に着く。しかし風景も天下の絶景伊那溪というが、一向に変わりが無い。聞けば場所を間違えたとのこと。皆残念だったが時間が足らぬので行くのは止めて、涙を飲んで引き揚げ駅前にて自由行動を取った。

夜七時発にて塩尻に向かう。思えば以前から期待していた一週間の登山も、瞬く間に過ぎてしまい、少し物足らぬ気さえもするが、何しろあの高峻な立山へ若輩の未経験の者がよく登れたものだど驚き、非常に嬉しかった。塩尻にて東京行きに乗り換え、一路東京へと汽車は驀進を続けた。（四年 木下謙二「学友会会報」三十五号）



クロユリ K.O

一九四〇年（昭和十五年）

昭和十年代の合宿は、毎年のように北アルプスで行われていた。

この年は、槍ヶ岳から奥穂高までの縦走を計画したが、悪天候に見舞われた。ガスの中を槍の穂先まで登頂したものの、下山組と縦走組にパーティーを分けざるを得なかった。

槍ヶ岳登頂の様子を、健在の牛窪友次郎（一九四一年卒）に聞いてみたが、ガスが晴れたのは下山のほんの一瞬だけのこと、カメラを持っていった彼は、急いでその瞬間に撮影したことを覚えていた。

下山組は、雨天の中、上高地へと下って行ったが、学校で使用する運動会用の大型テントを持参して、そこに宿泊した。当時テント宿泊は珍しい経験だったという。また上高地へは、島々からバスで入山している。

槍・穂の縦走路は、半世紀以上経つ現在でも、一般路としては最も難易度の高いものである。その意気や軒である。

山行記録 槍ヶ岳から穂高岳

七月二十五日 上高地へ

指折り数えて待っていた今日この日がついにやってきた。先輩山崎さんを合わせ、我々一行十名は羽賀先生、岡田先生に引率されて

午後六時発の川越線で飯能に行き、八高線に乗り換えて八王子にいった。この駅で代永先生と一緒にになった。七時四十七分の下り列車までまだ時間があるので、八王子の町を見物してきた。やがて汽車がきた。どの車両も皆超満員だった。世に言う鉄道地獄とはこの事か、隅から隅までぎっしりとすし詰めだ。暑中休暇で郷里へ帰る者もあるが、大部分は登山者である。僕は車と車の間に腰を下ろして外の景色を眺めていた。

松本から島々まで電車に乗り、島々から上高地までバスに乗ったが、このバスがまた物凄く込み合い、車のときの荷物掛けへ乗っている者もあった。途中故障、故障、パンクで二時間も遅れ宿に着いたのは八時頃だった。（四年 牛窪友次郎）

七月二十六日 槍ヶ岳

曇っている。前穂、明神、奥穂、西穂に連なる一万余尺の威圧的な岩稜は、黒く濃く峠だち、誠に荘厳で神秘的である。六時半出発、目的地は肩の小屋である。

上高地から徳本峠の路を一時間近く辿ると、白沢の追分に出る。右すれば徳本峠、左すれば槍ヶ岳の分かれ路である。路は梓川の左岸をどこまでも北に向かっている。少し行くと丸太のベンチが置かれている。ここは梓川の河原より高いところで脚下に光る白砂の河原、対岸に緑したたる化粧柳の林、そしてその上に毅然として衝立ちそぎ落ちたような明神岳の山稜が渾然として一つの芸術品をなしている。

しばらく歩くとまたベンチがある。案内人がいう。

「ここを俗に槍見といい上高地から登ってきて初めて槍ヶ岳の山容が見えるところです」

と。あいにく霧で、槍ヶ岳の英姿は見えなかった。間もなく一ノ俣小屋に着いた。十時二十分だ。お茶をもらって飲む。綺麗な大きい小屋である。立つ頃三人の外人が入ってきた。男女とも凄い体で、派手な姿をしていた。顔から推してスラブ系ロシア人だと先生はいう。二ノ俣からグツと斜面が急となり、流れも狭く滝の連続である。路端に赤沢岩小屋がある。昔の槍ヶ岳登山者にとつては思い出深いところだという。森林帯を抜けると槍沢小屋に着いた。この小屋は槍ヶ岳では一番古い歴史を持った小屋だそうだ。

ここで昼食を食う。十一時半だ。大きなむすびを頬張っていると寒くなった。風が強くなった。日向ぼっこをしながら写真を撮る。一時間休憩してまた歩き出す。路は段々急になり、足も重くりユックサクも邪魔になってきた。誰も無口になった。急カーブすると突然、

「槍だ」

と前で叫んだ。足元に注意していた眼をほとんど反射的に上げる。おお待望の槍が初めてその全山容を天高く現している。

「おお」

と思わず快哉を叫ぶ。また槍の肩から、大槍・中ノ岳にかけての壮麗なカールも眼を喜ばせた。皆急に元気になってはしゃいだ。この頃から先生たちが遅れ始めた。景色のよい岩の上で待っていると、

案内人が静かに小唄を歌う。町のレコードと違って実に情緒の深い

ものである。梓川の冷水に喉を潤し、キヤラメルに元気を付けられながら、あくまで雄々しくしかも静寂なあたりの景色に溶けて行く。

この小唄を聞くときは、羽化登仙うかちせんとでもいった気持ちだ。段々岩が多くなってくる。雪渓もある。槍はすぐ目の前に聳え、大槍小屋、殺生小屋も見える。その中間に坊主岩といって暗い深そうな岩穴があり、そぞろに昔を思わせる。歴史によればこの穴は文政九年八月、播龍上人ばんりゅうしやうにん（注・播隆）が松本から小倉村（注・安曇野市）を経て上高地に入り、この坊主岩小屋で行をなし、再三槍ヶ岳の頂上を極めて飛驒方面に下ったということである。だから槍ヶ岳の初登攀は播龍上人によつてなされたわけである。この坊主岩辺りから肩の小屋までは相当な急斜面のため、約一時間ほど路を電光形にとる。風は益々強く、寒くなってきたので皆ジャケットを着る。実に登りにくい路だ。しゃくにさわる。二進一退というところだ。

小屋の人が迎えに来てくれた。四時頃までに肩の小屋に到着した。皆ホッと安心する。もうその頃は暴風霧でやがて雨も混じり荒れ狂っていた。小屋は大した混雑で二百人も宿っているという。六時頃床に入ったが隣の人は肩が重なり合い、向こう側の人とは頭がぶつかるほどである。関西人が多く盛んに関西弁でたわいもないことを喋っている。爆笑が方々に起こる実に賑やかで眠るところではない。いつか自分も隣の人と親しくなつて話し合っていた。先生たちは案内人と四人で窓越しに嵐を眺めては弱ったように、明日のプランについて話し合っていた。

（四年 坂西 登）

七月二十七日 停滞・下山組

ピューピュー風雨の音に目を覚ます。昨夜来の風雨はまだ止まない。小屋は一杯で足の踏み場もない。今日の予定は槍穂高縦走であるが、この天候では危険なので一日ここに泊まって天気晴朗のを待って、明日出発することにした。そのためこの縦走は希望者だけにしたので、生徒は四人、先生、先輩、ガイドを合わせて七人だけになってしまった。我々は下山の者に荷物を渡し必需品だけを持って行くように支度して下山の者を送った。残った者は小屋の一部に席をとって便りを書いたり書物を読んだりしていた。一時は減ってきた。一同は一日の退屈を払いに外に出た。夕日は赤々と輝いている。「明日天気か、夕日が紅い」。幼児の歌を思い出して、まだ見ぬ予定のことを想像する。昨日登った槍ヶ岳がはつきり見える。皆嬉しそうに小屋に入り、床をとって明日の夢路の辿りについた。

(四年 田中昌次郎)

七月二十九日 槍ヶ岳く大キレット

四時半に目が覚めた。天気を心配しながら窓から外を眺めれば、今日は昨日とは打って変わって良い天気である。体の疲労も抜け、一行七人は元気一杯である。まだ太陽は出ず、あたりは薄暗く三ヶ所の高所にあるので実に寒い。外に出ると強力らしい人が、「今日ええ天気ですぜ。ひよっとすると午後夕立がくるかもしれね

えが」

などと話している。我々四名(坂西、間々田、田中、松本)は槍の頂上(三一八〇m)でご来光を仰ぐ。殺生小屋からはまるで蟻のごとく一列になってジグザグを登ってくる、ああ何たる荘厳な眺めぞ。我々一同は思わず驚嘆の声を發した。一昨日登ったときは風・雨・霧で視界は全くきかなかった。太陽は今まさに戸隠山から紅燃ゆるがごとく輝きだした。我々のシャッターは盛んに活躍する。太陽の先端が雲上に顔を出すと、今まで薄暗かった辺りはたちまち明けたれ、雲海は波のごとく輝き、この光景は正に山を愛し山を登ったものみに味わえられるのである。展望はまさに百八十度で南方には本日行く穂高連峰が連なっている。展望をほしのままにし、辺りの風景をカメラに納め下りは二十分で小屋に帰った。ちょうど朝食がきているので急いで食べ、六時には各自用意万端整って、いよいよガイド奥原さんを先頭に肩の小屋を後に、アルピニスト憧れの穂高縦走に出発した。

今日は尾根を上下するのでそれほどアルバイトを要することはないが、危険なところが多いので神経を使うと奥原さんはいう。大喰おほば岳(三一〇〇m)はほとんど登りらしい登りを感じず岩石に這松や高山植物の生えている間のよく踏まれた道をいく。約一時間ほどで中岳(三一〇〇m)の頂に出た。有名な穂高のジャンダルムも少し肩の辺りが見え始め、一同益々元気旺盛である。雪渓の水を水筒に詰め一休みしていると、昨日肩の小屋で我々のすぐ隣にいた姫路高校生が先から我々の後を付いてきて、今やっと追いついた。十分は

かり休んで一同ピッケルをリュックに差し込み戦闘準備は整った。南岳の頂上（三〇三三メートル）までは高山植物の咲き乱れた風の強い尾根を行く。南岳の頂上から見たキレットは実に物凄い。南岳の下りからいよいよ穂高らしく、山勢一変し直立数十傾の鋭鋒は、鋸の歯のごとく目前に展開した。直下の岩石を奥原さんにアンザイレンしてもらってやつと下り、ほっと一息入れる。

四年ほど前まではザイルを使用したとのこと。代永先生ならでも一同冷や汗をかく。これより縦走中屈指の難所として知られた「大キレット」に掛かるのだ。時まさに午前九時。右の方は直下数千尺の断崖で滝谷に通じ、左は横尾谷の本谷に落ちて、その間利刃のごとき痩せ尾根を伝うのである。時には土蜘蛛のごとく、時には蛇蝎のごとくに。かくして平地ならわずか三十分ほどの距離を三時間近く要することから考えても、いかにその岩壁登攀降の連続たるやを察するに余りあるであろう。

途中一つのパーティーに会い互いに挨拶を交わす。十一時五十分北穂高岳の頂上（三二〇〇メートル）に立った。頂上には五名のパーティーが昼食中である。我々も「今日は」と挨拶し昼食にする。脚下涸沢雪溪の下部には各大学のベースキャンプが散在している。所々で昼の煙が立ち上っている。あまりに壮大な展望に思わず快哉を絶叫する。西方に見える笠岳の秀麗なる展望はアルプス中この地が随一とのこと。ここに東京高校生遭難の碑がある。先程から昼食中の若きアルピニストは涸沢でキャンプをしているらしく、関西訛りの言葉で昨日は雨で薪が煙って困ったと話し合っている。約四十分休ん

で出発。これより涸沢岳の鞍部へは一時間ほどの下りである。岩石が崩壊し易く細心の注意を払いながら下った。今日は天気がよいので涸沢でキャンプを張っている連中も各岩場岩場へ出かけ、所々でピトンを打つハーケンを響きがする。涸沢岳の西尾根でも今五人の人々によってロッククライミングが行われている。我々はしばらく休んで見物した。ハーケンの響きは滝谷一杯に響き渡っていた。我々の方も手に汗を握る。涸沢岳の登りは縦走中の悪場ではあるが、今は三ヶ所に鎖が設けられ、可憐に咲く高山植物を踏みしめながら登る。しかし落石が多く冷や冷やする。涸沢岳頂上（三二〇三メートル）近くは、鉄線を頼りに背の突っ張りを利用して辛うじて攀じ登る。頂上から奥穂・前穂・ジャン・西穂の眺めは実に素晴らしい。中でも両肩を怒らした巨人の胸像のような格好をしたジャングルムの峻峰は、我々若人の登攀欲をそそる。

この頃よりややガスが出てきて、西側（飛騨側）はもはやガスで視界はほとんど利かない。穂高小屋はかすかに見え、人の動くのさえ見える。我々が「ヤッホー」と送ると、小屋の人々も盛んに「ヤッホー」と返す。落石を踏んで二十分で簡単に下ることができた。時に一時半。まだあまり客もなく我々は直に部屋の良いさそうなどころに陣取る。リュックを下ろし小屋の前の雪溪でグリセードの練習を行う。傾斜約三十度はあると思われる。小屋に入り布団に潜り込み明日のプランを練る。その結果明日は前案を変更してジャンから天狗沢を経て、上高地へ下るということに決定する。五時半頃ガスが晴れるようになり、ちょうど太陽は西の山陰に入らんとし、雲海

ができ実に素晴らしい。珍しくも真ん丸の虹が出た。傑作写真を撮らんものと盛んにシャッターを切る。夜は月が出る。下界の寒月のように冴えている。

(四年 松本保)

七月三十日 上高地へ帰郷

下山組は、上高地で午前二時頃余りの寒さで目が覚めた。岡田先生と佐藤さんが焚き火をなさつて、大部分のものは未だ昨日までの疲労で寒い中にぐっすり寝込んでいた。ただ一枚の雨で湿った教練用天幕を掛け、板の上に寝転んでいるのだ。寒いことはもちろんである。間もなく皆起きてしまった。直ぐ近くに同じく「キャンプ」を持っていった大阪商大生と共に焚き火を取り巻き団欒にふけた。話によると彼らは霧峰飛行場に行き「グライダー」の練習を行うのだそうだ。空には半月が枝間から我々の頭上に煌々と照り輝き、寒い大気が漂っている。

火の上に手製の網で餅を並べて皆で食べ、昨夜炊いておいた米を炊きながら夜の明けるのを待っていた。時々どこからともなく朗らかに歌声が闇の中から聞こえてくる。しばらくして淡々と明け始め、餅と米と豊富な缶詰で朝食を取った。

六時頃我々と一夜を仲良く語り合った商大生は、天幕まで「リュックサック」に押し込み、我々の元を去った。

我々も次後帰る支度を整え始め、日光に照らされた森林中で新鮮な山の大気を吸い、着々と進んだ。天幕を除く他は大体終え、十時頃まで自由行動を許され、河童橋付近で土産を買い集め、梓川の清

き流れ、氷のように冷たい水が雪崩れのごとく流れ、一生ここで住みたい気持ちがあった。

十一時半頃徐々に穂高周りの一行と一緒にため出発。「河童橋」近く来ると代永先生はじめ一行に会い、和気あいあいのうちに上高地島々行きバス乗り場に到達した。が長蛇までならないが二列の行列であつたので、我ら一行整然と尻に着いた。

三時半頃からうじて半分乗車し人間箱詰め感で梓川沿岸あるいは谷間の道を、揺られもまれて島々に着いた。残りの者を待ったが次のバスでこなかつた。上高地―島々間二時間の山道である。故障は持ち前である。我々は松本で待つことにした。電車で五時半頃松本駅に着き待合室で待った。

約三十分して残りの者も着き、駅近くの食堂で夕食をとり、各自名物の「リング」を土産に買い七時四十分発にて一路長野に向かった。

(山崎)「学生会会報」三十六号

取材寄稿 召集直前の白馬岳

牛窪友次郎 (一九四一年卒)

「余談ではあるのだが、当時登山をするというのは、旧制中学生のなかでも経済的に恵まれた生徒たちであつたことは間違いないことですよ。旧制一年に入学した生徒は、毎月の授業料の中から、およそ五十銭を修学旅行用に学内で積み立てをしていました。一年間



1940年 登山部同期（41年卒）の仲間 中央が薦宗先生 後列右から2番目が牛窪友次郎

それは六円。四年間で二十円相当になります。『当時の一円が今の一万円』だとすれば、相当な金額になる。ところが実際には、旧制四年で行われたその修学旅行は、参加しない生徒が三分の一くらいはいました。不参加の者には、積立金が返還になりますからね。当時の二十円という金額は、大金だったわけです。

多彩な職業の師弟が旧制中学には集まっていますが、養蚕農家の子供たちもいました。農家の中でも養蚕というのは、年によってカイコに当たり外れがあつて、繭が思うように育たなければ、養蚕農家は大打撃を被ることになりま

理由で修学旅行に参加できない友人がいたことも、確かなことでしたよ」

旧制中学を卒業した牛窪は、その後大学に進学し、大学三年（昭和十八年）九月に海軍に召集されることになった。専門は商科だったが、海軍飛行兵になった。大学にはわずかに二年半通っただけで、繰り上げ卒業となった。その召集される直前の八月に、彼は生涯三度目の登山を仲間と行う。

「いよいよ大学も卒業だからと、これが生涯最期の登山だと思っていましたよ。召集されたら、生きて帰れないくらいの覚悟は誰もがしていましたからねえ。卒業する仲間六、七人と白馬に行くことにしたのだけれど、経験者は私一人だけ。四ツ谷（白馬駅）から入りましたが、大雪渓は地下足袋にカンジキ、そしてピッケルを持って登ったわけです。しかし雪渓というのは、午後になったら登ってはいけないものらしいですね。白馬尻の小屋番に止められたことを思い出します。それでもグループの中に生きのいいのがいて、いいや登っちゃえと、それは嫌だと泣き出した者もいたのですが。途中で雪渓は二手に分かれるけど、左へ行くんだぞと言ひ聞かされて、昼過ぎに登り始めてそれでも夕方には稜線の小屋に到着できました」

召集以降の彼は、わずかに四ヶ月の特訓教育の後に、戦闘機のパイロットになった。同期の中には、特攻兵で戦死したものもいる。終戦間際には南方の台湾からフィリピン方面に、零戦の相棒機の隼星で爆撃を繰り返して、玉音放送は静岡の焼津の基地で聞いたという。

一九四一年（昭和十六年）

夏の山行は富士山で行われ、八月になると奥秩父で合宿が組まれた。在校生が編集していた「学友会」会報も発行停止になり、翌年ただ一号だけ創刊された「報國団誌」に部活の記録は掲載されている。以降四年間は、戦時体制の中で、旧制中学の活動は停止された。「戦前」の登山は、この年が最後になる。

山行記録 奥秩父縦走記

八月十二日 川越く白岩小屋

待ちに待ったこの日はきた。地下足袋、ゲートル、リックサック、白ズボンで午前五時四十四分川越市駅に集合する。引率の先生は、代永、原山、那須の三先生。特に戦時下のため、立山登山を中止して「我が郷土埼玉」を隈なく探ろうと奥秩父旅行を決行したのだ。途中長滞に下車し、十分間付近を巡り地質を研究する。間もなく黒谷くろやに着く。ここは和銅年間に初めての和銅を掘った有名な場所だ。興亜班が研究に出發する。登山班一行は、車中より彼らの道中を健全であれと祈りつつ、三峰へと慕進した。

十一時二十分、終点の三峰口に到着。神社の参道で休憩して、大輪に到着。ここより空中ケーブルに乗るのだが、十五分間待つ。乗

客は一行十名と他に三人。やがて我らは空中の人となる。景色を眺めながら三十分して三峰神社に到着。まず拜殿で前途の無事を祈り、社務所で身支度をする。秩父連山中の雄峰、雲取山へと出發したのである。

登山道はハイキングコースだ。しかし間もなく道幅は狭くなり、坂が険しくなる。そろそろ息切れがしだした。一時間すると難所にかかる。ここが有名な地藏峠だ。全く足の踏み場もない。ザラザラと小石が崩れ、リックサックが食い込むように痛い。ふと見ると今まで霧で囲まれていた山々が雲の切れ目に、鮮やかに山肌を現しているのではないか。一斉に万歳と叫ぶ。歌を歌いながら一行は元氣だ。苦もなく「おきよ平」の山小屋に到着。屋根ははがれ雨戸は破れていたが、数日前に自炊したらしい跡が見られた。ここを過ぎると次第にまた険しくなる。誰も話しかけない。

ふと上の方から話し声が聞こえてくる。樵きりふうな人たちが下山してくる。聞くと目の前は白岩山。三十分もすれば小屋があるという。山で初めて会う人だったので嬉しく、元氣が出た。道が平らになった所に小屋があった。五時十五分。前の小屋と違い番人もいて立派だった。煙が上がっていた。切り株に腰を下ろし、暮れ行く山を眺めながら明日の楽しいプランを想像するのだった。（五年 山口茂）

八月十三日 白岩小屋く雲取山く栃本

室内にこもる煙で目が覚めた。皆の目も赤い。日の出までには時間がある。懐中電灯を頼りに、顔を洗いに谷へ降りる。水は清らか

で、流れは身を切るような冷たさだ。

朝の涼風を背に、雲取山征服に白岩小屋を出た。尾根を辿り谷を渡り白岩山を越え、武州雲取小屋に着く。頂上から、大菩薩峠は眼前に横たわり、関東平野は遠く雲海の彼方^{かなた}。山口が腰に付けてきた「なし瓜」をジャンケンで分配した。三十分間雲取山で過ごし山を下る。白岩小屋でリュックを背負い、昨日のコースを三峰に向かう。神社の社務所で置いて行った衣類・食物を詰めて、中津川を目指す。

途中ついに雨になった。山腹の一軒家に雨宿りをした。主人の山桃の御馳走に舌鼓を打ち、山に住む熊・鹿・猿・兎の話聞いてみると、小雨になってきた。予定を変更して栃本までとした。

二瀬に下り荒川に出て、甲州山路を西へ上がる。雨に濡れ栃本陣に着いたのは夕闇迫る頃だった。（五年 櫻井武夫）

八月十四日 栃本〜中津川

雨が上がリ、栃本の朝はしっとり濡れていた。平和な山村である。出発は九時。関所跡がある。宿の右から後ろの山に登り始めた。針葉樹や杉の密林を登ると、頂上に着いた。大休止をし、中津峡へ下るのだ。降りると一本の自動車道が素裸の岩石の間を走っている。

ここから中津へ向かう。何億年以前か知らないが、古生層からの地形構造である。原山先生はトンカチで岩石を砕き、参考品にされるといふ。さらに奥へ進むと硫化塊が含まれている岩もある。我らは競って取り始めたが、金山鉾山（注・旧日笠鉾山）近くに來ると、

光るほど露出し転がっていた。金山は発見こそ早かったが、発掘は近來だ。行きたかったが時間がない。鉾山入り口を右に見ただけで、中津に着いた。石灰岩の白さ、あるいは名も知れぬ輝く鉱物の美しさで、思わず時間の観念を失った。（山崎雅司）

八月十五日 中津川〜金谷鉾山

中津川輪島旅館の一夜が明けた。電燈もない部落ではランプを使って寂しい。宿屋の主人に平賀源内の書籍を見せてもらった。

金山鉾山に行く。金の精錬所があり、小さいケープルで発掘した鉱物を運搬していた。案内人に従って坑内を見学した。黄鉄鉱がランプに照らされると、きらきら輝く。坑は四方に掘られている。案内人は圧縮空気で削岩機を動かし岩に穴を開けた。物凄いな音がする。終わると小屋で握りを食べて、人夫に黄鉄鉱を土産にもらった。

今日は昨日の道を下る。天気は大分よい。中双里を過ぎて板沢に着く。途中警防団の一員が、原山先生に敬礼をした。なんだか可愛く、大笑いした。

この道は人通りも少なく、たまに炭焼きのお爺さんに会うくらいだ。太陽は秩父の峰に沈みかける。今日中に帰る予定だったが、鶉^{うずら}平^{ひら}の漆屋旅館に宿泊する。七時過ぎようやく着いた。（野口達之助）

八月十六日 秩父〜川越

女中さんの箒^{ほうき}の音に目を覚ます。今日で奥秩父旅行も終わりだ。川幅が広くなったところが落合。道はだらだらと下る。宿から一時

間で茶屋。土産物を買う。発電所の脇を通った先の餅菓子屋にも寄る。天下一品の美味である。

駅が見えてきた。待ち時間の三十分で、また氷水屋に飛び込んで三杯平らげる。車内から山を振り返ると、三峰が夏雲にくっきりと見えた。

(五年 小川清)「報國団誌創刊号」

取材寄稿 登山を奨励された時代

川村正雄 (一九四三年卒)

アルパムを見ながら振り返る旧制中学の記憶は、旧制三年(昭和十五年)の修学旅行と、旧制四年(昭和十六年)の富士登山だったでしょうか。

修学旅行は伊勢から京都、奈良でしたが、横浜港から船で行きました。軍隊を動員した支那事変が盛んになって、修学旅行などに輸送力を使えないという時代。戦前では最後の修学旅行だったようです。旧制五年(昭和十七年)の六月には軽井沢での軍事演習もあつて、整列した私たちは陸軍を払い下げになった三八式歩兵銃(さんちしきほへいじゆう)(注・明治三十八年から陸軍が採用した名銃で、国内で三百四十万丁生産された)を各人が持たされ、整列した写真も残っています。その銃口に銃剣を差して演習したわけです。戦時色が強くなっていました。部活動での私は剣道部と登山部に所属していました。登山部は同級が六人。登った山はたった一つ昭和十六年夏の富士山でした。あの

頃は、男子は十八歳までに一度は富士山に登っておくものだというような、世の中の風潮があったと思います。日本を象徴する山だからでしょうか。

総勢で十五人ほど。汽車に乗って八王子の方を回ったわけですから、富士吉田からの登山だったと思います。八合目の小屋で一泊する予定でしたから、食料にコメ、雨合羽の代わりに軍事演習に使った綿の外套、そんなものを持っていきました。麓から登り始めるのですから、八合目の小屋に着く頃にはもう真つ暗になっていたと思います。

上を見上げると、列を成している登山者の明かりだけが、暗黒の山容にキラキラ輝いて綺麗だったことを思い出しますよ。夏のシーズンですから大勢が登っていたものです。私たちは電燈すら持っていなかったと思いますが「あの登山者の明かりに導かれていけば、八合目には到達できるんだ」というように、思っていました。

小屋に着くと、持ってきたコメを出して、翌日には握り飯を持たされました。暗いうちに小屋を出てご来光を拝みました。お天気はとてもよかったです。頂上に登り着くと御釜にまだ雪が残っていて、それをすくって少し食べてみた。下界にはどこまでも平野が広がっています。景色は雄大で大満足するものでした。帰路は砂走りを下りました。そういえばこの登山の途中で、下級生が一人いなくなりました。けっこう心配したことを覚えています。「先に帰ってしまつたんじゃないか」ということになり、戻った後に自宅に行ってみると、やはり彼はすでに帰っていました。おかしな記憶です。



1941年 登山部員集合

実は旧制一年の遠足は、入学して間もない頃の高尾山でした。まだ桜が咲き残っていました。あの時代は家族で旅行するなどということは一切ありません。中学に入つての遠足、そんなことがとても楽しみだったのです。とても気持ちがよくて、見晴らしがよかったです。そんな思い出があったから、この富士登山にも参加したのかもしれない。川越を離れて何処か遠方に行くなど、こういう機会しな

かったものでした。

中学を卒業して師範学校に進学した私は、学徒動員は一年免除されました。工学部と師範学校の学生には猶予があったのです。それでも昭和二十年四月には千葉の陸軍教導学校に動員され、五月には前橋の士官学校に異動しました。

その後数ヶ月で

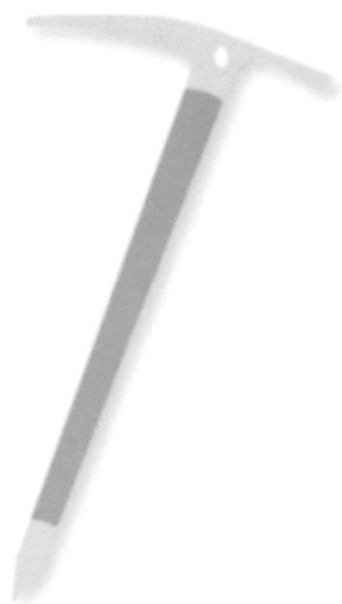
終戦。その後は「山の講へのお参り」で戸隠神社に行くことが、登山になりました。私の集落周辺では、年に一度は戸隠へいってお札を頂いてくる習慣があります。榛名山神社や、丹沢大山おたけに行く集落もあります。近所住民を代表して、皆の分の札を授かってくるわけです。当時はもう二十歳を過ぎていましたが、これも十八歳までには一度経験した方がいいとも言われていました。あの時は六人くらいで行ったでしょうか。善光寺に出れば、戸隠神社へという標識もあります。富士山とは違って大雨に降られて辛い思いをしました。途中中腹の講元こうもと（宿坊）に泊まりましたが、そこでは衣類を乾かしたことだけしか覚えていません。確か富士山のときは、夏休みに入つてすぐの七月だから、天気がいい。ところが戸隠に行ったのは八月。やはり山は八月にもなると天気も悪くなつてくると、そのときも改めて思いました。

我が家は、父親が旅好きだったので。結婚して孫が生まれると、父は孫を連れてよく伊香保の温泉旅行に出かけていました。同じように、正月の初詣に高尾山神社にお参りすることも慣例になっていて、それは戦後間もない頃から続いています。私自身が出かけられるようになったのは定年後のことですが、ケープルカーを降りてさらに三十分、奥社にお参りすることはできるのですが、さらに三十分歩いて山頂まで行くことは、もう難しくなりました。そこは旧制一年のときに遠足で登った山なのです。

第二部

高等学校山岳部の記録

——一九四六年（昭和二十一年）～一九六九年（昭和四十四年）



凡例

第二部の主題は、過去の記録の整理よりも、健在のOB部員による現在の寄稿をテーマにして編集された。埼玉県立川越高等学校山岳部（学制改革直前の中学校登山部も含む）の各年の記録は、次の1～5の項目により整理する。

1 山行 その年の部山行の一覧である。学校年度は、四月～翌年三月であるが、資料（部報など）編集上、西暦年号を優先したため、一月～三月の山行は、前年度のものである。西暦日付通りに解願願いたい。

2 部員 該当年度、四月以降の二年生部員名だけを記した。すべての部員名は、前後の年度からおむね判断できる。

3 顧問 学校においては、校務分掌の一と位置づけられる。従って人事異動などにより変動がある。

4 山行記録 ①山岳部部報、および生徒会会報に掲載されたものの中から、主要なもの、または特徴のあるものを選んだ。エッセーや随想も、掲載した。なお、筆者名の上に執筆時の学年を分かる限り添えた。②文末に記した出典は、おむね次のいずれかである。A「秩父零」^{ちちぶね} 埼玉県立川越

高等学校山岳部部報 第十三号（昭和二十七年四月発行）～十五号（昭和三十年一月発行）B「わんだらあ」 埼玉県立川越高等学校山岳部部報 第一号（昭和三十三年十一月発行）～第四十号（平成二十年八月発行）C「生徒会会報」。③貴重な記録として原文の香気を保つよう努め、ルビ、注を加えた。また明らかな誤りは正した。

5 寄稿・取材寄稿 ①OBおよび顧問の寄稿は、在籍年に掲載した。また編集の際、一部手を入れたことを了承されたい。②取材寄稿とは、編集者による聞き書きである。③卒年において、「一九七〇年卒」とは、「一九七〇年三月卒業」を意味する。

〔編注〕 一九四七年（昭和二十二年）の学制改革によって、埼玉県立川越中学校においては第三学年以下が埼玉県立川越高等学校併設中学校と改称された。したがって一九四六（昭和二十一年）年度入学生は、入学時が旧制中学校一年生、四七・四八（昭和二十二・二十三）年度が併設中学校二・三年生、そして四九年度に新制川越高等学校一年生に進学し、五二年（昭和二十七年）三月に埼玉県立川越高等学校第四回生として卒業している。

一九四六年（昭和二十一年）

山行

中津川溪谷

雲取山

武甲山

〔顧問〕 佐藤徳四郎

戦時中の四年間は、山岳部も例にもれず活動はなかった。学校そのものも閉鎖され、生徒は学徒動員や勤労奉仕で軍事工場で働いた。戦後の部活は、この年から再開された。

旧制中学の校史の中で、武甲山で三人が遭難死亡した事件（一九一七年）は悲しい出来事として残る。登山部が創設される二年前、

大正六年の惨事だった。一行は、博物の授業で使う鉱物の採取に、七月の武甲山へ向かった。三年五人の有志は、生徒だけのパーティーだった。夕方下山中に、険峻な屏風岩に差しかかって、その絶壁から転落し、三名は頭を打って死亡、二名は苦痛に耐えて同日の夜九時に、村人に発見されたという。後に学校で合同葬儀が行われ、墓は、川越市藤間の東光寺に建てられているそうだ。事故は当時の新聞にも大きく報道された（川越高校・百周年記念誌「くすの木」参照）。その引い登山が、戦後のこの時期に登山部で行われた。

取材寄稿 武甲山への引い登山

齋藤（旧姓小島）金作（一九四七年卒）

戦後、学校行事の中で、武甲山の引い登山をしたことがある。十数人ほどのメンバーを募って、出かけたように思う。兄は旧制中学で陸上部に所属していたが、私は決まった部活に所属していたわけでもなく、気軽な気持ちで参加したことを思い出す。

前日に横瀬村の小学校に宿泊させてもらった。真夏の暑苦しい頃で、私は寝付けずに、学校のグラウンドに出て夜風に吹かれていた。そのとき声を掛けられたのが引率した美術の白井正先生だった。

「こんな時間にどうしたんだ」

そんなワンシーンだけを、今でも覚えていることが不思議な気がする。

翌日は、朽ちかけた鳥居をくぐって登山を始め、無事に全員で武甲の山頂を往復してきた。

遭難は、大正時代のことだ。武甲山に登った数人は、道に迷ったようで、夜間になってしまったらしい。そのときに樹林の間から秩父の夜景が見えた。あっちの方向に降りればいいのだと、踏み出した者たちが、次々と転落死したという気の毒な事故だと、人づてに聞いた。それは後に、入間市のある酒造屋さんの御大に知り合ったときのことだ、

「私もあの登山では命を落とすところでした」

と、その方は、当時の登山メンバーの一人だったようだ。

寄稿 学徒動員の経験

滝沢茂樹（一九四七年卒）

昭和十八年に旧制中学に入学した私たちは、さっそく登山部で登山を始め、ことにしたのだが、すでに戦局はかなり逼迫（ひっぴく）してきていると思ひ出す。

旧制中学は毎年夏に、海洋訓練（水泳教室）を行っていた。この昭和十八年は、西伊豆の戸田（へた）で行うことになった。ここには東京帝大（東京大学）の水泳訓練所があつて、当時の教頭はこの出身者で、母校の訓練所で訓練を望んでいたようだった。ところが、鉄道省（JR）は、学校の水泳訓練だというのに、生徒の乗車を拒否してきた。



1942年 戦時体制の中で 登山部員も野外演習に

戦時体制のこの時期に、物見遊山的な水泳訓練はけしからんということらしい。それでもこの催し物は実行された。

仕方なく小田急線で箱根へ向かう。強羅で一泊した私たちは箱根

の峠から、なんと旧東海道の石畳の道を三島まで徒歩で下山し始めた。しかも少人数のグループごとにとんどん下って行く。隊列を組む余裕はなかった。石畳の旧東海道は、草鞋わらじの時代には歩きやすかったのかもしれないが、鉄靴びよんぐつでは滑って実に歩きづらかった。三島広小路からは地元の電鉄が沼津へ通じていて、それに乗った。さらに波止場まで歩いてそこから船でようやく戸田に着いた。ここで一週間もの遠泳訓練の実施となった。

さて帰りもまた同じコースで川越に戻るのかと、相当な難儀が予想された。この時代には、学校に配属将校がいた。大野騎兵中尉がその人で、中尉の配慮で帰りには東海道線に乘車することができて、事無きを得た。

翌昭和十九年になると、学校はすでに閉鎖状態に追い込まれた。授業ももちろんない。私たちは中学二年は、昭和十九年の冬から勤労奉仕に行かされた。奉仕の最初の日、雪が降ったことを覚えていゝる。私は、高萩にあった航空学校で、粗末な格納壕を掘らされた。後には同じ場所に航空工廠こうくうしやう(陸軍の航空機部門)が移転してきたが、その最新型の戦闘機工場では、ジュラルミン製の尾翼の製作に当たられた。工具で穴を開けては、リベットで止める。被服工場に行つた者もいたし、カーリット工場では地雷の信管を作らされた者もいた。下級生は農業奉仕で、米作りの農家に手伝いにいったり、畑ではジャガイモや麦を作っていた。そして昭和二十年の夏、終戦とともにすべてが終わって、学校に戻る。昭和十九年の冬から、二十年の夏までは、学校は閉鎖状態だといつてもよかつた。

翌昭和二十一年から学校は始まる。部活も戦前のように復活されたが、柔・剣道のクラブはなくなった。それと男子にもバレーボールのクラブが発足した。戦前は女子の運動だとされ、どうにか発足したのはいいが、対抗戦では川越女子高にも負けて、せつかく大勢で応援に行つたのに、情けなかつたのを覚えている。

復活した登山部には、佐藤徳四郎という漢文の先生が当たつた。生徒からは「徳さん」といわれて慕われた先生だつた。その頃から昭和三十八年まで長年勤務したそうだ。

どういふいきさつだつたか、春に秩父の中津川溪谷に行くことになった。三峰口なみねぐちだつたか、大輪おおわだつたか、長時間歩いたのだが大雨に降られて、中双里集落なかそうりの小学校に泊めてもらった。翌日も雨で山に登ることもできずに、また戻つた。残念な山行だつた。個人山行でどこかに行つた者もいたのだろうが、行事として行われたのは、この山登りだけだつた。



クルマユリ K.O

一九四七年（昭和二十二年）

山行

夏山合宿 北ア・燕岳く槍ヶ岳・焼岳

〔部員〕 滝沢茂樹 小島金作 若月洋三

〔顧問〕 佐藤徳四郎

寄稿 真夏の上高地

滝沢茂樹（一九四七年卒）

昭和二十二年の夏、北アルプスに行くことになった。前年に齒科大の予科に合格した私は、すでに旧制中学を卒業していたのだが、大学の授業が再開されずに、一学期間だけはまだ川中に在籍していた。つまりOB参加となっていた。

集団は総勢で三十人ほど。これほど大勢が参加したのも、徳さんの人徳によるものだと思う。北アの表銀座に行ったのだが、私としては五万分の一の地形図だけを持っていただけに過ぎず、どういう場所なのかは現地に行つてからの楽しみとなった。

大系線の有明で列車を降りて、歩いて中房温泉に向かって宿泊する。翌日は燕山荘から大天井岳を越えて、一気に槍ヶ岳まで到達し

て殺生小屋に入った。当時の若者は歩きには強かった。晴天に恵まれて、北は剣岳・立山から、南は乗鞍岳・八ヶ岳まで見渡せた。それよりも驚いたのは、槍ヶ岳に雪渓が残っていて、その上を歩いて降りることだった。夏に山で雪を見たというのも、もちろん初めてのことだ。

翌日は上高地に下つて、西糸屋で宿泊して、焼岳往復。下山は徳本峠を越えて帰った。もちろん上高地までは林道も開通していたのだが、バス代というのは鉄道に比べてどうにも料金が安い。しかも学割というものがない。それに当時は、歩くというのはごく普通の日常行為で、誰も苦痛ではないと思つていたのだろう。どうせ一日余分に掛かるだけだ。

バス運賃に比べれば、山小屋の宿泊は高いものではなかった。当時小屋に宿泊するためには、米の持参が必要だった。宿泊代というのは、小屋番の炊事の手間賃と、梅干とたくあんの代金のこと、布団や部屋代は、無料だったのだろう。それに上高地には写真屋が待機していて、記念写真の撮影も行つていた。

今でも残っている三枚の写真は、河童橋から穂高の吊尾根を背景にしたものと、焼岳を背景にしたものと、ウエストンのレリーフの前で撮影したものだ。

実はこの山行は、私に強烈な印象を残した。翌年大学の予科に入つてからは、夏の涸沢に行くことが恒例になった。もちろん徳本峠を越えていく。昭和二十年代の後半から三十年代にかけては、ハイキングもブームになった。夏には大勢のキャンパーが上高地に入つ

た。

お金のない私たち学生は、撤収して下山するテントを見つけると、彼らが離れた後の残飯を物色して、海苔、ワカメ、玉ねぎ、ニンジンなど、多量の余り食料を見つけ出した。それを食材にすれば、夏山には食料の持参は要らないと思っていた。しかも下山ハイカーは、小屋で持たせてくれたオニギリを、捨てて帰ってしまう。ザックに忍ばせた菓子の方がうまかったのだろう。私たちはその残った握り飯をおいしく食べた。髓^すえた臭いも、洗えばうまい。小屋の圧力釜で炊いたオニギリは、飯盒炊^{はんごう}さんよりも、うまかった。大学は飯田橋にあったが、山に登らない学生が週末に銀座や新宿で遊んでいるよりも、山に入った方が金がかからないと思っていた。

こうして槍ヶ岳とその雪渓に魅せられて、その後私は、国内では静岡以北の山はほとんどを登った。しかも世界の山を見に行くことにもなった。昭和四十二年に海外渡航が自由化されたが、その三年前にメキシコまで行った。外国音楽に渴望していた昭和一代生まれにとつて、ワルツ、タンゴ、マンボは新鮮だった。覚えてたのフォルクローレのマリアッチというメキシコ音楽に触れるための旅行だった。その後は南米に三十年通って、アンデス山脈は何度も訪れた。ヒマラヤはエベレストベースキャンプ五五〇〇メートルまで。タスマニア、ニュージーランド、チベット、ノルウェー。樹木の生えている山ではなくて、雪と岩壁の山ばかりである。

エベレストBCは二〇〇〇年に行ったが、すでにラサまで空路で入れる同地には、わずか四日のトレッキングで到達できる。〇五年

には中国雲南省の山にも登った。

今は四国霊場八十八カ所一二〇〇^キを巡礼中でもある。一ドル三百六十円の時代に海外に出れば、マイカー一台購入できるくらいのお金がかかった。それを何度も繰り返し返して、とうとう私はマイカーやゴルフとは縁のない生活となった。しかし振り返れば、それこそが健康の秘訣であると思ひ返す。歩くことと登ることこそが健康の源だろう。歯科医として立ち仕事の毎日から体をリハビリさせるのは、下半身の運動をして血液循環を図ること以外に、健康を保つ方法はなないと思っている。

取材寄稿 徳本峠からの長い道のり

齋藤（旧姓小島）金作（一九四七年卒）

卒業した旧制中学の山岳部から声がかかった。北アルプスの縦走に出かけるから、

「若い子供たちの面倒を見てくれよ」

声の主は徳さんだった。断れるはずがない。

食料も何もない時代だった。荷物は、コメを一人三升ほど。それを小屋に預けて炊いてもらった。他には大豆を少しゆでてもらって、水と一緒に食べるのが間食だった。兵糧^{ひょうりょう}食みたいなものだ。

装備にしても何もない。東京に出ていた兄が「登山に行くならばツケルが必要だろう」と、いくつかの運動具店を回って買ってきて

くれた。上高地で写した写真の中でも、ピッケルを持っていたのは私を含めてほんの数人。他は枯れ枝を杖の代わりにしていた。

中房温泉は町から遠く離れた温泉で、流れている川の中に自然温泉が湧いていて、その周囲にはサルサルの糞糞がたくさん転がっていた。サルでも温泉に入るものなのかと、おかしく思ったものだ。

そこから延々槍ヶ岳まで縦走した。さてその雪溪の下りに、当時は誰もが滑り台で遊ぶように尻で雪の上を滑っていた。こんなときこそ、兄が買ってくれたピッケルが役に立つのだろうと、刃の部分でブレーキを掛けながら滑った。兄貴の教えもまんざらではないなあと、感心したことを覚えている。

その後上高地まで下山した。山では誰も他人には会わなかったが、河童橋まで降りてくると、そこには女性のハイカーもいた。もう人里も近くなったのかなあと思う。ところが、大半の下級生はここまですり足で到達するのがやっとで、この先徳本峠を越えられないと言いつつ出た。

困った先生は、けっきょくトラックを一台借り上げて、そこに荷物と在校生たちを乗せて、下山させることにした。ところがその運賃というのが一人二百円ほどで、べらぼうな高値だった。それでも在校生の健康には換えられない。残った元気な者は、当然のように徳本峠を越えて鳥々に下った。しかし、あの徳本越えというのは、聞きしに勝る長い道りだった。沢沿いの滑りやすい石ころ道が続き、果ては細々とした道になり、歩いてても歩いてても到達しなかった。ようやく集落が見えて、鉄道の駅になった。

寄稿 佐藤徳四郎先生

岩堀弘明（一九五六年卒）

その先生は「徳さん」と呼ばれていた。

昭和二十八年度入学式は、講堂があるのに、なぜかクスノキの広場で行われた。式が済むと、クラスごとに校庭の一隅に集められ、私たちB組は、講堂の南に集まるよう指示された。

そこには、坊主頭、カーキ色の軍服、げた履き姿の男がいて、クラス全員の点呼をとり始めた。私はその人が、何かの都合で教師の代わりをしているのだと思っていた。ところがである。

「私が担任の佐藤徳四郎だ。みんな佐藤先生なんていわない、徳さんだ」

これには驚いた。高校の教師は、学識豊かな教養人の姿だと思っていたのに。だれもが同じ思っていたようだ。途中で笑い出した川田明美君は、

「出てこい！」

と命じられ、なんと鼻をつままれた。この「鼻つまみ」は、そのあと日常茶飯事となり、生徒の間で恐ろしがられた。

国語担当の先生は、生徒に古文を大量に読ませた。西下經一編「詳注古典選書万葉集」、内田泉之助編「唐詩新選」、安藤秀方著「新注方丈記」、いずれも明治書院の発行。「平家物語」など、ほかにも苦



往年の佐藤徳四郎先生 人柄が偲ばれる

労したのがたくさんあるのに、なぜかこの三冊だけが今も手元に残っている。方丈記の「一、ゆく川のながれ」は、鼻つまみが恐ろしくて、夢中で暗記したため、今でもそらんじている。

『新注方丈記』は、昭和二十八年三月五日修正六版で、定価金四十五円とある。一年生三百人が買うわけで、徳さんは、明治書院が割引した金額を生徒に見せ、端数のつく値段で買わせた。

「おれは手数料を取らない代わりに、本を送ってきた木の梱包材は、風呂のたきつけにもらうぜ」

このたきつけを自転車でお宅に運ぶ役を、私は命じられた。先生のお嬢さんは川越女子高の同学年だ。

修学旅行で歩いた御堂筋の感想を、「二人で歩きたい通り」と表

現した感性の持ち主が、徳さんに似ていなければと、不謹慎な期待を持って勇んで出かけた。

お宅に着き玄関の格子戸を開けると、廊下も和室も床から天井まで、びっしりと書棚だ。体を横にしなければ、本を取りに入れないほど。こんなに勉強しておられたのか！ 感銘を受け、棒立ちになつて眺めていた。

先生がおっしゃるには、すでにどうしようもなくなつて、川越高校の明治文庫に相当数の書籍を寄贈されていたのだそうだ。徳さんはよくおっしゃった。

「本校の図書館には、ろくな本はないから」

縁があつて川高山岳部OB会が結成された。後輩の高野七郎君は山岳部顧問であられた松崎中正先生に見込まれて、月に一回は山にご一緒しているという。それもめつたに人に会わない、ガイドブックにも登場しない山に。

「いいなあ」と思っていたところ、私にもチャンスが巡ってきた。鹿教湯温泉に泊まつて三人して歩いた二日間、確かに山中人^{かけ}一人会わない静かな山路だった。

ところで、ハンドルは安全運転の高野君の腕の見せ場だったが、上信越道の帰り、彼はさすがに眠くなつたようなので、私が運転を交代した。

「助手席では居眠りしないようつとめてます。それが運転者に対する礼儀だし、話しかけて相手が眠くならないようにすることが、結

局は自分のためにもなると思いますから」

松崎先生は笑われた。

トンネルを幾つも抜けるころ、私の会社の山荘がある八風山とその近くの神津牧場や初谷鉱泉に話が及ぶと、先生はおっしゃった。

「そういえば、わが国近代登山の先駆者・大島亮吉の遺著である

『山 研究と随想』に、「荒船山と神津牧場付近」と題する話題の一篇がありますね。『山』はいわば私の山のバイブルですが、川高の図書館で表紙の傷んだこれを見つけたときは驚きました。昭和の初期、岩波で出したこの難しい山の本を書棚に備えるとは、さすが伝統校だと感銘しました。と同時に、一体だれがこの本を図書館に購入したのか興味がわきました」

私は、直感した。

「徳さんだ！ 明治文庫にたくさんの蔵書を寄贈された徳さんに違いない」

半世紀も前の、あの徳さんのお宅の光景がまざまざと脳裏に浮かんだ。

徳さんは、昭和二十年から何年間か山岳部の顧問として、北アルプスに生徒を連れていかれた。何をするにもすぐ「ハラッペラシ」という言葉が口に出た敗戦直後、なぜ生徒に山を歩かせる気になられたのだろうか。東北のご出身であったが、先生だけが米を食べられたとは思えない。

二年生のときも徳さんが担任だった。その年、C組全員が日帰り無銭旅行に行かされた。正丸峠でバスを降り、子ノ神戸、刈場坂峠、

高山と回って、吾野駅までのハイキングだ。

「運賃以外は持つな」とのお達しで、今アルバムを開いてみると、みんな学帽、学生服姿。徳さんはいつものげた履きで写真に納まっている。このハイキングの計画段階で、

「岩堀は山に行つてるんだから、時間の配分を考えろ」

とのご下命があった。口にはされなかったが、山岳部の行動には関心をお持ちだったのかもしれない。

「Hunger is the best sauce.」(空腹は最高の調味料だ)。これが出てくると必ず、

「頭は聖人のごとく、体は獣の如く」

と付け加えられた。「学生は等しく貧しくあるべし」というのが先生の一貫した教えであった。

「今後、君たちが膨大な戦争賠償をしてゆくためには、指導者が清貧に生きる姿が欠かせない」

ともおっしゃった。そのお気持ち、自らの軍服、げた履き姿で、率先垂範されていたのかもしれない。

佐藤徳四郎先生について、こんなことを車中で松崎先生にお話した。

「ああ、そうだったんですか、これでやっと溜飲りゅういんが下がりました。半世紀もずっと気になっていたのです。あれっ、もう東松山に来ちゃったんですか。プリウスは速い！」

わが顧問のさも感慨深そうなお顔を垣間見て、信州二日間の山旅の楽しさをしみじみとかみしめる私であった。

一九四八年（昭和二十三年）

山行

夏山合宿 北ア・白馬く唐松岳

〔部員〕 赤星譜 佐久間春男 小黒健次郎 菊池好太郎

〔顧問〕 木村信寿

戦後の登山部は、二年間指導した「徳さん」に続いて、新任の木村信寿先生に任された。戦時中には青森県の大湊おおみなとで海軍に勤務した後、川高の教職募集に応じた若い教師だった。四年ほど在職して、転職された。

取材寄稿 登山で出会った山師たち

佐久間春男（一九五〇年卒）

私たちの年代は昭和十九年に旧制中学に入学しています。旧制一年の冬（昭和二十年二月）から早くも勤労動員に出動しました。今では上福岡の団地になっていますが、そこに陸軍の造幣まねいしやう廠あつがあって、鉄砲の弾とか、導火線を作っていました。機械から出てくる導火線を決められた長さに切断したり梱包したり、それを半年続けて

昭和二十年八月を迎えたわけです。上級生は朝霞にあった被服廠で、軍服や作業着の縫製に動員されていたと思います。終戦で勤労も解除になったわけです。

終戦の翌年、中学三年になっていましたが、この年の武甲山が私にとつての初めての登山だったと思います。「徳さん」という国語の先生が戦後から学校に教えに來ていましたが、この先生は俳句では相当な先生でした。東京に頼祭たのまつという俳句の同人組織があったようで、そこに参加していた芸達者な人でした。校内で俳句の会があったときに、徳さんに登山に誘われました。武甲山は今では日帰り山行の山ですが、当時は横瀬に宿泊した大掛かりな登山だったように思います。

翌年には、燕岳から槍ヶ岳への縦走。この年は旧制の四年生でした。燕岳から延々と槍ヶ岳まで縦走しましたが、翌日は風雨がひどくて、けつきよく槍の穂先には登頂できないまま上高地へ下山してきました。そのこの旅館に宿泊して、翌日は徳本峠を越えて島々へ下りました。ちゃんと集合写真が残っているのは、川越在住の加藤さんという写真屋さんが、この登山には同行していたからだと思います。その翌年、昭和二十三年の春に、旧制中学は閉校になって新制高校になりました。私たちは旧制の四年から新制高校の二年に進み、都合六年間を母校で過ごしたことになります。

昭和二十三年の新制高校の夏に、登山部は正式に山岳部となって、北アルプスの白馬岳から唐松岳の縦走を行いました。徳さんはもう引退されました。代わって化学の木村信寿先生がきました。海軍省

出身の二十五歳くらいの若い先生でした。何故だか「金太さん」と言われていて、戦時中には青森県の大湊にいたそうで、その頃には下北半島の恐山おそざんに登っているのです。恐山にいる巫女みこさんのイタコ（祈祷師）は、お願い事をするとう霊を呼んできて叶えてくれるとか、そういう話はどうにも怖いのですが、しかしおもしろい。風変わりな先生でした。川高での在職は短いようでしたが（昭和二十六年十一月まで）、後に民間の化学工場に技術者として転職したようです。

この年の夏の合宿では、白馬岳から不帰のキレットを越えて、唐松岳から八方尾根を下山したのです。この木村先生と一緒に話しながら下山したことが思い出されます。新制高校になった年に、引率する顧問の交通費も支給されたようで、以前は自費だそうですから、大変だなあと考えたものでした。

その頃には奥秩父の雲取山から雁坂峠かりざかまでの縦走も行いました。雲取山で宿泊した翌日は、笠取小屋で泊まります。無人小屋の宿泊で、燃料の薪まきを切り出すために、山行には鉈なたを持っていきました。亡くなりましたが一級下に宮崎君という部員がいて、彼は新しい鉈の使い方に慣れていなかったのか、自分の足を傷つけてしまったのです。

下山路はいずれにしても雁坂峠から秩父に下る道しかないのですが、そこでパーティーを二つに分けて、先発隊を縦走させて応援を呼ぶような手はずにしました。先発隊は栃本に下山して医者を呼んだり、学校に連絡して同級生の応援を頼んだりしたようです。後発



1948年8月 日光白根山 湯ノ湖キャンプ場にて テントは軍の払い下げ 30キロあり
上級生が交代で運んだ マット無しの野営

隊は一日遅れで、怪我が小康状態になったことを確認して、縦走を始めました。歩き始めれば、どうにか自力で下山できるようでした。

そんなことで、せっかく応援を頼んでみたものの、先発隊とはどこかですれ違ってしまつて、無駄になつてしまつたというおかしなこともありました。

同じ頃には日光にも登山に出かけています。このときは陸軍の払い下げテントを担いで湯元でキャンプをしました。二日目に日光白根山へ登る日は物凄く悪天候になつてしまつて、この山も頂上への登頂はできないままに、ずぶ濡れのテントに翌日も泊まることになりました。ただあまりにも惨めだからと、湯元の温泉だけには入れてもらつたりした記憶があります。この頃から山へ行くにも学割が利用できるようになって、差額がいくらかの小遣いになつたものでした。

翌昭和二十四年の最終学年のときに、亡くなつた赤星が記録に残した甲武信岳の登山となりました。地元の梓山に予め手紙を出して、様子を聞いたわけです。十文字峠の小屋は上手く使えろとか、栃本へ下る真ノ沢しんのさわ林道は難しいのかとか、照会を受けていたはずでした。戦前の古い地図には、真ノ沢の下山は八時間程度だと記されていたような気がしますが、朝五時に出発して栃本に下山できたのが夜の八時。谷筋の下山ですから、ただただ長い下山に苦勞したという記憶だけです。栃本は信州へ越える江戸時代の裏街道ですから、旅館がありました。宿泊した栃本屋は今でもあると思ひますよ。

当時秩父の山は戦後の伐採の最盛期で、登山中にはよく地元の山師に会いました。「登山とは贅沢だね」とは言われましたが、よく話しかけてきて、山歩きのコツを教へてもらいました。

早朝に山に入るとき、山師たちは大きなお結びを弁当にするのですが「昼飯にそれを全部食べてはいけない」と言うのです。いざ山で天候が急変して戻れなくなつたときでも、結びが一個でもあれば、一日くらいは無事で過ごせると。だから私たちの登山でも、持つている食料は全部食べてはいけないのです。

あるいは飲み水にしても、山師は空っぽのやかんにお茶葉だけ入れて山に入る。秩父は水が豊富ですから、休憩時には湯を沸かして飲む。冷たい水だけゴクゴク飲むのは、バテるし水腹になつてしまふ。お茶なら喉を潤して、体力の回復ができるというわけです。朝の十時、昼、午後三時と、一回の茶葉で三分の茶を出すそうですが、それが山師の知恵だといつていました。私はそういう話が何故かとても面白かつたのです。仲間とワイワイ登山やキャンプすることも楽しみでした。

大学へ進学して数年経つた頃に、一級上の若月さんが大学山岳部が通うような冬の富士山で、遭難したという報が入りました。私は出勤しませんでした。遺体が発見されたのは初夏になつてからだつたようです。ちょうど学年末試験が迫つていた頃で、動揺してしまいました。

そのように大学山岳部は厳しい部活だと思つていましたから、山登りをしたのは高校時代だけです。ただ就職して少し経つた頃に、山岳部同期の菊池好太郎君と三人で、北岳を登山したことが一回だけあります。戦時中から六年間母校に在学しましたが、登山は楽しい記憶となっています。

一九四九年（昭和二十四年）

山行

甲武信岳 六月二十四日～二十六日

〔部員〕 糟谷熊 柳下満 宮崎義宣 金子勇二 市村栄一 内沼一

雄 加藤健 君塚功 小林洋左 畑喜干松

〔顧問〕 木村信寿

六月に行われた二泊三日の奥秩父行は、顧問他生徒十七人という大パーティーの山行となった。小海線の信濃川上から甲武信岳に登り、秩父に下山するという、当時としては冒険的な登山になっている。

山行記録 甲武信岳登山記

六月二十四日

かねてからの念願であった、甲武信岳登山が、今日実現するのだと思うと我々一行は、あいにく低く垂れ下った雨雲も、何のそのと大いに頑張つて川越市から新宿に向かった。一行は木村先生以下十七名であった（特に部外者が五名参加した）。新宿発二十三時四十五分。幸いにも皆座ることができた。電気機関車の汽笛が深夜に鳴

り響いた頃には、低く垂れ下がった雲から霧のような小雨がひっきりなしに降っていて、我々の心を暗くした。しかし皆元気であった。

六月二十五日

夜が明けると、皆は腫れぼったい目をしていて。汽車の中なのでよく眠れなかったに違いない。五時四十五分、小淵沢に着く。一行は小海線に乗り換えて、左手に八ヶ岳を望みながら信濃川上に八時二十分に着き、そこからすぐバスに乗って、千曲川の清流を望みながら、次第に坂道にさしかかり、大きな岩があつて車がひどく揺れる。あえぎあえぎ実に苦しうにゆっくりと登っていく。約一時間半、十時に梓山（すまやま）につき下車した。ちょうど雲が切れて日が差してきたので、我々は小躍りして喜んだ。昨夜の雨で湿った落ち葉の道を行くと、松林の中にちらほらと白樺の木が混じつてき始めた。段々と闊葉樹から針葉樹に変わり、その鬱蒼と生い茂る中を、我々は歩き続けた。

新鮮な山の空気を胸一杯に吸って、落ち葉で埋もれたつま先登りの道を頂上に向かってなおも歩き続けた。だんだんリュックは重くなり、足も疲れてくる。十文字峠を経てしばらく行くと尾根に出た。尾根をいくつか越えていくと夕霧が立ち込めて、せつかくの美しい景色は灰色と化してしまった。残念でたまらない。やつとの思いで三宝山にたどり着いた。下級生や部外者は、相当へばつたようであった。三宝山からは熊笹が覆いかぶさつて、歩きにくく、外被はびしょ濡れである。下級生および部外者がまったく歩く気力を失つて、

少しいつては休むので困ってしまった。しかし皆大いに頑張つて、ついに目的地甲武信岳の頂上に着いた。予定よりだいぶ遅れて七時半頃であった。辺りはもう薄暗く、霧のために何も見えず雲の上に立っているようであった。頂上から小屋までは下りで約五分くらいであった。水のあるところまでは、二、三分急なところを重い足を引かずで行かねばならなかったのは実につらかった。しかしその水の味は何と云つて表現してよいか分からないほど、本当の仙水のようにであった。恐らく山に登った人でもこれだけの水を味わった人は、そんなに沢山はいないだろうと思う。夜のうちに翌日の分を炊いておく。寒気が身にしてみても、よく眠れなかった。不寝番が、火を燃やし続けているので、あたっていると疲れているからすぐ横になつてしまふ。しかしまたさめる。そうこうしているうちに朝がやつてきてしまつた。

六月二十六日

五時、昨日の疲れでよく寝ているものもあつたが、今日の予定があるので皆たたき起こす。皆は腫れぼったい目をして今日の行動が思いやられる。しかし小屋を後にして再び頂上に立つ。ちょうど日が昇るところだ。どこまでも新鮮ですがすがしい山の朝の空気。美しいご来光。皆疲れも何もすっかり忘れて、美しさに酔つてしまつたようだ。写真機のシャッターの音が盛んに聞こえる。雲の上に浮き上がった山々、遠くの間々も実にはつきりと美しく描き出されている。頂上を後にして下り始める。道はずつと下つていゝが非常に

険しく、道は荒れ放題に荒れ、大木は道に横たわり、苔むした道は実に滑る、このところ一年くらい人の通つたような跡は全くない。尻餅をついたり、足を滑らしたり、橋は腐つていてうっかり登れば落ちてしまふ有様だ。

しばらく行くと割合に大きな沢にぶつかった。橋がない。仕方がないので木を切り倒し、倒木を持ってきて渡す。そのときの苦勞と不安は今筆を持って表すことは到底できない。また丸木の二本橋を渡り、スリルは満喫である。このところのコースには道標がない。道が行き詰まつて山の中腹でどうすることもできない。地図と磁石によれば間違いないはずなのであるが、尾根に出てみようというので、取り付いた。

間もなく尾根に出た。偶然というか、奇跡というか、道にぶつかった。しかしこの道がどこへ行く道やらさっぱり分からない。しかし磁石と地図を頼りに行つた。幸いにも東大の演習林に出て、ついで軌道に出た。我々一行は重い足を引きずりながら軌道に沿つてずつと下り予定より五時間も余計に歩き、くたくたになつて栃本に着いたのは七時半であつた。最終の電車について間に合わないの栃本に一泊した。聞くところによれば我々が通つてきたところは、普通の登山者はもちろん猟師でなければ通らない道を通つてきたのである。登山道は雁坂峠を回れば立派な道で道標もついていて五時間早く帰れたそうだ。しかしながら我々は数々の思い出を残して(一つ一つ細かく書くことができないのが残念であるが)、無事に川越に着いたのである。

取材寄稿 山への憧れ

金子勇二（一九五一年卒）

自宅は川越市街から離れてのどかな鶴ヶ島にありました。父親は趣味で猟をする人でした。鉄砲を持って野鳥を追い掛け、子供の私はよく猟に付いて歩きました。私自身も大人になって同じような趣味を持ちました。そこで山々への憧れが始まったのだと思います。

敗戦の年（昭和二十年）の春、旧制中学に入学しましたが、最初に憧れの山に連れて行ってもらったのは、旧制二年（昭和二十一年）の雲取山でした。勤労働員から戻ってきた怖い上級生たちと一緒に、「徳さん」先生が山岳部を指導し、戦後の学校で部の再建をさせようとしていたのだと思います。

当時雲取山に登るといふのは、二泊必要でした。朝、川越を出ても三峰山に登りつく頃には夕方になってしまふ。ケープルカーはありましたが、あんなものには乗らずにバスを降りてから二時間歩いたものです。三峰神社には宿坊のような施設があつて、布団くらいは貸してくれましたから、それに包まって板の間で寝る。同じように宿泊している信者たちが大鍋で煮込みを作ってくれて、それを分けてもらったものが夕食でした。翌日は雲取山山頂に到達して、そこでも自炊でしたね。

この最初の山行は、何だかとても苦しいものでした。疲れて休み

たいと思うのですが、なかなか休憩させてくれません。

「登山とはこんなに厳しいものなのだろうか」

それでも帰宅してみると、また行きたくなくなった。武甲山にも、両神山にも連れて行ってもらいました。

旧制中学を三年まで進んで、学校は新制高校（昭和二十三年）になり、私たちは高校一年になりました。六年間旧制中学や高校に在籍したわけです。旧制中学では、上級生は怖い存在でした。通学途中ですれ違つても、先に敬礼するのは下級生の方から。応じて上級生が返礼する。しかもその礼を見届けないと下級生は礼を終われない。これには相当緊張したものです。ところが新制高校になると、敬礼はいらぬ時代になって、いくらか自由な時代になってくる。私たちは上級生には厳しくされ、戦後の下級生とは親しくし、何だか時代の狭間に置かれていましたね。

「徳さん」といふ山では優しい先生も、普段は始業にわずかに一分遅れただけでも、相当怒られました。秩父の山に行つて、「田部重治じゅうじを読みなさい」と徳さんに言われ、「笛吹川を遡る」といふような紀行文に、魅力を感じていました。

高校二年（昭和二十四年）頃は、どの部活も充実してきました。でも私は、その頃一旦退部しているのです。理由は日光の山行でした。高一の夏は、二泊テントに泊まって男体山に登り、日光白根に登りました。とても楽しかったのです。でもキャンプでは濡れたテントを嫌ったメンバーが宿へ移動、それで「皆で仲良く山登りをしよう」という姿勢では、何か違うなあ。登山の厳しさといふのは、

僧侶が座禪を組むようなものだろうと思いついていました。山岳部から離れていた私は、五泊して雲取山から金峰山まで全山を歩きたいと、その年の夏に大川解君と二人で計画を行いました。

そして高校三年（昭和二十五年）最後の合宿は南アルプスの甲斐駒から仙丈ヶ岳を越えて、北岳、鳳凰山を周回するもので、仲の良かった同級の糟谷がリーダーになったことで、参加しました。当時南アルプスなどというところは、登山者は行きません。一週間の合宿で他人に出会ったのは、北沢峠と北岳山頂くらいで、毎日毎日誰にも会わずに、仲間だけで探検していたような山行でした。

登山を職業にすることはできないだろうかと、在学中から考えていたのですが、それには農学部に進学して国有林の管理をやることだと思いついていました。山の中で営林署の職員に何度か遭遇したことがあって、その職業に就くには、

「地質を勉強して、植物も、鉱物も……」

そんなことを言われた記憶があったのです。

大学はその通りに農学部林業科に進学して、学部の山岳部に入りました。キャンパスが藤沢にありましたから、地元丹沢の岩や谷はホームグレンデになりました。さらに社会人のクラブに参加したこともありました。

昭和二十九年の十一月、冬山訓練の富士山で、大規模な雪崩遭難が発生しました（十一月二十八日、南岸低気圧の影響で、吉田大沢で雪崩が発生し、日大、東大、慶大山岳部の四十人が訓練中に巻き込まれ、十五人が死亡した）。私もその合宿で入山していて、半日

前に下山して救われました。後輩が亡くなりました。

そんな時代に、先輩に紹介されて第二次マナスル登山隊（昭和三十年）にサポート隊員として参加することになったのです。横有恒（よこありつね）さんを隊長としたヒマラヤの登山隊は、翌年（昭和三十一年）の第三次隊で初登頂に成功するのですが、これは前年の遠征のことです。ベースキャンプは五七〇〇メートルで、頂上は八一〇〇メートル。ベースキャンプの上ヘルート工作するのは、選抜メンバーたち。私はサポート隊員ですからベースまで。日本での物品の購入や、荷造り搬送などをやりました。

毎日新聞社が後援となって、ドルの持ち出しに制限があった時代に、外貨の割り当てを獲得しました。まだまだ海外旅行が自由化される前の難しい時代の遠征でした。個人負担金もかなりのものであったと記憶します。二ヶ月間の参加でした。

現地の山岳民族の間には、ヒマラヤの峠を越えてインドからチベットへと、民族の交流には長い歴史があるものです。しかし彼らは峠から決して山頂へは目指さない。頂上は聖なる場所なのだということ、私は強く感じたのです。ところが日本の民族史は、頂上に登りつくことが聖地への接近でした。私の登山観は、国内のそれに終結してしまつたということかもしれません。

当時の社会情勢は「なべ底景気」の不況と言われ、鳩山一郎総理大臣も政権を投げ出してしまつたくらいですから、大学を卒業した者でも、縁故採用以外は就職も難しかった。その渦中であつて山に関わって就職が一年遅れ、どうにか教職採用試験にパスして、幸運

にも自分が育った川越市の中学校の教員になりました。公務員の初任給が八千円の時代に、私立大学の授業料が月に千円。これで優雅に登山に行けと言われても、当時はそれどころではありませんでした。

教職に進んでから数年後、中学校の子供たちと年に一回の登山をすることが、楽しみになってきました。昭和三十年代は、夏休みの教員の私的な山登りの企画に、大勢が賛成してくれました。武甲山、大岳山などにはよく行きました。しかも一泊して、雲取山とか蓼科山、南アルプスの甘利山、八ヶ岳・赤岳などに中学生を引率すること、親も子供も大賛成してくれました。学校組織の中で管理職になるまで、それは昭和五十二年頃まで続いたと思います。最近では、孫を連れて、少し山歩きをしています。

その富士見中学の教頭時代に、たまたま同校でPTA会長をされていた岩堀さん（一九五六年卒）と出会って、

「君も川高山岳部だったのか。私は今でもときどき山登りをするよ」と、すでに登山から引退していた五年下級の彼と、話をするようになりまし。そして一度、天神平から谷川岳耳二つ登山を、五人で一緒にしました。

教職を退職してもう大分たちますが、何が一番楽しいかと言われるれば、その頃の教え子たちがたまに集まってくれて、日帰りの山行をすることです。私が七十歳代、教え子が六十歳代になりますが、一緒に登山をした教師を慕ってくれるというのが、教師冥利に尽きるものです。

取材寄稿 山岳部初めての南アルプス

糟谷 熊（一九五一年卒）

上高地で写した三十人あまりの集合写真（昭和二十二年）の中に、当時旧制中学三年の私も写っています。燕岳から槍ヶ岳を縦走して上高地に下山したときの写真です。参加した生徒の中でも、私など何だか幼い顔をしていますよね。多分私たちがその中では最下級生だったのではないかと思うのです。先輩たちは三級上まで参加していましたから。

私の山行は、二級上の滝沢さんや一級上の佐久間さん、菊池さんに、在学中も卒業してからも誘われることが多かったものです。最初の山行は旧制中学時代の雲取山で、先輩たちや、顧問の徳さんに指導を受けました。中学三年を卒業すると、昭和二十三年から新制高校一年で、また三年間学んだわけです。

すでにうる覚えの記憶の中でも、最上級生になったときに私がリーダーで、山岳部としては初めて南アルプスに出かけたことが、やはり鮮明です。甲斐駒ヶ岳に登るにしても、中央線の駅（日野春）を降りるとそこから徒歩。先ず前山を越えて向こうの集落に降りて、そこが登山口になるわけです。

黒戸尾根から甲斐駒に登って仙丈ヶ岳に登って、その仙丈から長く続いている馬ノ背の稜線などは実に美しいものでした。一旦谷に

下った後に北岳に登り返すのですが、このときに道を間違えてしまったことは本当に辛かった。沢沿いの登山道だからと水筒に全く水を持たずに出発して、道を間違えたことに気が付いた途端にやぶ漕ぎに入って、そのまま稜線に登り付いたときに、水筒が空っぽだということに気が付いたわけです。カラカラに喉が渴いているのに、水の一滴もない。ひどい登山をしました。

そして北岳に登り、広河原に下った後にまた鳳凰山に登り返して、下山した後、たまたま森林伐採のトラックに乗せてもらえることになったのですが、「荷台で居眠りするな、振り落とされるぞ」と先生に言われたことを覚えていますよ。ほんの七、八人の登山でしたが、よくぞ計画通りに実行できたものだと思います。

先の上高地での集合写真のときの槍ヶ岳というのは、中学生が先輩に付いて行っただけの登山で、記憶が薄いのです。卒業した滝沢さんが日本歯科大山岳部に入られて、その合宿に付いて上高地に再度行きました。

そのある日、「僕はまだちゃんと槍ヶ岳に登ったことがありません」といって、一人で上高地から槍ヶ岳まで往復したことがあります。そのときこそしっかりと登頂できたと思うのです。

その他、山岳部の皆で白馬から唐松岳への縦走もしましたが、他にも数回北アルプスには通いました。南アルプスにもまた佐久間さんたちと個人山行をしました。当時は脚力に自信があつて、大抵のところなら登れると思つていたのです。

川高山岳部の夏合宿は、いつも夏休みに入つてすぐの七月二十三

日頃からスタートするのですが、下山して所沢の自宅に戻ると八月に入っていました。私の住む所沢の山口は旧盆が八月一、二、三日になつていて、必ず親から「旧盆くらいは自宅にいろ」と言われていたわけですから、一週間の合宿は、七月中に終わらせなくてはなりません。他にも、同級生の宮崎君が怪我をしてしまった雲取山からの縦走。佐久間さんたちといった秩父の山。多くの山に登りました。私がリーダーだったときの山行で下山が遅れて、徳さんに怒られたこともありましたが、それくらい山に登つていたということです。

川高山岳部で一級先輩の若月さんは、同じ所沢の近所に住んでいました。卒業した先輩が、ある冬に富士山に登るといって、冬靴とアイゼンとピッケルを借りにきたことがありました。当時冬の装備は高価なものでした。先輩は単独で二月の富士山で無念にも遭難し、連絡を受けたものの最初の救助はほとんど不可能で、三月に一回、その後五月になった頃に発見されたという事故でした。私が貸し出したアイゼンやピッケルを回収したときには、どうにもやりきれない気持ちになりました。

大学を卒業すると自営だった私は自宅に戻つてきたのですが、その頃また滝沢さんに誘われて、南米へ行くことになりました。あれは一カ月もの旅だったのですが、南米大陸の最南端の島にまで到達したのです。簡素なホテルにも宿泊しましたが、毎日毎日かなりの距離を一緒に歩いたと思います。今となつては優雅な旅をしたものだと思います。滝沢さんは今でも元氣ですね。私は少し足腰が弱つてきました。

一九五〇年（昭和二十五年）

山行

両神山 二月

新入生歓迎山行 赤城山

奥秩父縦走 笠取山〜三峰 五月

夏山合宿 南アルプス・甲斐駒岳〜仙丈ヶ岳〜北岳

浅間高原 八月

送別山行 大岳山

〔部員〕 駒井昭 菅間博 栗原惇 原富啓 水村和雄 内田忠仁

〔顧問〕 木村信寿

この年の秋に入部した一年部員の八木一郎は、翌年部長になったが、卒業までに十七回の登山を行ったと当時の部報（秩父零十四号）に報告している。戦後数年で世の中は豊かになり、高校部員も頻繁に山行に出かけられるようになった。

この頃の平均的な年間計画を紹介してみよう。毎年秋には三年生の送別登山が行われた。奥多摩の海沢を遡行して大岳山に登った。金曜の夕方に奥多摩キャンプ場で幕営し、翌日は大岳山から御岳神社まで下って二日目の幕営。

同じ紅葉シーズンに、六名ほどで丹沢の大倉尾根に登って、塔ノ

岳の小屋で宿泊。翌日はヤビツ峠へ下った。冬にはスキー山行に出る者もいたし、二月には奥武蔵の二子山に行っている。

三月の春山合宿は奥武蔵の名郷の小学校をベースに、有馬谷の逆川を登ったり、鳥首峠から大持山を縦走した。

四月の新入生歓迎山行は雲取山で、頂上に一泊して氷川（奥多摩）に下山。そして夏休みにはアルプスの合宿を迎えている。

山行記録 南アルプス北部縦走

七月二十八日〜八月三日

顧問木村 三年糟谷 柳下 宮崎 金子 市村 二年菅間 栗原

我々が南アルプスに登ろうと言いだしたのは、今年の四月末でありました。それから約四ヶ月の間計画を進め、夏休み中の七月二十八日より八月三日に至る七日間に北部縦走を決行しました。

南アとは私の直感的に感じた印象で言いますと、峻厳な北アルプスと重厚な奥秩父とを足して二で割ったようなところであり、平均の高さ三千メートル、深い森林と谷を有し、山が独立峰的特徴です。

七月二十八日（雨）新宿前夜発で中央線日野春駅着（五時四十五分）〜（途中二名頭痛のため二時間休む）〜駒ヶ岳神社（昼食十一時二十分〜十二時五分）〜黒戸山（午後六時三十五分）〜五合目小屋（午後七時四十分）

前日からの雨は、益々烈しくなる一方である。

日野春駅を出た私たちの顔は暗い。汽車の中で眠れなかったためと雨のためである。第一日は無事に済みそうもない。二十分後の大きな橋の下で休み。焚き火をして部員の頭痛の回復を待った。雨は小止みなく降り続いてしたが、強引に出発した。今日は何としても五合目小屋まで行きたい。駒ヶ岳神社を過ぎると、いよいよ急勾配の本格的な登山道に差し掛かった。下山してくる人たちにしばしば会う。

それらの人にここは何合目ですかと聞くと、その返事が我々の予想していたのと大分食い違っていたので再三意外な思いをした。平均六、七貫のリユックの重さでピッチは上がらないのである。ついに私は参った。ただ私を除くパーティーの者が元気であるため心強い。雨は雷雨まで強くないが、全身ずぶ濡れで非常に体に毒である。黒戸山の前には梯子が多かった。その頂上に着いた頃は雨がさして強い刺激とはならなかった。ここから小屋は近かった。入山第一日、こうして私たちは予定より二時間遅れ、七時四十分には小屋に辿り着いた。

七月二十九日(雨) 五合目小屋発(十時十五分) 七合目(十一時四十五分) 十二時十五分) 駒ヶ岳(午後四時十五分) 四時三十五分) 駒津岳(午後六時) 仙水峠(午後六時五十五分) 七時) 北沢小屋(午後七時五十五分)

今日も雨。我々の顔も晴々としれない。小屋の人に元気付けられ、

十時過ぎに出発する。昨日の疲れが抜けないので、こんなに遅くなくてしまったのである。鎖場の難所を幾つか越して七合目の小屋に着く。ここから幸い緩傾斜が続いている。道松の展開しているところも天気がよければ眺めも素晴らしかったらうに、雨中では何も見えない。八合目までは順調に来たが九合目の三本の剣が仰げようになると、這って登るような斜面となったのでピッチがぐりと落ちた。全然人と会わぬ。この雨で皆敬遠したのだろう。九合目に差し掛かったとき左側に物凄い岩壁が何千丈もあるかのように天界に削立している。頂上は近くだと分かって、足は少しも速くならない。

雨が小降りになった四時十五分によく三角点に到着できた。駒ヶ岳の展望の広範なことは有名であるが、今は二十分先も見えない。祠の前で写真を撮ってせめてもの気休めにした。展望の展望も空しく、時刻も迫ってきたので皆名残惜しげに六方石へ下った。鋭い刃物のような感じを受ける六方石の尾根に、ここで不慮の死を遂げた大学生の遭難碑が建てられてある。この雨に何か物語っているようだ。このようなことをまた何処かで繰り返すことだろう。私は思わず唾を飲み込んだ。

駒津峰より仙水峠への下りは実に急で、この辺りから雨は土砂降りとなった。誰も何回となくスリップした。高さにして約七百メートルなのであるが、なかなか峠に出ない。皆疲れも忘れてピッチを上げた。

仙水峠から北沢小屋までは緩やかな、楽な道なので、ずいぶん飛

ばした。峠の付近は湧出岩の礫場で歩きにくかったが、すぐ白樺が何本か混じっている薄暗い林の中に入った。小屋に二組のパーティーがいて、のんびりと衣服を干していた。我々は二日も雨にやられたので、その夜は座ることが大儀なくらい体が弱った。昨晚と同様に二年生の二人が炊事をして疲労の甚だしい三年部員を助けてくれた。ビタミン注射でコンディションの回復を図る。

七月三十日（晴れ・ときどき曇り）北沢小屋発（九時十五分）→北沢峠（九時三十分）→大滝頭（十一時三十五分）→途中燃料取り三十分要す→仙丈小屋（午後三時二十分）

五時起床。星が幾つか見える。今日の天気は期待できそうだが雲の切れ目からときどき青空が見える程度である。誰の顔にも喜びの色が見えた。何しろ今度山に入って初めてなので、その上今日のコースは問題にならないほど短くもあり、易しくもある。全員のコンドイションはよくなったが、歩行は実にゆっくりである。晴れ間が見えたとはいえ、ときどき雨雲が出て皆を不安がらせた。

四時間もたったであろうか。綺麗なお花畑の展開されている緩やかな斜面に着いた。皆リュックサックを降ろし、童心に帰ったように嬉々として散策する。いつの間にか雲が消えている。二日間の疲れもいっぺんに吹っ飛んだようだ。馬の背を通りここから這松地帯に入る。

樹齡三百年位の私の腕の太さの這松もある。その頃霧の間から仙丈岳の頂上が見えた。ついで全貌が明らかになる。雄大なカール、

これは南アルプスに於いて、駒ヶ岳のピラミッドに対称して言われるものである。駒のピラミッドは男性的であり、これは女性的である。ここから小屋までは緩い登りである。雷鳥が親と子で三匹、這松の脇を危ない足取りで歩いている。すでに羽に白いところが見えていた。三時半頃の仙丈小屋に着く。

その夜二時頃であつたらうか。ヒュウヒュウと唸る冷たい隙間風に目を覚ましてしまう。目が冴えてくるに従って今日のことが頭に浮かんでくる。仙丈のカールに落ちる夕日の色。真っ赤な真綿のような雲の上に浮かぶ駒ヶ岳、八ヶ岳、遠くは北アルプス等々、しかしいつの間にかまた夢の国の人となった。

七月三十一日（晴れ）仙丈小屋発（七時十五分）→仙丈岳（七時四十五分→八時）→大仙丈岳（八時三十分）→ふき平（十一時四十五分）→荒倉岳三角点通過（十二時四十分）→弘法の池（十二時五十分→一時）→横川岳ピーク（午後二時十分）→両俣小屋（午後四時三十分）

五時起床。今日こそ快晴だ。小屋を飛び出る。寒い。夏とはいえ一万尺になんなんとするとここでは仕方がない。仙丈岳の朝、何て良いのであろう。まず第一に朝日に遠い北アルプス連峰が輝き始める。その残雪を渾然と融合せしめて紺碧の天にそびえる早朝の山々に、槍ヶ岳の尖峰が鋭く天に沖している。八ヶ岳、駒ヶ岳、北岳、赤石、聖と一望の中に見渡される。周りの谷は一面に濃緑色の闊葉樹で充たされていく。

今日は馬鹿尾根下り。「よい天気だ」の声が連発。皆この快晴によほど嬉しいと見える。大仙丈の絶壁に岩燕が飛んでいる。北アの不帰の嶮を思い出させるキレットを過ぎれば、いよいよ本腰の馬鹿尾根である。鈍目のため道はどうやら分かる。道は灌木に覆われていて眺望は零。高低なき尾根が延々と南へ続く。弘法の池には水がなかった。

横川岳を巻く頃仙丈の辺りで鳴るあの恐ろしい雷鳴に肝をつぶす。両俣小屋の手前十分のところで道が切れている。増水のため橋が流れたらしい。草の中の小屋、床は半分しかない。小屋の周囲には一面の山苺でビタミンCの欠乏を防ぐ、岩魚を捕る用意はしてきただがついに一匹も捕れなかった。

八月一日(晴れ) 両俣小屋発(七時二十分) 〓(左俣沢の入り口を見逃す。右俣沢歩き、及び道の搜索に三時間半を要す) 〓中白根尾根取付(十一時十分) 〓ブッシュ(午後二時) 〓岩場(午後三時三十分) 〓中白根(午後六時十五分) 〓北岳小屋(午後七時三十五分)

今日は今までの行程と異なり、沢づめである。昨日は山苺の満腹に気をよくした我々一行は、まだ何か小屋に心残りがするらしい。後を振り向き最後の苺を食べながら北岳を目指す。途中苔むした二つのケルンに気を許し二時間ほど野呂川を遡った。しかし何時になっても右俣沢と左俣沢の出合に着かない。右俣沢に入り込んだのかもしれない。私と他の二人は一同を残して右側の斜面を登り地形を

見極める。北岳、中白根、間ノ岳が手近に望まれる。出合からの北岳は南に当たるのだが、ここから見るとずっと東に偏っている。確かに右俣沢に迷い込んだのだ。小屋をたつてから、しばらく沢から離れたので、その間に出合を通り過ぎてしまったのである。正面に大きな尾根があり、その東側が左俣沢であると分かったので、それを越すことになった。

もちろん今まで来た沢を元へ引き返そうという案も出たが沢下りは時間を多くとり、厄介なことが起こりがちなのでそれは止めにしたのである。三十分後に尾根の上に出た。しかし左俣沢に降りる斜面は非常な急傾斜で、ブッシュが密生していて人間には手も足も出ない。獣道らしい、尾根の上を下ると出合辺りへ出そうなので、これも時間をとりそうである。結局尾根の上昇をして中白根へ出るこゝとなった。獵師も幾年か前にここを通ったらしく邪魔になるような木が切つてあり、朽ちかけている。針葉樹と灌木の中の道を約三時間で突破。そのときすでに目の前に、中白根、北岳が見えたがなかなか遠い。

這松地帯を二時間、この時は全員スポンとシャツは松脂だらけである。しかも鈎裂きは場所を選ばない。実に長い二時間であった。次は岩場である。非常に脆い巨岩がガラガラ不気味にこだましながら崩れる。これを約一時間。中白根着六時十五分。処女ルートに登攀した今までの苦心は夢のようである。そこに二、三枚の雷鳥の羽が露に濡れてあった。

八月二日（晴れ）発（六時十分）→北岳頂上（八時→八時五十分）
 →小太郎尾根（九時）→白根大池（十時五十分→十一時十分）→広
 河原小屋（午後一時→二時）→白鳳峠（午後七時十五分→七時
 四十五分）→高嶺（八時五分）→北御室小屋（十時十分）

誰か小屋の戸を開けた。月の光が入ってきた。一緒に泊まった飯
 田の二人の高校生がもう出かけるのだ。今日の天気も素晴らしい。
 是非とも今日は北御室小屋まで行きたい。朝飯を頂上で取ることに
 してすぐに出発する。薄い雲が山の間を流れていく。南に富士山が
 荘重な姿で浮かんでいる。尾根に出ると昨日の中白根尾根（我々
 はいも尾根と呼んだ）が長々と見える。冷たい風がほてるからだに心
 地よい。

頂上は風が強いが四方の山々の眺めは素晴らしい。例の二人の登
 山者はまだここにいた。今日越そうとする白鳳峠の尾根が野呂川を
 隔てて対立している。

小太郎尾根までは平易な道であったが、ここからは有難くない南
 アの名物「草つき」が急勾配で落ちている。雨後を狙ってやってき
 た人たちに盛んに会う。赤土、小石、オニアザミに悩まされること
 二時間。白根大池に着いたときには膝のバネが取れそうになった。
 ここから見た北岳の岩壁は如何にもすごい。スイスの山の感じを受
 ける。二十分ほど休んで今度は針葉樹の間のジグザグした道を下る。
 二時間で広河原小屋に到着する。足が馬鹿になってしまったので、
 昼食後三十分横になった。

広河原を徒渉するとき釣りのうまい小屋番から岩魚をわけて頂い

た。このときここで合計二時間浪費したことは日没後の危険な行軍
 を生ぜしめたので、返す返すも残念なことであった。今後の山行に
 大いに反省させられることである。

白鳳峠までの四時間の急上昇は苦しく、ファイトがあったと言う
 より壮烈であった。峠に辿り着いたときに七時をちよつと過ぎてい
 たので残っている飯で食事をする。もう夜の行軍は覚悟していた。
 高嶺まで緩い登りが一時間続いていた。雷鳥が二羽出てきて、のそ
 りのそりと前を歩いていく。残照で赤みを帯びた霧が首を絞めてい
 くようである。各自の間を狭め電燈の光に頼るように暗くなった。
 両側の鋭く落ちている尾根を三十分ほど進むと道が突然不明瞭にな
 ったので立ち止まった。東の方に道がついているようであるが、こ
 れもはつきりしない。あれこれとためらっていると先生が何を感じ
 たかヤホーと叫んだ。すると下の方から答えがあった。人がいるの
 だ。

我々が、もしこの下にキャンプしている人たち（垂崎高校の三人
 パーティー）に遭遇しなかったならば、小屋まではもちろん着けな
 かつたろう。そして何処かヘ Tent を張って不安の一夜を過ごした
 に違いない。我々は道の安全な賽河原の終わりまで導いて頂くこと
 ができた。名前も明かさないうつましい態度にはただ感謝の
 念より何ものもなかった。

その夜、小屋に着いたのは十時を過ぎていた。小屋番には大変迷
 惑をかけてしまった。この夜の岩魚料理のうまかったことは忘れら
 れない。それより道を教えてくれた人たちの親切、私はこれを心に

深く刻み付けた。

八月三日（曇りのち時々雨）発（七時）→御座石湯（十時四十分）
→十二時五分）→葦崎着（午後一時三十分）

今日は最後の日である。五時頃、同じ小屋に泊まった地元の若い人たちが地蔵岳をさして出て行ったのを、うつらうつら覚えていた。六時起床。気が緩んだためか、飛び起きることができない。私たちもすぐ出発した。リュックは三、四貫。しかも下りなのでピッチは上がる。出るとすぐに小雨にあつたが間もなく止んだ。道の両側にある木の三辺くらいのところに鈍目がある。冬期ここは相当登山者があるからだ。この中にはこの四月私が付けたものもある。千五百辺ほどの標高になると、さるおがせは次第に少なくなる。

御座石湯で湯に入り一週間の垢を流す。ここで材木運びのトラックを見つ、気持ちよい雨に叩かれ、居眠りの中に葦崎に着いた。

（三年 糟谷 熊）「生徒会会報」

随想 山の一観

木村信寿（顧問）

昭和二十三年五月に川高に転勤してから、現在まで約三年半の間に二十五回の登山と、四回のスキーを経験した。その中で単独行は六回で三千辺級の山登りは五回となる。山にはそれぞれ個性があり、

脚力と時間とをかければ、山はもつと深く奥を見せてくれる。

山には巨山、剣山、美山、幽山があり、また碧谷、秘谷、清谷、深谷もあつて、単純の中にも変幻性に富んでいる。映画や芝居は我々に一つの物語を紹介してくれるが、その物語を我々は変更させることはできない。山ではある程度自分で思うように物語を構成させることができる。それには一日ないし数日間かかる。それは山においては我々は観客であり、演技者であるからだ。そこで次のような登山物語が生れる。

「山岳部員の団結の素晴らしかった南アルプスの記録的長期縦走」
「勇猛壯絶な北アルプスの岩壁登攀」

「朝日岳、出羽三山、鳥海山等の広大な天然庭園の詩的鑑賞登山」

「丹沢の妖しき天候に苦しんだ半死の吹雪下の単独行」

「渺茫たる視界に恵まれ、圧巻的パノラマを満喫した八ヶ岳」

「スカイラインやスロープの美しかった富士、三ツ峠、金時山の変則的単独行」

「山の墓場へと寂しく訪れた細雨下の谷川岳」

これらの山は一、二時間では語りきれない物語を含んでいる。

山の景色の粹美は「山で澄んだ目をしている生徒の若い心」とともに、私の身近にあつた。それよりも山が土台となってパーティーの一人一人がよき「心の演奏」をしてくれるのが音楽堂の音楽よりも素晴らしいことがあつた。

ある頂上で一人が遠くの奇峰に対して双眼鏡から目を離さず、他の一人は貸し残った双眼鏡のケースを小脇に抱えて磁石と地図で付

近の山々を合わせ、ある者はビスケットを皆に配り終わり、腰に手をあてがって歩き越してきた縦走路を懐かしげに眺め、その隣の者はこれから挑戦する第二岩峰を指し疲れた者を激励し、伸ばしかけの髪が風に揺れている。これら各人のポーズが自然に終わるのを待って、リーダーがやおらに立ち上がって出発の合図をする。山の一角を凝視していた私はその光景に微笑みながらも、山岳関係の芸術的直感をまとめるため深い思索をするのだが、それを助けるため軽く歩き出した直後に、

「先生もういいでしょう、この頂上はこのくらいで」

と声を掛けられる。皆は今までの汗の登りに、何事もなかったように清しい顔をしている。そうして隊伍を整えて多少弾んだ気持ちで降りてゆく。もう二度と訪れることはないと思つてか、軽い惜別の愁をこの頂上に残して去っていく。はっと我に返ったときは生徒たちはリーダーを先頭にして奇麗な一線となつて、山の稜線をガツチリと同一間隔で進んでいた。頂上で各人が勝手なポーズを取っていたようでも「気心の調和」が私の心を何もものかになつて激動させた。これはまさに心の演奏ではないか！

「心の演奏場」は山頂だけではなかった。幽林に碧流に岩場に緑丘にと、憩いの場所では彼らはどんな小さな缶詰でも残飯でも何でも分け合つた。どんな新人もこのシーンを見ては溶け合うような親しさを起こす。また疲れた者の荷は他の者が自発的に背負うことを申し出るのが常だった。

この自発性が彼等にのびのびとした気持ちを抱かせ、やがて彼ら

は自分で物を考え、よい意見を言うようになった。私は山で喧嘩や意見の対立、気まずい雰囲気など一度も見たことはなく、部員たちはリーダーをよく助けていた。またリーダーも幹部も下級生をよくかばっていた。

私は山による物語構成の見地から山の味を紹介しただけであつて、皆に山をお勧めするのではない。二、三回の登山で簡単にこのような山の味は解らないし、功利的処世観からは割り切れないものがかなりあるからだ。「心境開拓の登山」のよさは、登山をスポーツや運動や遊楽とせず、人生の縮図を行動で体験し行動と思索の総合体を作るところにあると思つている。「生徒会会報」

取材寄稿 岩魚の手づかみ

駒井 昭（一九五二年卒）

高校三年の夏山縦走は思い出に残る山行で、北アの烏帽子岳から槍穂縦走でした。木村信寿先生が引率されましたが、小屋に泊まると先生はランプの下で、何だか原稿を書いていました。それを、槍ヶ岳山荘の郵便ポストから投函して、宛先は朝日新聞の埼玉支局だったのですよ。

当時の朝日新聞埼玉版の「夏山通信」に私たちの合宿が三回くらい連載されたのです。下山して新聞を見返すと、なるほど登山の様子が写真付き載っていて、「この夏山報告は、僕ら川高の合宿なんだ」

と、何だか鼻高々だったことを思い出します。

合宿中は、小屋の粗末な食事だけで、いつも腹を減らしていました。持参したコメを焚いてもらって、出された福神漬、たくあん、佃煮で食べる。持っていた缶詰は、鯨の大和煮、赤貝の味付け、最高のものでコンビーフ。みかんの缶詰や白桃は高級品でした。しかもどれも重い。まあコメさえあれば、味噌とスルメと鱧節だけで、十日間くらいは食いつなげという時代でしたから。

父親が医者でしたから、私は秘密でオリザニン・レッドというビタミン注射を山に持っていったわけです。アンプルと注射器セットがあれば、あんなものは皮下注射ですから誰でもできます。アルコールで腕を拭いて打ってあげると、疲労困憊していた友人も元気を取り戻します。今なら医師法違反でしょうが、それだけ食い物が不足していた時代だったということです。

当時顧問の木村信寿先生は、城南中学の近くに下宿していました。東大の化学出身の先生で、人気がありました。「金太さん」と呼ばれていたのは、若くて小柄なのに豪快で、金太郎をもじったものだと思います。

山岳部員はよく先生の下宿に集まって、酒盛りしながら、三高、北大などの寮歌を教えてもらった。すき焼きだとか鍋料理を食べながら、山の話や人生論、先生の恋愛論などを聞かせてもらいました。先生は優秀な化学者でしたから、私が三年の秋に日本化薬の山口厚狭の工場に就職が決まって退職されました。戦後復興の日本に、化学者の需要は多かつたのでしよう。

奥秩父の「半縦走」という山行もよく覚えています。全部縦走するのは雲取山から金峰山までですが、週末の二日で登れるのは笠取山まで。半分だから半縦走と言っていました。当時は今と同じ週休二日で、金曜の夜に新宿発二十三時五十五分の夜行列車に乗る。明け方塩山で下車して、土曜、日曜で笠取山から雲取山を通って三峰へ戻るわけです。昭和二十五年の五月にもこの縦走をして、下山すれば、朝鮮戦争が始まったその日でした。

この年の新人歓迎会は、赤城山に行きました。なんと私は旧軍隊の二十五人用の天幕を背負わされて、あのズック生地の大テントは重くて仕方ありません。前橋からバスに乗って種富牧場まで行くのですが、その後の延々とした平坦道をテントを担いで歩いて、何だかあほらしく疲れたことがあります。

在学中には、野球部の応援にもよくいきました。当時の川越線は、汽車に連結されている貨物車だけで客車はありません。来るときにはイワシの油を絞った残りかす（魚粉）を、畑の肥やしとして運んできました。それが帰るときには空になるから、そこに人を乗せる。あの魚の腐ったような異臭は、本当に嫌なものでした。でも他に交通手段はない時代でしたからね。

卒業して写真大学では山岳部に入りました。ある程度のごときはありましたよ。先輩は空身でピッケルだけを持って、下級生の尻を引っぱたく。まさに軍国主義の生き残り。それでも辞めなかつたのは、辛いことに耐えるのが必要だと思いついていたからでしょう。

私たちの年代は、旧制中学に入学して新制高校を卒業し、都合六

年間在学していました。入学した昭和二十一年には五年生という上級生がいて、彼らはサイパン爆撃生の生き残りだとか、予科練帰りの学徒動員で、軍隊経験をした人たちですね。昼休みになると「下級生は講堂に集まれ」と。それは今の体育館のあの場所です。青竹や竹刀を持った上級生が「うさぎ跳び始め」の号令で、私たちはその周囲を何度も回る。

ちよつとでも休むと「精神魂入棒」というその竹刀でひっぱたかれた。教職員は、こうした上級生の指導を微笑む。何しろ教師は、生徒を拳骨で殴ることが許されていたわけだから、戦後といつても軍国教育そのものでした。

でも川高山岳部の良さといえば、山行ではそんなことはまったくなかった点です。いや山に登るといことは、こうした非合理から逃避するという意味もあつたのでしょうか。

大学時代は、四月の遠見尾根、立山縦走、瀬沢合宿などという思い出ばかりです。夏は雲ノ平から薬師沢に降りて、岩魚を手づかみで取ったりしました。遠くから見ると水面近くを相当数の岩魚が泳いでいるわけです。彼らは、ヘビやカエルでも飲み込むという獐猛性がありますから、水面近くに獲物が寄つてくると、大きく口を開けて一飲みでしょう。

そこへ私たちがジャブジャブ入っていくと、サッと岩陰に隠れる。それでも水中に両手を入れてゆっくり近づけて、そしていきなり掴み取ると、素手で掴み取れたものです。半日で十五匹くらい捕まえると、夕食は岩魚パーティーで、すべて塩焼きで食い尽くした

ものでした。

当時の黒部川など、冠松次郎の紀行文しか資料がない時代で、道も不明だし一日中這松漕ぎ。登山者はほとんどいません。薬師沢から少し源流を登って、黒部五郎平へ出たりしました。のどかで楽しい時代だったので。

普段の夏合宿は瀬沢で定着して、岩登りをしていました。合宿が終わると、私はそのまま燕岳に移動して、二シーズンわたって燕山荘でアルバイトをして過ごしました。主人の赤沼さんは地元で、小屋の経営にも熱心だったので。夏の間には毎日三百人が宿泊しました。毎朝三時に起きて朝飯の用意。肉も入っていないカレーライスでした。

それが終わると、蒲団の上げ下げはかなりの重労働でしたが、たまにお客の小銭が落ちていて、余禄だともらってしまいましたね。その後は夕飯の仕込みです。たまに下山して、中房温泉の手前の露天風呂に入るのが楽しみでした。

労働条件は決してよくありません。学生は私の他には一人だけ。後は地元人夫の夏期の出稼ぎですね。朝鮮戦争が終わると世間は不景気に襲われて、仕事はあまりなかったわけです。私が大学を卒業した昭和三十一年などは最悪の不景気で、就職先は大学が紹介する一社だけ。そこがダメだと後は自分で探すしかなかった。戦争特需だけが取り得だったという時代ですね。

そんな時代から登山をしていたのですから、とても恵まれた青春時代だったと思ひ返します。

一九五一年（昭和二十六年）

山行

春山合宿 奥武蔵名郷

新入生歓迎山行 雲取山

夏山合宿 北アルプス裏銀座

夏山合宿 東北・朝日連峰 八月十日〜十七日 参加三人

八丈島旅行

八ヶ岳 九月二十二日〜二十四日 参加九人

送別登山 正丸峠〜伊豆ヶ岳 十月二十七〜二十八日 参加三人

〔部員〕 八木一郎 川口泰 柿沼隆 傘松祐三 岩崎昭九郎 島崎

正夫 染谷潔 中根甚一郎

〔顧問〕 木村信寿 内田一正

不定期刊ではあったが、戦後しばらく、部報「秩父峯」^{ちちよね}が刊行されていた。この年の山行は、同誌（昭和二十七年四月発行・第十三号）に詳しく報告されている。毎月のように登山を行っている。

さてこの部報では、翌年一九五二年の年間計画（注・実行されなかったものもある）が掲載されているのだが、春休みには合宿形態が三方面（志賀高原などの山スキーツアーと、川越から大阪までのサイクリングツアーと、秩父方面の合宿）。夏休みには四方面（涸

沢合宿と、南アルプス縦走、北アの剣〜後立山縦走と、奥秩父縦走）など、時代は登山のブームになっていたようだ。

数パーティーに分かれて行われた夏合宿のうち、北アルプス・裏銀座は長期間の合宿になった。他に朝日連峰の合宿も行われた。

この時代は部員も多く、山行回数もかなりの数にのぼっている。

山行記録 夏山合宿 北アルプス裏銀座（抄）

合宿では、烏帽子小屋までの登りの苦しかったことが思い出される。重い足を引きずりながら、冷たく濁った雪解け水で飯をとぎ、真つ暗なところで夕食を取ったのを記憶している。そうして星を仰ぎながら、これからの行動に胸を膨らませた。

烏帽子小屋から少し出たところで、遙か後方に見た立山の姿が目に残る。牧場的な岩山という感じがした。そして目の前には天の一点を突き刺しているような槍ヶ岳が聳えていた。

三俣蓮華の小屋での星空は、我々をロマンチックな、センチな気持ちへと引きずり込んでいった。このときほど星の美しさをしみじみと身を感じたことはない。夕食の味噌汁のうまかったことも思い出される。翌朝は晴々とした気分、K君にもらったビタミン注射のことも思い出す。槍ヶ岳を目前に控えながら、道松を切り飯を焚き、スケッチをしながら下から吹き上げてくる爽やかな風にしばしうっとりしていた。

槍の小屋では「毎日新聞社の者ですが」と言って、部屋を良い方



1951年 夏山合宿 燕岳～槍ヶ岳～穂高岳 縦走路にて

に変えてもらったり、小屋のうまそうな飯を食っている奴らにむしゃくしゃした。そして先に着いたK君と、ドロップをたくさん食べ後で腹が変になった。この先の行程を考えて、注射を多めに打ち早めに槍から穂高まで

では体が衰弱していたせいか、特に感じたこともない。ただ岩場の連続と下から吹き上げるガスと風、そして一歩踏み外せば千仞の谷！ こうして難コースといわれたところも無事に終わり穂高小屋へ着いた。そこで「死の断崖」のロケに来ていた俳優の上原謙や島崎雪子に会ったのも一興であった。

翌朝は穂高小屋から御来光を拝んだ。行く手には前穂、西穂、そしてジャンダルムとその絶壁雄大な姿が聳え、目を右に転ずれば雲の波がずっと地平の彼方まで広がり、目下には涸沢が白く光って

る。

涸沢へ下山し、横尾小屋付近の風景はこの世のものではない美しさだった。沢の青く澄んだ水、真っ白な砂、周りの木々は潤っていた。
(二年 中根甚一郎)「秩父零」十三号

記録 秩父三峰他(抄)

最初の登山はホームマウンテン秩父の三峰である。歩く時間より乗り物の方が長かったかもしれない。続いて富士山(物理部の主催による)へ行き、次がK先生との最初であり思い出の奥日光の登山。さらに東沢(第一回目)、雲取山。それ以来山への憧れが日一日と増し、ついに本校の山岳部への入部である。

部との最初の行動は、冬期両神登山である。足に出来た豆は、見えない山岳精神の教えである。この感無量の思いは、時が経つにつれて楽しみに変わる思いである。あの足豆の一件がなかったら山岳部は辞めていたかもしれない。続いて赤城山への歓迎登山。

四月上旬にはK・S君と十文字峠へ出かけた。これは登山具不備のため十文字峠から栃本までの北面の雪に悩まされて、突破できなかったのは残念だったし、よい経験になった。

夏期休暇の東沢(二度目)は、三年生もいたが二年のK君と私がリーダー格であった。沢は台風直後で増水し、沢の遡行はあまり気が進まなかったが、強引なK先生の断で成功した。

その前(七月下旬)に、友達と二度目の富士山に行った。その後

ハイカー式で二子山、奥武蔵の登山、十二月下旬の武甲山。武甲山は尾根を歩くのと（妻坂峠から鳥首峠→大持→小持→武甲山）、一旦下って登る（下山の妻坂峠から生川→武甲山）違いがよく分かった。このような経験は、遭難とか非常のときに役に立つと思う。

年が変わって、最初のスキーを水上の大穴でやった。四月は新形式の合宿。その後単独で奥武蔵の一人旅。これも歩くより乗り物の時間の方が長かった。しかし独力で何事も処理するというのは、一度くらいは経験する必要がある。

最後の学校生活では、憧れの北アの縦走であった。結果から見れば事故もなく終わったが、行動中の各自の団結によって得られた力の結晶であった。学年最後は八ヶ岳だった。ここはセミアルプス（秩父とアルプスの中間）の感じがする。是非勧めたい山の一つである。

（内田忠仁）「秩父零」十三号

取材寄稿 満喫している別荘生活

川口 泰（一九五三年卒）

八ヶ岳の山麓、甲斐大泉の標高九二五メートルのところに、十歳上の亡くなった兄が残した六百坪の別荘があります。南側の開けた斜面の向こうに、甲斐駒ヶ岳、北岳、さらに富士山が見え、背後の落葉松林の向こうには八ヶ岳が望めます。昭和四十年代、兄が定年後の別荘生活をするのだと買い求めて、鉄骨にパネル工法の平屋を建てま

した。ところが大して使わずに放っぱりばなしで、十年ほど前から私が使うようになった頃には、植林した落葉松も檜も伸び放題。雪はほとんど降らないのですが、冬の寒さに参った。寒い時には外気温がマイナス十二度。室内でマイナス七度まで下がるのです。

電気や下水道や井戸を整備しなおして、テレビアンテナを設置しました。わずか二十年足らずの間に、二十坪もの背丈になってしまった落葉松を間伐して、小さな菜園にはリンゴ、スモモ、ブルーイン、アンズ、カボチャを作り、春先にはタラの芽もフキノトウもゴゴミも出てきます。リスにヒマワリの種やクルミを与えて餌付けをしたり、それをハトや野鼠が邪魔して喧嘩しているのを、じっと見たりしています。いやいや、ご近所の別荘仲間の頼まれ仕事で、薪を運んだり、間伐を頼まれたり。けつきよく毎月のようにここへやってきますが、山仕事や野良仕事をするようなもの。松崎先生も、長島さんも来たことがあります。

私の入間の実家は農家でした。当時は養蚕やサツマイモの畑をやっていました。子供の頃の食糧難の時代には、自宅で取れたサツマイモでさえ、食糧庁に供出しなくてはならないことも多くて、農家は忙しいだけで貧しい家業でした。もちろん手伝いも多かった。あの時代の苦勞は、今の比ではありません。

上に兄が多くて、影響を受けました。私が子供の頃に勤勞動員された兄は、手に入れた部品を集めて、戦時中にラジオを自作しました。あるときに「秘密だけどな」と聞かされた雑音放送は、米軍の日本語放送で、日本軍が太平洋各地で反撃されているというもので

した。

「新聞に書いてあることとは違うぞ」と思うのですが、口にすることはできない。兄のラジオはとても物騒なものでしたが、面白いものでした。そして私もアマチュアの無線に凝るようになったのです。後年、自家用車に無線を装備して、知り合いになったロサンゼルスの日系人とよく交信したのですが、この八ヶ岳界隈を走っていると、クリアに地球の裏側まで電波は届くものでした。

兄の影響で無線については早熟で、あるとき私の発信した電波が強すぎて、警察の厄介になったことがありました。ある新聞は私のことを「ソ連のスパイだ」と報じたものです。それでも未成年者につき、咎めを受けることはなかったのですが。

ラジオに興味があった者は、ダイオードから半導体へと関心が移ります。就職した半導体産業は、爆発的な産業へと変化を遂げました。大きな図面に何枚もの設計図を描いて、それをナノの単位で、数ミ四方に焼き付けて製品化していく。ラジオやアマチュア無線の当時からは考えられないほど進化した。

社内でも管理職になると、子会社の整理統合など企業経営を任せられるようになってきます。群馬の渋川に七年、同じ八ヶ岳山麓の白田に二年と、単身赴任の生活が続きました。数年前によくやく退職して、好きな設計の嘱託に戻れるようになった。同じように、また別荘での生活が満喫できるようになってきたというわけです。

川越高校に入学した私は、母方の遠い親戚の二年先輩に糟谷熊さんがいたことが理由で、山岳部に誘われました。入部して間もなく

赤城山に皆でいきました。前橋から大胡おおこに出てそこから一日歩いて、頂上間近の沼のほとりに、大きなテントを張りました。まだ一面雪が残っていて、そこにシートを一枚敷いただけで寒い一夜を過ごしました。「あの水で飯を炊こう」といわれたのが沼の水で、手を切るように冷たい水。翌日はただ下山するだけで、山麓の牧場まで延々と歩いてバスで前橋にでました。それだけの登山だったのですが、楽しかったのでしょうか。

高校二年の夏には、木村先生と同級の柿沼隆のわずかに三人で東北の朝日連峰にいったのが夏山合宿になりました。八月に入ってからでした。汽車と私鉄を乗り継いで辿り着いたのが山形の鮎貝あひがひ。麓の朝日鉱泉に入るにはそこから頭殿山とうどのを越えて一日がかりでした。夕刻にその鉱泉に着いたときに妙に体中が不快になって上着を脱いだところ、宿の人に「裸になっちゃいかん」と大声で注意された。ハエよりも大きなアブの成群がいて、服の上からでも血を吸う。それが痒かゆくてどうしようもない。綺麗で冷たい水が流れているところにアブの成群が発生するということでした。

翌日は、鳥原山間近の湿原まで登ったのですが、メンバーの柿沼の体調が悪くなって、再び朝日鉱泉に戻ってもう一泊。その翌日には予定通り、鳥原山から大朝日岳まで登りつきました。湿原で食虫植物のモウセンゴケを初めて見ました。頂上付近には無人の小屋がありました。コンクリート作りの簡素な建物で、内部に這松の枝が一面に敷いてあって、前の人がマットの代わり置いたのでしょうか。そこに毛布に包まって寝るだけでした。あとは持参したコメを飯盒

で炊く。このときは長い縦走だからと軍靴を履いていました。

次の日には北へ向かって以東岳まで縦走しました。途中に「この辺りで遭難が発生しました。注意してください」とか立て札があったり、どうにも緊張の連続だったように思います。あの頃の朝日連峰などはまだまだ登山者は少なかったものです。途中で一度だけ地元の高校生グループに出会っただけでした。そして以東岳を越えて大鳥池の小屋にこの日は宿泊しました。ここもちろん無人の小屋でした。そして次の日、この下山がまた長いものでした。川沿いに延々と進んで、途中何度も川を横断して、どこで泊まったかは忘れましたが村まで辿り着いてその民宿に入りました。

先生が民宿の人と話をしたのでしたが、近くに亜鉛の採掘場があると聞き出して、もう夜の八時頃だったと思いますが「いまから見学に行こう」と。当時の鉱山はそれこそ昼夜で採掘していたのです。木村先生は化学の先生ですから興味があったのでしよう。そして最終日は少し歩いてバスに乗って、鶴岡にできました。

実はこの年の夏、先生は別パーティーの北アルプスの合宿にも参加しているかもしれせん。どうにも元氣な顧問だったのです。この年の秋に先生は川高を離れました。

普段の山岳部は名栗によくいっていました。あの頃は名栗の小学校が山岳部をよく泊めてくれて、そこを基地にして武甲山や伊豆ヶ岳など奥武蔵の山によく登ったものです。それと一級下に桑田君という実家が入間で林業をやっている部員がいて、彼の屋敷に大勢で泊めてもらったことも多かったものです。丹波の小学校にも泊まっ

て、大菩薩に登ったこともありました。

昭和二十七年の高校三年の合宿は、三峰から金峰山まで縦走して、信濃川上に下るという長期合宿をしました。けれど、私個人は名栗から都県境の尾根を通って、雲取山まで二泊かけて歩くとか、積雪があるときに、氷川（奥多摩）から雲取山を越えて雁坂峠くらいまでを歩くとか、そういう登山をしていました。今思うと、反発していたところもありましたね。真つ暗なところで野宿をするというのは、平気なのです。キツネとかタヌキがガサガサして嫌なときもありますが、入間の実家付近はどこでも夜間は真つ暗で、星明かりだけで家の用事に出かけたり、そんなことは誰でもやっていた時代だったのです。

二級下に市川章弘君やまひろがいましたが、彼らと夏にマチガ沢から谷川岳に登って谷川温泉に下り、そのまま越線から信越線に乗り継いで、八ヶ岳山麓の松原湖から小淵沢まで縦走したことがありました。稲子湯から黒百合平の小屋に行くと、山岳部の後輩が夏のアルバイトをしていましたよ。そういう人もいたのです。市川君はその後大雪山山岳部に入って大活躍したようですが、彼にアイゼンを借りて、三月の甲武信岳に登ったこともありました。

卒業してからは一度だけ兄も含めて、南アルプスの三伏峠から赤石岳まで縦走したこともありました。あの頃の私は健脚だったので。赤石岳には戦時中に軍の輸送機が墜落したという有名な話があって、確かに南側の斜面に、墜落機のジュラルミンの機体が光って見えました。それにこのときは悪沢岳の下りで、ある父親が背中

負って降ろしていた物が、実は遭難した息子だという生々しいところに遭遇しました。冬の遭難を夏になって降ろすという。下山は赤石岳から小渋川でしたが、ここも相当道が悪かったものです。

川高を卒業して四年ほど経った頃、夏の合宿が北アルプスの横尾で行われ、OBの私にも力を貸してくれと要請されました。横尾にベースを張った翌日には、蝶ヶ岳から常念岳へ槍ヶ岳まで周回しようという計画でした。ところが常念岳に泊まった翌日に台風がきてしまい、計画途中で横尾に戻るようになったのです。ルートは増水した一ノ俣。生徒を連れているのですから、私が先頭で沢を横断しなくてはなりません。鉄線をベルト穴に通して、「このまま流されても仕方がないか」と思っていました。無謀なのです、あの頃の登山というのは。運よく無事に通過できればいいと、そんなものです。横尾に戻ると我々のテントが水の中に浮いていました。

これまでたくさん山のに登り、自家用車で林道から転落して一ヶ月入院しても、山の生活には懲りていません。八ヶ岳の別荘（山荘）生活も、好きでなければできません。

寄稿 禅寺の山歩き

傘松祐三（一九五三年卒）

入学当初、私は柔道部に所属していた。ところがある大会で、他の三年生を逆十字の締め技で落とすとしてしまい、勝った喜びよりも、

相手はどうなってしまうのか心配になった。四段の資格を持つ接骨医の先生が喝を入れて、相手は息を吹き返し安心した。家に帰って父に相談すると、宗教家であった父親は、

「人をあやめてはどうかね」

と言ひ、山岳部に入部することになった。二年生在学の頃である。山岳部に入ってから、「そこに山があるから登るんだ」という哲学を胸に、登山に励んだ思い出がある。歩行の仕方も教わった。紺碧の山型のバッチも懐かしく思い出す。もう一度自分で作ってみたいような気にもなる。

当時は二十四人用テントがあり、四、五人で担いで河原にテントを張って、大なべでカレーライスを作って食べた。あれは海沢の沢登りをしたときだったかもしれない。いつも同級の八木君が、登り足の速さでは勝っていて、羨ましく思った。山岳部らしい先輩もいた。部報に書かれた山の記録・文章も、格好良く優れた文章が多くて、感慨を新たにしたい思いもあった。

私たち新制高校の五回卒業生は、新旧の接点でもある。私は川越二中（初雁中学）の第一期卒業生で、川高に入った。川高の校庭にはお城があって、ここが江戸時代の門だと言った人がいた。私は越境の学生で、鶴ヶ島から通っていたが、通算すると五年八ヶ月も通学したことになる。

「東上線の上りの通学者は、講堂に集まれ」

そんな指示があつて、部活の説教会は行われた。野球部が中心だった。会場は一杯になった。

「足を開いて」「両手を挙げ」「かかとを上げ」「膝を曲げ」

傲慢な罵声を浴びながら、体罰的な説教会であった。山岳部は生物の先生が顧問であったと思う。山の頂点を制覇して、メチールアルコールをなめるようにして飲んでいた先生が、何だか実に悲しかった。

私自身は、美術の時間が好きだった。デッサンしながらコンテの修正をする。ついでにコッペパンの半分は食べられる。これが唯一の楽しみだった。戦後の我々の時代は、食べ物に飢えていた。

壊された階段教室の残材の上から、校門に向かって川高名物のくすの木を写生していた。イーゼルペイントの葛藤は、このときに始まった。描けど描けど、出てこない鮮明な「青」の色彩。発狂的にも求め続けて、時間一杯費やされた。六十歳の祝賀会の席で、筑波大の名誉教授になった平君も、同じ思いを告白していた。大沢寛先生は、色彩の天性について説論された。先生が職場を退官された折、立派な丸いカートンに入れられ、作品が贈られてきた。思わず合掌に近い動作でお受けした。

私は今、鶴ヶ島駅から南の霞ヶ関寄り一^キにある、萬久院という寺の住職である。百軒足らずの檀家がある小さな庵である。当時は芸大進学を理想としていたのだが、自分にそれほどのデータは蓄積できなかった。中学の同級女子の久場さんが、川越女子高から芸大合格とのニュースが伝わってきた。浪人生活の中で聞く他人の噂は、自立と進路の間で真剣に考えさせられた。

〈浮世を離れて、修行僧に転身することである〉

太陽の昇る午前四時半を、一日の始まりとするのが禅宗道場の慣わしである。即ち、朝の座禅の始まりである。朝のお勤めはいつもの通り。毎日の行事、儀式に続いて、お客様の数だけ経を上げる。年間毎日、つががなく行事をこなす。それが終わると、清掃とお粥の朝食。この間五十名もの僧侶が、すべて鳴り物の音によって行動が制約される。黙々としてお喋りは一つとして聞こえない。さすがに禅宗の修行。畳一枚が、個々の生活の場になる。

卒業した十九歳の私に、座禅作法の足を組む作業は、苦痛となった。膝に軟骨が飛び出して、オーグストシュラッテル氏病という厄介な病になった。

しかし修行は座禅三昧。一年間が過ぎ、黙ってそのまま座っていれば治る。体得した本義である宗学を学問的裏づけとして求めるために、東隆眞君と大乘寺（金沢市）住職の花岡大舜老師の三人で、駒沢大学に入った。

禅とは「山を登ること」である。天子の御霊に会うために登る。それが禅になる。学校を終えて教員生活に入った。体育の研究やら人権教育に二十数年。同和推進教員として埼玉の広報担当をした。ところが後年大動脈瘤を患って、山を歩く禅堂生活が少なくなってしまう。

僧侶の身分で七十三歳。川高山岳部は体の中心の背筋を保ったのかも知れない。名細中学では学年キャンプを創設し、五年ほど続けられたのも川高時代に体得したものだ。

一九五二年（昭和二十七年）

山行記録 八丈島雑感

山行

春山合宿 奥武蔵名郷 四月

新入生歓迎山行 神津牧場〜荒船山 五月三日〜五日

丹波 六月

夏山合宿 奥秩父縦走 雲取山〜金峰山 七月

夏山合宿 八丈島 七月二十八日〜八月五日

夏山合宿 南アルプス・甲斐駒〜仙丈岳

〔部員〕 桑田脩三 当麻泰雄

〔顧問〕 内田一正

東京の南方三百^ロにある八丈島は、小笠原諸島が米軍に接収されている時代には日本人の亜熱帯地方へのあこがれの地だった。そこで夏合宿が行われた。顧問内田一正先生に引率されて、生徒は十名ほどが参加した。前年に引き続いて、この島への旅行は二度目であった。

航海が順調だったとして、東京月島棧橋から現地まで十八時間。前年には島内で七泊したが、この年は五泊に短縮された。荒天で船の出航が遅れたからである。現地では島内の最高峰の八丈富士八五四^ハの登山などを行った。

七月二十八日午後四時出港予定の藤丸（二三〇ト）は、一日遅れて月島を出港する予定である。その間、二十八日は月島から宮城まで歩きで行ってきた。翌二十九日午前中は、築地の魚市場へ行ってきた。一日の売り上げが五千万円くらいだそうだ。勝鬨橋は、午前九時、正午、午後三時の三回開く。橋の重量は二千トと示されている通り、巨大な橋である。

八丈行き船は、午後五時半月島を出港した。左には千葉の房総半島、右には横浜横須賀の都市が見える。波も荒くなり日も暮れてきた。東京湾を三時間半くらいで乗り切り、太平洋へ出ると波が荒く、二三〇トの船では航海できず、館山まで引き返した。

翌日午前中、館山で釣り道具を買ってきて魚釣りをした。海で釣るのはこれが五年目である。しかし魚は一匹釣れただけである。

船は三十日、午後六時八分に館山を出港した。波は昨日に比べると静かである。翌朝どこかの人が日の出を見ると全員を起こしたが、太陽は雲の陰で見えない。自分はまた寝てしまった。

八丈島の大賀郷に着いたのが八時十分頃。ここも波が荒く浮き船が出られないため、三根村に引き返した。そしてようやく午前十時、人口一万二千人の待望の八丈島に上陸したのである。

三根からバスで、榎立小学校に向かった。途中榎立村役場でお茶をご馳走になった。小学校に着いてからは、付近を散歩した。その

とき気がついたが、島には井戸がなくてすべて水道水になっていた。しかも道端や各家庭にきている。ただ井戸水のように冷たい水が飲めないのが残念だ。山には草木が密生していた。熱帯植物は、ソテツ、ムラサキオモト、リュウゼツラン、バナナ、サボテンなどが栽培されていた。内地では見ることができない。椿の木は、庭先や裏に何本も植えてあつて、直径二、三センチの実を結んでいた。残っていた者は、村の子供と野球をしていた。

八月一日は南部一周である。朝食後全員で出発。途中、末吉村の洞輪沢部落を絶壁の上から見ると、人家が小さく見えた。崖が二、三百メートルくらいあった。そこで休憩すると、泳ぐ者や寝てしまう者など様々であった。ここは天草がよく取れる。一日働いて三千円程度。バナナもよく取れるそうで、十二センチくらいある。午後その部落を出発して末吉灯台に出て、三根村に戻った。村にはパチンコ屋もあった。こんなところにもパチンコが普及している。道の両側には商人の家が並んでいるが、村で安いのは牛乳と肉くらいである。樫立へ戻る途中には森永のミルク会社があつた。樫立小学校にはスクールバスがある。島の学生の送り迎えをしている。荷物は牛の背中に乗せて運んでいる人がいた。二百貫まで運べる牛がいるそうだ。リヤカーは一台見ただけで、荷運びは牛か自動車だった。

八月二日は午前中に硫黄山（注・三原山・七〇一メートル）に登った。この山は岩のように大きな石がゴロゴロ転がっていた。雨が多いせいでもあろうか。八丈島の雨は、二、三分スコールのようにザーッと強く降って、止んでしまう。山には年中霧が発生している。この

硫黄山も霧でよく見えないときがあつた。頂上に近くなると崖が多くなって、それ以上は登れない。過去には硫黄鉱山が発達したらしく、ツルハシの錆びたものが二本残っていた。穴の中は涼しく、水が貯まっていた。その鉱山跡から引き返した。

午後からは三根村に戻ることになって、荷物をまとめて出発。昨日通った道を歩き、途中八丈支所、罪人が島流しされた歴史書を読んだが、字が難しく読めないのもあつた。その後測候所にも寄り、施設の説明を受けた。その後三根の農協へ行ったが泊まらず、寺に泊まった。開善院善光寺である。けつきよくこの寺に三泊した。

八月三日は北部半島の一周をした。けれど私にとっては最悪の日になった。体の調子が悪いのに皆と一緒に出発した。森永ミルク工場を見学し、太陽がカンカンに照り付けるなか、腹痛になって遅れた。左には八丈小島が見えて景色はいいのに、調子が悪く、けつきよく私一人自転車を借りて戻ることになった。

八月四日、私は元気になったがまだ山に登るほど元気がなく、他の者は八丈富士へ登った。船の出港予定は翌日の午前二時。散歩をして過ごし、夜は早めに寝た。

翌日真夜中午前一時に寺を出て、港に向かった。今度の船は淡路丸。大島で伊豆七島の運動会があるとかで、選手たちも船出を待っていた。船は遅れて午前五時に出港した。大島まで十四時間かかって、七時半頃到着。伊豆半島方面の夕陽が綺麗だった。大島を出港して東京の月島に着いたのが夜の十一時。船内で一泊して翌朝家に帰った。

（二年 和田喜一郎）「秩父零」十四号

一九五三年（昭和二十八年）

山行

春山合宿 丹波山村 三月二十六日～四月一日

新入生歓迎山行 赤城山 五月

奥武蔵高原 六月

八ヶ岳 編笠山～硫黄岳 七月

夏山合宿 奥秩父 雲取山～金峰山

夏山合宿 南アルプス・甲斐駒岳～北岳

〔部員〕 可児一男 水野洵司 藤野文夫 馬場佳一 萩野谷生郎

和田喜一郎 新井真司 市川章弘 井上誠一郎 奥村順一 水野公

三 中島一男

〔顧問〕 内田一正

顧問の内田一正先生は、夏山合宿に南アルプスの仙丈岳から北岳への縦走を引率。筆まめだった顧問は、仙丈岳から両俣小屋に下り、北岳に登り返すときの苦勞を、翌年の部報に報告している。

山行記録 両俣の朝

前日も登山者が訪ねたらしい両俣の無人小屋には、今日帰るとの

様子の荷物が少し置いてあって、書き置きも残されていた。

私たちは足を休める暇もなく、明日朝の計画のため左俣の谷を探す。見晴らしが利かないため地図と比べることも困難。聞くべき人もいない。溪流に沿って上下に数百メートル。やっと探したのが二本の丸太で数日前に倒したらしく、流れに直角に渡してあった。これを渡れば何とか道が開けるかと思つて進む。

苔の生えたジメジメした足跡を二十分。やっと少し見通しのよいところにでた。谷の清流に沿ってケルンが積んであった。地図と地形図を比べて確かに北岳へ通じる様子が見えた。やっと探して当てる北岳への道。両俣に着いてから二時間。その後間もなく地元高校山岳部の一行に会う。

書き置きた者に違いない卒業生、顧問ら計八人が小屋にきた。一行は十貫に近い荷を背負っていた。さっそく北岳への道を聞いた。何回聞いても聞きすぎることはない。これで四回目。頂上まではここから五時間。途中で滝があり、以降は何々というふうに話してくれた。大体知っている振りをして聞かねばならぬ。知らぬ振りをしていると、勝手な嘘をいう人も世にはいる。そして念を押して何回も聞く。

前日までの三ヶ所の小屋番や案内人の言葉。明日の天気によつては南アルプス最大のホープは成功の様子が見えた。しかし北岳は三二〇〇メートル、両俣は二〇〇〇メートル。その差一二〇〇メートルの登行に五時間とは、いや三時間半で登れるだろう。

翌朝無人小屋の朝三時。溪流とは思えぬ雨の音を聞くと、急に憂

鬱になった。望みは絶たれてしまったのか。四時、積雲が重く垂れ込めるが、時々晴れ間が出るようになった。あまり希望せずに出発して、天気が回復すれば山頂に向かい、然らずんば引き返すということにした。地元高校の一行に別れて出発。

次第に天気は回復してきた。午前七時、山頂が望める地点では前日にも勝る快晴。八時には北アの奥穂高まで見える。一兩日前の仙丈、駒ヶ岳も手に取るようであった。標高二九〇〇mに着いたのが、出発して四時間。さらに一時間でようやく頂上に出た。二度と登りたくない難路の五時間であった。

私たちは二日後には人里に降りる。一行の氏名を書いて祠に納めた。山の思い出は過ぎた後がよい。密林に険路探る心地、後世の貴重な資料となろう。
(顧問 内田一正)「秩父零」十五号

取材寄稿 ヒマラヤ・ジャヌー七七一〇の頂上

市川章弘ゆきひろ (一九五五年卒)

大学山岳部に入ると命を落とすと言われた時代に、市川章弘は、成城大山岳部からOB部員として、南米の登攀と、二度のヒマラヤ登頂を成功させた。南米のアコンカグア(一九六六年)を登り、ヒマラヤのマカルー(一九七〇年)とジャヌー(一九七四年)。マカルーは東南麓からの初登であり、ジャヌーはフランス稜からの二登だった。

市川の名は、日本の登山史の中でも随所に登場する。鹿島槍ヶ岳直接尾根の登攀(一九五九年三月)や、北穂高滝谷のグレポンの登攀(一九五九年十二月)。いずれも積雪期の初登攀である。一ピバーク二十時間、ザイル十三ピッチを要した滝谷は、積雪期の最後の難関を陥れた登攀として、今でも高く評価されている。登攀競争だったこの時代、市川に数日遅れた第二登に芳野満彦、第三登に名古屋山岳会と、後続は相次いだ。

こうした登山家としての市川の人生は、実父の市川宗貞さん(昭和四年卒)に続いて二代目でもあった。宗貞さんも旧制OBで、昭和二年の立山から針ノ木谷の長期合宿などに参加して、後には飯能市長まで務めた。父親と同じ趣味に高じた登山人生とはどういうものだったのだろうか。市川に話を聞く。

「私の父親は実に几帳面な人で、昭和二年の登山だというのに、自分の手帳に細かく記録を残していました。当時の強力の日当は二百四十銭だったとか。私が子供の頃の父親といえば、食事が風呂の時に顔を合わせるだけで、他は書斎に籠りつきりで書類の整理をしていたような生活。しかも山登りが趣味でしたから、自宅の蔵には、何だかたくさん登山用具や書籍が入っていました。

私は父親と登山をしたことは、ほとんどありません。それでも川高に入学して、同じ経験をしてみたいと思った。在学中は奥秩父や南アルプス、八ヶ岳に登りました。冬はスキーをした程度です。

大学に進学して、さらに困難な登山への挑戦をしたいと思いますわけです。当時国内では夏の登攀はすべて終わって、課題は積雪期の

登攀でした。大学の同級に橋村一豊というパートナーを得て、彼と二人で率先して登りました。その橋村が名古屋の出身で、高田光政さんたちと親しかった関係から、卒業後のOB会では日本山岳会の東海支部として遠征したことが多くなったわけです。

私の父親は「出て行った者を心配してもしようがないだろう」という考えの持ち主だったので。山岳部員として登山に向かった者、日本を出て海外の登山に向かった者を、残った者が心配してもどうにもなるものではない。今ふうに解釈すれば、自己責任で登れということだったのかと思います。

大学時代には北穂滝谷や鹿島槍ヶ岳の他にも、積雪期の剣岳の三ノ窓や北岳バットレスに何度も通っていました。しかし本当に目標とする山は、国内登山では限界があると思うようになりました。例えば私は、富士山へは十五回くらい登ったと思いますが、何れも積雪期の訓練登山として登りました。吉田大沢の右側に屏風尾根が連なっていますが、そのルートです。晴れた日にはこの飯能から真正面に見えますよ。しかし標高は三七〇〇メートルでしかない。あの頃は社団法人の山岳会は岩壁登攀をよくやっていました。大学山岳部というのは体力勝負の積雪期の標高の高い山を熱心にやっていたものです。

大学を卒業してから、二、三年は登山を続けていました。しかし五月の連休によく休暇を都合して、春の北穂高の小屋に遊びにいったも「誰それが遭難したから救助してくれ」だとか、シーズンに入ると北アルプスは事故が相次いで、私自身やりきれない気持

ちにもなっていたのです。隣にいたパーティーでさえ、転落事故を起こしたことがありました。国内の登山から離れたのは、そういう理由もありました。

アコンカグアの南壁

海外への夢は、成城大OBの中にもありました。当時の政府には年間わずかに一万ドルの外貨スポーツ予算があるだけで、ほとんど有名大学山岳部にそれは使われ、なかなか私たちに回ってこなかったものです。私たちも昭和三十年代からヒマラヤ登山の計画を具体化させ、ある名峰に登山申請したのですが、そのチャンスは他大学に奪われてしまいました。代わってヒマラヤを除いた高峰ということ、南米のアコンカグア山六九六二メートルの南壁登攀の計画が実現したのが一九六六年（昭和四十一年）のことでした。日本山岳会の東海支部での遠征です。

私たちは横浜から貨物船に乗り込んで、北海道から北アメリカを経由して南米に行きました。現地では軍隊が協力してくれて、将校の宿舎を提供してくれ、物資の輸送を手配してくれたものです。

アコンカグアの最終アタックは、一ピバークの末、四人のメンバーが成功した。困難な南壁からの積雪期の登頂で、この登攀はフランス隊に続いて、第二登と記録された。遠征期間は八ヶ月の長期にも及んだ。

当時の海外遠征は、登山の記録が一冊の豪華本となって報告されるほど、名誉であり国家的な事業だった。政府が保証する海外登山

隊の許可は、南極越冬隊と同規模であると言われた。

その政府保証を取り付けたのが四年後。一九七〇年に、いよいよ市川のヒマラヤ遠征が具体化してきた。日本山岳会東海支部に与えられた登山許可は、八千峰の一つマカルー八四六二の未踏の東南稜だった。市川は十六人の登山隊の登攀隊長（隊長は原真）であり、C6という最終キャンプまで登り、アタック隊員を総指揮するという重責をになった。最終日、午前二時に出発した二人のアタック隊員は、十二時間かけて登頂し、記念のピッケルに日の丸を巻き付けて埋め込んできた。そしてそのまま十二時間かけて下山してきた。第二次隊員には市川自身も含まれていたが、数時間の仮眠で同じ登頂をする気力が萎えた。登攀隊長は、全員下山を決めた。しかし日本人によるヒマラヤの快挙である。遠征を後援していた朝日新聞は大ニュースとして報じた。マカルー東南稜の初登攀。過去エベレスト初登頂のエドモンド・ヒラリー卿でさえ、敗退したといわれた難ルートである。

マカルー登頂の懐疑

ところがこの年は、同じヒマラヤで植村直己が日本人としてエベレスト初登頂した年と偶然重なった。ヒマラヤの登山時期は、どの登山隊でもブレモンズンといわれる五月に登頂を設定する。つまり世間の関心はエベレストであり、植村直己が登頂したあの写真は、有名になり過ぎた。他方、市川のマカルー東南稜は、機材の不都合から頂上での「証拠写真」が撮影されなかった。写真がなければ、

登頂そのものも疑わしいという、そんな不遜なヒマラヤ登頂ラッシュの時代だった。

不思議な巡り合わせは一年後に起こった。世界の趨勢はヒマラヤの中でも、より困難なルートへと移っていた。世界的な登山家であるフランス人のヤニック・セニョールが、同じマカルーの西稜から初登頂したのは、翌一九七一年の快挙だった。くしくも五月二十三日という登頂日は、一年前の東南稜と同日である。彼は、単行本「マカルー西稜」を出版し、それは翻訳されて日本でもベストセラーになった。その中に、「頂上に残されていたピッケルには、日本の国旗と日本人の名が記されていた」という件が記載された。エベレストだけがヒマラヤじゃない。いや困難なルートにこそ価値がある。それは市川登山隊の再評価であった。と同時に、日本人のエベレスト熱に警鐘を与えた。もちろん登頂成否の疑いは晴れ、見知らぬフランス人登山家との間で、山男同士の信頼が築かれた。

この逸話は、当時の小学校の国語の教科書にも採用された。セニョールの手記として、

「昨年と同じ日に、ここに二人の日本人が立っていたのだ。私はこの旗を日本へ送り返したいと思う。しかしこの旗は、日本隊の登頂を証明するものであると同時に、私たちがあの山頂に立った、一番確かな証拠でもある」

先行隊の記念品を、後続隊が持ち帰るといふ、美談となった。同年市川は、単行本の出版宣伝に来日したセニョールに出会った。初対面なのに、旧知の山仲間のようなのだ。



1970年 市川章弘のマカルー遠征 7300mの雪のリッジを乗り越えてブラック・ジャンダルムへと向かう

「ヒマラヤの登山というのは、現地政府からの登山許可を取り付ける下交渉のようなことから始まるわけです。そこで当たりの付け

後に、今度は文部省の推薦を取り付ける。なかなか政治的なものがありました。当時私は埼玉銀行の行員であり、長期休暇としては過去に五輪選手が一ヶ月半ほど休暇を取った前例があるだけ。それを南米に八ヶ月、ヒマラヤで半年の休暇が欲しいというわけですから、無給休暇を貰っただけで、帰国後の復職は怪しいものでした。それでもヒマラヤというチャンスは人生の中でそう何度も訪れるものはありません。機会は逃したくないと思っていました。

現地の登山が始まると、私は高度順化には恵まれました。七千メートルを超えると、下界では予想がつかないことが起こります。胃が悪い者は簡単に胃腸障害になるし、歯痛が耐えられなくなる者もいる。その頃の私は「登山靴を履くのは、その四年に一回限り」だと、うそぶいていたほどで、埼玉に戻ってからはハイキングすら行っていないですね。それで高度障害がないのは、生まれ持って丈夫だったからでしょうか。高度での酸素使用といっても、実は睡眠中だけで、行動中は実質無酸素なのです。当時ボンベは一本七・五キロ。それを二本背負うなどは、不可能なことでした。非常用に一本背負うだけ。高所では食欲も減退して、流動食のベビーフードを流し込んでいるようなものですから、満足に行動できる者は知れています。その朦朧もうろうとした状態がいつまでも続くのが、七千メートルからの高度になるわけです。

マカルーの心残りは、私自身が最終キャンプからの登頂を逃したことです、大バーテーターだったこと。だから次のチャンスには、成城大学OBの気心の知れたメンバーで、コンパクトな計画にしたわけ

です。そのチャンスが、また四年後の一九七四年に訪れました。この間に私は結婚して、二人の子供の父親になっていました」

ジャヌーの第二登

ジャヌー七七一〇は、ドゴール大統領時代のフランスが、国家の威信をかけて挑戦した山である。フランス登山隊は、過去に二度の失敗を繰り返した後に、ようやく一九六二年、登山家リオネル・トレイが初登頂を成功させた。しかしその後、入山禁止の空白期間が十年以上も続いた。解禁後の登山計画が市川のパーティーである。初登のフランス稜を登ることになった。ヒマラヤの怪峰といわれる困難な山である。

この登山記録は、NHKが特番を組んだ。今の時代に録画を見れば荒れた画面なのは仕方がないが、当時コンパクトな8mm映写機を山に持ち込んだ記録映像は、時代の先駆けのような撮影となった。証拠写真一枚が必要な時代から、映像の時代までわずかに四年。もちろん市川自身の登頂映像も残る。当時放送されたビデオには、C6の最終キャンプから延々とした最後の難関が待ち構えていた。トレイが「レースのカーテン」と評したヒマラヤひだの発達した最後の雪壁は、六十度を超える傾斜で頂上へ続いていた。それをルートは大きく迂回する。稜線に出れば、「馬乗りになって雪稜を跨いだ」と記述された、ナイフリッジを同じように前進していく。その雪稜の一番向こう側の切れ落ちる寸前のところが、どうやらジャヌーの頂上らしい。トップで前進する市川が引いているザイルは、風に煽

られて大きく弓なりを描いていた。右手にピッケル、左手にアイスバイル。それぞれのシャフトを雪面に突き刺しながら、およそローションのように前進していく。ザイルが四十杯一杯に伸びて止まったそこが、頂上だった。振り返った登頂者は両手を大きく掲げて、映像の最後に収まっていた。それは市川自身のヒマラヤ初登頂ということになった。また困難だけを求めた市川最後の登山にもなった。

市川章弘海外登山の記録

「アコンカグア南壁」山岳一九六七年

「マカルー登頂」山岳一九七〇年

「遥かなる未踏の尾根・マカルー」名漢堂一九七二年

「ジャヌー登頂」山岳一九七四年

寄稿 山といくつかの出来事

可児一男（一九五五年卒）

山に行くとかかしら感動を覚えるものです。小さな頂に立ったとき、立ち止まって見た遠くの山、壮大な日の出や日の入り、朝のびりびりした空気、物憂い夕暮れ時、大自然との出会いなどは枚挙にいとまはないでしょう。登山をしたのは高校から大学の頃です。どんな山でも話があれは手当たりしだい登ったものでした。社会人となってからは、何かあった時、特に精神的にまいった時、仕事の上

で壁に当たった時などに出かけたような気がします。現在古希ともなると、出かけられるだけで幸せだと思えばかりです。OB会も「麓会」などを設けて、山には登らず麓で絵を描いていたいなあと考えています。今迄の山行の中から断片的に思い出した事を取り上げました。

暑中見舞い

高校二年の夏休みに南アルプスに行った時のことです。内田先生、馬場、新井と、私のメンバーでした。日野春の小学校に泊めていただき、甲斐駒から奥仙丈、両俣に降りて北岳に登り、広河原に降りて帰る途中、甲府の駅で列車を待つ時間がありました。誰かが、「夏休みの国語の宿題で、暑中見舞いを出すのがあった」と言いました。

「そうだ、ここから出せば丁度いい」

「だけど、ハガキも切手も無いよ」

「絵ハガキがあるぜ」

先生を除く三人がそれぞれ文を書き込みました。

「宛先はどうしよう」

「川越市郭町の川越高校、田中先生宛てでいいじゃないか」

「そうだ」

「夜だし、切手はどうしよう」

「いい考えがある。絵ハガキにお金をつけてポストに入れよう」

三枚の絵ハガキとお金（確かその頃のハガキは五円位と記憶して

います）を輪ゴムでしっかり留め、
（郵便局のお兄さん、山の途中で切手がありませんが、よろしくお願ひします）

と書いたメモを挟み込みました。届くかどうか心配でしたが、無事に着いたものです。二期の始めに教室で皆に披露され、

「南アルプスの冷風とともに、暑中お見舞い申し上げます」

という表現が良いと褒められました。郵便局のお兄さん有難うございました。

ドラムカンの風呂

最近の明神池の混みようは大変なものです。人、人、人、で水辺に近づくことさえできない程です。高校三年の時、燕から槍、奥穂と縦走した折、上高地でバスを待つ間に一人で明神池に寄ったことがあります。池はシーンと静まりかえり、人っ子一人おらず、その神秘的な雰囲気にはばらくは動けず感動したものです。

大学二年の時、表銀座を下りてきて、ふと明神池の近くの鱒の養魚場でも泊めてくれると聞いたのを思い出して、訪ねました。気持ちよく迎えてくれました。そして夕食後、

「よろしかったら、ドラムカンですがお風呂がありますから入りませんか」

と誘われました。初めての経験ですが喜んでトライしました。ドラムカンのお風呂は底がさぞかし熱いと思いきや、円く伐った板の上に乗るので、熱くはありません。五右衛門風呂と同じ方法なので

す。夕闇せまる屋外で、爽やかなとても気持ちの良いものでした。昨年と今年と行く機会があり、山や池はそのものですが、養魚場も今は無く、明神池も有料でした。

水汲み

赤岳から硫黄岳、天狗岳と来て黒百合の小屋に着いたのは午後二時頃でした。少し早いけど、ここに泊まろうと弟と二人の気楽な山行なので決めました。声をかけても、返事もなく、人影もありません。ずっと奥の方まで入っていくと台所のわきに中年の小屋の方と思われる人が丸くなって寝ているではありませんか。

「こんにちは」

「……」

「どうかしましたか」

「……」

「大丈夫ですか」

「はい」

やっと小さい声で返事があり、急にお腹が痛くなつて薬を飲んで横になつていたのでとのことです。

「大変ですね。何か私に出来ることがありますたらいたしましょう」
「たいしたことはないので、少し休んでいれば大丈夫だと思いますが、できれば水汲みをお願いしたいのですが」

「水場を教えてください、やってみましょう」

ということになりました。約二十分位下った所に小さな池があり、

背負子についた缶に水を汲みました。これが以外に重くて歩き難く、帰りは倍近い時間がかかり参りました。夕方、弟とトランプをしていると呼ばれました。

「先程は有難うございました。お蔭様でいくらか元気になりました」

「よかったですね」

「一寸こちらへ」

「はい」

と台所の方へ行くと、

「夕飯にカレーを作りましたので、どうぞ」

というわけでご馳走になりました。翌朝、出立の時にもお礼を言われ宿泊代も受け取ってくれませんでした。何か気持ちの良い山行でした。

五丈岩

金峰の五丈岩はどなたもご存知でしょう。高校一年と、大学四年の時と二回、岩に登りました。夢中でよじ登ったので、そんなに大変だったとは思いませんでした。岩の上はわりと広かったのですが、反対側は切り立っていてとても怖かったのを覚えています。誰かが度胸試しで、縮んで出ないだろうけど小便しようとけしかけ、それでは祠の無い方だと並んで一斉にしたものです。みんな堂々というわけがなく、へっぴり腰で一寸だけというものでした。最近、金峰は日帰りで行かれるというので行ってみました。年をとつてから見る五丈岩はとて大きくトライする気はまったく起こらず、ただた

だ、山頂の日向ぼっこを楽しむばかりでした。

中間試験

高校二年の十一月末、連休を使つての奥秩父です。その頃に将監峠にあった将監小屋は無人小屋でした。学生にとつて無人小屋は最高の天国です。夕方早目に着いて、後で泊まる人の為にと小屋の付近で薪拾いをして小屋に帰りました。丁度、若い二十〜三十歳代の三人が小屋に着いたところでした。薪拾いとは偉いねと褒められ、私たちは奥の方に五人、若い人たちは入り口付近に三人と陣取りました。結局、その日の泊まりはその八人でした。夕飯にはまだ時間的に早く、皆ごろりと一休みです。仲間のWがザックからデパートの包装紙で表紙を被っている本を、五冊出して配りました。

「ここまで来て勉強かよ」

と渡された本を見ると何とピンク系の月刊雑誌でした。もちろん熱心に読んだものです。薄暗くなり字が読めなくなるまで、静かです。若い三人組が夕飯の支度を始めたので、やっと私たちも夕飯にしました。会話は挨拶程度で、そのまま三人組の事は忘れてしまつておりました。ところが、一週間が過ぎた頃、全校の朝礼で壇上の校長先生が一枚のハガキを読み上げました。曰く貴校の学生、「山岳部の生徒は立派です。無人の山小屋で薪拾いをした上に、中間試験だと言つて勉強をしていた」

というものでした。なんと、あの三人組は立川高校の先生たちだったのです。私はびっくり、朝礼後、みんなから突っつかれました。

白状しろと。

ブロッケン

知識としては持つていても実際に体験しないと解らない自然現象だと思えます。近所のおじさんたちが講（神社の檀家）を作つて毎年木曾の御嶽山へ行つてゐるのは知つていました。急に一人キャンセルがあつたので代参として行くことになりました。最近田の原までバスで行けるようですが、当時は木曾福島駅前に泊まり早朝出発という長丁場でした。田の原で昼食を済ませてからが本格的な登りです。途中から森林限界を過ぎ這松と岩の多い山谷となり、登山コースとしても素晴らしい山です。

途中、のぞき岩の方へ寄り道をしたのですが、おじさんたちよりかなり早く着いてしまいました。神社に参拝してから宿坊に入らず、ちよつと奥の方へ時間つぶしに行つてみました。頭上は日が当たつていましたが、急に雲が下の方から湧き上がり、小高い場所に立つた時にブロッケンの現象が体験できました。自分の影が雲に映り、頭を中心に光の輪が輝き、なんとも云えない不思議な気分になりました。

自分が自分でなく神仏の世界に誘われたようで、しばらく神秘的な現象にひたつていたものです。この現象が起きやすい環境がこの山にあるとしたら、確かに信仰の山としてうなずけます。自然に対する畏敬の念は忘れてはいけないものと思ふものです。

一九五四年（昭和二十九年）

山行

春山合宿 奥武蔵名郷 三月二十九日～四月五日

新入生歓迎山行 両神山 五月

川苔山 六月

夏山合宿 甲斐駒岳～仙丈岳 七月二十四日～二十九日 八人

夏山合宿 雲取山～金峰山 八月十二日～十六日 参加十四人

八ヶ岳 赤岳 九月

送別登山 顔振峠～子の権現 十月三十日～三十一日

〔部員〕 大木達夫 岩堀弘明 三上秀夫 櫛筒亮介 水村博美 斉

藤金衛 神田裕 川上康夫

〔顧問〕 内田一正 岩上昭

山行記録 南ア北部

視界はなくなってきた。山道をとぼとぼと行く。トップとラストがだんだんと離れていく。体の疲労も増してくる。道も急になった。トップはもう完全に見えない。小さい荷物の何名かが、俺たちに追いついてくる。その人々が羨ましい。歩け歩けと、励ましあった。

十一時過ぎ、道端の大木の幹に「水場近し」の道標を見つけた。「水」

と聞くと元気が出る。少し行くとあった。水は十分に流れている。大休止をした。お茶を沸かして昼飯にした。

出発すると、体の調子が悪くなってきた。眠さを催し足元はふらふらする。休んでいると下ってきた人が「高山病じゃないか」と注意してくれた。しかし下山するにも時間がかかるし、荷物を減らして登行を続けた。予定を変更して五合目小屋に泊まることにした。

黒戸山の山腹を巻いて、赤土の道を下る。少し行くと小屋が見えた。上の小屋は込んでいるから、下の小屋に泊まることになった。

翌日は三時に起床。飯は昨日焚いてあって、味噌汁を作り缶詰を開けて朝食にした。出発は五時を少し過ぎていた。小屋からはすぐに梯子になり、七合目小屋まではクサリと梯子の連続だった。昨夜の七合小屋は満員だったらしい。今日は天気がいい。七合からは北アルプス、八ヶ岳、秩父の連山が雲に浮いていた。雲海が美しい。

登りはいよいよ険しくなった。日はぐんぐんと照り始めた。水筒の水はもう残り少なくなっていた。八合目の鳥居の辺りで、朝早く登った人たちが下山してくる。「頂上はすぐそこだ」という。クサリを登ると頂上である。砂と岩だけで草木は一本もない。日陰もない。水筒の水はとつくになく、密柑の缶詰一つを八人で食べた。

頂上を去って、落石の多い砂の道は通れそうもなくて巻いて、刀の刃のような道をいく。前方の六方石に大勢の人が集まっていたのだが、そこには雪の水があるとのことだった。登行を繰り返して駒津峰にきた。そこから仙水峠へ下る。途中は膝が笑い出すほどの下りだった。峠から十分下ってようやく谷川の水にありつけた。冷た

くまったくうまい水だった。さらに下って真營の北沢小屋に泊まる。混雑していてやつのことで土間に入れてもらった。

三日目、先生と僕は、戸台口へ下山する。他の六名は仙丈岳に登る。七時に出発して六時間歩き続けて、バスに乗った。東京に着いたのは午後八時。但し他の六名も、強風のために登行できなかったということである。

(二年 櫛笥亮介)

仙丈小屋付近

ルートの選択は微妙でした。山行の予定が少しずつ遅れていて、北沢峠からそのまま両俣に下っていれば、北岳に登れたのかもしれない。しかし出発の日にはよい天気とは思えない雲行きで、今日は疲れ休めということで仙丈小屋まで登るだけにすると決めました。戸台に下る先生と別れ、二年六名は仙丈岳へ向かいました。

馬ノ背辺りで視界はゼロ。ガスがかなり厚くなってきました。向こうから降りてくる人に「小屋はすぐですか」と聞くと「ああ、すぐだ」とすぐに小屋の屋根が見える場所でした。午前九時に到着。

中は真っ暗でランタンの下で客が荷物の整理をしていました。天井に大きな丸太が渡してあって、立ち上がれない小屋はすごく息苦しい感じでした。雨が上がって少し視界も利くようになりましたが、頂上はまったくどこだか分かりません。雪溪が少し見えるだけ。小屋の客が下山した後、私たちも小屋に入って寝てしまいました。

疲れた体を横にすることくらい気持ちのいいことはありません。土間で焚き火をしていた他の客もいて、目を開けると人の顔がや

らと赤い。翌朝、やはり天気は悪い。今日は何も見えない。それでも頂上までは行こうと、地を這うような霧と、叩きつける雨のなかを、十五分ばかりで頂上に出た。何も見えない。立っているだけでもふらふらするほどの強風。下りてたった一人で北沢峠から登ってきた人がいて、これから両俣へ行くという。僕らは何か心の中にあるものに触れたみたいで「気をつけて」という言葉の中には、複雑な気持ちがあった。

小屋に戻ると何もすることがなく、最大の楽しみの汁粉を作ろうということになった。そして明日の朝飯も作ろうということになった。今日は僕ら六人と、某高校の三名と、地元の高校で気象観測をやっている数人だけである。夕方高校生同士で雑談になった。先生の授業の物まねをする者がいて、笑い出した。

焚き火がなくなると交替で取りに出かけた。僕は鉋を引っさげて外にでた。少し登ると、よく整っていない這松がある。手ごろなのを見つけて鉋で叩き切る。植物といえば、この這松と高山植物だけ。寄りかかっても倒れないほどの這松の中に入った。そして適当に集まった焚き火を抱えて小屋に戻る。中では相変わらず雑談が続いていた。待ち遠しかった小豆は、半煮えのままコリコリ食べた。観測している人の話では、夏でも最大風速三十節になったそうだ。僕は何か大きな不安に襲われた。標高三〇〇〇の山奥で学生ばかり。何だか恐怖の気持ちから抜け出るために、眠ってしまったようなものだった。

翌日も天気は思わしくない。どうしてこんなにも不運なのだろう。

風は弱まって梅雨のようにしとしと降る雨。僕らは先に進めない残念さよりも、家に帰れる嬉しさを持って、この思い出の二日間過ごした無人小屋に別れを告げなければならなかった。

(二年 大木達夫)「秩父峯」十五号

寄稿 世界独り旅へ

川上康夫(一九五六年卒)

三年生、一学期期末試験の後、まだ夏休みにならないのに、岩堀、神田の三人で、南アルプス縦走の旅に出た。当時の南アは、登山道はあってもハイマツなどに覆われて探すのに一苦労だったし、地図には小屋の印があつても、行ってみると屋根もなかったりした。

シナノキンバイやミヤマキンポウゲが斜面いっぱい咲き乱れた北岳草すべりの急登の末、小太郎尾根に出たときは、うれしさに思わず三人で抱き合った。

勤務先では、システムエンジニアの徹夜の激務で体を壊してしまつた。しかし、病院の事務長に転任してから定時に帰宅できるようになり、ジョギングで体力を回復した。そのころ川高山岳部のOB会が合同山行を始めたので、私の登山も何十年ぶりかで復活できた。まずお盆の後、一人で酒沢から北穂に向かった。やつと山頂に着いて、槍ヶ岳に向かったが、眼下には難所の大キレットが見える。山を離れて何十年かたっている。この千歳もありそうな「飛驒泣き」

の絶壁で死ぬ思いをした。思わず新聞の見出しが頭に浮かんだ。「中高山無謀登山、転落死」

何でこんな所に来てしまったのだろうと後悔しても遅過ぎる。やつと南岳についた時はほっとして、もう山には二度と来るものかと思つた。ところが、翌年も同じ時期に北穂の山頂に立っていた。でも大キレットの再挑戦はやめて奥穂に予定を変えた。翌日は北アルプス尾根歩き最高難度といわれる西穂への稜線。穂高岳山荘から出て幾らもたないうちに、凄くやせた「馬の背」に出た。目の前にはジャンダルムがそびえ、ナイフリッジが延々と続いている。浮き石も多く、風も強い。私の力ではいかんともし難い。遭難でもすれば、あちこちに大迷惑がかかる。残念だがあきらめた。

そのうちに、また忙しい職場に戻されてしまい、再び体力が落ちてしまつた。そこで今度はバックパッカーに転進。フリーになつてから、毎年二回一人で海外に出かける。一ヶ月くらいで各国をのんびり回る。もうそんな事を五年もやっているので海外滞在が、トータルでおおよそ十ヶ月にはなる。

海外で一番居心地のいいのはトルコだ。半端でない親日家揃いで、カメラ担いで五百人も歩けば、お店の人に呼び込まれ、お腹がガボガボになるほどチャイ(紅茶)をご馳走される。それにトルコ語は、文法が日本語とよく似ていて、一ヶ月もいれば簡単な会話ができるようになるほどだ。トルコは合計四ヶ月くらい滞在している。今年はこの国にしようかと考えている時が一番楽しい。

方向音痴の私も、地図と磁石があればどこに行つても迷うことが

ないのは山岳部のおかげだ。そのうちにネパールでヒマラヤを眺めるトレッキングをしようと考えている。

家族から、一人の長期旅行は危ぶまれるが、高校生の時の山行が基礎にあるのだ。未知のもの、大自然への憧れは、青春時代に培われた。行き当たりばったり旅行でも、安全面は充分に考えている。だから今まで危ない目にあつたことはない。外務省の危険情報、ホテルでの情報交換など、すべて参考にして安全確保だ。

今年で七十歳になるが、気分的には三十歳代のつもり。まだ行きたい所が沢山あり、とても老け込んではいられない。

寄稿 私の南アルプス

岩堀弘明（一九五六年卒）

旧制中学四十四回（昭和二十年）卒の兄は、戦後建設省の同僚と北アルプスに行っていた。九歳年下の私は、兄の影響で入学してすぐ山岳部に入った。都合のいいことに高校の授業は当初五日制だったため、かなり山に行けた（高三になってからは六日制）。だが、指導者もおらず、上級生とは部活の山と一緒に行くだけだった。

一、二年生のときの担任であった佐藤徳四郎先生は、昭和二十年から何年間か山岳部の顧問を務め、毎年北アルプスに生徒を連れて行かれたようだ。毎日の食べ物にも事欠く時代に、強い使命感があつて生徒を指導しておられたのだろう。すでに顧問はおやめになつ

ていたからか、二年間も担任だったにも関わらず、「徳さん」に山の話をしていただいたことがない。山岳部員の私にとって、昭和三十年の三年生夏休みは高校最後のチャンスだった。夏の部活では南アルプスの計画なんかないので、休み前の自由研修のとき、神田裕、川上康夫の三人で二度目の南アルプス縦走となつた。

新宿を夜行でたつて、甘利山、千頭星山から当時建設中の南御室小屋まで気の遠くなるほど歩いた。翌日は鳳凰三山を快適にたどつたが、部活でなく、こつそりやつて来た私たちは、これから挑む白根三山の威容に圧倒された。広河原小屋に下り、小屋番にあいさつして付近にキャンプした。小屋に泊まらないのが、お決まりになつていた。山を下りたときのラーメン代を浮かすためだ。

三日目、ようやく憧れの白根山へ。小太郎尾根で初めてプロッケンを見た。尾根は快晴で心が躍つた。昨年の仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳。昨日の鳳凰三山。明日からの北岳、間ノ岳、農鳥岳、塩見岳まで手に取るようだ。しかも辺りにだれもない。三千以上われらが天下。

勇んで肩ノ小屋についた。無人小屋のはずが、半纏姿の男たち。見ると去年、甲斐駒ヶ岳で一緒になつた横須賀山岳会のパーティーだ。こちらは学生帽に黒ズボン、着古したワイシャツに古い軍靴で、かわいい高校生だった。とにかく白線の帽子をかぶつていれば、怖いものがなかった。まだ早いので荷物を置いて山頂まで往復し、達成感を味わつた。

四日目の朝は、三時に震えながら起床。薄明るくなるのを待つて歩き、北岳、間ノ岳、農鳥岳を瞬く間に過ぎてしまった。しばらく



1954年7月 夏山宿舎 甲斐駒ヶ岳～仙丈岳 池ノ沢小屋跡

はライチョウと遊んだが、^{ひろこうち}広河内岳からはハイマツなどのやぶこぎをして、急坂を下降して倒木の折り重なる池に出た。原生林に囲まれた池の辺りは踏み跡もなく、あまりの静寂さにあつげに取られてたらずんでいた。すぐ下の池ノ沢小屋へ下ってキャンプ。夕食は毎日、拾い集めた薪で飯盒^{はんごう}に各自一日分の飯を炊き、おかずはカツオの缶詰がお決まり。でも良く食べた。

五日目。直登三

時間で塩見岳の頂上。だれもない岩の上でケルンと一時間の展望を独り占め。去り難い気持ちで歩くうち、横須賀のグループに追いつかれた。三伏峠からは一緒に下った。彼らは鹿塩温泉^{かしお}に泊まるというが、おれたちは温泉には用はないと強がりいって彼らと別れ、塩川の轟音を

聞きながらシユラフにくるまった。

六日目の朝は、残りの食料で豪華な朝食。鹿塩温泉を左にいらんで通過し、そのまま伊奈谷へ下った。折り返しのバス停までたどりついたら、山で夢に見通しの、ラーメンが食える雑貨屋が待っていた。早速頼んだところ、なんとバスが来てしまったではないか。店のおばさんは、

「待たせておくからゆつくり食べなさい」

と、はるばる川越からきた高校生には親切だった。バスを乗り継ぎ、伊那大鳥駅から豊橋に出て、あこがれの東海道線に乗車した。黒ズボン、ワイシャツ、白線の学帽をかぶり、修学旅行と服装は変わらないが、着たきりすずめの汗臭い高校生だ、乗客は迷惑したかどうか。深夜七日ぶりに川越に帰着した。

翌日登校したら様子がおかしい。部活ではないので無届けであったが、顧問の先生にはひどくお気に障ったようで、その後気まずい思いをしてしまった。どこかの高校山岳部が遭難した新聞記事が、廊下に張り出されていた。やはり迷惑な行爲だったのだろう。

あのころは何でも自分たちが独自に計画を立て、山を歩くことが良いことだと思いつめていた。従って自由山行が多く、せっかく多くの先輩や友人たちに出会いながら、その縁を生かし切れていなかったことは、今になって残念でならない。仲間の川上康夫君はその後県職員だったころも、一人北アルプスに単独行を続けていた。今になってバックパッカーの世界一人旅を繰り返しているのも、あのころの志向が今も続いているような気がする。

一九五五年（昭和三十年）

山行

春山合宿 安達太良山 三月

新入生歓迎山行 丹沢山 五月

夏山合宿 雲取山く金峰山 八月二十一日く二十六日 参加八人

夏山合宿 南アルプス北部 参加六人

八ヶ岳 南部 九月

〔部員〕 小久保哲夫 米山知行 岩崎清彦 島田良治 友常峰雄

吉沢勇

寄稿 青春時代の山登り

岩崎清彦（一九五七年卒）

山へのあこがれ

子供時代の大半を過ごした行田は、山とは縁の薄い土地であった。しかし赤城、榛名、日光の山並みの遠望や、登山の記録映画などが、小学生のころの私の山へのあこがれを深めていった。平野の真つただ中のせいも、ちよつとした坂道ひとつにも、感動を覚えた。中学時代にはエベレストの初登頂がなされたこともあり、登山に関する

本を読みあさった。山の遭難記の本で、大正時代に川越中学の生徒の武甲山での墜落死を知り、登山は危ないものだとの先入観にとらわれてもいたようだ。

山岳部へ入部（昭和二十九年）

川越高校に入るとすぐに強引な部員勧誘の洗礼を受けた。運動部に入らなければならぬのなら山岳部と決めていた。放課後の部活は、ランニングや兎跳びと東照宮階段で人を背負つての上り下りや空堀の斜面の駆け上りだった。

歓迎登山は両神。慎重な私は、念のため先輩に聞いてみた。

「明日、雨でも行くのでしょうか」

「ばかやろう！ 幼稚園の遠足じゃーねえんだ」

雨が降ろうがやりが降ろうが、天気には関係なく出かけるのが山岳部だと、納得した。入部はしたものの、山の道具といったものは何も無い。親から唯一買ってもらったのは、キスリング。これも當時の値段は相当なもの、わざわざ東京の運動具店まで買いに行った。

初めての奥秩父縦走（昭和二十九年八月）

同行者 和田、新井（三年）、水村（二年）、小久保、島田、田村、吉沢、田中、吉川、高野、岩崎（二年） 岩上先生（顧問）、駒井、松岡（OB）

一列縦隊の後ろからどなられながらの登山は想像以上に厳しくて、すっかりバテてしまい、これで一週間の縦走に耐えられるのか。

雲取小屋付近で幕営。食事は、伝統的に一年生が担がされてきたザックが隠れるほどの大なべで作ったカレーだった。翌朝、たたき起こされテントを撤収、みそ汁に焼いた棒ダラで急いで朝食、夜明け前に雲取山頂を目指す、日の出を見ることはかなわなかった。

岩上先生とOBは三条の湯へ下山していった。この日は笠取小屋までで、OBがいなくなると全員急に気持ちが悪くなり、景色を見る余裕も出て、山歩きも少しは楽しめるようになってきた。

翌朝、雁坂峠で日の出を迎えたときの光景は忘れられない。見晴らしの良い埼玉県側はまだ夜が残っていたが、谷筋へ朝の光が差し込んだ瞬間、それまで何事も無かった山々から一斉に鳥が鳴き始め大合唱となった。どうしても予定通りに帰らなければならぬ事情があった私は、翌朝独りで十文字峠を経て栃本に下りた。途中、白泰山の岩場でロープ一本でイワタケを取るところを見たりして、その日のうちに上中尾の集落までたどり着いた。

装備のことなど

個人装備は、親父の古くなった背広三つ組みのチョッキ、封筒状に縫った毛布の寝袋、バスケットシューズ。旧日本軍の軍靴を履いてくる者は上々の部類だった。飯ごうや乗馬ズボン、軍足（米を詰めると枕にもなり何かと便利だった）など、軍隊で使われたものが多かった。ヤツケを着てくる者もそろそろ見かけたが、出始めたビニールかっぱは重宝した。軍隊で使った雑糞（ぞうふ）をサブザックに改造してみたが落下傘を背負っているみたいだからかわれた。

まず欲しいものは山靴だった。昭和三十一年、アルバイトのためたお金で秋葉原で中古の登山靴を買った。ナーゲルの鋳靴である。これを履いて駅のプラットホームなどをチャッチャツと鳴らして歩くと、ちょっとした優越感に浸れたものだ。その後に出てきたピムラム底のものは音がせず、なんだか物足りなかったが、性能的には、特に雪山では、よかった。ナーゲル靴は、底に雪が固まりごろころして歩けなくなるので、絶えずピッケルでたたき落とさねばならない。鋳一本で岩場にスタンスをといわれていたナーゲルも、鋳を通して来る寒気が伝わらないピブルム靴に取って代わられた。私のナーゲルの最後は悲惨だった。入山中にトリコニーが付いたままの革底が部分ごとちぎれてしまった。昭和三十五年の北ア裏銀座コース縦走パーティーにOBとして同行したときの出来事だった。

寝袋は、朝鮮動乱で戦死した兵士を入れて本国へ送ったやつのは出品だとうわさがあった。初めて冬の雲取へ単独行する時に、これまでの封筒状では心もとない。家にあったセメント袋に注目した。紙の断熱性はよいと聞いていたので、何枚か糊でつなぎ合わせて大きな封筒にし、これに毛布を入れると多少かさばるが軽い。雲取小屋の口うるさい小屋番、鎌仙人（かまざん）からは大いに感心された。しかし保温性は確かに良いが、少し身体を動かすだけでガサガサして、中に入っているはかなりうるさい。周りも迷惑したかもしれないが、これのビパークは大成功だった。

そのころは、お金のある人はいさ知らず、米軍放出品を山道具に転用したものが一般的で、これを「秋葉原スタイル」と冷

やかした。ピッケルは、国産は札幌の門田^{かどた}、仙台の山之内^{やまのうち}などが有名で、何とか欲しかったが、手が届かず、今でも残念に思う。

山での人情

奥秩父縦走で甲武信から十文字峠を経て栃本へ下ったとき、帰りのバスも無くなり、麓の小学校の分教場に泊めてもらった。最初は教室に布団を敷いてくれたが、夜になるとなんだか不気味だ。用務員さんが気を回して、よかったら一緒に蚊帳にどうぞと、家族と一緒にさせてもらった。

十二月の奥武蔵ではうっかり道を間違え名栗の方へ下りてしまった。冬至に近い日、間違いに気づき途中の農家をたずねると、親切にも吾野へ抜ける間道へ、夜道をわざわざ案内してくれた。

春先の常念岳から燕岳への単独行では、予定の山小屋までたどり着けずに、途中の森林伐採の人たちの飯場に泊めてもらった。谷川岳の帰りに雨でずぶぬれになり、谷川温泉の共同風呂につかっていたら、一緒に入っていた人が服をおれん家で乾かせという。言われるままに伺うと、こたつに入れてくれて山菜などもふるまってくれた。今では考えられないほどの親切にあふれていた山路だった。

山での悲劇

初めて山の遭難の捜索に参加したのは大学のスキー合宿のときであった。千葉大生が女性を三人ほど連れて冬の谷川岳から土樽へ下山する際に、ザイルでつながったまま沢に転落しての全員死亡だった。

た。山の経験者ということ、私も土樽の山小屋の人たちに加わって収容に当たったが、途中まで迎えに来た家族の嘆きを身近に聞いて身につまされた。遺体をスノーボートに乗せて降ろす際、岩に当たって怪我しないようにと、息子の顔の周りに自分の服を脱いでクッションとする母親、何度もめがねを拭く父親、全くいたたまれない。決して山で死んではならないのだと心に誓った。

その後、北アルプスなどでも何回か遺体収容に出くわしたが、その度に、軽はずみな行動を慎むように肝に銘じた。十一月の槍ヶ岳単独行の時でも、頂上直下十^トで強風のため登頂を断念したことや、同じ十一月の富士でせっかく買った八本爪のアイゼンとピッケルがあるものの、尾根筋に上がったとたんの強風に恐れをなして退却したことなど、今でもよい判断だったと思っている。これらは単独行だからできたのかもしれない。グルーブだと、だれかが強く行くことを主張すると、なかなか退却は難しくなるから。

山行き半世紀。一度も山らしい山へ行かなかった年もあるが、細々と続けられたのは山歩きがもともと好きだったからだ。一時はもっぱら独りで出かけることが多かったが、この歳になると家内からもそれだけはやめると言われるし、自分でも不安になる。

OB会が発足したおかげで、一緒に行く仲間ができたのはうれしい。最近の山の道具、衣類、携行食料などの発達は目覚ましい。マイカー登山のおかげで、里道を延々と歩くことも少なくなるなど、昔に比べ登山の形態もだいぶ変わり、歳をとっても比較的楽に登れることが多くなった。これからも体力が続く限り山登りは続けたい。

一九五六年（昭和三十一年）

寄稿 入部と夏山合宿

関口洋介（一九五九年卒）

山行

春山合宿 奥秩父・甲武信岳 三月

新入生歓迎山行 天城山 五月

夏山合宿 奥秩父・雲取山・金峰山 七月

北アルプス 槍ヶ岳・穂高岳 七月

南アルプス 北岳・農鳥岳 八月

八ヶ岳 稲子湯・小淵沢 九月二十八日・三十日 参加八人

送別登山 武甲山・伊豆ヶ岳 十一月

〔部員〕 三ツ木政雄 福田昭男 持木英一 木村良次 仲博之 小

林信行 新井昭次 山口達夫 矢沢敬三 戸田成史 山崎有康

〔顧問〕 石川正明 内田一正

三年を追い出す送別山行（武甲山・伊豆ヶ岳）が行われていた。

土曜午後に学校を出発して、東上線寄居で秩父鉄道に乗り換えて現地着（西武線は吾野まで）。夕方から武甲山に登り、頂上の社務所で一泊。

翌日は伊豆ヶ岳まで縦走して、小屋の有名な婆さんに世話になって下山するというコースが定番だった。けれどこの年には肝心の三年が誰も参加せず、送別山行は、この年が最後になった。

入部の勧誘

昭和三十一年四月、川越高校入学直後の私は、将来への期待と不安が入り混じった心境でした。昼休みには毎日のように上級生が教室を封鎖し、各クラブの勧誘を行いました。

特に運動部の先輩たちの脅しとも思える勧誘には、恐怖さえ覚えました。事実一年生にバケツを持たせ、傷害を与えたとして新聞沙汰にもなりました。

こんなとき勧誘に見えられた三年生の小久保哲夫先輩に出会ったのは幸いでした。当時山岳部のキャプテンをしていた彼は、かなり大人に見えたものでした。

「今までどんな山に登った？」

と聞かれ、

「去年、中学校の行事で雲取山に登りました」

と答えました。

「すごいなあ、それなら大丈夫だ」

と言われたので、即入部の意志を伝えました。

この年、夏の合宿は三年生だけで北アルプスに出かけてしまい、頼みの小久保先輩とはその後一度も山行を共にすることはなく、今



1956年7月 夏山合宿 雲取山～金峰山 国師岳山頂にて

でも残念に思っています。小久保先輩に再びお会いしたのはそれから四十年後のOB会山行のときで、彼は当時のことを覚えていてく

れ、とても嬉しく懐かしい思いがしたものです。

夏山合宿（歓迎山行）

入部の年の夏合宿を兼ねた新入生歓迎山行は、奥秩父全山縦走に決まりました。引率はロクさんこと内田一正先生と、石川正明先生。二年生は三ツ木政雄、山口達夫、仲博之、木村良次、矢沢敬三各先輩。我々一年生は高橋純一、神崎俊宏、吉原哲夫各君と私。それに同年二学期から都立石神井高校へ転校した浅野忠太君が参加しました。

その浅野君は体調を崩し、三峰神社を少し過ぎた辺りでリタイアし、帰宅しました。その後三ツ木先輩の、

「一年生は帰すなよ！」

の掛け声は耳に残りました。

雲取、笠取を経て甲武信岳に至り、小屋のすぐ近くに天幕を張りました。甲武信岳の水場は小屋から九十九折りに百^{メートル}程下ったところにあり、布製のバケツに水を汲んで登るのですが、途中重みで手が千切れてしまいそうでした。大弛では昼食の後、疲れてぐっすり寝込んでしまいました。目を覚ますと石川先生から、

「寝顔が可愛かったよ」

と言われ、少々恥ずかしかつたのを覚えています。

金峰山を下った増富では小学校の分教場を借りて泊まりました。夜近くのラジウム鉱泉へもらい湯にいったのも懐かしい思い出です。

寄稿 半世紀ぶりに妻と登った武甲山

木村良次（一九五八年卒）

「ふるさとの 山に向かいて 言ふことなし ふるさとの山は ありがたきかな」

啄木が詠んでいるように、狭山市入間川に生まれ育った私にとって、富士見橋から見た富士山はもとより、奥多摩、奥武蔵、秩父の山々の眺めはありがたい人生の原風景です。

昭和三十年に山岳部に入ってから半年後、送別登山が秩父の盟主武甲山でした。いつまでも忘れられない山の思い出の一つですが、早くも半世紀たち「歳月流るる如し」と感じております。

在学中に登った山は、天城、八ツ、木曾駒、磐梯などと教えると、十指に余りあります。大学時代には、友人と利尻、昭和新山、八甲田など、もっぱら夏休みを利用して登りました。

社会人となつてからは、パーティーを組んで登った経験はありませんが、三十三歳のときに、米国西部に駐在事務所を開設して家族を呼び寄せ、休暇を利用してヨセミテやグラランド・キャニオンなどに出掛け、その壮大さに驚きました。

帰国後、末っ子が小学校に入学したときの夏休みに、家族六人で富士山に登りましたが、下山の途中で自衛隊が訓練で登ってきて、リーダーが、

「坊や強いな。皆も、坊やに負けずに頑張れ！」

と部下に発破を掛けていたのが、今でも思い出されます。

五十歳を過ぎてOB会に誘われ、先輩後輩と一緒に、春秋の山行に参加しておりますが、昨年の秋の山行の前に、半世紀ぶりに妻を誘って武甲山に登ってみました。

十月二十日の朝、飯能の自宅から車で横瀬町生川うぶがわの表参道入り口に向かいました。正丸峠のトンネルを抜けて芦ヶ久保の道の駅を過ぎると、左手に武甲山が迫るように姿を見せませんが、石灰岩の採掘で横縞模様(横縞模様)の山肌は異様で不気味さを感じます。その山容の変ほうは遠くからでも観察できますが、北側の斜面が大きく削られ、長年親しんだ丸い兜かぶとの形からとんがり帽子のような形になってしまい、一抹の空しさを覚えます。

生川の交差点を左折してしばらく行くと、両側に石灰工場が軒を連ね、構内に迷い込んだようで昔の風景は一変しています。駐車場に車を置き、頂上まで二時間の予定で登り始めました。平日のためか人影もなく、木漏れ日に秋を感じました。

釣り堀、養魚場を過ぎて、登山届を記入して、勾配の急なコンクリートコンクリートの林道を登って行きます。十八丁目で右に折れ御嶽神社の石柱を過ぎ、まだ三分の一を過ぎたばかりなのに早くも息切れを感じ、「六根清浄」と心で唱えながら、二十五丁目で休憩。どっと腰を降ろし深呼吸しながら、あと半分だから頑張ろうと互いに励まし合いました。

南向きの山腹は植林されうっそうとしています。心地よい冷氣

の中で森林浴をしている気分は別格で、間もなく尾根の背に沿って登り、三十五丁目の大杉の広場に着きました。三本目の大杉は見事でしたが、落雷で痛々しく裂けて倒れていて、自然の猛威の恐ろしさを改めて感じました。あと三分の二で頂上だと話していると、その日初めての若い女性の単独登山者でした。都内から電車で来て、横瀬駅から歩き続けたと聞き、高校のときを思い出しました。当時はお花畑から根古屋の参道入り口に入り、鎖場もある道から頂上を目指したのです。

彼女はカメラを手に秋の草花を撮りながら頂上を極めた後は、浦山口駅に向かって下山とのことでした。四十二丁目で、新たに作られた木段を最後の力で踏ん張りながら登ると、先行した妻が小持山方面との十字路に立ち、もう一息で頂上よ、と声を掛けてきました。その十字路で私たちと同年代の夫婦を見かけたのは、その日出会った三人目でした。程なく懐かしい御嶽神社の一角につき、半世紀ぶりに参拝しました。

思えばあの時も、秋の中ごろで日が暮れるのも早く、一三三六の頂上から見下ろす秩父盆地は灯が一面に広がり、その素晴らしさに感動したのでした。炉のある小屋にひとまず落ち着くと、間もなく二年の小久保さんから、

「三年の岩堀さんらが後から合流する前に、火をたいて夕食の準備にかかれ」

との指示を受けました。一年の私たちは薪を集め、付近の水場まで水汲みに行き、一汗かきました。当時の小屋は形を変え、風除

けの板壁とベンチだけになっていましたが、水場は昔のままで、トイレは綺麗な水洗式に整備されていました。

社殿も立派な姿に建て替えられています。地元の銘酒「武甲正宗」が一本軒下に供えられています。神社の左手から第一展望台に行く、石灰岩の採掘で露出した広大なテラスの先に秩父盆地を見下ろす光景には、今昔の感があります。一三三六の石柱はそのままで、最近の測量では一三〇四と改められています。昼食後は日の暮れないうちに帰宅しようと駆け足で降りて、来るときに見かけた名水の「延命水」をペットボトルに入れました。

啄木の故郷の山の歌は、ほかにもあります。

「汽車の窓 はるかに北に ふるさとの 山見えくれば 襟を正すも」

武甲山こそ私のふるさとの山だとの思いで登り、
「秋晴れに 妻を誘いて ふるさとの 山に登りて 頂上極め」
しばらくぶりに楽しい一日でした。



S.V

一九五七年（昭和三十三年）

山行

春山合宿 安達太良山 三月

新入生歓迎山行 両神山 五月

蕨山 蕨沢 六月

夏山合宿 剣岳 七月二十二日～二十七日 参加九人

夏山合宿 中央アルプス 八月

八ヶ岳 九月

乾徳山 九月

送別山行 武甲山 十一月

〔部員〕 井上雅弘 山戸衛 関口洋介 国田順也 高橋純一 繁田

昌利 岩沢龍男 清水正己 千野利一 神崎俊宏 栗原功 吉原哲夫

〔顧問〕 石川正明 内田一正 岡田潔

寄稿 春の安達太良山 夏の中央アルプス

関口洋介（一九五九年卒）

春山合宿 安達太良山

石川先生の故郷は福島県二本松市で、その友人が「くるがね小屋」

の管理人であったことから、昭和三十三年三月の春山合宿は、安達太良山に決まりました。参加メンバーは、四月から三年に進級する三ツ木、仲、山口さんたちと、二年になる高橋、山戸、神崎君等、私を含めての二年生だけでした。岳温泉から木製の湯管に沿った道をスキーを担いだりしながら登るのですが、積雪が数メートルある雪道を歩くのはかなり骨が折れました。目標のくるがね小屋は、二階建ての小さな小屋で、積雪期は二階の玄関から出入りしました。無人の冬の山小屋は、戸の隙間から吹雪いた雪が入り込み、山のように積もっていました。小屋には手回しの電話機があり、何回廻したかで何処が受話器を取るかが決められているようでした。

二日目は勢^せ至平を経て皆は安達太良山頂を目指しましたが、私は



1957年3月 春山合宿 安達太良山 鉄山にて

体調不良のため留守番となりました。

晴天の三日目は雪の急斜面を鉄山に向かいました。鉄山の岩壁は強風によると見られるエビのシッポ状の氷雪が張り付き、彼方には磐梯山が望まれて実に美しい光景でした。

四日目には岳温泉に下り、小学校を借りて合宿となりました。夕食の席で某先輩はコンロに石油を入れようとして、誤って周囲に石油をばら撒いてしまいました。そのため我々は石油臭い飯を食べるはめになってしまい、今でもその味を思い出すだけでぞっとします。

夏山合宿 中央アルプス縦走

昭和三十二年七月の夏山合宿には、三年生の三ツ木、木村先輩と、二年生の高橋、神崎、私と、一年生の大橋朋伊、金井毅夫、清水文昭、仲功、長沼友兄、沢田英敏君等が参加されたように覚えています。引率はこの年新たに赴任された岡田潔先生と、石川正明先生の二人でした。国鉄飯田線を赤穂（駒ヶ根）駅で下車、徒歩で登山口へ向かう途中の砂利道は、今のロープウェイまでのバス道路で、道の脇に天幕を張り泊まりました。さらに登山道を一掛け千畳敷に着きました。辺り一面手付かずのお花畑で、その中の花を踏みにじめるがごとく、天幕を張りました。一大観光地と化した今ではとても考えられないことです。天幕はこの年部費で新たに購入したテントロンの製の新品で、以前のものに比べてとても軽いものでした。

翌日には中岳を経て木曾山脈の最高峰の木曾駒ヶ岳まで歩きました。山頂の石の祠前では白装束行者姿の人々が一心に経を挙げてい

て、その姿を写真に納めようとしたら木村良次先輩に「やめとけ、やめとけ」と言われ、写すのを辞めた記憶があります。

その後千畳敷に戻って一泊。翌々日は空木岳を目指し出発。空木岳から鞍部の木曾殿越の粗末な避難小屋（木曾殿山荘）に戻り一泊し、木曾側の上松へ下山しました。

伊豆ヶ岳の婆さん後日談

当時からすでに岳人の間では有名な婆さんとして知られていた方です。一般には「島田婆」と呼ばれていたらしいのです。仕事の合間にはキセルで煙草を蒸かし、気丈な性格でハイヒールなどの軽装で登ってくる客や山のモラルを守らない者を、遠慮なく叱り飛ばしていたそうです。

私自身、最近まで可児一男先輩の伯母と信じて疑わなかったのですが、かつて近くの小高山で茶店を営んでいた鈴木はつ乃さんにお会いして、親交のあった島田婆の消息を知ることができました。彼女は本名を塚本勝子といい、茨城県石岡の生まれで、九歳までは歩くこともままならなかったと言います。十一歳から歩けるようになり、上京後夫君の島田さんと知り合い、戦時中に結婚。島田さんは再婚で亡くなった先妻との間に五人の子供がいたそうです。その後、舅から伊豆ヶ岳の茶店を任せられ、毎日麓の自宅から徒歩で山頂を往復。多忙な時には正丸峠ガーデンハウスに泊まり、愛犬を連れて登ったといえます。この頃すでに彼女は日本山岳会会員であったとか。今から三十五年ほど前に彼女が六十五歳で亡くなった後は、夫の

島田さんが他人を雇って茶店を続けていましたが、二十五年ほど前に店を閉め、建物はすべて解体したといえます。現在吾野地区には、島田婆の縁者も住まいもありません。藤市の「こぐま山岳会」が伊豆ヶ岳山頂の茶店跡に、彼女を顕彰したレリーフを建てています。今思えば、私たちが当時会っていたのは五十歳前後の彼女ではなかったかと思われず。

卒業後と人生

早いもので卒業五十年近くの歳月が流れようとしています。中でも残念であったのは、小学校以来の同級生で、高校でも同じ山岳部で過ごした高橋純一君の訃報でした。川高卒業後も槍ヶ岳をはじめとして幾つかの山行に一緒でしたが、四十歳の若さで逝かれてしまいました。本当に悔やまれます。

私自身は、一九六七年（昭和四十二年）に大学の教員として派遣されたパリの学会の帰途、初めてヨーロッパというのを見ました。その感動は今でも忘れ難いものの一つです。幸運にも一九七四年に当時の西ドイツのバイエルン州のブルツブルグ大学へ留学の機会を得ることができ、夏期等の長期休暇にバリスアルプスやベルナーオーバーラント等、スイスのトレッキングによく出かけました。バスで日本人観光客が行かないような奥地まで参りました。若さだけが頼りの怖いもの知らずの行動で、今ではとてもできません。結婚後は勤務の関係で、府中市、調布市に居住しました。大学の講師を続けながら近くの丹沢や道志の山々に登っていました。

父親の病気をきっかけに、五十歳代で故郷の川越に戻ってからは、近くの奥武蔵や秩父方面の山を歩いています。但し生来体力に自信がないために、現在は一日一山五時間以内を心がけています。特に奥武蔵では日本二百名山である武甲山に年間三十回ほど登っており、今では武甲山御嶽神社（守屋憲太郎宮司）の氏子末席に加えて頂いておられます。また武甲山には良質の湧き水があり、行く度ごとにタンクに水を入れ持ち帰っています。私自身は日本百名水の日本水と比較しても、こつちが絶対美味しいと信じています。我が家では米を炊くのもお茶を入れるのも、すべて武甲山の湧き水を使っていて、まさに命の水です。

若き日に高校の仲間と共に登った武甲山は、石灰石採取のため北面は全く姿を変えてしまいましたが、南面には未だ昔の自然が息づいています。数年前、偶然撮影した日本カモシカの写真が、朝の読売新聞の紙面を飾りました。

その武甲山が縁で、現在は故清水武甲氏も会員であった「奥武蔵研究会」に所属しております。会誌「奥武蔵」は国会図書館にも収蔵されていて、同誌に武甲山に関する拙文を寄稿しています。また同会は昭文社エリアマップ「山と高原地図——秩父・奥武蔵」を監修していて、そのお手伝いもしています。登山道は毎年歩きませんと、崩壊により廃道になっていたり、新しく林道ができたります。さらに観光トイレの新設や廃止もあり、登山地図は毎年更新しなくてはなりません。会員数名で調査エリアを決めて山行を行い、ハイカーや登山者の安全を図っています。

他に私にとつては、十二歳の頃から親しんだ写真の趣味があります。個人山行では撮影のみが目的で山に入ります。早朝の日の出、夕方の日の入りこそが撮影タイムで、一晩中起きていて星を撮り続けることもあります。団体山行ではこのスケジュールでは無理があります。あるとき「全日本山岳写真展」の公募に応募したところ、入選してついに山岳写真協会に入会しました。写真展は毎年九月第一週に、池袋の東京芸術劇場で開催されます。私はアンナブルナやタムセルクのヒマラヤの写真を出品してきました。毎年四、五十点を超す作品と、会期中には数万人の観客を迎える日本最大の山岳写真展です。入選した数多い展示作品で二十点ほどが各スポンサー賞に輝くのですが「晩秋の平ヶ岳」という作品で、私も今年「ラムダ賞」を頂戴しました。この写真展は、文化庁、環境省、朝日新聞社等の後援を受けた権威ある写真展です。

私の登山人生を振り返ると、もし川高山岳部時代がなかったとすれば、今の生活は考えられなかったと思います。山は人生の潤いであり、生きる力を与えてくれます。今後も自分の体力に合わせた山歩きを続けていきたいと思っています。

寄稿 六甲山アラカルト

吉原哲夫（一九五九年卒）

六甲山は、須磨あたりを起点として東へ延び、神戸市と芦屋市と

を通過して西宮市へ入ると北上し宝塚市あたりで終点となる、最高点の標高九三一^{メートル}、長さ約五〇^{キロメートル}、幅約一〇^{キロメートル}の山地の総称です。阪神間の景観を特徴付け、そこに住む人たちの生活に良きにつけあしきにつけ影響を与え続けているこの山を断片的・独断的に紹介してみます。

名前の由来

昔、大阪の堺とか岸和田から見て大阪湾を隔てて向こうに連なっているのが「向こうの山」と呼ばれ、「六甲山」になった。あるいは、近くを流れる武庫川の奥にあるので「武庫の山」と呼ばれていたものが「六甲山」になったと説明しているものを読んだことがあります。

幼年期の山

六甲山の年齢は約五十万歳ということです。世界的に見ても火山以外では異例ともいえる若さで、幼年期の山ということになります。日本列島が乗っている大陸系のプレートの下に太平洋系のプレートが潜り込もうとしており、そのため大陸系プレートは巨大なストレスを受け、「もう、辛抱たまらん」とプチンとヒビ割れして断層が発生し、ピヨコンと飛び出して山ができる、六甲山もそうしてできた山だということです。今でもストレスを受け続けていて、五〇〇年から一〇〇〇年に一回プチンが発生し、その結果五〇^{センチ}から一^{メートル}高くなっている。この断層が繰り返し発生するところは活断層と呼

ばれ、直下型地震の原因になっていることはよく知られているところ。淡路島北部の野島断層は阪神・淡路大震災の震源地ですが、そこには約二〇〇年前に同規模の断層が発生したことを示す地層の断面が保存されています。日本中活断層だらけですが、硬くて脆い岩盤がストレスを受け続けていればプンプンとひび割れが発生するのは当たり前、地震の脅威と引き換えに変化に富んだ景観を手に入れていくわけですから差し引き得か損かどちらでしょう。

準平原と急峻な谷

隆起した六甲山は侵食を受け急峻な谷を形成します。しかしまだ上部には準平原と呼ばれる平らなところが残っています。この準平原の部分にゴルフ場とか遊園地とかホテルがあり市民の憩いの場となっております。特にゴルフ場は何人かの英国人が造った日本最初のものです。

六甲山周辺の谷は急峻なものが多いといわれていました。山全体は花崗岩でできており、源流地帯には多くの滝が形成され周辺の岩壁とともにロッククライミングのゲレンデとして多くのクライマーを育てました。大正年間に芦屋のロックガーデン周辺をベースに藤木九三氏らがRCCを創立しました。

この谷は急峻であるため、ひとたび大雨が降ると大量の砂を押し流し下流の人家を襲って土砂崩れ災害を起こします。神戸の自然災害の大部分は洪水とそれに伴う土砂崩れでした。その災害を防ぐため、神戸、芦屋、西宮の各谷には数多くの砂防ダムがあります。そ

のため「沢登りというか砂防ダム登り」という状態だそうです。

ハゲヤマ

少なくとも明治時代の中期までは六甲山はハゲヤマだった。牧野富太郎博士が、若いころ、六甲山を雪山と見間違ったということ。これを緑の山に変えるきっかけをつくったのは、英国人グルームをはじめとする外国人の貿易商らです。彼らは貿易のために来日し、最初は現在「旧外国人居留地」と呼ばれる海岸通りに住んだのですが、やがて成功者は山手のほうに屋敷を構えるようになりまし。そこは現在「異人館通り」と呼ばれる観光スポットになっています。余裕ができますと、背後に連なるハゲヤマが気になりますし、故郷で楽しんだゴルフやハイキングもしたいということになります。

彼らが提唱し、植樹を行ったことがきっかけになって緑化が進み、現在の緑の山になったということです。彼らは多くの登山道を開き、六甲山における近代スポーツ登山の基礎を築きました。ハイキングコースにはカタカナの地名が結構残っています。例えば、ドントリッジ、トゥエンテイクロス、シュールロード、シユラインロード、ダイアモンドポイントなどです。何しろ当時ハイキングなどをしてるのは外国人がほとんどだったのでしよう。『六甲・摩耶』（ゼンリン）・『神戸雑学』（神戸新聞出版センター）参照

一九五八年（昭和三十三年）

山行

奥多摩 御前山 一月

川苔山 二月

春山合宿 丹波 三月二十九日～四月三日

谷川岳 四月

新人歓迎合宿 南アルプス・鳳凰山 五月三日～五日

夏山合宿 北アルプス・常念岳・槍ヶ岳 七月

県体登山大会

個人山行は、八ヶ岳、雲取山、金峰山、尾瀬、白馬など

〔部員〕 大橋朋伊 長沼友兄 和田英教 金井毅夫 仲功 清水文

昭

〔顧問〕 石川正明 内田一正 岡田潔

今日まで続く部報「わんだらあ」創刊号は、この年の十一月に創刊された。部報の題名、制定された部歌「山男の歌」は、数年前に遭難死したOB若月洋三の遺稿集から、引用されたものである。と同時に、運動部としては山岳部だけが、この年から文化祭に参加することになった。部活動として大きな転機を迎えた一年でもあった。

創刊された部報によると、五月に行われた新入生歓迎山行の鳳凰

三山は、春山合宿を兼ねていたような山行になった。頂上直下の雪渓では、グリセードなどをして楽しんでいる。

夏山合宿は石川、岡田顧問の他、OBも含めて十六人参加。北アルプスの横尾をベースキャンプとして行われたが、台風の通過によって横尾のキャンプ場そのものが増水で流される被害を受け、現地では徒歩で流された遭難事故も発生した。

個人山行も盛んで、大半は夏休みに集中したが、残雪六月の穂高岳の単独山行なども行われている。

山行記録 夏山合宿 蝶～常念岳

七月二十四日

C班 OB川口・井上・栗原・和田・岩沢龍男（記録）

午前六時半、AB班に見送られ、横尾ベースを出発。昨夜の雨はどうか上がったが、雲は相変わらず低迷している。濁った梓川を渡り、横尾山荘を右に折れて、薄暗い森林に入る。名も知らぬ小鳥たちが朝の合唱で迎える。木々に包まれた朝の冷気は真夏を忘れさせる。

我々は梓川の水音を背にして閃光型の急な登りに取り付く。道の両側に生い茂る熊笹がしきりに膝下を濡らす。頭上を覆う樹木は全く視界を妨げるが、高度が稼げるから気持ちがいい。今朝流し込んできたばかりの味噌汁が、腹の中でなかなか落ち着かない。梓川の水音がやっと消えた所で五分間の休憩。汗はかかないが、とても喉

が渴く。たちまち私の出した水筒が空になる。七時五分出発。

和田君の配給してくれた氷砂糖を口にして、黙々と登り続ける。この頃から次第に調子が出始め、背中もじつとり汗ばむ。井上君がお得意の「フアイト」が静かな森林に響き渡る。

午前八時、薄暗い鬱蒼とした木々もだいぶまばらになり、雲も高くなる。雨の心配はほとんどないが風が出始める。ここで落雷で倒れたらしい大木に腰を降ろし、二十分間の大休止。やはり喉が渴き、水の売れ行きが激しい。しばらくすると遙か下の方から、女性を交えた八人パーティーが元氣よく登ってくる。我々はわずかな流れを見つけて、空になった水筒を満たし、頂上間近い蝶ヶ岳を目指す。

全員快調、歌も飛び出す。三十分で樹木はすっかりなくなり、ガレに出る。やや行くと分岐点に出る。ここを左に折れると蝶の頂上である。風が非常に強く、雲行きが激しくなった。海拔二六四四のこのおわん型の頂上はいたって平凡ではあるが、その景色といつたら、あらゆる手段を尽くしても表現できないほどでもある。内側に水滴を付けてしまった腕時計は、ちょうど九時を指している。かなりゆっくりしたペースで歩いたような氣もしたが、予定通りである。先ほどから穂高連峰を覆っていた雲は次第に切れて、北穂、奥穂、前穂と次々にその姿を現し、我々を歓迎する。横尾から神経系のごとく這い上がっている涸沢やこれらの山肌には、まだかなりの残雪が張り付いている。その涸沢を包んで、黒褐色の岩肌をした壮大無比の屏風岩がそそり立ち、その登攀者を拒んでいる。

十分ほどして全員が揃った。相変わらずの強風は我々の会話を吹

きちぎる。さっきのパーティーも姿を見せ、我々と共にこの絶景に酔う。我々は強風を避け、蝶を下って三十分の大休止を取る。みかんの缶詰を開けるが喧嘩になる。キャラメル、カンパンを口にする。九時半、ヤツケと手袋をつけて、常念岳に向かう。さっきのパーティーは反対に大滝山へ下る。

穂高方面から吹き付けてくる風は益々強いが、尾根歩きの気分は満点。橙色をしたニッコウキスゲに似た美しい花を時々見かける。道は同じような山を幾つも越えるが、大した登りもなく、首を振り振り辺りの景色を楽しむ。三つ目の山を過ぎる頃、突然左手に飛び去るような雲間を縫って、あのエッフェル塔のような槍ヶ岳が姿を見せる。初めて見る槍ヶ岳。慌ててザックから写真機を取り出し、シャッターを切る。十一時に五つ目の山を通過。

目の前に聳え立つ常念岳はだいぶ近づいたが、二時間の歩き通しにやや足の重さを感じる。常念岳の一つ手前の丸坊主の山に差し掛かったとき、先に歩いている川口さんと井上さんの姿を見つける。「ヤッホー」と叫んでみたが、風のために全然届かない。十一時半、岩陰で全員が揃ったが、頂上で昼食を約束して空腹だが登り続けた。頂上はガスが流れ、背後の蝶ヶ岳は全く見えない。天候を気にしながらルンゼを頼って登る。

下から見るときつくないが、十二時を少し回った頃、最後のガレ場を登り詰めて頂上に出る。視界は全然利かないが、さすがに高いという感じはする。銅版に彫り付けた山案内図を取り囲んで、見えない山を適当に想像する。やっと一息、記念写真を済ませて、

昼食にしようとしたとき、突然ガスが水滴に変わり雨が降り始める。慌ててカメラをザックにしまい込み、常念小屋まで下ることにして、我先にと出発。

くの字型のすごい下り。もう遙か下方を和田と井上が脱兎のごとく駆け下つていく。私も後を追う。雨は次第に激しさを増し、あるいは顔面から、あるいは背中からと、容赦なく吹き付ける。上半身はヤッケで防げるが、腰から下はずぶ濡れ。ナーゲルの中へどんどん流れ込む。後方の二人は全く諦めて、のろのろ降りてくる。常念小屋から登ってきたパーティーも慌てて逆戻り。雨で曇った眼鏡をぬぐつて見ると、真下に白いトタンを光らせた常念小屋がうずくまっている。至る大天井岳と書かれた道標を左に折れて、常念小屋に飛び込む。びしょびしょのヤッケを脱ぎながら、ガタガタ震える。みんな鼻水と水滴を流して、いい格好である。小屋に上がろうと靴ヒモを解くが、手がかじかんで解けない。そのうち後の二人も飛び込んできた。我々は小屋の一隅に陣取ってしばらく様子を見る。昼食を取り、囲炉裏でズボンを乾かしながら、三時まで待つが全くやむ気配がない。おまけに小屋の携帯ラジオが、三陸沖に抜けたと思われた台風十一号は、相模湾に上陸と放送。小屋の人々も顔を強張らせた。

大天井岳へは、明朝早く出発することにして、常念小屋泊まりを余儀なくされた。この頃から小屋も次第に混み始め、我々五人だけ特別に、新設中のドーム型テントに移る。五十人用くらいの大きなもので、布団も何十枚と積んである。夕方まで合唱や冗談話にふけ

る。午後六時、上下二枚ずつ布団を敷いて、これに潜り込む。テントを打つ風雨のためになかなか寝付かれない。おまけに話が弾み、静寂を保つこと十時。午前一時に常念小屋付近に幕営していた男女五人パーティーが、テントを吹き飛ばされ、このドーム型テントに避難。

翌朝五時起床、風雨は依然静まらない。大天井岳を断念し、一ノ俣を下ることにして朝食を取る。隣のパーティーは昨夜の恐怖でまだ目を開けない。七時、びしょ濡れの靴に足を縛りつけ雨具を着て、「足を滑らせないように気をつけて行って下さい」

という常念小屋の主人の声を後に、一ノ俣谷を下る。道という道は雨水に隠され、足首まで水に浸かる。雨は昨日にも増し、深々と続く一ノ俣谷を曇らせる。二十分下ったところで一ノ俣源流に出る。いつもは水も涸れ上がった沢であろうが、雨が降ると一気に水を集めて駆け下る。この沢を左に見てしばらく下る。誰も口をきかない。ちやうど一時間くらい下ったとき、トップに立っていた井上が道を見失う。全く道のないところに入ってしまったのである。一ノ俣沢を五十メートルくらい下に見る位置である。谷はだいぶ深い。しんがりにはいた川口さんが戻ってみるが前進するべき道は見つからない。すごい傾斜と地盤の緩みで自由に動けない。五人は全身を目にして必死の道探し。

「見つかったのか」「そっちはどうだい」

思い切り怒鳴りあうが、雨と風と沢の水音で全く連絡が取れない。焦りが出る。

「おーい、見つかったぞ」

遙か下の方で川口さんが叫ぶ。近くにいる和田が連絡を取る。突然の増水のために、その道は小さな沢となっている。時間の損失三十分。ほっと一息。ガムを口に入れて再び谷を下る。赤いエナメルで岩に塗りつけた道しるべは着実に我々を案内する。九時をやや回った頃、ごうごうたる濁流がピタリと足を止める。丸木橋が流されて無くなっている。対岸まで十歩。ザイルを持たない。例えザイルを張っても、到底渡れる水量ではない。だからといって常念まで戻る気にもなれない。地図を取り出してみると、もう半分以上は来ている。全員一致、左手にそそり立つ絶壁を巻く。川口さん一人独立ルートを取り、我々四人は互いに足場を作り手を貸し合って約五十歩攀じ登る。三十分間の苦悶の末、ようやく道のところにたどり着く。ここで太い丸太二本並べた丸木橋を渡り、谷川を右に見て進む。雨は全く止む気配はなく、もう雨具の下もびしょり。しかし寒さを感じない。

ここでまた大難所におつかる。道がすっかり谷川の水に埋まり、おまけに左手はほとんど垂直に近い絶壁。無言のまましばらく呆然とする。目の下で渦巻く濁流は我々を引きずり込もうかとするごとく、数歩跳ね上がる。まるで地獄の底にでも突き落とされたようで、生きた心地は全くない。しかしながら前方がやや明るくなり、一ノ俣に近づくことを示している。このみを一つの望みとして、この絶壁に取り付く。一歩間違えば濁流に吸い込まれお陀仏である。慎重に慎重を極める。先に行く井上が足場や手の捕まり場所などを指

示。私も後から来る者を導く。全員無事に元の道に出るまで一時間を費やす。十一時である。ほっとして緊張感から解き放たれると、寒さも感じる。考えてみると常念小屋を出発して以来、四時間一度も休まず何も食べていない。わずかな岩陰で雨を避け、ザックの中から常念小屋で結んでもらった三個五十円のむすびを取り出してかじる。ソーセージも丸かじり。私の持ち合わせていたセーターを取り出し、栗原に着せて出発。このとき慌てて谷川に帽子を落としてしまった。

谷はだいぶ浅くなり、しばらく行くと右手に階段状に駆け下り七段の滝を見る。晴天ならどれほど美しい滝であろうか。今はまるで魔物の爪のように見える。七段の滝を十分くらい下ったところで、とうとう四度目の危機に出合う。またまた丸木橋が流されて無い。谷川の幅？ 狭くらい。その中央までは残っているが半分から向こう側が切れている。

対岸に人知れぬ遭難碑を見て足がすくむ。しかしこのようなことを予期して、途中七段の滝の岩場に丸めて置いてあった針金を拾って来たのだ。川口さんの経験豊かな手によってこれをザイルの代わりにして、危なげながらもどうにか渡り切る。川口さんはビニールのズボンを破き、井上は首まで水に浸かり誰もが見るも無残な姿。そこから下ること三十分。ついにすっかり谷が開け槍沢との合流点一ノ俣に出る。ちょうど十二時。常念を立つてから五時間。普通なら二時間で下れるところである。

一ノ俣小屋に入り、小屋の主人が出してくれたお茶にかぶりつく。

風雨は相変わらず激しく、槍ヶ岳に登った人たちも続々と下ってくる。一ノ俣谷と槍沢を合流してなる梓川は昨日のそれとはおよそ想像もつかないほど増水し、益々横尾のベースキャンプが心配になる。全財産を残してきた者もいる。昼食を取り、一時一ノ俣小屋を出発。一時半横尾に到着。しかし案の定、梓川の中洲に張ったベースキャンプは跡形も無くなっている。一、二年の報告により全員無事に横尾山荘に避難したことを知り一安心。

台風一過の好天気当头で込んで来た数千人の登山者は、この突然の大災害にどれほどショックを受けただろうか。我々は互いに自分たちの無事であることを喜び合いながら、横尾山荘に入る。

(三年 岩沢龍男)「わんだらあ」創刊号

寄稿 部報「わんだらあ」創刊と部歌の制定

井上雅弘(一九五九年卒)

半世紀の昔、クラスメートの若月高志から、彼の兄若月洋三遺文集「木魂」を渡された。若月洋三は、最終の旧制中学を卒業(昭和二十三年)した山岳部のOBであった。そして、昭和二十七年二月冬の富士を単独登行中、滑落遭難死してしまった。私はそれまで、OB若月洋三の存在を知らなかった。

当時は物資や余暇時間が乏しく、淡い夢を追って生きていた時代であった。登山をするにもさほど豊かではなく、家業を継がなければならぬ現実と対峙しながら、山に



若月洋三遺文集「木魂」

ばならぬ現実と対峙しながら、山に對する憧れと、何とか登山の時間を作るといふ、ひたむきな青春の生き様にいたく共感した。友人や先輩女友達に宛てた手紙には、日々の出来事や葛藤、心情の揺らぎ、登山への渴望や自然との一体感が随所に綴られていた。まさに登山ブームの先駆時代を彷彿とさせる、典型的な登山者と受け取れた。

世の中の様々な成り立ちや出来事に、疑念や不条理を感じ始めた年頃の自分にとっては、極めて新鮮な感動であった。

私が遺文集「木魂」を手にした時、茶色の文字でガリ版印刷された一枚の歌詞と楽譜が折り込まれていた。「山男の歌」である。

作詞 小沢俊郎

作曲

と横二段に併記してあった。作曲者の前は空白であったが小沢俊郎作曲と思ひこんだ。小沢俊郎は若月洋三の旧制中学在学時代最後の恩師であった。

この度改めてこれ等の経緯を探索してみた。後輩の部員長沼友兄が調査・取材して指摘すると同様、些かの疑念を感じた。つまり、



1958年 部報「わんだらあ」が
創刊された

小沢俊郎と親交のあった人たちからは、彼は音楽的才知が乏しかったと目されていたこと。また、小沢俊郎の広島高師時代の同僚や知人、武蔵野学園で教鞭を取っていた頃に交流のあった人たちから、音楽に対する強い影響を受けたとの逸話がある故である。これ等の状況から、部歌「山男の歌」の作曲は、小沢俊郎を取り巻くそれら有能な隣人たちとの編作との見方が否定できない。そこに至ったのは、宮沢賢治にある。小沢俊郎が生涯研究を続けた宮沢賢治には、「星めぐり」という彼の作詞・作曲と称される歌が残っている。しかし、この曲は専門家からドウォルザーク・グノーからの編作と指摘されている。部歌「山男の歌」の作曲者は特定できずにいる。が賢治の「星めぐり」同様小沢俊郎を取り巻く隣人たちとの編作と読み取りたい。

遺文集には、「我が魂の 故郷を 求めさ迷う ワンダラー」等味わい深い歌詞が挿入されている。同級部員に千野利一がいた。彼はグリークラブの部員でもあり、二人でこの歌を歌おうとしたが、キーが高くて歌えなかった。そこで音楽部顧問をされたた牧野統教諭に依頼して歌い易く調

整して戴いたのが現在の部歌である。

部歌制定に当たっては、当時三人居られた顧問の先生方に相談して、創刊予定の部報「わんだらあ」に掲載することにした。

この年に山岳部の部報発刊を手掛けた。過去に「秩父嶺」という部報が数刊発行されていたのは後年知ったことである。部報名「わんだらあ」と命名したのは「山男の歌」中の詞による。

小沢俊郎が研究を重ねた賢治は、自然をあらゆる視点から変化を加えて自由自在に、しかも自然との交感に裏付けされた豊かな表現と構成をもって、美しく理想的・幻想的に描いている。一方リアルな地方性を併存する多彩さと、故郷の山野を当て所なく放浪する姿に、憧れにも類似した心情を抱かずにはいられなかった。

賢治の研究者である小沢俊郎には多くの著作があり、賢治の漂泊・放浪癖に関する文章が数多く残っている。「緑した山の名―賢治地理Ⅱ山岳『四次元一三三三号』」「母なる平原―賢治地理Ⅱ種山ヶ原『四次元一五五号』」「岩手山の野宿『薄明穹を行く』」、詩集「春谷暁臥」等に多くが綴られている。

放浪・流浪Ⅱさすらう（流離う）・さ迷うⅡところ定めなく歩く、さすらい歩くという行動に、思案が定まらぬ、判断に迷う、心が動く、心が安定しない状態や心情が加味する。小沢俊郎が賢治から授受した、その心情の不安定さに行動のさすらう状況を「山男の歌」に詞歌として取り込んだに違いない。我々はそのような心情を部報名として取り上げた経緯がある。

ガリ版印刷の「わんだらあ」創刊号は、全部員に一年間の登山体

験や思いを執筆して貰う一方、部費逼迫の折から広告掲載の交渉に奔走してもらい、刊行費用に充当した。

また、この年運動部として初めて文化祭に参加した。写真部の暗室を借りて現像・引き伸ばししたその年の山行写真や記録展示を行ったのも良き思い出である。

ふた夏の合宿・その後

当時の忘れられない山行は、成功した山行よりも、辛苦を舐めた山行であり、何れも豪雨の被害を受けて惨敗した夏山合宿である。

昭和三十二年（一九五七年）は剣から槍までの縦走に取り組んだ。ところが別山乗越から剣沢に入り、剣を往復した夜から豪雨に遭遇した。夜中にテントの中を水が流れ、強風に揺れる支柱を抱えて夜を明かした。翌日も風雨の中、雨の滴る旧式の重いテントを背に、登って来た道を、地獄谷から美女平へ立山へと下山した。あの時の苦汁は今も忘れられない。

その惨めな下山中、夏なのに何故か里に下りたら炬燵に入って「熱いラーメンが食べたい」という思いが終始付いて廻った。この年の山行記録はない。小生のメモには、参加者OB一名、三年二名、二年五名、一年一名、合計九名とあった。

昭和三十三年（一九五八年）には横尾をベースとして、部員の体力格差を考慮して放射状登山で臨んだ。やはり豪雨に遭遇し三日目で撤退となった。大天井・槍を断念、常念から増水した一ノ俣を下り何とか横尾まで辿りついた。直ちに下級生を下山させたが、バス

不通のため、上高地から林道歩きとなった。その後、林道も崩壊して不通となった。

撤収整理に追われた上級生数名は、残った装備を背負い、徳本峠を越えて鳥々まで、高巻きや徒渉を繰り返して十二時間の苦闘を余儀なくされた。その折は、目的未遂の無念さと徳本越えの苦汁を感じたが、下界での豪雨被害騒動は全く想中になかった。

後年、四十年振りに剣から槍までの縦走を試みた。一人の小屋泊まり、気ままな山行で天候にも恵まれ、かつて幾度か一人この地域をさすらい歩いた記憶が断片的に思い起こされてきた。

一人の山行は黙示の歓喜を心中に感じ、心の行方を求めるが如く、黒部の源流を訪ねた思い、王維「終南別業」の一連が心をよぎる。

行到水窮處（行キテハ到ル 水窮ル処）

坐看雲起時（座シテハ看ル 雲起ル時）

王維が自然を愛し、煙霞の癖があったのは確かであろう。しかし、この詩には、単に自然への傾倒を超えた奥深い意味合いを感じるものがある。寒山詩に同類の一連がある。

尋究無源水（尋究ス無源ノ水）

源窮水不窮（源窮マリテ水窮マラス）。

水源を究めてその源へ到達する。しかし源泉からは水は湧き出でて尽きない。因果律の法則は完了しても、水は湧き出でる。法則や科学による帰結は得られても、行いは帰結されない。

「窮まりて喉を潤す黒部溪谷、我が求道心定まらずとも」

雲は無心に起こる。無から起こる。白雲の去来をこちら無心に

見る。俗界の垢、利害得失を超えたところに坐し、雲も心も自在である。

「足なえて坐して仰げる黒岳の、我がうつしみか峰の白雲」

「ひとすじの険し果てなき旅なれど、眼そむくとも我が道なりき」

翌年春、数年間通った穂高連峰を訪ねた。今回も四月連休の前、小屋を掘り起こす時期であった。連日の悪天候、氷雨と緊張感に、志衰えて、早々に北穂沢から横尾に下り、明神に至った。

明神館での夢枕は、数年前訪れた餓鬼岳の再来であった。「濡れた落ち葉を踏みしめて、辿り着いた小屋には一匹の餓鬼がいて、『餓鬼』の絵『今日はよく来た』と書かれた免罪符（お札）をくれた。そこ餓鬼岳と唐沢岳一帯は、下界にはない清浄な一角で自分が夢にまで求めた領域であった。

翌日は快晴で、四十年振りに残雪の徳本を越えて島々へ。根深い雪ルートや徒渉の探索に手間取り、島々まで十時間を要した。大滝への分岐二股からは舗装された林道で、嘗て苦闘から解放された処。昔日の懐かしいトロッコ軌道は、人造湖の対岸に消えていた。四十年前の面影は、険の裏にしか残っていない。これが高校時代に辛苦を舐めた二夏の合宿と回想の総括である。

私の山行は、同窓の神崎俊宏に触発され、当時先鋭的山岳集団の独標登高会主宰の山口耀久から影響を受けた。また、氏と交流のあった尾崎喜八や高橋達郎からも薫陶を得た。

雑誌「アルプ」への心酔と、数名の執筆者との交流を通じて得た感触を受け継ぎ、静観的の山行に一人傾注し続け、今も一人さすらう

山行が多い。

幾多の山を訪ねたが、何故か八ヶ岳には、五十年間に四十回も足を運んでいる。何度か夜中に雪山も歩いたが、吹雪の夜中、赤岳からニユウを経て白駒池まで辿り着いたのは幸運以外の何ものでもない。今、思うにギリシャ神話のアリアドネーの糸玉の導きに重なる思いである。

私にとつてのさすらう山行は、賢治の理想的な美しい放浪とは異なり、自分なりに厳しく泥臭いものである。それは、社会環境への順応精神の調整と山や自然に対する適応能力の挑戦でもあつて、志向の基調は俠気に他ならない。そしてそれらを今も何とか享受している。

高校時代の部活動やこれまでの山行、或いは自分の人生そのものが、糸玉の導きによる幸運以外の何ものでもないと思われ取っている。従つて、私にとつては「山行」そのものがアリアドネーの糸玉なのである。神話の英雄譚とは全く無縁であるが、ラビュリントスの迷宮から脱出するテーセウスに繋がる想いがする。

「二期一会」を信条とする半面、「煙霞淡泊」という境地にも強く惹かれるものがあり、今もつて心の揺らぎを克服出来ずにいる。

我が山岳部の歴史は九十年に及ぶと聞く。部報「わんだらあ」や部歌「山男の歌」が、およそ半世紀前の私たちの時代から現在まで継承されていると聞き及び、大変喜ばしい事と思う。長い歴史の中に一つのエポックとして残されるのは幸いであり、いま改めて感慨に浸っている。

寄稿 若月洋三と小沢俊郎・郁郎兄弟との交流

長沼友兄（一九六〇年卒）

昭和二十三年十月一日発行の川高山岳部報に、新制川高三年生に進んでいた若月洋三（一九三〇〜五三）が「我が山行」という小文を載せた。そこに彼は「山には：偽りが無い」と書き、文章全体からは自分をただ山への放浪者、ワンダラーと見做す青年期特有の憂愁と孤独感がただよってくる。

川中・川高で山岳部に属した若月は、それとともに昭和二十二年に創立された原田節二教諭が指導する郷土班にも当初から参加し（「遠い飛行機雲」、活動としてはたとえば名栗村での住民生活調査、方言採集にも行った。山岳部員としての彼は、同年（旧制中学五年生）には部山行で十月に一泊二日で両神山へ行ったことも記録に残っている。当時川中に講師として出講してきていた小沢俊郎（一九二一〜八二）との出会いがきっかけとなった。小沢俊郎も川中出身であり、彼は英語担当の講師として所沢から通勤して教壇に立っていた。また彼は、英語の教科を担当するかたわら川中生徒文芸サークルで俳句や宮沢賢治、源氏物語の会読なども指導している。

一方で英語を教え、他方では国文学を指導する小沢の多面的な知識教養は、川中卒業後の彼の歩みをみれば理解出来よう。彼は卒業とともに広島高等師範学校の文科第二部（英語科のこと）に入学し

て勉学に励むようになるが、そのかたわらこの頃から登山にも関心を寄せはじめた。中学卒業前後に尾瀬のことを知って以来数年間地図での研究などをしていた彼は、ようやく昭和十七年の夏休み川中時代の同級生井関武七と長らく「私の山への思慕の対象だった」（武蔵野女子学院山岳部会報「山」への寄稿）尾瀬登山をなしとげ、そして広島に戻ると残りの夏休みには広島山地の女王ともいわれる道後山へ学友羽田勝保（のちに長崎で原爆死）と登り、高師最後の青春を楽しんだ。同年九月に繰り上げ卒業になった小沢は、青森県田名部中学校（町立）の英語教諭となる。俊郎は生徒からモッケ（蛙のこと）先生と親しまれ、また彼はこの時に教え子の親から宮沢賢治の童話のことを聞き、興味を持って「風の又三郎」を読み始め、それ以降は国文学への関心が急速に高まっていく。

だが軍隊に教育招集となった頃から彼は結核を患いはじめ、続く現地召集では即日帰郷となって療養所として自宅での療養生活を余儀なくされるに至った。それも二十年頃には快方に向かうにはが、所沢での仲間たちと文学同人を結成し、のちの児童文学者打木村治（同じく川中出身）らを顧問に迎えて「どうきばやし」（雑木林）を刊行し始める。そんな彼は健康回復後に一度田名部中学校に復帰したがほどなくして退職し、昭和二十一年四月には東大文学部国文科に入学する（二十四年三月卒）。彼にとつての二十二年度はこの学生生活をつづけながらの一年間だけの川中の英語講師であった。すでに彼の学問的関心は国文学に向かつていて、川中文芸サークルでの指導は俊郎自身にとつても楽しく、所沢から通学する下田博之、

若月洋三や飯能からの小山誠三、赤田健一など中学五年生は自分たちの英語担任ではなかったものの、サークル時や登下校の車内での小沢先生との語らいが楽しかったことを、後年になっても記憶し書きとめている（『徑（こみち）』小沢俊郎遺文抄）。

また俊郎は、東大在学中の二十三年九月からは川高定時制所沢分校で、ここでは国語講師として勤務（二十五年三月まで）するようになった。彼の卒論テーマは国木田独歩論だったがすでに宮沢賢治研究も本格化していて、宮沢賢治研究会誌「四次元」の二十五年四月号には論文「直観と実証」を載せるに至っている。

若月は、小沢俊郎を知るようになり小沢の自宅へも行くようになる。俊郎の弟で、より登山に積極的な郁郎と急速に親しくなる。

小沢郁郎（一九二五〜八四）は川中卒業後に清水高等商船学校航海科の一期生として入学し、在学中はさまざまなつらい体験を経て敗戦を迎え、九月に繰り上げ卒業となった。敗戦という現実の中で、急速な価値観の転換を迫られるなか自宅に戻った後も一時期は自死を想う葛藤を乗り越えた彼は、この価値観をせざるを得なくなつた現実とそれまで青年たちを縛っていた軍国主義教育の本質をさぐる努力を開始する。そして卒業生の任務でもある復員船への乗船勤務の待機中には私立正明中学の英語常勤講師（二十一年十月から二十四年三月まで）にもなった。実際に操船した復員船をアメリカまで送り戻す航海を二十二年七月に終えて帰国した彼は、内面での葛藤に一つの転機を迎えたのであろうか、この頃から登山を考えるようになり、その後は中学時代からの友人新井芳雄と山行を重ねる

ようになる。若月が郁郎を知ようになったのはこの頃だった。

郁郎が正明中学の山岳部顧問だった時、二十三年五月に部員生徒を川乗山へ引率登山した際には兄俊郎、友人新井芳雄に交じって若月も同行している。また、同年夏には郁郎、新井、若月らは奥秩父を北側の中津川から登って主脈を西の瑞牆へと辿り、葎崎に下りた。翌年、郁郎はこの時の山行を紀行文「落日」（『焉支花』所収、私家版）と題して書いているが、この中には甲武信小屋建設のために上がっている人たちとの会話に「高校生の帽子をかむった歳若いWの勢いよい言葉にみな、また笑いくずれた」と、若月が元氣な姿で登場してくる。

その少し前のこと、郁郎はさらに敗戦日本をもたらした要因を見極めるため、昭和二十三年四月からは東大文学部西洋史学科に入学する。この勉学の歩みは「学べば学ぶほど、自分が歩んだ道程歴史上の位置や役割が、すこしづつ、わずかづつ、判ってくる。視野はひろがり、視点が高まる、知ることの驚きと、自己否定の苦痛を伴うよろこびとを覚える」（『回想「青春の砦」私家版』）ものだった。また二十四年三月に正明中学を退職した彼は、翌月からは川高定時制所沢分校に社会科講師として勤めるようになり、卒業まで続ける。東大での彼の卒論は「古代船舶史考」であり、二十六年三月に卒業すると四月からは飯能高校の教諭となっていた。

ところで、この時期から若月が山行を共にする友人は徐々にしはられるようになっていく。それまで同期の山岳部員だった滝沢茂樹、年上の岳友で学校先輩でもある小沢郁郎、新井芳雄などが主な同行

者だったが、それぞれの人生が青年期から社会人への歩みを踏みはじめた時、若月の山行もそれにつれて一人で行くことが増えてきた。もつとも、以前から彼自身の山への想いの中には単独行への志向があつて加藤文太郎の「単独行」にも親しんでおり、事実、冬の八ヶ岳や鳳凰へは一人だけで行っている（積雪のため中途で撤退）が、他方では登山技術の習得も必要なことだと思つていたようで、二十四年には飯能讃岳会に入会した。

この頃、すでに東大大学院に進みながら武蔵野女子学院の教諭になつていた兄俊郎は、若月に詩作「山男の歌」を贈る。もらった若月は自分の「山日記」の中にもそれを（二十六年二月の記述の次に）書き込んだ。この詩の内容が、彼にとつて自分自身の山への想いや態度を適確に表現しているものと感じたのだろうか、彼は友人たちへの手紙の中にもいくたびかその一節を書き添えたりしている。

小沢俊郎がつくつたこの「山男の歌」は七五調の四行詩であつて、形式上はリズム感に満ちたなじみ易い一般的なものであり、内容は俊郎自身とその周辺にいる弟郁郎や若月など山を愛好する若者たちを思い浮かべながらの創作であつたらう。五連で構成されるこの詩は当初からメロデーに乗せて歌うことを前提に作られたものだろうか。各連の頭には一〜五と番数を示す数字がつけられていて、実際に、この詩「山男の歌」を歌詞にした曲が俊郎の詩作後ほどなく成立したようだ。このように考えることが出来るのは、まもなく命を落とすことになる若月が愛唱したことを、郁郎が遺文集のなかで追憶しているからである。

広島高師の山岳部歌「山男」が昭和十五年に作成された（現在では、これを元歌にした「坊がつる讃歌」が有名）。これは俊郎の在学中のことであり、俊郎の子息によれば俊郎自身もこの山岳部歌が成立するその現場に居合わせた（あるいは一部関わつたとも）と父が語つていたことや幼い頃によくこの山岳部歌を歌つていたことを記憶する。そのため現在川高山岳部歌になつている「山男の歌」と広島高師山岳部歌「山男」とを比較してみると曲はへ長調と二短調との違いがあつて曲想は異なつているが、歌詞はともに七五調四行詩であつて、歌詞の中に「山男」の字句を多用するなどの共通点を見出すことも可能だ。

若月は昭和二十六年の秋以降には冬富士を目指すようになった。この山行は初め同行者と共に行くことを考えていたようだが、結局は単独行を決心するに至つた。とはいつても本格的な山道具を若月自身はもつていなかったため、郁郎からはピッケルを、川高山岳部出身の後輩糟谷熊からは登山靴とアイゼン（山内製）を、山岳部同期の滝沢からはワカンを、また打木村治の子息で東北大学部英文科在学中の打木城太郎（川中卒で、大学の教養課程は北大理学部で山岳部員でもあつた）からもミトンを借りて、出発する。

昭和二十七年二月に若月洋三は単独で富士に行き、そして死んだ。彼の冬山経験はそれまで二回だけであり、しかも単独行で積雪ラッセルを強いられ中途で引き返しただけの体験であつて、ピッケルの扱いやアイゼン装着・歩行に習熟していたとは言えず、強風が吹く中での氷雪登行の経験は一度もなかった。それでは、なぜ単独での



須走口8合目の供養塔「若月洋三ここに眠る」

冬富士登山だったのか。それについては次のように考えられよう。彼が発する一週間ほど前に書いたメモは「どうしても行かねばならぬ」と悲壮ともいえる決意に満ちたものだったが、家業を彼自身が一層担っていかねばならぬという当時の彼が置かれた立場のもと、これまでのように家族に甘えていられた青年期の立場から自覚ある社会人の立場へと転換するための気持ちの切り替えにはどうしても冬富士を試みておくことを考えたための、止むにやまれぬ山行だったのだ、と。それにしても技術不足の感は免れない。

下山予定日をすぎても姿を見せぬ若月を案じた岳友たちはそれぞれ

れ現地に向かった。困難な捜索の中、七合目あたりで若月の櫛と血のついた帽子を発見した結果、彼の遭難死を納得せざるを得ず、雪の融けた季節を待っての捜索再開を期して下山した。その後も若月の死を悼む友人たちの想いは深くなり、五月には『木魂―若月洋三遺文集』が編集された。その中には若月自身が書いた小文、詩、俳句、書簡とともに、佐藤小屋に置いてあった残留品の中にあつた彼の「山日記」からその山歴を郁郎が整理したものも、載せられた。

初夏を迎え捜索再開出発日の前日、郁郎のもとに折から入山中の栗橋山岳会員が発見したとの報が、現地から入ってきた。直ちに小沢郁郎、滝沢茂樹らは富士へ向かい、飯能讃岳会員も参加してきて、八合目の吉田口須走の雪溪中央にある彼の遺体を確認した。その場で検視をおえてから六合目付近の樹林帯まで搬送し、翌日にそこで茶毘にふして遺骨を拾った。遺体発見の場所にはあらかじめ「単独行に殞る」、「若月洋三、一九五二年二月十日 享年二十二」と書いた木標（墓標）を建て、郁郎はさらに「氷雪は君より生命を奪えど闘魂と友情を奪い得ざりき」と書き加えた。

若月の遭難については二月の時点では新聞に出なかったが、六月の段階では「埼玉新聞」六月四・五日版に顔写真付きの記事が載った。郁郎はこの遭難の発生と遺体収容との顛末を、秩父山人の筆名を用いて『山と溪谷』七月号に「富士に立つ煙 冬富士遭難に於ける遺体処理について」と題して、報告している。また、若月への追悼のために富士登山をした人たちもいて、その中には川高教諭河盛鋭治（数学担当）もいた。

郁郎自身の山行はこのちも続くが、三年ほどして彼も結核に罹り、転勤して勤務していた都立高校を休職して療養生活に入った。それまでの彼の登山はより本格的なレベルを目指すものだったが、山域としては奥秩父と南アルプスを好み、人が多く登る北アルプスへは行きたくなかったと、岳友新井は回想する。郁郎自身も、晩年になって「二十才代は山にこった。忘れかけていた死神に数度ゆきちがった。とくに、昭和二十七年からの三年間、友人知人がつぎつぎと山で死んだ。…そのくせ、死んでもいいからヒマラヤに登りたいと念願していた」(「死神再会」『愛と自由』一卷八号)と当時を振り返る。結核が回復した彼は、以前から書き上げてあった清水高等商船学校での体験記を出版した縁で編集者たちと溪流釣りを始めるようになり、次第にのめり込んで山深い残雪期の沢へも雪を踏んで入るようになった。彼は生涯の中で一度ヒマラヤトレッキングに行ったが、没後三年して高校教員仲間がアンナプルナーI峰を見わたせるノグダラの丘に遺骨の一部を埋骨し、またその翌年には郁郎の弟小沢爽がダウラギリ峰を見とおせる丘に別の遺骨を埋めに行った(「還らざる航跡を 郁郎余間2」私家版)。

よりゆつたりとした山を好む小沢俊郎は、都立高校教員のかたわら宮沢賢治研究者となり後に京都教育大教授になっていくが、彼の「低俳趣味」は生涯続いた。東京時代には、登った山の奥多摩「地図には網目のように踏み跡が赤線で書き入れて」(小沢和子「大文字山へ」『愛と自由』二一七) あったし、晩年の京都時代には自宅の東にある大文字山へ毎年一〇〇回以上も出かけていた。また、研

究し続けた宮沢賢治の山に対する考え方を分析した論文「録した山々の名―賢治地理『山岳』―」では、賢治の山行きは放浪に近いもので田部重治の低山派を想像させると書いているが、そこからは俊郎自身のやまへの態度をもグブらせて読み解くことも出来よう。若月の遭難死によって、彼らが相互にいだいていた敬愛と友情は現実には杜絶せざるを得なかったが、その過程で生まれた山への想いを綴る「山男の歌」は、なお生命力をもって歌い継がれるようになる。

寄稿 消えた武甲山の岩壁・思い出の人

長沼友兄(一九六〇年卒)

昭和二十九年の春、私は中学生となった。この年は思い出してみると、私が山に目覚めた年であり、前年にハント隊長の下でイギリス隊が初登頂したときの記録映画「エヴェレスト征服」を所沢から川越の映画館まで行って観た年であった。また初めて山らしい山に登った年でもある。このときは谷川岳を西黒尾根から登り、国境稜線を経て蓬峠から土樽まで下った。当時の上越線は土合駅がまだ地上駅だったことが今でも懐かしく、その後幾度となく通った谷川岳登山では、上越線の線路が地中深くなって、ホームから長い階段を昇ってやっと地上に出る形に変わってしまった。

通っていた中学校は校舎が東西に長く伸びた一棟だけの木造二階

建てであり、高台に建っていた。冬は秩父風ちちぶかぜが校舎に吹き当たり二階北側の教室はとても寒かった。あの頃学校には教壇脇にブリキ板を被せただけの炭火鉢があっただけだった。

でもこの二階北側の教室から眺める景色は絶品で、授業中に目を遠くに飛ばすと、遙か彼方に県境の山々が青く光り、特に二月末頃には雪を被った山の連なりを追う楽しみがあった。左の方から丹沢とその向こうに富士山が見え、右に行けば背もたれのある椅子のような御岳山。さらに奥武蔵の山が並んで、その最後にやや独立して際立っている武甲山まで一列に連なっていた。さらに右奥に白く光る長野の山が時々見えた。授業中つまらなくなると、窓の外に目を向けては、隣の友人に「山は綺麗だね」「いつか登りたいね」とささやき合っていた。

そのうちに高校受験の時期になった。さすがに担任教師には言えなかったが、家では「山岳部のある高校に進むんだ」

と言っては、呆れられていた。当時のノートの最終ページには、

〈〇〇高校山岳部 一年 長沼〉

と書いては、一人悦に入っていたものだった。今でも私にとつての川高とは、山岳部があるために入っただけの高校だったという気持ちだが、ちよっぴりある。

合格した後には、山岳部へ入部するために先輩に迷惑をかけてはいけないと思つて、春休みに、名栗川の山から武甲山まで登り、有馬谷から日向沢ノ頭へ抜けて川苔山までを歩いたりした。主に北側斜面の樹林帯の中でのラッセル訓練を目的とした山行だった。

入学してからは、山岳部一年先輩の神崎俊宏さんが声を掛けてくれた。しかも同じ所沢から通う中学の先輩だったのだが、そのときまで一面識もなかった。西武線の乗り方を教わったのも先輩からだった。その頃の西武線はわずかに二両編成で、前の車両には川高生と工業の生徒。二両目に川越女子校の生徒が乗るといふ不文律があった。ところが私は、所沢駅の改札口に近いという理由で、知らないまま二両目に乗って通学していた。一年の私がこんなことを続けていけば、いずれリンチの対象にもなり兼ねない行動だと、注意を受けたものだった。

先輩は所沢にある山岳会のメンバーとも交流があつて、さっそく私は引き合わされた。この会もようやく岩登りを始めようという機運のときでもあつたようで、ロッククライミング用具もほとんどない中で、武甲山の岩登りを狙っていた。

懐かしい山道具

当時の山道具はどんなものだったか。五十年も前の道具である、随分と変わってきたものだ。

登山靴は米軍放出の軍靴を手直しして履いている者がいた。折り返し皮のあるナーゲル靴が多くて、ビブラム底の靴はほとんどなかった。革底の登山靴には、クリンカー、ムガー、トリコニーなど様々な形をした鉄鋌てつてい（ナーゲル）が打ち付けてあつた。今でもその歩く音を思い出すのだが、週末の上野駅や新宿駅のコンコースはこの鉄鋌が打ち鳴らす音や、場合によっては火花まで飛び散つて、それ

は騒々しかった。しばらくしてゴム底（ピブラム社製、ピレリ社製など）靴が普及してきて、一般にピムラム靴と呼ばれるようになった。私もその後岩登りをするようになったが、ゴム底では岩壁のスタンスから滑ってしまうのではないかと心配して、祭礼の獅子の金歯のように、トリコニー6の鉄鋌をゴム底の縁全体に打ちつけていたものだった。その後冬山へ行くようになってからは、鉄鋌に雪がダンゴのように付着することが分かって、辞めるようにした。

登攀用具も大きく変わった。昭和三十二年に知り合った仲間とは岩登りをするようになったが、ロップと呼ばれていた貨物自動車の荷物麻縄をザイルの代わりにしたと、年長者からはよく聞かされた。当時は麻ザイルの全盛期で、しかも高価。巻いて束ねるときも纏れ（キンク）しないようにし、靴でザイルを踏もうものなら、きつく叱られた。さらに高価なナイロンザイルも出始めていたが、編みザイルはまだ出現していなかった。

カラビナ、ハーケン、ハンマーもすべて鉄製で、三ツ道具と言われていた。ハーケンはまだKS式のものがなく、あご無しで、残置ハーケンは首が曲がったままで、慎重に使わざるを得なかった。アブミは木製のものからジュラルミン製へと、転換する頃だった。今ではナッツ、ファイ、エイト環など多種多様になって、これらはギアと言われている。当時はもちろんエイト環はなかった。当然懸垂下降は肩がらみだった。クレッターシューズは話には聞いていたが用いたことはなく、むしろ岩登りでも新人にはワラジを履かせていた時代だった。ヘルメットももちろんない。最初はハンチング帽

を被っていたが、それでも所沢の山岳会は早めにヘルメットを被るようになったと記憶している。ある年の夏、穂高へ岩登り合宿で入山するとき、先輩が松本の駅前で焼き鳥屋へ連れて行ってかれて、「これはコップ岩壁初登攀を競っていたときの帽子だけど、お前にあげるよ」とハンチングをもらったことがあった。

寝袋も当初は米軍放出のものであって、先輩は、

「このシュラフは朝鮮戦争で死んだ兵隊の遺体をドライアイスで輸送したときのものだ」と、新人を脅かした。放出寝袋は一晚眠ると中は抜け出た羽毛が舞い飛んで、くしゃみが止まらなくなった。

リュックは、昭和四十年代になるまでは、横長でキスリング二尺二寸、二尺四寸などと、口布の長さで大きさが表現された。学生たちの貧乏旅行も同じキスリングで、狭い汽車の中を横歩きしてカニ族と呼ばれた。このザックはそのうちに縦長になり、大きさもリットル容量で表すようになってしまった。尻皮も同じように見かけなくなった。雪山へ行く登山者が腰につけて、いつでも雪の上に見かけられた。当時は自由に捕獲できたカモシカの尻皮もあって、神崎さんが使っているのは羨ましかった。

武甲山岩壁の消滅

私たちの初期の岩登りのゲレンデは、飯能の天覧山、馬頭刈尾根のつづら岩、越沢バットレス、三ツ峠などだったが、本格的なゲレンデとして武甲山へも行くようになった。当時の西武線は吾野が終点で、そこから秩父行きのバスに乗って横瀬の根古屋で降りて、裏

参道から屏風岩下の広場に着き、周辺の岩登りルートを何度も登った。しかし今では、これらの岩場はすべて削り取られて、跡形もない。当時の岩壁そのものは削り取られた空中のどこかに位置するはずで、あの懐かしい岩壁は単に思い出の中に存在するだけとなってしまった。

それでも過去の写真集の中には、はっきりとその姿は留められている。「ふるさと」の思い出 秩父（清水武甲編 昭和五十八年刊 国書刊行会）には北東方向から撮った昭和三十年頃の武甲山の全景に屏風岩もはっきりと映っている。「写真集 武甲山」（秩父山岳連盟編 昭和五十一年刊 木耳社）でも、屏風岩や雨乞岩の写真がある。見るたびに思い出は現実味を帯びてくる。痙攣けいれんしそうになる足をなだめながら乗せたスタンスや、しっかり指を曲げて掴んだホルドの感覚も蘇ってきそうだ。屏風岩には三本のルートがあった。西ノドウエはポピュラーで何度も攀じているが、神崎さんとも、あるいは吉原さんや繁田さんとも一緒に記憶している。

その頃から埋め込みボルトとアプミを用いた人工登攀も始まっていた。私たちもそれに刺激され、中ノドウエの直登ルートの開拓に取り組むことになった。従来このルートは、中央のオーバーハンクを避けて左側のルンゼ状に取り付くものであった。イタリアで言われていた直登ルートの選択（ディレットティシマ論）を聞き込んで、その熱に感染したのかもしれない。

実際の登攀は、まず取付に埋め込みボルトを打ち込んで、それにアプミを掛けて立ち上がり、さらにその上に次のボルトを埋め込む

という、岩をタガネで掘りあけていくという作業の繰り返しになった。数人で交替しながら、五十センチ間隔でジリジリと上部へルートを伸ばしていく。最上部のハンク帯へ到達するまでに何日も掛かり、そこから垂壁となる辺りでまた私の番となった。アプミの掛け替えで最上段まで登り、そこからやっと姿勢を保つバランスクライミングで石灰岩をせり上がる。中穴の空いたような石灰岩特有の取っ手状のホールドだった。こうしてようやく五十センチほど続いた岩壁を通過した。こうして私たちは中ノドウエ中央正面壁ルートの初登攀に成功した。オーバーハンクの程度は、上部からザイルを垂らすとすぐに分かる。空中懸垂となった後の着地点は、五層ほど取付岩壁から離れていた。その後しばらくは、エコールートと呼ばれていた。

雨乞岩といわれる岩壁は、下部が切り立っていて高度感の出る岩場だった。バランスクライミングが要求されるフリールートで、若い仲間たちが狙っていたルートだった。ある日、神崎さんと二人でザイルを組んだ。ピッチごとにつるべ式で登ったが、確保地点が狭くて、やむを得ず相手の足を踏んで体を入れ替えたところもあって、取付から左側へのトラバースと直登を繰り返して、雨乞岩上の社のそばが、登攀終了地点だった。そして駆け下って最終バスで所沢に戻ったが、出迎えてくれた山仲間と飲み屋に入ってから、各ピッチの細かいルートを身振り手振りで説明しながら、延々と興奮は収まらなかった。こうした思い出の武甲の岩場はすべて消えてしまった。そして幾度となくザイルパートナーとなった神崎さんもうこの世を去ってしまった。

一九五九年（昭和三十四年）

山行記録 春山合宿 奥秩父・金峰山・雲取山

山行

冬山合宿 安達太良山 一月二日～六日

春山合宿 ハケ岳・赤岳

奥秩父・金峰山・雲取山 三月

夏山合宿 燕岳・槍ヶ岳・穂高岳 七月二十二日～二十九日

〔部員〕 斉藤雄二 長島威 大石一博 小久保英夫 星野光伸 福

島秀世

〔顧問〕 石川正明 内田一正 岡田潔

冬山合宿は安達太良山で行われたが、そこは顧問石川正明先生の故郷だった。山岳部にとって初めての冬山合宿で、登頂と山スキーなどを行った。

また三月の春山合宿では、二年（新三年生）がハケ岳に行き、農場口から赤岳鉱泉を経て赤岳石室に四日間滞在して縦走を行った。また一年（新二年生）は奥秩父行き、二パーティーに分かれて合宿が組まれた。

また川高の歴史の中で今でも語り継がれるのは、この年の夏に、野球部が過去唯一、夏の甲子園に出場したことだ。春の選抜大会には旧制中学の時代に、やはり一回だけ出場したことがある。

三月の奥秩父を、一年生が主体で計画したときに、

「ちよつと無理じゃないかなあ」

と幾度か言われた。その度に、

「奥秩父だ。いくら冬だといっても三月、夏と大差ないんじゃないだろうか」

といった安易な気分が発端まで僕たちを支配したことは否めない。しかしやってみてこの縦走は、雪山の厳しき、苦しき、辛き、そしてあの美しき、楽しさを嫌というほど僕たちに教えてくれた最初の山行であった。

そもそもこの山行はついていた。増富温泉から入山した日にかのりの積雪があり、金峰山から国師岳・甲武信岳にかけて二日を超えるところと思われるところが幾度かあったのに、ラッセルを強要されたのは金峰山の下りと、大弛小屋から国師岳への登りだけであった。というのは降雪直後であっても、入山者がいたということと、僕たちと前後して無言の励ましとなった熊高山岳部によってラッセルされていたからである。

日を追って振り返ってみると、思い出に残るものに最初の雪の降る山道の苦労がある。一週間分以上の食料と団体装備に膨れ上がったザックが肩に食い込み、

「もう、こんなところに来るもんか」

と思つたものだった。ところが翌日は快晴に恵まれて、金峰山頂上の三六〇度の展望、八ヶ岳から南北両アルプスと奥秩父の主峰群、及び富士の秀麗な姿を目の前にしてすべて吹き飛んだ。

三日目の三月二十八日には、好天の中での大弛小屋から国師岳頂上までの膝上ラッセル。それに続く甲武信岳までの馬鹿尾根の苦しき。しかし間もなく楽しい思い出に変わってきた。しかも甲武信小屋での飯は、生涯忘れられないほどのうまい飯だった。

縦走は、心臓部の甲武信岳まで来てしまうと、後は比較的楽であった。二十九日はガスに巻かれて気味が悪かったが、雁坂峠の美しいカヤトの草原で気持ちも和らぎ、三十日は、標高も二千^弱を前後するだけで、残雪もわずかで、曇天の中をぼうっとした墨絵の富士に見とれて歩いた。そして三十一日の夕方からは雲取付近に三十^弱の降雪をみて、四月のバラ色の朝を山頂の避難小屋で迎えた。山頂に立つ私たちの目の前では、薄いヴェールが剥がされるようにガスが消え、奥多摩水源の山系が現れた。

奥秩父主脈は、山梨県や埼玉県側は、道標も少なく粗末なものが多かったが、東京都側に来ると赤ペンキ縁取りの独特な立派な道標がユーモラスだった。反省としては、パーティーの意見が分かれることがあったのは、僕らの未熟な経験と自我が強^く譲歩が無かったことも原因だろう。パーティーの力量がほとんど同じ同級生だけだったことも理由であろう。しかもリーダーは互選で適当に決めていた。それでもこの学年はチームワークが取れていると自負している。

(二年 長島威)「わんだらあ」二号

山行記録 夏山合宿 北ア燕岳から槍ヶ岳(抄)

一九五九年七月二十二日～二十九日

二年は今回の計画をするに当たって、一年部員の皆無といつていいほどの山の経験を考え、前半を銀座コースの縦走に費やすことにした。我々の持っていた銀座コースの知識は、北アルプスのハイキングコースということだけであつたが、後半の涸沢定着合宿をより有意義なものにするために、この踏破は必要であると考えたからである。パーティーは三年大橋朋伊、二年斉藤雄二、星野光伸、長島威、大石一博、一年沢田敏雄、都築昭夫、富沢護、高野七郎、高野誠、染谷明、OB 新井、井上、顧問内田、岡田。総勢十五名。

第一日 曇り 新宿～燕山荘

列車が新宿駅を出発したときは真夜中ではあつたが、別に寝るということも無く、皆で話をしていった。列車が長野県に入った頃夜が白み、八ヶ岳や南アルプスが見えてきた。左に諏訪湖の小波を見たりしている中に松本駅に着いた。そして大糸南線に乗り、有明で下車。バスに乗ってからは山はぐんぐんと近づき、花崗岩の岩肌は手に取るようにはつきりしてきた。終点の中房温泉で下車した。

さてここからいよいよ肝心の登山が始まる。登りはかなり急勾配であり、リュックも重く、汗がダラダラ流れる。暑い、とにかく暑い。途中から霧が出て、少し寒くなってきた。休んだときに後を振



1959年7月 夏山合宿 燕岳～槍ヶ岳～涸沢～穂高岳 燕岳山頂にて

り返ってみたが、自分がどこを登ってきたのか分からない。霧は恐ろしいものだなあとと思う。霧の合間から雪渓が覗くが、清々しく感じられる。合戦小屋に着く頃には、ペースは歩き五分に休み五分になっていった。

合戦小屋の少し上の大木林から這松帯へ移る所で少し晴れた。餓鬼岳、唐沢岳がはっきりと見えた。さらに登って燕山荘まで行き、近くにテントを張った。テントの脇には雪渓があり、雪を腹いっぱい食べた。夜はカレーライスを食べて寝た。

第二日 曇りのち晴れ 燕山荘～西岳小屋

朝だ。天候は曇り。霧が出ている。食事を済ませて燕岳に向かっ

た。道は花崗岩が点在する中にあり、這松があちこちに生えている。視界は百メートルほど。歩くとサラサラと砂が崩れ落ちる。高さが二十メートルあるかと思われような巨大な花崗岩が各所に散在する。頂上へ到着したときは視界がゼロであった。途中雪渓が各所に見られたが、表面は風のためであろうか、魚のうろこのような形でこぼこぼしていた。

山頂を後にして燕山荘に引き返し、テントを畳んで出発する。まず大天井岳に向かっての行程であるが、次第に右側が晴れてきた。左側は霧が風に運ばれてどんどん吹き上がってくる。太陽光線は雲に覆われてぼんやりしているだけ。ただ気温だけが高くて、雪渓に着くたびに雪をかじったり、水筒に入れたりする。

大天井岳の頂上では雲が槍ヶ岳の辺りを流れていたが、小槍も見えた。頂上から下ったところで、フランスパンにミルクをつけて食べた。ここでの味は格別だ。その後奇岩の林立する尾根を歩いて、西岳小屋へと向かう。途中雷も鳴り出した。やがてお花畑の続く道となり、西岳小屋の先にテントを張った。明日はあの雲に覆われた槍ヶ岳に登るのだ。

(二年 高野七郎)

第三日 雨のち曇り 西岳小屋～槍ヶ岳～一ノ俣

縦走最後の日くらい晴れても良さそうなのに、雲が垂れ込める。出発して間もなく急な下り。そこが水俣乗越だった。そこから登り返しになり、しばらくいくと上に大槍ヒュッテが現れた。しかし激しい雨になった。それでも前進すると一時間ほどで肩に着く。元氣

な者だけが槍の穂先へ登っていったが、濡れた岩に悩まされ山頂に到着したものの、視界は五層ほどしなく何も見えなかった。今日は山の機嫌が悪いのだろうか。他に登山客はいない。パーティーが揃うと、再びヒュッテ目指して慎重に下りが始まる。昼飯を食べたが実に不味い。元氣を取り戻して槍沢を下ったが、寒さと緊張感で皆青ざめていた。それでも無事に一ノ俣に着いたときには嬉しかった。テントを張り終えた頃晴れてきた。

第四日 快晴 一ノ俣→涸沢

天気はいいのだが、装備衣服すべてが濡れていて、停滞気分が十時まで濡れたものを乾かしていた。一ノ俣谷から流れ出た水も、今日は清流に変わっていた。すべての衣服をぬいで水泳パンツ一枚の者もいたが、衣類が乾き出してから出発する。

横尾にはすぐに着いた。見上げる前穂、明神が美しく輝いている。この丸木橋も昨年よりよくなった。その橋を渡ってテント村を通過すると、素晴らしい岩壁が見えてきた。屏風岩である。この岩を半周すると横尾谷の本谷雪渓を右にして涸沢に方向が定まる。黒々とした岩が見え始め、穂高連峰のその峰一つ一つの名前を言えるようになるころ、涸沢のテント村に到着した。

実に素晴らしい場所である。ここに来ただけで合宿の喜びを感じる。テントで飯を食い、夕闇に浮かび上がる穂高を眺め、母に抱かれる乳飲み子のように、山の幸せに感謝して七時頃に寝た。

(二年 斉藤雄二)「わんだらあ」二号

寄稿 増水した奥多摩の山

石井(旧姓福島)秀世(一九六一年卒)

「南大東島、南南東の風、風力四、一〇—一〇m b、ピーピー……、ガーガー……」汚くて暗い階段下の山岳部室である。新入部員が先輩に指導され、短波放送を聞きながら、天気図を作成し天気予想する練習である。念願の川越高校に入学。昼食時には机の上に立たされて、応援団による校歌練習、各部の勧誘が始まる。何とかしてはと、中学の先輩である井上さんが在籍している山岳部室へ逃げ込んだ。

そんな入部であったため、新入部員歓迎の両神山登山くらいしか思い出せないような不熱心な部員であった。証拠に「わんだらあ」を見ても、一つも山行記の投稿がない。当時は登山の遭難騒ぎが社会問題でもあった。そのため私の親父が入部に反対し、積極的に山行には行けなかった。

記憶に残る部活は、先の気象通報の聞き取り。喜多院東照宮で先輩を背負って階段上下、濡縁での腹筋運動、蚊に刺されながらのテントの張り方、ザイルの結び方、飯盒炊飯実習などである。

当時の靴は、アキレス製のキャラバンシューズで四千円ほどであった。素材の重い旧式シート製キスリング、帆布テント、フライシート。寝袋は「ニッピン」に行き米軍放出品を購入。燃料は現地調

達したが、間もなく米軍放出品の固形燃料が回ってきた。現在の装備に比べたら数倍重く水を含んだら大変だった。

学生時代の山行は、低い山に数回いったきりだった。その少ない山行でも遭難寸前の体験をした。奥多摩に友人五人で二泊三日の山行に出かけたとき。一日目は堰堤の上流にできた広い河原にテントを張り、食事後には早速ラジオ放送を聴きながら天気図を作成し就寝した。ところが夜半寝がえりを打つと、手が濡れたのに気付いた。グラウンドシート一面に浸水しているではないか。テントとグラウンドシートを引きずるようにして横の堤防に緊急避難した。

翌朝早々に河原に行くと、一面湖となっていた。天気予報では雨の予報はなかったのだが。帰りの山道は膝まで水につかって歩いた。あの夜、あのまま寝入ってしまったらと思うと、今でもゾッとする。

我々としては充分計画を立てて慎重に実施したつもりであったが、山とは標高の高低ではなく常に自然が相手であることを認識して、早目的確な判断が必要であることを知らされた。

社会人になってハイキング程度しか行っていないが、ある時期の長島君に「山岳部OB会で山行している」と誘われて参加するようになった。メタボリックな体型であったが、どの程度の体力か試しに参加した。初めての参加は日光白根山だった。

第二回日光白根山（九月）金精峠駐車場→金精峠→金精山→五色沼→御陀ヶ池→菅沼駐車場（約六時間）。金精峠トンネル入り口駐車場を下車して、登山開始山道はいきなり四十五分間の直登。数週

間前の台風で山道は荒れ放題だったが、頂上近くの五色沼越しの奥白根山、男体山に癒やされた。かなりきつかったが何とか遅れずに山行を終了し、体力に自信が付いた。その後OB会に積極的、参加するようになった。山行の記憶に残っているのは、

第五回 両神山（五月）日向大谷登山口→清滝小屋→鏡平→両神山（約六時間）。山岳部以来の両神山で、きついばかりの記憶しかなかったが、頂上付近の尾根つたいの八汐つづじが見事だった。またのぞき岩の見晴らし台がスリル満点だった。

第十三回 至仏山（十月）鳩待峠→オヤマ沢田代→至仏山→山ノ鼻小屋→鳩待峠（約七時間）。下山途中からの尾瀬沼展望は、紅葉が始まったばかりであったが素晴らしかった。

第十五回 蓼科山（十月）大河原峠→將軍平→蓼科山（約七時間）。山頂からの南、北アルプスや八ヶ岳連峰。三百六十度のパノラマ。主人が上福岡出身の山頂小屋で、大スピーカーのクラシック音楽が聴けた。下山後蓼科温泉でリラククスした。

第十九回 谷川岳（十月）谷川岳ロープウェイ→天神平→谷川岳（約五時間）。青学山荘に泊まってOB会初の一泊山行。谷川山頂付近は銀座並みの人ごみだった。下山して共同浴場で汗を流し、夜は長島威シエフによる料理に至福のときを過ごした。

第二十九回 乾徳山（十月）大平荘→道満尾根→扇平→乾徳山（約六時間）。鶴ヶ島ICから開通したばかりの圏央道利用しての山行。道満尾根から山頂付近の紅葉と岩壁が素晴らしかった。

等々、昨年までに十五、六回参加しているが、どの山も素晴らし

く、下山後の温泉、ビールの美味しいこと。参加者全員の和気あいあいとしたこの会の楽しさ、幹事の会員年齢に合わせた気遣いの企画には感謝の気持ちでいっぱいである。また初期の頃、幹事として活躍していただいた今は亡き澤田君に感謝しています。

山岳部に在籍したことは、定年した今になって、OB会を通じた先輩や友人が増えたことで、再度山の素晴らしさを知ることになった。今後ともOB会とスポーツクラブのハイキング会に参加して、楽低山（楽しく楽に登れる山）を体力維持のため登っていきなりたいと思っています。最後となりますが同級生であった大石一博君のご冥福をお祈りいたします。

寄稿 勤務先で訪れた世界の山々

斉藤 雄二（一九六一年卒）

私の山登りは高校一年に始まり、大学を出て社会人となって終わりました。この間約十年、最初の山登りは川越高校山岳部の五月連休の鳳凰三山で、まだ雪の残る中、ズックで登って足が冷たかったこと憶えています。その後十年、穂高や谷川の岩登りで進退窮まり、落ちそうになったこと、後立山の稜線直下で雪崩に遭い、テントごと埋まってしまったこと等ありましたが、親に心配かけましたが、泣かすことは無く山登りを終えました。社会人ともなり、結婚もすれば危険な山登りは敬遠されることになり、山に登るのではなく、

山を見るのを趣味とするようになりました。会社はホンダで、三十五年間、主に海外事業を担当しました。おかげで、海外の山を見る機会に恵まれました。

一 若いころオセアニアを担当し、最初の海外出張はニュージーランドでした。南島のサウス・アルプスを、この機会にと思って見に行きました。セスナでマウント・クック直下の氷河まで行く観光サービスがあります。氷河を歩くのは初めて。それは周りの雄大な山々に抱かれている感じでした。最近の山岳娯楽映画に「パーティカルリミット」というのがありました。そのヒマラヤK2の舞台は、サウス・アルプスで撮影が行われています。

二 最初に駐在したのがオランダでした。夏休みに家族でアルプスに行きました。車で一日走ればスイスです。アルプスの主要な町は、アイガーのあるグリンデルワルト、マッターホルンのあるツェルマット、モンブランのあるシャモニーです。それぞれの地域には甲乙つけがたい迫力があります。その中で私が一番感動したのはクライネ・シャイデックから少し歩いてアイガー北壁を基部から見た時です。一ノ倉沢から見た衝立よりもずっと近くにあり、凄惨な北壁に身震いしました。アルプスは、交通の便（登山電車、ロープウェイなど）が良く、頂上近くまで簡単に行けるのが強みですが、費用が高くつくのが弱点です。

三 オランダ駐在時代、二輪、四輪の販売店さんの招待旅行でアフリカのサファリに行きました。サバンナに生息しているライオンやゾウやキリンの背後に雪を頂いたキリマンジャロ。雄大にして穏

やかなアフリカの自然に心が洗われました。この時は仕事で家族は連れておらず、いつかこの景観を彼らに見せてやりたいと思いましたが、今のところ実現しておりませんが。山崎豊子の小説『沈まぬ太陽』では、ナイロビは主人公が左遷される所ですが、達観すれば、サハリの自然と生きるのも豊かな生き方のように思えます。

四 次の駐在はインドでした。二輪の合弁会社を作り、私は初代責任者でしたが、主に営業を担当しましたのでインド全土を回りました。ネパールもテリトリーでしたので、販売店設定などでよくカトマンズまで行きました。その小高い丘から見るとヒマラヤはまさに絶景。エベレストまで百^キ以上あるのですが、頂上を確認できません。近くにはマナスル、ヒマールチュリ、アンナプルナが迫ってきます。インド時代から単身でしたが、この景観を家族に見せたくカトマンズまで連れてきたことがあります。残念ながらこの時は、山は微笑んでくれませんでした。カトマンズはぜひ、もう一度行きたい所で、できればエベレストのベースキャンプまでと思いますが、体力が心配です。なお、カトマンズの販売店は私が設置しましたが、今もお店に私の写真が飾ってあるとのこと。

五 同じくインド駐在時代によくカシミールまで行きました。首都シユリナガルからしばらく奥地に入ると高度三〇〇〇^キの地に小奇麗な観光地があります。ここの小高い丘から魔の山ナンガ・パルバットを見ることができました。カシミールヒマラヤの青く光る秀峰で裾野は広く、山は天に向かってそびえ立っています。ヘルマン・ブルが単独で初登頂しましたが、それまでに多くの登山家が遭難

しているの、「魔の山」と言われているのです。今はパキスタンとの国境紛争でカシミールには入れません。

六 次に駐在したのはイギリスでした。オランダ時代にアルプスには数度行っていたので、イギリス時代はスコットランド、ウエールズの山岳地帯を見て回りました。一人で車で行ったのですが、友人からは何が楽しいのかとよく聞かれました。スコットランドの山々はせいぜい一〇〇〇^キぐらいですが、氷河に削られ急峻で、海からそそり立っているため高度差があり、天気が悪くいつもガスに包まれているので、荒涼としていて迫力があります。ここを登るには本格的な技術が必要でしょう。ウエールズの山は同じ一〇〇〇^キぐらいの岩山ですが、天気も良く観光地化しており、初心者でも楽しいトレッキングができそうです。

七 アメリカでは、続けて単身でしたので、休みを利用しては山を見に行きました。最高峰はアラスカのマッキンレー（デナリ）で、野生動物の宝庫であるデナリ国立公園から見ると、でかくて真つ白でした。近くて高度差があるので頭を上げて頂上を見ることになりました。ヒマラヤの迫力と、いい勝負です。問題は、マッキンレーはいつも天気が悪くて、全貌を見ることはなかなかできないことです。息子にこの迫力を体験させたく、日本帰国前にデナリに連れていったのですが、マッキンレーは顔を見せてくれませんでした。

このほかに、氷河が海に流れ出して崩れてゆく景観を見に行きました。天気関係なしに見られるポートツァーで、当たり外れはありません。アラスカは観光シーズンが六月（春）七月（夏）八月（秋）

と短く(あとはすべて冬)、レンタカー、ホテル代などがシーズン中は異常に高いので、個人で行く場合は事前のチェックが必要です。

八 カナディアン・ロッキーズは手ごろであり、数度見に行きました。一度は家内と、一度は息子と、それ以外は一人で行きました。最高峰はピラミッド型のロブソンで、四〇〇〇呎。麓から全貌を見ることが出来ます。ロッキーは、ヨーロッパアルプスやサウス・アルプスと同高度ですが、北に位置しているので天候が悪く、難易度はこちらの方が高そうです。氷河が至るところにあり、アクセスが容易なことが特徴です。特筆すべきは、レイク・ルイーズと氷河の組み合わせが大変美しいことです。この地もシーズンの制約があり、六月から九月の期間しか入れない場所が沢山あります。

九 アメリカにもロッキーはあり、一度行ったことがあります。デンバーから車で数時間走るとすぐ三〇〇〇呎くらいの高度まで行くことができますが、山としては氷河が無く、あまり面白くありません。アメリカの西海岸にはシエラ・ネバダ山脈があり、このヨセミテという山域には今や氷河はありませんが、氷河で削られた岩峰があり、迫力いっぱいです。一〇〇〇呎の一枚岩のエル・キャピタンや半分氷河で削られたハーフ・ドームがあります。前者の基部から垂直な壁を見上げてみると首が痛くなつてきます。ここにはよくクライマーが張りついています。天気はまず問題ないので爽快な岩登りができるのでしょうが、登るには私は年を取り過ぎました。

十 同じアメリカでも、山といえるのか疑問もありますが、コロラド川沿いに大変魅力のある国立公園があります。最もポピュラー

なのがグランド・キャニオンでアーチーズやモニュメントバレーもあります。最初一人で行って、次に家内と、最後に息子と行きました。それらはトレッキングもできますが、意外な岩山で、鎖とか柵とか身を守る物がないので怖く感じる場合があります。アメリカ的民主主義で、自分の身は自分で守れということなのでしょう。モニュメントバレーはジョン・フォードの「駅馬車」などの映画で有名になったところです。砂漠地帯に岩山が立つ一種独特の風景ですが、ユタ州の方から入って遠くモニュメントバレーを見ると何か郷愁を感じます。

以上の十選を独断で順位付けすると、ヒマラヤ、アラスカ、アメリカの順で、ヨーロッパ、カナダ、ニュージーランドは同格、次にアメリカ、イギリスと続きますが、それぞれに魅力あり、ランキングはあまり意味ない気がします。

見えない世界の山としては、アンデス、ロシア、中国それに南極があります。アンデスは、一度は行きたいと、思っています。チリのアンデスは出張時、前衛峰を垣間見ましたが、ペルーのマチュ・ピチュも是非見たいところです。パタゴニアの氷河の崩れるところにも惹かれるのですが、これはアラスカの氷河を見たことで我慢することにします。

番外編で日本の山は一番が穂高岳、二番が剣岳だと私は思います。涸沢や剣沢で寝ころんで空を見上げると本当に自然に抱かれているなと思ったものです。日本の山の弱点は氷河がないことです。しょうがないことですが。

一九六〇年（昭和三十五年）

山行記録 冬山合宿 甲斐駒ヶ岳

パーティー 斉藤雄二 大石一博 星野光伸 高野七郎

山行

冬山合宿 南アルプス・甲斐駒ヶ岳 一月三日～五日

春山合宿 八ヶ岳・赤岳・硫黄岳 三月二十六日～二十九日

夏山合宿 北アルプス裏銀座 七月二十日～二十七日 参加十三人

〔部員〕 沢田敏夫 宮沢護 森田正弘 高野誠 染谷明 佐々木一郎

古島照夫 高野七郎 都築昭夫 長根照夫

〔顧問〕 石川正明 内田一正 岡田潔 中西章 中島俊郎

部報「わんだらあ」二号は、創刊から二年たったこの年に発行されたが、それには参加した文化祭（一九五九年）の様子が報告されている。

一九五二年に「文化祭」という名称が使われ始めたときに、運動部では山岳部だけが、美術・書道・物理・図書部と合同で、単発的に参加したという記録が残っている。その後、一九五八年からは運動部の中から、山岳部だけが継続的に参加を始めた。さらに一九六六年には、すべての部活の参加が認められ、一九六九年には「くすのき祭」という呼称に変わっている。

この年の山行は冬に甲斐駒ヶ岳、春に八ヶ岳と雪山が充実している。夏は燕岳から檜ヶ岳に縦走後、涸沢に入り奥穂高岳に登った。

一月三日 晴れ 川越～五合目小屋

前日の新宿発二十三時五十五分の列車で、日野春に着いた。朝食をとり五時半に出発した。我々は南アルプスで最もポピュラーな甲斐駒ヶ岳を一月に登ることにしたのだ。冬の朝はひんやりしていたが、東の空が白んでくる頃から身体も温まってきた。牧の原の四つ角で小休止。そこから大武川に添って進んでいく。間もなく真正面
に待望の駒ヶ岳が姿を現し始めた。ぐんと切り立った摩利支天まりしてん、いくら見ても見飽きぬ名峰である。

明日はあの頂上に登るのかと思うと、自然とファイトが出る。右手に八ヶ岳も見えてきたが、雪は思ったほどないようだ。横手を過ぎて甲斐駒神社には八時に着いた。登山者名簿に記入し、参拝してから出発した。

この頃からすっかり晴れてきて、歩くと暑いくらいになってきた。面白味のない坦々とした道を二時間半ほどで、白須から合流する笹の平に着いた。さらに二十分ほど行ったところで昼飯にした。ラジウスで湯を沸かし、即席しるこを作った。これは甘くて格別だ。元気を取り戻した。しかし夜行の睡眠不足でペースは落ちる。

その先で、痩せ尾根の刃渡りに差し掛かった。ナイフの刃のよう

に左右は切り立っている。そこを慎重に通過し、刀利天狗へ。さらに黒戸山を巻き小屋のある鞍部へと急いだ。

五合目小屋に着いてすぐ食事の支度をし、ピフテキと飯を食べた。その後他パーティーの囲炉裏の火にあたらせてもらい雑談した。七時半、床に炭俵を敷き、その上にグラウンドシートを敷き、テントを掛けて明日の好天を祈りつつ眠りに就いた。

一月四日 晴れ 小屋く甲斐駒ヶ岳往復

四時半に起きた。サブザックに四人分のパンとジャム缶と少しの食料を詰め込んで、七時に出発した。快晴でコンディションはいい。前に登えている駒ヶ岳は、朝日を浴びてキラキラと輝いている。

出発してすぐに、鉄線のかかった岩場の登りがある。その後道はなだらかになって、七丈小屋に着いた。その上で森林限界を超えて眺望が素晴らしくなってきた。

鳳凰・北岳が堂々と構えている。白一色の道をさらに進んで、大鳥居が立っている八合目に着いた。そこでキャラメルや羊羹を食べながら休憩。奥秩父、八ヶ岳、南ア連峰がくつきりと見える。もう一息である。

慎重にアイゼンを利かせ目指す頂上へ前進。ついに頂上だ。疲れはいっぺんに吹き飛んだ。まさに絶景アルプス。北アルプスまで見通せる。

上越、東北の山まで手に取るように見える。一番大きいのは、仙丈岳。北岳は素晴らしい。仙丈をバックに一人ずつ写真を撮る。三

十分ほどいて、少し下って風除けで食事をすることにした。昼食後は気温も上がって、アイゼンが利かなくなった。ゆっくり慎重に五合目へ下る。夕食はカレーで、最後の晩となり果物缶やコーヒー他飲食物はほとんど食べてしまった。八時頃に寝た。

一月五日 晴れ 五合目く川越

四時半起床。すぐにラジウスに火をつけて、餅を焼いて醬油をつけて食べた。六時半小屋を出発。帰路は親しみを覚えた登山道に安心感がある。クラストした長い下りを急いだ。笹の平でアイゼンを外してなお下る。駒ヶ岳神社に着いた頃には、汗でびしょりになった。昼食のパンとソーセージを食って、横手から柳沢まで一時間半ほど。柳沢から牧の原の四つ角までバスで行き、そこから日野春駅へは二十分ほどであった。(二年 大石一博)「わんだらあ」二号

山行記録 春山合宿 八ヶ岳 赤岳・硫黄岳

一九六〇年三月二十六日く二十九日

メンバー 斉藤雄二 長島威 大石一博 小久保英夫 星野光伸 沢田敏夫 高野七郎

我々は、春期八ヶ岳登山を昭和三十五年実行に移した。パーティーは学校山行ではないから、以前から行ってみたいと思っていた連中だけだった。残雪期の八ヶ岳は初めてであり、幕営装備不足の関係から赤岳石室をBCとして計画した。

第一日 川越く行者小屋 雪

我々一行は、二十五日夜新宿駅に集合した。二十三時五十五分発の長野行きを利用した。茅野駅へ着いたときはすでに空は白みかかっていたが、雪が降っていたため八ヶ岳の連峰は全く見えなかった。しかし茅野の冷気は身に沁みる。ここで農場行きのバスに乗り込む。登山者で満員のバスは、雪の中を上下に揺れながら農場に着いた。山麓の一面に立って目に入ったものは、朝もやの中に立つサイロ、黄色いブルドーザー、馬が遊んでいる牧場などが目に飛び込んできた。小屋で雪を避け、固いオニギリを頬張る。一時間ほどして雪の降りしきる農場を出発した。坦々とした一本道を三十分五分休憩の割合で進んだ。広い柳川を渡り、もう一つ支流を渡ると美濃戸山荘に到着した。

ここから柳沢南沢に入った。夏道を頼りに沢を行く辺りから、ザツクの重みもぐつと肩に食い込む。積雪もだいたい増えてきてピッチを落として歩く。歩くにつれて雪も盛んに降るために、道が消えてしまい神経を使った。風も強くなって阿弥陀岳の左を回り込んで、この沢もテントが五張りも張れるくらいの広さになり、雪は腰まで潜る。皆あまり声は出さなくなった。ここで完全に方向が分からなくなり、四方を偵察したが分からず、傍らのテントで行者小屋の所在を尋ね、大体の方向を知る。しばらく膝までのラッセルで進むと、立ち木に赤布を見つけた。その先に小屋があった。小屋の人が心配して迎えに来てくれたのは嬉しかった。三時二十分小屋に入ると、

北沢を行った人たちはすでに着いていた。ストープで着物を乾かしながら夕飯を作った。分厚いビフテキがうまかった。

第二日 行者小屋く赤岳石室く赤岳 晴れ後曇り

翌朝四時、我々だけ自炊のため震えながら支度をする。これから四日間を過ごす赤岳石室に入るのだった。七時半小屋を出て遥か後線を望むと、涸沢を思い出した。これからの登りはなかなか急である。鬱蒼とした森林帯を各々冗談を飛ばしながら三十分ほど登ると、森林限界に出た。左手には横岳から大同心、小同心の雄姿。右手には赤岳西壁、阿弥陀とそのコルの素晴らしい曲線を眺めながら、急な岩混じりの尾根をアイゼンを利かせて快適に登った。

九時二十分全員稜線に着き、そこから石室まで五分ほどだったが小屋番が入っていた。懐の具合で隣の山溪小屋を使用した。小屋はさほど雪が詰まっていなく入り口と窓をブロックで固め強風を防いだ。十二時頃に小屋の整備、昼食も終わり、二人のキーパーを残して他の者で赤岳に向かった。強風の中を二十五分ほどで山頂を踏んだ。頂上で全員写真を撮り、阿弥陀に続く尾根を五分ほど下ってそれを偵察し、急いで小屋に引き返した。一時四十五分頃に戻った。

第三日 BCく硫黄岳く阿弥陀岳 晴れ

午前五時BCの第一夜が明けた。マットを持参しなかったためシユラフが少し濡れていた。今日はいよいよ硫黄岳を往復する。半数の四人は七時四十五分山溪小屋を出発した。雲一つなく日本全土が

見えるかとさえ思えた。横岳の諸ピークは全く快適に登れた。横岳主峰に近づくとつれ、稜線に付着していた雪は見る見るうちに解けて、岩肌が一面に表れてくる。アイゼンが岩に引っかけやすくなる。歩みにくい。横岳の一つ手前のピークからは、赤岳、阿弥陀岳、それに今回初めて見参した権現岳、そのすぐ後方にはさすがに雪が豊富な南アルプスの山並みが雲一つない空にくっきりと横たわっている。その左手には富士が丸見えだった。またその手前に奥秩父連山を見て、昨春の奥秩父縦走が懐かしく思い出された。思わず二十分ばかり休んでしまった。

五分ほどで横岳主峰に着いたのが八時五十分頃だった。さらに岩の現れた稜線を二十分ほどで硫黄岳石室に着いた。ここから両神山が見えるようだ。さらに二十分で北面に大火山を有する頂上に立った。ここは以前ガスで方向を間違えた苦い経験があった。北八ヶ岳の美しい樹林帯が眼下に広がり、火口の縁に立つて過ぎし日の思い出に浸った。石室に下って羊糞と凍った夏みかんを食べ、九時半石室を出発、急ピッチでBCに戻った。途中大同心に人がいるのが見えた。十一時四十分BCに帰る。

(三年 星野光伸)

午後も依然として快晴。風は少し吹いているが暖かい陽が降り注いでいる。午前中は行動しなかった半数は、阿弥陀岳へ向かう。前に踏んだ道を行き、赤岳に登り中岳の科尔へと向かう。注意して下って最後に登ると中岳のピークである。この辺りはヤッケを着ていると汗が出てくる。ここから阿弥陀岳へ一気に登行。一步一步慎重に進む。最後登り詰めると目の前が開ける。ついに阿弥陀の頂上

に着くことができた。喜びの表情が顔に出る。記念写真を撮り十五分ほど休む。眼下には幕営している天幕がだいぶ見られる。阿弥陀からの遠望は、南北アルプス、奥秩父等である。どの山も真白き雪に覆われていて実に気分爽快。のんびりと山頂の気分を味わった後、阿弥陀を下り赤岳へ戻る。

帰りの足取りは軽い。赤岳からは十分くらいで小屋に着く。皆無事である。小屋では停滞の者がお湯を沸かしてくれた。阿弥陀へ行ってきた後、一人の指の様子が変である。石室の小屋の伯父さんに頼んでみた。皆で手分けして治療に努めた。思わしくないようである。夕食後協議会の結果、明日下山とする。皆自分のものを整理して就寝。

第四日 赤岳石室く川越 晴れ

今日は下山である。皆嬉しそうに、また残念そうである。石室の伯父さんに別れを告げて行者小屋へ下る。今日も陽気がいい。行者を過ぎたところでアイゼンを外し、さらに一時間の地点で休み、故障者のザックを皆で手分けする。ここからは農場まで、個人個人になって急ぐ。阿弥陀を眺めながら、残雪の八ヶ岳に名残惜しい気持ちになる。農場で遅い昼食を取りバスで茅野へ向かった。駅ですでに診察を終えた彼と合流したが、心配するほどではなく安心した。帰りの汽車は準急新宿行きに乗ることにした。初めて準急に乗ったが、あまり心地のいいものではなかった。

(三年 小久保英夫)「わんだらあ」二号

寄稿 山は人生

高野七郎（一九六二年卒）

一九九〇（平成十二）年七月二十八日から八月二十五日まで、埼玉新聞県西版に「くすの木の下で、部活動でたどる川越高一〇〇年」山岳部特集が九回取り上げられました。

「OB会」とはいつでも会費は徴収せず、新年会や山行の参加費の残りや寄付金で運営しています。会では幾多の方々ともめぐり合いましたが、高校時代を含めて、故人となられた方もおります。まずもって、ご冥福をお祈りいたします。

会で知り合った方々は大勢おりますが、何人かを――

顧問の松崎先生は、私にとっては山の先生です。一九九八年ごろからご一緒させていただき、山行回数はすでに百回を数えました。その間、連続毎月山行三年七ヶ月を達成しました。いろいろな運も伴いますので、この記録更新はどうかと思われまふ。山は先生が決めてくださって、私の期待に外れたことはありません。ただし道のないコースが入るのは、ほぼ毎度のことです。こういうのがほんとの山と、二人とも信じています。

六期の岩堀さんは代表幹事として会を束ねていただいております。またご自宅にも度々呼んでくださって、楽しいひとときを過ごさせてくださいます。何といっても〇三年からの夏の東北です。十

三期の長島さんと、三十四期の加島さん（二年目から）と一緒に、最初の年は雨の飯豊山、翌年は晴れの飯豊山、その翌年は朝日連峰南部。

〇六年は仕上げの朝日連峰北部縦走で、好天に恵まれました。いづれの山でも山の水（水にはいろいろ）はおいしく、花々は数量とにも多くて素晴らしい。年齢は離れていても四人は飲み仲間。下山祝いも楽しみです。同行できて感謝でいっぱいです。

幸すしの長島さんはずっと会の中心で、有志山行のときはいつも最高の料理を食わせてくれます。

山の天気

山は天気。季節が変わればその時々の花や景色が見られる。しかし天気が一番。晴れていればいい景色も見える。危険な雪庇も見えらる。込み入った尾根も読みやすい。でも日に焼けるのが玉にキズ。雨の日はぬれる。カッパを着ても中からぬれる。雪が降ったら寒いし、道にも迷いやすい。風が加わるとさらに大変。

山の危険 その一

危険と緊張は紙一重。私の山はレベルは低くても、範囲は広くし、大いに楽しんでいきます。

本格的な岩登りとはともかく、岩遊びは大好き。しかしこれはもう危険がいっぱい。油断したら命の保証がない。しかし一般的に岩は眺めがいい。好きな山は、まず妙義山から、福島島の霊山、中之条の

嵩山^{たけやま}などです。

沢登りは危険度最大、常に緊張を強いられる。滑って転んだり、尻を打った回数は数え切れない。しかし後遺症になったものはない。夏の妙味としてのぬれる沢や、秋の紅葉期の沢などは特に楽しい。やや趣の変わったところでは残雪期の沢。踏み抜き注意だが、雪解けにともなう花々が楽しめます。

雪山は天気がよければ遠足気分だが、大変なときも。雪崩は怖い。雪庇があるような山は、視界不良のときには登れない。吹雪いたら困る場所は、至る所にある。新潟、福島を中心にしています。普通の登山コースでも、ガニ股の足には、木や岩がよく当たってくる。ササや草に隠れていたらなおさらです。切り株や、たまには思いがけない人工物もあります。

道に迷う。踏み跡がはっきりしなくなったらなおのこと。コースが分かれた、合わさった、のに気がつかず、特に調子づいた下りに「?」^{はてな}というときは要注意。

山の危険 その二

マムシ、スズメバチ、クマ、イノシシが思い浮かびます。同じくマでもヒグマは論外。

どんな山でも、ちょっとした打ち身、擦り傷は数え切れません。高校時代には、奥秩父で下山が一日遅れ、また八ヶ岳では私の右手薬指の凍傷で、みんなに迷惑をかけました。年末の丹沢の沢で、足を岩に挟まれたことがあります。同行者に動かしてもらえば何でも

ない岩ですが、自分だけでは体勢の関係で動かせません。一人なら完全にアウトでした。

大きく迷ったことはありませんが、道が分からなくなったり、行き詰まって戻ったりすることは毎度のことです。

山の危険には、交通事故も入りましょう。私は運転中に眠くなることがあるので、例え先生を乗せていても(それはなおのことです)、止まって寝ます。眠気と寝る時間の兼ね合いは分かっています。

事故は自損に限りません。もらい事故はもちろんのこと、山とないと落石やがけ崩れなどもあります。家の敷居を無事またいでこそ登山完了です。

「悔いがないように」登山をしたいが、時にはあきらめも肝心です。進むも勇気、退くも勇気です。手ごわそうな岩などの場合はさつさとあきらめます。そのかわり、登山コースのわきにある水場、展望台、岩、花や巨木などなど、できるだけ寄り道して楽しむようにしています。

「山は逃げない」といわれますが、武甲山や叶山のように逃げた山もあります。だから、若いうちに、この言葉を信じてパスしていると、年を取ってから「体がついて行けない」ことも起きてきます。チャンスは逃すな、です。

単独行もします。これは仕事や用事に差しさわりがなければ、天気を見て日程や行き先の変更がやりやすい。

「他人に迷惑をかけない範囲で好きなことをする」という心構えでいます。けれどひとたび遭難して動けなかつたら、自前で救助で

きる山岳団体は皆無に近いのではないのでしょうか。OB会しかりだと思えます。今では大部分の県警でヘリを持っているようですが、安易な依存は慎みたいもの。

普通、山では携帯電話は通じなくて、電源切りの状態です。遭難の状況によつては翌日まで生きていられるかどうか。遭難して動けなくなった場合、パーティーの中に、下山して再び現地に案内できる同行者がいることが望ましいが、むやみに動かないことも大事でしょう。

山の人生訓

「山を甘く見ては困る」ということ。マイカー登山に慣れると、どうしても装備が雑になりがち。ぜひ注意したいものです。

自然に感謝の気持ちを抱いて山に登る。山の麓に寺社があれば、山に来ることができたことを感謝し、道中の安全を祈る。遭難碑があれば頭を垂れ、山の上に祠があれば手を合わせる。山の中で花や景色に感動すると、思わず「ありがとう」をつぶやきます。

「人の心に花一輪」は、むしろ人生訓ですが、山からは幾多の花一輪を受けました。人との出会いで心にトゲを残さずに、花一輪を。これは私事では実行できてはいきそうもない。自覚以上にトゲを残しているかもしれない。

私は職場で、ある時期「冒険家」とあだ名を付けられたので「冒険をしない冒険家です」と答え、「冒険をしないから今まで生きてきた」と申しました。家族にもそう申ししています。

寄稿 長島威先輩お元気な理由

染谷 明（一九六二年卒）

昭和三十四年、川越高等学校に入学すると、先輩から、いろいろありがたいお説教をいただきました。

「運動部に入ったか？」「昼飯は三時間目に食べる」

同じ中学校から行った高野誠君に、どこか部に入ったのかと聞いたら、山岳部に入ったと聞き、じゃあおれもと決めました。所沢中学校を卒業した春休みに、同級生や担任の小川正夫先生らと子ノ権現や日和田山にハイキングに出かけた楽しい思い出が残っていたからです。

が、新人生歓迎登山は行きませんでした。すぐに先輩の長沼友兄さんと神崎俊宏さんに連れられて武甲山の岩場「西ノドウエ」へ行かねばならなかったからです。最初から岩場登りとなりました。ハーケン、カラビナ、アプミを使って引つ張り上げられました。

北アルプス縦走の夏合宿は、無我夢中でついていった感じ。早く歩くと大石先輩から荷物が軽いのではないかと怒られた。野菜をポリエチレンに包んでキスリングの中に入れておくと、すぐ臭くなるので、早く目的地に着かないかと思いました。

夜行列車は、先輩にならって床に新聞紙を敷いて寝るのですが、熟睡できません。大天井岳から尾根伝いに西岳、槍ヶ岳へ行き、槍

沢を下って横尾へ、そして涸沢へ上がり、テントを張って北穂高、奥穂高等を登って帰ってきたのですが、長島先輩のこととはこの縦走中のことです。

西岳のテント場に夕闇が迫ってきました。西岳は水場がありません。雪渓を下の方まで降りていって、飯盒の米をといでくるのです。澤田敏夫君と私は、長島先輩に言われました。

「明日は早く出発する。炊いた飯で握り飯を作っておくように」

先輩の言うことは命令です。二人は夕飯を食べたあと「大キジ」を岩場の陰で撃って、手を洗っていません。水は貴重ですし、下の方までまた手を洗いにいけないほど疲れていました。そこで、そのまま握り飯を作り知らんぷりしていました。朝になってその握り飯をまず長島先輩が食べ、澤田君と私は違うものを食べて、槍ヶ岳を目指しました。

槍ヶ岳は天気良かったのですが、槍沢を下るとき雨となりずぶぬれになって横尾へ着いたのを、覚えています。長島先輩は終始お元気でした。

現在、山岳部OB会が春と秋の登山を主催してくれ、私もなるべく参加するよう心がけています。また新年会やら幹事会やらで、先輩にはいつもお会いしていますが、六十歳過ぎても元気に登山をつづけておられます。

「お前のおかげで今でも元気に過ごしているよ」

と言ってくださいますが、あの握り飯のおかげなのでしょう。私はそうに違いないと固く信じています。私にとっては山岳部の先

輩ではありませんが、よき師であり、また愉快的仲間でもあります。すでに大石先輩、澤田君もこの世を去ってだんだん仲間が減ってきていますが、たくさんのいい山の仲間巡りに合えたと心から感謝しているところでもあります。今は、健康のために自然に親しむという感覚で山に登ろうと考えています。おかげで春と秋の山行は、二千メートル程度の山のため、何とかついていっていますが、だんだん年齢とともに、山より温泉のほうが楽しみとなっています。

埼玉県立川越高等学校山岳部OB会ならびに長島先輩、万歳！



S.N

一九六一年（昭和三十六年）

山行

夏山合宿 北アルプス 穂高岳

〔部員〕 市野川恭三 浅野裕幸 本郷功 中村武夫 大西貞幾
〔顧問〕 内田一正

この年の三月に卒業した大石一博は、入学した立教大学ワングルの夏山合宿で、無念にも疲労遭難死してしまった。川高時代の三年間には、登山でバテることとは無縁に思えた部員ただただに、同級生はショックを隠せなかった。

追悼

山岳部OB大石一博さん 苗場山での疲労遭難

一九六一年七月三十日没 享年十八歳

川高を卒業したその年の夏、OBの大石一博は、進学した立教大学のワングル部で、最初の夏山合宿に参加した。群馬・水上の上ノ原高原（宝台樹）にある、大学の小屋に集結するという合宿で、参加八パーティー、総勢八十四人という大部隊の山行だった。

彼が参加したA隊八人は、志賀高原の発哺温泉から岩菅山→烏帽子岳を縦走し秋山郷に下り、苗場山を登り返して元橋に下り、さら

に平標山から上越国境を縦走して朝日岳に至り、宝川温泉に下って上ノ原に到着するという八日間の長期計画。当時のワングル部報によれば、大石さんは入山二日目頃から体調を悪くして五日目に途中の苗場山から付き添いと共に下山して帰郷したと報告されている。ところが帰郷して二日目、突然亡くなる。一九六一年七月三十日のことだった。部報には「重症筋無力症」で入院し、突然息を引き取ったと記されている。当時の大学ワングル部報から転載してみる。
〔七月二十二日、多数の見送りを受けて、湯田中行き臨時夜行列車で上野を出発。〕

七月二十三日、早朝湯田中に着き発哺温泉までバスに乗る。バスを降りた一行は、今日の幕营地岩菅山に向かって縦走を開始。大石君は昼食直前に、足が吊り気味だと言っていたが、その後全員元気に岩菅山幕营地に着く。

七月二十四日、岩菅山幕营地を出発すると尾根道になり、幾つかの突起を越え、裏岩菅山、烏帽子岳を経て笠法師より一気に切明まで標高差八百メートルを下る。今日の予定はこの切明より、平坦な林道を和山温泉まで五十分ほど行くと終わる。大石君は切明までは元気に歩いてきたが、切明を出てから遅れだす。パーティーは遅いペースで歩いたが、幕营地手前二十分ほどのところで、足が痛み疲労の色も濃いので、彼の荷を減らして歩くが、どうも足がしつかりとせず、空身にして和山温泉に着く。その日彼はテントの中で休養する。

七月二十五日、大石君は昨日の休養で回復し、パーティーと共に予定行動を取ることにする。今日は苗場山に幕営する予定である。

部落を抜けて二時間ほどの緩いのはりは皆快調であったが、昼近くなつて大石君は遅れだした。栃川で一時間の大休止昼食にする。そこからの急登は調子よく登り尾根に出るが、尾根で大石君の調子は悪くなり足の痛みも訴えるので、昨日と同じ空身にして歩く。そのため今日の予定は取りやめて、大石君と小口、三年の荒川がゆっくり登ることにして、私は他のメンバーを率いて、苗場山山頂から一時間手前の水場で幕営し、夕食の支度を始め、私と二年の橋本が大石君を迎えに戻る。大石君は空身でも思うように歩けないようであり、我々の肩を貸してテント場まで上がる。この夜彼は吐き気を催した。今日の調子を見ると、明日から彼を下山させることに決め、下山コースはポピュラーな湯沢温泉に出ることにする。

七月二十六日、この日大石君は状態が思わしくないので予定を取りやめ、午前中は休養し、午後からテントを苗場山頂上に上げた。彼は空身で歩き、夜はかなり状態もよくなつてきた。

七月二十七日、本隊と分かれ、サブリーダーと三年生に付き添われて湯沢へ降りる日である。彼は本隊と分かれる赤湯の分岐点までは元気だったが、下りにかかるとうぐつとペースが落ちてきて、今日中に到着できるか心配された。ちょうど下山してきた北越製紙の方々の手助けによつて担架を作り、林道へ出た。林道からトラックに乗り湯沢の旅館に着いたのは七時近くであった。

湯沢での医師の診断によると、「単なる疲労です、回復するでしょう」ということであつた。この日大石君の自宅へ電報を打ち、明日帰宅する旨を伝える（一方本隊は縦走を続け、予定より一日遅れ

で、三十一日上ノ原に集結した）。

七月二十八日、湯沢から上越線で大宮へ。車中大石君は体の痛みを訴える。二時半頃大宮に着き、迎えに来て下さつた家族の方と自動車川越の自宅に着く。

自宅で彼を診察した医師は、重症無筋力症で、一週間で回復することであつた。医師の言葉で安心した付き添いの二人は、その日夜行で本隊に合流するべく土合に向い、翌二十九日、蓬峠で本隊と合流した。この日の彼は、少し元氣を取り戻してきたようだった。

七月三十日、一時回復に向かつたのであるが、この日午前七時頃突然息を引き取つた。医師も付き添つていない突然のことであり、彼の意識は最後までしつかりしていたといい、医師の言葉も樂觀的なもので、ご家族も安心されていたとのことだったそうである。

大石さんのご遺族は、実姉が健在だった。

「ほとんどこん睡状態のまま、体を支えられてようやく下山してきただと思ひます。現地でもトラックに拾われて、ぐつたりしたまま駅までたどり着いて、川越に戻る電車の中でも通路に倒れこんだままだったようです。自宅に戻つても食事を摂れないまま、どうかスイカのジュースを飲んだだけで、それも吐き出してしまいました。そしてそのまま入院して、日大病院では、当時の人工呼吸器「鉄の肺」という装置で再生を図ろうとしたのですが、その直前、帰宅して二日目に亡くなりました」

無念である。梅雨明け、真夏の登山の脱水症や熱中症の危険が叫

ばれるのは、もっと後の時代になってからである。

他方、大学山岳部やワングエル部には、新入部員のシゴキ事件があると言われた時代があった。事実、四年後の一九六五年には、東京農大ワングエル部の「死のシゴキ事件」が、社会問題化した。一人が死亡し、二人が重体、二十五人が怪我をしたというこの刑事事件は、起訴された上級生八人中七人が有罪となり、大学は一人を退学にして上級生十七人を無期停学にしたと、新聞資料に残る。

大石さんの周辺でも、同じことが起きたのではないかと、川高同級生は疑った。病床で彼が家族に話したのは、

「登山を継続するのは無理だから下山したいと申し出てでも許されなかった。ワングエル部も辞めたいと申し出たが、辞めさせてくれなかった。体が弱っているのに、歩け、登れとしごかれた」

という遺言のような幾つかの言葉だけが、実姉の記憶に残っている。けれど、当時の部報を改めて読む限り、上級生の対応は誠実だったようにも思える。大柄な体躯だから登山に向いているというのは、誤りである。ワングエル部の部報にも、

「今一度、創部当時に返り、考え直すことが必要である。自然を友とする我々は、一歩間違えば遭難という危険を経験する。我々の反省は、何らかの具体的代償が払われるまで忘れ去られていく。今度の代償は十分すぎるものであった。大石君の冥福を祈ると共に、彼の死を無駄にすることなしに努力したい」

と結ばれている。上ノ原高原には、彼の慰霊碑が建立されている。

(編集者)

寄稿 ああの年の夏、故大石一博の記憶

長島 威(一九六一年卒)

立教大学 昭和三十六年四月

四月も終わりになるのに、昼休みのキャンパスは新入生でごった返していた。第一学食の前、イチヨウの大木の下にアルペンテントが二張り見える。「立大山岳部」と書かれたそれは、春山の虫干しか、それともデモンストレーションか。

「もう入ったのか」

「いや、まだだ。親がうるさくてなあ」

「おれはワングエルに入ったよ。長島は山岳部にと言ってたな」

「うーん。入部の紙はもらったけれど、まだ出してない。大石はワングエルか、いいな。夏までには決めるよ。おふくろに話してみる」

「ここの山岳部は怖いぞ。大学で初のヒマラヤ遠征隊、聞いてるか」

「ああ、知ってるよ。だから余計にね」

大石一博とは、川高山岳部で三年間同じかまの飯を食った。まじめな彼の現役入学は当然なのだが、暮れまで山で遊んでいたのに私も入学し幸運だった。今こうして大石と再会できるのは、本当にうれしかった。大学キャンパスはあまりにも華やかだった。

私は親に山岳部への入部は止められて、参っていた。昨年の冬から春にかけては、大学や高校山岳部の遭難が新聞をにぎわしていた。

「山をやるために大学に入れたのではない」

しかし、山の映画は花盛りだった。「アルピニスト岩壁に登る」、「エベレスト初登頂」、「花嫁の座・チョゴリザ」。マナスルへの挑戦が続いて、山好きをあおっていた。「とにかく、夏まで入部は待つよ。今年は一人で頭を冷やしてくる。川高の夏合宿は今年も北アルプスと聞いている。涸沢に入ってみよう。大石は？」

「おれはそのころは、ワンゲルの合宿だ。谷川で」

上高地の夜 七月二十六日

槍ヶ岳を往復して上高地に舞い戻っている。横尾谷の丸木橋もすっかり頑丈に架け替えられていた。二年前の夏、三本丸太の真ん中が細く垂れ下がっていた橋。増水した梓川の濁流を渡っていると、体が左右に動いているようで怖かった。そのときすがっていた針金が木の柵になっていた。上高地キャンプ場の炊事場の軒先が仮寝の宿。キスリングの荷物を出してその中にシユラフで潜り込む。

夜中に何か分からないが目覚める。少しほんやりしていた。高一の正月は雪の安達太良だった。勢^{せしだい}至^{いた}平^らの風雪の中、寒くて足がつったのを石川先生にさすって暖めていただいたのを思い出した。次から次へと高校時代が懐かしい。斉藤、星野、小久保、大石が、一緒の仲間だった。高一の春は、この五人で奥秩父の縦走をした。冬と春の山行は学校から禁止されたため、だまって出かけた。高二の冬の甲斐駒は、正月の店を抜けられなくて不参加で悔しかった。その春の八ヶ岳は、新人の高野、亡くなった沢田敏夫も参加した思い

出深い山行だった。高三の五月……。一人で山に行くと、何故か大石や皆の顔が浮かぶ。梓川の川音で眠る。

西穂高岳の遭難者 七月二十七日

西穂小屋を過ぎると一人になった。ガスが濃くなる。すぐ近くだった岩陰が遠くのピークに見えたりする。



1961年 夏山合宿 穂高岳 西穂山荘前にて 長島先輩と現役

西穂を過ぎ

て、三つ目くらのピーク下、大きな岩陰にテントを見る。名古屋の「トヨタ山の同好会」の方々だ。四人パーティーで「雨も降ってきたから大変だろ」と、快くテントに入れていただいた。

夜八時ごろだろうか。テントをたたき音で眼が

覚める。

「こちらに男女二人のパーティーが来なかっただろうか」

聞けば西穂の小屋の人で、まだ帰らない宿泊者二人を探しているという。午後「西穂のピークまで行ってくる」と言ったままで、暗くなっても小屋に戻らないらしい。「私より先、キレット方面には行っていないと思う」。

私とトヨタのリーダーが、小屋の人と戻りながら探すことにする。西穂の頂上辺りはガスに巻かれると道が分からなくなる。雨は大したことはないが濃霧で懐中電灯に浮かぶガスは渦巻いている。独標を過ぎたころ、下から大勢の灯を見る。小屋から応援の人たちだ。

女の人は自力で小屋にたどり着いたという。九時過ぎに、下りかけたガレ場で男の人を発見。ズック靴の若い人は無事だった。鳥々の駅で知り合った男女だったという。お騒がせな二人。

奥穂高岳 七月二十八日

そのまま私たち二人も小屋で寝てしまった。朝暗いうちから丁寧を送り出される。早くテントに戻ろう。西穂のピークを過ぎたところに急にガスが晴れて、陽が足元の右側から差してきた。「見て」。トヨタの人が指す方向に、二人の影がガスに浮かんで、周りに丸い虹らしきものが見えて、不思議な気持ちになった。あまりの美しさに絶句。それ以来二度とない現象だ。何気なく「大石は今ごろどの辺だろう」と、谷川へ向かっている大石を思い出した。

上高地 七月二十九日

午前中は瀬沢でグリセードをして遊び、上高地でも川高の野営に同宿する。生徒から離れて、五千尺の食堂で、石川先生、岡田先生に「ま、いいだろう」と、一杯のビールを注がれた。これにはびっくりで、大学生ともなるとえらく違うものだと変なことに感心した。明日も一日伸ばして、再び西穂へ後輩を案内することにした。一度の山行で、同じピークに四度登ったことになる。

川越 八月二日

星野、斉藤、小久保と大石の家から出る。前日帰ったときに、星野から大石の訃報を聞いて絶句した。「一体何があつたんだ」。ご挨拶した大石のご両親、特にオヤジさんの涙顔に全員言葉がない。思い返せば、早朝の西穂でプロッケンを見たとき、彼は疲労困憊で下山して、私が再び西穂に登ったその日、息を引き取っていた。

墓参り 八月十四日

大石の新盆で皆と泉湯のお宅へ伺う。大石の家は銭湯だった。またまた言葉にならない。昨日山岳部への入部届を破り捨てた。でかい体でザックを頭の上に担ぎ上げて背負うのがやつだった。いつもは無口だったがキャンパスで最後に会ったときは、妙におしゃべりだった。私と同じく、入学した高ぶりだと思った。人なつこくニッと笑うと金歯が一本光った。目が痛いのは白い入道雲と青い空のせいだけではあるまい。

一九六二年（昭和三十七年）

山行

夏山合宿 北アルプス・白馬岳～五竜岳

〔部員〕 鈴木建夫

〔顧問〕 内田一正

一九六三年（昭和三十八年）

山行

新人歓迎登山 雲取山 五月十二日

奥武蔵トレーニング山行 七月十四日

夏山合宿 甲斐駒ヶ岳～農鳥岳 七月二十一日～二十八日

県体登山 雁坂峠 十月十一日～十三日

冬山合宿 奥秩父・金峰山～雲取山 十二月二十四日～三十日

他に個人山行は八月の穂高岳、九月の谷川岳、十二月八ヶ岳など

〔部員〕 吉田幸雄 斉藤憲 森田孝一 高瀬昭雄

〔顧問〕 内田一正 唐木近一 野口進 富樫裕

ガリ版印刷、タイプ印刷など「わんだらあ」の印刷方法は年代と

共に変遷してきている。この年に発行された第三号までは、印刷職人によるガリ版切りだった。手書き文字ではあるのだが、とても読み易い。後年、生徒によるガリ版の時代が続く。

夏山合宿は、甲斐駒ヶ岳～農鳥岳の縦走だった。参加部員は九人。合宿中盤、両俣小屋を出発して北岳を目指す。

冬山の奥秩父は合宿だったのか個人山行だったのか。日程は十二月の二十四日から三十日までと長い。参加は二年二人に一年が一人。夜行列車で韭崎から金峰山へ入山し、五泊して雲取山から三峰へ下山している。顧問不在でも生徒の自主的な山行が組まれていた。

なお、この同じ時期に、二年部員二人はOBと三人パーティーで、八ヶ岳に入った。八ヶ岳で四泊して阿弥陀岳北稜を登り、下山後に金峰山に回ったと報告されている。

記録 山岳部に入って

迷わず山岳部へ、という信念を抱いていたので、クラブの選択には苦しまなかった。入部当時は一年は四人しかいなかったの、トレーニングはそう辛くはなかった。初めての新入生歓迎登山で、同じテントに寝て、同じかまの飯を食うという集団生活で、中学時代には味わえなかった楽しさを経験した。三年はもちろん、二年の顔も区別つかなかったが、ユーモアを交えて私たちに接してくれた上級生の態度は、早く自分も見習いたいものだと思った。

七月に入って上級生とも親しくなり、一大行事の夏合宿に参加し

た。初めて乗る夜行列車や南アルプスの山を思い浮かべて、一人うきうきしていた。山岳部だけで味わえる特権だと思った。三千坪の山頂を征服する優越感、下界では考えられないことを平気でやってのけるのは、山岳部でなければ分らない楽しさか。

とかく登山を勉強にたとえる格言なんかを言いたがるが、こんなものは実際に自分で登ってみなければ分からないのではないだろうか。数学の難しい問題に当たり、頭が変になってしまったときも、登山中のことを思うと、自然に楽になる。

よく親から、「山ばかり行っていると、勉強がおろそかに」といわれるが、部活は決してハンディキャップにはならない。現在川高の三年は新入生歓迎まででやめてしまうが、私はもっと行ってしまおうと思っている。

山岳部に入ってもじきに二年になってしまう。今度は私たちが中心になり、クラブの運営をしてゆかねばならない。一時沈滞した活動のある程度もとに戻し、数年ぶりに部報を発行しようと努力している二年に負けないようにやって行こうと、私たち一年生は覚悟を新たにしている。

(一年 中沢晴夫)「わんだらあ」三号

寄稿 遠見尾根へ再び

森田孝一 (一九六五年卒)

思えば、私が川高山岳部に入った昭和三十七年の夏合宿は、おそ

らく川高山岳部史上稀に見る悲惨と言うべきか、だらしないうべきか、とにかく惨憺たる合宿でありました。

その夏の計画は、白馬から針ノ木まで、いわゆる後立山全山縦走という、長大にして華々しいものでした。しかしながら我が山岳部の状況はいえ、頼りになる三年生が引退した後は、ほとんど機能停止といってよい状態でした。部報「わんだらあ三号」巻末の部員メンバーを見れば、私たちの上級生の名前が一人も記載されていません。というのも先輩諸兄から技術なり伝統なり受け渡す役割の二年生は、ほとんど幽霊部員という感じで、一方三年生も受験に忙しいのか部室にはほとんど顔を見せず、私たち一年生にとっては上との関係が全く断絶されているという状況でした。

そんなわけで私たち一年生は、四月の歓迎登山を行っただけで、夏合宿に突入したわけでありました。山岳部どころか、高校に入ったばかりの山など全く知らない一年生六名で突撃するわけですから、いくら孤軍奮闘しても孤立無援の初年兵にとって、所詮は玉碎の運命だったのかもしれない。

真新しいキスリングにたっぷり荷物を背負わされて、真新しい登山靴で修学旅行に行くかのように、喜び勇んで夜に新宿駅0番線ホームから準急穂高号に乗り込んだのであります。大冒険でした。頼りになるのは顧問のロクさんという内田先生と野口先生のみ。

初日は猿倉から白馬村営小屋下のテント場までの予定でした。しかしあの当時の装備でしたから、ザックは今とは比較にならないくらい重く、白馬尻辺りで早々に脱落し始めました。大雪渓は、もう

勝手に歩けという無政府状態。その日は雪渓途中の葱平の避難小屋に泊まらざるを得なくなりまして。この避難小屋は現在には存在していませんが、斜面の大岩を利用してコンクリートの屋根を被せただけの代物で、内部には雪解け水がたまりとても眠れる状態ではありません。仕方なく、水溜りの上に這松の枯れ枝など敷いて、ようやく眠る場所を確保する始末で、情けないアルプス第一夜でした。翌日は稀に見る晴天となりました。初日に痛い洗礼は受けましたが、坊主どもは一晚で元氣回復。白馬山頂に達しました。稜線に飛び出したときの剣立山連峰の大観は、以降今日まで私が登山を続けるきっかけとなったものでした。そして白馬頂上から勇んで後立山縦走路に足を踏み入れて、杓子岳、白馬鐘と通過して天狗池湖畔の幕営となりました。

三日目は不帰の嶮をどうにか通過したものの、唐松岳でストップ。ずいぶん楽で短すぎる行程だったのは、おそらくへばった者がでたのでしよう。とても遅れた行程など回復できそうにもないし、まして先には八峰キレットも控えています。そこで先生たちは、こんなへぼ連中を引つ張ってとても針ノ木は無理と判断し、天候の悪化氣配を理由に、五竜岳まで行ってその先は中止という決断になりました。引率にしてみれば、ごく常識的かつ冷静な判断でした。私たちといえ、がっかりしたのか、それとも早く家に帰れると喜んだのか記憶は定かではありません。多分後者であろうと思います。

四日目は五竜岳へ登って、白岳沢の雪渓をへっぴり腰で恐る恐る下って、西遠見の池で幕営。五日目は雨の中を延々と遠見尾根を神

城駅まで歩いてその夏の合宿を終えました。それまで一度もバテなかつた私も、長い雨の中の長い遠見尾根の下りには泣かされました。雨の地蔵小屋で飲んだ一杯のお茶の美味しさは今もって鮮明に覚えていきます。

かような夏山合宿で、その後一人消え二人消え、十名近くいた同級生も最終的に残ったのはわずかに四名。こんな山岳部の危機ともいえる状態を救ってくれたのが、翌年入部した後輩たちでした。以後、この頼りになる後輩たちとせつせと山を歩き、ようやく山岳部も活況を呈するようになりました。この間、わずかに顔を出してくれたK先輩に頼んでは、東松山の石切り場で懸垂下降やらザイルの扱いを教えてもらい、初めて山岳部らしい技術を習得しました。しかし冬山は誰も教えてくれる人もなく、見よう見まねで雪山に入つたものです。

初めての雪山は二年の冬の奥秩父の縦走でした。装備といえ夏用テントと、川越じゅうの燃料屋を駆け巡って集めた炭俵がマット代わり。アイゼンはこれまた夏用のX型の四本歯です。それでも多少なりとも経験を積んだ結果か、三年になる頃には初めて冬用テントを装備に加えたり、夏用のフライシートを購入したり、うまい飯が食えるようにと圧力釜なども買い、何とか山岳部らしい格好を付けられるようになったのであります。「わんだらあ三号」はそういう部活立て直しが一区切り付いた時期のものであります。その意味で私にはとても懐かしいものであります。

昨年夏、針ノ木から五竜岳まで単独テント泊で縦走し、およそ半

世紀ぶりにかつて辿った道を歩き、当時のことを懐かしく思い起しました。その昔のテント場の西遠見の池は、今は幕営禁止で綺麗に整地され、泣きの涙で下った遠見尾根も今は小屋泊まり三食付、軽装の中老年が軽々と登ってきます。すれ違ふときにちよつと綺麗なオバサンに、「お年の割に重い荷物で大変でしょう」

なんて誉められて、助平オヤジは、これだからテン泊は辞められんわいなどと、鼻の下を長くしたりしつつ、地蔵の頭まで来てみれば、もう地蔵小屋はどこにあったのかも定かならず、神城までの長い道もゴンドラで一つ飛び。半世紀近い時の流れを感じたものです。

しかしこうしてこの年齢までテントを担いで山を歩けるのも、昭和三十七年に始まる川高での経験があればこそと思つています。

寄稿 自慢の山岳部

斉藤 憲（一九六五年卒）

遠い記憶を辿つてみると、山岳部の夏山合宿は三年間とも私は参加しました。一年の時には北アルプスの白馬大雪渓を登ったこと。誰だか忘れましたが、一年で大バテしてしまつた者が出たのです。初日には予定の稜線まで登りきることができずに、途中の避難小屋に宿泊したのはいいのですが、私は雪渓を二往復したことを覚えていいます。荷物を放棄して登つた部員の荷物を取りに雪渓をまた下つて、運び上げました。

その翌日です。ね、白馬の稜線に登りついて、これは大感激しました。素晴らしい山々が延々と続いている。あの晴々した達成感は今でも覚えています。でもその先はどのように縦走したのかは不確かなのです。雪渓を登るといふのは難儀だったのですが、上に登つてしまえばあとは平坦な縦走だけで、意外にも楽だったのです。不帰のキレットを越えて唐松岳に登り、五竜岳を往復して遠見尾根を下つたと言われれば、そうだったのかなあとありますが、最後は神城駅に辿り付いたことは覚えていいます。二年の夏山合宿は南アルプスの仙丈ヶ岳、農鳥岳でした。この合宿は大成功だと思います。

顧問の内田先生は、北沢峠付近の河原だったと思いますが、海水パンツに着替えて水浴びを始めました。あの先生は、山の中でそういうことをする元気な先生でした。すれ違ふ他の登山者からは奇異の目で見られたものですが、平気なのです。ね、ご本人は。実は私は、その北沢峠で登山靴のビブラムがはがれてしまつて、翌日の甲斐駒ヶ岳往復は参加できませんでした。針金ではがれたビブラムを応急処置して、翌日からの山行は続けたわけです。

この合宿は、落伍する者もないし、天候にも恵まれて、第二位の高峰の北岳にも登り、農鳥岳まで縦走する充実したものでした。

三年の夏は、受験対策で参加しない者がほとんどでしたが、私は参加しました。信濃大町から今では高瀬ダムに沈んでしまいましたが、高瀬川沿いの登山道を歩き、湯俣から直接三俣蓮華岳に上がる登山道（現在は廢道）を登りました。でもここでもバテてしまつた部員が出て、やはり元気だった私は二往復してその部員の荷物を運

びあげたことがありました。そこから双六岳へ槍ヶ岳へ縦走して一旦横尾に下りました。そして酒沢へ登り返して、私はそこで停滞しましたが、元氣な一、二年は穂高岳を往復してきました。

積雪期の合宿にも参加しましたが、実は高校生は冬の八ヶ岳には行つてはいけないと言われていたのですが、三年先輩の佐々木一郎さんに連れられて、冬の八ヶ岳に内緒で行つたことがありました。その佐々木さんとは不思議な縁なのです。所沢の駅で雨宿りしていたときに「君は川高か」と声を掛けられたのが出会いでした。私が山岳部の後輩だと知ると、山に誘われたのです。最初はどこの練習場だったか、岩登りの基礎とザイルの使い方やハーケンの打ち方を教わりました。その後八ヶ岳の個人山行になったのです。佐々木さんは日大に進学されて、登山の同好会メンバーだったようです。冬に四、五日も八ヶ岳に入るわけですから、荷物は四十キにもなったかと思いません。メンバーは私と高瀬と佐々木さんの三人。彼が私たちを指導しながら、ポーター代わりのようなものでした。このときも一回ではすべての荷物をBCまで運び上げられず、二回に分けて往復しました。

行者小屋から阿弥陀岳に登ろうというわけで、私は八本歯のアイゼンを用意しましたが、高瀬は四本歯アイゼンしかなくて、それだけで怒られたものでした。登り始めてからも、先輩にとっては簡単な岩場なのですが、私たちは越えられない。そんなときも何だか怒られて、一般登山道から回り道して登った記憶があります。私もそんな山行に付いて行つたくらいですから、登山は好きだったのです。

よう。いつの山行だったか、キセル乗車をして鉄道警察に捕まった部員もいました。のどかな時代だったので。在学生には、山岳部員の他にも山好きがいて、同級の井花や市野は誰だったか先生を中心にして「くすのき山岳会」というのを組織していたときがあったようです。五年くらい活動していたのだと思います。

私は大学に進学してからは、部員ではありませんが、同級の高篠芳夫とよく北アルプスに出かけていました。実はそのときの記憶の方が強いのです。富山から室堂に入つて、薬師岳へ黒部五郎岳へ三俣蓮華岳と縦走したことがあります。そのとき三俣蓮華で大雨に降られて、夏なのにとても寒くて一晩中石油のラジウスを付けっぱなしで震えていたことがありますが、何とそこで同級の高瀬昭雄に出くわしたのです。彼は東洋大学に進んでその山岳部メンバーでした。

もう三年生くらいだったかと思いますが、後輩を指導しながら彼らも天候待ちをしていて、こんな山の中で同級生に再会するなど、世間も狭いものだなあと感じたこともありました。その高瀬は大学時代にヒマラヤに遠征するチャンスがあったようですが、残念ながら実現しなかったようです。

それ以降は登山の機会には恵まれません。三十歳代で腰痛を患つて、仕事も忙しくなつてしまいました。でも高校大学時代に、こうして他人様に話せるような登山経験があったということは、大きな意味がありますよ。登山をしなければただのダラダラした学校生活だけだったかもしれません。

一九六四年（昭和三十九年）

山行

夏山合宿 北アルプス・湯俣く三俣蓮華岳く槍・穂高岳

〔部員〕 遠藤孝 木本栄一 中沢晴夫 中島次郎 星叡 平岩昭

石井進

〔顧問〕 内田二正 松崎中正 小島芳寿 唐木近一

この年の北アルプス合宿を最後にして、川高山岳部は、しばらく北アルプスから遠ざかった。理由の一つに北アルプスではコメを炊くための薪が得られないという理由があったらしい。

二年部員の木本栄一は、この北アルプスの合宿に圧力釜を持って行ったのだが「縦走合宿では、燃料の木の枝が少なくて、コンロだけでは飯を炊くのに苦労した」という記憶がある。後の反省会でも「北アルプスは大勢で登山する夏山合宿には向かない」という結論になって、南アルプスの合宿が定番となつていった。

燃料にする樹木の伐採が自由に行えた時代だった。水が豊富で自由に炊事できるのが、合宿向きだったわけだ。

他方、北アルプスの涸沢などは「水場は遠いし、炊事は面倒だ。飯盒に適当に水を入れて炊いたら、芯が残って食えなかった。むしろ即席ラーメンの方がうまい」と個人山行の報告にある。インスタ

ント食品の普及が、北アルプス登山を容易にしたか。

報告 湯俣く三俣蓮華岳その後

自然の燃料が得られなくなる一方、葛温泉―湯俣―伊藤新道―三俣蓮華岳のルートも大きく変貌している。本山行の五年後、葛温泉（仙人閣・高瀬館）は水害に遭い、数年後に復興したものの、一九七二年から始まった高瀬ダム工事からは、登山者は工事用のヘルメットを被らされ、真つ暗な一^キもある七倉トンネルと山ノ神トンネルの二ヶ所を通り、七倉經由高瀬の堰堤までダンプの脇を歩かされた。

八二年には伊藤新道の吊り橋落下から、五つの吊り橋を渡って湯俣川を遡上する三俣蓮華への道は閉ざされ、竹村新道へとルートが変わった。その竹村新道も湯俣岳と南真砂岳の途中の大崩落個所の進行により現在は不通であり廃道に近い。

また、湯俣川に入り込む水俣川の上流は一部の登山家のみに許され、羨望的であった千天の出合から北鎌尾根へのルートはかつての魅力を失ってしまった。つまり北アルプスもご多聞に漏れず一部のルートのみ賑わっている。

現在では高瀬川流域からのアプローチは、裏銀座ルートで北ア屈指の急登のブナ立尾根か、七倉から船窪岳經由烏帽子岳に向かう静かなコースしか残されていない。

（編集者）

一九六五年（昭和四十年）

山行

県強化合宿 高倉山 一月十五日～十七日

春山合宿 金峰山 三月二十四日～二十六日

新人歓迎山行 大菩薩峠 五月三日

トレーニング山行 二本木峠 六月二十七日

夏山合宿 鳳凰山～北岳～塩見岳 七月二十一日～二十八日

奥秩父縦走 八月十六日～十九日

冬山合宿 北八ヶ岳 十二月二十四日～二十八日

〔部員〕 神田久男 磯田久男 大沢昇 小沢悦郎 斉藤正次

〔顧問〕 内田一正 松崎中正 小島芳寿 渋谷紘

夏山合宿の南アルプスは、夜叉神峠から鳳凰山へ、一旦広河原に下って北岳から塩見岳まで縦走する八日間おこなわれた。参加は顧問の唐木、松崎先生の他、二年が斎藤、神田、磯田、小沢の四人、一年が神田、岡田、桜井、小室の四人の少人数だったが、最初の三日間ほどは三人の三年生も参加している。入山数日は雨にたたられ停滞したが、後半は快晴に恵まれた。

冬山合宿の北八ヶ岳は、顧問二人に生徒六人。渋ノ湯から黒百合平へ上がって初日には天狗岳、二日目にはニューと白駒池を往復し

た。雪上訓練なども行っている。

山行記録 新人生歓迎登山（抄）

大きなザックも登山靴もおニューだ。中央線にでつかいザック背負って乗るのも初めてだ。大菩薩の谷間にテントが三張り。薪取りに何も考えずに一生懸命働いた。何をしても楽しかった。夜、谷間に赤々とファイヤーが燃え、うれしそうみなんの顔、顔が炎に照らされて、ああ、この後の言葉が出ない。いま思い出しても胸が痛くなる。何も手につかないくらいだ。九ヶ月前のことが何でも思い出される。

あのときのことは、一生ほくの頭から離れることはない。この感動を書き表せないのがもどかしい。

（二年 桜井理喜）「わんだらあ」四号

山行記録 夏山合宿（抄）

高嶺へ向かう。急な下りは辛かったが、この下りでついに北岳が僕らの前にその全容を現した。ぐうつと切れ込んでいる大権沢。あの上の方の白い所は雪渓だろうか。なんて美しく、でかい山なんだろう。山頂の辺りに引っかかっている一片の髪が、晴れ上がってきた空によく調和して一つのアクセントとなっている。二年のOさんは「俺は、こんないい景色を見たんだから死んでもいいや」などと

物騒なことをいつている。これから下る野呂川の岸辺の河原が下の方に見える。あそこまで下るのか。

そして翌日には北岳の頂上に立つ。

北岳頂上から二時間くらいで北岳小屋へ着いた。ここからの展望は、前には富士、左には北岳、右には間ノ岳の絶景である。みんな「すげえなあ、やつぱり来てよかったなあ」と言っている。夕食は五目飯だったが実によく、残らず食べてしまった。

(一年 岡田 章)「わんだらあ」四号

記録 山でのひとコマ(抄)

金峰山で

下り道だった。大日岩で登ってくる人たちに道をあけた。でっかい六六のキスリングを背負った四十がらみのオヤジさんと、七つくらいの子、五つくらいの子の女の子が、それぞれちっちゃなりュックを背にしている。思わず口に出た、「頑張つて、もう少し」。

こうして子供連れで山に来るなんて、うらやましいオヤジさんだ。おれも二十年后にこんな舞台を演じたいものだと、つくづく思った。それにしても、女の子の背のリュックがよかった。山に来ると、男に荷を持たせるお嬢さん方に見せたかった。

穂高で

涸沢から登ってくる年寄りご夫婦に出会った。時々立ち止まって



金峰山 (油彩) 可児一男

しゃがみ込んで、お二人で足元の花を愛でている。見ていて、とてもほおまじしい。ががつ登る若い山男山女の中で、ゆっくりとマイペースで登る老夫婦に心の中で声援をおくる。安産の神様と聞く穂高の頂上にあつたネンネコは、このお二人が納めたのかもしれない、おれはひそかに思ったことだ。

(三年 遠藤孝)「わんだらあ」四号

一九六六年（昭和四十一年）

山行

トレーニング山行 二月十二日～十三日

春山合宿 奥秩父 三月二十五日～二十八日

新人歓迎登山 二子山 五月七日～八日

トレーニング山行 武甲山 五月二十八日～二十九日

学徒総合体育大会 雁坂峠 六月三日～五日

トレーニング山行 蕨山 七月十六日～十七日

夏山合宿 荒川岳～赤石岳～聖岳 七月二十六日～八月一日

雲取山 八月十四日～十五日

両神山集中登山 十月十日～十一日

トレーニング山行 有馬山 十一月～十九日～二十日

冬山合宿 北八ヶ岳・天狗岳 十二月二十四日～二十九日

〔部員〕 小室裕 神田高至 岡田章 桜井理喜 高康行 宮本義明

〔顧問〕 内田一正 松崎中正 小島芳寿

夏山合宿は南アルプス南部。顧問は松崎、小島先生で生徒は十一人参加。連日晴天で計画通り実行できた。ただ、今年度は学校側が厳しく、合宿は八日間までと制限されたので、三伏峠から光岳まで行くことが許されなかった。

と記載がある。

秋になると、両神山を三コースから登頂する集中登山を行っている。南側の梵天尾根パーティーは最も長いコースで、秩父御岳に登ったが、ヤブ漕ぎのために一旦下山。トラックに乗せてもらって中双里付近まで行きそこから登山。翌日、山頂で他パーティーと合流。他は、納宮から楢尾沢峠～天理岳パーティーと、日向大谷から清滝小屋を経たパーティー。どのパーティーも、テントだけのシュラフなしで耐寒訓練を兼ねていた。参加は、四人、四人、三人の合計十一人。

個人山行として武甲山の岩登りの記録もある。山頂の南西側に通称三ツ岩と言われるあまり登られない岩稜があるが、石灰岩採掘がさほど行われていない時代には、こうした岩場が登られていた。

正午から一時間くらいで登り、頂上に少し滞在して、浦山口に午後四時に着いている。

この年のチーフリーダー小室裕は、卒業後も山岳部の指導に熱心だったのだが、進学した国學院大学のワンゲル部で登山を続けた後、就職して数年の頃に積雪期の白馬乗鞍岳で遭難死した。

追悼 初冬の白馬乗鞍岳に散った命

一九七六年十月三十一日 白馬乗鞍岳 小室裕^{たか} 享年二十七歳

紅葉の季節を早々に過ぎた北アルプス母池周辺は、すでに積雪が

始まっていた。川高山岳部から、国学院ワンゲル部を卒業していた小室裕さんは、OBとして冬合宿の偵察山行に、一人で梅池から白馬乗鞍へ上がっていた。

「すでに積雪があるだろうから、ピッケルくらいは持って行くように」

と、兄から言われていたのだが、あまり気にはかけていなかったようだ。

天候がよければ、梅池から白馬岳方面への偵察縦走を行うつもりで登り始めたのだが、風雪になった。途中数パーティーのテントを追い越して、白馬大池の平原に出た。標高は二四〇〇メートルを越える。辺り一体は北アルプスには珍しいほど、火山岩がゴロゴロした地形である。

当初、二人で偵察する予定だったのだが、相手の不都合で、単独山行になったことが仇になってしまったのだろうか。

「遭難の連絡を受けたのは、快晴になった翌日に、後続パーティーが弟の遺体に遭遇したということからでした。火山岩の上に新雪が積もって、それを踏み抜いてどうやら足首を骨折してしまっただけでした。それでも白馬大池山荘に自力で戻ろうと行動を続けました。いいのですが、あの辺は吹雪かれると方向も見失うし、小屋の発見も難しいでしょう。小屋からわずかに一五〇メートル足らずの地点にビバークしたらいいのですが、いかんせんテントは基部にデポしてしまっていました。そのまま疲労凍死でした」

と、小室さんの登山の指導者でもあった、次兄が話す。

小室さんは七人兄弟の三男だった。すでに登山をやっていた長兄や次兄は、ヒマラヤにも遠征した社会人の職域山岳会に所属していた。その兄に連れられて、子供の頃から山登りをしてきたわけだから、川高山岳部に入っても同級生より登山は熱心だった。もちろん学年のチーフリーダーになり、高三で大学進学が決まった後の春合宿にも参加しているし、国学院大学に進学した後も、川高OBとして高校の合宿にも参加していた。

大学ではワンゲル部に所属して、夏には剣岳周辺で一ヶ月も過ごすような登山を続けていた。卒業して建設会社に就職した後も、ワンゲル部OBとして登山を続けていた。積雪期には、次兄と北アルプスの五竜岳に登り、その帰りに八ヶ岳に登ったりもしていた。その頃の事故である。

北アルプスの鎮守は穂高神社（安曇野市穂高）である。ここでは毎年十月に大祭が行われ、引き続き上高地・明神池の奥宮では慰霊祭が催される（嶺宮は穂高岳頂上にある）。事故当時、新婚間もなかった次兄は、生まれたばかりの長男を穂高と名付け、背負って弟の遺体引き降ろしに現場まで登山した。

裕さんが亡くなってからの年数と、長男の年齢は同数である。慰霊祭では、今でも故人の名前が朗読され、それは遺族にとってせめてもの慰めになっている。

川高を卒業して十年。登山家として最も充実していたであろう年齢のときだった。

（編集者）

一九六七年（昭和四十二年）

山行

上ノ原（宝台樹）高原スキー 二月

春山合宿 金峰山 三月二十五日～二十七日

新入生歓迎登山 浅間隠山

夏山合宿 仙丈ヶ岳・北岳・農鳥岳 七月二十五日～三十一日

冬山合宿 北八ヶ岳・蓼科山 十二月二十四日～二十七日

他に沢登り、秋山山行、カモシカ山行など

〔部員〕 中島敏博 江田正 萩原梅司 橋本信行 河原俊昭

〔顧問〕 内田一正 松崎中正 小島芳寿

部報の四号（昭和四十一年三月）、五号（昭和四十二年二月）、六号（昭和四十三年三月）は毎年続けて発行された。この毎年発行は、創刊当時から目標だったのだが、実行されたのはこの三年間が初めて。以降はまた不定期発行となった。本格的に定期発行となるのは、さらにしばらくしてからになる。

二月の上ノ原高原スキー山行というのは、水上の宝台樹スキー場が整備される前の、リフトもない時代の山行である。二日ものゲレンデスキーを担いで自力で登り、テント宿泊のスキー山行に十名以上が参加している。

三月の春山合宿は、顧問不在の山行で、富士見小屋から金峰山を往復しただけで終わった。

夏山合宿は、この数年決まったように南アルプスの北部と南部が交互に登られている。この年は、戸台から入山して甲斐駒ヶ岳を途中まで往復し、仙丈ヶ岳から両俣に下降。再び北岳から農鳥岳を縦走し、大門沢を下山した。

冬山合宿では晴天の蓼科山に登頂。翌日は親湯に下山し、スケートなどをして遊んだ。

記録 文化祭

学校生活の中で最も楽しいことの一つは、やはり文化祭であろう。男子校ともなると、一層大事な行事になる。その理由は言わずと知れている。

こんなわけで、わが川高も九月二十三、四の二日間、文化部を中心に催した。山岳部は運動部として扱われるが、この際は文化部のお面をかぶらされる。

さて、どの部も似たり寄ったりだが、出展内容の種切れで、頭を痛めている。今年の新しい試みは、「おれのコーナー」と「コーヒーショップ」。前者は自分の言いたいことを模造紙半裁に書いて、自分のPRをしようというもの。しかし誰も乗り気せず、中には三人で一枚のずるいやつもいた。後者は、カップルは無料として始めたが、客はガキばかりで「もう一杯」「もう一杯」とうるさくて仕

方がない。ついに一日で閉店とはなった。

しかし、去年から始まった生徒会主催「クラブ対抗音楽コンクール」では、三十二クラブ中堂々第一位。「星が降るあのコル、グリセード」は、二学期早々からみっちり練習を積んだおかげで、見事なハーモニートと美声でお客様をうならせた。山岳部には千円という大金が入り「山溪」を五ヶ月買うことができた。賞状も、汚い部屋にはふさわしくない立派なものである。

(二年 江田 正)「わんだらあ」六号

寄稿 山岳部の思い出

河原俊昭(一九六九年卒)

在籍したのは、今から四十年ほど前のことである。卒業してから、金沢や京都に住むようになり、母校を訪問する機会はほとんどなかった。しかし時々、懐かしい校舎は今はどうなっているのか、正門を入ったところにあった豊かな緑の「くすのき」はまだあるのか、と、思い出したりした。

構内の奥にあった山岳部の部室が懐かしい。お世辞にもきれいとは言えない部室であったが、それなりに居心地のいい部屋だった。汗臭い体操服や、書き込みでいっぱい教科書やプリントなどが目に浮かぶ。練習後に部員たちと他愛もない話をして一、二時間を過ごしたことも懐かしい。今では連絡も途絶えたが、みんなは元気だ

ろうか。

毎日、放課後に部室に集まってから体力増強の運動を行った。学校から近くの神社へランニングをして、そこで腕立て伏せを五十回ぐらい、懸垂も二十回以上、腹筋も五十回以上ぐらい行うのが定番のメニューだった。あるいは喜多院近くの公園で訓練をすることもあった。次の登山に備えて、基礎体力をつけておくこと、山に関する知識を増やすこと等に、訓練の重点がおかれていた。この頃は、毎日毎日身体が鍛えられていくことを実感していた。

実はこのエッセーを書くために、実家に戻って高校時代の記録や資料を探したが、もうそんな古い資料は残っていなかった。あやふやなことを書くかもしれない。ただ「山岳部九十年誌」という貴重なホームページがあるので、それを参考にしながら、思いつくままに書いてみたい。

一番の思い出は、やはり一年生の時の夏山合宿であろうか。一九六六年七月二十六日から八月一日までの一週間ほどの山行であった。

南アルプスの荒川岳、赤石岳、聖岳に登ったのである。北から南へと縦走したのか、その逆に南から北へと縦走したのか、今では記憶が定かではないが、二軒小屋や三伏峠をはじめに通ってから南アルプスの山々を縦走して、静岡の方へと下山していったような気がする。

この夏山合宿で、三千級級の山にいくつも登ったが、幸いなことにほとんどの日が天候に恵まれて、素晴らしい思い出になった。山



1967年7月 夏山合宿 仙丈岳～北岳～農鳥岳 仙塩尾根へ

の頂に立つと、次の山の頂がすぐ前に見えるので、すぐに次の山に行けそうだが、直線でいく方法はないので、当然、何時間もかかってしまう。千^ノほど下って、それから上へまた千^ノほど登るという行程であった。

みんなでヘリコプターがあればいいなと、言い合ったものだった。二時間ほど歩いて二十分ぐらい休むというリズムであったようだ。登りは比較的順調にいったが、下りは一行のスピードがついて膝ががくがくしてしまうこともあった。すべったり転倒したりするのは、下りの方が多かった。

頂上の近くでは残雪がところどころにあった。雪をお椀にもって持参の粉末ジュースを振りかけて即席の氷メロン、氷イチゴをつくってみなで食べたのも懐かしい。誰一人お腹を壊さなかったことから考えると、雪は清潔だったのだろう。

この年の夏山合宿で（次の年の夏山合宿だったかしれないが）、初めて雷鳥を見た。誰かが雷鳥だと声をあげるので、その方向を見ると鳥がいた。地味だけど清楚な鳥だなという印象だった。カメラを持っていて映していればいい記念になったろう。

二番目の思い出は、一年生の秋に、他の一年生部員と一緒に二人で武甲山に登ったことである。武甲山は手近なハイキングコースとしてもよく知られていた。個人的な登山だったので、重たい荷物も背負わずに、疲れたら勝手に休むという気楽な登山だった。緑がまだ色濃かった。

ところどころに、秩父セメントの石灰石の採掘のために、山の斜面が削られていた。そのことは、当時から登山家たちの間で心配の種となっていたが、今はどうなったのであろうか。三年生の卒業記念に再度武甲山に登ったが、途中の道が石灰の粉で一面が白かったのが記憶にある。

三番目の思い出は、一年生の秋（十月十日から十一日）に、両神山集中登山を行ったことである。いくつかの班に分かれて登山を行った。我らの班は、訓練のために、テントを張らずに、シユラフだけで寝たように記憶している。

この時だったが、先輩が白楽天の「林間独煖葉」という漢詩の話をしてくれた。「林間に酒を暖めて紅葉を焼く」という句が心に残った。いつの日か、こんなところで紅葉を焼いて酒を飲んだならば、風流なことだろうと思った。先輩は、古典の時間に習った漢詩の話をしただけかもしれないが、高校生のは、一年の差でも大変な知識量の違いがあって、先輩は風流なことを知っているなと感じたものだった。

一泊の登山となると、夕食後はみんなで他愛もない話をしたものだった。思春期の高校生ならば異性の話をするだろうが、男子校なので部員のほとんどが女性との付き合いもなく、あまり話題にならなかった。その代わりに、刃りがしーんとしている中で、怪談がよく語られた。たき火の明かり以外は何も見えない中で、怪談を聞いていると、実際に魑魅魍魎ちみもろうちどもが暗闇から現れてくるような気がして不気味だった。

この代の部員たちの特徴としては、みんな歌がうまかった。無骨な感じの部員たちだが、歌を器用に歌うのは驚きだった。テントの中では、部員たちが順番に自慢の歌を披露していくのだが「いつかある日」「山男の歌」「銀色の道」「シーハイルの歌」「エーデルワイス」などがよく歌われた。

私は残念ながら音痴なので、もっぱら聞き手であったが、登山と音楽とが強く結びついていることを感じたのであった。歌の上手だった二人の先輩はもう物故されている。

川越高校の山岳部で自分が一番学んだことは何か。やはり自然への畏敬の念を抱くようになったことなるだろう。文明の手の届かない自然の中で、生きる体験をするのは貴重である。木を拾い集めて何とか火をつけて、飯盒やコッヘルで煮炊きをすることで、自然と人間の結びつきを再確認することができたように思う。

ところであの頃は、重い荷物を担いで山に登ったのだが、今は手ぶらで平地を三十分歩くのもきつい感じがする。この二十年間ほとんど自動車を使ってきたので、足腰が弱くなったのだろう。昨年京都に移住したことを機会に、いろいろな寺社を訪ねて「歩く」という習慣を取り戻そうと考えている。



土合駅の地下ホーム

白毛門や谷川岳を登るときの最寄り駅。日本一のモグラ駅と言われるのは、下り線が地下七十メートルにあり、地上改札口まで四百六十二段の階段を昇らなければ、地上に出られないという構造から。一九六七年（昭和四十二年）に複線化された時のこと。そもそも小説「雪国」で有名になった上越線の清水トンネルが開通したのは昭和六年。当初土合駅は単線の信号所で、駅になったのは五年後。昭和四十年代に複線化されたが、昭和五十七年には上越新幹線が開通して、在来線は寂れ無人化された。現在一日平均の乗降客は十七人。列車五本。ほとんど登山者と鉄道マニア。エスカレーター設置の話も立ち消えた。なお上下線とも付近でループ構造になっていることも特徴的。

一九六八年（昭和四十三年）

山行

春山合宿 四阿山→根子岳 三月二十四日～二十九日

新入生歓迎山行 大菩薩嶺 四月二十九日

第一回トレーニング山行 有間山 六月二日

第二回トレーニング山行 外秩父 六月二十三日

夏山合宿 南アルプス中南部 七月二十五日～三十一日

初秋山行 裏妙義山 九月二十四日

冬山合宿 八ヶ岳・天狗岳 十二月二十四日～二十八日

〔部員〕 藤井亮助 高橋宏 安田明

〔顧問〕 内田一正 松崎中正 小島芳寿

山行記録 武甲山カモシカ山行

Y、Tとぼく、それぞれ大ききの違ったザックを背負って電車に乗り込む。川越駅で二年のGさんが乗って全員そろった。夕闇が迫ってくると、それに乗じて先輩の話に、ぼくらの心を不安にするような言葉が漏れはじめた。夕闇から暗闇へと変わるころ、東飯能駅で満員のバスに乗り込む。名郷なごうで水とチョコレートチョコレートを補給し、暗闇の中を妻坂峠に向かう。山間のトラック道を歩きながら、恐怖の念

に心は覆われ始めた。山道の分岐で二人ずつに分かれた。

一回目の休憩。地図を開き、懐中電灯の光に当てて読む。寒くなってきたので、首にタオルを巻き、セーターを着る。空には雲一つなく、月と星だけがやけに光っている。やがて、目の前に、黒い大きな空間が広がる。いよいよ始まる。

一度ガレ跡を登っていったが、違うらしいので引き返す。別の道を選んで、どこだか分からないところへ出てしまった。何せ懐中電灯一つを頼りに行くのだから、周りを見ても道らしいものは見つからず、あえぎあえぎ、どことも分からぬ山腹を登り続けること一時間半、やっと着いた尾根で休憩、エネルギー源を本格的に補給する。やっと慣れてきた静かな暗い山道を西へ西へと進んで、着いたピークが大持山おもちやまとは、いやはや驚いたり、うれしくなったり。

大持山に元氣付けられて、夜の恐ろしさも何のその、小持山なんかスイスイと流してゆくと、黒い大きな影が月と星の光を浴びてはくらの前に立ちはだかった。恐怖感の追いついたものの、疲れと睡魔とが共同戦線を張り、二人を襲ってきた。子持から一時間二十分、武甲山直下に来た。この時はうれしかった。

階段を登って、神社から山頂に行き、秩父の夜景を眼下に、黒い両神を西の方に見たときは何ともいえない気分だった。

「いま何時だ」

「午前二時だ」

「昭和四十二年十月十日の武甲山一番乗りはおれたちだ！」

（二年 藤井亮助）「わんだらあ」六号

一九六九年（昭和四十四年）

山行

春山合宿 苗場山 三月二十五日～二十九日

新入生歓迎山行 稲包山 五月四日

第一回トレーニング山行 武甲山 六月一日

第二回トレーニング山行 川苔山 六月二十二日

夏山合宿 荒川岳・茶臼岳 七月二十二日～二十九日

沢登り講習会 ヒツゴウ沢 八月二十七日～二十八日

初秋山行 浅間山・武尊山・裏妙義山 九月二十二日～二十三日

トレーニング山行 丹沢 十一月二十三日

冬山合宿 安達太良山 十二月二十四日～二十八日

黒百合合平 十二月二十四日～三十日

〔部員〕 大竹良介 新井康民 中里孝 鈴木茂 田中章夫 李健秀
平井正巳 山崎和達

〔顧問〕 内田一正 松崎中正 小島芳寿

部報の七号は、二年分をまとめてポリユームのあるものがこの年に発行された。三月の春山合宿はスキー合宿で、卒業した三年や、OB小室裕らも参加して総勢十八人になった。スキー場として開発されていない頃の苗場山で、和田小屋まで丸一日がかりのラッセル



1969年7月 夏山合宿 荒川岳～茶臼岳 縦走路にて 前列の松崎・小島先生と現役

で到着し、上部は神楽峰まで登った。

またこの年は十二人が入部し、五月の新歓は総勢二十七人の大所帯となった。合宿でA・B隊とパーティーを分散するようになったのはこの頃からである。

夏山合宿も総勢二十人

で、南アルプスの三伏峠から茶臼岳まで。また谷川岳のヒツゴウ沢では沢登り講習会が行われ、二年が三人と顧問が参加している。

九月の初秋山行では同時期に三ヶ所の登山が行われ、浅間山には七人、武尊山には九人、裏妙義には五人が参加した。十月のカモシカ山行でも、両神山へ十人、武甲山に十人と二ヶ所で山行が組まれた。冬山合宿も、安達太良山と八ヶ岳の二ヶ所が組まれた。

山行記録 春山合宿 苗場山―和田小屋

三月二十五日～二十八日

目的…春山及びスキー技術、雪洞技術・雪上生活技術の習得。

参加者…顧問二名、OB四名、二年二名、一年十名、総勢十八名。

一年生の雪山訓練が主体であった。この春山は一年の山行の中で最も楽しかったとの意見に、筆者は本格的山行は初めてであり、総括した感想は、「素晴らしかった」より「夢中で、疲れて、分からない」と記している。

第一日 部で最高の嫌われものの圧力釜をザックに入れ、体重の半分以上の三十五キを背負って雪中の靴跡を踏み伝えて歩いてゆく。先ずは背中の違和感に始まり、静寂な世界にも関わらず思考は妨げられ、ただザックザックと言う靴音を頼りに機械的に歩を進めるのみ。圧力釜の必要性を頼りに心に言い聞かせ、ボンヤリした頭は判断を欠き、機械的リズムにあわせヤケ気味につぶやく調子で歌を繰り返す。「小休止」の声が掛かる、ザックを背負ったままの格好で山側にターンと仰向けにひっくり返って大きく深呼吸。この瞬間「生」の歓喜と感動と脱力感を感じる。

何度か同じ繰り返し、次第に疲れが増し駄洒落も微笑みも消える。サングラスの汗をぬぐう気力も失せた頃、小屋が見え頭が急に鮮明になる。しかし送電線監視所だった。嫌味な雪中を上がり下がりとラバース。今度は小屋であったがやり過ぎし、悪戦苦闘、ヒヤリ、

必死を重ねベース地にたどり着く。またザックを背負ったままひっくりかえって見た空は夜の帳を降ろそうとしていた。

第二日 昨日とはうって変わって楽しい日を迎える。昨日はザックの上で悩まされた板つきは、今日は足の下にくっついて下級生を喜ばせた。OBによるスキー講習。顧問と他のOB、上級生は苗場山の偵察。

転び方・直滑降・斜滑降・ボーゲン、理論通りに行かないヘッピリ腰が次第に体が感覚で覚え楽しさに変化して行くのが分かる。これが待望のスキー訓練習得であった。

午後は小屋までの水汲み、圧力釜での飯炊き。十八人の大所帯、四五Lを無視して五L炊く。膨らむ余地無く「すしづめ飯」。或いはこげつきの「センベイ飯」、炭化寸前の代物も夜食に化けた。

昼のうちに掘った雪洞（二辺立方の穴にスキーをハりに渡してシートをかけた代物）に三人で寝ることになった。顧問の先生の言「中はとても暖かい」そうだ。その通り、夜中に何度も目が覚め、寒くてとても眠れたものではなかった。

第三日 サブザックでBCを出発。OB、顧問、二年はスキーを担いだ。頂上から滑り降りるそう。ほくたちはワカンだ。スキーより安全で、しかも早いそう。ホントか。

和田小屋があった。見たところ一階か二階か分からん。聞くと、三階建てだそうだ。沢の雪の上を渡って直登。いよいよワカンをはく。樹林を出て、雁ヶ峰の頂上には十一時ごろ立った。すごい展望。先生が地図を開いて周囲の説明を始める。「あっちがキタね。あの

形は槍だね……。」フーン、なるほど、日本って広いんだ。

先生が地図をたたむと出発。尾根を伝って神楽ヶ峰へと向かう。ワカンに雪がくつついて重くなる。それでも神楽の稜線に出たときには足も楽になった気がした。

目の前にどこが頂上か分からない苗場山がデンと腰をすえている。苗場とお見合いをしながらの昼食は、パンとマヨネーズだけはアンマリだ。それでも五、六枚も食ったやつがいたとは、彼のいつもの生活が知れた。

先生のおっしゃるには、苗場の登りが相当のヤセ尾根で、時間も中途半端だから、このまま下る、と。一年の残念！の顔つきの本心はバンザイかも。下るだけでは時間があるので、先輩のスキーのお手並み拝見といく。なぜか転ぶとみんな拍手した。

ぼくらはワカンではたばた下り、顧問はスキーでスイーツと行ってしまう。しゃくにさわったけれど、仕方ないこと。けれど、スキーがズデンとやると、ワカン隊から歓声が上がったのは、相当根に持っている証拠だ。くやしませにバタバタと威勢よく下った。走るのが転がるのか。おかげでバンドを切った者が何人もいた。

冷静に考えてみると、ワカンなんてなくたってよかったです。ないか。なぜって、要するに、海を歩いて渡るコツで、あれほど速く足を動かしたらスキーみたいにスーツ行けたんじゃないか。ワカンもスキーもほとんど同時にベースに着いた。

そして、その夜のラジオは明日から天気が崩れると伝えた。

第四日 起きてすぐテントを撤収。驚いたことに、テントの土台

が三十センチも高くなっている。この時期の融雪の凄まじさ！ ガスがかかって視界が悪い。三隊に分けたのは、どうして？ 先生の「雪崩で死んでも四、五人で済みますネ」物騒な話に一同びくついた。

ぼくらが落とした雪が斜面を転がりながらどんどん大きなパウムクーヘンになるのは愉快だった。大島集落で、バスを待つ間に、道端に小さなお堂を見つけてみんなして上がりこみ、ラーメンをつくって食ったのは忘れられない思い出だ。

だれの顔もすっかり雪焼けで、サングラスをかけてた者はカメレオンみたい。自分の顔は見えないから人のことを笑っている。バスの中の女の子が何でじろじろおれ見てるんだ。

(二年 山崎和達)「わんだらあ」七号

随想 雪の登りで考えたこと

腰までのラッセルを強いられることすでに三時間余り。重荷には慣れているはずのぼくの両肩も、十人用テントの重量の前にはついに屈服してしまった。手を腰に当て重心をずらせても、痛さを回復させることはできない。確かにつらい。土の上を歩くのとは訳が違う。足を踏み外し、腹の辺りまで落ち込んでしまった日には、足を雪の中から引き抜くだけでも大きな労力を必要とする。

何でこんな苦しい山へ来たんだ？ 雪の中をものがきつつ、思う。そういえば山に来ると、いつも同じような自問自答をしているみたいだな。そればかり考えているぞ。ポッカのとき、三伏の登りの

とき……。

でもそのたびに結論が出ないまま終わってしまう。結局、こんなことを考えるのは、単なる愚痴に過ぎないのか。いや、でも違うぞ！あのマロリーだって、人になぜ山に登るのかって尋ねられたとき、すかさず「That is, it is there!」って答えたじゃないか。ほくだつてそう思う。でもやっぱり自分の答えを持たなくちゃいけないんだ。

雪は相変わらず降り続けている。もうザックも頭も真つ白。さっきまで見えていたはずの耳二つ（注・谷川岳の双耳峰）もいまは姿を隠してしまった。足はさらに重く、その上、空腹まで重なり全くイヤな気分の中をただ歩く、そして考える。

友だちに「お前の山は現実から逃げるためのそれでしかない。山はそんなに甘くはない。親を悲しませる前にやめちまえ」といわれたことが一度ある。もう二年も前のことだけど、どうして今も心に引っ掛かっているのだろう、やはりほとくの山登りもそんな一面があるからかな。

確かに山に入ると、少しは、いや、ものすごく解放された気分になる。学校にいたんじや、毎日毎日が勉強で、少しも休まる暇がないからな。でもただそれだけの理由で、こんなデカイ荷を背負って山に来られるものか。やっぱり何かほかにその現実逃避だけじゃない一面があるに違いない、と思う。

山の美しさを見に来るのかな？ うん、そうかもしれない。あの十月の白峰なんて、口じゃいえないぐらい素晴らしかったから。あの時は山に来た喜びをしみじみ感じた。確かに山の美しさを見に来

る、という点は、少しはこの問いに対する答えになつてる。

だけど、待てよ。美しさを見にくるというだけじゃ、やはりおかしい。だって考えてみる。十一月の丹沢が美しかったか。濃いガスを、全く何も見えなかったじゃないか。でもあの山行は山の景色を見るといふことじゃない何かが含まれていたからこそ、楽しかったんだ。

うーん、何だろう。ガス？雨？人間！

そうだ！あの山は先輩二人と同輩一人の四人で行き、気の合った人だけだったんだ。そうに違いない。テントの中に雨が浸入してきてひどかったけど、そのつらさをほぐしてくれたのは先輩の言葉じゃないか。先輩の人柄にもちよつと触れられたな。先輩の言葉しさも分かったじゃないか。そうだ、山に入って本当に人のすごさも分かる。これも答えじゃないか。そうだ、そうだ。山に来る理由はいっぱいあるんだ。それは一つにはならないんだ。

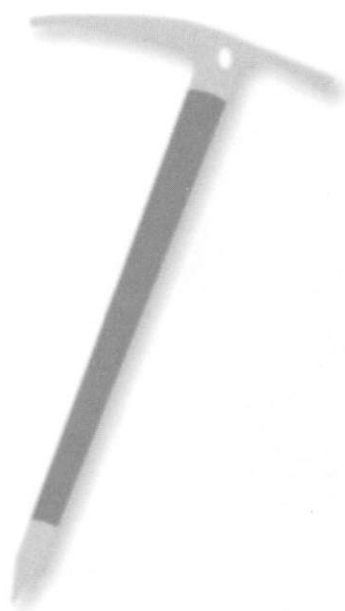
山に来る理由は限りなくある。現実逃避もいいだろう。景色を見るのもよい。人と話しくるのもそうだ。——もしかしたら、その理由の一つ一つを知るために、ほくは山に来るのかもしれない。それは一生かかっても探しきれないものなんだ、山に来る理由は。

雪の登りはまだ続く。苦しさはさらに募るだろう。でもほくはそれには参らない自信がついた。この苦しさも山に来る一つの理由かもしれない。それだからこそ足も重いのに動く。ほくは歩む、自分の開いた道に進むため。（一年 森田英和）「わんだらあ」七号

第三部

高等学校山岳部の記録

——一九七〇年（昭和四十五年）～二〇〇八年（平成二十年）



一九七〇年（昭和四十五年）

山行

春山合宿 四阿山

新入生歓迎山行 雲取山 五月十日

第一回トレーニング山行 武甲山 六月七日

第二回トレーニング山行 秩父 六月二十一日

夏山合宿 南アルプス北部 七月二十四日～三十一日

合同山行 蕨山 十一月十五日

冬個人山行 ハケ岳・赤岳・硫黄岳 十二月二十四日～二十八日

〔部員〕 小沢忠雄 細野浩一 安藤時義 菊池敏文 小林義明 小

峰清経 福田敬 水村祐一 森田英和

〔顧問〕 内田一正 松崎中正 小島芳寿

新入部員が入る前の春山合宿は四阿山で行われた。この年、新入部員が急増した。総勢二十九人。南アルプス北部で行われた夏山合宿には、二十二人が参加した。個人山行も活発になっている。十一月には、川越女子高校と合同山行が行われた。前夜泊である。十一月には、川越女子高校と合同山行が行われた。前夜泊である。

年末の冬山合宿は行われず、代わりに二年部員は四人で、ハケ岳に行った。晴天の行者小屋から、前日には硫黄岳、この日に赤岳を登頂して翌日下山した。



1970年7月 夏山合宿 南アルプス北部 仙塩尾根
三峰岳直下での這松帯 藪漕ぎ

記録 合同山行 蕨山

十一月十五日

食事は女子が大体作ってくれて、男子は手伝う程度で良いということだった。僕とSは玉ねぎの皮をむくのを手伝った。動物園のサルのごとく必死にむいていたが、ふと目を移したときそこに重大な

る発見をした。何とそこには「まな板」があったのであります。

「越えてるう」

思わず感嘆のため息。なんといつても僕らなどは、せいぜいベニヤの端っこ（汗が染みて反り返っているやつ）がいいとこ、大体コッフェルのふたで間に合わせているのだから。

楽しい夕食の後のつまらない自己紹介が終わり、勝負は各テントへ分かれてのミーティングへと持ち越された。僕とSと二年生のHさんと、可憐な美女三人（テントが暗かったから言えるのです）とは、互いにどうも純情すぎるのか？話が進まない。

蔵山へは男子はサブザック、女子は空身。途中雨が雪に変わった。この時女子高校顧問氏すかさず曰く、

「帰って、お母さんが『雨が降って大変だったでしょう』と言ったら、『雨なんか降らないヨ、雪が降ったノ』とスマシテ答えな」

と。この先生いろいろなところでぼくたちを笑わせてくれて楽しかった。わが山岳部顧問のM氏とどことなく共通点があるというのが、大方の部員の意見だった。ちなみに、ぼくらの顧問は一人も来なかった。

今日の山行は男子だけでは得られないことをたくさん学べたし、何といつても楽しかったことなど、いつもの山行に比べてずば抜けていたから、大層意義あるものであったと思う。特にNなどは、今回女子高校山岳部顧問にあこがれ、進路ももう決まったようだし。

（一年 森本克之）「わんだらあ」八号

寄稿 遠回り好きな山仲間たち

小沢忠男（一九七二年卒）

野球部、テニス部、サッカー部、卓球部、剣道部、体操部、美術部、音楽部等々……。

高校一年の四月、中学の先輩に紹介され門を叩いた川越高校山岳部では、十二名の同期に出会った。彼らは中学校で、このような多種多様の部活出身者だった。ともに個性豊かな連中だった。一学年上の二年生十名も、輪をかけてユニークで変わった人々の集まりだった。この二年生のチームの和を保つことの至難さは容易に推測できた。私たちは二年生にかなり感化されていた。

「自分にとって部活とは何か」

そんなことが、高校生活のテーマに上がっていた。それぞれが新人として、新人歓迎合宿や夏合宿の南アルプス、春山合宿、個人山行等に真剣に打ち込み、皆が「山」を極めようとしていた時期。世相はフォークソング・ブームになった。反戦運動も含めた強烈なメッセージ・ソングは、PPM（ピーター・ポール・アンド・マリー）の三人組であり、S & G（サイモン・ガーファンクル）の二人組だった。我々は没頭した。高校の予餞会には、小室等や吉田拓郎、泉谷しげるなどが来ていた頃である。

多感な時期に、すべてを同等に位置付けようとしていた。山の話



1970年 春山合宿 四阿山 ベースキャンプ付近 全員尻セードを楽しむ

をしながら、写真が張り巡らされる部室に籠る。部員の弾くギターを聴き、歌を歌う。社会について語り、意見が食い違う中で夜遅く

まで討論した。何人かは、限られた時間の中で山行回数が少なくなること葛藤があった。

「第一優先は何か？」

「何よりも山に行きたい。山について語り、スキルアップしたい……」

このような中で、ある者は部を去り、ある者は微妙なバランスの中で両立させていた。同期部員が多いことは誇れるが、個々人にとっては抜いの難しい、研ぎ澄まされた感性を持っていた集団であった。

もちろん山岳部員であるから思い出も多い。今でも同期が集まれば、上越高倉山の雪上訓練で稜線の巨大な雪庇を踏み抜いて腰を抜かした事件はよく語られる。私個人も、正式に許可が得られず顧問に相談して内緒で行った冬の赤岳の頂上で、下山時に転倒しかかり肝を冷やしたことなどはスローモーション画像で鮮明に覚えている。

そして四十年たった今、私たち同期はほぼ全員が、新年会や五月の連休、夏のキャンプ、忘年会と頻繁に顔を合わせ、時には家族や親しい同級生を巻き込んで「山岳部での仲間の絆」を深めている。年代と共に、相互の助け合いや適度の息抜きの場として、肩肘張らない付き合いの場となってきた。

十五歳で出会ってからの、たった三年間の山行をきっかけとして続いた四十年。貴重な輪が続いていることを本当に不思議に思う。「山は心のふるさと」だからだろうか。

一九七一年（昭和四十六年）

山行記録 春山合宿・武尊山

山行

春山合宿 武尊山 三月二十五日～二十九日

新入生歓迎山行 平標山 五月九日

学徒大会 叶山 五月十八日

集中山行 武甲山 六月十三日

夏山合宿 南アルプス・光岳く上河内岳 七月二十二～二十九日

冬山合宿 蓼科山 十二月二十四日～二十八日

〔部員〕 柳川俊泰 志村孝夫 小林輝行 小林三千雄 手塚賢一

戸田徹 戸部秀明 野本芳孝 早川誠 森本克之 山田俊也

〔顧問〕 内田一正 松崎中正 小島芳寿 増田肇

夏山合宿の南アルプスは、最南端の寸又峽温泉から延々三十五キロの林道歩きの末に、ようやく光岳に登頂した。山岳部の過去歴を辿れば、これで南アルプスは全山に足跡が残った。ただ荒天続きだったことが、悔やまれる。

この数年部員が多くなるにつれて、個人山行が活発になってきた。この年個人山行は七回行われ、翌年には十回行われている。部員は平均して年に六回ほどの計画山行に参加し、他に二、三回の個人山行を行っているということになる。

三月二十五日 晴れ 上の原のキャンプ
夕方のハブニング。

「たいへんだア！」

途中から付いてきた一見、野良犬風が、ほくらの虎の子、雪の下に埋めておいたカレーの肉をくわえて逃げ出した。そこで、ちょうどワカンをつけていた僕はすぐさま、そいつを追った。雪原の中に練り広げられた大捕り物。僕の足と頭とを使った犬との駆け引き、さまざまな遣り取りの末、首尾よく包みを取り返した。僕は今夜のキャンプの英雄であった。

二十六日 晴れ 沖ノ武尊

起こされたのが三時。外は意外に寒く暗かった。朝食のクリームシチューは夢中で食わねばならぬ。味わっているはいけないのだ。ただパンと一緒に胃へ直通させ、六時に出発。

A隊は一ピッチ目に松崎先生に雪上の歩行、ピッケルの使い方などを教えてもらった。これは、後でとても役立つ。三ピッチ目にアイゼンをつけて登り出す。ほとくの持ち物はザイルだけだと思つたとき、水を忘れたのに気がついてドキン。だが、考えてみれば、周りは全部水ではないか。

かなり長い登りが続いた。もう足が命令に従わなくなったころ、

ぱっと目の前が開けた。と思つたら、それは藤原武尊ふじわらはたかの雪の壁だった。足が一步ごとに潜り、苦しんだ。

ようやく昼食。一斤のパンは大変と思つていたのに、いつしか腹に収まっていた。山頂はもう目の前だが、強風で倒れそうになる。一歩間違えばもうピッケルなんかじゃ止まらない。そんな生死の間ではなくて尾根を詰めて、山頂に立った。この気分が実にいい。これだけは、体験した者だけが味わえるものだ。しかし、予定時間より遅れたため、頂上には五分しかいられなかった。一瞬だったが、目もくらむ三百六十度の大パノラマは忘れない。

(二年 山田俊也)「わんだらあ」八号

寄稿 三日間停滞した南アルプス光岳

戸部秀明(一九七三年卒)

川越高校に入学したのは、昭和四十五年のことである。当時、七十年安保による高校紛争が終わった直後で、制服が廃止されるなど学校内は大変自由な雰囲気であった。安保自動改定の日であったと思うが、上級生が校内でデモをするなど、紛争の余韻もまだ残っていた。

私は、競技で勝ち負けを競うことや運動部的な体質が嫌いだったものの、何か運動はしたいと思つていたことと、中学生のときの八ヶ岳登山の体験が忘れられず、親の反対はあったが山岳部に入部し

た。思えば山岳部とは、何かの型にはめ、集团的活動を強いるといった運動部的体質とは異なつて、個人の判断・責任において行動しなければならぬ部分が大きく、自立的で自由主義的な活動が、私の性分にあつていたのである。

同学年の部員は、柳川俊泰、志村孝男、戸田徹、小林輝之、小林三千雄、森本克之、手塚賢一、野本芳孝、早川誠など十人位だった。顧問は我らが松崎中正である。

新入生歓迎登山で雲取山。飯能から秩父へ抜ける歩荷訓練登山などを経て、一年の夏合宿は南アルプス北部の縦走を行った。伊那を起点に戸台川をつめて北沢峠までいき、仙丈岳を経て(甲斐駒に登った者もいた)、馬鹿尾根をとり塩見岳まで縦走して三伏峠から下山した。このときは大変天気恵まれたが、どこで幕営したときか忘れたが、夕飯の支度をしているときラジオから北海道の日高山脈の山中で大学生がヒグマに襲われたというニュースを聞き、驚いたことを覚えている。

翌年、昭和四十六年の高校二年の時の夏合宿では、南アルプス南部をめざすことになった。当時川高山岳部では、北アルプスなどを馬鹿にするといった風潮があり、夏合宿はアプローチが長い南アルプスを一週間かけて縦走することが当然であると考えられていた。南アルプスの南部とは、悪沢岳、赤石岳、聖岳を縦走するという一般的なコースを指すものと思つていたが、中正先生が、

「そのようなところは行き飽きた。光岳に登りたい」

との一言で光岳から聖岳まで縦走することになった。「行き飽き

た」のは中正先生であって、私たち生徒は行ったことがないのだから、中正先生のわがままに付き合わされた訳である。

アプローチは、静岡県側から大井川鉄道で金谷から千頭に行き、井川線に乗り換えた。そして寸又峡から、柴沢の途中まで林道三五_キを歩かなくてはならない。途中で通りかかったトラックの運転手に頼み込んで、荷台に乗せてもらうという、今では考えられないようなこともあったように思う。

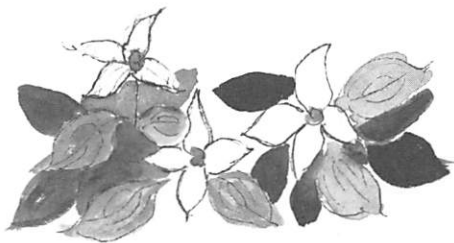
この年は、折から台風が襲来して、柴沢から雨中のアプローチの途中で蛭に悩まされながら登ったが、下級生の万燈君のあごに蛭がついていて、それを振り払ったこともあった。しかも台風の直撃で林道途中の廃屋のような釜の島小屋で二日停滞した。このときにアオダイショウが小屋の梁から落ちてきた。行くべきか留まるべきかの判断は、生死の問題に直結するといって過言ではない。釜の島小屋で中正先生と部員のみなどで協議して決めた。行きたいという気持ちとどのよう折り合いをつけるのか、難しい場面を経験したのは、若い頃の自分にとって貴重な体験だった。

停滞後、光岳に登頂したが、丸い土に覆われた山頂は雨がやまずガスっていて、見晴らしは全くなかった。山頂近くの光岳小屋に大阪大学の学生がテントを張っていたが、強風に吹き飛ばされそうになって、学生が開き直って幕営していたような印象があった。翌日は、光岳小屋で一日停滞した。

その日の午後二時過ぎ頃であつたらうか、福島県の工業高校のパティーが疲労困憊して小屋に到着したが、中正先生の教えてくれ

た、どんなに小屋が狭くとも人が沢山いようとも詰め合つて受け入れる山のルールに従つて、狭いところに福島の高校生とひしめき合つて一晩過ごした。彼らが餅を焼いて食っていたのが、強く印象に残っている。結局、停滞の影響で茶臼岳までで下山し、畑薙ダムに降りていき、高校二年の夏合宿は終わった。当時の私は、大学受験やその他の将来に対する漠然とした不安を抱いていた。

その中で、山に登り、自然に触れて無心になることによって、パランスをとっていたのだと今にして思う。必ずしも熱心だったとは言えないが、私の青春、高校生活にとって、川高山岳部はなくてはならない存在だった。川高山岳部に入っていなければ、全く違った人生を歩んでいただろうと思う。私の山に対する憧れは、戻つてこない青春への懐古とないまぜなのである。



S.N

一九七二年（昭和四十七年）

山行

春山合宿 至仏山 三月二十四日～二十八日

新入生歓迎山行 白毛門山 五月十四日

第一回歩荷訓練 武甲山 六月四日

第二回歩荷訓練 川苔山 六月十八日

夏山合宿 塩見岳、北岳、鳳凰山 七月二十五日～三十一日

冬山合宿偵察 八ヶ岳 八月二十三日～二十四日

冬山合宿 八ヶ岳・硫黄岳・赤岳 十二月二十四日～二十八日

〔部員〕 前田泰 山下敏之 岩田好司 石川進 西海敏夫 三上光

一 万灯章雄

〔顧問〕 松崎中正 小島芳寿 増田寧

冬山合宿の偵察山行というのが、夏休み期間に行われた。参加は二年と一年の少人数パーティー。つまり冬山合宿の予定は、夏休みの前に決められていたということになる。

二年部員の万灯章雄は一年部員の渡辺直治と、夏合宿の終了後、北アルプスの個人山行に出かけた。この時代、合宿の定番は南アルプスで、北アルプスへは個人山行で行くしかなかった。

信濃大町から七倉を通って建設中の高瀬ダムの脇から、湯俣へ出

る。そこから現在では廃道となっている伊藤新道を登って、双六岳から槍ヶ岳へ縦走。天候はあいにく悪く、二人は中岳のテント場で一日停滞。翌日の晴天を待った……)

山行記録 北アルプス縦走記

八月十一日～十七日

起床一時。ピュッと飛び起きてテントから首だけ外に出す。「晴れた」と思った。空は天然のプラネタリウムである。どれが何という星座だか一杯ありすぎて分からない。口を開けてすうーっと大きく息を吸うと、光る粉が口の中に入ってきて、とても美味しい感じがする。しばらくはこの満天の星空に浸った。東を見れば、星の出ているところと、出て粉粒が見えるところの境を辿っていけば、常念岳の形になった。南を見て同じことをすれば穂高の形になった。残雪は星明かりで薄っすらと光って見えた。

出発のときは、すでに東の空は赤くなり、太陽によって星屑は食べられようとしていた。歩いていても一歩ごとに東の空は明るくなり、星の粒が一つ一つその光に食べられていく。

南岳の稜線のところで御来光だった。遙か彼方から続く雲海が、太陽の出現と同時に赤く染まった。そしてこの数日間晴天から飢えていたのか、すかさず槍と穂高の山々が、太陽から一直線に伸びてきた光を吸収する。西を振り返れば笠ヶ岳の縞模様光の当たる面と平行している。誰もいない静かな夜明け。

平坦な南岳を過ぎると、大キレットにかかる。一步一步慎重に下るが、ガイドブックに書いてあるほど恐ろしいところではなかった。行く手には北穂の山頂の小屋が光って見える。次第に尾根は痩せてくる。ハシゴヤクサリ場があるから、必要なときはそれを使った。滝谷の谷底から吹きすさぶ風は冷たく、僕の顔をなでる。足を止めれば蒲田川の流れの音が滝谷を伝わって聞こえてくる。

大キレットは槍と穂高を結ぶ大きな吊り橋である。その床板は糸のように細く、辛うじてつながっていた。飛驒泣きがどこなのか分からない間に、すでにキレットは終わり北穂へジグザクの登りに入る。胸を突くような急な登りを終えると山頂に立った。

南岳からの吊り橋がよく見える。今まで遠くにあった奥穂の頂も、この吊り橋を越えただけで急に身に迫ってきた。空は青く澄み渡っていた。昨日までの天候が嘘のようである。今見る槍ヶ岳は、高瀬川を遡るとき見た槍ヶ岳でも、西鎌尾根の最後の登りで見た槍ヶ岳でもなかった。

もつと鋭く、太陽の光線をその穂の一点に集めたエネルギーがな槍ヶ岳であった。その穂先が天頂を一突きにするように見ることができたのである。

北穂の山頂を出ると南稜のテント場が見える。そのカラフルなテントの上の岩稜帯を進む。今日も渡辺は調子がいいらしい。僕を置いてどんどん先へ行ってしまふ。しかし僕はちよつとバテ気味だったから、無理はせずマイペースで行くことにした。北穂と涸沢岳の間は大キレットにも増して危険なところである。クサリを使いなが

ら進む。

滝谷を登るロッククライマーの姿が見える。向こうの笠ヶ岳まで響くようなハーケンの音がこだまする。途中で女の子のパーティーと話したりする。涸沢岳の山頂でやや休憩した後、穂高岳山荘に一気に入った。

穂高岳山荘の女の子もそうであったが、最近こんな山奥にはもつたないような可愛い女の子が増えている。槍ヶ岳へ泊まったときも、山荘に可愛い女の子がいるといつて、渡辺が喜んでいた……、などと考えながら登っているうちに、奥穂の山頂へ立った。そこには大ケルンがあり、数パーティーの人々がそれぞれの形で山頂でのひとときを楽しんでいた。

周りの山々は、みんな僕らを見ているようであった。午後の陽は山の形を和らげ、朝見た北アルプスとは違った山がそこにあるようだった。三一九〇以上の山頂の大ケルンは、和らいだ山々を一心に引き立てようとし、すべての北アルプスの山々を統制しているように見えた。

二十分山頂でくつろいだ後、前方に見える前穂高へ向かった。ジヤングルムは黒く、午後の陽で和らいだ山々の中にあつて、一人胸を張ってそびえているような感じだ。遠く上高地を望みながら吊尾根を行く。

西穂高とジヤングルムの凹凸のある稜線の隙間から漏れる西日は、もう岳沢の谷底を照らさない。前方の明神東稜がやけに光って見える。遠く南アルプスの山々は、視界の中から消え去ろうとして

水蒸気のベールを着ようとしていた。

前穂高の頂上は大きな石がゴロゴロして歩きにくい。ケルンが乱立していて、そのケルンの向こうに奥穂が見え、北穂が見え、槍ヶ岳が見える。もしかしたら高校生活で最後の三千円峰になるかもしれない……、そう思うと長居がしなくなった。空はもう雲が発生し槍ヶ岳が見え隠れしていた。山頂には誰もおらず、とても静かだ。北アルプスの山々ともこれでお別れだと思つと、名残惜しくもあつたが、山頂を出発し岳沢に下る。

もう岳沢は夜だった。僕らはその闇の中に吸い込まれていく。その闇の中からそびえ立っている穂高、穂先と稜線だけが夕陽を浴びている穂高、その両方の穂高が混じり合つて作り出している穂高は、今まで見たことのないような巨大な山に見えた。

岳沢ヒュッテに下つたときは、闇がすでに北アルプスのすべての山を包もうとしていた。ヒュッテのテント場は水場に苦労した。残雪の雪解け水を使うのだが、水滴として少々垂れているに過ぎない。ポリタン一杯水を入れるのに、相当な時間を要した。僕らの隣のテントはお巡りさんのテントであつたらしい。夜遅くまで思い出話や自慢話をしているのを聞いていて、とても面白かつた。

翌日、八月十七日は僕の誕生日である。今日で十七回の誕生日を迎えたことになるのだが、これほど充実感に満ちた日はない。昨日、岳沢へ下るとき三日ぶりに樹林に入るときに湧いた満足感と、今の充実感とは山からの最高のプレゼントだった。今まで三日も樹林から離れていたせいであろうか、岳沢の木々も上高地の木々もその緑

が眩しかった。梓川の流れば、硫黄臭くて周りが赤土で樹林のない地獄のような湯俣川に比べると、とても美しく見えた。

一口に言つて今回の山行は、マッチを忘れてたり、石油が足りなくなつたり、行動においては最低であつた。が、北アルプス、槍穂の連山を一通り歩いたことによつて、この六日間、来る前よりも一段と自然が自然らしく見えるようになったということが、何よりも嬉しかった。

(二年 万灯章雄)「わんだらあ」九号



S.N

一九七三年（昭和四十八年）

山行

春山合宿 皇海山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 裏妙義 五月十三日

第一回歩荷訓練 武甲山

第二回歩荷訓練 三頭山 六月二十三日

夏山合宿 聖岳～赤石岳～荒川岳 七月二十三日～二十八日

冬山合宿 武尊山 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 新井英生 渡辺直治 加藤啓一 赤塚貢一 岡崎正 松本

秀樹 鷹觜勝之 塚越茂 成田淳

〔顧問〕 松崎中正 小島芳寿 増田寧 牛窪勲 牧野彰吾

部報から拾い上げると、この年の個人山行は年間に十九回行われている。主なものでは、

五月の甲武信岳、八ヶ岳・赤岳、雲取山。

七月の三ツ峠山、富士山、仙丈～甲斐駒ヶ岳。

八月の剣岳～槍ヶ岳、奥秩父・火打石谷、燕岳～槍ヶ岳、飯豊連

峰、金峰山。九月の甲武信岳、妙高連峰、八ヶ岳。十月の常念岳。

十一月の北岳、八ヶ岳、茂来山～御座山、両神山。

年間を通じて、個人山行も活発になっている。

寄稿 残雪期の鹿島槍ヶ岳とスキー

鷹觜勝之（一九七五年卒）

四十歳代半ばを過ぎた頃、あるきっかけで六月の鹿島槍ヶ岳の北股谷の雪渓を詰めて、双耳峰の吊尾根に登ろうとしたことがあった。ちょうど夏至の日だったが、まだ暗い午前三時に大谷原を出て、夕方五時に下山するという長い日帰り山行になった。スタートから登頂まで、ずーっとあの吊尾根を正面に見ながら、そこに少しずつ迫っていく。地図上こんなルートは、夏にも冬にもない。登れそうな雪渓が、頂上から千々に渡って切れることなくつながっているだけ。しかし鹿島槍に登る、最も美しいルートだと思えた。

かつて三月のこの山に、キレット小屋から風雪について同じ稜線までラッセルしたことがあった。下山の時に通過した北股谷は、等身以上のデブリに埋め尽くされていた。それから二十年近く。積雪期の鹿島槍に易しいルートはなくて、雪が付いた時には二度と登れないだろうと思っていた頃の、思わぬ発見だった。

積雪期の谷には入るなど言われていた時代が長かった。表層雪崩、全層雪崩、点発生雪崩。積雪への注意は切りがない。少なくとも、二月一杯は危険だとされるこういう谷に、それを過ぎると今ではスキーヤーが滑降を始める。三月のデブリも、五月には消えていく。情報はそうしたスキーヤーからだった。平均斜度四十度、最大斜度



1973年7月 聖岳～赤石岳～荒川岳 本谷山岩峰縦走中

四十五度。滑れはしないが、登るだけならできそうだと、後輩の入沢君とパーティーを組んだ登山が、これだった。雪の付いた谷の登下降とは、条件が揃えば実に簡単になる。しかもエキサイティングだ。

危険な山が、年間のある時期だけ、登山者に提供してくれる、美しい谷の登下降。それまでの私の登山観は一変することになった。

在籍していた山岳部時代には、三回の夏山合宿と、四回（冬と三

月）の積雪期の合宿が組まれた。三回の夏山で南アルプスの高峰はすべて登ったが、積雪期は不安ばかりに襲われた。十二月の八ヶ岳では、赤岳や硫黄岳には登頂したが、行者小屋から鉱泉への下りで尻セードばかりして、登りのトレースをすべて潰してしまったことで怒られた。気象通報の記録は、朝の天気図を右に三センチずらせば、夕方の通報を聞かなくてもごまかせた。

三月の皇海山では、ずるつと一瞬ばかり滑ったことが、トラウマになって心に引っ掛かっていた。雪のステップはすぐに崩れる。

高二になって、十二月の武尊岳では、いったいどこを登っていたのかも不明だったし、三月の那須岳では強風に煽られた記憶と、テントの脇で雪の中に寝たこと。成田や新井と雪洞を掘ったことだけを覚えている。

卒業してからは、男女交際が自由になったように、岩登りができるようになった。社会人山岳会に入って、谷川岳に通うようになる。毎週通った一ノ倉沢の出合で、一年先輩の前田さんに会った。筑波大学の友人と岩登りに来ていて、運動靴だとスラブを走れると言っていたが、私も同じことをやっていた。

会の先輩に連れられて、衝立岩を登ったが、これで岩登りは一人前になったと勘違いした。先輩の入沢君とヨセミテに岩登りに出かけて、圧倒的に登れずに挫折する。アメリカまで行って登山するよりも、公園のバスの運転手がブロードの女性であったことと、すでにバスがオートマチック車だったことに、カルチャーショックを受けた。二十四歳の時のこと。

フリークライミングのブームがその頃押し寄せてきたが、すでに制限体重をキほどオーバーしていた私は女の子よりも登れなくて、また挫ける。夏の沢登りを始めた。

六月の甲斐駒ヶ岳、七月の赤石岳、黒部溪谷、八月の奥利根、九月の越後駒ヶ岳。当時七、四十五歳のロープを二本用意していたのは、黒部や越後の沢を下降するときに、灌木の低い支点から川床まで、その長さが必要だったということだ。冬の積雪量とイコールである。奥利根に週末の二日間だけ入るには、矢木沢ダムを釣り用のゴムボートで渡るのが早いと、用意したこともあった。

冬には、槍ヶ岳の北鎌尾根も、奥穂高の吊尾根も西穂高への稜線も歩いたし、残雪期には剣岳の八ッ峰も小窓尾根も登ったが、記憶に残っているのは、風雪に晒された槍ヶ岳から飛騨沢への下山だった。

豊科から三人でラッセルして常念岳から大天井岳に登ったのが、入山して四日目。途中三日目の午前中に、その日の朝に出発したという単独行に追いつかれて、積雪というのはトレースの有無と条件次第で、どうにでも難しくなり簡単になるものだと驚いた。

さて大天井岳からトレースを辿って、一日で槍ヶ岳の冬季小屋に入るつもりでいたのだが、西岳の下りで幕営となった。翌日は風雪に閉じ込められる。翌々日、風雪の中サポートを受けて、どうにか小屋には入れたが、問題はここからである。正月も三が日を過ぎて、集結していた他パーティーも含めて二十数人は、猛烈な吹雪と積雪の中を強行下山した。西鎌尾根を下り始めて、千丈乗越から迷うこ

となく飛騨沢に入って槍平を目指す。トップの二人は空身でラッセルしても胸まで没する。槍平から滝谷出合を通過して、白出沢から林道に入った頃にはすでに夕方になっていた。その間休憩はない。ようやく新穂高温泉に着いたのは夜の八時を過ぎていた。

積雪期とは徹底して怖いもの。持っていった日本酒も凍りつく。三十歳を過ぎた頃に登山を終えた。パラグライダーにはまって、冬は歩くスキー（クロカン）だけを細々と続けるようになった。

怠慢な生活を続けていると、老いというのはすぐにやってくる。ホテルの立食パーティーが辛くなる。午前中に三十分を歩いて得意先に向くと、息が切れて話がでなくなつた。極めつけは、クロカン八十五歳のレース中、六十ヶ閥門で時間切れとなつて収容車で運ばれることになった。こんなことではいけないと、クロカンスキーを持ち出して、再び山を散策することを始めてみた。登山以外の目的で山に入るのは初めてだったかもしれない。三月に土合橋から湯槍曾川沿いにスキーを進めてみる。この時期に湯槍曾川を眺めるのは初めてのことだった。河原全面が積雪で埋め尽くされていることはもちろん、夏には何度も通つたマチガ沢も一ノ倉沢も、積雪の下でわけなく横断できる。私は何で通いなれたこんな風景を、今まで知らなかったのだらうと、山知らずを恥じた。翌日は反対側の土樽から毛渡沢の河原を歩いてみた。夏には平標山に行く時も、西ゼンに登るときにも、何度も通つた道なのだが、冬は全く景色が違つていた。

仙ノ倉谷を少し登ると、そこは西ゼンの下部だった。上空七百メートルには上越稜線が迫っている。このときに同行は息子と二人。平地を四時間ほど歩いただけなのだが、思ったよりも山は深いのに、スキーで歩く苦勞は何もない。他に登山者は誰もいなくて、荒らされていない真つ白な雪が続くだけ。残雪の谷というのはこんなに魅力的なものなのかと驚いた。バックカントリーのブームが始まる頃だった。結局この日は、私の登山人生のなかで、山スキー初日となった。登山の趣味というのは多岐に渡る。一月になると、水上辺りから見上げる谷川岳は、黒い地肌が一切見えなくなる。あの雪の濃さは、槍ヶ岳や剣岳でも敵わないほどだ。

クロカンとは、圧雪されたコースを滑る競技としても成り立つが、そもそもは自由に谷に入っていけるスキーとして発祥している。始めてみればこんなに楽しいものはない。真冬の新潟津南を車で飛ばすことよりも、谷川岳を眺めるロッジでビールを飲んでいることよりも、山の目前までスキーで接近してみることは数倍楽しいことなのだ、このとき初めて気がついた。選ぶルートは、どの山に行くにも、残雪の谷である。

その三ヶ月後、初夏の谷の登行が、鹿島槍の北股谷だった。この山行が終わって、私は進化した二十一世紀の山スキーブームの末席に座ることになった。

四月の尾瀬ヶ原に行ったときには、入山に半日もかかったが、現地の積雪は三メートルを超えていた。あの広大な雪原に私一人というのは、押しつぶされそうなプレッシャーに襲われるものだ。グリーンラン

ドか南極大陸は、こんなものだろうか。

そこから一日かけて、平ヶ岳を往復してみる。日本では最も深い百名山だと評価されているが、春はさらに遠い。ところがスキーはその遠さを半減させてくれる。

谷川岳の蓬峠も清水峠も標高は千五百メートルにも満たないのに、どうして樹林の一本さえ生えていないのだろうかと不思議に思う。夏は草付き平原で、冬はここも真つ白になる。上越国境稜線という響きは、高校生の頃から大きな憧れの対象だったが、冬にこの稜線をスキーで越えようとは、ちよつと前までは夢の中の出来事だった。

因縁の新穂高温泉と槍ヶ岳も、スキールートの一つになった。四月の蒲田川右俣は、スタートして三千メートルの飛騨乗越まで行程八時間、標高差二千メートル。下りは三時間。私たちが十四時間かけて下山したそのルートを、わずかに三時間で滑降してくるとは、冬山が易しくなったのか、道具が進歩したのか。上部の稜線に立ったときに、東に槍沢、西に飛騨沢の源流部をほつと眺めていて、私は自分の過去を疑っていた。

真冬には晴天が二日間続くことはない。スキーはラッセルと登下降を急速にスピードアップさせた。どこへ行くにも日帰りである。冬山に一週間入っていた危険を、日帰り二回で済ませる。白馬岳の主稜や、果ては鹿島槍の北壁や、一ノ倉沢を滑る連中が現れると、スキーを使わない冬山登山はあり得ないとまで思えてくる。スキーは冬の登山の方法を大転換させた。

五月の剣岳の三ノ窓雪渓や長次郎雪渓は、半日で登下降できるのに、何で私は、八ッ峰や源次郎尾根を二日も三日もかけて登ったのだろうか。室堂からの下山に、観光客に混ざってアルペンルートで降りたのはどうしてか。立山から黒部ダムへは滑降ルートになっている。同じように、鹿島槍ヶ岳の赤岩尾根の雪壁を怖い思いをして下ったのはどうしてか。西股沢も自由に登下降できるのに。知らなかった残雪期の新たなルートを思いつく度に、カルチャーショックは果てしない。

六月に終わるスキーシーズンは、夏を挟んで十一月からまた始まる。冬は短いというのは勘違いだった。夏のシーズンよりもずっと長い。GPSは、日本中どの山にいてもわずか五分の誤差で、地形図上の自分の位置を特定してくれる。カービングやファットスキーマの出現は、家用ジェット機を操縦するほどの革新的な技術だと言ったら、おおげさか。胸まで潜るラッセルだって、スキーなら楽しい。しかもパウダーである。そんな時代まで登山ができて、本当に楽しいと思う。

雪の粘性、結合力、積雪と温度勾配、表層雪崩の最多傾斜……。積雪のマネジメントもかなり進化した。それに温暖化になったはずなのに、穂高の岳沢ヒュッテは雪崩に潰された。槍平の小屋脇では、対岸からの雪崩で死者がでた。

そうだろう。滝谷を渡る夏道は、どうしても仮設の木橋なのだろうか。真砂沢小屋前は鉄橋になったが、冬になると取り外されることがどうしてなのか。新潟朝日連峰の獵師が渡る橋は、今でも羽目

板のないワイヤー橋である。白馬の雪渓尻の小屋も、白馬鎗の小屋も、冬には解体された春が来ると建ち上がる。全層雪崩の破壊力は、以前と何も変わってはいない。立山の大日岳の雪庇が、三十センチにも達するとは、最近の事故裁判で初めて明らかになったことだ。そういう意味不明なことを理解したのも、実はつい最近のことである。

現在、インターネットの中には、山スキーヤーが国内に千人ほどいる。彼らの報告が逐一入手できる時代になったということは、千人規模の山岳会が存在するということだ。かつて冬山登山とは、正月と、三月連休と、五月のことだった。それも他力本願で、他パーティーのラッセルトレースを利用した登頂だったが、今では一本のトレースがあるだけで不愉快になる。冬山とは、処女雪に一人で登行するもの。登山もよりシンプルになった。

谷川岳の天神平では通年五センチの積雪がある。それはおよそ三十センチの降雪があったことになるらしい。逆に、一ノ倉沢の中間部で五十センチの残雪があるということは、二百センチ以上が吹きだまって飛んできたという計算になる。日本のパウダーの降雪は、多分世界一ではないかと思えるのだ。

二月までのパウダー、四月までのシャーベット、六月までのザラメ。私はクロカンスキーという道具を知ったために、あれだけ怖かった積雪の山に、毎年半分以上も入っていきけることになって、登山の大きな発見をした。冬の登山ルートを見つけるたびに、心が豊かになっていく。

寄稿 山岳部レジスタンス運動

渡辺直治（一九七五年卒）

山岳部同期は九人だったのだが、そこに五つの派閥があったといふほど、私たちはまとまりがない学年に見えた。ツッパリの東松山組、状況分析の東上線組、岩登りの所沢チーム、中立の飯能組、そして風来坊の一人。私自身もちろんそのどこかに入る。

思い起こせば、入部間もなく二年から「入部の動機は？」なんて聞かれるオリエンテーションがあった。「山が好きだから」という大半の中で「体力を付けたいです」と答えた者がいた。それは二年にとって餌食だったのかもしれない。笑われた。逆に新入生にとっては、それだけの理由じゃいけないことでもあったのか。

六月の二回の歩荷訓練に耐えた。その意味は夏山合宿で南アルプスの三千円登頂の夢を実現できるというものだった。この年二年は大いに張り切っていた。なぜなら前年の夏山合宿は荒天に阻まれて、三千円には一つも登れなかったらしい。南ア最南部の光岳へ行つたものの、合宿はそれだけで終わっていた。二年のそのコンプレックスは、部室の片隅に置かれていた前年の部報を見ればよく分かった。二年のこの意気込みに、ツッパリ組はレジスタンス運動を始めた。三千円登頂の有無が、二年と一年の経験差と命令系統の違いというならば、今年の二年には経験も命令する権利もないという屁理屈を

持ち出す。一学期末試験後の休みを利用して、一年だけで富士山が計画された。経験者は、小学生時代に家族と富士登頂をした者が一人。ところが、風来坊が奇妙なことを言い出す。

「夏の富士山に五合目までバスで上がって登るだけじゃ、オヤジハイキングと一緒だ。富士吉田の一合目から歩くなら俺も参加する」それが採用された。参加は一年七人中（残りの二人は秋になって入部した）六人。この山は登るに値しないと云った不参加の一人が、翌年チーフリーダーになる。夜の最終で富士吉田に着いて、そのまま深夜から登り出す。五合目辺りで夜明けを迎えて、昼前に頂上に着いた。天気はいい。夏合宿が始まる一週間前のことだった。

実はその頂上では参加全員のスナップ写真が妙に残っているのだが、その理由も「登頂証明写真」だというわけだ。寒くてガタガタ震えて頂上の小屋で寝込んでしまった者が、写真だけは忘れなかった。部室に今でも残っているらしい。

下山後学校に戻ると、二年の一人は「なんだ、一年は勝手に富士山に登ったのか」と嫉妬を買う。同期は生意気盛りだった。

この年の夏山合宿は、三伏峠から三千円の塩見岳に登り、間ノ岳にたどり着き、さて農鳥岳の往復登頂はどうしようかということになった。

「二年は先に北岳のテント場に行つて、テントを設営してくれ」

と二年がいう。顧問も同調する。この日の行程は長い。全員で農鳥岳まで往復すると幕営に不安が残る。

「俺たちにとっては、今回が最後の夏山なんだ。三千円を登らせて



1973年7月 個人山行 富士山 高1の6人組 剣ヶ峰を背景に

くれ」

二年のそれは、山岳部の統率だったのか、哀願だったのか。しかし全員に登らないという選択よりも、よかったのだろうと、今になれば思える。

当時の部報を見ると、その合宿と同時期に、まだ入部していなかった一年は単独で八ヶ岳の全域を縦走している。八月には二年が二

る。

単独行や個人山行は、私たちの二年上の柳川さんが最も得意としていた。シーズン中は毎月単独山行をしていたようで、羨ましくもあった。誘いを受ければ、学年が違っていても誰でも連れて行った。個人として登りたい山が優先して、相手がいなければ単独で登り、相手が見つければパーティーを組んだ。

そんな大人っぽい山行の組み方をしてきた時代だったと思う。それはまた、二年は下級生を指導し、一年は二年に教わる。そして二年の夏山合宿が終われば、その指導から開放され自分の好きな山に登れるという理屈でもあった。

私たちが二年になった南アの夏山合宿も大成功したが、三年は誰一人参加せずに、合宿一週間前に合宿行程のハイライトの甲斐駒(仙丈ヶ岳を三日間で縦走している。三年になれば、一週間も下級生の面倒など見ちゃられないというわけだ。

こうして同級生にメンバーを求めないのは、言うことを聞く下級生を連れただけが、パーティーがスムーズに動くという理屈からだったか。ある意味、合宿は長期山行で魅力的なのだが、しかし最大公約数的な山行になる。自己主張ができる登山とは、個人山行なのだと、何か同級はそんなことを考えていた。

そうそう二年の夏山合宿ではこんな記憶もある。当時の夏山合宿はABCと三隊に分かれていた。参加者は二十名近い。その上、各隊は行動中に一度も合流しない場合もあった。せめて昼飯時くらいは合流してもいいのだが、三十分待っても後続が来なければ出発し

てしまう。当時の夏山は混雑していて、早めに次の幕営地に着かないと理想のテント場を先取りできないという理由があった。

合宿の最終日、荒川岳を越えて二軒小屋での幕営となった。翌日は伝付峠に登り返して田代入り口でバスを待つだけである。ところがA隊はヒステリックなほど早起きして真つ暗な中を出発した。伝付峠で夜明けだったというから、午前中早く下山して、バスに乗り込んだのだろう。そして身延からさっさと川越に戻ってしまった。残った隊は昼頃下山したのが、この時刻になるとバスも満員通過してしまう。ようやく夕方駅に出て、早い隊がここにもいないことを確認して、帰郷した。

後日A隊のリーダーは、顧問に注意を受けた。せめて下山後の駅では合流してから解散するべきだと。もちろんそれは正しいのだが、しかし午前中に下山したいというA隊と、さほど急がなくてもいいだろうという他隊では、そもそも主張が違うわけだし、統一性を取ろうとするなら、隊別行動の意味がない。まさか二十人の大集団登山では能率が悪すぎる。

もちろんA隊にも顧問が付いていた。つまりこれは顧問同士の統率が取れていない証拠でもあるだろうと、高校生レジスタンス運動は責任を転嫁した。

三年になると、この学年も五月の新歓を最後にして事実上引退した。それは受験準備でもあるのだが、九人中二人の三年は合宿に空身で参加した。参加しなかった三年の二人は、八月に燕から檜穂に行っているのだから、受験準備とは名ばかりである。もちろん二年

も一年も、私たちの影響で山行は活発だった。

同期メンバーは、その後も中大山岳部のリーダーになったし、社人クラブのリーダーにもなった。私は大学進学と同時に別の目標もできて、登山は辞めた。しかし誰もが、三年間であそこまで自分が本位に登山した学年は、他にはないだろうと自負する。つまりそれは川高山岳部を一番誇りに思っていることの裏返しでもある。

私たちが三年のときの一年が大槻の年代になる。後に聞いた話では、大槻は三年の引退を夏山合宿だとして、全員参加を義務付けた。三年になっても六月の歩荷にも参加する。しかも秋のシーズンにも歩荷を始めた。

私たちから見れば、考えられない締め付けでもあるが、しかしあるときの一学年がそういう伝統を築いてしまえば、下級生はそういうものかと、伝統は延々と続く。夏山合宿が高校部活動の集大成だとすれば、三学年の全員参加は大いに意味がある。しかも私たち以降、その習慣が三十年間続いているのであるから頭が下がる。

さらに部報「わんだらあ」の不定期作成が、夏合宿締め切りで「くすのき祭」発行と定期にしたのだから、相当な後輩たちである。しかも大槻君は、卒業して大学合格した三月の春合宿にも参加して（そのときにたまたま遭難事故があったが）、自己主張が強い部活の雰囲気、統率が取れたものに変えた。それは多分、私たち年代の山行スタイルの裏返しだったように思える。

七十年安保世代の遅れた生き残りが私たちであり、後輩たちは民主的な運営を始めた世代だったことになる。

一九七四年（昭和四十九年）

山行

春山合宿 那須岳 三月二十四日～二十六日

新入生歓迎山行 平標山 六月二日

第一回歩荷訓練 武甲山 六月二十三日

第二回歩荷訓練 川苔山 七月十四日

夏山合宿 甲斐駒ヶ岳～農鳥岳 七月二十日～二十七日

冬山合宿偵察 日光白根山 十月五日～六日

冬山合宿 日光白根山 十二月二十五日～二十七日

〔部員〕 茂木清 入沢清 青木由紀夫 増井知幸 都築淳郎

〔顧問〕 松崎中正 小島芳寿 増田寧 牛窪勲 牧野彰吾

部報タイトルは「わんだらあ」で創刊九号まで続いてきたが、この十号から「WANDERER」となる。仮名書きのイメージは古いと思われたか。印刷は生徒自身によるガリ切りと、校内の印刷室で制作された手作り部報。以降しばらくは手作り部報の時代が続いたが、初年度のもものが完成度は高かった。トレーニング（歩荷）山行は夏山合宿の前に二回行われるのが慣例となってきた。夏山合宿は、黒戸尾根を登って甲斐駒ヶ岳から仙丈岳、北岳、農鳥岳から大門沢を下降した。冬山合宿は日光白根を登頂した。顧問の松崎先生

は、二年前の夏、アラスカに個人山行を行い、ウィザースプーン峰の頂上付近まで登行して、この部報に概要を報告している。

山行記録 冬山合宿 日光白根山（抄）

本山行は、日光湯元より中ッ曾根取付付近でC・S。翌日、中ッ曾根をラッセル登高、金精山と五色山の分岐国境平辺にB・C。第



1974年12月 冬山合宿 日光白根山北面 きついラッセル

三日目に五色山と奥白根を避難小屋と五色山と一周してB・Cに戻っている。

記述内容は、短期間の冬山経験にも関わらず、自然の厳しさと人間のひ弱さを真摯に受け止め、冬山の貴重な体験を経て山や自然に対する心の成長を垣間見ることが出来、好感の持てる記録である。

特筆すべきは、初めての冬山に於ける「寒さ」の実感。辛いラッセルに苦しめられた「雪」の恐ろしさ、「これまで考えていた『寒さが敵である』という冬山の理論をくつがえさなければならぬ」。冬山は「寒さばかりではない、そう『雪』である、雪との戦いなのである」。後、山頂近くのやせ尾根の難所で物凄い突風に見舞われる。体が硬直し戦慄を覚える。じっと耐え風の治まるのを待つ。ここでこれまでの定義を否定せざるを得ない。「冬山の最大の敵は『寒さ』でも『雪』でもない、『風』である」と。真つ青に晴れ上がった山頂での歓喜と眺望は大きく心を揺さぶり、山行の素晴らしさをより一層鮮明に印象付けるものと受け取れた。

山行記録 第二回ボツカ 川苔山（抄）

拜島であればほど混んでいた電車も、今は人もまばらになり、ひんやりとした静けさの中を、電車は走っていた。やっと鳩ノ巣に着き、僕たちは改札口を出た。五分程でキャンプ場に着いたが、時期が早過ぎたためか、まだテントを張ることは禁じられていた。しかたな

「わんだらあ」十号より

く駅に引き返した。駅前には手ごころな広場があり、リーダーが駅員に許しを得て、そこにテントを張ることになった。今回のボツカは、二回目とあつて前回より荷物が重くなり、一年は三十キ近く背負わなければならぬ。

どういうわけか、三年の松本さんが僕たちと一緒にここまで来ていた。遊びに来ていただけで、トレーニングに来ていた僕たちとは全く気持ちが違う。夕食後、いつもならシユラフに潜り込んですぐ眠ってしまうのだが、この日は違った。先輩が大きな声ですつと喋っていたため、僕たちはほとんど眠れなかった。朝になったら石を詰め込んで出発しなければならぬのに。テント内の蒸し暑さも加わって、とうとうその日は三時間程しか眠ることができなかった。駅前にテントを張ったため山にきた感じがしない。水道を使った、夜中にバイクの音がしたり。ともかく朝食を済ませ汗と泥の染み付いた大きなキスリングに石を詰め、検量して妙なテント場から出発した……。

途中で一年の萩原がぶつ倒れた。ザックから樹林の中に落ちたようだった。僕は驚いて助けようとしたのだが、体が言うことをきいてくれなかった。辛い怪我もなく、少し先の樹林の切れた明るいところで休憩した。そこで写真を撮ったのだが、何もなかったような元気な顔で写っている彼には参った。そこから少し登ったところで調べてみると、実に彼のザックは三十七キもあつた。あの小柄な体で三十七キも背負うのであるから、ただ驚くばかりである。

（一年 粕谷伸男）「わんだらあ」十号

一九七五年（昭和五十年）

山行

春山合宿 巻機山 三月三十一日～四月三日

新入生歓迎山行 熊倉山 五月十一日

第一回歩荷訓練 武甲山 六月十五日

第二回歩荷訓練 御前～大岳山 六月二十九日

夏山合宿 朝日飯豊連峰 七月十九日～二十六日

冬山合宿 乗鞍高原・鉢盛山 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 大槻晴男 小畑勝利 東海林均 浅野新 荻原克則 粕谷伸男 権田和司

〔顧問〕 松崎中正 小島芳寿 増田寧 牛窪勲 牧野彰吾

三月春合宿の巻機山では、清水部落の上部にBCを設営した後に、その日のうちに井戸尾根から吹雪の中を頂上へ向けて登行。井戸壁を越えた上部が第二BCの予定地だったが通過。ところがその上部でついに吹雪となり撤退。

こうして風雪の中で、第二キャンプ予定地にメンバー全員収容の十五人用雪洞を掘って、ビバーク。コンロ、シユラフ、食料は持参していた。

翌日も悪天候で、そこからBCへ下山して、午後は雪上訓練。そ

の翌日の下山日に快晴になったのは残念だった。

夏合宿の朝日飯豊連峰は、大朝日岳に登頂してから一旦小国に下山。そのまま飯豊連峰を縦走するという一週間の合宿になった。

冬山合宿の鉢盛山は、十年にわたって顧問をした松崎中正先生引率の最後の合宿になった。

記録 夏山合宿 飯豊連峰（抄）

七月二十二日 雨のち晴れ

道は荒川沿いに続いており、途中、何度となく出会ったつり橋が、その都度我々の行く手をはばんだ。それは丸太ん棒を何本かつないでワイヤーでつるしたもの。大きなザックにポンチョをかぶってカニの横ばいよろしく渡るのである。下は濁った激流が渦を巻いている。まるでサーカスの綱渡り、全員が渡りきるのに延々と時間がかかった。

これが災いして、一生懸命歩いたにもかかわらず、予定のバスは我々を乗せることなく発車してしまった。ほんの数分の差、悲劇である。

七月二十四日 晴れ

鞍部に着くと、I女子校が風と戦いながらテントをたたんでいた。どういう訳か、女の子がいるところでは我々は長く休む傾向にある。ここも例外ではなかった。



1975年7月 夏山合宿 朝日・飯豊連峰 小朝日頂上にて 右端に松崎先生

御西小屋に九時半に到着してテントを張ったが、まだ早いので大日岳を往復する。三時間で戻ってくると、どういう訳か、隣に「郡

女WV」なるテントがあるではないか。これは問題です。何しろ彼

女ら、定説に反しています。赤いチェックのシャツと黄色いシャツの子に人気が集中。翌朝彼女らを見に水場に行って出発時刻に遅れたバカもいました。葉をもらおうとして断られたマヌケも。これがわが男子校のどうしようもなく恥ずかしい癖、普段から女の子は珍しい存在であるのに、まして山の中、なおさらです。

外も暗くなったので、明日のために早めにシュラフに潜ったが、まだ興奮冷めやらぬらしい川高山岳部のテントだった。

(二年 東海林均 権田和司)「わんだらあ」十号

寄稿 川高山岳部顧問今昔

松崎中正 (顧問)

谷川岳マイナス登山

川高山岳部OB会恒例の合同山行秋の部は谷川岳登山。会員にはOBが多いんだから、幾つもある登山コース中でも一番省エネの天神尾根を往復、そのあと谷川温泉でうんとこ盛り上がるうとの魂胆らしい。何だか山よりも宴会でくたびれそうな予感だ。山岳部顧問OBの私は、そんな谷川岳登山じゃあと、くよくよしながらも義理堅く仲間入りといった和気清麻呂なり。

ところが当日は、不幸か幸か岳の紅葉真っ盛りの三連休初日、しかも不運にも雲量ゼロときたから車は水上インター下りるのさえ、

もう大ごと。料金所道から本線までもはみ出た車は、下り車線は手前のトンネルまで続く長蛇の列。なんぼヤマタノオロチだって、ましてや拙者の鼻の下だってこんなになんて長くないんじゃないか。「それ見ろ、やっぱETCだよ！」って公団の音が聞こえる。年は取っても私の早耳はピピッとくるんだ。

やっとこさ駆けつけたロープウェイ乗場もうんざりの絶景かな。天神平でドラゴンから吐き出されたときは、いやはや、ほとほと降参した。

ところで、仲間は一体どこへ行っちゃったのか。この人ごみでは、必ず山に持ち歩いてる二・五万分の一虎の巻開いたって目つけようもない！そこで私はさっきの箱の中の押し合いへしあいで、ひらめいたことを早速実行に移すことに決めた。谷川岳マイナス登山だ。会の幹事から申し渡されたのは温泉の集合時刻だけ。さすがOB会である。学校から規則校則って微に入り細をうがって指導監督され、がんじがらめになつて川高山岳部現役諸君よ、ざま見ろや。山ってこんなものなのだ。

年寄りや気が早いって言うから、はなから温泉直行の連中もきつといふに違いないと、小生は鋭く、かつ勝手に判断して、登らずしていきなり下山するという山男の良心の呵責かじくから多少なりとも逃れようとしたのではあった。

トマノ耳から南東に下りてくる天神尾根は、天神平スキー場の後ろに天神峠のピークを起こし、さらに高倉、湯蔵ゆくら、今倉山と連なつて、今は景気さっぱりの谷川温泉ホワイトバレースキー場に消える。

こらでちよつと、くそまじめな講釈を許してたもれ。現在は天神平の南の一三五〇ビのコルを天神峠と呼んでるようだけど、昔は天神平の背後の独立標高点一五〇二ビを天神峠といっていたんだ。少なくとも半世紀も昔、私が初めて谷川岳に登ったころは。ピークが峠とは変におかしいと思う向きもあろうが、峠はトツケ(尖峰)がなまったものとの説があるのよ。例えば、有名な「三ツ峠」を考えてみてね。

ほかにもう一つ、この尖ったピークがあつた偉い天神様の姿そっくりだからとの説もあるんだけど。そんな厄介な屁理屈なんか、思つてるのんきなヤカラは前記の最低鞍部を天神峠と呼んですましてるってわけだ。長生きするだろうよ。

次に、高倉山から先のピークにはみんなクラがつくが、そのクラは一ノ倉、茂倉などと同じくくら岳(岳とも)、すなわち岩、岩場だ。谷川温泉の奥に有名なまないたくら組岳があるじゃんか。んだからおいらと同じく険しい山が好きなカモシカ君を山の人はクラシシ(岳鈴)っていつてる。彼は岩の上じつとたたずんでる習性がある。「クラ立ち」っていうんだナ。なーんちゃって、ごめんなさい。

さてさて、顧問現役のとき、高倉山から谷川温泉への尾根は山岳部と二回歩いた。厳冬期の高倉尾根の登りでは、先頭は空身になつて胸まで潜る三重連ラッセル車まがい。その前をピョンが耳だけ雪の上に出して泳いでいった。高倉山頂のキャンプで拜んだ黎明の谷川岳の荘厳な姿は、半世紀後の今もありありと白内障の老眼に焼きついとる。稜線も深い雪泳ぎに終始したが、元気な部員はもちろん、

今は昔の顧問だつて、喜々として白い恋人と戯れた。

ついに老いぼれたりといえども川高山岳部顧問OBの端くれは、何年か前の春先、加島、宇都野の壮年二君を^{そそのか}唆してこの懐かしい稜線を、今度はホワイトバレーから逆にたどろうと画策した。これぞ谷川岳真正正銘プラス思考登山である。が、私たち三人じゃ年齢は十二分な割に人数に不足したので、ラッセルにてこずつて湯蔵山にさえ届かずにパンザイ三唱。とにかく、私の足はまだこの尾根の地面にじかに着いてないのが山男の恥だったのである。

今こそ。私は山頂を目指す有象無象とは正反対の方向に勇躍足を向けた。高倉山の頂上に立つて双眼鏡をのぞくと、本日は晴天なり、あやにしきの天神尾根を、それに引けを取らぬ派手な^{いどり}彩の登山者がアリの熊野詣でだ。西黒尾根にだつて、ひどいごめきようだ。

ところが、当方の目指す稜線は残念ながら紅葉にはいまいちの感。が、湯蔵山のブナやカエデは逆光の中で、緑基調のゴブラン織りといったげだ。いよいよ、谷川銀座天神尾根の喧騒がまるでうそのように静謐な尾根歩きが、ジャジャジャジャーン、これから始まる。しめしめ。

道は思つてた通りしつかりしていた。これならたちまち温泉に下つちやう。ひと風呂浴びて、下戸は大好きなノンアルコールビアでもキユツと一杯、洪滞の天神街道できつと遅くなるに遠くない連中をのんびり待つことにしよう。

アリヤリヤのリュック！ 行く手に見下ろすのは湯檜曾川じゃないか。キツネにつままれて地図を開いた。私は、地図にない道を下つ

て、湯蔵山から北東に張り出す枝尾根の一二三〇^があたりでうろろしているのだった。この道は当方に断りなしに最近こさえた送電線巡視路というやつらしい。

これはしたり、慌てて稜線に引き返したが、地図にある破線の尾根道は、奇怪や、影も形もなかった。凶悪犯人の山狩りに向かう武装警官もこんな気持ちだろう、思い切つて強行突入した樹林は、まだびっしり葉をつけているもんだから全然見通しが利かぬ。それでも大汗かいて湯蔵山の古ぼけた山頂標識は見つけることは見つけた。しかし、ここまではまだ序の口、この先の道は完全に自然に返つていて、我輩が人一倍得意としているはずの藪コギには、ほとほと閉口した。

高倉山からホワイトバレーまで、とうとう人っ子一人会わずにしまった。それもそのはず、よく考えてみれば、みんな谷川岳の頂上へいつちまったんだから。昨今はかなりおいでの妙齢のおばさんにも会えればよかったに。歓迎なんかしないブユの^{ちきしょう}畜生は、しこたま寄り付いてきやがったが。

やつと間に合った宴会は、今日の殺人的人出の話で持ち切った。翌日の新聞によれば、驚くべし、なんと一四〇〇人もが頂上を目指したそう。衝撃的なOBの感想――

「先がつかえてゆつくりとしか進めず、その上、度々止まるので、あまり疲れなかった」

楽をするはずの私は、とんでもなく疲れた。

(二〇〇二年十月十二日の山行)

新人生歓迎登山

新人生歓迎と銘打った五月恒例の一泊山行だが、歓迎とは名ばかり。山はほとんど初めての新人たちは、ビバーク訓練との名目でテントの外に寝かされ、翌朝は暗いうちから叩き起こされて炊事の支度などにこき使われるのが落ちなのである。

三時起床。しつとりと水気を含んだ新緑の裏妙義山麓。姿は見えないが、鳥たちはもう歌っている。食事当番は焚き火で苦戦していたが、どうやら飯が炊けたらしい。圧力釜のネジを緩めた一年部員が何やら一生懸命引つ張っている。パカッ、やっつと外れた蓋の下には、その形そっくりに飯が盛り上がっているではないか！ 釜ぎゅう詰めは米は、かわいそうに膨らむ余地がなかったので、みんなの腹に納まってからやっつとのびのびすることができた。おかげで今日は腹持ちがいい。五時過ぎ、三十人近いパーティーは元氣いっぱい出発した。

稜線を西に向かうと、鎖の下がったチムニーがある。今までのにぎやかな話し声がびたりとやんだ。みんな真剣な顔をして下ったが、この難所に一時間もかかってしまった。

どこかの女子高校のパーティーと擦れ違って、わが山岳部はエキサイトする。こんなときは岩場をへつる山道は狭いほどうれしいものだ。

「センス、女子校の顧問の方がいいでしょうネー」

余裕の三年部員が同情してくれる。二年間同じ釜のメシを食った

仲には、生徒と教師を隔てるものがない。

昨日松井田の町から望んだ妙義山塊は印象的だった。午後の白っぽい光の中に黒々と突き出た岩々は、まるでぶつぶつ言っているように見えた。

「こんな立派な姿をしているのに、背は一〇〇〇トしかいないだ」と。

そんなごつごつした岩の稜線を縦走して着いた三方境には、はつきりした峠道が交差していた。しかしここから先、尾根道は急に踏み跡となつて、貧弱な道しるべの立つ大遠見峠おおとみとうげに來ると、早速道に迷つてうろろうした。

西上州には地図に出ていない岩場が隠れていて、近いと思つた所に意外と手間がかかることがある。イワザクラがいじらしく風に震えているキレットをやつと擦り抜けたりして山頂を踏むまでに、私たちが何と朝から八時間を要したとは、谷急山やまきゅうさんは面目躍如である。三等三角点の展望は絶佳。目の下の谷間を隔てて、高岩が低いながらもひとかどの姿で新緑の中に突っ立っているのを眺めながら、二度目の昼食をとつた。

十三時半、予定していたとおり北尾根を下りはじめた。登りと同じコースはなるべく敬遠したい。このはつきりした踏み跡をたどつて並木沢から入山川に下り、キャンプに帰ろうというのである。

地図によれば、北尾根はやや下つて二手に分かれる。私たちはうつかりその西側の支尾根に引き込まれてしまった。これでは並木沢

には下れないし、キャンプにはひどい回り道になる。それに踏み跡もはつきりしなくなった。大人数のパーティーは、もたもたと回れ右した。

ところが、東の支尾根の踏み跡も下るにつれて怪しくなった。六十個もの目玉のうち、十個ばかりは熱心にきよろきよろしたのだが、私たちはとうとう、三つ目の岩場の上で立ち往生となってしまった。

この岩場はどうか下れないことはあるまい。だが、その先の保証はあるわけではない。個人の責任において山仲間と来たのだから、どんな難儀が待ち構えていようとも、このまま未知の谷に飛び込んでもいい。しかし相手は生徒である。事故は絶対に不可だ。

これまでの下りの途中で何度か不安を感じてはいた。が、その度に考えたことは、折角ここまで来てしまったからには、少しくらいの困難はあつたにしても下つてしまおう、ということだった。実際、重力に逆らつて登り返すのは気の進まぬことなのだ。

しかし私は、パーティーを預かるリーダーとして、ここで引き返すべきだと思つた。確信した。

「道に迷つたら元に戻れ」とは、言うは易く、行ふは難し。だが鉄則だ。途中、大遠見峠で暗くなるのは覚悟の上だが、最も確実な選択はこれしかない。

事故のなかつたヒマラヤ登山は話にならない、と深田久弥が言つていたような気がする。確かに、あまりにすんなり成功した登山は、

彼にとっては物語る内容に乏しいだろう。だが、そうした話題豊かな社会人の登山とは、高校山岳部のそれは一線を画すべきだ。登山の神髄は遭難にあり。これも一面の真理かもしれない。著名な登山家のどんなに多くが山で命を落としていることだろう。しかし私は今、私の大事なパーティーを無傷で学校に連れ戻すのだ。

キレットで二年部員のKがバテた。腹具合がよくないらしいが、彼は中学校では陸上部で長距離の選手だったのだから、きっと頑張つてくれるだろう。

夕闇濃い大遠見峠で左折して、稜線から沢沿いに下つたのが十八時少し前、もう時計の針との競争だ。暗い樹林の中で、遅れがちなKをかばいながら、気だけが急ぐ。一刻も早く電話のある所まで下りたい。学校や家族の心配そうな顔がちらつく。祈るような気持ちだ。

こずえを照らしただけかのライトかと思つたら、稲妻であつた。闇に加えて雨の追い打ちだ。雨具をまとつて雷雨にせき立てられてゆくパーティーが、閃光の中に、まるで逃亡する敗残兵のように浮かび上がる。

高等学校の数ある運動クラブの中でも、登山部は特異なクラブだ。いくら着実に活動したとて、チーム同士競うということに縁の薄いこのクラブは、予算を食う割には学校の名に貢献しない。それどころか、ややもすれば事故を起こして話題を振りまく。

保護者にしたところで、一般的には子供が登山部に入るのはあま

り歓迎ではない。冬山と聞くだけで、世の教育ママはもう息子が遭難すると思ひ込む。夏の奥深い南アルプス三〇〇〇の稜線の縦走よりも、冬の八ヶ岳のクリスマスツリーの本物を眺めながらの雪中幕営だけの方が安全度は高い、ということは理解してくれない。

もつとも、こんなこともあった。山に特別熱心な二年部員Tはひとりで初冬の常念岳に行きたいと申し出た。この季節の山は難しい。顧問は行かせてやりたいのは山々だったが、学校としてはすんなり許可はできない。しかし彼も引かない。たまり兼ねた私は保護者に学校に来てもらった。

「親が責任を取らせていただきますから」

父親のひとこと。この親にしてこの子あり。Tは無事山から帰ってきて、私も胸をなで下ろした。

至れり尽くせりの過保護の坊ちゃんが、土の上に寝て焚き火で炊事するのは貴重な体験だ。暗い山中で、仲間同士助け合って局面を打開しようと努力している姿は頼もしい限りだ。圧力釜満タンの飯を炊いたり、女子高生にハッスルする生徒たちはかわいいではないか。

ああ、山岳部顧問冥利に尽きる。頑張らなくてはならない。

今にも見失いそうな並木沢右岸の踏み跡を、ライトで探りつつたどる。いつの間にか三方境からの道を合わせていた。幸い雷雨も大したことはなさそうだ。ほっとすると、いろいろな鳥の音が耳に入ってきた。ヨタカ、トラツグミ、ジユウイチ。ホトトギスも鳴いて

いる。闇に聞く彼らの声は私たちへの声援だ。

十三曲がりの急坂を無事下り切って、伐採跡の草むらをずぶ濡れになって横切つてゆくと、とうとう人家の明かりが見えた。傾いた道標を見つけてライトで照らすと、消えかかった文字が板切れに読めた。

「谷急山、道悪し」

（雑誌「岳人」一九九七年四月号から転載）



一九七六年（昭和五十一年）

山行

春山合宿 日光・女峰山 三月二十八日～三十一日

新人生歓迎山行 万太郎山 五月九日

第一回歩荷 蕎麦粒山 六月六日

夏山合宿 南アルプス・聖岳・赤石岳 七月二十三日～二十八日

秋歩荷 蕨山 十一月五日

冬山合宿 中央アルプス・経ヶ岳 十二月二十五日～二十七日

〔部員〕 青木邦雄 作美幸宏 塩崎健 柳雄 奥沢正士 高根俊章

井上勝海

〔顧問〕 小島芳寿 増田寧 牛窪勲 牧野彰吾

三月の春山合宿の日光・女峰山は雨天の停滞日もあったが、登頂日は富士見峠から午前中に女峰山に登り、午後は小真名子山を往復して満喫した。夏山合宿は南アルプス南部で、三年部員の大槻、小畑、東海林、浅野、萩原、粕谷、権田の七人全員が参加するという盛況振りだった。この学年は、一年で南アルプス北部、二年で朝日・飯豊連峰、三年で南アルプス南部を登ったことになる。夏山合宿まで現役続行は、この年から慣例化した。

冬山合宿の中央アルプス・経ヶ岳は、強風に悩まされたものの、

積雪はさほど多くはなく、曇り空の中を登頂した。

記録 部報「わんだらあ」第十号 巻頭言

このころ、電車の中で山のことを話している人がいると、耳を傾けたり、山の雑誌を読んでいる人がいると、そっとのぞき込んだりしてしまふ。すっかり山に病みつきになってしまった。

修学旅行で京都へ行っても、寺の境内で、「あの山は何山だろう」なんて思っている、もう話し相手は山岳部の連中しかいない。一週間も一緒に山中にこもって、同じかまの飯を食い、お互い重いザックに悩まされた仲間であれば、なんでも心が通じるのだ。

そいつらとともに過ごした日々の記録に、表紙をつけて一冊にしたのが、この「わんだらあ」である。仲間に加えて、忘れないでやってほしい。
(部長 大槻晴男)

記録 同編集後記

幾つか部報を読んでみて驚いた。どれもこれも面白い。ユーモラスな文章の中に山の苦勞が伝わってくる。ぼくらも負けじと作り出した「わんだらあ」第十号の編集が今ここに終わった。

資金が足りなくてガリ版刷りになってしまった。しかし見かけよりも内容を見てほしい。ない知恵を絞り、慣れない鉄筆を握って、精一杯努力したつもりである。一文字一文字がぼくらの努力の結晶

であり、この経験は、団結を必要とする学校登山そのものである。この冊子のために、受験勉強に忙しい三年生に無理やり書いてもらった。さすが先輩、ぼくらには真似できない個性豊かなエッセーや、現代社会の重要問題である環境破壊について考えるものなど、貴重なものが頂けた。

先日の「三年生を送る会」で、ある先輩が「思い出なんか要らないんだ。常に本当のことを見つけるために前進することこそ、大事なんだ」と言った。ぼくらはまだ若いのであるから、思い出を語ったり、書き残す必要はどこにもないのかもしれない。しかしぼくは考える。山とは全く悪友のようなものではないだろうか。鼻がつきそうな急な尾根を登るとき、厳冬の山で吹雪に襲われたとき、狂った山はもう敵でしかない。だが、だれにも経験があるように、その急登や吹雪との闘いに勝利したとき、山はなぜか味方に思えてくるではないか。こんな友との巡り合いを文章としてまとめて残すことは、自分の成長を確かめる絶好の材料になるのではないだろうか。こんな部報作製の重要性を見出し、作るからには立派なものをと努力したつもりである。何分にも慣れないことなので、不備な点もあるが、許していただきたい。

(編集委員代表 小畑勝利)

山行記録 春山合宿 日光・女峰山

概して一年の頃の山行の印象は、楽しかったことより、つらかったことの方が強烈である。しかしながら、この春合宿については「つ

らかった」という印象はあまりない。雪のあまりない単調な林道歩きが四時間ほど続いて、早くも二日目の天場、富士見峠に着いた。峠の西側には、小真名子の急斜面が、ガスの中に吸い込まれるように伸び上がっている。午後は、短い時間ではあったが、その斜面でOBの指導のもとに雪上訓練を行い有意義に過ごした。三年間でビッケルを使ったのは、まさにこの時だけである。

翌日は、雨のために停滞と決まり、ホツとした。が、朝食をとってしまふと何もすることがなくなり、シユラフの上に寝転がったりトランプをするしかなく、全く退屈になってしまった。夜、用を足すために象足を履いて外に出た時、初めて雪山にいたことを実感した。

あたりは真つ暗なのに、雪面は驚くほど白く光っている。ただ、テントの背後の雪面のみ鮮やかに黄色くなっているのが、今日の停滞を物語っているように思われた。

翌三十一日、女峰山へ向かう。背の低い木々の間をぬうように登っていく。僕は後ろの方にいたので、踏み固められたトレースをたどるだけでよかった。登るにつれて、峠をはさんで向かい側の小真名子がどんどん低くなってゆき、その背後の男体山も姿を現してきた。木がなくなり、帝釈山からやせ尾根がその頂へ続いている。南側に雪庇が出来たその尾根を一列になって進み、最後に急登して女峰山に着いた。あつけなくはあつたが、展望は素晴らしかった。真っ白な白根山、まだら模様の男体山、ここから見ると、大真名子・小真名子が男体・女峰両山の子供だと言うことも納得がいく。冬山

の時はガスで何も見られなかったので、展望が得られたのが何よりであった。

帰りは別ルートを通って、峠目指して下っていった。僕達の隊は、途中で深雪や樹林に苦しめられたものの、比較的楽に峠に着くことができたが、かなり苦勞した隊もあつたようである。午後、小真名子を往復した。

山を下りる日というのは、やはり何となく心が浮き立つ。山に対する惜別の情より、下界への思いの方が大きくなるのは否定できないようだ。しかし、その反動か、ストックを日光駅に置いてきたのは、全く遺憾であつたと思う。(柳雄)「わんだらあ」十一号

記録 夏山合宿 聖岳から赤石岳(抄)

七月二十五日 聖岳

昨日の停滞で、充分体を休ませることができた。朝一時四十分出発。台風のため天候が心配されたが、意外にもよく晴れていた。暗い中を樹林体を抜けると寒々としてくる。いよいよ聖岳へ。急斜面は砂に覆われ、そこをジグザグに登る。五時四十分前聖岳に着く。まだ日の出前である。頂上では南風が強かった。五時五十分、頂上で御来光を拝んだ。何ともいえぬ素晴らしい一瞬である。太陽のずっと右手には、真っ黒な富士山がどっしりと腰を下ろしていた。頂上でスイカを食べる。奥聖岳を往復。高山植物を楽しんだ。聖岳と別れ、ぐんぐん下る。そして今度は、兎岳への登りである。太陽が

顔を出してからは、この登りは堪えた。兎岳頂上では大バノラマがあつた。素晴らしい天気はこの眺め。南アルプスの主峰のほとんどが見渡せた。中盛丸山は、丸いドーム状の盛り上がった山だ。ここから大沢岳經由でガレ場を通り、百間洞露営へと下つた。

七月二十六日 赤石岳

階段状の道を百間平へと向かう。少しづつ明るくなってきた。百間平はハイマツと草地の点在する広々とした平地である。そこで太陽が現れた。すぐ横には真っ黒な赤石岳の荒れた岩肌が目の前に迫っていた。山腹に入ると道はザクザクの砂礫となつた。六時二十五分、ついに頂上に出た。この縦走中最高峰の山である。一時間以上もこの頂上で遊び、この次を目指す荒川岳へ向かつた。川高下りでも早く、大聖寺平に着く。昼食を楽しんでいるときに、東京のある高校の山岳部が追い越していったが、バテた一年生をザックの後ろから頭でぐいぐいと押して歩かせていた。恐ろしいなあ、なんて思いながら見ていた。

さて尾根をトラバース気味に進む。荒川小屋を右下に見て、いよいよ荒川岳のつめに入る。砂礫上のジグザグ道となる。その背後には、赤石岳が構えている。中岳の頂に立つと、悪沢岳と塩見岳が格好よく見えた。悪沢岳へ行けなかつたのは残念だ。前岳を通過し下つた。ガレ場を下り、樹林体をくぐり抜け、ようやく高山裏にいた。(二年 奥沢正士)「わんだらあ」十一号

一九七七年（昭和五十二年）

山行

第四步荷 棒ノ嶺 二月二十八日

春山合宿 南アルプス・笹ヶ岳

第一步荷 蕨山 六月五日

第二步荷 川苔山 六月十九日

夏山合宿 薬師岳・烏帽子岳 七月二十日～二十六日

第三步荷 矢岳 十一月六日

冬山合宿 平標山 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 猪狩尚人 猪狩貞身 寺西考 本郷賢児

〔顧問〕 牧野彰吾 山田正志 牛窪勲 小峯昇

夏合宿以降に、秋歩荷というトレーニング山行が組まれたのが前年。引き続き二月には、第四步荷という山行が行われた。参加者は三人だったが、トレーニング山行は拡大した。

三月の春山合宿、南アルプスの笹ヶ岳で、遭難騒動が起こった。合宿参加は顧問四人を含めて十四人。入山初日、水汲みにでたりーダーはテントに戻れなくなった。仕方なくそのままビーク。山中で二泊して、自力下山。事なきを得た。この騒動で、四月以降の新年度では、新入生歓迎山行は中止された。しかし以降は例年と変わ

りなく山行は行われ、大勢の新入部員にも恵まれて、初夏に二回行われた歩荷山行には、二十人近い部員が参加した。夏山合宿は、十年振り以上となる北アルプスの合宿が組まれた。有峰から薬師岳に登り、黒部五郎岳・三俣蓮華岳・雲ノ平・水晶岳・烏帽子岳と、今で言うダイヤモンドコースから裏銀座で、しかも雲ノ平へも迂回した。冬山合宿は上越・平標山。朝川越を出発して、越後湯沢からバスで元橋へ。その日のうちに林道終点にB.C。翌日は停滞し、その次の日に曇り空だったが、山頂まで往復した。積雪は多く腰までのラッセルに苦労した。合宿へ行くときに、夜行列車を使わない時代になってきた。

記録 夏山合宿 薬師岳・烏帽子岳（抄）

七月二十三日 黒部五郎岳

今日は随分早く、薬師峠を出発した。満天の星が不気味に輝いている。毎度のことながらC隊が先頭に進み、太郎山を経て北ノ俣岳に着いたのは六時ちよつと前。快調なペースである。頂上で御来光を仰ぎ肌寒い空気の中を、いよいよ今日の行程の中で一番高い黒部五郎岳へ向かう。なだらかな稜線上を黙々と歩くと、すぐ左手には雪溪が眩しく、遠くに目を向けるといくらか手前に傾いた雲ノ平の平原と、後立山連峰の峰々が目に映る。こんもりとしたピークをいくつか越え、やっと雄大にそびえた黒部五郎岳の登りに取り付く。ダラダラした道を歩き、かなりばてた。中俣乗越から二手に分かれ

て、肩の分岐点で落ち合つて、ザックを降ろして登頂する。槍ヶ岳の頂が鋭くがつていたのが印象的だった。頂上で昼食を取り、肩の分岐に戻る。ザックを背負つてカール脇の急な道を下る。

下りきつたところで休憩し、雪溪の雪にコンデンスミルクをかけたかき氷を食べた。この辺はとても高山植物が多い。至るところに咲き乱れていた。今考えてみると、今回の山行ではここが一番美しかったように思われた。約一時間休んでからまた歩き始める。

道の脇には「ガギの田んぼ」と呼ばれる小さい池が点在し、その周りを高山植物が咲き誇つて見事な景観だった。まさに庭園と呼ぶに相応しい。

天場を確保するために急いで黒部五郎小屋へと向かった。このトイレは、モダンで美しい小屋の様相とは裏腹に、ひどく陰気だった。夕方の雨が降つたが三重側溝も空しく、すぐやんでしまった。明日も一時半起床なので、早めに寝た。(一年 土田由紀夫)

七月二十四日 三俣蓮華岳く雲ノ平

最初の山、三俣蓮華岳までが、四つん這いになるほどの急登。暗い道は木が生い茂り、我々の行くてを遮る。汗は胸からわき出し、心臓の鼓動はトットトットと早く息は荒い。でもちよつとしたピークで遠く向こうに三俣蓮華岳が姿を現す。さあ、一気に頂上だと、ガッツ小峰先生の号令で、二年の本郷を先頭にまた出発だ。何度か雪に足を取られながらも何とか山頂へ。

午前六時。かなり明るくなつてきたが、うっすらと霧がかかり、

眺めは今一歩といったところ。手前には予定を変更して、これから挑もうとする鷺羽岳が、またその谷間には三俣山荘がポツンと小さく見える。山頂での二十分はすぐにたつて山荘へ向かう。

山荘で荷を下ろす。せいせいいした感じで足取りも軽い。鷺羽岳への四百メートルの登りものともしない。滑り易いガレ場を一息で頂上へ。山頂からは明日通る今回最大の難所の東沢乗越が望まれる。眼下に鷺羽池も見える。山頂で一時間景色を思う存分眺めて、戻る。

日差しが強くなった。平地よりも太陽に近いためだろうか？ 半袖シャツにむき出した腕は、赤く焼けている。山荘を後にしてから、黒部川源流まで二百メートルの下り。滑る石の上を足を取られぬように、慎重に歩く。ガレの水量が増してきて、黒部源流に到着。別の隊はもう昼食を取っている。これから活力だと思ひ、冷水に足をつけてパンをほおばる。源流の水を飲まずにいられようか。つついあ一杯と言いながら、腹がゲボゲボになった。

出発して雲ノ平まで二百五十メートルの登り。地形図に流土と書かれているとおり、足を取られて三十分、全精力を使い果たしてしまった。傾斜が緩くなると雪田が歓迎してくれた。先着の隊と雪合戦をした。雷鳥の親子が、ハイマツの陰に群れていた。三度目だったが何度見てもいいものだ。かわいらしい。

急な雪溪を何度も転びながら、今日のテント場に到着。この雲ノ平で、僕は部員のバス代七千五百円を落としてしまった。山行を終えて二十日ほど経て、京都の学生から送られてきたのであるが、改めて感謝の意を表したい。(二年 猪狩貞身)「わんだらあ」十一号

報告 笹ヶ岳行方不明事件

一九七七年三月の春山合宿・南アルプスの笹ヶ岳入山時の、二年部員チーフリーダー作美幸宏の遭難は、事件発生から三ヶ月後に、「笹ヶ岳行方不明事件」と題する、小冊子により部内で報告されている。

笹ヶ岳への登山道として、当時は山梨県早川町の保^ホという集落から保川に沿って登り、そこから大武刀尾根に取り付いて頂上へ達する道が一般的だった。合宿は顧問三人を含めて総勢十四人。三月二十五日午後入山し、三時間後に標高九三〇^{メートル}の「山の神」という広場で幕営した。そこからすぐ下を流れる保川へ水汲みに行くには、〈直線距離にして八十^{メートル}。所要時間四分。見通せる水場だった〉。

テントの設営が終わって、午後五時過ぎ、彼は一人で水汲みに出かけた。そしてそこからテントに戻れなくなったというのが、遭難のきっかけである。以降、山中で二泊して自力下山したのだが、経緯は彼自身が当時報告を書いている。

〈水を汲んだところからすぐ登り始めた。とにかく上へ行って右に歩いていけばテントに戻れると思い、どんどん登っていった。ここで重大なミスを立て続けに犯してしまった。登って行って道に出れば平らになっていると思込んでいて、足元しか見ていなかった。しかし実際はいくら登っても、道らしい所に出なかった。〉

迷ったと気付いたとき慌ててしまった。焦ってしまいどうしているのか分からなくなった。僕だけ残して、テントが消えてしまったのではないかと思つたくらいだった。迷つたというより、自分がどこにいるか全く分からなくなった。かなり高くまで登つて来たという感じがしても、愚かにも自分を信じきっていた。「このくらいの高さはあつたのでは？」と思うほどであった。

戻つたのか、戻らなかつたのか、右へどのくらい歩いたのか、高さは、時間は、よく覚えていない。大声を挙げて叫びもした。しかし他の皆はテントの中だろうし、沢の音とコンロの音で聞こえるわけがなかつた。いつの間にか辺りは暗くなり始めていて、僕は急斜面の上に立っていた。探すのを諦めると急に落ち着いてきた。自分の馬鹿さ加減に腹が立った。とにかくここで一晩過ごさなくてはと、思い、座れるような所を探した。

目が覚めた。二時半だった。今日はどうするか考えた。まず昨日の水場に戻ることを考え始めた。とにかく下へ降りれば元に戻るはずだと考えた。もしそれで駄目だったら尾根を登ろうと思った。山の神へ通じる道があつたらそこを降り、もしなかつたらもつと登り、北側の尾根にある古い登山道を行けば保に着くだろうとも思った。僕は愚かにも地図を持っていなかったのだが、合宿前に柳が持ってきた古い地図に載っていた旧登山道を少し覚えていたのだ。夜はなかなか明けなかつたが、今日中には帰れると楽観的だった。東の空が紫色になると、間もなく夜が明けた。

すぐに真つ直ぐ降りて行つた。かなり急傾斜だった。こんなとこ

ろを登って来たのだろうかとも思った。正面を見ると、保川は西から東ではなく、西から南へ折れて、そしてまた東へ折れて流れている。怖いぐらいの斜面だった。少し降りると岩がゴロゴロしているところに出た。しかし通った覚えがなかった。そこは溜沢のようでありより一段低くなっていた。このまま降りてゆくと崖に出そうだったし、何よりも降りるのが怖くて、元の場所へ戻ってみた。北を見るとずっと尾根が続いていた。その尾根を辿ってゆくと保に降りることができはすだった。本来道に迷ったら動かない方がいいのだが、尾根伝いの道なら夕方までには帰れそうだったし、天気もよかったので歩くことにした。とにかく尾根に出れば後は降りるだけだと思った。気分的に楽だった。

大きな尾根に近づくと、急な登りになり、両手も使って登った。雪も少しあった。登るにつれてだんだん雪も増えていった。最後の登りは少しきつかった。やっと大きな尾根に着いた。そこから、すぐ東へ歩き出した。樹林帯で見通しは悪かったが、何とか尾根を外さずに歩けた。尾根の真ん中辺りのピークだったろうか、背丈と同じぐらいのスズタケが密生して、これには参った。覆いかぶさってきてとても前には進めない。しょうがなく南側へ少し降りて、巻いてからまた元の尾根に取り付いた。ここで随分と時間をかけてしまった。もう十五時頃になっていたと思う。登るのが苦痛だった。すっかり暗くなる前に、眠る場所を探した。頂上の東側からは、街の明かりが見えた。嬉しかった。そこで街の灯を見ながら眠ることにした。枯葉の上に腰を下ろし、木に寄りかかった。靴の中が濡れて

いたが、昨日より疲れたせいも良く眠れた。一日遅れる事で皆に余計に心配をかけてしまうと思うと残念だった。とにかく早く降りて無事を知らせなくてはと思った。

誰かそばにいるような夢を見て目を覚ました。誰かといっても部員の一人だが、寒かった。四時頃だったろうか、何か降ってきた。雨かと思つたが雪で、体が濡れずに済んだ。夜明けまでに随分と降つた。明るくなって歩き始めたのはいいが、どこを降りていったら尾根なのか分からなくなってしまった。雪で空が灰色になってしまつて、周りの景色が全然見えなくなってしまった。その上頂上が広くて、益々分らない。みんな道みたいに見えてくる。あちこち随分と歩き回つた。雪が積もつて足跡が付いて、迷わずに済んだのは幸いだった。しかしけつきよく、東という方向しか分からずに降りることにした。

いよいよ滝が現れたとき、左の尾根へトラバースした。木々はまばらで歩きやすかった。もう雪はやんで、木に積もつた雪が溶けて雨粒のように落ちてきた。沢から大分離れ、どうやら尾根らしい所に着いた頃、行く手には道路や人家が見えた……

彼は標高九三〇メートルの幕营地から、標高一九二二メートルの大黒山まで達して、そこから東に延びる尾根を下り、最後に尾根の向こう側を流れる黒桂河内川（くろけい）の下流で釣り人に出会った。

さて彼が山を迷っていた間、仲間は幕营地で搜索を始めた。本格的な救援活動は翌朝からで、引率顧問の小島教諭とOB一名が午前五

時半に幕营地から下山、七時半に鯉沢警察都川駐在所に届け出て、遭難は世間に知られることになった。地元消防団は九名を捜索隊として編成し、午前十一時に出発した。また川越高校では、午前七時に連絡を受け、遭難者の両親、小室教頭、他に野口、田中、牧野教諭が、午後三時半に現地に到着している。

翌日には、新たに四十名の捜索隊員が加わる予定となり、また川越からも小柳・増田・小峰教諭と、元顧問の松崎教諭、十一人の三年部員やOBが、現地に向かった。

翌々日、午前八時には、山の神ではみぞれ積雪が八センチ。午前九時半にはガスが出て、視界が三十メートルまで低下した。増員した捜索も膠着してしまつた中、午前十時二十分に遭難者本人が、釣り人に出会って発見された。自力下山によって、最悪の事態を免れたことは、評価できるだろう。

山岳部は、新学期の二ヶ月間は活動を自粛。以後は例年と同じように部は運営された。遭難の汚名も瞬く間に払拭されていった。

寄稿 笹ヶ岳遭難の記憶

作美幸宏（一九七八年卒）

あの春山合宿の笹ヶ岳行方不明事件からもう三十年が過ぎてしまった。私自身も自分が何を思いどのように行動したのかを、改めて当時の報告書を読み返して、思い出したというのが、正直なところ

である。多くの人に「ご心配とご迷惑をおかけしたことを、おわび申し上げます」ともに、御礼申し上げる次第です。

事件当事者である私自身、当時の記憶はほとんど断片的にしか残っていない。道に迷った夜にみんなのいるテントに戻ることをあきらめて見上げた月、翌日尾根を指してやぶごぎをしたときの手の感触、歩きながらほおばった残雪、何とか人里にたどりついて、靴底に感じた河原の石。それらは今でも忘れることはできないし、これからも忘れることはないだろう。今では年に何回かハイキング程度の山にしか出掛けないが、山での事故や遭難の報道のない年はないのだから、当然自分の事件のこともそうした報道に接するたびに思い出してしまふ。

報告書にもあるように「まさかこんなところ」と思われる場所でも私がいなくなったのは、ひよつとして故意ではないかと思われたこともあった。新学期になって中学校が同じだった友人から聞かされた話だが、二年の担任だった小柳先生から電話があつて、

「作美に自殺するような動機はないか」

と聞かれたというのだ。心当たりがなかったわけではない。クラスでの私は何か思いつめたように見えたのかもしれない。心配してくれたのだろう、何度か職員室にも呼ばれて、何冊か本を薦めてくれたことを覚えている。伊藤整の『若い詩人の肖像』と林尹夫の『わがいのち月明に燃ゆ』は確か先生に薦められて読んだ本だ。

高校二年の夏以降いろいろなことがあつた。夏休みに狭山裁判と部落差別のことを知ったことをきっかけに、社会科学系の本ばかり

を読むようになり、学校の勉強など後回しになった。クラスメートともほとんど話をしなくなり、何を考へてゐるかわからない、暗いやつだと思われていたに違いない。ただ山岳部の仲間には分かつて欲しくて、思いつめたような話をしたと思う。秋には東京の明治公園で開かれた狭山裁判の集会とデモに初めて参加した。どれくらいの人が集まっていたのだろうか、会場を埋め尽くした人々に感激したことを今でも覚えてゐる。それまで社会の動きなどにはほとんど関心がなかった私だったが、数ヶ月の間に急に世の中の見方が大きく変わってしまった。その意味でも高二の一年間は、私のその後を大きく左右することになったといつても言い過ぎではない。

報告書には触れられていなかったが、私が行方不明になったとき、現地にわたしの従兄が山岳会の仲間と一緒に駆けつけてくれた。後で父親から聞いた話だが、地元の消防団の人たちは私が転落したと思つて、河原の石をひっくり返したりして探していたようだが、彼は、「下になんかない。上だ、上に行つたに違いない」

と言つていたそうだ。私が発見されたとき、ザイルを肩にかけた姿は見たのだが、そのときは何も話をしなかった。

従兄は私より十歳年上で、高校生のときから谷川岳通いをしてゐた。高校を卒業してすぐ、地元の山岳会の本庄山の会に入り、もっぱら谷川岳の岩壁を登つてゐた（大学生の一時期はデモに通つていたらしいが）。中学でバスケットをしていた私が何を思ったのか突然、山岳部に入ろうと思つたのは、おそらく彼の影響、いや彼への憧れからだつたかもしれない。まわりを見回しても登山をしてゐる

人は他にいなかった。

再び出会つたのは、半年後の高校三年の夏休みのことだつた。私は虫垂炎から腹膜炎を起こし、毛呂にある埼玉医科大付属病院に三週間ほど入院してゐた。そのとき偶然にも従兄は入院してゐた。過労による急性糖尿病で、一時は酸素テントの中で生死をさまつたと言つてゐた。そのとき病室で初めて山の話をした。一年ほど前にグランドジョラスのウォーカー稜を登つて、

「ヘルマンブルーも登れなかつたところだぞ」
と得意げに話してゐたのを今でも思い出す。そして、
「今度一緒に縦走でもしよう」

と言つてくれた。岩と雪しか行かないと思つてゐた人が、縦走に誘つてくれたのは意外だつた。しかし残念なことにその約束が実現することはなかった。翌々年の十月、山岳会の谷川岳での追悼登山の帰り、自ら運転してゐた車で事故を起こし還らぬ人となつてしまつた。「俺は今まで一度も落ちたことがない」と自慢してゐたのに。

最近山に出かけると年齢を問わず、みんな本当に楽しそうに登つてゐるように思える。けれど私が今でも山に行きたいと思つてゐるのは、少し違つたような気がしてゐる。山に行けば策ヶ岳での事件のことや、好きだつた従兄のことを思い出す。あの事件は私にとつての高校時代のすべて、山岳部にいながら社会とどのように向きあへばいいのか悩み、その先に自分のありようを模索してゐた、あの頃の自分の記憶が分かちがたい。その記憶から逃れられない今の私は、三十年前当時の私と、一緒に山に登つてゐるような気がしてならないのだ。

一九七八年（昭和五十三年）

寄稿 武甲山での気絶

一戸 清（一九八〇年卒）

山行

春山合宿 南アルプス・アサヨ峰 三月二十五日～二十九日

新入生歓迎山行 大源太山 五月

団体歩荷 天祖山 六月四日

団体歩荷 大持山 六月十八日

夏山合宿 南アルプス・塩見岳・北岳 七月二十一日～二十八日

秋山歩荷 川苔山

冬山合宿 日光白根山

〔部員〕 一戸清 豊国友二 菅原仁志 守屋秀則 石川一義 斉木

光一 土田由紀夫 野村圭一

〔顧問〕 牧野彰吾 山田正志 牛窪勲 小峯昇

春山合宿の南アルプスは、伊那から北沢峠へ登ったが、甲斐駒ヶ岳は高校生登山としては不許可だったようで、稜線のアサヨ峰二七九九^リを往復した。

夏山合宿も南アルプス。伊那から三伏峠に登り、塩見岳・北岳・仙丈岳と縦走し、北沢峠からは完成した南アルプススーパール林道を広河原まで歩いて下山した。

冬合宿は日光白根山へ登った。

初めての山行

武甲山からの下りで、私は気を失い倒れ込んだ。一九七七年（昭和五十二年）六月五日、十九時過ぎであろうか。この日は蔵山・武甲山までの歩荷だったが、私にとって生まれて初めて、もちろん高山岳部に入部して初めての山行だった。我々が入部する直前の三月、南アルプス策ヶ岳での春山合宿中の遭難騒動により、新入生歓迎山行が中止されたためだ。

六月四日（土）授業終了後、飯能からバスで名栗川沿いの幕营地（有間ダム建設現場付近）に向かった。夕食後、満天の星空を眺め、消灯後も川の流れを聞き、明日の初めての山行を想像し胸を躍らせていた。深夜まで川の流れを聞きながら寝付かれずにいた。

翌五日、起床は二時頃だったであろうか。ほとんど眠れなかったと思う。朝食後、キスリングが二十五^キとなるように石を詰め、五時頃に出発したと思う。長い一日の始まりだった。

蔵山、鳥首峠、大持山、小持山、シラジクボを経て武甲山まで石を背負ったままであった。途中、鳥首峠付近から一年生二名が体調不良のため、先輩に連れられ下山した。大持・小持に着く頃にはポリタンの水も底をつき、歩幅も狭くなり、時として足が止まってし

まうが、先輩から「もう少しだ。頑張れ！」と気合を入れられ何とか歩き続けた。十七時過ぎだろうか、シラジクボに到着した。そこには、OBが迎えにきていてポリタンを差し入れてくれた。しかし、我々一年に回ってくる頃には水はほとんどなくなっており、口を湿らす程度に終わった。OBは三年生に、もう遅いから武甲山を断念しここから下山するよう勧めていた。しかし、三年生はOBに会わなければ下山も考えていたようだが、意見されたことにより武甲山に固執したようであった。何とか最後の登りを終え武甲山に着いたのは夕闇が迫る頃であったと思う。石を降ろし、ヘッ電を点けての下山となった。

しばらくして、私は意識が遠のき倒れ込んだ。しばしの休憩後、三年の井上先輩が私のキスリングを背負子に載せた。私は臆臆とした意識で下山した。帰宅したのは深夜であったと思う。自宅に着いて、買ったばかりの登山靴を脱いだら、踵の皮が抉ったように深く剥けていた。

この山行で、睡眠の重要性を身に沁みて感じた。私は、体力には自信があった。小学四年の頃からサイクリングを始め奥多摩湖や鶴峠を走り、中学では三国峠、日光から沼田、福島県原ノ町、山中湖など頻繁に自転車で遠出をしていた。そして、高校に入りアマチュア自転車競技連盟に所属し、ロードレーサーで大宮競輪場を走っていた。また、中学から始めた剣道では、中二で初段となり大将であった。そんな私にとってこの山行は、睡眠が不足すると体力があっても活かされないことを教えてくれた。

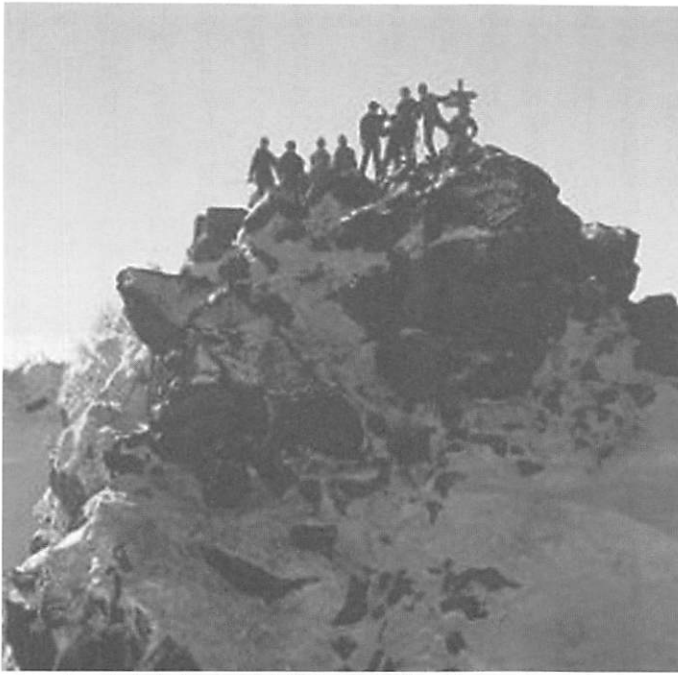
その後の山行

初めての山行で厳しい洗礼を受けた私は、その後の山行において辛いと感じることは一度もなかった。山では「食べて寝るものが勝つ」ということを常に意識していたため、どんな時でもどんな場所でも直ちに寝ることができるようになっていた。二回目以降の歩荷でも、雪深い上越のラッセルでも、多少バテはすれども常に山は楽しく、景色を眺め、高山植物を見ることが楽しくなった。

その後の公式山行は、夏山合宿は薬師岳→烏帽子岳（一年）、塩見岳→北岳（二年）、白馬岳→爺ヶ岳（三年）。冬山合宿は平標山、日光白根山。春山合宿はアサヨ峰、巻機山であった。

顧問の牧野彰吾先生は、ほとんどの山行に参加された。そして、夏には高山植物を多数教えていただき、それまで花に興味を抱かなかった私を花好きに導いてくださった。また、歩荷の熊倉山だっただろうか、藪こぎしているときにガサゴソ音がした。誰かが降りてくると思い立ち止まった目の前を、猪が水場に向かって一目散に駆け下りて行った。危うく、体当たりされるところであった。正に、猪突猛进で本当に驚いた。夏合宿では、大学ワンゲルに妙な闘争心を燃やし、必ず追い越していたように思う。

個人山行では、単独行が好きだった。そして、冬の八ヶ岳が好きで毎年通った。一年の冬に初めて八ヶ岳に向かったときは、ポリタンの水は凍ると思い焼酎の「純」を持参し水分補給を行った。横岳から赤岳を経て阿弥陀岳の下りの頃には、酔いが回りフラフラとな



1978年 冬山合宿 日光白根山 雪の峰に立つ

った記憶がある。また、ある時は赤岳鉱泉にいた小屋の従業員が、横岳にもいて驚いたことがあった。大同心を登攀すると縦走路を登るより格段に速いことを初めて知った。

また、晩秋の奥武蔵、落ち葉の絨毯を歩くのが気持ち良かった。日和田山にもよく通った。豊国と土田が岩登りを好んでいたため同行した。当時、部室前の旧校舎外壁にハーケンを打ちアブミで遊んでいた。彼らは大学進学後、四方津クラブに所属し滝谷や黒部を中

心に登っていたようだ。私は、岩は怖く好みではないため参加しなかった。それでも、大学で一回豊国と滝谷に行ったが、まず取付に行くまでがとても恐ろしかった。私はリードしないため登攀そのものは楽しかったが落石の多さは恐怖心をおおった。

大学以降の山行

大学では山岳部を避け、アルペンクラブと称するサークルに所属した。国内縦走をメインに活動する発足間もない小集団であり、執行部の好みで自由に活動した。高校での経験者がほとんどいなかったため、川高山岳部での経験は大いに役に立った。

印象深い山行は、三年の冬に仙丈岳で役満をツモッタことである。「厳冬期三千以上の役満」を合言葉に、仙丈岳直下の窪地にコタツと麻雀牌を担ぎ上げ役満が出るまで下山しないと宣言したのである。毎朝コタツの表面の氷を溶かすことから一日が始まった。幸い卓を囲んで四日目に、私が字一色四暗刻をツモリ無事目的を達成した。

また、一年の夏に単独で南ア金山縦走を試みたことも思い出深い。初日は光岳登り口まで寸又川林道三十キ、二日目は光岳から茶臼岳を越え聖平、三日目は聖岳、赤石岳、荒川岳を経て三伏峠、四日目は塩見岳、間ノ岳、農鳥岳、と快調に進んだが台風の影響により断念し、五日目に奈良田に下山した。この山行は、自分の限界に挑戦したつもりであったが、台風の接近で脆くも断念するあたりが自身自身の弱さでもあった。

大学での忘れられない山行は、四年の冬に鹿島槍ヶ岳を目指した

山行である。爺ヶ岳南尾根から取り付き、森林限界手前で一週間天候回復を待った。高層及び地上天気図上で天候回復が見込まれ、天気予報も久しぶりの晴天と報じた晩に翌日の鹿島槍アタックを決定した。その晩私は自宅で私自身の通夜が営まれている夢を見た。私は天井からの目線で自宅に集まった親戚を見ていた。皆、私のことを話している。祭壇の写真に目を転じると、そこには私の写真が掲げられていた。私は飛び起き、空を見た。満天の星空、無風快晴であった。私は起床後全員に下山を告げた。当然メンバーを説得できなかったため、リーダーとしての強権で撤収と下山を命じた。下山途中で天気は一変し雪となった。入山以来八日間連続しての大雪である。我々は二週間の予定で入山していたが、下界ではOBが心配して捜索隊を編成中とのことであった。この日、赤岩尾根から鹿島槍を目指していたパーティーを中心にこの山塊で三十名以上が遭難し、ほぼ全員が亡くなったことが後日報道された。私は、この前年急逝した父が私たちを救ってくれたと確信した。そして、決断すること、決断したら何があっても貫くことの重要性を学んだ。

大学卒業後、一九八九年のGWに川高同期の豊国と剣岳に行ったことも忘れられない。一般ルートからピークを踏んでの帰路、前剣直下の急斜面を我々は四つん這いになって下山していた。前日の雨と今日の晴天により腐った雪が我々をそうさせていた。中間まで降りた頃、上部に人が現れ前向きに歩き始めた。二人目が十歩程下降したときである、その人が足を滑らせた。笑いながらピッケルで制動を掛けたが、ピッケルは腐った雪には効き目がなく、ドンドン加

速した。ピッケルは弾き飛ばされ、滑り台状態で我々に近づいてきた。こっちに來るなど願い、確保の姿勢をとった。その人は我々の五ヶ程脇を、加速しながら東大谷に消えていった。滑落しているときの苦笑いの顔と雪面からジャンプし岩稜にあたった時の鈍い音は今でも忘れられない。彼らは早月尾根を登ってきたエキスパートであり、剣を越えた安堵からアイゼンを外し、ハイキング気分の下山であったようだ。常に初心で事に当たる大切さを学んだ。

その後、結婚とともに山から遠ざかっていたが、二〇〇五年夏に小三の息子と八方尾根から唐松岳を往復し、久しぶりの山を味わった。二〇〇六年夏には中央アルプスの駒ヶ岳を登り、息子も山と高山植物が好きな様子なのでこれからはこれからは楽しみである。

山と私

私の今は、武甲山で意識を失い倒れ込んだことにより存在する、と言っても過言ではない。そのときには、経験したことのない苦痛だった。しかし、それ以降、それを上回る苦痛はなかった。というより、そのような事態にならないように工面することを学習したのだと思う。また、山は多くのことを教えてくれた。

山は一步一步進むと必ず目的地に到着する。そして、己を知り周到な準備と的確な状況判断で望めば必ず目標は達成できる。多少遠回りすることはあったとしても、何事も同じであろう。

山が人生なのか、人生が山なのか。山との出会いは、私の人生を豊かにしてくれたのは間違いない。

一九七九年（昭和五十四年）

山行

春山合宿 巻機山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 両神山 五月六日

夏歩荷1 熊倉山

夏歩荷2 川苔山 六月十七日

夏山合宿 白馬岳～爺ヶ岳 七月二十一日～二十七日

秋歩荷 雲取山 十一月二～四日

冬山合宿 北八ヶ岳 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 川嶋哲也 鈴木稔 佐藤光一 大館敏雄 黒沢資到 小川

正樹

〔顧問〕 牧野彰吾 山田正志 牛窪勲 小峯昇 吉田洋征

夏合宿は、北アルプス・後立山の縦走だった。白馬大雪溪からの入山だったが、天候には恵まれなかった。頂上で宿泊し、翌日に天狗岳に移動し、さらに五童岳。ここで一日停滞する。翌日は快晴になった。五童、鹿島に登り、冷池で宿泊して翌日には、爺ヶ岳を越えて扇沢に下山した。

冬山のテント生活で、トラブルが発生した。北八ヶ岳で組まれた合宿は、初日に渋ノ湯から黒百合平への途中で幕営。翌朝、顧問の

不注意で沸いていた鍋が倒れ、熱湯が一年部員の右足にこぼれ、大火傷を負った。彼はそのまま顧問に付き添われて下山。したがって合宿も縮小されて、天狗岳や高見石には登ったものの、麦草峠以北への行動は消滅した。

寄稿 元山ザルの独り言（山と教師の一考察）

黒沢資到（一九八一年卒）

「先生、山に連れてって！」

小学生の時に、大学出たての若い独身教師にせがんだ。教師といえどもGWくらいは彼女とデートが入っているであろうことくらいは大人となつたいまは分かる。無粋だったと反省もしている。でも先生も悪いんだ。

「昨日、尾瀬に行ってきた」

とか言つて、至仏山を背景に朝もや匂い立つ水芭蕉の大群落のバネルなんか教壇脇に飾るもんだから、こうなるのである。正に自業自得、因果応報つてやつだな……。

さて、先生がGWにデート予定があつたかどうかは不明である。しかし担任する五年二組の坊主ども六人を率いて一泊で東京都の最高峰、雲取山（二〇一七m）に連れてつてくれた。

これはなかなか出来る事ではない。サルに毛が生えた程度の小学五年では道中何をしでかすか分かつたもんじゃない。それに事故で

も起こせばすぐに引率責任となる。僕が先生の立場なら、まずデートを取りそうだ。

この時は、山荘は超満員。「一畳に二人寝てください」と山小屋スタッフに言われた時は卒倒しかけた事、消燈後夜中にトイレにいきたくなくて文字通り「人の海」を踏み分けやつの思いで二階テラスまでたどりつき、そこから用をたしてしまった事など昨日のこのように鮮明に覚えている。サルたちは日常とは異なる、雲上の体験にすっかり満足し、翌朝山を下りた。

これで火がついてしまったのか!? 子供たちの要求はさらにエスカレートする。

小学校六年、一学期の終了式を目前に控えるころ、今度は僕自身が皆を代表して蛮勇を振り絞りこう言ってしまう。

「先生、八ヶ岳（二八九九^{メートル}）に連れてって！」

銘柄指定つてというのが可愛くないとこだが、この頃になると地理の授業も始まり、サルも多少知恵がついている。また、八ヶ岳つていうのが微妙な味わいである。北アルプスや南アルプスの高峰はまだ自信ない。でも「高尾山ごときじゃごまかされないゾ」という気合も充分で、アクセスがよくかつアルペン的な要素もある八ヶ岳を指名した記憶がある。

何と先生はこの年も坊主たちを率いて、貴重な夏休みの二泊三日を費消してしまったのだ。かつて流行った映画「私をスキーにつれてって」みたいに相手が原田知世ちゃんなら、先生もウキウキなの

だろうが、坊主相手では何とも申し訳ない話である。この山行にはさらにオチがつく。

小海線清里駅で静々と振り出した雨は、美しの森山につくころは無常の土砂降り。先生は登山中止を宣言したが、そこはめげないおサルども。第一まっすぐ帰ってしまったらせつかく逃げてきた塾に無い戻る羽目になる。そこで今度は友人が一言

「先生、上高地に廻ろうよ！」

これは小心者の僕には言えない驚愕の一言だった。でも先生はその通りしてくれた。清里から小淵沢を経て中央線で松本まで。さらに新島々からバスで上高地に入ったのは夕方くらいだったか。さつそくバンガローに投宿。テレビもお風呂もない環境で酒も飲めない子供たちと一緒にでも楽しかろうはずがない。おまけにサルたちのご飯作りまでしなければならぬ。心中察するにあまりある。

翌日も土砂降りで停滞。三日目、帰る朝となって、ようやく前線は通過。残念だが人生こんなものである（ちよつと構えずさか……）。別れの朝、わき立つ雲を従えた穂高が朝日に輝き眩しいばかりであった。上高地は既に家族でも数回きていたが、「今度、くる時は必ず頂までいきたい」と自然と思えた。思えばここが僕の出发点だったのかもしれない。

小学卒業後も市内にあった先生の下宿には、よく遊びにいった。その頃は「年一回は先生と山に行く」と勝手に決め込んでいたので、中一の夏は立山行きの企画を持ち込んだ。中学生になった六人の元

サルも部活等で忙しく、行けたのは私と友人だけ。先生も独身のままだった。今度は三〇一五峰の山頂に立って大いに自信がついた。なんたって憧れの三〇〇〇峰である。残雪、道松、雷鳥に高山植物に池漕。とにかく山のエッセンスが詰まった山旅であった。前年の上高地が出发点であれば、この年の立山は間違いなく「原風景」であるといえる。

残念ながら先生と私の山物語はここまでである。なぜなら翌年、先生は転勤となりわが町を去ってしまった。私はさすがに勉強も忙しくなってきた。年賀状のやり取りはしばらく続いたが、ある年から「あて先不明」で返送されるようになってしまった。今も元気なのであろうか……。

小学校時代のこの担任は、大学時代は空手部で必ずしも山男ではなかったことだ。そもそも団塊世代はまだ娯楽も少なく、若者のハイキングもよくある光景だったようで、先生の場合もそうだったと思う。その先生がリスクをとってまで、子供たちを導いて下さったのは、「教え子のために」という愛情があくまでベースにあったと思う。

その後、僕は先生からの財産を胸に高校入学と同時に自然と山岳部の門を叩いていた。

今、山岳部顧問を引き受ける先生がいないため廃部、休部となる学校が多いと聞く。もっともな事であると思う反面、一抹の寂しさを感じるのは僕だけであろうか……。山岳部顧問を引き受ける先生

は「山が好きである」以前にまず、「生徒が好き」であって欲しい。ひとたび、教室を出て、同じテントで寝て、同じものを食べるともなれば、生身の人間と人間とのつながりとなる。高校生でも既にスケールでは顧問の上をいっているのはゴロゴロいる。子供扱いは禁物である。さらに生徒の管理ばかりが能ではないだろう。いわば泊まりがけの野外教室授業である。時に、自分自身の思い出や将来の夢を語り聞かせる。そんな「人間臭さ」はゆめゆめ忘れないで欲しい。

幸い、当部の歴史は松崎先生を筆頭に魅力ある顧問群に彩られてきた。人間教育の場として、これからもそうあって欲しいと思うのは私一人ではないであろう。九十余年の当部の歴史は校歌にもある通り「師弟の情思」の歴史だからである。

追悼 ある山男の「不本意な」死

黒沢資到（一九八一年卒）

「川嶋が死んだ……」

卒業後しばらくぶりの同級生の声。悲しみを押し殺した、むしろ無機質ともいえる抑揚が、電話越しにやるせない。「何故なんだ!」。あんなに、山を愛していた屈強な男が。社会人になって忙しさに疲れる中、ようやく取れた休日に、当然のようにマイカーを駆って尾瀬に出かけた結果が、交通事故死であった。対向車線に飛び出しバ

スの下敷きになってしまったというのだが、ブレイキ跡が無かったとあれば居眠り運転ということかもしれない。

無性に悔しかった。仮に山で死んだのなら、まだ本人も納得ができたかもしれない。さぞかし、無念であつたらう。川嶋哲也、享年二十四歳の若さであつた。

川高山岳部時代は夜行列車によく乗った。かつての新宿駅「アルプスの広場」にはひとかたならぬ郷愁を感じる。移動はいつも電車とバス。寝返りをうちながら、それでも、目的地までは確実に運んでもらえた。山が遠かつた時代だ。もうここ二十年余り夜行電車には乗ってない。社会人になってマイカーを持つようになると、山はより身近になった。

行きたいときに出かけられる。装備の選択にも迷わない。使うかどうかは当日の天気次第。とにかく積んでいくだけのこと。電車の接続時刻を気にしたり最終バスの出発時刻にせかされ山を駆け下る必要もない。何時間もかかる林道歩きも不要だ。勤め人にとっては一見いい事づくめだが、まさにそこに落とし穴が。

マイカー登山で山行計画が粗くなつた。公共交通機関に縛られない分、時間が短縮できる。いきおい二泊三日のところを日帰りで強行などと無謀な計画になる。

体調管理も推して知るべし。車という利器に極度に依存している自分がそこにいる。ただただ猛省である。

友の葬儀は沈痛なものであつた。不思議と棺の中の顔は本当に穏

やかだつた。だがその傍らでは母君とお姉さまが号泣されていた。私は心に誓つた。「山で死んではいけない。ましてやそのアプローチでの交通事故なんかでは」と。

OB山行で至仏山に登つたとき、戸倉を過ぎた辺りで参加者全員で彼に黙祷した。仏に至る山とは何と皮肉か。上空には秋の青空が広がっていた。果たして祈りは届いたであろうか。

私は、山男の彼を部長としても尊敬していた。強い彼はあこがれだつた。私の密かな目標であつた。もし彼が生きていたら？ 時々そう思うが、その答えは今はだれにも分からない。ひたすら合掌するしかない。



北八ヶ岳の火傷

朝のメニューは餅入りラーメン。八人分のラーメンの入つた大鍋に、餅を投入した。鍋を再沸騰させるため、ラジウスをポンピングした。誰かが鍋を動かしたのか、向かい側にあぐらをかいていた私の足に向かって、鍋が落ちてきた。狭いドームテントの中は大騒ぎとなつた。

這い出して靴下を脱ぐと、踝から爪の下までが、赤く茹でたようになつていた。雪で冷やしたかつたが、凍傷になるぞと言われて、保温のためシートで包んで、背負われながら下山することになった。茅野市内の外科医院に行くと、足首には子供の握りこぶしほどの火膨れができて、甲は爪先まで皮膚が剥けていた。診察した医師に「なぜ冷やさなかつたのだ。火傷をしたら冷やすのが第一、凍傷になんかにはならない」と言われた。まだ大きな痕が残る(U)

一九八〇年（昭和五十五年）

山行

春山合宿 至仏山 三月

新入生歓迎山行 白毛門く笠ヶ岳 五月

第一回歩荷訓練 矢岳 六月一日

第二回歩荷訓練 蕎麦粒山 六月十五日

第三回歩荷訓練 御前山 六月二十九日

夏山合宿 南アルプス・荒川岳く聖岳 七月二十日く二十八日

川女合同山行 二子山 十一月

秋山合宿 甲武信岳 十一月一日く三日

冬山合宿 日光白根山 十二月二十五日く二十八日

他に個人山行は、夏の期間中に、南アルプス・北岳、甲斐駒ヶ岳、中央アルプス、北アルプス・白馬岳、尾瀬、苗場山など

〔部員〕 八島正知 石井正彦 高橋克己 宇都野正敏 高橋秀一

丑沢正樹 岡田伸隆 米山博久 加島篤人 小泉浩 山中哲夫 草

間雅行

〔顧問〕 牧野彰吾 小峯昇 牛窪勲 吉田洋征

夏山合宿の南アルプスは、身延から伝付峠を越えて二軒小屋に入り、そこから荒川岳く赤石岳方面への縦走だったが、風雨になった。

翌日も停滞。こうして計画では光岳までの縦走だったのだが、聖岳から大井川へ下山することになった。この合宿では全日を通して、



1980年7月 夏山合宿 荒川岳～聖岳 悪沢岳頂上にて

午前一時起床、三時出発の行動を徹底した。冬山、春山合宿も、天候には恵まれなかった。冬山合宿の奥白根山では、頂上に到達したものの（「天気が悪く視界が利かなかった」と報告されている。春山合宿の皇海山でも、撤退を余儀なくされている。

寄稿 四半世紀の私の山

加島篤人（一九八二年卒）

小中学時代にかじったボーイスカウトの野外活動が、私の心をつかんだ。高校に入ったら山岳部だと決めていた。思惑通り、川高での三年間は勉強以上に山だった。先輩たちは山に対しての取り組みや知識の深さに、強烈な個性を持った面々がそろっており、十五歳にとってはとてもまぶしかった。中でも一戸さん、守屋さん、川嶋さんの三人には特に影響を受けた。

入学直後の新入生歓迎登山で両神山に行ったとき、先輩たちの歩く速さがものすごいには驚かされた。「川高下り」は強烈だった。標準コースタイムの半分以下で駆け下った。

歩荷も思い出だ。最初は酉谷山から熊倉山へのヤブルートだった。小雨の中、背丈以上の竹ヤブを漕いでいた時、前を歩く同期が消えた。急な下り斜面であることが分からなくて、ヤブの中に沈没してしまっただ。竹の中に倒れてもがく彼の姿が目には浮かぶ。今は笑い話だが、あのときは新人は無我夢中だった。

三年時の夏合宿は北ア縦走。扇沢からアルペンルートを利用して五色ヶ原から上高地までのコースだったが、川越から扇沢までの交通機関にバスをチャーターしたのは山岳部史上初めてだろう。本格的な大型観光バスだ。この年は二年生の人数がかなり多く、合宿参加者は二十五人を優に超えていた。ガッツこと小峰先生が提案したらしいこの「大名旅行」で楽々と扇沢に到着。いまのOB合同山行の原型はここにあったのか。

一九八三年、都内の私立大学に入学し、ワンゲルの門をたたいた。春の新人歓迎登山を皮切りに、夏合宿、秋山行、冬・春合宿と、基本的には高校時代と同じような内容だった。が、レベルは川高のほうが高く感じた。大学では素人同然の学生が三年単位の入れ替えのため、技術経験なしに毎年同じような山行を繰り返すことが大きな理由と思う。高校では顧問の先生が積み重ねた経験をお持ちである。また川高と決定的に違う点は、大学では基本的に男女混成だということだ。どうしても女性が加わると最後には無理がきかないのは致し方ない。

どこのワンゲル部もそうであるが、遭難事故には十分に気を遣っている。だからどうしても山に対して、チームワーク、規律など、いわゆる体育会的な面が重視され、文学、学術、ロマンといった面が後回しにされる傾向にある。よって、山に後者のようなものを求めて入ってきた者はなかなか居づらいのである。私も最後までこのはざまでがいた。

そんな私であったが、大学を卒業して数年経って、なんと母校ワ

ンゲルの監督を引き受けることになった。「監督」とはいうが、川高での「顧問」と同じようなポジションであり、実際には、なり手がいない中を引き受けたようなものだった。同じ体育会の部でも花形の野球やラグビー、陸上（駅伝）の監督は常任であり（学校より給料が出る）、ほかのほとんどの部の監督はパートタイムだ。ワンゲルの監督の主な仕事は、山行計画の審査、行事ごとの訓辞、山行の視察などである。具体的な技術指導などはほとんど学生自身でやるので、特に監督自身による手取り足取りのようなことはないのである。山にロマンと旅情を求める傾向の私が、学生に対して「礼儀」「返事」「規律」について、訓辞する。山とは特殊な性格をもつスポーツだ。

当時、他の大学であるが、体育会の学生が破廉恥な事件を立て続けに起こし、社会問題となっていた。なぜかラグビーが多かった。その時、「監督は何を指導しているのか」という非難が必ず起こるのだが、実際には部活以外の私生活は指導の範囲外である。高校野球での不祥事でも同じことが言えるが、監督はあくまで主に競技のコーチであり、それ以外の責任まで負わずのはいかなものか。年一度の体育会監督会議で、生活面の担当コーチを設けようかとの奇案が出たのを覚えている。それほど基本的な生活における原則の理解や資質が不足している学生が多く、どの部でも問題になっていた。私自身、監督本来の業務より、部員の小トラブルの対応に忙しかったように思う。

六年間監督を引き受けたが、期間を通じて部員の確保には苦勞し

た。ちょっとしたことですぐ辞める者も多く、このことは体育会全体に共通した悩みであった。世の中、便利になり過ぎて、若者の人間力が落ちてきているのかもしれない。ちなみに大学からの手当（報酬）は年間二〇万円、学生を二、三回飲みに関連していったらあつという間に消えてしまった。

九七年、川越高校の山岳部OB会から手紙が届く。OB会などあったのかとまず驚いた。手紙の内容は、長年顧問をやられた松崎中正先生の自費出版記念パーティーをやるとのことだ。これをきっかけにたくさんOB先輩後輩と知り合いになり、年数回の山行が今は続いている。ほとんどの人が川越を中心にして埼玉県西部地域に住んでいるため、電話一本で集合し、車に乗り合わせて山へ、下山後温泉で一杯というのがコースだ。今までは近所にこんな山仲間がいるとは知らなかった。私に大変充実した山ライフを送らせてくれる山仲間感謝し、今後もよろしくお願いだ。



S.V

一九八一年（昭和五十六年）

山行

春山合宿 庚申山〜皇海山 三月二十五日〜二十八日

新人生歓迎山行 大菩薩峠 五月四日

第一步荷訓練山行 川苔山 六月七日

第二步荷訓練山行 三頭山 六月二十一日

夏山合宿 薬師岳〜槍ヶ岳 七月二十一日〜二十七日

秋山山行 奥武蔵・大平山 十月十一日

秋山歩荷訓練山行 大岳 十一月二十二日

冬山合宿 上州武尊山 十二月二十五日〜二十八日

他に個人山行は、二月の雲取山、五月の谷川岳、甲武信岳、八月の

穂高岳、十二月の雲取山など

〔部員〕 矢部大 宮下彰 深代潤 重松裕二 藤田好博 小泉浩

谷川透 新保淳 中川賢尚 橋本和也 弥富英樹 高澤幹哉 田口

智英

〔顧問〕 牧野彰吾 小峯昇 佐伯勝 高橋守 小室秀雄

夏山合宿は、アルペンルート^の黒部平から入山。一ノ越へ登って

薬師岳への縦走開始。前半は雨模様だったが、薬師岳登頂以降は天

候に恵まれた。

さらに黒部五郎岳、三俣蓮華岳、双六岳、槍ヶ岳と縦走して上高地に下っている。

冬山合宿の武尊山も天候に恵まれた。

随想 上州武尊山について

この山の名の由来は「日本武尊」^{（ひまとりけるみこと）}である。日本武尊は大和朝廷時代の伝説上の英雄であり、はじめは西征して出雲武などを破り、東征においては蝦夷を討つ。そして帰る途中熊煩野^{（のぼの）}（三重県亀山市）で病死するのだそうだ。

武尊の東征と山とは縁が深く、武尊山の他、碓日峠（碓氷峠）、四阿山、両神山、武甲山、神坂峠（岐阜）などには、古い言い伝えが残っている。

武尊山もやはり言い伝えられたように、人々に親しまれた。最高峰の沖武尊には御岳山大神と刻んだ石が建ち、剣ヶ峰には普賢霊神が祀っており、前武尊には日本武尊の銅像が建っている。今回の山行では、裏登山口の久保から入り、沖武尊で引き返したから二つは見えない。

信仰の山は一つの共通点を持っている。岩場があるということ。険しい岩場を越すことによって、修行としたのだろう。沖武尊の山頂直下も、岩がゴツゴツしていた（だから我々はそれを避けて登った）。

（二年 野村正宣）「わんだらあ」十四号

寄稿 顧問のザック

小峯 昇(顧問)

三食昼寝付き?で山にいける! そんなうまい話があるかと思つたら、あつたのですね。それが、高校の山岳部の顧問です。しかし、うまい話には何かあるはず。そう、実はいろいろあるのです。

昔は、テン場について一仕事を終えると、缶ビール片手に稜線に座り込み涼風を受けながら、心ゆくまで景色を眺めるというようなこともあつたらしいが、今はそうもいかない。

絶滅寸前ともいえる山好きな高校生を探し出すことから四月は始まる。実際にそんな希少種な生徒はいないので、授業の合間に入部勧誘をし、なんとか新入生を引き入れ部を存続させている所が大部分であろう。やっと入部したけれども、なかなか動かない生徒の尻を押して、テントを立てさせ、夕飯準備をさせてというか率先してやらねばならず、山の中でも気の休まることがないのである。

さて、顧問ともなると「顧問ザック」といわれる見るからに小さく、軽い(いや実際に軽い。悔し紛れに小指一本で持ち上げた生徒もいたほどである)ザックを背負っていくことになる。

生徒の羨望(せんぼう)半分、ねたみ半分の視線をもともせず、顧問ザックならではの山旅を十分に楽しむ? ことができる。

初めての歩荷で、顧問ザックと自分のザックの違いが著しいこと

に気づいた小柄のM君は、何で石を入れて自分で自分の首を絞めることをしなくてはいけないのかと、率直な疑問を呈していた。その通り。だがその疑問は愚問である。やるしかないのだ。

このM君は、歩荷で「鍋ぶたフリスビー事件」を起こしている。

夕飯当番が飯鍋を準備して火にかけた。さて鍋ぶたをと辺りを見回したが、ない。と、下の川でふたを洗っているM君を見つけて、こつちに持つてくるように声をかけた。何を思ったか、彼はフリスビーよろしく鍋ぶたを投げたのである。こういうときのまぐれというのは、実に恐ろしいものである。何故か投げられた鍋ぶたは、曲がることなく一直線に、割れ鍋に綴じ蓋よろしく、本来一体であるべき飯鍋に飛行を続け、あろうことか飯鍋をスベアから大地に落下させたのである。閑話休題。

川高から創立時の伊奈学園に転勤し、それまで身につけたノウハウを元に山岳部を作った。そして、後半は女子部の顧問なつた。

今では考えられないが、入部する女子生徒が多くなり女子部を独立させたのである。

生徒がばててしまった場合、歩荷であれば、「じゃあ、石を捨てろ」と負荷を軽くすることもできるが、夏山になるとそうはいかない。スベアやテント、ましてや食料を捨てていくわけにはいかないのである。そんな時に、I君、Y君、H君、またI君などは率先して荷物を分担して担いでくれたなあ。感謝!

しかし、女子部ではそうはいかない。ある年の夏山、ばてた生徒を中心に彼女らの真剣な眼差しが一点を向いている。そう、こちら

を見ているのである。こんなにたくさんの、熱い鋭い女子高校生の視線を授業中にも放課後にも浴びたことがない私は、一瞬、彼女らの発する強力な電磁波に気圧されてしまった。

ご想像の通り、数分後には苦行僧よろしく、額から汗を吹きだし、雪溪の上をダブルザックとなった私の姿があった。

ことほどさように、顧問業は最悪、生徒の荷物を持つことを覚悟しなければならぬのである。いや荷物で済めばまだよいのだが……。ある年の冬山、黒百合平で朝飯準備中に鍋が倒れ、よりによって七十五キ以上もあるU君が足に火傷を負ってしまった。どうして下ろすか、この時一番若くて体力もありそうな顧問は私だった。なぜかこういう時に、生徒たちは細めな子ばかりなのである。

さすがに参った。何しろ凍っている下り坂だ。踏ん張りがきかないのである。悪戦苦闘の末、病院に運び込み、処置をして顧問が一人付き添って帰った。その後、再び登り返し合宿を続けたのも印象的なことであった。

山男である以上、パーティーを組んだ彼の荷物、あるいは彼そのものを運ぶことをもころよしとしなければならぬのである。

このためにも、顧問ザックは必要最低限のもので満たされているのが絶対条件であるから、必然的に軽くなる。寝袋の代わりにシユラフカバー、シユラフカバーの代わりにザック等々。

考えてもくれたまえ。顧問がへとへとに疲れているのは、正常な判断は期待できないであろう。それは、即リスクを招くことになる。山行中は、様々な場面で判断を迫られるものだ。

冬山の日光白根で、この斜面を詰めて頂上に向かって危なくないか？ 雨が続いた南アルプスで、まだ停滞して待つべきか、あきらめて下山すべきか。

こんなときに、顧問の持っている判断力、センスが最大限生かせる状態になっていなければならないのである。つまり、限界状態に近い舞台設定で、より適切な判断を下すことが大事なのである。

さて、ここまで読み進まれた賢明な諸君はもう理解ができたであろう。あの顧問ザックの中には、生徒諸君が歩荷で入れたどんな石よりも大きくてそして重い「責任」というものが詰め込まれていたのである。また件の顧問ザックには、背負っていた顧問の汗と一緒に、ちよっぴりほろ苦い顧問センスという隠し味が染みついていたことも是非覚えておいてほしい。

追記 Mは守屋君、Iは猪狩君、一戸君、Yは矢部君、Hは本郷君である。他の諸君もよく頑張ったし、よくトラぶった。ふと記憶に蘇った諸君を挙げさせてもらった次第。



S.N

一九八二年（昭和五十七年）

山行

春山合宿 巻機山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 平標山 五月一日

第一回歩荷訓練 蕎麦粒山 六月六日

第二回歩荷訓練 川苔山 六月二十日

夏山合宿 飯豊連峰 七月二十一日～二十六日

秋山山行 酉谷山 十月十日

第三回歩荷訓練 鷹ノ巣山 十一月十四日

冬山合宿 日光・女峰山 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 野村正宣 宮岡勲 太田香 田越秀行

〔顧問〕 牧野彰吾 小峯昇 佐伯勝 高橋守 小室秀雄

春山合宿の巻機山は荒天だった。四月になると、十二人の新入生が入部した。二年部員は二人。夏山合宿の飯豊山行は新入生で膨れ上がる。川越からチャーターバスで新潟県関川村の大石から入山し、連峰北端の杵差岳から縦走を始める。ところが縦走二日目に一年部員が体調を悪くして、翌日顧問に付き添われて地神山から下山。またこの日の幕営地の御西岳では風雨に遭遇した。

それでも行動開始。飯豊本峰から三國小屋まで。体調を崩す者が

出た。テントが壊れた隊は小屋泊まり。以降一日予定を切り上げて、翌日下山となった。それでも主脈の縦走は成し遂げられた。

冬山合宿は日光・女峰山だったが富士見峠二〇三六峰でも積雪がなく、水を探すことに苦勞したようだった。十一月に、川越女子高校の登山部と合同山行が行われた。芦ヶ久保の丸山である。山行の様子は、女子校の部報「しゃくなげ」十七号に報告されている。

記録 合同山行

ようやく山道に入ったのだが、しばらく歩いてもまるでよそよそしいのだ、私たちは。登山をする人つてのは内気なのか、硬派なのか、とにかくこういうのは苦手らしい。

この山行の計画のときは、ほんと山とは言えないようなコースだと聞いていたし、確かに始めは緩やかで、天気もよく紅葉も綺麗で秋山もいいもんだなあなんて思ったものだが、途中からはそんなこととは思ってもなくなった。道は急だし、何たってペースが速い。でもそんな思いつて私だけだろうし、休憩のとき、

「気持ちが悪い」

と音を上げたら、川高の人に、

「気持ち悪くなった人がいるんだってよお」

と呆れられてしまった。

ともあれ、尾根道に入ると、ペースが落ちたので楽になった。ようやく丸山に着いた。秩父の山々や街が一望できて大変展望が良い。



奥秩父 十文字峠の石楠花

「ご丁寧なことに立派な展望台があって、しばらくそこにいた後、降りて昼食にした。私は空腹だったので全部平らげたが、私の近くにいる人たちは、皆あんまり食べないので、がめつい私はその残ったものももらって食べた。このとき共学の友人が、手紙に、

「うちの高校の女子は、皆弁当は幼稚園児みたいなものしか持ってこなくて、放課後になるとパンを五、六個も買ってきて、もりもり食べてんだよ」

と書いていたのを思い出し、なるほどと思った。それにしても会ったときから、川高の人たちが随分荷物が多いので、不思議に思っていたんだけど、頂上に来てそのほとんどが食べ物だったということには驚いた。

ここは広くて景色もいいんだけど、それよりも寒くてたまらなか

った。だから早く帰りたいかったんだけど、何かずるとそこに居残ることになってしまい、ようやく二時過ぎに下山することになった。下りは楽で余裕もあったので、登りよりはよっぽどよかった。途中何度か、せっかくこういう機会なんだから、一言も話さずに帰るなんてしゃくだなって思ったけど、けっきょくダメなんだよな私って。

気分も手伝ってか芦ヶ久保にあつという間に着いた。ちょうどタイミングよく電車に乗れて、飯能と所沢でほとんどが降りたので、何となく挨拶もしないで別れて、残ったのは四人。川高の人が一人で、川女が三人んだけど、意外とこれはまとまり易い人数で、気楽になったのか、ホームでも車内でも何となく話が弾んで、何と私は入学してから同年代の男の子と話をしたのは、このときが初めてだったんですね。正直な話、この所沢から本川越までの数十分が、私にとっては今回の行事の内容として最も有意義で楽しかった時間に思えるんです。

このようにして今回の合同山行は幕を閉じたわけだけど、川女の登山部にはこのことを契機に、多少なり変化が起こったような気がするのだ。例えば、今まで部室の戸棚の奥にひっそりと身を潜めていた川高の部報が、いつの間にか目に付くところに置かれるようになった。また今まで話したこともなかった川高山岳部の人たちの名前が、度々私たちの会話に登場するようになった。とにかく中味を見ても結果を見ても、登山部らしい交歓会でした。

「川越女子高校部報　しゃくなげ」

一九八三年（昭和五十八年）

山行

春山合宿 白毛門 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 万太郎山 五月八日

第一回歩荷訓練 酉谷山 六月五日

第二回歩荷訓練 武甲山 六月十九日

夏山合宿 南アルプス・茶臼岳 八月二十日～二十四日

秋山山行 両神山 十月三十日

第三回歩荷訓練山行 三頭山 十一月二十七日

冬山合宿 日光白根山 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 横山敏洋 青木優和 長谷川肇 梶野秀樹 渡辺直光 榎

元彰司 野呂伸一 小林延嘉 鈴木稔 伊藤正宏 近谷英悟 青柳

秀俊

〔顧問〕 小峯昇 佐伯勝 高橋守 小室秀雄

部報の発行は、この年から毎年九月発行として、同月上旬のくすのき祭に間に合うように制作されるようになった。山岳部の年度は九月を基点として、三年部員も参加する夏山合宿まで。

また部報編集の中心は二年と一年で、直前に行われた夏山合宿は一年がまとめ、年初頭の春山合宿や、前年の冬山合宿は一年次に参

加した二年が報告を書いている。

春山合宿の白毛門はパワフルな山行となった。白毛門を越えてテントを笠ヶ岳とのコルに移動させ、笠ヶ岳まで到達したが、下山に苦勞した。夏合宿は南アルプス南部縦走だったが、連日の雨で畑雑ダムから茶臼岳に登っただけで、敗退になった。横窪沢のテント場は増水してテントの中まで水が流れ込み、シュラフがその水の中を泳いでいたと記されている。

記録 部報巻頭言

「牧野先生、小峯先生！」

一人の青年が山でわが顧問の名を呼んだ。彼は山岳部のOBらしく、しばらく懐かしそうに先生方と話をしていた。

山岳部OBと山で出会うのは、これが初めてではない。私は川高山岳部の伝統を感じ、いったいKAC（川高山岳部）から輩出した岳人が登り残している山があるのだろうかなどと考えてしまう。北大へ行った先輩は北海道の山を歩き回っているし、また、信州大の先輩は、北アルプスを登りまくっているだろう。

部の創設期は、野球部には一步譲るが、大正八年に求めることができる。第一回登山は、同年七月の校長ほか五人の教師の引率による生徒二十五人参加の富士登山であった。第二回木曾御岳、三回白馬岳と続く。大正九年の「校友会報」に、「本校は、自然の美を穢さない、流行的なものではない登山部を新設し、大いに雄偉剛健の

気を養って、學術の研究をも目的とするものである」とある。

当時の山登りの考え方は、今日とはかなりの差がありそうだが、流行的でない登山、雄偉剛健な登山は、肝に銘じておきたいものだ。

あるとき、部員の一人が「山岳部には表の規則と裏のそれとがある」といった。現在もある裏の規則とは伝統につながるものではないか。部の古さと男子校ということから、KACには、山の登り方に独特のものがある。特に、学徒大会の登山競技は、「山登りとは他者との競技ではない」との立場から、代々大会出場を辞退してきた。部風の、ある意味での「自由」は、学風にも通じるものである。しかし自由は、各人の信頼関係の上に立つてのものであってほしい。

真剣な思いで山に対してしている部員の記録がこれから始まる。プロデューサーなきドラマであるが、それだからこそ面白い場面もありそう。部員が一生懸命に書いたもの、どうか一読いただきたい。後に続く人たちへ。来る新時代に応じて方法は変わろうが、根底にある川高山岳部の気質は変わらないことを祈る。

(三年 野村正宣)「わんだらあ」十五号

山行記録 春山合宿 白毛門(抄)

三月二十七日 第二設営地↪笠ヶ岳↪白毛門↪下山

翌朝、テントから出てみると、出口に掘った穴が雪に埋まっていた。そうです、雪が降ったのです。私は雪洞に寝た人たちが心

配になりました。すると顧問から私に、雪洞の様子を見てくるようにとの言い付けがあり、急いで走って行きました。ビニールシートは雪の重さで垂れ下がっていました。シートの奥は穴がし字型になっていて、もう一つの穴はキスリングで塞がれていました。これなら平気だろうとテントに戻りました。本来の三日目の行程は、第二設営地(一六五〇㍎)↪笠ヶ岳↪朝日岳の往復でした。

我々は朝食を取った後、サブザックにカラビナ、細引き、間食その他を入れて出発。視界は極めて悪く、前方はまるつきり見えませんが困難になり、登りづらくなりました。やっとの思いで笠ヶ岳に着きましたが、その先は断念せざるを得ません。ここで間食を取り、細引きの結び方を復習して、再び第二設営地に戻ってきました。

戻った後昼食を取り、テントをたたみ出発しました。目的地は白毛門を越えた第一設営地(一一〇〇㍎)であります。そこへ辿り着くまでの道のりは、非常に恐ろしいものでした。私がいくらこの恐怖を説明したところで、経験していない者が分かるはずはないと思うのであります。

白毛門の下りで超急斜面と呼ぶに相応しい場所に出ました。その斜面をキスリングを背負ったまま下ることは困難と見たため、人間とザックを別々に降ろすことになりました。しかしそうするには、ザイルと呼ばれる長い綱が必要なのですが、我々はそれを購入していませんでした。ですから応急対策として、全員の細引きを結んで長くしたものを、ザイルの代わりに斜面に垂らしたわけです。その

斜面の初めと終わりに顧問が立ち、一人一人のザックにカラビナを付けて、細引きに通して斜面を滑らせて降ろすという作業を繰り返しました。それが終わると、今度は人間が細引きを伝わって降りました。一人一人時間をかけて下りました。そうしてやっとの思いで第一設営地まで辿り着くことができました。

そこで幕営作業を終えて一息ついたとき、一日目にここで作った雪の滑り台がそのまま残っていたのを見て、懐かしくなりました。しかしこうやって山を甘く見ることが危険なのです。土合駅に着いてみると、谷川岳登山禁止の立て札がありました。一名の滑落者も出さずに無事に帰って来られたことは、とても幸運であったと思います。朝日岳を断念したことは残念ですが、谷川連峰と一ノ倉沢をくつきりとの目に焼き付けることができたことから言えば、何も言うことはありません。(一年 伊藤正宏)「わんだらあ」十五号

随想 登山観

(当時の顧問は「ガッツ小峯」と言われた小峯昇先生が中心だった。部報に顧問の登山歴紹介のエッセーが掲載されている)

山に登り始めたのは今から十二年ほど前になる。大学の化学部の連中に誘われて、五月の連休に大菩薩嶺に登ったのがそもその始まりである。その夏にはあの表銀座へテント持参で出かけた。残念なことに槍の頂上では視界ゼロという生憎の天気で、おまけに横尾

のキャンプ場で未明に雷雨の襲来に会い、薄明かりの中を寝ぼけ眼で木の下に避難(いま考えると返って危険だが)したのを覚えていゝる。上高地に着いて人の多さには驚いた。河童橋は人通りが絶えることがないようである。大正池も現在よりずっと水量が多く、立ち枯れの木が水面にその姿を写していて大変印象的であった。

教訓 山の雷 時間選ばず 三〇〇は超すと夏でも寒い

翌年は後立山縦走であったが、後半台風の影響が始め、夜半に強風でテントが倒されてしまった。翌朝、霧の中白馬岳に向かったが、稜線上で風雨共に強く、友人が危うく凍えそうになった。

教訓 強風の前にポンチョは役立たず

あくる年は槍ヶ穂高のゴールデンコースであったが、悪天候で南岳の避難小屋で一泊し、槍平へ下ることになった。折からの雷雨のため寝る頃にはイワシの缶詰以上に詰め込まれ、某先生お馴染みのダニたちに食いたい放題食われた。寝袋の中で手足が全然動かさないのだから、ダニ諸君にとって大変なご馳走だったに違いない。夜中にキジ撃ちに出ようものなら、帰ってきてからは体の幅をゼロに近づけなければ、とても元の位置に潜り込めたものではない。

教訓 避難小屋は棺おけにも劣る

「棺おけの中の方がよほど広いで、寝返りも打てるし、おまけに花なぞあってきれいや」(大阪方面から来て、我々の隣で潰されな

がら寝た登山者の弁)

教員になって初めてのポーナスで登山靴を買った。それまではキヤラバンシューズであった。この登山靴はそろそろ分解しそうだが、現在も使用中である。さてこの登山靴で一回目に行ったのが穂高岳で、このときは天候が安定していた。その後八月に、赤石岳、荒川三山に行くことになったが、愚かにも小渋川の徒渉コースに賛成してしまった。いざ徒渉のときに靴を濡らすまいと思ひ、二度、三度と靴を脱いだだが、友人たちが一人諦め、二人諦めしていくうちに、とうとう靴のまま川に入らざるを得なくなってしまう。その日の行程は何故か非常に長く感じた。

教訓 徒渉するならボロ靴で

暑い河原沿いに二日ばかりで大聖寺平に上がった。赤石岳に登ったときは晴天で申し分なかった。このとき遙か彼方太平洋上で台風がこちらに向かって進んでいたのがあった。出発前に一つ台風をやり過ぎて安心してたが、別にもう一つ新しいのが発生していたらしい。その夜、荒川小屋前でテントを張っていた我々に、例のごとく強風雨が訪れた。朝方ついに荒川小屋へと避難した。そこで一泊したが天候の回復が見込めないため、風雨の中赤石岳を越えて榎島へと下った。榎島から畑薙ダムへのトラック便はちょうどその日で終わつたと聞き、ガツカリ。翌朝、延々二十^キの林道歩きとなった。何故かダムサイト上空には雲一つない。バスを待つ間、あの茶店で飲んだビールが実にうまかった。

教訓 遠くにいても台風は怖い

(海岸に高波が打ち寄せる頃は、山でも荒れる)

大井川林道は二度と歩かないぞ。

(残念ながらその五年後に、また十五^キ歩いたのでした)

毎年のように雨にあつたせいもあり、雨の中を歩くのはそれほど苦ではなくなってきた。

教訓 雨具を着れば蒸れる、着ないと濡れる

(やはり蒸れる方が、濡れるよりも数段増しのようである。濡れて風に吹かれると、体温を奪われ、想像以上に消耗し、夏でも疲労凍死はありうる。注意しなければならぬ。以前五月末に、蝶ヶ岳、燕岳に行ったときは、好天のなか強風にあい、体力の著しい消耗を経験したことがある。雪の上を吹いてくる風だけで体温を奪われたらしい。最近が良い雨具ができたが、ゴアテックスといっても蒸れる)

かくして山岳部の顧問になる前に、友人たちとの山行で多くを体験し、勉強した。しかしどうも人間というものは都合の悪いこと、苦しかったことはすぐに忘れる。頂上でのあの充足感、爽快感だけが強く残るようである。真夏の焼け付くような太陽の下、全身の毛穴から汗を噴出しながら山に登るときは、何の因果でこんなことを、と思つたのは一度や二度ではないはずである。重い荷を背負つての

登り降りには良くないぞと仲間内で話したこともある。ところが翌年の夏、また何の因果でと考えながら、目に入った汗を拭き拭き登っていく自分にふと気がつく始末である。(友人との山行は決して毎回雨が降るのではない。また私が雨男というわけでもない。数年前に裏銀座へ行ったときは晴天続きであったし、川苔山大焼き肉パーティー歩荷山行のときも、好天であったことを書き加えておく)。

さて自分なりに考えてみると、四、五年前(山岳部顧問になる前)までは、どちらかというところ、有名な山、高い山、個性あふれる山に登ろうとしていた気がする。大学時代から北アルプス志向は強かった。個人的に旅行のついでに登った山は、羅臼岳、大雪山、十勝岳、南暑寒別(北海道の尾瀬と言われている雨滝沼の奥にある)、駒ヶ岳などの北海道の山に限られていた。また北海道の駒ヶ岳に登ったときに、駒ヶ岳シリーズを試みたことがある。翌年は秋田駒ヶ岳を目指して車で東北に向かったが、雨天候続きで断念し、また北海道へ渡ってしまった。その翌年は夏山合宿で南アルプス北部縦走の予定だったが、初日に一年生がダウンし予定がつまり、甲斐駒ヶ岳を目前にして、仙丈ヶ岳からの下山となってしまう。けつきよく駒ヶ岳シリーズは一つだけで、今のところは見通しが立っていない。他には尾瀬に二度ほど登ったくらいで、奥秩父には全然行ってない。

山岳部の顧問になってからは、牧野先生の多大なる影響を受けて、

高山植物に対し興味湧き始めた。カメラの対象も山そのものより、徐々に花中心にと変わっていった。三年前の夏に女房とアラスカに旅行したが、私の写したもののうち三分の一以上が花の写真であった。帰国後、図鑑などで調べてみると、大部分が日本に産するものと似ていた。さらに偉大な高橋先生の登場により、野鳥の方にも興味湧き始めた(幸か不幸か、ネズミ諸君にはまだ愛着を抱いていない)。

今まで単に鳥が鳴いているとしか言えなかったものが、鳴き声を聞いてその名前が分かったときは、花を見てその名前が分かったときののように、新鮮な感動があった。高橋先生の手ほどきにより、歩荷での楽しみ方も一つ増えた。それは早朝まだ空に星が瞬いているときから始まる鳥のコーラスである。金属的な声のトラツグミ、薄気味悪いヨタカ、美声のオオルリと、明るくなるにつれ、その声の大きさや種類が増してくるのを聞くのは、何とも言えないものである。

かくして現在は、山そのものに登る楽しみに加えて、植物を見ること、鳥の鳴き声を聞くことなどにも関心が向くようになり、山をマルチに楽しむことができるようになった。今年の七月末に岩手の早池峰山に登ったが、その目的はハヤチネウスユキソウをはじめとする豊富な高山植物を見に行くことであった。

生徒諸君も、この先長く山に登るつもりでいるなら、単に山に登るだけでなく、広い目で山や自然を見ることができるようになって欲しいと願っている。(顧問 小峯 昇)「わんだらあ」十五号

一九八四年（昭和五十九年）

山行

春山合宿 上州武尊山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 日光・太郎山 五月十三日

第一回歩荷訓練山行 大岳山 六月三日

第二回歩荷訓練山行 蕎麦粒山 六月二十四日

夏山合宿 南アルプス・荒川岳 七月二十日～二十七日

秋山山行 矢岳～酉谷山 十月二十八日

第三回歩荷訓練山行 川苔山 十一月十八日

冬山合宿 女峰山～小真名子山 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 大山正直 加藤寛樹 佐藤光俊 森田正 山本淳 古川達

朗 内野成礼 名和一成 大武昭博 布施浩二 有田博

〔顧問〕 佐伯勝 吉沢優 小室秀雄 福田公明 岩井諭

春山合宿の上州武尊山は天候に恵まれて、ラッセルをしながら大満足の合宿が行われた。宝台樹スキー場からの入山では、顧問と生徒一人がスキーを使用。トップでラッセル要員をした。さらに完全に埋没していた手小屋沢の避難小屋を掘り起こして、快適な前進キャンプとして利用した。

夏山合宿は南アルプスで行われ、前年の悪天候の分を取り戻そう

と、伊那から三伏時に登りつき、荒川岳、赤石岳、聖岳という予定を立てていたのだが、荒川小屋でアクシデントが発生。部員の一人が盲腸炎にかかって、ヘリで伊那に収容され緊急入院となった。残った部員は赤石岳直前で敗退し、小渋川を伊那へ下山するという残念な結果になった。

寄稿 南極観測へ

名和一成（一九八六年卒）

南極への想い

小学生のころからだったか、すでに亡くなってしまった父親に山に連れていかれた影響で山やキャンプが好きになった。テレビも見られず、お風呂にも入れない不便な生活であるが、きれいな景色・夜空や自然に囲まれた中での家族との語らいに魅力を感じた。その後、川高山岳部、名大ワンダーフォーゲル部を通じ、同年代の仲間と登山するようになった。ピークを踏むことはもちろん目的の一つであるが、日常生活とは違った自然との触れ合い、仲間との語らい、大学時代には下界に下りてきてからの打ち上げが楽しみであった。

川高時代の進路選択のときに、道楽としてではなく業として山に行けないかと考えた。竹内均などの啓蒙書を読みあさって地球物理学という学間を目指し、また南極観測隊を意識したのもこの頃であった。高校卒業後一年間の浪人生活を経て名古屋大学理学部に進学



1995年1月 南極観測へ 昭和基地沖の定着氷に接岸した「しらせ」を背景に 名和一成

したが、進学先を決めた直接のきっかけは、某私立大学の入学手続きのためにしばらくぶりに訪れた川高で、顧問の芝崎先生に言われた一言だった。

「名大に行ったら南極行けるぞー！」

いざ南極へ

南極を目指して大学へ進学したものの、しばらくそれを意識しない生活を送っていた。ワンゲル一年目では南アルプスの茶臼山甲斐駒を二週間で縦走し、川高山岳部三年間の夏合宿で完走できなかった山々を一気に登ってしまった。また、川高時代に雪山の経験が少しはあったので、ワンゲル内では少数派であった冬期登山にも参加した。三年の春休みには沖繩の島々を巡ってのんびりしようと思っていたのだが、雪山経験があるリーダーが不在ということで北海道の山スキー合宿に駆り出された。結果的には、このような経験の積み重ねが南極大陸に導いてくれたのかもしれない。

大学院進学にあたって、固体地球物理学をやるのか気象や雪氷学をやるのか、決断をしなければならなかった。当時の名大水圏研究所に進学して雪氷学を志すのが南極への近道だと考えていた。一方、学部で配属となった地震学講座では、卒業研究だけではなんとも中途半端・不完全燃焼という感じがして去り難かった。これまでの無理が祟ったのか、ついに壊してしまった腰のせいで夏の二ヶ月間入院生活を送ったことも、それに輪をかけた。修士課程では固体地球物理学を継続することに決めた。

大学院に進学したその年である。南極・昭和基地に超伝導重力計というセンサーを世界で初めて置くというプロジェクトのことを知った。指導教官であった深尾良夫教授も推進していたプロジェクトで、地球の中心核の動きを捉えるのが目的であった。国立天文台の先生が越冬したあとを引き継ぐ隊員が決まっていないうこと、越冬観測を希望する固体地球物理学の学生を探していたのだ。一緒に手を挙げた東大の学生が一学年先輩だったため、私は修士課程を修了してから観測隊に参加するということになった。

予想外の南極生活

南極観測隊の活動は、越冬開始前年十一月の日本出発からその翌々年三月末に帰国するまで、約五百日に及ぶ。しかし、十一月に出発する隊の活動は、春の乗鞍訓練から始まり、帰国後も「しらせ」の荷降ろしまでとなると丸二年以上拘束されることになる。私のように学生の身分で、しかも独り身で行こうという気楽な人間は少数派で、大半は職も家族もある普通の人たちである。そのようなわけで観測隊に参加しようなどという人たちは、南極へのこだわりや情熱を持っている人ばかりだと思っていた。しかし驚いたことに私の参加した隊には会社命令で仕方なく南極観測に参加したという隊員もいた。現在の観測隊には、それほどの覚悟は必要なく、健康であれば誰でも参加できるのである。

基地での生活は快適そのもので、山にいるときと同じような不由な暮らしを強いられ自然に立ち向かう……、という想像とは全く

違った昭和基地の暮らしだった。今では私が参加した一九九四年当時にはなかったインターネットが開通したことで、インターネットにも常時接続し、情報過疎地と言われていた基地の状況も一変している。男ばかりの越冬生活も昔の話で、女性隊員の参加も当たり前になってしまった。

楽しく南極

しかし日本と同じような暮らしができるのは基地の中にいるときだけであって、一歩外に出ると南極観測が始まった五十年前と比べると変わらない自然がある。結局のところ南極に行つてまでも、都会（基地）を離れた野外活動が楽しみになっていった。これまでの登山などの経験は、基地生活より沿岸や内陸での野外調査に活かされた。直に自然と接する状況に置かれることにはもちろん抵抗なく、むしろ志願してそのような経験をさせてもらった。

任務としては原則基地にいて年中動いている超伝導重力計や地震計のお守りをしなければならなかったのだが、二週間のやまと山脈調査などにも参加させてもらった。他のパーティーが調査に出るときには残された自分たちに負担がかかることもありお互い様なのが、不在時にバックアップしてくれた隊員たちに感謝している。

登山と南極観測

これまで経験した登山と南極観測を比較したい。ひとりでは困難なことをチームで仕事を分担して成し遂げるという共通点はあるも

の、南極観測隊の活動自体は、私がこれまで経験した「登山」とはスケールが全く違うものだった。

発電機は年中無休で基地の電力を賄い、余熱で雪を融かして水を作る。停電も希で、風呂や洗濯を制限されたことはほとんどなかった。暖房も絶やさず、外に出るとき以外防寒着は不要であった。医療設備や厨房も立派なものがあり医療・調理担当の隊員もその資格のあるものが同行する。

基地周辺の移動では夏場は自動車、冬期や海氷上ではスノーモービルや雪上車を駆使し、私が越冬したときには大気観測などのため小型航空機も二機飛び回っていた。通信設備も当時インマルサット（電話・FAX）や、無線・電報があり通信隊員がその任にあたった。

年に一回の補給のためには海上自衛隊の砕氷艦しらせがすべての燃料・食料など物資を運ぶ。毎年百人以上の自衛隊員が南極観測の支援にあたっている。

越冬隊四十人が補給なしで丸一年暮らすわけで、せいぜい二週間無補給での山行と違うのは当たり前である。数ヶ月のベースキャンプを張ってのヒマラヤ登山というと多少南極観測スケールに近づくのかもしれない。事実、日本の南極観測黎明期には、ヒマラヤを指していた東大山の会を中心とした大学山岳部OBが大きく寄与している。私の参加した隊の越冬隊長は、横山宏太郎さんという梅里雪山登山の偵察隊長・第一次隊登攀隊長、遭難時の救援隊長を務めた山男であった。

南極観測継続中

健康診断、ポスト探し（当時は国家公務員でないと隊員になれなかった）など越えなければいけないハードルがいくつもあった。出発前には、とにかく南極に行ってみたいという気持ちが大きく、研究は二の次という状態になっていた。帰ってきた直後も、越冬生活の最大の成果は歌手の森高千里さんから昭和基地にFAXをもらったことかもしれないなどと、言い出しかねない越冬ボケ状態？ になっていた。

しかし、名古屋大の博士課程に再入学し、自分自身でとってきたデータを使ってなんとか科学に貢献したいという気持ちで研究を進めた。その後「常時地球自由振動」現象の発見という幸運にも恵まれて博士号を取得し、工業技術院地質調査所（現在の産業技術総合研究所）に就職することができた。

帰国後十年以上の月日が流れた。観測隊に参加したことを縁に、現在でも昭和基地周辺の最新観測データを使わせていただき、国立極地研究所などの研究者との共同研究を継続している。私にとつての南極観測はまだ終わっていない。一方、山との付き合いということでは、地殻やマン托ルの構造を明らかにする目的で、重力計とGPSを持って山々を車で駆け回っている。

「参考資料」

南極観測隊―南極に情熱を燃やした若者たちの記録（技報堂出版）
地球の貧乏揺すり（産総研 サイエンス・タウン）

一九八五年（昭和六十年）

山行

春山合宿 白毛門く笠ヶ岳 三月二十六日く二十九日

新入生歓迎山行 谷川岳 五月十二日

第一回歩荷訓練 笹尾根

第二回歩荷訓練 武甲山 六月二十三日

夏山合宿 甲斐駒ヶ岳く塩見岳 七月二十一日く二十八日

秋山山行 両神山 十月十二日く十三日

第三回歩荷訓練 陣馬山く高尾山 十一月十七日

冬山合宿 日光白根山 十二月二十五日く二十八日

〔部員〕 外山健太郎 山本高義 小久江晋 斎藤雄一 真下俊哉

三瓶達生

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 浦田文夫 福原勇 福田公明

春山合宿は、毎年苦勞している。この年は、二年前と同じ白毛門。ただこの二年間に顧問はすっかり入れ替わっている。朝日岳の手前の大烏帽子まで往復した。

夏山合宿は、恒例の南アルプス。甲府から北沢峠までバスも開通し、初日に甲斐駒ヶ岳を往復できるほど便利になった。仙丈岳から両俣小屋に下り、北岳へ向かう。翌日は北荒川のテント場に泊まり、

その翌日は三伏峠から塩川小屋まで下った。小屋泊まりがテント料金と百円しか違わないということで小屋泊まりをした。

冬山合宿の日光白根山は、視界もほとんどない風雪の中の登頂となった。

記録 部報巻頭言

下を向いて歩く。晴れていて見える景色が美しいのにもかかわらず。身体に似合わぬ大きなキスリングを背負って、只管歩いている一年生を見てそう思った。

確かに登山とは厳しいものである。生活道具、食料を背負い、急な坂を登り、下り、わざわざ空気の薄い処へ行き、わざわざ寒い処へ行く。だから慣れない頃の山登りは本当に苦しい。しかし、何度か山を歩くうちに、登る度に違う山の様々な面を見ていくうちに、少しずつ余裕が出て来て、楽しさを見出せるようになる。自分もいろいろと苦しい経験をしたにもかかわらず、それが今となっては楽しい思い出となり、それ以上に自分を太らす肥料となっていることに気付く。後に良く晴れた気持ちの良い稜線を歩いている時などに思い出すと、大変だったと思いながらも良い経験をしたなどと思うのである。

自分は山岳部に入って、すなわち山に登り始めて二年半にもなる。この間に、わずかながら山の厳しさを知ったつもりであるが、この厳しさに対する考え方が甘くなっているような気がする。

例えば装備点検の不備等の係の仕事についてや三年のトレーニング不足、またこれが最も重要なことであるが、部員自身の山に対する真剣さが今一つ感じられないこと、などである。これらのことは気が付きながら改善することができなかったもので、たらい回しをするようであるが、これから考えていってもらいたいことである。

どうも人は登山という大変なことをやっているように思うらしい。自分だつて入部する前はそう思っていた。しかし苦しいながらもこれ程奥の深い登山というものに出会えて良かったと思つてゐる。なぜ良かったかと問われれば、このワンダラー十七号にかいてあるようなことを経験できたからと答える。

(大山正直「わんだらあ」十七号)

山行記録 春山合宿 白毛門(抄)

三月二十六日 一一〇〇^時白毛門^へ大烏帽子

最初から急登の連続である。足にはアイゼン代わりというワカンを着けている。松ノ木沢頭を過ぎる。白毛門が近づいてくる。何とか登れるだろう(空身なので)と思つていたが、なかなか思うようには行かない。雪が腐つていて足場がどんどん崩れていく。果たしてワカンは役に立っているのだろうか。あまりの急登で思わず手まで使つてしまふ。

四輪駆動である。こんな急坂をキスリングを背負つて登るつもりであつたとは考えられない。白毛門の八合目付近に二つの岩塔が並

んでいて、冬季にはこれが門の形に見えるためこの山名が付けられたようだが、私には全く分からなかつた。

頂上に出て一息つく。山頂から笠ヶ岳の鞍部まで緩い下りが続く。ここぞとばかりにスキーをつけた小室先生が滑つていく。しかしあえなくすぐ転倒してしまつた。

次は笠ヶ岳である。ここもかなりの急登が続いている。日が昇つてかなり暑くなつたが、風が強くてかなり寒い。幽ノ沢、一ノ倉沢の岩壁が見える。何者も寄せ付けないといった威圧感である。

「朝日岳はもうすぐだ」

ということ、最後の百^の坂を登る。意外にあつさり頂上に着いてしまつた。それもそのはずで、ここは朝日岳ではなく、名もないピーク(注・大烏帽子)。朝日から十一^の低^いだけ。時間もないしここで諦めることになつた。

帰りは楽しみにしていた尻セードができる。特に笠ヶ岳の下りは感動的だった。大武先輩は「谷が呼んでいる」と言いながら、谷の方へどんどん曲がつていった。鞍部で昼食を取り、テン場へ下つた。

(一年 三瓶達生)「わんだらあ」十七号

寄稿 無理を重ねた夏山合宿

内野成礼(一九八六年卒)

我々の代とひとつ上は、歴代の中でも部員が非常に多かつたせい

か、かなり力任せな山行が多かったように思います。やたら頑健な人もたしかに多かった記憶があります。

夏山前の二回の歩荷では、一年生はバテるのは当たり前的なノリでした。当時は石を詰めてキスリングを三十キ以上にしてましたが、中にはより重く、というのを自発的にやっていたのもいました。同じパーティーで誰かがばてると、ペースが遅くなるのでほっとしてました。

夏山でも上級生の差し入れがスイカや瓶のカルピスなど、目方で勝負のようなものが多かった記憶があります。

それから「下りの行程はエアリアマップの半分以下で行く」みたいなのを「川高ペース」と称して、それが当たり前という風潮でした。

日常もかなり真面目にトレーニングをしており、毎日、伊佐沼まで走って、腹筋やら腕立てやらをして帰ってくるのが通常でした。たまに「川」という場合は、荒川まで走っていました。

当時は、他の進学校に比べて、学校全体が受験にはのんびりした感じだったので、三年の夏山までは、しっかりみんな行っていたと思います。同じ代で現役で大学進学したのは二割もいっていません。そのような……。一浪は、当たり前という風潮があったことも確かです。

上の代が相当おらかな人たちで、学校サボって昼からマージャンして、夕方は我々の代を呼び出して夜まで酒を飲んでたりというのが普通でしたからね。当時は川越市内で一番、補導率が高い高校

と言われていたはずです……。

当時の活動で一番気合が入っていたのが夏山でしたが、一年の時には天候が悪く途中断念しています。正直、当時は途中下山でほっとした思いもありました。十六時間以上の超ハードな行程を組んでいましたので……。

二年のときは一年の小久江くんが盲腸になり、ヘリで救出されたのち下山となりましたが、残念な思い以上にヘリの料金がどうなるかが、一番の心配だったと思います。

なぜ、そういう状況になったのかなどは、誰も考えなかったと思います。ただ、夏山の死体探しの人々が丁度いて、無線で連絡してもらえて九死に一生だった、ラッキーだったということが、言われてました。個人を含めて三年でも結構行っていた記憶があります。

個人でも、意外とキツイ日程を組んでいて、北アで夜中の三時からいに歩き始めて一日十時間の行程だったりしていたと思います。

卒業後、浪人中だったと思いますが、山岳部の同級生と雲取山に行きましたが、鴨沢から入って、鴨沢に降りるという最も楽なコースを選び、もはや以前のような苦行僧のようなことは出来ないのと痛感し、以来登山靴は履いていません。卒業後に腰やひざが悪い人間が何人かいましたが、多少は当時の無理が関係あるのかなあ、と思います。私自身も、屈伸するとひざがポキポキ鳴るので怖いので、大学に入ってアキレス腱炎を何度かやり、山とは縁遠くなってしまうましたね。

一九八六年（昭和六十一年）

山行

春山合宿 巻機山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 妙義山 五月十一日

第一回歩荷訓練 蕎麦粒山 六月八日

第二回歩荷訓練 大岳山 六月二十二日

夏山合宿 南アルプス・荒川岳・光岳 七月二十日～二十七日

秋山山行 男体山・女峰山 十月五日

第三回歩荷訓練山行 丹沢 十一月三十日

冬山合宿 北八ヶ岳 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 岡村竜弘 東良太 田口悟朗 園尾学

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 福原勇 野口孝 下山田隆

春山合宿の巻機山は好天に恵まれて、頂上から割引岳と牛ヶ岳を往復した。

夏合宿の南アルプスでは、光岳まで登頂した。身延から伝付峠を越えて入山したパーティーは、荒川岳から南部へ縦走する。最終日前日、聖平小屋を出発して茶臼小屋へ着き、元気な二年を中心にして光岳を往復してきた。

冬山合宿は不参加部員が多く、参加は生徒五人と顧問が二人、北

八ヶ岳の縦走だった。茅野から蓼科山に向かい、麓の天祥寺原で幕営。翌日は横岳・縞枯山と縦走して、麦草峠から白駒池で幕営。さらに中山を越えて天狗岳を往復して黒百合平で幕営。そこから洪の湯に下山した。二日目に快晴に恵まれた。

また五月の連休は祝日移動で休日が多くなり、個人山行も活発になつてゐる。八ヶ岳の赤岳・硫黄岳・天狗岳と縦走したパーティーや、斉藤・山本は尾瀬の鳩待峠から一泊で雪原の平ヶ岳を往復した。このコースは実は二年後の夏合宿のコースにもなったのだが、真夏に三日かかった至仏山から平ヶ岳へのヤブ漕ぎも、五月は半日コースだったことが伺える。

山行記録 平ヶ岳（抄）

五月四日 高曇りのち晴れ

（前日に鳩待峠までバスで入ったメンバーは、尾瀬ヶ原に降りて大沢山付近でテント泊）

いよいよアタックの日である。気合を入れて手にはピッケル、背中にテルモスやらを詰めたデイバックで四時四十分、薄明かりの中を出発。

景鶴山から来る尾根との合流点のピークに登りつく。その直下に二張りのテントを見かける。さらに一九一八坪のピークに登り、そこから一挙に白沢山との鞍部に下る。

この鞍部から少し白沢山に登ったところにやはり三、四張りのテ

ントを見つける。白沢山までは樹林のまばらに生えた斜面を登っていく。五時四十分白沢山着。

目指す平ヶ岳はまだ遥か遠くに見える。可笑しいなあと、あと一本分で着くはずの距離なのに。よく考えて見てやつと原因が分かった。平ヶ岳があまりにもどつしりとしているからだ。

さてこれから一旦下り、また登り返す。夏になれば池溘が現れるところが、二、三ヶ所あり、もちろん今は雪の下であるが、この雪原は広くて野球やサッカーができそうである。最後の約二〇〇メートルの雪の斜面を登ると、目の前がぱつと開けて、越後三山などの山が見えた。平ヶ岳の頂上だった。

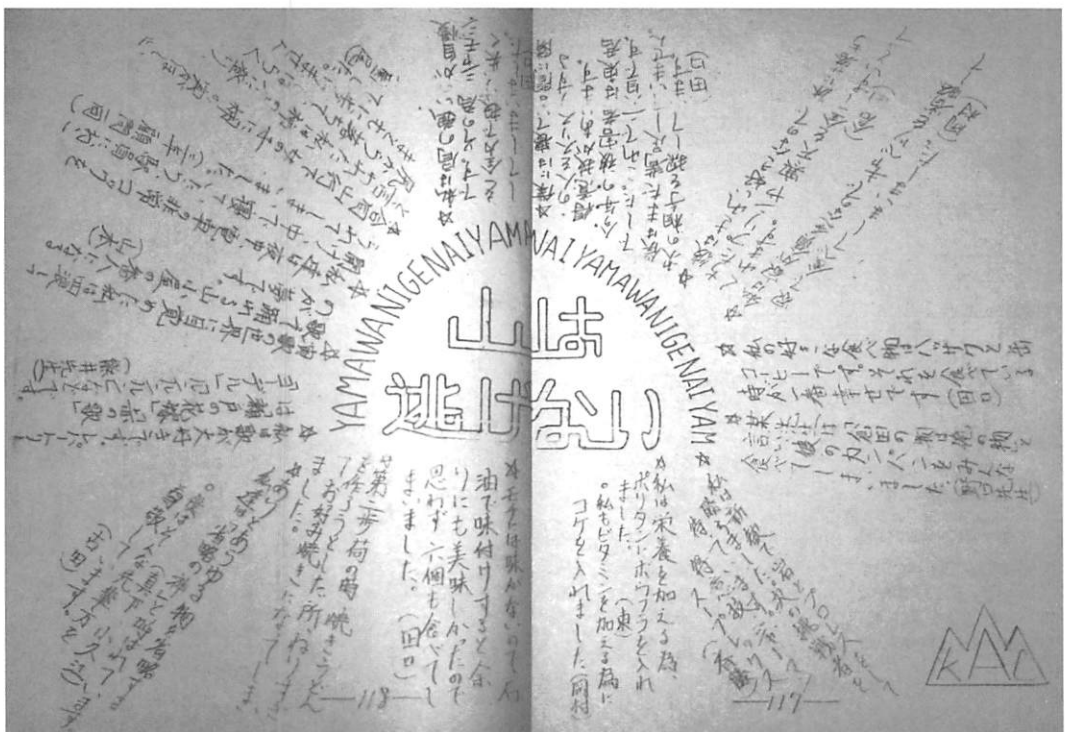
やつと着いたという感動が込み上げるのと一緒に、何となく着いたというあつけなさも感じた。頂上は真つ白な雪原で、どこが最高点であるか分かりづらい。三角点は一対ほど低いハイマツの中にあつた。

頂上には他に誰もいない。二人だけの頂上だった。周りには至仏山や燧ヶ岳などの尾瀬の山々、さらに東の方にはこれまたどつしりした会津駒ヶ岳、さらに北方に越後三山、西には巻機山が眺められた。

二年前の夏休みに燧ヶ岳から、さらにこの前の三月に登った巻機山から飽きずにこの平ヶ岳を眺めたことを思い出した。

七時五分、感動と空しさの混じった複雑な気持ちを残して頂上を辞した。

(三年 山本高義)「わんだらあ」十八号



部報18号にある寄書き「山は逃げない」

一九八七年（昭和六十二年）

山行

春山合宿 白毛門〜朝日岳 三月二十五日〜二十八日

新人生歓迎山行 谷川岳 五月十日

学徒大会 甲武信岳 五月十五日〜十七日

第一回歩荷訓練 鷹ノ巣山 六月七日

第二回歩荷訓練 武甲山 六月二十一日

夏山合宿 穂高岳〜薬師岳 七月二十一日〜二十八日

秋山ビバーク山行 両神山 十月四日

関東大会 箱根外輪山 十一月六日〜八日

第三回歩荷訓練 川苔山 十一月二十九日

冬山合宿 日光白根山 十二月二十五日〜二十八日

他に個人山行は鳳凰三山、越後三山、安達太良山、飯豊連峰、那須岳など

〔部員〕 倉田眞秀 古田茂 植竹満 矢口岳彦

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 福原勇 野口孝

春山合宿は二年前に続いて三度目の白毛門。前回朝日岳まで到達できなかったが、その先のジャンクション・ピークまで往復してきた。

夏山合宿は北アルプス。上高地から入山して、穂高岳往復。そこから槍ヶ岳に登って縦走。双六岳から三俣蓮華岳。水晶岳を往復して雲ノ平に下る。

翌日は薬師岳を往復して、翌々日に折立に下山した。

高体連の学徒大会にも参加している。顧問一人に生徒三人。川又から十文字峠を経て甲武信岳で幕営。翌日は雁坂峠から川又まで。登山態度を競っているようだが、抽せんによって関東大会への出場権を得た。

関東大会は十一月に箱根外輪山で行われ、新松田から青年の家キャンプ場で幕営。翌日は明神岳〜金時山〜丸岳を縦走して芦ノ湖畔で幕営。次の日は湖上や関所跡の観光をし、部活で最もリッチな山行となったと記されている。ところがこの関東大会に参加したために、全国大会への出場は日程的にキャンセルした。

恒例の秋山山行は十月に行われているが、前夜の宿泊がテントを張らずにフライシートだけで過ごすという習慣になっている。両神山の坂本集落の先の河原で宿泊して、翌日は山頂から榎尾沢峠〜納宮へ下山した。

また顧問の熊井昌男先生は八十六年から八十七年にかけて二十日間ほどの日にちをつないで、御前崎から糸魚川まで「日本列島徒歩横断」というのを一人で行っている。御前崎〜掛川〜佐久間〜水窪〜大鹿村〜茅野〜松本〜千国街道というルートである。

個人山行では三月の八ヶ岳で雪崩に巻き込まれるという事故があった。

山行記録 春山合宿 白毛門〜朝日岳(抄)

二日目 幕营地〜白毛門往復

空身だから初日とは打って変わって楽しい行程であった。松ノ木頭を越えてから少しきつくなってきた。岩っぽい所を通ったり、白毛門直下の急登はすごい斜面で、しっかり足場を切っていかないと、足を滑らせたならそれこそ「谷が呼んでいる！」になりかねないのである。

初日幕営をBCにしておいて良かったと実にこのとき思った。一年最後のキスリング山行で、いくらキスリングが名残惜しくても、キスリングと心中する気にはなれない。そのうちに白毛門に着いた。そこから戻った。下りは実に楽であった。

三日目 幕营地〜朝日岳往復

天気は今日も晴れ。朝日アタックの日である。白毛門までは昨日登った道で難なく到達する。展望は素晴らしく、谷川岳が実によく見えた。笠へはなかなか急登で、あっちへフラフラこっちへフラフラしながら登って行った。笠は本当に笠のようなソフトな形で、谷川の荒々しさとは対照的だった。そこから朝日までよくちよくシリセードっぽい滑り方をしながらアップダウンを繰り返して、ニセピークまで来た。ここは二年前に来た場所で、ここから先は行けなかったそうである。ちよつと行くと、朝日に到達した。

エビのシツポなる自然の造形がいっぱいあった。昼食にしてからジャンクシオン・ピーク(JP)に向かった。斜度の緩い下りが続いて、米袋を持っていた私は尻セードをしたが、表面が凍って米袋はびりびりになって、ケツが痛いだけだった。JPからの展望も素晴らしく、越後三山や巻機がよく見えた。

帰りはいたるところ尻セードの好ゲレンデだった。

(二年 古田 茂)「わんだらあ」十九号

報告 八ヶ岳雪崩遭難(抄)

三月三日

いろいろ考えたのでよく眠れなかった。だが結局行くことに決めた。私はそのルートを登りきる力は充分にあると思ったからだ。しかし一つ見落としていたものがあつた。それはアプローチだったのだ。

快晴だった。が時々ルート上を雪煙が舞った。雪の状態はそれほど悪くはない。私は樹林帯の中を一步一步進んでいく。すると突然視界が開けた。黒いブルーに目が眩む。そこには目指す阿弥陀岳北稜がそびえ立っていた。日陰の雪と、そそり立つ岩壁の色とのコントラスト。それ全体が快晴の空を背景として、巨大なシルエットを形作っていた。私は足がすくんだ。威圧されたのだ。そこですかさずサングラスをかける。周りの景色が急に暗転する。そして私は落ち着きを取り戻すのだ。

北稜へはここから一般ルートを外れ、右手の大斜面を登る。高度差二〇〇^{メートル}を片付ければ、もう雪崩の安全圏、北稜ジャンクション・ピークである。そこから北稜の登攀が始まるのだ。とにかくそこまで行かねばならない。私は雪崩のことを心配した。すると斜面上部に二つの点が動いた。どうやらあれは人間らしい。私はそれに向かつて登り始めた。

わりかしすぐに追い付いた。二人はアイゼンを着けている。昨日ジョウゴ沢で会った人たちだ。ここから私が先行する。あと少しで安全圏。稜線間近は風が強い。時々雪煙に包まれて何も見えなくなる。そのせいか雪の状態が悪くなってきた。ラッセルを交替してもらう。あと二十^{メートル}三十^{メートル}。二人との間が少し離れた。私は少しピッチを上げようと思った。

そのときである。私の足には足応えがなかった。その代わり、周りの雪が崩れ始めた。やばいと思った。小さそうな雪崩であるが、埋められてしまえば死ぬ可能性もある。いきなり足をすくわれた。雪崩が起こつてから逃げ出すのは絶対に無理である。

これらはほんの一瞬のこと。雪の中に押し倒された。ピッケルストップは、これでは無理のようである。切腹なんかするよりも、このまま流された方がいい。物凄い重圧、息苦しい。だが私はまだ死にたくはない。全身の力を振り絞ってもがく。まるで長距離水泳選手のように、体がだるい。周囲は真つ暗だった。だが私は諦めなかった。苦しい……。

気が付いたら止まっていた。頭が少し下向きで南、足が北、仰向

けの状態だった。雪崩から放り出されている。やった無傷だ。上の二人が手を振っている。どうやら巻き込まれなかったようだ。私は手を大きく丸にする。そして斜面を滑って降りる。かなり下り、立って歩かなければならなくなった。左足がズキンズキン痛む。どうやら捻挫らしい。仕方なくかばいながら下る。そしてテント地へ戻る。私は馬鹿だった。ここで助けを求めればよかったのだ。

(三年 斎藤雄一)

……こうして彼はベースの赤岳鉱泉から四時間かけて美濃戸山荘へ着いたが無人。さらに夕暮れが迫っている時間に美濃戸口へ向かったが、後続の登山者にタクシーを呼んでもらい、付き添われて病院へ行った。左足の骨が欠けていると診断される。そしてその日のうちに特急で帰郷した。およそ一ヶ月間の松葉杖での生活だけで済んだのは幸いだった。雪崩は先行者が歩いたときには発生せず、わずか二十^{メートル}後の彼が歩いたときに起こった。「わんだらあ」十九号



S.V

一九八八年（昭和六十三年）

山行

春山合宿 巻機山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 乾徳山 五月八日

学徒大会 甲武信岳 五月十三日～十五日

第一回歩荷訓練 三頭山 六月五日

第二回歩荷訓練 西谷山 六月十九日

夏山合宿 会津駒ヶ岳～燧岳～平ヶ岳 七月二十一日～二十七日

秋山山行 大源太山 十月二日

第三回歩荷訓練 大岳山 十一月二十七日

冬山合宿 土樽スキー場

他に個人山行は、二月の雲取山、十二月の北八ヶ岳など

〔部員〕 遠山壮一 中島雄一 込戸努 斉藤晃 岩崎宏和 内田光

重 宮田登 市川宏之

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 野口孝 西川正巳

新入部員は少なかったが、上級生は多かった。それが一つの理由になって、夏山合宿は困難で異色なやぶごぎ合宿となった。会津駒ヶ岳からスタートし、御池へ縦走して一旦尾瀬ヶ原に出る。燧ヶ岳を往復して至仏山に登る。そこから平ヶ岳へは残雪期のルートとし

ては有名だが、夏には今でも登山道がない。背丈の倍もある笹藪に囲まれる。春であれば半日のこのコースに、夏では二日かかっている。冬山合宿は少人数のスキーとなったが、同時期に北八ヶ岳の縦走に出かけたメンバーもいた。顧問の芝崎茂弥先生は、夏休みを利用してチベット旅行を行った。ラサからカトマンズへのバス旅行だった。

山行記録 夏山合宿 会津駒ヶ岳から平ヶ岳

会津駒ヶ岳 七月二十一日 小雨

川越六〇〇～大宮～春日部～会津高原一〇〇～三〇〇～会津駒ヶ岳
登山口一二〇〇～頂上駒ヶ池一六〇四

松枝岐の登山口を十二時ちようどに出発。ついに夏山が始まった。荷は夏山初日とあってかなり重い。道は平凡で景色は何も見えない。ひたすら登り続けて途中の水場に着いた。沢へ降りていって水を汲み、さらに四〇重くなった。体が慣れていないせいか、相当きつくなってくる。もう会話も無くなり、小雨の中を歩いていくうちに、だんだん木が低くなってきた。森林限界に近づいているようだ。

途中から木道の上を歩くようになり、少し楽になってきた。しばらくするとついに湿原地帯に入り、それなりの風景に出会えた。湿原は初めてである。ただ小雨ですべてが見渡せない。夕方ようやく駒ヶ小屋に到着した。テントを張ろうとしたがどこだか分からず、小屋の人に聞くと、

「テント場はここにはない」

という信じられない答え。皆で議論したがついに小屋に泊まることになった。それを言うと急に態度が変わって愛想がよくなった。小屋泊まりで調理が楽になり、しかも毛布に寝られる。宿泊料の二千五百円は痛かった。

尾瀬ヶ原 七月二十二日 曇り

会津駒ヶ岳頂上四・三〇〇大杉登山道御池一二・〇〇〇裏燧林道見晴十字路一七・〇〇

雨は降っていないが霧が濃く視界が悪い。まず会津駒ヶ岳へアタック。木道を歩き二十分まで着く。小屋へ戻ってから縦走開始。荷は何も減らずに相当重い。途中何個所かの見晴台があったが、見通しは利かず。一般的な山道を長々と七時間も歩き、やっと御池に着いた。ここからいよいよ尾瀬に入る。今日までは人と会うことはめったに無かったが、ここでは子供から老人まで大勢いる。

御池からは所々に田代があつて眺めはいい。今までが悲惨だったためにここは別天地に見える。初めて見るような高山植物がたくさん咲いている。しかし間もなく異様に疲れる登りが始まった。上田代、横田代、天神田代を経て、三条ノ滝との分岐に来たが、我々二年は元気が無く、三年だけが滝まで往復してきた。F先輩によれば、ナイアガラの滝のようだったと言っていた。二年は近道で見晴十字路へ向かった。途中温泉小屋の辺りから尾瀬ヶ原に入ったが、まさに極楽で素晴らしい景色である。観光客もいて、子供が走り回って

いる。三年は途中から合流したが、バテた二年は思わず三年を尊敬してしまった。

センノ沢廻行 七月二十三日 晴れ

見晴十字路四・四〇〇長蔵小屋一ノ瀬八・一〇〇センノ沢廻行
センノ沢代鞍部一二・〇〇〇白尾山富士見峠見晴十字路一四・五〇

今日はアタックのみで楽である。木道を歩きながら、湿原や高山植物を見て、昨日までが嘘のようだ。右手に尾瀬沼が広がり、記念写真を撮りながら和やかにいく。

長蔵小屋を過ぎてから、きつい登りと下りがあつて、三時間半で一ノ瀬の入り口に到着。今回のメインコースの沢登りが始まる。

まずわらじを着ける。慣れないせい時間がかかる。着け終わって沢に入ると、冷たくて気持ちがいい。K先輩を先頭に沢を登っていく。しばらくすると大きな滝にたどり着いた。大したことはないと思つたが、水しぶきが凄く上に着いたときはびしょ濡れだつた。そんなことを繰り返して終点に近づいた。ここまではいいのだが、沢は最後のヤブがきつかった。道に出て昼食を取った後、木道を歩いて下つた。その日はあまり疲れずに、夕食も楽しく作れた。また夕食後には顧問の西川先生とも合流した。

燧ヶ岳 七月二十四日 晴れ

見晴十字路四・〇〇〇燧ヶ岳七・三〇〇見晴十字路一一・〇五〇

上田代一二・四五

四日目はまず燧ヶ岳のアタックから始まる。この日は移動するために、まずテント内を片付けてから四時に出発した。まだ少し暗い。樹林の中を登っていくが、何故か虫が多く不快だ。大して疲れな山だが、仲間の一人が腹痛を起こして停滞してしまつた。途中J Rの年寄りグループに抜かれる。仕方なくゆっくり登っていく。それでも森林限界を超えると仲間も復調して順調になつた。これだけの高度感を味わつたのは、この山行では初めて。雲海も見える。午前七時ついに山頂に到着した。しかし僕はここで間食を忘れるというミスをしたため、皆から恨まれた。というわけで下山。下に着いてから昼食にして、上田代に向けて移動した。

見晴十字路からは、ずっと木道が続いている。観光でもポピュラーなところだ。大きなザックを背負っていると、子供が道を妨害したり、並んで歩かれたりして困つた。しかしどこまでも広がる湿原は素晴らしい。二時間で上田代に着いた。とても騒がしくていいテント場ではない。隣の大坂弁は異様なほどだった。夕食は先輩が作ってくれたりして、たっぷり休養も取れた。

至仏山 七月二十五日

上田代四・三〇〇至仏山八・三〇〇日崎山付近夕方

合宿も五日目に入った。今思い返せば、よくもまあ辛い行程を乗り切つてきたものだと思ふ。そしてあと二日すれば帰れるのだが。そう思うと自然と涙がこみ上げてくる。

今日から合宿最大のメインに突入する。至仏山の登りはとても辛い。下が雨でつるつる滑る。滑らないように黙々と歩く。途中女子校のパーティーが我々を抜かしていった。そのパーティーとは至仏山の頂上まで一緒だった。軽装で登山を楽しんでいる様子だった。これが本来の登山というものだろうと思ひ、恨めしそうに見つめながら、黙々と登つた。

もう着くだろうと思つてもなかなか着かない。そんなことを何回か繰り返すと頂上に着いた。しかし私は、登頂の爽快感というよりも、これからのルートのことを思うと、緊張感で一杯だった。頂上でスパッツを着け、誰もが気合の入つた顔で、平ヶ岳の方向を睨みつけるのだった。しかも女子校のパーティーは下山してしまつた。

道のないところを歩くというのは、大変なエネルギーを要する。それにいつ蛇に噛まれるかもしれないという危険もある。一体何が面白いのであろうか。そんな中で私は一つの考えを思いついた。それはとにかくルートファイディングを楽しむのだ。どんなに辛くても、周りの景色に感動し、笑顔でヤブをかき分けよう。

歩き始めてまず這松のヤブに突入した。私の考えは誤っていた。這松の枝は固くて、笹のようにはまきかかない。ヤブといえは笹しか私は知らなかった。体力の消耗と同時に、精神的なショックを受けた。我々は誰もが気が狂いそうになつた。ヤブとの格闘はまさに自然界の弱肉強食の世界だった。喉が渇く。水をくれ。そろそろ限界かと思われたときに、倉田先輩が小さな沢を見つけてくれた。これには助かった。ポリタンの水を使わずに、本物の水を飲む。

こんな最高なことはなかった。私はまたやる気を出し、笑顔のヤブ漕ぎを始めたのだった。

もうどのくらい来ただろう。地図の上ではまだ全然来ていないらしい。ススケ峰はまだまだ遠い。夕方までにススケ峰に着くことができずに、適当な場所にテントを立てた。

ススケ峰 七月二十六日

幕营地五〇〇〇ススケ峰〱白沢山付近幕営

合宿六日目になった、予定通り帰れるかどうか分からなくなつた。私としてはどうしても明日帰りたい。しかしどうにもならないことは、本当にどうにもならない。今のうちに諦めた。その方が精神的にシヨックがなくて、気持ちが楽になる。

朝はとても寒かった。食料もレトルトばかりで栄養が足りないし、異様にいらだっている。懸命に平常心を保とうとするが、苛立ちは増す。歩いているとき、前の人がかき分けた枝が、反動で顔に当たったりすると、苛立ちは怒りへと変わる。何だか地獄をさ迷っているようなものだ。

しかしたまに「赤テープ」がある。前に通過した登山者が、道しるべに付けてくれたものだ。このテープを見ると、瞬間自分は生きているのだと感じる。それは私にとって救世主であつた。わずかに苛立ちが癒やされた。やっとススケ峰にたどり着いたと思つたら、急に太陽が照り出した。ヤブと暑さのダブル攻撃にあつた。しかし何としてでも平ヶ岳に行くのだという執念で、頑張つた。それでも

今日は平ヶ岳へは行くことができなかつた。

平ヶ岳 七月二十七日

幕营地五〇〇〇平ヶ岳一一〇〇〇鷹ノ巣〱尾瀬口一七〇〇〇(翌日帰京)

朝は寒かった。昨日よりも数倍は寒い。シュラフカバーだけできた私は、遠山君から防寒具を借りなかつたら死んでいた。

さあ今日は帰る日だ。そのことを頼りに、私は気合を入れてヤブと戦つた。割合今日のヤブは楽だなと思ひながら、黙々と歩く。平ヶ岳に近づくにつれ、疲れも増してきた。嬉しかったことはヤブを抜けたことだつた。しかしヤブを抜けた感動よりも、平ヶ岳の登りに集中した。途中芝崎先生が雪田を見つけて、疲労も回復した。そしてついに平ヶ岳に達した。感動だつた。終わつたと思つた。私は思いつきり泣きたかつたが、涙を出すための水分も枯れていた。

考えてみればこのコースは高校生には酷だつた。それを乗り切つたかと思うと大きな自信が湧いてきた。今回、先生方の読図の正確さには恐れ入つた。もし先生がいなかつたら、絶対に生きて帰れなかつた。私も早く読図を正確にできるようにしなければならぬ。ところで今回コースタイムがずれたために、電車の時間がなくなり、各自駅の待合室で夜を過ごすことになつた。私とU・Mの三人は奥只見の待合所で、ダメだと言われたにも関わらず勝手に泊まつてしまつた。あの時三人でやったドボン大会は、楽しかつたなあ。

(二年 遠山壮一 内田光重)「わんだらあ」二十号

一九八九年（平成一年）

山行

春山合宿 黒姫山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 三ツ峠 五月十四日

第一回歩荷訓練 奥多摩・鷹ノ巣山 六月十一日

第二回歩荷訓練 有間山 六月二十五日

夏山合宿 南アルプス・荒川岳・易老岳 七月二十日～二十七日

秋山山行 上越・仙ノ倉山

第三回歩荷訓練 釜伏峠・堂平山 十一月十九日

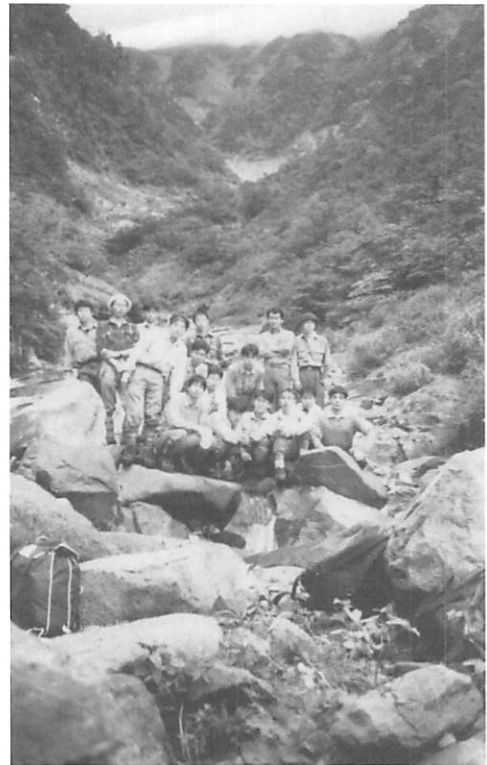
冬山合宿 安達太良山 十二月二十三日～二十六日

〔部員〕 志賀健太郎 下田隆史

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 春日敬行 岡田明 野口孝

夏山合宿の南アルプス南部は、畑薙ダムから林道を五時間かけて樫島まで歩き、荒川岳から赤石岳・聖岳を縦走して易老岳から遠山川に下っている。林道整備によって遠山川・易老岳の登山道が整備された。顧問が熊井先生の時代には、簡単な沢登りをやるようになった。秋山山行では、仙ノ倉谷のイイ沢が登られている。前日に土樽の駅で仮眠して、毛渡沢沿いの林道を登る。

また同じ時期に第三回歩荷山行が組まれた。



1989年 秋山山行 仙ノ倉山 仙ノ倉谷にて

山行記録 第一回歩荷訓練山行

鷹ノ巣山

ついに歩荷訓練の日が来てしまった。僕は今まで、娯楽の範囲内でしか山登りをしたことがなかった。だから全く期待していなかった。とにかく行きたくなかった。二十五キロの荷物なんか背負って、本当に家に帰れるのだろうか。天気は雨。授業を受けてから山へ行くのだけれど、どうも落ち着かない。数学がカットで、ヤクルト関根監督の眠くなる講義を聞かずに済んだが、昼過ぎに出発だ。

川音がうるさくて全く寝ていなかったのに、午前二時半からもう朝食の仕度だ。とても慌ただしくて、大便する暇もなかった。天気

は雨で、いよいよ登山開始。五十分歩いて十分休憩なのだけど、これが自分にちっとも合わない。「やつてられねえ」と思いつつ、だらだらと続く。登り一方でやつと六ツ石山に着いたけど、雨だから感激なし。さらに苦しみながら歩き続け、いい加減に登りに怒りを覚えた頃、ついに鷹ノ巣山の頂上だ。視界はゼロで「クソ」と思いながら避難小屋へ下って行った。

避難小屋で後続を待っている間、トランプをやっていたのだが、その時、ふくらはぎがピンときた。足がつつたのだ。「イテー、イテー、イテー」。

さらに下山が続く。東日原まで標高差が千メートルくらいあるのだが、それを一気に下るのだから道は急だ。雨のため滑りやすいのに、木の橋などはとても危険だった。落ちていたら確実に死んでいただろう。「うわあーっ」。僕は滑って倒れた。幸い落ちなかったが、危険を五回くらい味わった。僕の心の中は、恐怖と山岳部へ入ったことの後悔でいっぱいになった。「生きて帰れさえすればよい」といった感じで、くらくらになりながらバス停に到着した。

家に帰ってから、二度と山に登りたくないと思っていたが、結局二回目の歩荷訓練にも行ってしまった。まあ、一回目よりはましだった。(一年 小野徹生)「わんだらあ」二十一号

随想 山の恵みを体に浴びて

一年半ぶりに山に登った。五月の新歓での三ツ峠山。今年の「復

活」にかける私にとって、丁度よい足ならし、いや腰ならしの山行だった。よし、この調子で夏合宿も、と三年ぶりの南アルプスにむかった。

千枚岳で御来光を迎え、荒川小屋では、流れ出る水で身も心も洗い、夜は満天の星空を仰いだ。赤石尾根途中の富士見平から振り返って見た、荒川・赤石・聖のパノラマは圧巻だった。

長男が小学一年生になって、自分でそれなりの遊びができるようになった。今までの夏休みは子供の遊びの相手をするというのが中心だったが、今年は一緒に遊びを楽しむようになってきた。海で貝拾いだけではなく、波にむかって海の中をもぐってみたり、川では水中メガネをして魚取りに興じたり。今までの夏休みは家にいるのは苦痛であることが多かったが、今年はそうでもない。

そうやって得た獲物を子供と一緒に調べたりしていると、自分が子供時分にあまりやらなかったことをやり直しているような気がしないでもない。そのうちに今度は天体望遠鏡を買って星を見てみたいとも思う。あくまでも子供にかこつけて。

大学時代から山に登ってはいるが、大学の時はどちらかというと、「こんな山登りをしてやろう」とかいいう、ちょっと肩肘張った山登りだったような気がする。それはそれでよいと思うが、山は私たちを鍛えるだけではない。無窮の恵みを享受したいと思うこの頃である。(野口 孝)「わんだらあ」二十一号

一九九〇年（平成二年）

山行

春山合宿 磐梯山・猫魔山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 両神山 四月二十九日

学徒大会 奥秩父（甲武信岳） 五月

第一回歩荷訓練 川苔山 六月十日

第二回歩荷訓練 武川岳

夏山合宿 北アルプス・新穂高～双六岳～薬師岳～黒部ダム

岩登り講習会 日和田山 十月二日

秋山ピバーク山行 那須・茶臼岳 十月七日

関東大会 ミツドツケ～御岳山 十一月十日～十二日

第三回歩荷訓練 大岳山 十一月十八日

冬山合宿 吾妻連峰 十二月二十三日～二十八日

〔部員〕 後藤拓 小林靖広 新井清和 服部大輔 福井淳啓 間野

正美 土屋健一 小野徹生 新井明良 水村裕記 村山宏 竹林俊

介

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 春日敬行 岡田明 野口孝

夏山合宿の北アルプスは、岐阜から新穂高を経て入山した。鏡平～三俣蓮華岳。雲ノ平周辺で沢登りをして、さらに薬師岳～五色ヶ

原～黒部ダムへ下山した。高体連主催の山行が活発になっている。十月には日和田山で岩登り講習会。参加は二年一人と一年三人。十一月には関東大会が奥多摩で行われた。

山行記録 夏山合宿 北アルプス（抄）

三日目 三俣蓮華岳～雲ノ平

三俣蓮華岳で御来光を拝むことはできなかった。朝出発が遅れてしまったからだ。ここでは三年生の卒業記念写真を撮った。眺めは最高。そこから山を下り黒部乗越に着いた。沢（五郎沢）下りの始まりである。沢下りは順調だったが、少し時間がかかってしまった。スリルもありなかなかよかった。問題は沢登りだったのだ。

祖父じい沢は予想を遥かに超えて大変だった。岩がゴロゴロしたところで川幅が広がったりすると登っていけない。普通は川の中の転石を頼りに左右の河原を行ったり来たりするが、そういうときは河原の上のヤブを進んで、大きな岩や川幅を越えなければならない。実に遅れること五時間。キャンプ場に着いたのは五時過ぎだった。

四日目 雲ノ平～薬師峠

雲上の楽園と呼ばれる雲ノ平を後にすると、右に薬師岳、左に黒部五郎岳が姿を見せる。急坂を三時間下ると、薬師沢小屋だ。その小屋にかかる十五段ほどの吊り橋の下は、黒部の清流な流れ。このまま流されて行けば、合宿のフィナーレである黒部ダムに着けると、

バカなことを思う。三時間半登って、太郎平に着いた。

五日目 薬師峠く薬師岳くスゴ乗越

沢沿いの道を遭難碑が建つ薬師平まで登り、樹林を抜けると山荘までお花畑だった。気分の良い道を通して、砂礫が続くと、岩が積み重なった薬師岳の山頂に着いた。平家の落人村の有峰の人々が、古くから薬師如来を祀って信仰してきた山である。四方八方になだらかな稜線が続く。ガスに巻かれ、強風にあおられて、それぞれではなかったが。

残雪模様が美しい金作谷カールが一足ごとに大きく見えてきて、北薬師岳が近いことを知らせてくれる。足を滑らすと、濃い霧の中に消えてしまいうさだ。砂礫の斜面を下ったところで昼食を取り、ひと汗かけば間山の山頂だ。ここからハイペースで樹林体を抜けると、ひっそりと建っているスゴ乗越小屋が姿を現す。稜線上の小屋ではあるが、一三〇〇メートルも離れた水源から水を引いている。

六日目 スゴ乗越く越中沢岳く五色ヶ原

合宿最後の登りは、越中沢岳まで四四〇メートルの急登。樹林を登ると、岩がゴロゴロした斜面で歩きにくい。アップダウンもきつい。越中沢岳の頂上で突然雨が降り出した。合宿で初めての雨。もうほとんど登りがないと思うと、それでも気分はよかった。横殴りの雨の中、少しハイマツ斜面を登ってとんひ鳶山。小休止だけで進む。

平坦な道になってきたかと思うと、霧中に五色ヶ原山荘が姿を現

し、ここが最後のテント場となった。周囲二キロの溶岩台地。お花畑が綺麗なはずなのだが、ガスで何も見えなかった。夕方頃ガスが薄くなると、初めて自分と同じ高さに雲があることに気がついて感動した。(一年 中山直樹・大久保大輔)「わんだらあ」二十二号

山行記録 三本槍ヶ岳(抄)

秋山のビバーク山行を目的として十月七日く八日に那須連峰で行われた。初日は黒磯より北温泉を経て東屋(泊)。翌日、峰の茶屋―清水平分岐―朝日岳―三本槍―朝日岳―茶臼岳―白笹岳を経て板室に下っている。



1990年 秋山山行 那須・茶臼岳 三本槍にて

ビバーク山行なのでテントは使用せず、雨の中フライのみで夜を明かしているが、詳細は記録されていない。報告の中心は食事の献立、作り方、味の良しあしが記されている。

三本槍岳山頂では好天に恵まれ、全員楽しげに写真に納まっている。「わんだらあ」二十三号より

一九九一年（平成三年）

山行

新人大会雪上訓練 巻機山山麓清水 二月十六日～十八日

春山合宿 根子岳 四阿山 三月二十四日～二十七日

新人生歓迎山行 滝子山 五月十二日

第一回歩荷訓練 武甲山 六月九日

第二回歩荷訓練 酉谷山 六月二十三日

夏山合宿 朝日連峰 七月二十日～二十五日

秋山ビーク山行 谷川岳 十一月三日

第三回歩荷訓練 三頭山 十一月十七日

冬山合宿 乗鞍・鉢盛山 十二月二十五日～二十八日

他に個人山行は、四月の山スキー苗場神楽峰。五月鳳凰山、金峰山。

八月白馬岳、槍ヶ岳など

〔部員〕 中山直樹 内野敦史 和田篤史 吉田直人 山野高詞 大

久保大輔 山崎弘介

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 春日敬行 岡田明 野口孝

二月、高体連が主催する雪上訓練（新人大会）が巻機山で開催された。その後恒例となる第一回目。川高もメンバー集めに苦労したようである。参加は二年二人、一年三人、顧問一人。夏山合宿は朝日連峰

で、南部の祝瓶山から北部へと縦走したが、悪天候に悩まされた。大朝日岳の金玉水では強風のためテントポールが二張り分破損したため、古寺鉱泉へ下山。予定の半分ほどしか行動できなかった。

山行記録 冬山新人大会 巻機山

二月十六日 イグルー設営

前日夜十一時、大宮駅に集合し、例のポロバスで出発。明るくなつて起き出し（清水集落）、ヤッケを着て雪道に入る。そこで輪かおんをはく。三～四層あるはずの雪も、昨日からの雨でしまっていた。およそ一時間であつけないほど早く、今日のイグルー設営地の桜坂へ着いた。少しだけ教わって、すぐに実践。

六人用のイグルーは相当な大きさである。設営地を決めて雪を踏み固める。スノーソーとスコップで一段掘り下げる。それから雪で作ったブロックを段々に積み重ねる。思い切つて内側に傾けて、ずらして積む。そうしないと上へ上へ行くだけで、天井ができない。作業は細かく、アバウトな僕には合わない気がする。それでも何とかイグルーらしきものができたが、隙間だらけで、ここで一晚過ごせるのだろうか。作り終わって余裕があつたから、斜面を尻セードで遊ぶ。他校の人はイグルーの補強をしていたに違いない。

中で食事を作り始めた。湿度一〇〇で服が濡れる。鍋の湯気を立てない、室温を零度以上に上げない、換気をよくする、非常時のためにスノーソーやスコップを中に入れておくなどの、鉄則があつ

た。無事食事を終え、床に就くが雪の中はやはり寒い。火は炊けな
いからカイロが重宝する。夜は吹雪いていた。

二月十七日 清水の民宿くイグルー

朝だ。寒さに震えながらも五時起床。イグルーはボロで、上から
雪が降っていた。我々輪かん隊（他にスキー隊）は吹雪のため行動
中止。一〇時に清水集落へ戻るが、それぞれの学校でラッセルをし
ながら進んだ。輪かんが木の枝でつかえて、足が抜けなくなった一
年生がいた。清水に着くと、山岳部に入って初めて山で女性と一緒
に写真を撮った。浦和商業のみなさんだ。

他校の皆さんは、それぞれ民宿へと散っていったが、我々は今日
もイグルー泊なのでまた作らねばならなかった。できたものは昨日
よりはまりました。半雪洞方式で二年と先生は雪洞へ、一年はイグ
ルーの方へ寝ることにした。今日は泉屋へ入りびたりだった。

二月十八日 ラッセル訓練く閉会式

朝方雪洞が崩れ、隙間が三〇センチくらいしかなく、出るのに苦労し
た。その日は少し上まで登ってみることにした。が、今度はある
一年の輪かんがなくなっていたのである。結局雪の中に埋まってい
ただけなのだが、物の管理が悪すぎた。先生は怒るというより呆れ
ていた。三〇度くらいの急斜面を登って、ちょっとした尾根まで歩
いた。その日は晴れていたの景色は最高だった。

（二年 小林靖広）「わんだらあ」二十三号

山行記録 春山合宿 根子岳・四阿山（抄）

三月二十四日 川越―上田―菅平―一五〇〇ト付近幕営

三月二十五日 幕営地―避難小屋付近幕営―根子岳（往復）

三月二十六日 幕営地―根子岳―四阿山（往復）

三月二十七日 幕営地―帰省

根子岳頂上からの四阿山の山容が雄大だった。四阿山山頂は双頭



1991年3月 春山合宿 四阿山・根子岳 雪山での設営

峰で三六〇度
の眺望で、目
前の根子岳・
浅間、遠く北
アルプス・八
ヶ岳の眺めが
素晴らしい。
根子岳の斜面
では雪山訓
練、滑落停止
訓練・尻セー
ドに興じた。
「わんだらあ」

二十三号より

一九九二年（平成四年）

山行

新人大会 巻機山山麓清水 二月十五日～十七日

春山合宿 石川県・大笠山 三月二十四日～二十九日

新入生歓迎山行 乾徳山～黒金山 四月二十九日

第一回歩荷訓練 鷹ノ巣山 六月七日

第二回歩荷訓練 塔ノ岳 六月二十一日

夏山合宿 南アルプス・甲斐駒ヶ岳～塩見岳

岩登り講習会 狭山モータースクール 十月七日

秋山ビバーク山行 日光女峰山 十月三十一日～十一月一日

第三回歩荷訓練 御岳山 十一月二十二日

冬山合宿 福島・西吾妻山 十二月二十四日～二十八日

他の個人山行は五月の八ヶ岳。八月の朝日連峰

〔部員〕 吉田哲 関口徹 蛭田亮介 古垣耕

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 春日敬行 岡田明 野口孝

石川・岐阜の県境、白山の稜線にある^{おしずる}笈ヶ岳や大笠山は一八〇〇mの稜線で、北陸地方・豪雪地帯の名峰である。三月の春合宿ではここが計画された。東海道線で米原を経由して入山し、好天に恵まれたが、目的の笈ヶ岳までは到達できず、大笠山から引き返した。

夏山合宿は、黒戸尾根から入山して三伏峠まで、南アルプス北部の縦走を行った。

登った山すべての頂上で快晴だった。

岩登り講習会は、人工壁を利用したフリークライミング講習会として衣替わりした。十月狭山モータースクールで開催された講習会には、他校を含めて五十人ほどが参加。ザイルの結び方、ハーネスの付け方、カラビナやエイト環（下降器）の使い方を習って、実際に登る訓練をしたり、最後にはクライミングコンペが行われたが、（思ったよりも難しく、完登できた者は誰もいなかった）

冬山合宿は、福島・西吾妻山で行われ、北斜面の米沢・天元台スキー場（白布温泉）から入山。連日腰までのラッセルに苦勞した。

山行記録 春山合宿 笈ヶ岳

千丈温泉 小雨 三月二十五日

東京二三・四〇～大垣七・〇〇～米原～西金沢～鶴来～千丈温泉 一四・〇〇～大池一五・〇〇

前日夜九時過ぎ東京駅に集合する。この合宿で目指す笈ヶ岳という山に、実は私は抵抗感があった。というのはこの計画が決まったとき、それ以前にも熊井先生が、その山の冬の写真を見て「アイゼンとピッケルの世界だ」としきりに言っていたからである。ピッケルは部活にあるからいいのだが、アイゼンは部活にもなく、自分自身でも持っていない。それに雪上訓練を未だにやったことがない。

それに当初は縦走登山を、先生の意向で往復登山に変えたことから、この山に空恐ろしいものを感じていた。そして何か起こりそうな気もしていた。

出発のときにもOBが見送りに来てくれたが「死ぬなよ」と冗談半分に言った言葉が妙に心に残った。それでも夜行列車ではよく寝た。

電車とバスを十二時間以上も乗り継いで、石川県の千丈温泉という所に来た。雨もやんで路面は乾いている。雪は道の脇に、寄せられて汚れているだけ。近くにあるスキー場には雪がない。

十四時、奥池に向けて出発。一時間歩いて奥池に着いたが、もう真つ白な雪原になっていた。

尾根取付点 晴れ 三月二十六日

奥池五・四五〜尾根取付点一一・〇〇〜稜線一三・〇〇〜幕营地
一四・三〇

五時四十五分、奥池を出発した。途中道を間違えて、大して進んでいないのに時間ばかり費やした。予定では二時間で林道が終わるはずであったが、その林道さえも冬のままの雪の斜面の難路になっていて、思うように進めない。けつきよく尾根取付点に達したのは、三時間遅れの十時四十五分であった。しかもまた、尾根に入る道が分かりづらく、道を見つけて出発したのは四時間二十分遅れの、十一時二十分であった。

ところでここにつくまでの間、僕は途中で死にそうになった。ち

よつとしたところを渡るときに、前の人たちが手を掛けていた雪の窪みが、僕が手を掛けたときにいきなり壊れて、仰向けに倒れてしまったのである。そこは固い雪の上で、とても怖いところであった。もしさらに滑っていたら、重傷か即死で落ちていたかもしれない。しかも驚いたのは落ちた張本人よりも、周囲の人のようであった。特に春日先生などは、僕の姿が自分の姿と重なり合ってしまっただろう。

さて尾根に取り付いてからは、傾斜が急になってきた。天気は晴れで汗ばむくらいだったが、ペースはよかった。ところが十三時二十分頃から次第にガスが出て、あつという間に辺り一面、真つ白になってしまった。そして十四時三十分には、濃霧で夕方のような暗さになってしまった。けつきよく奈良岳まで行けずに、平らな場所を見つけてテントを張ることになった。スパッツをしていたが靴下が濡れていた。

夜シユラフの中で目を閉じると、今日のスリッパが何度も思い起こされて、よく生きていたなと思う。半面、林道であれだけの目にあつたのだから、これからをのぞかしい道と思うと、生きて帰れないのではないかと、初めて本気で思った。明日になるのが怖かった。

大笠山 晴れ 三月二十七日

幕营地五・三〇〜奈良岳八・三〇〜大笠山一一・〇〇〜奈良岳一三・〇〇〜奥三方山一四・五〇〜幕营地一六・二〇

昨日奈良岳まで行けなかったせいもあって、この日の行程は笈ヶ

岳まで行くのを断念して、その手前の大笠山までのアタックとなった。これで少しは安全性も増すのかと、嬉しくなったが、しかし残念でもあった。

五時半に出発して、天気は良好で正面には綺麗に山が見えた。しかし雪の斜面は凍り、出だし急な下りで、余裕はない。アイゼンを持っている人が先生を含めて五人いたが、彼らには当然そうした心配はない。途中、ちよつと滑らせたら遥か下の方まで滑りそうなどころがあり、しかもピッケルがうまく刺さらなかったりと、恐怖感が何倍にもなった。縦走予定では、重い荷物を背負つての登山だったかと思うと、ぞつとした。

八時三十分、苦勞したが奈良岳一六四四に着了いた。あつけないような気もするし、相当時間がかかったような気もした。遠くに槍ヶ岳が見えた。

ここを過ぎてからは、下り、登りを繰り返して一時間ほどで急な道が前に立ちはだかった。ザイルを使うことになり、アイゼンを持っている人が足跡を付けながら、ザイルを上を持っていった。間もなく木に結び付けられて、ザイルが下に投げられた。僕らはそれを頼りに登った。ここを全員が登るのに相当時間がかかったのだが、その先は楽な道のに変わった。そして無事、大笠山一八二二に着了ことができた。南南西には白山が、南には昨日まで目指していた笈ヶ岳が近かった。

山頂には二十分いて下山した。登ってきた道を引き返し、今度は奈良岳の南南西の奥三方山一六〇一を目指した。下山でもやはり

例のザイルの個所で時間がかかり、しかも最後にザイルを回収した熊井先生(約三分の一世紀の間山に登っている)が、こけて滑落する事故が起きた。結果的には途中で止まったが、僕はこれが熊井先生の最新なのかと本気で思つて、しっかりと目に焼き付けておこうと凝視していた。また奥三方山へ向かう途中では、吉田君が何かの拍子に滑落する事故があつた。このときも滑っている彼を冷静に眺めていたが、何故か助かると思つていた。

そんなことはあつたが、十四時五十分には皆元気に奥三方山に到着した。

この合宿でも、他に目指す山もなく、後は下りだけ。一年最後の山頂でゆっくりしたかったのだが、五分で出発することになった。テントを張ったところまではかなりあつたが、十六時十分、何事もなくなつたり着いた。夜はまたシユラフの中で、あの林道を通るのかと思うと憂鬱になった。

下山 晴れ 三月二十八日

幕营地五・五五→尾根取付点→奥池→千丈温泉一〇〇〇→鶴来・解散一二・〇〇

この日は快晴に近い晴れだった。五時五十分下山を開始した。やはり夜のうちに雪は凍つていて、二十六日の足跡がそのまま固まりになってとても歩きにくい。けれど下りが急になってきた辺りで、雪も軟らかくなつてよかつた。雪山の下りは雪が軟らかければけっこう楽である。それに下山は速いものだ。思つていたよりも早く、

尾根の取付点に出た。

六時四十五分、そこを出発した。林道は水が氷になっているところがあった。用心しても滑って腹が立つ。来たときにはなかった大岩も転がっている。落石の危険はこういうときに起こるのかと思つた。

この林道に出て一時間半ほどで、例の事故現場に着いた。また同じような目に遭うのかと思つたが、前の人が雪を削ったりして通過しやすくしてくれたせいもあつて、問題なく通過できた。これで僕は初めて「生きて帰れる」と歓喜した。

十時になると、もう危険な林道もなく普通の道路を歩いていった。川を挟んだ対岸のバス停に出て、その上には雪のない惨めなスキー場が広がっていた。

その後皆で風呂に入ったのだが、このときに重大なミスに気がついていた。着替えを全部ザックの中に忘れてきた。また濡れた下着を着て、金沢駅に着いてからは兼六園に行ったのだが、ニッカズボンのままでは恥ずかしかつた。帰りのタクシーの中では、山行は最悪だったが、いつか冬の笈ヶ岳に登ってみたいと思つた。

(一年 蛭田亮介)「わんだらあ」二十四号

山行記録 冬山合宿 西吾妻連峰

十二月二十四日 川越〜米沢

ごく一般的な家庭は、家でケーキを食べているはずのこの夜、午

後の列車で米沢へとひた走つた。福島駅でホームに雪が十センチ。板谷峠を過ぎる辺りから雪はジャンジャカと降つてきた。目的の吾妻連峰は、相当な積雪があるとは聞いていたが、なだらかな山容で、雪崩や滑落はなく、余裕で行けてしまうのではないかと思つてた。電車の中では差し入れのケーキを食べて、けっこう騒いでいた。米沢に着いたら、二十センチくらい雪が積もっていた。駅待合室に泊まつた。

十二月二十五日 白布温泉〜若女平手前

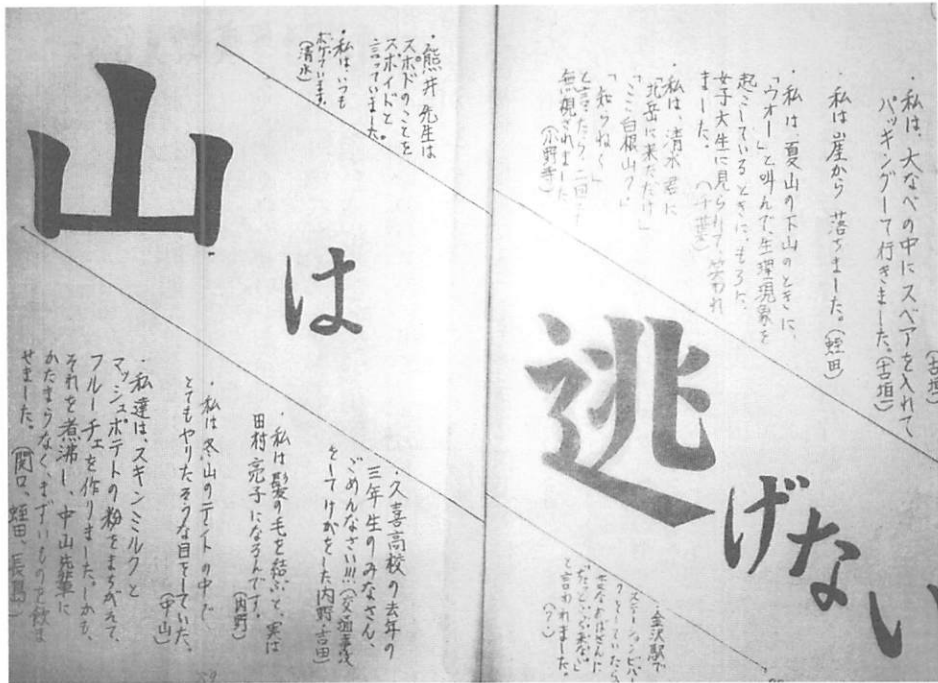
バスで白布温泉へ。いざ出発。除雪されたアスファルトが終わつて、有料道路(冬期通行止め)の方へ曲がったら、いきなりひざまでのラッセル。ここでワカンをつけた。

すぐに登山道へ入つたが、さらに雪は深く、先頭でラッセルする二年生は、ザックを置いて空身で行つて、交替したら取りに戻るといふ本格的なものになつてしまった。雪はやむ気配もなくしんしんと降り続いていった。

昼食を食べたときに、僕はその場でカラビナを失くしてしまった。気がついたのは歩き出した後で、もうどうすることもできない。時間はあるという間に十四時。予定の若女平まで行けずに、打ち切られた。

十二月二十六日 若女平〜一五三〇峠付近

朝起きてみれば、また雪である。テントのポールが凍りついて撤



部報24号にある寄せ書き「山は逃げない」

収に苦勞したが、六時に出発した。ラッセルは腰くらいになった。若女平に着いたのは十時。雪はやんで、少しだけ視界が利くようになった。ここを過ぎると、木の根元など雪の中にハマることが多くなった。そのうちに十四時になってしまい、一五三〇坪付近で TENT を張った。この辺りの木は、もう少しで樹氷になると感じだった。

十二月二十七日 幕营地〜一八三〇坪付近

この日も朝から雪。六時半に出发して、一日中ラッセルをして、今日こそは西吾妻小屋へたどり着くと思ったが、上の方に行くにつれて風とガスが出てきてしまい、けつきよく一八三〇坪付近で TENT を張った。辺りの木は樹氷のようになっていた。

十二月二十八日 幕营地〜天狗岩〜下山

また雪である。それでもアタックを続けて、ちよつと方向がずれていたのか、稜線の天狗岩に出た。木がなく風が強い。しかもガスと雪でひどい状況だ。それでも祠の前で写真を撮り差し入れのシャネルメリーを飲んで、ここを頂上として戻った。

下山はだんだん天気が良くなつて、青空も出てくるし、たったの四時間というすごい速さで下ってしまった。

(二年 長島俊行)「わんだらあ」二十五号

一九九三年（平成五年）

山行

新人大会 安達太良山 二月十二日～十五日

春山合宿 会津駒ヶ岳 三月二十四日～二十七日

新入生歓迎山行 荒船山 五月八日～九日

第一回歩荷訓練 御前山 六月六日

第二回歩荷訓練 武川岳 六月二十七日

夏山合宿 剣岳～黒部五郎岳 七月二十一日～二十八日

秋山ビバーク山行 谷川岳 十月三十一日

第三回歩荷訓練 棒ノ折山 十一月二日

冬山合宿 高妻山 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 升國義浩 長島俊行 小野寺峰夫 清水伴紀 千葉大嗣

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 岡田明 野口孝

前年の冬合宿も積雪が深かったが、この年の春山合宿の会津駒ヶ岳も同じく、生徒はワカンのラッセルであり、顧問は山スキーで参加した。松枝岐から七時間ほどで、頂上付近の駒ノ小屋まで到達した。翌日は頂上から中門岳まで往復した。

夏山合宿は北アルプスの剣岳では、富山から室堂に入って、立山～剣岳を往復し、そのまま縦走して薬師岳まで。さらに薬師峠のキ

ャンプ場から黒部五郎岳を往復して折立に下山するという充実した山行になった。

記録 部報巻頭言

自民党一党支配が終わった今年、我が川高山岳部においても伝統となってきた一年生がキスリングを使用することに終止符が打たれた。これは、伝統というものに限界があり、それを時代に合わせて変えていかねばならないということだと思う。そして何よりも今年一年生が九人入部したことに直接の原因があるが、しかし以前から夏山合宿においての行動の制約や、アタックザックというキスリングに比べてすばらしいものがあり、（キスリングにも良い面はあるが）二年生になれば結局購入することになるので、入部時点で購入しても変わりが無いということなどに原因がある。

また、経過としては、僕が一年の時の夏山合宿でキスリングの廃止について言われ、その後、装備が入ればよいという条件付きでアタックザックを一年生が使用してよいという方向になったが、やると現二年生が一年の冬山合宿の時に可能となった。そして今年の五月、いろいろな意見があったが、一年が入部してまもなく廃止について話し合った結果、装備分けを工夫して夏山でもキスリングを廃止する方向になり、それが実現したのである。このことは、我が川高山岳部にとって大きな改革であり、更には一、二、三年生の装備の重さを平等にし、キスリングを全面的に廃止して欲しいと思う。

話は変わるが、熊井先生の今年の夏山での言葉に「川高山岳部はピークハンターだ」ということがある。「ああ、そうだな」と思ったのは僕だけであろうか。事実、頂上近くになると我先にと走って行く者がいる。それはそれで結構だが、頂上に達するその過程も大切にして欲しいと思う。それには山行計画を決めるときに「この山はきついか楽か」「この山は百名山かどうか」ということは無用だと思ふ。確かに百名山はすばらしい山が集められたものであるが、百名山以外にもすばらしい山はたくさんある。

また高校生にとってはある程度体力や技術に制約されるが、一人一人が目的をもって登れば、きつい、楽、という問題でもなくなると思う。そして一、二年生はたくさん山を調べ、百名山にとらわれずにたくさん山の山に登って欲しいと思う。百名山だけが山ではない！

最後に、立場が変わった身として、何とでも偉そうなことを言ってきたが、僕の言ってきたことも一理あると思つて受け止めて欲しい。
(吉田 哲)「わんだらあ」二十五号

寄稿 川高での顧問十一年

野口 孝 (元顧問)

大学時代ワングルをやっていた。沢登りは少ししななだ程度で、基本は縦走。冬はやらない。春はスキーを履いての行動が中心だつ

た。そして大学卒業後、新任の学校を八年間勤めた後、川高に赴任した。

十一年間の川高山岳部での山行は、夏合宿を中心としてどれも思ひ出深いものばかりだ。その中で特に印象に残る山行を取り上げた。

まずは最初の一九八六年の夏山合宿。南アルプスでコースは(伝付峠→荒川岳→赤石岳→聖岳→光岳)。大学時代にも南アルプスはたくさん登ったが、伝付峠と光岳は行ってなかった。歴史ある峠とは聞いていた。そこから入山するとは渋い。光岳はなかなか足を延ばせない山。

茶臼岳から走るように空身往復をしたが、光小屋の手前十五分ほどの所にあつた水場でむしゃぶりつくようにみんなで水を飲んだ。すぐ近くのイザルガ岳から北に聖岳を望んで、「ここまで来たんだ」という思いを胸一杯に感じた。高校の山岳部で行けるとは思わなかつた。

翌年の夏は北アルプス(上高地→奥穂高岳→槍ヶ岳→三俣蓮華→雲の平→薬師岳)。この合宿は一日も晴れなかつた。しかも停滞が一日あり、山中七泊という旋破りの合宿だった。これを生徒たちは病氣もせず、冷静によく我慢して歩き続けた。高校生離れしていると感じた。

高校生離れしていたのは一九九二年の夏もそうだった。南アルプスでコースは(黒戸尾根→甲斐駒ヶ岳→仙丈岳→北岳→間ノ岳→農



1990年7月 夏山合宿 双六～薬師岳 雲の平にて 前列左に熊井先生
後列左に野口先生

鳥岳（塩見岳）というもの。コースそのものは珍しいわけではない。ただ三十キ近い荷を担いで黒戸尾根を登り、仙丈、北岳を登る。千石の上り下りを繰り返す驚異のアップダウンコースだ。

連日二時起床、四時出発。しかも夕方の四時、五時にサイト着。最後の塩見岳も夕方四時着。頂上から北岳方面を振り返り、一年生の中には涙ぐんで第一応援歌を歌う者もいた。本当によく歩いた山

行だった。

積雪期の山行は、多くの他の学校がスキー中心で、冬は春合宿に備えてのスキー訓練になっているのに対して、川高はワカンなので、冬山合宿も厳寒の雪山を着実に歩いた。冬山合宿を二つあげておく。

まずは一九九二年冬の、西吾

妻連峰。山形の白布温泉から入り、西吾妻山を目指した。樹林の中、顧問がスキーを履いても腰までのラッセル。ルート探しも時間がかかる。少しずつ樹林の様子も変わる。ツガがはじめは頭の方だけ雪をかぶっているのが、やがて全体に雪が付き、まるで雪の鎧をつけているようになる。ホワイトファンタジー。

ラッセルは深く、進まず。結局目的地西吾妻山まで届かず、あきらめて引き返すことに。下山はたった三時間だったが登るのには三日かかっていた。ひたすら雪の中で過ごした後、白布温泉で風呂に入った。毛穴に温泉がしみこむ。極楽だった。

翌一九九三年冬は戸隠の高妻山。雪が深いわけではないが、寒波が襲来してマイナス十度の寒さ。夏道のないところを、雪に覆われた藪の上を進む。高妻山は奥深かった。頂上アタックにあたって、午後一時までに頂上に着かなければ引き返すとの条件で進む。生徒、猛烈にラッセルを進め、十二時五十分頂上到着。よくぞ行けた。帰りの日は吹雪模様だった。

このように高校生離れた山行、山城踏破は、第一義的には生徒の力量の高さによるが、第一顧問の熊井昌男先生の的確な助言と判断があることは言うまでもない。そして、それをさらに補強したのが芝崎茂弥先生の慎重な確保技術に裏付けられた沢への誘いと、驚異的な体力だ。

一九九〇年の夏山合宿は北アルプス（新穂高温泉～三俣蓮華岳～黒部五郎小舎～五郎沢～祖父沢～雲の平～薬師岳～五色ヶ原～黒部

四ダム)というコースだったが、この中の祖父沢の登りが消耗した。ザックを担いで五時間四十分、沢の岩を越え続けた。

ようやく雲の平に辿り着いたのは夕方の五時二十分。へとへとだった。テントサイトに着いてみんなへたり込んでいる脇で、芝崎氏は「それじゃビール買ってくるよ」と何事もなかったように言い、三十分ほど離れた山荘に走って、顧問五人分のビールを購入してきたのだ。

言葉もなかった。啞然としつつ、乾いた喉にビールを流し込んだ。これも極楽だった。

一九九四年夏も北アルプス(竹村新道)野口五郎岳(三俣蓮華岳)笠ヶ岳)というコースだが、ここには三俣山荘を起点として黒部源流の沢を楽しむ日程が組まれていた。コースを二つに分け、一年は高天原、二、三年は芝崎先生をリーダーに、赤木沢。私は勿論赤木沢に参加した。大学以来のあこがれの沢である。評判に違わず、とにかく明るく美しい沢である地上の楽園である。翌日は祖父沢を下降。ここで私はイワナを釣ることができた。まさに黒部源流を満喫した山行だった。

川高での十一年間。伝説的と言っている夏の「藪こぎ平ヶ岳」と春の「豪雪笈ヶ岳」に参加できなかったのは残念だったが、生徒、先輩顧問に恵まれて、大学時代にできなかったことを実現し、さらに自分の山岳人生をこの上なく豊かにしてくれるものだったのは間違いない。

随想 三度目の正直を願って―大朝日―

僕が体力がなくバテまくっていたのは、皆知っていると思うが、あの大朝日ほど、自分の無力さを感じた時はない。本格的な山を始めたのは高校に入学してからである僕にとって、自然の厳しさをまざまざと味わったのはあの時であった。自然は人間を相手になんかしていないのに人間は自然に立ち向かっている。そんな愚かなことを行うのが人間だと切実に感じた。

そして笈ヶ岳ほど死の怖さを思い知った所もない。蛭田君は、僕の後ろで、崖から落ちるし、僕は、アタックの帰りに滑落をするというように(詳しくはwonderer vol.24春山合宿参照)。本当に、キスリングを背負ってよくあんな崖つぶちを歩いたものだ、我ながら感心する。死ぬのは簡単だけど、生きるのは難しいことだと思つた。

そして、やっぱり、引退した今でも、大朝日のことが心残り、昨年の夏、再挑戦したが頂上で晴れずに終わってしまったので、また受験勉強が終わったら、再々挑戦して、大朝日の頂上から、日本海・月山・以東岳・飯豊などの山並みを絶対に眺めたいと思う。最後に、こんな僕を支えてくれたみなさんありがとう。

(吉田 哲)「わんだらあ」二十五号

一九九四年（平成六年）

山行

新人大会 安達太良山 二月四日～七日

春山合宿 巻機山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 両神山 五月一日

第一回歩荷訓練 川苔山 六月五日

第二回歩荷訓練 三頭山 六月二十六日

夏山合宿 野口五郎岳～笠ヶ岳 七月二十一日～二十八日

秋山ビバーク山行 武尊山 十月二十九日～三十日

第三回歩荷訓練 三ツ峠山 十一月十九日～二十日

冬山合宿 安達太良山 十二月二十五日～二十七日

個人山行は、五月の奥秩父、尾瀬。七月の西穂高岳など

〔部員〕 篠原岳夫 中塚敦 遠藤祐樹 村岡史郎 清水泰岳 本多

知巳 山中健一 大久保則夫 新谷彰教

〔顧問〕 熊井昌男 芝崎茂弥 岡田明 野口孝 高橋泰綱

春山合宿の巻機山は、夜行の上越線が廃止された以降は、朝川越を出発して昼過ぎに清水、集落奥のキャンプ場で宿泊するという日程になった。翌日天幕を移動して井戸尾根六合目の展望台にベース設営。その翌日に頂上登頂という予定が組まれた。登頂予定日はガ

スの中を上部避難小屋まで往復し、翌下山日の快晴を待つて再び頂上へ往復した。

荒天と快晴と、ベースから頂上まで二往復した事になった。

夏合宿は北アルプス。高瀬ダムから湯俣に入り、野口五郎岳～水晶岳～鷲羽岳と縦走し、三俣蓮華小屋に幕営し、数日過ごした。翌日一、二年は雲ノ平から高天原～岩苔乗越と散策した。

三年は黒部源流を下降して赤木沢を登り返した。その翌日は雲ノ平から祖父沢を下降して、五郎沢から幕営地に戻るといふ周回登山を二日間繰り返している。合宿はその後、笠ヶ岳まで縦走して新穂高に下山した。

また七月には松高山岳部との定期戦が行われ、野球の試合を行った。

追悼 吉田哲遭難死

一九九四年九月十七日没 享年十八歳

この年九月、半年前に卒業したばかりの吉田哲が、秩父の和名倉山で遭難死した。在学中はチーフリーダーで意欲的な部員だった。彼は進学した都立大学のワンゲル部に所属し、川高で一年先輩の山崎弘介（東京工大山岳部）と、個人山行を行っていた。沢登りはすでに終了し、夕方遅く和名倉山から二瀬ダムまでの踏み跡を下山中に事故が起きた。小雨の中、踏み跡を見失ったとはいえ、間もなく湖の遊歩道に合流する直前に、ほんの三メートルほどの崖から足を滑ら

せて、転落死してしまった。ニュースでも「秩父湖周辺の遊歩道から滑落」と報じられたくらいで、誰もが信じられない事故だった。事故後、山岳部同級生が中心となって、追悼集が編集された。同行していたパートナーの報告。

〈樹林帯に入ると暗闇となった。私が疲労のためベースが落ち、時々トップを歩いていた吉田と離れたので声で確認を取った。樹林帯をしばらく行くと霧はなくなり、ヘッドランプの光も足元を十分に照らすことができた。対岸の明かりが見える辺りから、下りながら右に曲がる道を探した。しかし見つけることはできなかった。さらに樹林帯の中でどこが道なのか分からなくなり、道を外したと思った。そこで、道はないが左の斜面を下り、秩父湖周遊道路に出ることにした。斜面に木が少なく手がかりはなかった。足元は土が細かく、砕かれている状態で崩れやすかった。二人とも、一、二度落石を起した。

幸い直径二メートルくらいのワイヤーが伸びていたので、それにつかまりながら降りた。私はややペースが遅れ気味で吉田と距離が離れるときもあった。トップの吉田に数度、湖に落ちないように声を掛けた。百メートル斜面を下ったときだったろうか。二十メートル先を歩いていた吉田が、突然、

「ウワー、落ちる、落ちる」

と声を挙げた。足元を見ていた私が、声のする方を見ると、ワイヤーに吉田がぶら下がっていた。そして二、三秒後、落下した。崖

があるのに、気付かず降りていて、突然足場がなくなったので、ワイヤーにぶら下がったと考えられる。私が崖に気をつけて降りながら、

「吉田、吉田」

と声を掛けると、

「止まらないー」

と返答した。

「平気かあ」

の呼びかけに、

「唇が切れたあ」

と答えた。崖に近寄っても姿は見えなかった。再度、

「吉田、吉田」

と呼ぶと、

「先輩、早く来てー」

と返事をした。再び、

「吉田、吉田」

と呼びかけたが、今度は返事もなくライトは木々を照らしているだけだった。

明かりも突然見えなくなった。私は急いで木の根につかまり、崖を降りた。崖は三、四メートルの高さがあったと思われる。完全に垂直な崖であった。

崖の下は、崖の上と同じで足元が崩れやすく、滑り出すと止まらなかった。崖を降りてからザックを置いて、少し下り声を掛けたが

返答はなかった。それ以上下るのは危険だと判断し、ザックを置いたところまで引き返した。

私は斜面を回り込んで歩道に出ようと考えた。ザックから予備の電池を取り出し出発した。最後にもう一度声を掛けたが、やはり返事はなかった。この間、吉田が落ちてから十五分程度。出発したのは午後六時五十分だった。その後私は二時間近く迷って、ようやく道を見つけた。場所は埼玉大寮の吊り橋より少し山に入ったところと思われる。私は吉田が気を失っただけかもしれないと考え、周遊道を寺井の吊り橋に向けて歩いてみた。事故現場と思われるところには、吉田のポリタンクが一つ落ちていただけで、声を掛けても応答はなかった。

そこで埼玉大寮横を抜け、二瀬ダムバス停の近くの公衆電話から警察に通報した。時刻は二十二時近くで、事故発生から三時間以上たっていた。四十分後にはバス停近くに、警察・消防・救急の車が揃い、寺井の吊り橋まで行き、そこから捜索に向かった。

その晩はポリタンクを発見した周遊道から秩父湖に下る斜面を探した。これは私が吉田は秩父湖に落ちたと思ったからであった。その日は夜遅く、雨も強かったため、それほど長く探さなかったようであった。

翌朝早くからの捜索で、吉田は午前七時四十分頃、周遊道より三十以上の岩場で遺体となって発見された。眉間の傷が深く、ほぼ即死だったと聞いた。

気の毒な遭難死だった。

追悼 吉田哲の死から現在に至るまで

小野徹生（一九九二年卒）

つい最近、大学卒業以来初めて、学生時代に一人暮らしをしていたアパートを訪れ、大家さんのおばあちゃんと再会することができた。「窓の下には神田川」が流れ、春になると、部屋の目の前で神田川沿いの桜並木が満開になる。対岸に田中角栄邸、下流の方に椿山荘などがある昔ながらの東京の風情が残る街だった。別に遠い場所ではなかったのだが、当時迷惑ばかりかけていたただの下宿人が、「わざわざお会いしたい」とは何となく言い出せなかったのが、卒業してから十二年近くの歳月が流れてしまっていた。この間に、私は結婚もし父親にもなった。結婚式はアパートから歩いていける早稲田のアバコブライダルホールだった。挙式まで打ち合わせで何度も通っていたので、そのとき一度ぐらいは大家さんに挨拶しておくべきだったと反省もした。

再会した大家さんは、当時と全く変わらない、心優しいおばあさんのままだった。街の風景も、二十一世紀になったがほとんど変わっていない。毎日大学の通学に使っていた狭い路地も残っていた。私たちは、十二年間の時を埋めるかのごとく話し合うことができた。こんなにすてきで優しい人とおつきあいを続けさせていただけなんて、私は実に幸せな人生を送っていると感じた。

さて、学生時代そのアパートで、どうしても忘れられない出来事がある。一九九四年九月十八日のことである。この日大学の授業を終え、午後から友人と遅くまで出かけていた。夕立になってしまったので、大家さんのおばあちゃんに『合鍵で部屋に入って布団をしまってください』とワガママなお願いをしたことをよく覚えている。遅くなって部屋に戻ると、留守電のランプが点滅している。よくあることなので、適当に家事をしながら聞いていると、山岳部後輩の内野敦史のメッセージが入っていた。

「後輩の吉田が昨日亡くなりました」。

吉田は私の二年後輩になる。こんなに重い内容の留守電なんて、今まで経験したことがない。頭が真っ白になってなぜだか怖くなってしまった。夜も悲しいというより、まだ自分の目で確かめたわけではなかったから、信じられなくてよく眠れなかった。葬儀の前日には吉田のお母さんに会った。

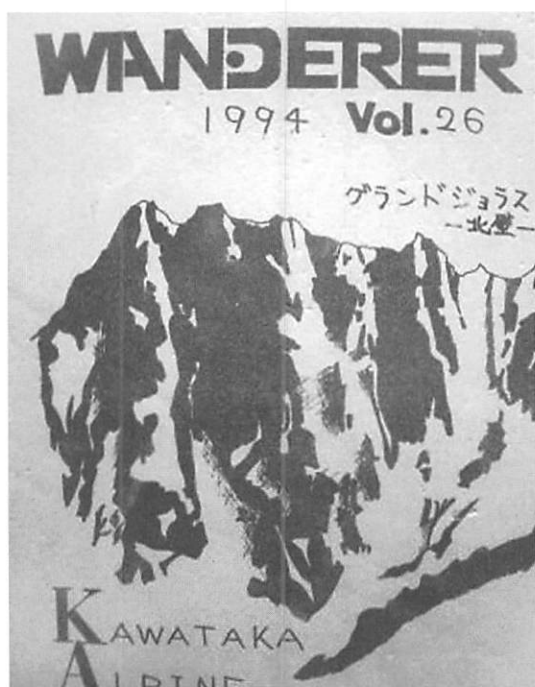
本当に悔しそうだった。跡継ぎを亡くしたのだから当然だ。でも、弟さんがとても気丈でしっかりしていたので、ほんの少しホッとした気持ちにもなった。

吉田が亡くなってからちょうど一年後の命日、私は川越高校で教育実習をしている。そこで過去のワンダラーを閲覧し、その足で可児時計店へ向かった。このときがまさに山岳部OB会のベテラン世代と若手世代の融合した瞬間である。可児さんは、私が三十年以上離れた後輩だと分かると、私を優しくもてなして下さった。さらにその半年後、私は吉田のお墓から最も近い県立高校に採用された。

何かの縁だろう。それから数年、命日ときは仕事の後にお墓参りに行った。

吉田が亡くなってからちょうど十年後、私には男の子が生まれた。吉田は、哲と書いて「サトシ」と読む。この原稿を書いていて、初めて同じ名前であることに気づいた。私はこの十二年間で剣道を学び、その影響で「道」という字を使いたかったのだが、妻が「智」という字を使いたいということ、当時私はちよつとイヤだったのだが、今となってみれば、最高の名前を息子につけることができたのではないか。妻に感謝しよう。そして、吉田の分までサトシに頑張っ

て生きてもらわないと。そう思いながら、私も今を必死で生きて



1994年 WANDERER26号

一九九五年（平成七年）

山行

春山合宿 磐梯山 三月二十五日～二十七日

新入生歓迎山行 万太郎山 五月十三日～十四日

第一回歩荷訓練 大岳山 六月四日

第二回歩荷訓練 武甲山 六月十八日

夏山合宿 南アルプス・荒川岳・光岳 七月二十日～二十七日

秋山ビバーク山行 那須岳 十月二十八日～二十九日

第三回歩荷訓練 鷹ノ巣山 十一月十九日

冬山合宿 黒姫山 十二月二十三日～二十五日

〔部員〕 浜下祐樹 飯野元 後藤直行 竹内伸夫 松本健一 渡辺

賢 大塚祐基 松木正尋 村田敦

〔顧問〕 野口孝 芝崎茂弥 福原勇 岡田明 関根俊彦

十年間もの長きにわたって山岳部を指導した熊井昌男先生の最後の山行が、春山合宿の磐梯山になった。磐梯国際スキー場の脇にテントを張り、初日には頂上付近の沼ノ平まで登って雪上訓練。翌日に再びそこを經由して登頂した。

八十年代半ばから九十年代半ばに掛けては、熊井山岳部でもあった。

夏山合宿の南アルプスでは、最南端の光岳までテントを担いで縦走した。総勢二十六人が参加して、身延から伝付峠を越えて入山。荒川岳・赤石岳・聖岳と縦走した。前半は雨にたたられたが、後半は好天に恵まれた。下山は、易老岳から遠山川へ降りた。

取材寄稿 川高山岳部の十年

熊井昌男（顧問）

（一九八五年から九五年に掛けての十年間は、顧問熊井昌男先生の指導で山岳部は活動してきた。川高に赴任する前にも小川高校で二十年間もの顧問経験があったベテラン教師であり、登山家でもあった。温厚な性格は生徒の自主性を重んじて、部員の山行報告にも度々登場してくる。

熊井時代には、春、夏、冬の年に三回の合宿はもちろん、初夏に二回の歩荷、秋にも秋山山行、秋歩荷のトレーニング山行、他に新入生歓迎山行、二月の新人大会（冬山トレーニング）など、毎年八回ほどの計画山行（公式山行）が組まれたが、そのほとんどを引率してきた。指導方針は、どのようなものだったのだろうか。

川高に赴任する前の小川高校は、男女共学の山岳部でした。赴任の前年に同好会としてスタートしたばかりで、テント、コンロなどの共同装備も少なく、夏山合宿とはいっても部員が一斉に山行に

出ることとは不可能でした。テントの収容人数が、部員数の半分しかなかったわけです。そのため夏には四泊程度の合宿が男女別々に生まれ、二回引率するというものでした。

合宿の目的は生徒の希望が優先されていましたが、登山コースは顧問の私が組んだもので、経験のない生徒は、どこから入山してどこに幕営すればいいのか分からない。そんなわけで、冬山合宿を組むことは不可能で行われず、三月の春山合宿といつても、営業小屋に自炊の素泊まり利用で、春の雪を楽しんでくるようなものでした。北八ヶ岳の高見石小屋や、那須の三斗小屋温泉、安達太良山のくろがね小屋辺りです。

ところが川高に赴任すると、夏山合宿は六泊の山行が生まれ、入山から下山までのコースは、生徒が自主的にガイドブックを参考に計画されていました。多いときには六コースくらいが候補に上がって、生徒間の自主投票で決められていました。もちろん冬や春の合宿にしてもそうです。こうした自主的な運営が伝統なのだろうというのが、最初の印象でした。ちょうど私の赴任に合わせて、若手の芝崎茂弥先生、福原勇先生も赴任してきました。通常学校運営の中でも山岳部顧問というのはなかなか決まらないものですが、このときはすんなりと決定したものでした。前任からの引き継ぎは多少ありましたが、歴史はブツリと切れて再構築されたようなもので、私は生徒の自主運営を尊重していこうと思ったものでした。

赴任してまもなく、そのときの三年部員が言うには、まず南アルプスの北部を縦走して、翌年に南部を縦走して、さらに三年目に北

アルプスを登らせたいという後輩指導の意向がありました。三年部員も夏山合宿までは現役山行を続けて、それで引退するという慣例はすでに敷かれていたように覚えていきます。ですから初年の八十五年の夏は、北沢峠から甲斐駒ヶ岳を往復して縦走を始め、仙丈ヶ岳から三伏峠まで。翌年は、伝付峠から荒川岳に登って、赤石岳から光岳まで。そして三年目に北アルプスの槍、穂連峰から水晶岳まで縦走し、雲ノ平に降りてから薬師岳を往復するという合宿が組まれました。三年先までの目標を計画通り実行できたということです。冬合宿、春合宿についても、同じように生徒の希望を通してきました。

ただ思い起こせば、計画山行（公式山行）は職員会議を通過した後、県の高体連登山部の承認を得る必要があるのですが、八十七年の春合宿の白毛門から朝日岳への縦走などでは、過去に白毛門頂上付近で雪崩事故があったから注意するようにという程度の助言は受けたことがあります。同じように、九十二年春の石川県の笈ヶ岳の計画でも、埼玉の高体連職員はこの山の登山経験者がいなくて、やはり注意を促されたことはあります。問題があったといつてもその程度のものでした。県内の高校山岳部ではやはりかなり秀でていた山行を実践してきたものです。

私自身は、それこそ子供の頃から列車の時刻表と地図を見比べながら、知らない土地を見聞するのは趣味のようなものでした。それが高じて四季を問わず山登りをして、さらに徒歩旅行も行ってきました。引率する合宿や山行は、私自身のことを言えばすでに登って

いる山が多く、できるだけ生徒の希望に添いながらも、自分でも楽しんで登ってきたということになります。

積雪期の合宿については、雪崩の事故が最も怖いことですから、幕営地は必ず樹林帯の中に求めるようにしてきたという程度だったでしょうか。

年におよそ八回から十回程度の引率山行を、十年間続けてきたわけですし、それ以前の高校部活の引率もありますから、今となつては記憶がかなり混同しています。それでも、八十八年夏のヤブ漕ぎの平ヶ岳縦走だとか、春の笈ヶ岳（登頂は大笠山まで）の登山などはやはり印象に残つたものになっています。

そもそもこの笈ヶ岳の計画にしても、確か生徒の方から、春山合宿に白山に行きたいという希望があつて、それはあまりにも無謀であると。あそこは北アルプスと全く同じ条件の山ですから不可能です。ならばその尾根続きの笈ヶ岳ならどうかということ、決まつたものだと記憶しています。生徒全員にアイゼン装備はなかつたのですが、ワカンの爪を引つ掛ければ多少のクラスト残雪は大丈夫だろうという思いもありました。しかしなかなかの難敵でした。豊富な積雪と、大きな雪庇の稜線というのは、やはり福島の安達太良山や吾妻連峰とは比較にならないものでした。

入部してくる生徒というのは、山岳部に入つて初めて登山をするようなものです。新入生歓迎山行で気をよくしたものの、次の歩荷訓練で苦しい登山を経験して、いつ辞めてしまおうかと考え始めるものです。それでも夏山合宿が成功すればまた次の目標もできて、

今度は積雪期の登山をしてみたいと思ひ始めます。最初はひ弱だなあと思われた生徒も、ほんの短期間の間に目を見張るようになり成長して、その驚きや発見は、生徒から学んできたようなものでした。当時の私は四十歳代半ばから五十歳代に掛けての期間でしたが、私も若いときにはこの子供たちのように成長したのだろうか、自問自答したものです。それに同期の顧問の芝崎先生から、高校生らしい簡単な沢登りを始めようとか、先の平ヶ岳のヤブ漕ぎ合宿などはどうだろうかとか、提言もありました。そう言えばこの平ヶ岳の山行というのは、一年が二人しか入部しない年のことでした。夏山合宿は二年と三年の経験部員だけになつて、ならば例年よりは少しチャレンジ的な合宿にしようという経緯だつたかと思ひます。そしてその翌年には、十五人近くの新入生を迎えるということになり、主力の二年不在のなかで、顧問はコンロの付け方から教えたということもありました。またこの年の冬休みには、私と芝崎先生はネパールのトレッキングに出かけてしまつて、冬合宿は翌年一月半ばの連休を利用して、スキーとラッセル訓練になつてしまつたこともありました。

私が生徒を指導した期間は、幸いにも大きな事故は一つもなかったのですが、赴任の最後の頃に、卒業したOBが山で遭難死してしまつただけは、とても心を痛めております。指導期間中は、できるだけ山登りのよさを生徒に分らせて、彼らがそれを糧に登山を理解して欲しいと思つてきました。卒業生の心には、当時の山登りがいつまでも焼きついているものだと思つています。

一九九六年（平成八年）

山行

新人大会 安達太良 箕輪山 二月十八日～二十日

春山合宿 四阿山 三月二十三日～二十五日

新入生歓迎山行 上越・大源太山 五月十一日～十二日

第一回歩荷訓練 伊豆ヶ岳 六月二日

第二回歩荷訓練 雲取山 六月二十三日

夏山合宿 槍穂連峰～薬師岳 七月二十一日～二十七日

秋山ビバーク山行 日光白根山 十月十三日

第三回歩荷訓練 熊倉山 十二月一日

冬山合宿 男体山～女峰山 十二月二十五日～二十八日

〔部員〕 門田大生 藤間健太 合田知之 市川雅稔 山際邦岳 得丸重夫

〔顧問〕 野口孝 春日敬行 福原勇 岡田明 関根俊彦

新入生歓迎山行は越後湯沢の大源太山だった。朝川越を出発して、昼過ぎに大源太キャニオンの旭原に到着し、この日は三十分歩いただけで林道に幕営。五月になっているのだが、林道付近は残雪があり、雪合戦をして遊んだと報告されている。さて翌日は雨になっていた。林道から登山道を三十分ほど歩いたのだろうか。尾根取り付

きのための橋が、増水のために渡れないとあり、そこで山行は中止された。夏山合宿は、この数年は北アと南アを交互に行っているようだ。この年は北アルプスの槍穂連峰から三俣蓮華岳～薬師岳の縦走を行った。上高地から入山して、横尾をベースに穂高岳を往復した後、槍ヶ岳から薬師岳まで縦走し、折立に下山している。

山行記録 上高地から薬師岳

上高地～横尾（泊）～奥穂高岳～横尾（泊）～殺生ヒュッテ（泊）
 ～槍ヶ岳～三俣蓮華岳～黒部五郎小舎（泊）～黒部五郎岳～北ノ俣岳～薬師峠キャンプ場（泊）～薬師岳～太郎平小屋～折立（泊）

一日目 上高地～横尾

北アルプスの玄関口である上高地に着いてから、OBの方からの差し入れの西瓜を抱き、梓川沿いに歩き始めた。だいたい十分程度で他の部員と西瓜を持つのを交代しながら歩いた。幸いこの日の行程は平坦な道なので頑張れたが、登りの登山道で西瓜を抱きながら歩くことになったら大変であつたらうと思う。横尾についてから、西瓜はすぐに、みんなの胃袋におさまることとなった。

二日目 横尾～奥穂高岳往復

テントや荷物は横尾キャンプ場に置いておき、サブザックを背負って奥穂高岳へと向かった。濁沢ヒュッテを過ぎたあたりから、雪

の積もった涸沢カールの中を歩いた。涸沢カールを過ぎてしばらく歩いたあたりから急な登り道となり、一時間半ほど登っていくと穂高岳山荘が見えてきた。ここから奥穂高岳への道のりは、岩がごろごろしていて急な道のりであった。富士山、北岳に次ぐ高峰の奥穂高岳は壮麗で堂々とした趣のある山であった。

三日目 横尾く殺生ヒュツテ

横尾から槍ヶ岳方面へ向かって歩き始めた。前日はサブザックでの行程であったので、余計にザックが重く感じる。梓川の支流の槍沢に沿った上り道を黙々と登り、岩がごろごろしたキャンプ場（殺生ヒュツテ）に着いた。

四日目 槍ヶ岳く黒部五郎小舎

間近に見える槍ヶ岳に向かって歩き始める。槍ヶ岳山荘で荷物をすべて降ろし、くさりを使って槍ヶ岳頂上へ向かう。誤って滑れば、大けがをしかねないような場所であるため慎重にゆっくりと登っていった。頂上はあまりスペースがないため、十分程周囲の壮大な景色を楽しみ、槍ヶ岳山荘へと戻った。

この日の行程は西鎌尾根沿いを歩くコースでアップダウンはそれほどなかったが、非常に暑かったことや歩く距離が非常に長かったことから疲れがたまってきた。双六岳は巻いて、三俣蓮華岳を登りきり、そこから一気に下ってようやく今日の宿泊地である黒部五郎小舎にたどり着いた。

五日目 黒部五郎岳く薬師峠

黒部五郎小舎を出発し、二時間余りで黒部五郎岳頂上へたどり着いた。記念の集合写真を撮ってから太郎平小屋へと歩き始めた。途中で赤木岳や北ノ俣岳でアップダウンがあったが、順調に歩くことができた。予定通り薬師峠キャンプ場にたどり着くことができた。

六日目 薬師岳

荷物はキャンプ場に置いておき、今回の山行の最後の名山である薬師岳へと向かった。樹林帯を抜けると、岩がごろごろした道が延々と続き、登山道を登りきると、三百六十度の大パノラマが広がっていた。頂上は、風が強かったが、景色の美しさは格別であった。それとともに、山岳信仰の山である薬師岳の神々しさもなんとなく感じることができたように思う。

七日目 折立へ下山

トレッキング最終日は、ひたすら下り続ける行程であったため、息が切れることはなかったが、ひざがだんだん痛くなってきたので、とにかく早く下りきりたい思いに駆られていた。昼頃には折立に着き、午後はボーっと過ごし、疲れを癒やすことにした。

八日目 帰京

折立からバスで延々と二時間揺られ、富山駅に着いた。下界につ

いてからの楽しみは、食事である。駅で弁当やおやつを買い込み、電車の中で食べながら、ささやかな至福の時を感じていた。鈍行列車に何時間も揺られ、無事一週間ぶりの自宅に着き、夏山行は終了したのであった。(二年 合田知之)「わんだらあ」二十八号

寄稿 大荷物 of 夏山合宿

合田知之(一九九八年卒)

私が川越高校に入学し、どの部活に入部しようかと考えていた時に、ふと、この機会に本格的に登山をしてみたいという気持ちにかけられ、山岳部に入部することに決めました。

普段の部活では、伊佐沼までのランニング、サッカー、野球、富士見槽での歩荷訓練、泥警など、バラエティーに富んだ活動があったの思い出されます。山行については、特に、高校一年の時に参加した南アルプスでの夏山行が印象深く記憶に残っています。

縦走コースは、身延→転付小屋→二軒小屋(泊)→千枚小屋(泊)→荒川岳→赤石岳→百間洞山ノ家(泊)→聖岳→聖平小屋(泊)→上河内岳→光小屋(泊)→易老渡(泊)

出発の日に新宿駅で集合時に驚いたのが、なんとといっても、OBの方々からの差し入れでした。西瓜や缶詰、雑誌、ビーチ用のパラソル、使いかけのこしょうなど、ただでさえ一週間分の荷物で重いの、OBの方たちはいったいなを考えているんだ……という気

持ちにかられたのを覚えています。幸い、高一であった私は差し入れの荷物は持たずに済みましたが、高二の時は、一日目は西瓜を抱えて歩くことになりました。苦勞して歩いた甲斐があり、西瓜はとてもおいしかったのですが、食べてなくなるもの以外は勘弁してほしいなあと思いました。高三のときからは、山行の邪魔になるような差し入れは禁止となりました。(笑)

高一のときの夏山行では、私が一番バテてしまい、一日目の転付峠越え時に三年生の先輩に荷物を持っていただき、非常に助かりましたが、残り行程を無事歩きとおせるのかどうか、その日の夜は非常に不安な思いをしたのを覚えています。その後の行程では、とにかく前を歩いている先輩に遅れないようひたすら付いて行くという感じで、景色を楽しむ余裕はほとんどなく、休憩まであと何分!ということや、もうこの山行から帰宅したら、こんなつらい山岳部はやめよう! 怪我をしたら、ヘリコプターで帰れるかな? などと、いつも歩きながら考えていました。

しかし、夏山合宿から帰宅したら、山行中に山岳部をやめようと考えていたことはすっかり忘れ、気づいたら高校三年の夏の引退まで山岳部を続けていたのでした。高校二年あたりからは、景色を楽しむ余裕も出てきて登山の醍醐味が少しずつ分かるようになった気がします。今、思い返してみると、山岳部での三年間はつらく苦しいことも多かったけれども、南北アルプス縦走など、なかなか普段の生活ではできないことを経験できたので、山岳部を選んでよかったと思っています。

一九九七年（平成九年）

山行

春山合宿 至仏山 三月二十五日～二十八日

新入生歓迎山行 大菩薩峠 五月十一日

第一回歩荷訓練 御前山 六月十五日

第二回歩荷訓練 中止 六月二十九日

夏山合宿 烏帽子岳、鷲羽岳 七月十九日～二十六日

秋山ビバーク山行 両神山

第三回歩荷訓練 棒ノ折山 十一月二十三日

冬山合宿 四阿山 十一月二十五日～二十七日

他に個人山行は八月の岐阜・白山など

〔部員〕 柏木寛之 上原佳久 笠原昌紀 吉田知矢 川名悟 中屋

隆博 福島伸介 谷友輔 中井裕樹 潮田広行

〔顧問〕 関根俊彦 春日敬行 佐賀博 新堀聡 矢谷真二郎

春山合宿は、戸倉から鳩待峠までの五時間にも及ぶ林道歩きのと、至仏山に登頂。六月下旬の第二回歩荷訓練は谷川岳で雨の中実施された。夏山合宿は北アルプス高瀬ダムからの入山だ。湯俣から竹村新道を登って真砂岳に登頂する予定が、稜線に出る直前の南真砂岳からの登山道に崩落があつて、前進不能。残念ながら来た道を

一泊かけて高瀬ダムまで戻る。ブナ立て尾根を登って、野口五郎小屋で幕営。翌日は水晶岳、鷲羽岳を往復して、下山はやはり来た道に戻り高瀬ダムに下っている。

最後の冬山合宿（四阿山）が行われたのが、この年だった。翌年からは二月に高体連が主催する冬季講習会が合宿の代わりとなった。引率できる顧問の不在が、大きな理由らしい。

山行記録 北アルプス 真砂岳

今までに登った山には様々な思い出があるが、今年の夏山合宿でも忘れられない山が一つ増えた。北アルプスの真砂岳である。その日は湯俣温泉から真砂岳を経由して、野口五郎小屋までのコースであった。朝四時に出発し予定より少し遅れたが、昼には南真砂岳を通過し、あと三十分もすれば真砂岳に到着するはずであった。ところが道が崩れていて前に進めない。もともと危険個所であり、古いロープが張ってあつた。そこがさらに崩れたらしい。矢谷先生が渡って確かめてみた。そして顧問が相談し、一年生も三十キ近く背負っている。ザイルが四十キで少し足りないなどの理由で、その危険個所を全員が無事通過するのは困難だと判断し、湯俣温泉に引き返すことにした。だが八時間かけて登った山道である。下山でも六時間かかる。今度は日没前に湯俣温泉まで到着できるか不安であつた。幸い夕立もなく日の長い時期だったため、午後七時には全員無事に湯俣温泉に到着できた。一日十五時間行動になってしまった。

今回の主な反省点を挙げてみたい。

一、山行のルートは一般的なものにする。今回のルートもエアリアマップに載っているが、途中の標識もなくすれ違うパーティーはほとんどなかった。

二、エスケープルートを常に考えられるルートにする。今回は野口五郎岳→三俣蓮華岳→笠ヶ岳→新穂高温泉を予定したが、逆コースにしておけば、選択の幅があった。

三、帰りの列車は座席指定は不要。今回は早々にキャンセルを決断したから良いが、こだわると判断を狂わせる可能性がある。

四、駄物を持参しない。高瀬ダムから烏帽子小屋に登るとき時間を節約するために、駄物をデポした。そのときの駄物の量は想像を超えていた。

五、OBからの差し入れは軽く小さく、しかも役立つものにする。差し入れに注文をつけて申し訳ないが、遊び心が体力のいたずらな消耗を招き、今回のように予期せぬアクシデントがあると、取り返しがつかない結果を招きかねない。

(顧問 関根俊彦)「わんだらあ」二十九号

随想 軽量化と山の楽しさ

山岳部の顧問になったばかりの私にとって、夏合宿はカルチャーシヨックの連続であった。見送りに来てくれたOBたちがくれたスイカ、パイナップル、たくさんの缶詰の量にまず驚いた。共同装備

が軽めなのにも関わらず、ザックがやたらと重い一年生たち。一週間程度の合宿でそんなに重たいんじゃないや、山を楽しめないよと、言いたくなくなってしまった。そういえばOBの大学生が、私みたいに山のクラブに入ったケースって、少ないみたいだからなあ。重い荷物のために、山イコール苦行という印象しか残ってないんじゃないのかなあ。私自身は軽量化が好きだった。二十^キ程度で二週間山に篋っている自信もある。今の三年生は、合宿後の重さが十^キ以下になっ

ていて、さすがとは思ったが。

重い荷物とはかく山をつまらなくする。足はもつれ、背骨も痛い。第一体を壊しやすい。さらに今回の一年生の歩き方を見ていて痛感したように、山のガレ場でふらふら歩いて非常に不安になる。重いものはバランスを崩しやすい。そう言えば埼玉県のある県立高校が数年前にキレットで落ちて死亡したのも重荷が原因だった。

高校山岳部の事故の大半は重荷が原因だと思う。重荷さえなければ、今流行りの中年ハイカーのように、自由気ままに山を楽しめる。もう一度考え直そうよ。ちょうど君たちがダムのキャンプ場で無駄な荷物をデポしていったように。そのときの異様に盛り上がった君たち同士の教えあいだが、私にはとても心強く感じられた。

山を楽しもう、苦行とするのではなく。そこに高校山岳部の本当の意味があるんじゃないの? とところで共同装備の重さは、二年、三年、一年の順番で重くしていった方が良いと思う。あと冬山山行でも、新聞紙は要らないと思う。

(顧問 矢谷真二郎)「わんだらあ」二十九号

一九九八年（平成十年）

山行

春山合宿 中止

高校総体予選 大滝村・白泰山 五月八日～十日

新入生歓迎山行 雲取山 五月三十一日

第一回歩荷訓練 武甲山 六月二十八日

夏山合宿 南アルプス・北岳～農鳥岳 七月二十一日～二十四日

高校総体全国大会 徳島県・三嶺 八月一日～六日

秋山山行 甲武信岳 十一月十五日

〔部員〕 日置陽 永田祐介 林修一郎 松永尚明 釜田淳志 中原

邦彦 平原力 藤井宏騎 楨田純一 日下充 永松隼一 松浦学

上辻秀治 菊地敦士

〔顧問〕 関根俊彦 春日敬行 斉藤和弘 室田栄治 関根修

不運が重なったか、時代の趨勢か。春山合宿は安達太良山が計画されていたのだが、鉄山付近でガスによる死亡事故が発生し、前日に合宿は中止された。

しかも顧問不在によって、翌年からしばらく計画が組まれなくなり、最後の春山合宿は前年（一九九七年）三月の至仏山で一旦終了した。（その後二〇〇二年に再開された）

夏山合宿は、高校総体の予定が続いて短縮された。南アルプス白根三山の縦走を行った。その高校総体の全国大会は、五月の予選を通過したもので、八月一日から一週間、四国徳島で開催された。羽田から空路往復し、山中三泊。縦走路の最高峰の三嶺は標高一八九三メートルである。登山活動の多くが審査され、得点化された。埼玉からは所沢高校も出場し、優勝は山口県だった。

山行記録 第四十二回全国高等学校登山大会

八月一日 川越～高知

この日は飛行機で高知に向かった。暑くて南国という感じがした。受け付けを済ませた後に、市内で食料調達。スパーを見つけるのに苦労し、二時間以上かかった。他校は軽量化していたようで、けっこう量が少ない。ホテルに戻って軽量化したが、二〇キは超えていた。同じホテルの他校は、七〇キくらいのザックなのに、こちらは最大級（九〇キ）もある。体力に不安もあるが、さらに筆記審査や技術面の審査で、読図などはこの日に練習した。

八月二日 開会式（高知西高）～矢筈峠

開会式では、他校の服装に驚いた。みな軍隊みたいである。帽子、シャツ、ニッカ、靴下、靴まですべてお揃い。式の後に天気図、医療、自然観察の筆記審査があり、結果は六割五分から八割程度。入山式のために、バスで物部村へ移動。地元では歓迎を受けた。イベ

ントでは伝統芸能の踊りを披露してくれた。さらにバスで矢筈幕营地へ。テント設営の審査があり、ペグと張り綱が緩く、テント入り口も閉め忘れて、最悪だった。食事の審査では減点はなかった。

八月三日 矢筈峠く光石幕营地

まず網附森（一六四三^ノ）へ向かって歩き出した。最初の一本から速くて、他校のザックは二〇^キを切っていたと思う。その上、重登山靴を履いていたのはうちらくらいで、他は軽登山靴。

途中急登のところに審査員がいた。実にイヤらしい場所に隠れている。急登の後の平坦地や、滑りやすい場所にいる。イザリ峠に向かう途中で、リタイアした学校が出たようだ。峠で昼食の交流会があった。同じ班の学校はほとんどインターハイの常連で、七年連続出場という学校もあった。またどこも部員不足で困っていた。

お亀岩を通って下りになった。ここでも急な滑りやすいところに審査員がいた。歩行でけっこう減点があったと思う。なぜなら日置さんがこけまくった。しかも審査員の目の前で。沢にも落ちた。

堂床を通り、光石幕营地に向かう途中、夕立になった。疲労と雨で最悪。幕営地に着くとやんだが、この日のテント設営は減点がなかったと思う。

八月四日 光石く別府峡温泉

午前三時、目を覚ますとテントの天井が見える。今日はサブザック行動だが、十一時間も歩く。朝食のカレーうどんを食べ、撤収し

て五時に出発。大会のメインである三嶺を目指す。

昨日千^ノ下ったのを、また登る。四時間で着く。三嶺は一八九三^ノだが森林限界を超えていて、山容はアルプスにあってもおかしくない美しさだった。

昼食の後は、顧問の先生と生徒の五人パーティーで行動した。遠くには西日本第二の高峰剣山が見えたが、山頂直下まで林道が整備されて、山の将来が心配になった。

その後千^ノを一気に下り、予定より少し遅れたが別府峡林道に到着。この日は僕の山史上二番目に辛かった。リタイアしないでよかった。バスに揺られて十分。テン場に着くと食事の準備。しかしハヤシライスは最高の出来で、口に入れたら涙が溢れてきた。振り向くと上辻君の目からウロコが落ち、日置君は泡を吹いてぶっ倒れていた（うそ）う……うまい。

八月五日 別府峡温泉く高知市内

昨晚先生がいらないと思ったら、朝は横にいた。顧問同士の飲み会で酔っぱらいと化していたらしい。今日は石立山に登るだけの七時間行動。めちゃくちゃ急で辛い上に、山頂は大したことがない。イライラしてきたが、僕のチャーハン（まずい）と役員用の弁当をおじさんが交換してくれて、機嫌がよくなった。

午後は一気に千^ノ下って、最後の目的地、日和田に到着。バスで別府峡に戻る。するとそこに、コーラとアクエリが無料配布。万歳！二〇本以上いただいた。解散式の後、高知市内のホテル・ロスイン

に戻り、ドラマを見て寝た。

八月六日 閉会式く川越

目を覚ますとテレビでニュースをやっている。あーもう、下界に戻ってきたのか。終わっちゃうえば早いもんだ。ちよつとブルーになりつつも、朝食を食べ閉会式場へと向かった。会場では地元高校吹奏楽部の素晴らしい演奏。三種目（男子、女子、男子縦走）とも、優勝は山口県だった。

式の最後には、後ろの席の女子選手三人が泣き出して、ちよつとびっくりしてもうた。式後、所沢高の選手（女）とモスバーガーに行つたのだが、先生に四人で一万円という大金を渡されて、食い切れなかつた分は小遣いとなつてしまつた。

その後所高と、名所の桂浜に行つた。先生の態度急変には驚いたし、潮田は遊泳禁止をトランク스에서泳いで注意され、飛行機の時間になつた時に、六日間を過ごした高知に別れを告げた。一時間後、羽田は雨だつた。（二年 上辻秀治）「わんだらあ」三十号

随想 さむらい山脈

いい加減飽きがきていたのだ。何をやるにしても、幼かつた頃に感じた、時間の密度、肌触り、色合い、とでも呼ぶべきものたちが薄れ失われてしまつていた。日常という言葉が意識され始めた。好奇心を満たしてくれて、そして何よりもそれが濃ければ何でも良か

つたのだ。それがたまたま山だつたのだ。

山と言うと、僕の場合、それは一年の夏山を指している気がする。それ位あの夏山は濃かつた。記憶の中でそれは随分と眩しく編集されているので、実際どうだつたのかはよく分からない。が、僕に大きな影響を与えたことだけは確かだ。

僕の最大の夢、それは狩猟採取生活を送ることである。自分で殺した肉を責任を持って食う、自分の手で殺して生きる、というのは本来あるべき姿である気がするし、そのようにしてこそ本当に生が実感できそうに思えるのだ。おまけにそれは間違ひなくかつこいのである。山岳部に入つていなければ、こんな考えは浮かんでこなかつたらう。

最後に、山行について僕は最近になつて気づいたことがある。それは、山はゆつくりと歩かねばならぬ、ということだ。足許に咲く花を愛でたり、うつろいゆく空の色を眺めるために足を止める。それらが叶わぬ山行に一体、何の意義が認められるというのか。山をゆつくり歩くというのは、ある意味、義務であることさえ僕には思えるのだ。

それでは僕たちの青春の主題歌「青い山脈」、もしくは山岳部部の歌のどちらかでお好みに合わせて終わりとしていただきたい。残りの行数の関係もあり、全歌詞を載せられないのが残念ですが、これで終わりとさせていただきます。部でお世話になつた方々に心よりお礼を申し上げます。（上原佳久）「わんだらあ」三十号

一九九九年（平成十一年）

山行

新人大会（雪上訓練）安達太良・箕輪山 二月十三日～十五日

新入生歓迎山行 熊倉山 五月三十日

歩荷訓練 六ツ石山

夏山合宿 北アルプス 槍ヶ岳

秋山 谷川岳 十一月十四日

他に個人山行は穂高岳、剣岳

〔部員〕 渡辺耕祐 小林祐太 得丸光夫 洞口夢生 柳田亮介

〔顧問〕 関根俊彦

積雪期の登山は、二月の雪上訓練だけになった。一、二年を対象とした高体連主催の「新人大会」である。県内の高校生が大宮に集合し、夜行バスで現地（安達太良山）に行き、箕輪山中腹で雪洞一泊。翌日吹雪のなか途中まで登り、下山して温泉に二泊目。最終日も訓練の後下山。天候が厳しいシーズンのラッセル訓練となっている。

夏山合宿は上高地から槍ヶ岳。中央線も夜行列車がなくなり、川越を出発するのは、早朝の時間帯である。初日は横尾で幕営。翌日頂上を目指した。合宿前の歩荷訓練も一回だけになった。

この年の三年は、一年のときに敗退した北アルプスの夏山合宿を経験し、二年では南アルプスの北岳から農鳥岳の短縮合宿。三年で槍ヶ岳への二泊三日の合宿を経験したことになる。

寄稿 山岳部過渡期の登山

渡辺耕祐（二〇〇一年卒）

私の入学した年の前年に最後の冬山合宿が生まれ、そして二年前に最後の春山合宿が行われたと聞いたのは、卒業して大分経ってからのことであった。実際、在籍中の三年間で一度も行われなかった冬山・春山の存在はとても遠いものであった。そして、よく見れば前年の夏合宿は一週間もあるではないか。私にとっては、川高山岳部の夏合宿はいつも三泊四日であった。つまり、川高山岳部史上もつともヌルい時代に私はいたのかもしれない。

私は入学前の中学生時代に、父に連れられて甲斐駒の一般ルートくらいは登ったことがあった。けれど本格的な登山とは縁が遠い。たとえ冬・春の合宿がなかったとしても、私にとって山岳部の部活は結構たいへんな思いをしたというのが、正直なところである。

だがそんな思いも序盤だけで、上級生になるにつれて夏合宿だけでは足りずに、父と個人的に北・南アルプスへ登山へ赴いた。

初めは先輩について下を向いてハァハァ息を荒げるだけであった。しかし数々の山行をこなすうちに「なぜ山に登るのか」という

問いに、いつしか私は「皆と騒いだり苦しんだり、そういう時間のためかもしれない」と思うようになった。山そのものに対する感動も大きかったが、共に登れる仲間が存在が非常に大きかった。当時、登山のイロハもよく知らなかった私たち一年生は、下界での机上講習はあまりなかったと思う。普段のトレーニングは技術や勉強よりも、体力作りが中心だったからだ。

先輩に連れられて伊佐沼まで走った私は、先輩について行こうとして無理に頑張ったせい、吐きそうになりへばってしまった。後に荒川スペシャルと呼ばれる荒川までの往復ランニングにまで至り、当時は何回ランニングしたかわからなかった。そして体力作りの一環として行われていたサッカーも、休憩なしで延々と夜までやっていったものである。

富士見槽での歩荷訓練も山行前を中心に行っていたが、何故かこうした体力作り中心のトレーニングばかりであった。もう少し知識や技術の勉強会をしても良かったのではと思うが、行った現場で実践しながら教わるのが当時であった。

新入生歓迎山行で初めて行ったのが雲取山であった。このときの印象は今でも忘れない。山頂付近の草原のような風景を間近で見た私は、思わず顔がほころんでしまい、進む足も速まってしまった。下山後、バス停でバスを待っていたとき、時間がかなりあったので自動販売機でジュースを買って飲んだ。そのとき、関根俊彦先生に一喝された。まだ山行途中であり、こんなところでジュースなど買うな、捨てる、と。私は大いに驚いた。登山もこんなスポ根バリバ

リの世界なのか、と。

だが、関根俊彦先生には大いにお世話になった。私たちが夜テントでいつまでも話していると、よく怒声が飛んできたものである。しかし、山に対する思いはこちらにまで伝わり、当時の顧問の中でもっとも私たちの面倒を見てくれた先生であった。今思えば、いろいろと口うるさく言って頂けたのが有り難かった。叱ってもらわなければ非常に脆弱な態勢で山行を行っていたのは目に見えていたからである。

私が確か三年生の頃、初めてクライミングの大会に川高山岳部が参加した。もちろんみんな未経験で、シューズすら履いたことがなかった。しかしあれよあれよと登ってしまい、なんと私はノーミスで決勝まで進んでしまった。決勝では惜しくも落ちてしまったが、クライミングの楽しさの一端を知るには十分な経験で、今でも余裕ができたなら再挑戦したいと思っている。

後に信州大学農学部へと進んだ私は、さっそくワンゲルへ入部した。海外遠征をするほどの登山組織も大学内にはあったが、私にそこまでの勇氣はなく、中程度の登山活動を行うワンゲルへと入った。一年生の頃は松本に暮らし、常念岳を仰ぎながら毎日大学へ通い、週末は周りの山々へ登る生活をしていた。二年生からはキャンパスが松本から長野県南部に位置する伊那へと移り、今度は木曾駒を背にして仙丈を毎朝眺める生活へと変わった。大学ワンゲルでは夏に二週間程度の合宿を行い、先輩の中にも太平洋から日本海までアルプスを縦断する強者もいたりした。厳しい気候の中で春夏は爽やか

な草原を歩き、秋にはヤブをこぎ、冬にはワカンを穿^はいてラッセルをするという三年間であった。窓を開ければ山があるという環境は私にとって至極最高の生活であった。

大学卒業前にはマレーシアのマウント・キナバルにも行ってみた。在学中に岩をやりたいと思っていたが、バイクツーリングやレース、音楽にまで手を出していた私に、そこまでの時間も金もなかった。結局現在までロープワークを含む岩登りは未経験のままである。今の私は就職のため東京へ戻ってきてしまったが、正反対の環境に毎日が戸惑いの連続である。

もはや私は山がそこにある環境に慣れきってしまった、東京という大都会に窒息しそうである。日々、信州へ逃避するチャンスを探っている。

しかし、川高山岳部でも大学ワンゲルでも苦労した点が一つだけある。新入部員の確保である。このことについては大分悩まされた。本当に人が入ってこなかったからである。幸い今の川高山岳部は私の時代と比べて人が増えているようではあるが、私の頃は本当に人が部活説明会にすら来なかった。

規定の説明会以外にも二〜三回説明会を開催し、揚げ句の果てには山の料理を作ってご馳走するというとんでもない説明会まで開いたが、それでも来なかった。私が三年生になった年、新入部員は梅沢氏の一人だけであった。

人が少ないということは非常に寂しかった。活気がないわけではなかったが、部室に行っても誰もいないことはザラにあった。大学

ワンゲルでも同じ苦しみを味わったが、若年層の山離れを肌で感じた出来事であった。

最近、八年半ぶりに雲取山へ登った。新入生歓迎山行で登った頃にはなかった立派な避難小屋が建ち、背負ってきたテントの幕営に迷いながらも、フライシートを広げた。山頂到着後、皆で昼食のパンを食べたことがふと思いだされた。思いの外暑かった下山後のバス停も、前泊でテントを張った登山口近くの砂利置き場も、ほとんど変わらずに残っていた。その後、三峰へ抜けた私は、秩父鉄道と西武秩父線に乗って東京まで帰った。横瀬から見えた武甲山は、かつて歩荷訓練で河原の石をザックに詰めて雨の中登った山だ。正面から見た山容は痛々しいが、裏から登ると素晴らしい山であった。当時は足がつって、雨も止まず、下りもヘトヘトで、帰りの電車でも爆睡していた。大学時代は峻険な山々に囲まれていたせいか、秩父の峰々が妙に新鮮に映った。

正直、就職してから毎日が忙しく、なかなか山へ行く気も起こらなかった。最近になってようやく山へ目が行くようになり、川高時代に登った秩父や奥多摩の山へ、再び登りたくなった。今思えば、川高山岳部は私に登山の基本を、そして皆と山へ登る楽しさを教えてくれた。駅や雪洞で寝ることもなく高校生活を終えていたら、今の山に対する思いは生まれていなかった。

川高山岳部は、確実に私の大事な一部分を形成してくれた。先生方、仲間、そして山岳部に感謝の意を表すと共に、これからも益々発展することを願っている。

二〇〇〇年（平成十二年）

山行

新人大会 黒姫山 二月十九日～二十日

高校総体予選 大滝村

新入生歓迎山行 丹沢

歩荷訓練 鷹ノ巣山

夏山合宿 八ヶ岳 七月二十一日～二十四日

秋山 雲取山

〔部員〕 矢笠嵐 藤森章光 川村慎一 柳瀬貴司

〔顧問〕 吉田立志 中村潔 関根修 関根俊彦 島田俊一

高体連主催の冬山・雪上訓練は黒姫山で行われたが、僅か四人参加で少なかつた。バスで黒姫に着き、一日目はラッセル登行で中腹に幕営した。

二日目は登頂後、下山してホテル泊。三日目は戸隠奥社を参拝して下山。

夏山合宿の八ヶ岳は十三人参加で盛況。小淵沢から入山し、初日が青年小屋。赤岳～横岳を縦走して、二日目にオーレン小屋。荒天が続く。

寄稿 現代川高山岳部の気風

吉田立志（顧問）

私が、川越高校に赴任したのは九年前（一九九九年）だった。山岳部は前年度にインターハイに出場していて「すごいところに来てしまったな」というのが最初の印象である。部の雰囲気は、上級生から下級生に、自分たち山岳部の伝統・流儀がしっかりと受け継がれ、細かいことに顧問が口出しをする必要はなかった。唯一の悩みは、年により部員数の変動が大きいことである。私が赴任した年の新入部員はたった一名。責任感の強い熱心な生徒であったが、山岳部のルールをすべて一人で下級生に伝えることに苦勞していた。逆に、全学年が参加する夏合宿の参加人数が二十三名になる年もあつた。バスの乗車、テント場の確保、歩行中の安全確保など、思わぬところで頭を痛めた。

最初の頃は、山岳部の活動だけでは物足りなく個人山行に出かけていた生徒もいた。勝手に出かけるので心配することもあつた。しかし最近はずいぶん安心ではあるが、半面、寂しい気持ちも大きい。また火気も最初の数年はガソリンバーナーを使用していたが、次第に取り扱いが楽なEPIのガスバーナーに取って代わつた。

普段のトレーニングはかなり熱心である。日頃は、放課後、部室に集まり市民グラウンドでサッカーやソフトボールをしているよう

である。地学部（探検隊）と対戦していた頃もあった。山行前は伊佐沼へのランニングが中心であり、もちろん富士見槽でのポッカ訓練は受け継がれている。

一年生が初めて参加するのが、新入生歓迎山行（五月）である。丹沢山、大菩薩峠、両神山などで行っている。共同装備も調理も上級生で分担し、一年生は見ているだけ。最近では鉄板を山に持ち込み、焼き肉をするのが恒例となっている。

五月の学総体（インターハイの予選）には二年生中心で参加している。ここ数年、甲武信岳方面で行われていたが、関東大会やインターハイが埼玉県で実施（二〇〇八年）されるため、白泰山域と両神山域を歩く新しいコースが設定されている。生徒には活躍を期待するとともに、私も役員の一人として参加した。

六月には夏合宿に向けてのポッカ訓練合宿を行う。梅雨の時期なので、ほとんど雨との戦いである。以前は第一次ポッカと第二次ポッカが行われていたらしいが、最近では一回だけである。

七月の夏合宿が三年生最後の山行になる。毎年、卒業生が川越駅に差し入れを持って見送りに来る。スイカに代表されるこの差し入れは、通称「駄物」と称され、年々豪華になり、生徒のザックの重量が増す原因となっている。

地区新人大会（十月）は、埼玉県を東西南北の四地区に分け実施されている。各校の親睦を深めることが目的である。一泊二日で谷川山域や上州武尊山域で行われている。

秋合宿は十一月末に行っている。本当は紅葉の季節に実施したい

のだが、学校行事の関係でここでしか実施できない。悪天候で中止になることが多く、また寒さにも慣れていない時期でもあり、良い思い出は少ない。日帰り山行（十二月）は、冬場の活動が乏しいため数年前から実施している。奥多摩方面に出かけることが多い。

県新人大会（二月）は、戸隠山域と安達太良山域で交互に実施されている。初日はバス車中泊、二日目は雪洞泊、三日目は旅館泊とバラエティーに富んでいる。ワカン（かんじき）による行動で、寒さも厳しくハードな大会であるが、各校（ベテランの顧問）が集まることにより安全を確保している。

春合宿（三月）は、北八ヶ岳で行っている。雪もたつぷり残っていて、ワカンをつけた行動が中心になる。晴れたときの山の景色も、雪中歩行も最高であるが、天気が荒れば、すべてが最悪になる。また、登山活動と並行して五年前に赴任した森林教諭（本校OB）の指導のもとクライミングの活動も行っている。平日は学校にあるボードで練習し、休日にはパンプで練習を積んでいる。大会にも積極的に参加して優秀な成績を収めている。

山岳部は他の運動部と違い順位を競わない。そのため脚光を浴びることは少ない。しかし部員は伝統ある山岳部の一員という自負を持っていくようである。部長就任のときには「第何代部長、誰々」と言う挨拶が必ず聞かれるのもその表れであると思う。私自身も川高百周年記念誌により、山岳部の歴史を知り驚いた。今後もこの伝統を引き継ぎ、卒業してもなお山登りを続ける部員が増えるよう、山の魅力を伝えて行きたいと思う。

二〇〇一年（平成十三年）

山行

冬山登山新人大会 黒姫山 二月十六日～十九日

学校総合体育大会 甲武信岳 五月十二日～十四日

新入生歓迎山行 大菩薩嶺 五月二十七日

歩荷山行 男体山 六月二十三日～二十四日

夏山合宿 剣岳 七月二十日～二十四日

秋山山行 那須・茶臼岳 十月二十七日～二十八日

日帰り山行 大岳山 十二月

〔部員〕 海澤祐介 大和田達寛

〔顧問〕 吉田立志 石塚稔成 中村潔 関根修 島田俊一

学校五日制で部員は嬉しい。歩荷訓練は日光・男体山で行われたが、参加生徒は三人。土曜朝川越を出発し、志津小屋で宿泊。翌日雨天の中男体山に登頂し、中禅寺湖へ下山。日帰り温泉も各地に増え、下山後の温泉入浴も恒例となってきた。

夏合宿は剣岳。上越新幹線を利用すれば、朝川越を出発して、夕方には雷鳥沢で幕営ができる。二日目に一ノ越から立山を縦走して剣沢へ。三日目はサブザックで剣を往復して、雷鳥沢へ戻る。最終日には、再び一ノ越まで登り返して黒部平へ下山。アルペンルート

で扇沢に出た。

山行記録 夏山合宿 剣岳

七月二十日 川越～雷鳥沢キャンプ場

川越から大宮へ。新幹線「あさひ」の自由席で、大荷物に常に気配りしながら立っている。越後湯沢で「はくたか」に乗り換えた。大荷物に敵意を持たれたらしい。富山から電鉄で立山へ。ケーブルカーで美女平。周りの人たちは中年の方が多く、軽装で騒がしい。さらにバスで室堂へ。

今日は数百歩歩くだけで、雷鳥沢キャンプ場。天気は素晴らしく眺めは最高であった。ときおり室堂の硫黄の香りがして「室堂臭い」というと、川村氏に「室堂をバカにすんな」と言われた。

七月二十一日 雷鳥沢～浄土山～雄山～別山～剣沢
キャンプ場

雷鳥沢は水場もあるし、地面は平らだし最高です。午前二時に目が覚めた。雲一つない夜空に満天の星空。スパゲティを食って、四時に出発。

一ノ越まで一気に斜面を登った。雪渓を横切るときに転んだ。一ノ越からサブザックで浄土山を往復。立山連峰最高峰の雄山に向かう。山小屋利用の軽装備の中年団体がガラガラ登っていて、道はかなり渋滞していた。我々は大きなザックだから遅いペースは有難い。

雄山頂上はなかなか広かったが、団体が多すぎて一番高いところに行けない人もいた。

その後、真砂岳、別山を通り、延々と下りが続いた。足がガタガタしてきたところで、剣沢キャンプ場に着いた。明日登る剣岳が堂々とそびえ立っている。かなりの迫力である。

到着が早いから昼寝をした。日差しが強くて、起きたら日焼けで顔と腕がやられていた。夕食後、なかなか眠れなかったのは昼寝をしたからで、U沢氏は昼寝をしたのにのび太的睡眠術を心得ていたようだ。

七月二十二日 剣沢↪剣岳↪雷鳥沢

朝食の梅じゃこチャーハンを食べ、サブザックで剣岳に向かう。雪渓を横切って一服剣に登る。ちょうど朝日が見えてきた。

みんなで見とれた。山の上で地球が回るのを見ているという感じである。

前剣を過ぎると、雷鳥の親子が！ その先、カニの縦バイ横バイに着いた。前には九〇度近い岩肌、背面に絶景が広がる。死を身近に感じつつ、ガシガシ登っていく。五〇ほど上に進むと頂上だった。気分は爽快、三六〇度の展望は素晴らしく、富士山と日本海が遠くにかすんでいる。

帰りもまたすばらしく危ない岩を下っていく。そのスリルは下界には味わえないもの。それでも何だ何だというスピードでバキバキ下って、雪渓を越えて剣沢へ戻ってきた。ここには本格的なク

ライマーも多くて、いかにも強者が剣岳を眺めながらコーヒーをすすっていた。中には女性もいて、山を愛していらっしやる風貌だった。

さてここからまた雷鳥沢に向かって山を越える。重荷で気分は暗いのだが、ペースは速い。F森氏が「これは剣効果だ」といい、その名の元にドカドカと雷鳥沢に着いてしまった。

再び天幕を設営。実は残雪の中に、初日の西瓜を隠していた。一番心待ちにしていたのはY田先生で、自ら切り分け幸福そうだった。確かにうまかった。

夕食は夏の伝統で三年生が作ってくれた。炊き込みご飯はお世辞でなくうまかった。

七月二十三日 雷鳥沢↪一ノ越↪黒部平↪扇沢↪川越

寒かった。偶然隣に松高山岳部が居合わせた。まだ寝ていた。まずイチキンラーメンを食って霧の中を出発。一ノ越を越えて黒部平へ下る。

とにかく転びそうになっても、下って、下って、下った。降りると湿度が強く、蒸気で暑く、頭の上にはロープウェーが張られて登山者はそれを利用して登る。だからこの道はめったに人が通らない。前の者が木の枝を引っ掛けて後ろにピシピシ飛ばすし、ジャングルを歩くようなもの。山ギレだよ！

その後アルペンルートを辿って、黒部ダムを眺めて帰路へ着いた。

(一年 村松直裕)「わんだらあ」三十三号

二〇〇二年（平成十四年）

山行

冬山登山新人大会 安達太良山 二月十六日～十八日

春山山行 北八ヶ岳 三月二十四日～二十六日

登山競走大会 武甲山 四月二十一日

学校総合体育大会 甲武信岳 五月十一日～十三日

新入生歓迎山行 丹沢山 六月一日～二日

歩荷訓練山行 谷川岳 六月二十二日～二十三日

夏山合宿 北アルプス・燕岳～常念岳 七月二十三日～二十七日

北部地区新人大会 武尊山 十月六日～七日

十二月山行 鷹ノ巣山

〔部員〕 村松直裕 菊地隆太 大石憲孝 島村実

〔顧問〕 吉田立志 中村潔 関根修 島田俊一

二月の高体連雪上訓練は、夜行バスで安達太良山へ。積雪期山行の参加は任意で、生徒四人と顧問一人。ラッセルはワカン隊とスキー隊に分かれているが、多くはワカン隊で、参加総数は、男子約百人に女子二人と報告されている。初日は箕輪山中腹で雪洞、二日目は温泉宿、三日目下山という恒例のスケジュールになっている。部報もこの年辺りから、ワープロ原稿が増えてきた。

春山合宿が復活した。場所は北八ヶ岳。川越出発は朝で、諏訪側から入山して、その日に洪ノ湯から稜線を越えて白駒池幕営。二日目は縞枯山まで縦走して双子池。三日目に親湯へ下山している。

武甲山での登山競走は、高体連も協賛している大会だ。山道を走る「トレイル・ランニング」は、ブームになっている。影森の先の茶屋からスタート。一般の部は自衛隊も出場しているようで、高校の部参加は二十三人。トップタイムは山頂まで五〇分ほど。部員はこの大会に数人で参加したが、本校の大和田達寛が優勝。全国大会へも招待されたが、不参加だった。

年一回が恒例となった歩荷訓練は谷川岳だったが、巖剛新道をラクダのコブまで登って、雨天のため下山した。

夏合宿の北アルプスは燕岳から入山。一日目に大天荘まで。二日目は荒天のため常念小屋。ここで体調不良の部員は顧問と下山し、三日目は蝶ヶ岳から横尾。四日目に下山した。十月に武尊山で開催された北部地区新人大会は、学校間の交流会。前夜宝台樹キャンプ場で開会式と交歓会。翌日は雨のために武尊山中腹までの往復だった。十二月の鷹ノ巣山はアイゼントレーニングになった。

山行記録 武甲山登山競走大会

四月二十一日

告知はいつ頃だったろうか。二月の冬山山行の会議のときだったか。高体連主催の冬山は、参加校を集めて会議を行う。ある顧問が、

「えー実は私、四月に行われる武甲山登山競走大会の運営をしておりまして……」

会議の帰り、吉田先生の車の中で、

「これ、出てみようか？」

「先生と大和田君でワンツーですな」

吉田先生は、トライアスロンにでも挑戦してくださいなど言わんばかりのスポーツマンなのである。四月になって大和田君は即答、陸上部でも走っている。菊地も了承。そして部長村松も。

「梅君もでるよね？」

私も誘われた。もちろん吉田先生も。

当日西武秩父は雨だった。麓の茶屋で「最低五キロの荷物」の計量。アップで体をほぐしていた少年は、マラソンの常連らしい。

スタート十時。荷物を背負ってでこぼこ道を皆ダッシュして、視界から消えてしまった(自殺行為である)。歩くだけでも山に登れる。いつしか武甲の中腹で、追いつかれたのは冬山で同部屋になった狭山経済高校のMじゃないか。

「先輩、先行っちゃいますよ」

「お前もう、抜いてるやんけ」

すでに一時間を過ぎた。不思議と菊地に追いついた。ほとんど諦めて係員に、

「あと、どれくらいですかねえ？」

「もうすぐそこだよ」

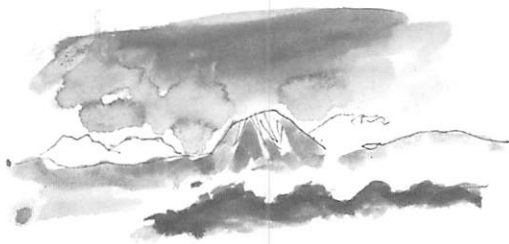
とたんに二人でダッシュ。頂上神社に突入した。

私は後ろから数えた方が早いぐらい。計量で七・六キロと言われたのは雨で重くなったのか。吉田先生、大和田君はすでに計量も終わってくつろいでいる。少しして部長の村松。全員がゴールした。雨だからそのまま下山して、スタート地点で表彰式になった。そこで意外なことに、大和田君が高校生の部(二十三人参加)で優勝。

「君の記録はちよつと例年よりも十分ぐらい遅いんだ。でも全国大会行ってみたくない？」

副賞に腕時計、シャツ、お米を貰ったが、高三の春である、辞退した。帰りは吉田先生の車で西武秩父まで送ってもらった。

一学期末の終業式。忘れた頃に大和田君は全校生徒の前で、表彰された。(三年 梅沢佑介)「わんだらあ」三十四号



二〇〇三年（平成十五年）

山行

冬山登山新人大会 黒姫山 二月

春山山行 蓼科山 三月二十五日～二十七日

学校総合体育大会予選会 西谷山

新入生歓迎山行 大菩薩嶺 五月三十一日～六月一日

歩荷訓練山行 乾徳山 六月二十二日～二十三日

夏山合宿 白馬岳～蓮華温泉 七月二十一日～二十四日

北部地区新人大会 白毛門 十月五日～六日

秋山山行 日光白根山 十一月八日～九日

日帰り山行 大岳山 十二月二十三日

〔部員〕 川原弘之 笠原薫 小竹宏明 木戸俊吾 杉田亘 諏訪部

孝紀 山田貴士

〔顧問〕 吉田立志 島田俊一 濱口政弘

春山山行は蓼科山で初日は山麓の天祥原。二日目登頂を目指す豪雪で途中敗退。夏山合宿の白馬岳は初日に白馬大雪溪の白馬尻。二日目に白馬岳へ。部報には普段の部活動も紹介されている。

一、歩荷……富士見櫓を二十^キほどのザックを背負い、十～二十周昇り降りする。

二、ランニング……伊佐沼まで往復。さらに伊佐沼を周回。他に十三^キコースもある。

三、サッカー……週に二、三回行う。

山の食事の紹介では、

焼肉丼……キムチや焼肉のタレと、牛肉・豚肉を合わせてご飯の上に乗せる。人気がある。

ビーフシチュー・スパ……スパゲティの上にビーフシチューを掛ける。カルボナーラは人気がある。

洋風雑炊……山岳部の一番人気。コンソメベースのお粥だが、食べやすく、気持ち悪くならない。ただコンソメを忘れてしまうと、病院食になってしまう。

炊き込みご飯……市販されているものを使う。簡単・美味しい。重くないの三拍子揃っている。

カレーライス……アウトドアの基本だが、これまであまり採用されなかった。

バーベキュー……上級生が新入生のために、山に登りに行くとは思えないような、多くの差し入れを持つてくる。

チーちく……ちくわの中にカマンベールチーズが入っている一品。今期から人気が上がり、魚肉ソーセージの人気を抜いている。

麻婆豆腐……これも市販品を利用するが、寒い場所には最適のメニュー。近頃は麻婆ナスを作ろうとの意見もある。

カルピス……厳しい条件にいる山岳部員にとって砂漠のオアシスのような飲み物。

二〇〇四年（平成十六年）

山行

冬山登山新人大会 安達太良・箕輪山 二月十三日～十六日

春山山行 北八ヶ岳 三月二十五日～二十七日

学校総合体育大会予選会 甲武信岳 五月十五日～十七日

学校総合体育大会一般 雲取山 五月十五日～十七日

新入生歓迎山行 両神山 五月二十九日～三十日

歩荷訓練山行 谷川岳 六月十九日～二十日

夏山合宿 北アルプス・穂高岳 七月二十三日～二十六日

北部地区新人大会 土合 十月三日～四日

クライミング大会 都内赤羽 十一月

秋山山行 金峰山 十一月二十日～二十一日

〔部員〕 西田拓郎 茂呂将典 柴田裕作 岩城久 川瀬俊介 田端

敦也 吉山和樹

〔顧問〕 吉田立志 菅崎俊幸 濱口政弘 森林憲史

春合宿の北八ヶ岳はここ数年の恒例で、渋ノ湯から白駒池幕営。

縮枯山を縦走して双子池幕営。翌日親湯へ下山している。

学校総体はA～Eの五コースに分かれ、予選会は厳しいAコース（甲武信岳）とされている。三峰口で午前中の開会式の後、ダム建

設で新設された大滝道路から中津川に沿った大山沢林道の奥でキャンプ。

翌日はタイムレースを兼ねて、十文字峠に規定時間までに到達しない場合には長野側へ下山させられる。川高は十校中五位。その日甲武信岳で幕営。翌日も二時起床で、雁坂峠を経て豆焼沢のトンネル道路へ走って下山した。関東大会への出場は、修学旅行と重なって放棄している。

一般の部は一年が中心になってDコース（雲取山）で参加した。三峰口から太陽寺の先東谷林道で幕営。翌日雲取山を往復して同泊。歩荷訓練は、この数年谷川岳で行われ、初日はマチガ沢合で幕営。ところが膝の故障者が出て、九人入部した一年でこの山行に参加したのは四人と少ない。巖剛新道から登頂し、天神平へ下山し、ロープウエーで土合へ。

夏合宿は、涸沢からの穂高～北穂高だった。川越を朝出発し、横尾で幕営。二日目は涸沢で幕営し、北穂高往復。三日目は穂高岳を往復して徳沢へ下山した。涸沢までは登ったものの、体調不良で稜線まで上がれない部員も二人いた。体調不良は残念だ。

他校との交流の新人大会は十月の土合で行われ、部員も増えて参加は十五人だった。雨天で山行計画はキャンセルされ、土合から一ノ倉沢出合まで歩いた。

秋山山行は、富士見平で幕営して、初日に瑞牆山往復、翌日に金峰山往復して下山した。

十一月に都内でクライミング大会が開催されて、四人が参加した。

二〇〇五年（平成十七年）

山行

- 冬山登山新人大会 黒姫山 二月十二日～十四日
 春山山行 北八ヶ岳 四月二日～四日
 学校総体予選会A・Bチーム 甲武信岳 五月十四日～十六日
 新入生歓迎山行 大菩薩嶺 五月二十八日～二十九日
 学校総体クライミング大会 エナジージム 六月
 歩荷訓練山行 丹沢山 六月十八日～十九日
 夏山合宿 南アルプス・北岳～農鳥岳 七月二十七日～三十日
 北部地区新人大会 武尊山 十月四日
 関東大会 御前山～三頭山 十一月十一日～十三日
 秋山山行 雲取山 十一月二十六日～二十七日
 日帰り山行 三ツ峠山 十二月十七日
 〔部員〕 片瀬圭祐 沢厚太郎 新見哲也 岩田哲 大塚学 楠井冬樹 野沢正人 日高優也 望月翔
 〔顧問〕 吉田立志 菅崎俊幸 濱口政弘 森林憲史

春山合宿は恒例の北八ヶ岳であるが、川越を早朝に出発して、初日に黒百合ヒュッテ幕営。二日目に白駒池幕営で、天狗岳、中山、高見石と登頂し春山を満喫した。学校総体予選も恒例で甲武信岳。

チーム四人で二チームが出場した。部活でもフリークライミングが盛んになってきた。学校近くにクライミング・ボードがあつて、平日にそこで練習。六月には学校総体の高校生クライミング大会も開催された。参加総数は八十人ほどで、川高からは四人。

高体連主催の登山は、年に四回開催されている。五月の学校総体に始まって、十月の北部地区新人大会は武尊山で行われ、前日に宝台樹で幕営し夕方参加校同士の交歓会。翌日に武尊山を登頂した。

十一月の関東大会は一都七県から五十八校、生徒二百四十八人、顧問六十九人が参加して行われた。一日目奥多摩の氷川小学校で開会式があり、その後バス移動して奥多摩湖対岸の施設「山のふるさと村」の広大なキャンプ場で幕営。

二日目はサブザックでバス移動して、奥多摩湖ダムサイトから御前山へ登頂。縦走を続け三頭山で登頂チェック。鞆口峠まで戻って幕営地へ下って二泊目。三日目は撤収と閉会式となっている。他校も含めて大勢でワイワイと登山している。



2005年7月 夏山合宿 北岳～農鳥岳
 北岳山頂にて はるか後方に富士山

さらに二月の雪上訓練が、年度最後の高体連の山行となる。

二〇〇六年（平成十八年）

山行

冬山新人大会 安達太良・箕輪山 二月十一日十三日

春山山行 北八ヶ岳 三月二十九日～三十日

新入生歓迎山行 鷹ノ巣山 五月七日

学校総体 秩父・白泰山 五月十三日～十五日

歩荷訓練 奥秩父・乾徳山 六月十七日～十八日

夏山山行 立山・室堂 七月二十六日～二十八日

北部地区新人大会 両神山 十月一日

秋山山行 雲取山 十一月二十五～二十六日

〔部員〕 森田敏行 加瀬雄大 北尾俊博

〔顧問〕 吉田立志 菅崎俊幸 濱口政弘 森林憲史

二月の冬山新人大会の安達太良・箕輪山は恒例である。参加は一、二年の九人と顧問が二人。前日さいたま新都心に集合して夜行バスで猪苗代町から箕輪スキー場下まで。スキー場を二時間登って、上部で雪洞を作って宿泊。二日目は箕輪山一七二八メートルへの登頂が予定されているが例年風雪で不能。下り方面に縦走して鬼面山一四八八メートルを通過して、稜線向こうの野地温泉旅館宿泊。三日目は再び雪山に入ってバスの待機しているスキー場下まで。

五月の学校総体は秩父・白泰山一七九三メートル。参加は顧問含めて四人。朝三峰口で各校点呼を取り、バスで秩父湖まで移動。そこからすぐ上の林道沿いの大黒山九九二メートルを半日縦走して、栃本のパーキングで幕営。二日目はそこから白泰山へ縦走し、さらに北へシヤクナゲ尾根を歩いて中津川林道脇のパーキングで幕営。ここで各校のしおり交換の交流会。最終日はバスに送られて下山した。アスファルト上での幕営は整地いらずで楽だったと書かれている。

夏山合宿は北ア・立山周辺だったが、この年は梅雨明けが八月にずれ込み、荒天の停滞のみで登頂はできなかった。朝川越を出発し、上越新幹線く北越急行ほくほく線を乗り継いで、午前中に富山着。その日のうちに室堂へ入った。計画では雷鳥沢周辺に三泊して、立山・剣岳から一ノ越を越えて黒部ダム方面に下山予定だったが、雷鳥沢で二泊の停滞をし、地獄谷を散策して下山している。



K.O

二〇〇七年（平成十九年）

山行

冬山山行 丹沢山 二月二十四日～二十五日

春山山行 大菩薩 三月二十七日～二十九日

学総体 秩父（白泰、両神、三峰）五月十二日～十四日

新入生歓迎山行 御前山 五月二十六日～二十七日

歩荷訓練 谷川岳 六月十六日～十七日

夏山合宿 穂高岳 七月二十三日～二十六日

南部北部地区新人大会 三峰、両神 八月二十四日～二十六日

秋山山行 瑞牆山～金峰山 十月六日～七日

冬山合宿 八ヶ岳・天狗岳 十二月二十四日～二十八日

〔部員〕 津森賢士郎 田子賢輔 柳下啓介 片岡恭士 斉藤恭平

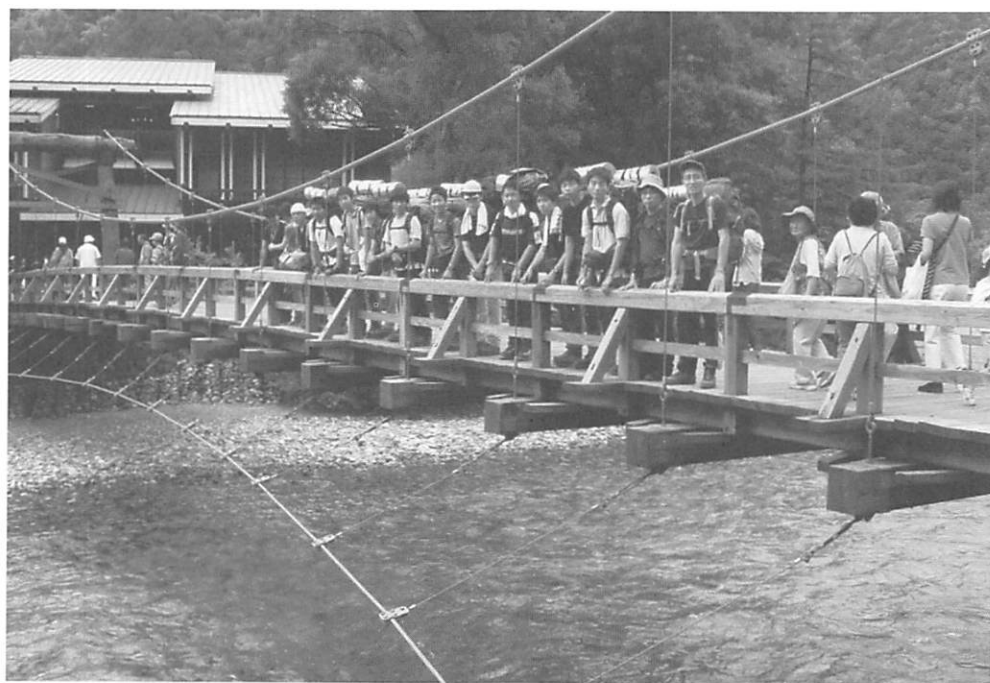
羽石直人 蔦森翔悟

〔顧問〕 吉田立志 岩本重彦 濱口政弘 森林憲史

二月の丹沢、三月の大菩薩はさほど積雪に苦勞する山ではない。それでも大菩薩では、

北側の登り道は日が当たらず、道が凍ったままだった。

歩荷訓練は、数年慣例となっている、巖剛新道から谷川岳。夏山合宿は、涸沢から北穂高、奥穂高へ登った。



2007年7月 夏山合宿 穂高岳 上高地河童橋にて

山行記録 南部北部地区新人大会 両神山

一日目 キャンプ

両神方面への山行は、入部してから三度目なのだ。それもすべて県の大会でいい加減に飽きる。しかも両神の山頂は二十人乗ったらあふれそうな狭い岩場で、毎回後ろがつかえるから山頂には短い時間しかられない。

電車で三峰口に行き、バスでキャンプ場へ。全校が揃ったところで開会式。テントを張ってビーフシチュースパゲティを作る。シチューを煮込んで掛けるだけだから、失敗の仕様もない。この日は全く歩いていなかったで疲れもなかった。テントでトランプをして寝た。

二日目 両神山

三時起き。ラーメンを食って四時半にバスで両神山の日向大谷に着いた。まず中継点の清滝小屋を目指す。二本弱で到着すると、二十分程してから登るよう言われた。おそらく一気に登ると、上が混むからであろう。

山頂の前には順番待ちの列ができていた。数校が山頂に行き、その一校が降りてきたら次が行くという風にして、代わりばんこに山頂を踏む。快晴とまではいかなかったが、それなりに周りの山を見渡せた。

しかしあんまりのんびり眺めるわけにも行かず、写真を撮りながらすぐに次の学校と入れ替わりで下山を始めた。日向大谷に戻り、バスでキャンプ場に戻った。

夕食は鳥そぼろ丼とフルーツポンチである。鳥そぼろは肉が腐らないようにあらかじめ作ってきたので温めるだけ。山はいまいちだったが、飯がうまかったのでよかった。この日もサブザックだったので、あまり疲れなく少し遊んでから寝た。

三日目 白泰山

今日も三時起床。テントを撤収デポして、登り始める。お清平から白泰山までもスムーズに行けた。そして山頂だということに着いたが、どう見ても登山道の途中の平地にしか見えない。木に囲まれて展望などまったくない。かなりガッカリした。そこで昼食を取り下山。

帰りは霧藻ヶ峰を回り戻った。サブザックだったし、森林浴だと思えばリフレッシュになったと思う。

閉会式の後には貸し切りバスで西武秩父に送ってもらい、帰路に着いた。

なんだか人がいっぱいいて疲れた。団体ではなくて少人数で行けば、また違った景色が見られたかもしれないと思う。

二年 葛森翔悟「わんだらあ」四十号

二〇〇八年（平成二十年）

記録 部報巻頭言

山行

冬山山行 棒ノ折山 二月二十三日

学総体 白泰山 五月十日～十二日

新歓・歩荷訓練 大菩薩嶺 六月十四日～十五日

夏山合宿 北アルプス・白馬岳 七月二十二日～二十五日

新人大会

秋山山行 ハケ岳・赤岳・硫黄岳 十月十一日～十二日

日帰り山行 三ツ峠 十二月二十日

〔部員〕 内田洋介 若海貴文

〔顧問〕 吉田立志 濱口政弘 高橋徹 川瀬博幸

夏休み期間中に、地元埼玉県で初のインターハイが開催された。山岳競技は小鹿野町を中心に八月六日から五日間、両神山で開催され、川高は大会への出場はなかったが、顧問吉田先生らは、競技役員として大会運営に当たった。また九月の国体（大分）の山岳競技では、フリークライミング種目が初めて採用された。

十年一昔、九十年大昔。記録整理をしていると、かつての大縦走の時代からフリークライミングへ、部活も大きく変化してきた。部報「わんだらあ」も、ほとんどのページが活字印刷になった。

山岳部とは不思議な部活である。

他の部活は、おそらくその部活でやることを本気でやりたくて入る人がほとんどだと思う。だが山岳部は違う。もちろん例外もいると思うが、山に登りたいと思って山岳部に入る者はいないであろう。

自分もその中の一人である。一昨年の春、この学校に何とか入学し、どの部活に入るか悩んでいた。運動部に入ろうと思っていたが、特にやりたいことも無かった。だから何となく山岳部に入った。仮入部もせず説明会にも出ないで、本当になんとなく入った。

考えるのはなぜ「山」に登るのかということだ。山を楽しむために行くというなら、自分の力で頂上に立つ——山に打ち勝つ。これが絶対条件なのではないかと思う。しかし面白さは頂上にはなく、かえって逆境の山の中腹にあるみたい言葉もあつた気がする。

重い荷物を持ち、何時間もかけて山に登り、頂上に立ち、雄大な景色を見て、息を切らせながら登ってきたことを思い返す。そのときの気持ちの高ぶりは山に登ったことのある人しか分からないだろう。

自分は一年の頃の山行を後悔している。毎日のトレーニングをもっと真面目にして、体力に余裕があれば、もっと山を楽しんでいたのになど。でもそんな山行でも、行ってよかったなと今では思える。一年の頃は毎回山行で苦しんだ。もうダメだと、何度思ったか分か

らない。

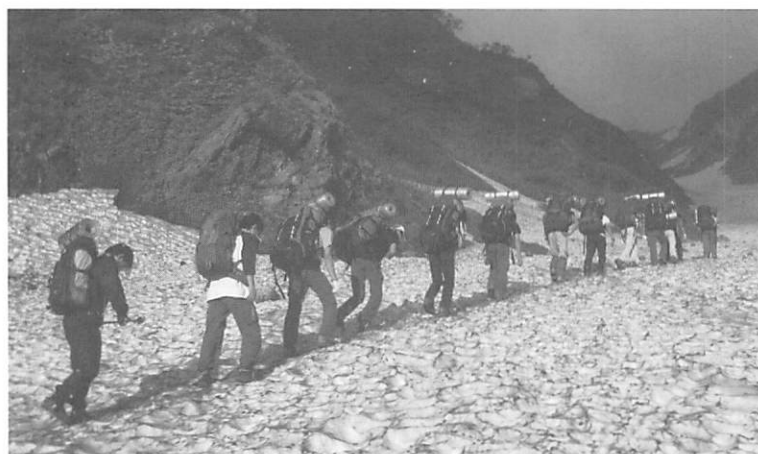
何故苦しんでこんな所を歩いているんだ？ と何度思ったか分からない。それでも足を動かす。まだ行けるといふ「根性」が大事だということをして、体で学んだ。そして頂上に立ったその瞬間は感動もなかった。この経験は一生忘れないと思う。

二〇〇八年八月（三年 津森賢士郎）「わんだらあ」四十号

随想 駄物

今年の夏合宿は北岳と白馬岳の決選投票の結果、僅差で白馬岳に決定した。一日目は白馬尻でテント泊、二日目大雪渓を登り山頂宿舎でテント泊、三日目は白馬大池を通り蓮華温泉でテント泊、四日目は蓮華温泉からバスで下山という楽なコースだったが、唯一心配だったのは大雪渓での落石である。当日は天気も安定して安全に大雪渓を通過し山頂までたどり着くことができた。しかし、八月の初旬に落石で女性が一名死亡し、下旬には大規模な崩落で二名が亡くなっている。心からご冥福をお祈りすると共に、安全登山の重要性を改めて感じた。

今回コースは非常にゆとりを持たせた。無理をすれば二泊三日でも可能なコースである。なぜか？理由は二つ。一つは顧問の体力、もう一つは駄物である。駄物とはOB（一つ上先輩）が夏合宿の初日、川越駅（今年は北朝霞）に持ってきてくれる差し入れのことである。スイカをはじめ登山に関係ある物ない物たくさんある。大変



2008年7月 夏山合宿 白馬岳 白馬大雪渓を登る

てもらいたい。

「差し入れは何もいらぬよ」なんてことは一言も言っていないよ。これからもより安全に登山ができるように問題点があれば、知恵を出し合い改善していきましょう。

（顧問 吉田立志）「わんだらあ」四十号

感謝しているが、これを三年生がもつために、共同装備は一、二年生に分配される。本来であれば、きつい夏合宿を成功させるために荷物の軽量化を図るところであるが、歩荷訓練合宿状態になっている。この駄物がコース設定で足を引く張っているのである。

駄物など物ともしない体力があれば問題ないが、なかなかそうもいかない。ぜひ三年生にはこの伝統を改善し

川高山岳部用語集から

見方 ◎ 川高山岳部を語る上で必要不可欠な語

○ 川高山岳部を語る上で必要な語

△ 川高山岳部を語る上で知っておきたい語

無印 あまり使われていない語

あ

悪魔の卵【あくまのたまご】↓西瓜すいか ○

麻雀【あさすずめ】数世代前の部員の間で大流行していた娯楽。

足が死ぬ【あしがしぬ】長時間の歩行で足が限界を突破すること。

アップであつぶあつぶ【あつぶであつぶあつぶ】ウォーミングアップだけで疲れてしまうこと。S先輩作の特許表現。△

あの先輩たち【あのせんぱいたち】主に今春卒業した第八十八代先輩たちのことを指す。体力・知力・態度ともに優秀だった。会った

ら必ず口撃してくるので皆恐れている。△

雨男【あめおとこ】雨を降らすと思われる男のこと。だれなのかはつきりしないが、一年生であることは確かである。◎

い

伊佐沼らん【いさぬまらん】伊佐沼までの往復を走るトレーニング。

全長約七キロメートル。◎

一本【いっぽん】山で一定の時間歩いて一定の時間休むサイクルのこと。川高山岳部では五十分歩いて十分休むのを一本としている。

本来は山人ヤマドが太いニンポーナイフを背負子の底部しよこに当てる。◎

ことを「一本立てる」といったが、これは川高の誤用的応用。◎

院政【いんせい】山岳部は部長の任期が一年の二月から一年間と、

他の部より早い。なので当代の部長が情けないと三年生が指示を出して部をまとめてしまう。△

interestingストーリー【いんたれすていんぐすとーりー】川高山岳

部一の話し手であるT子先輩の話。よくある抱腹絶叫の話や、たま

に炸裂する空気も凍るような話などを総称して言う。△

う

ういーつす【ういーつす】部長がザックダウンの号令を叫んだ後に

他の部員が吐く言葉。最近では疲れて言わない人もいる。部員より

先生の声のほうが大きいことも。○

え

エアリア【えありあ】登山道や小屋、コースタイムなどの情報が

詳しく載っている五万分の一地図。昭文社発行の国土地理院地形図

のまがいもので、コースリーダーにとつての競争相手。◎

エリート戦士【えりーとせんし】急に模試やテストの成績が良くな

ること。また、勉強に目覚めること。

お

温泉【おんせん】面倒くさい、一秒でも早く帰りたい、などの理由で入らない人も多いがOBにとっては山行の目的の一つらしい。○

か

会計係【かいけいがかり】山岳部のおよそ全ての金銭に関わる重要な役職。年度末には部費の値上げを目的に生徒会と交渉する。大抵失敗するのだが、昨年は一万円の増額を勝ち取った。◎

学総体【がくそうたい】毎年五月に行われる大会で学校総合体育大会の略。埼玉県高校体育連盟が主催し、予選に出れば希望次第で関東・全国大会までつながっている。例年川高山岳部は予選に出場しているが、関東大会と修学旅行の日程がかぶるため欠場している。数年前に例外的に出場したらしい。○

カルピス【かるびす】山行中の昼食時などに飲む飲料。山ではあまり味のある飲み物は飲めないが、カルピスのように凝縮されたものは軽いので重宝される。だが、マンゴー味のカルピスが採用された時はマンゴーを嫌う部員から反発を浴びた。○

き

気合【きあい】山を登る上で、ある意味体力よりも重要な能力。気合さえあれば山行はなんとかなる。◎

三原則【さんげんそく】OBが考え出したスローガン。「気合

で登り、気合で食い、気合で寝る」

雑撃ち【きじうち】草むらなどで排泄行動を取ること。山ではトイレがないので仕方がないといえれば仕方がないが控えるべきではある。なお、女子のこの種の行動は「花摘み」、さすが！

く

くっだらな本読んでるな【くっだらなほんよんでるな】読んでる本の中身が何であろうと、本を読んでる人を非難する言葉。Y田先生がK先輩に言い放った超名言。△
クライミング部【くらいみんぐぶ】一部の部員の理想郷。△

け

限界突破【げんかいとつぱ】足や腰の痛みが歩きすぎなどで逆に痛みを感じにくくなること。同時になぜかテンションも最高潮に達する。限界突破にも限界があり、そのときは体も心もボロボロになる。「足が死ぬ」、「無敵モード」とも。△

こ

伍留基【ごるご】五つ目のテント。今は倉庫という名の墓に眠っている。

さ

さかいや【さかいや】水道橋にある登山用品専門店。新入部員はこ

ここで登山道具をそろえるためお金を六桁ほど使う。帰り道は巨大なザックを背負って東京のど真ん中から帰るため、山岳部としての精神修行の洗礼を受ける。○

ザックダウン【ぞつくだうん】山行の休憩時に部長が叫ぶ言葉。これを言うまで部員はザックをおろしてはならない。

士【さむらい】十一個目のテントのこと。一番新しいだけあって奇麗で、防水性もピカイチ。今まで二番手だった十兵衛が骨折したため、今後さらに存在感を増すことが予想される。◎

山岳部【さんがくぶ】一応、山を目的とした運動部。今年の二年生で九十代目、最近、クライミング部と勘違いする人もいる。◎

く貝【くいん】(クライミング部だと勘違いして)誤って山岳部に入ってしまった人のこと。普段はランニング、歩荷、サッカー、ベしゃりなどで鍛錬をつんでいる。◎

山靴【さんぐつ】登山専用の靴。普通の靴に比べて重く、機動性に乏しい面はあるが、山の厳しい雨や、岩場でも足を痛めないほど頑丈である。◎

し

食事【しょくじ】山で作る食事。失敗しても食べきらなければならぬのだが、容易に成功品は出ない。◎

新入生歓迎登山【しんにゆうせいかんげいとざん】新入生を歓迎するための山行。二・三年生が団体装備を持つ。ここで一年生が山の洗礼を受ける。◎

す

西瓜【すいか】別名「悪魔の卵」。毎年夏山でOBが持ってきてくださる駄物の中でも最高最悪の物。食す前にはその重さに泣かされ、食した後はそのゴミに泣かされる。さらにゴミを持って下界に下りると虫が寄り、人が離れていく。○

スポド【すぽど】スポーツドリンクの略。山で休憩の際に出る。以用の粉に対して二割の水を使用するので味は薄い。

せ

セコセコ【せこせこ】超フィーリング系単語。主に「勉強する」など努力を伴う動詞の前につけられ、その動詞に何ともせせこましいニュアンスを持たせてしまう。努力できない人間のひがみでは決してない。T森先輩作で、二〇〇八年川高山岳部流行語大賞筆頭候補。Y下先輩はこの言葉で精神不安定となってしまった。◎

た

大会【たいかい】北部地区新人大会、冬山山行、学総体の三つ。埼玉県は、素晴らしいことに、あまり競技性を持たせず、みんな登山に登ることを一番にしているため、順位は出ない。△

妥協【だきょう】楽をするための口実として使われる。もはや山岳部とは切っても切り離せなくなってしまった言葉。◎
棚からボタがモチモチ【たなからぼたがもちもち】人の調子の程度

を表す言葉。かなり大きな程度を示すので、「調子に乗っている」とほぼ同義で使うこともある。「棚からぼたもち」とは何の関係もないが、その感嘆系として用いることもある。また、おいしいシチュエーションという意味もある。T子先輩作。去年は世紀の大流行となったが、ノーベル賞は逃した、のは残念な当然。○

駄物【だぶつ】本来は「行き帰りの電車の中などで便利だが山に全く関係のないもの」だったが、最近は主に「夏山にOBが持つてくるもの」という意味で知られる。例として西瓜、その他のフルーツ、書物など。◎

ダメ部員【だめぶいん】能力はあるが練習をサボるのが多い部員。能力が高すぎるとこれになりやすい傾向にある。△

て

テンション【てんしょん】リードクライミングをしていて、完登あるいは途中棄権したくなったときに登っている人が叫ぶ言葉。○

の嵐【てんしょんのあらし】落ちるのが怖くてテンションをテンションを連発する部員を見て、前顧問のM林先生が吐いた言葉。

テン場【てんば】テントを張らせてくれる所。テン場はピンからキリまでさまざまあり、高度が高くなるほどトイレが臭く汚くなる傾向にある。○

な

夏子【なつこ】七つ目のテントのこと。最近では、スクラップすべ

しとかわいそうな声もあがっている。

夏山【なつやま】毎年七月下旬に行く、三泊四日の川高山岳部最大の山行。例年アルプスに西瓜を背負っていく。◎

の

のびた【のびた】異様に早く寝る人のこと。また、所構わず寝る人。

は

廃人【はいじん】暇さえあれば常に漫画を読んでいる人。部屋にそれがあるため、毎年何人かがこれになってしまっていたのだが、今夏その元凶を肅正した。○

反省会【はんせいかい】山行の翌日、部員全員が集って行うもの。ここで出た反省が次の山行に生かされていく、はずなのだが、そうでないときの方が多い。◎

パンチ【ぱんち】八つ目のテント。夏子より後に買ったはずなのに、多くの点で彼女に劣る。やはり女は強くていい。○ ↓夏子

ひ

非常食【ひじょうしょく】山で非常時のための食料。個人で用意するので持つてくるのは人それぞれ。山の食事はいつも非常なので、結局食べなければならなくなる、気がする。○

ピストン【ぴすとん】山行の際に同じ道を登って降りてくること。全行程の一部分だけのことが多く、そのときはサブザック行動が普

通。↓縦走○

ふ

富士見櫓【ふじみやぐら】川越城物見櫓の跡地、ここで我々が歩荷訓練をしているので、ちょっとした観光名所にもなっている。△

へ

へたれ【へたれ】普段の訓練をまじめにこなし、日々鍛錬を欠かさないが、山に行くとあつという間にばててしまう人。ダメ部員とは異なる。△

ヘッドン【へっでん】日本製英語。ヘッドライトのこと。最近はLEDが主流。○

ほ

星【ほし】山では地上とは比較にならないほどよく見える。ただ、星座に疎い人は話についていけず、浮いてしまう。○

み

ミッキー【みつきー】山岳部の守り神。散弾銃で撃たれてインクの血を流している。捨ててしまえば良い話だが、踏み切れない。△

む

無敵モード【むてきモード】山行中、疲れや痛みを感じなくなる状

態。一定時間たつと消滅する。これの発動前後は死にかけの状態である。△

や

山ギレ【やまぎれ】山という特異な環境に長く続けることによつて、肉体的、精神的疲労で、原因不明の怒りが爆発すること。○

山の食事は基本的においしくない【やまのしょくじはきはほんてきに
おいしくない】かつてK瀬先輩が言い放った名言。ごく一部の部員
からあつく信仰されている。○

山は逃げない【やまはにげない】山岳部のモットー。悪天候やけが、
体調不良などで登頂できなかったときに使う。◎

ら

落【らく】落石を起こしたときに下の方に向かって叫ぶ言葉。人命
に関わるから大声で叫ぶ。◎

ろ

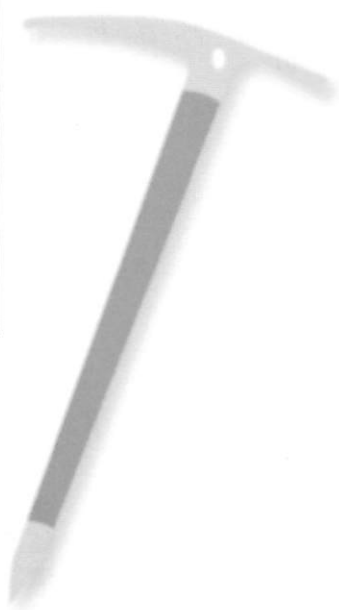
ロッキー【ろつきー】六つ目のテント。今は倉庫で静かに眠ってい
るが、もうじき追い出されそう。

わ

わんだらあ【わんだらあ】①漂泊者（名訳）、浮浪者（迷訳）。②こ
の冊子。◎

OB会合同山行の記録

—一九九一年（平成三年）～二〇〇八年（平成二十年）



OB会の誕生から合同山行へ

代表幹事 岩堀 弘明

母校富士見中学校のPTA会長を拝命していた昭和五十七年、金子勇二先生が教頭として赴任してこられた。先生は川越高校山岳部の先輩で、海外を含め、たくさん登山歴を持っておられた。しかも現在でも山を歩かれるとのこと。先生から山の話伺っていると、山への郷愁が抑えられなくなった。そこで最初はPTA役員と、その後はだれ彼となく誘って、谷川岳、大菩薩峠などに先生と一緒にした。先生との山は楽しかった。毅然とした先輩の姿に敬愛の念を抱き、多くのことを学んだ。

そのころのことだ。長島威君の仲間は、高野七郎君を中心として山岳部OBがまとまっているという。若き日の山が未だに忘れられない彼らは、山の話で、みんな親しくしている。必然的に、一緒にあってOB会をつくろう、となった。

平成四年、川高山岳部OB会初めての親睦山行には、金子先輩に率いられて、浅間隠山に十七人が登った。翌年は日光白根山に、平成六年からは春と秋、年二回になった。こうした山登りを重ねる一方、今は亡き澤田敏夫君の尽力により、高校三回から二十回卒までの山岳部OBの名簿が出来上がった。その後三十回までは鷹背勝之君が補充してくれた。彼は川高山岳部員だったときの顧問松崎中正

先生が山のご本を上梓されたとき、先生の息がかかった部員で出版祝賀会を催そうと、OB名簿を整備したのだそうだ。

平成八年十一月二十三日、OB七十三人、顧問OB二人の参加を得て、川越プリンスホテルで盛大に山岳部OB会設立総会を催した。このとき、旧知の浅海弥一郎さんが昭和五年川中卒の先輩であり、登山部員として富士山や北アルプスにまで行かれていることを知らされた。お話により、川中登山部顧問の先生方が生徒に山の素晴らしさ、奥深さを教える気概を持っておられたことが分かった。

私の後の年代の山岳部を指導された松崎中正先生とは、やはりこのときお近づきになれた。登山家として私たちの大先輩に当たる方だった。もちろん松崎先生は、現在も盛んに山に登られ、OB会にも積極的に参加くださっている。私たちは知らず知らずのうちに先生によって山にいざなわれ、山の世界に啓発されてきた。OB会の内容の充実は先生に負うところが大きい。

OB会は、ベテラン高野君、若手の宇都野、加島君らの幹事団で運営されている。年わずか二回の山行ながら着実に実施されていることは、三君の並々ならぬ努力のためものである。新年会などにはもちろん、合同山行の多くにも、幹事連の下見があることを記しておきたい。

以下に展開する楽しい紀行をご覧ください。今後ともぜひ、OB各位のお力添えを頂けるようお願いする次第です。

二〇〇八年十二月

山への誘い

金子勇二

川高山岳部OB会が、横ばかりでなく縦にもつながり四年目を迎えるようとしている。そして第五回目の山行が今計画されている。

今回も一層多くの参加が期待される場所である。

本会の年毎の充実、会の設立から始まって、意欲的な八期の岩堀氏を中心として、十三期・長島、十四期・澤田氏等の多大な努力によるものであって、誠に感謝にたえないことである。

今、中高年の登山ブームが続いている。この年代の登山では、自然を楽しみ自然の気になれる余裕と、自分の意志で、その気力と体力を測りながら、その手応えを確かめる余裕があることが望ましい。これが実現することになれば誠に素晴らしい事だと思う。

しかし、この数年間における登山事故のうちの七〇％は、中高年の人が占めているという。

かつて自信のあった諸氏にあっても、気力と体力とのバランスをうまくコントロールして余裕ある楽しい山行を実現したいものである。



県立川越高校山岳部OB会 2009年新年会 川越「幸すし」にて

第1回 浅間隠山 一七五七 亀沢温泉

一九九二年九月二十日(日) 晴れ

参加者 金子勇二、可児一男、藤野文夫、和田喜一郎、岩堀弘明、神田裕、櫛笥亮介、川上康夫、岩崎清彦、小久保哲夫、肥沼孝至、関口洋介、澤田英教、長島威、沢田敏夫、高野七郎



1992年 浅間隠山

あつ、明日^{あした}が山

だ！ 参加すると
うっかり言っちゃ
ったけど、何も装
備もないし支度も
してないし、どう
したらいいんだ。
「えっ、町内会
の人が来たって？
ハイ、すぐ行きま
すヨ」(今晚も飲
み会かな)

「リリリリン、
リリリリン、リリ
リリン」

「ハイ、長島デス。(今日ハナンダツケ?) エッ、エッ、イマ何時
デスカ? 六時五分! ミンナ集マッテルノデスカ? ハイ、ハイ、
イマステ行キマス」

「えー、やっと皆集まったようだし、十五分遅れで出発します。
アルコールの匂いのするのが約一名いるようだが。途中でコンビニ
に寄ります。何も用意してない人は、オニギリでも何でも買ってく
ださい」

ジロリと幹事の人、今日の先達の金子サンという人らしい。後で
聞いたところによると、この方は富士見中の校長先生、日大山岳部
出身、マナスル第二次登山隊のころ日本山岳会員でもあったとても
偉い人なんだそうだ。

でも私にとっては、すぐ上の澤田先輩のほうがよくぞ恐ろしい。
同じ先輩でも、先に卒業された人はただの先輩だ。それでも考えな
いと、おっかなくなつてだれとも一緒になんか歩けないよ。

「金子先生、この花は何ですか?」「ハイ、分かりました」「じゃ
あこの花は?」「アッそうか、さっき聞いた花だっけ、どうもどうも」
先生はすごい。花は何回目だつて、すぐ教えてくださる。でも、私
は先生が間違ふかと思つて試しているわけじゃないよ。

「ハイ、頂上です」 浅間隠は浅間山の絶好の見物席というわけだ。
けど、あいにくと曇っているから浅間のすそしか見えない。

昼食、コンビニオニギリ万歳!

もう下山して、亀沢温泉クアハウスへ。ここは倉淵村営の村おこ
しハウスで、ヘルスセンターみたいなちよつと俗っぽい所。しかし

湯はいいんで、山じゃあんなにへこたれてた皆さん、このあたりから少し元気が始始めて、帰りのバスの中では大変にぎやかになり、打ち上げの川越、籠屋ではすっかり打ち解けてしまった。

私も今朝はどうなることかと心配したが、終わってみれば「まだまだ歩けるな」。よって次回を楽しみにしたいと思います（と、急に態度が大きくなったのはうれしい）。（長島 威）

第2回 日光白根山

二五七八日 加羅倉温泉

一九九三年九月十九日（日） 快晴

参加者 和田喜一郎、藤野文夫、岩崎清彦、肥沼孝至、関口洋介、沢田英教、星野光伸、長島威、石井秀世、高野七郎、古島照夫、染谷明、澤田敏夫

今回も山は金子先生の選定でしたが、残念なことにご本尊は都合で参加されませんでした。絶好の山日和、九時過ぎには金精トンネル駐車場に着きました。アプローチなしのいきなりの急登に、峠まで一気には登れない人もいました。

金精峠で湯ノ湖や男体山の眺めを楽しんでいる最中、男の神様にあやかるといってお参りしている大まじめな人もいました。休憩の後、金精山から五色山へ。尾根道を中心とした、わりと見晴らしい登り。薄雲も少し出たりしましたが、穏やかな晴天が続き、とても暖かい日和でした。バテ気味の人もいましたが、きつとさつき神様に

お参りしなかった人に違いありません。

眼下のさざ波の五色沼、向こうのどっしりした奥白根、東の男体山をはじめ、日光連山がみんな自分のものになったような気分です。紅葉には少し早く、弥陀ヶ池でやっと紅葉を見つけました。菅沼へ回ってもらったバスに三時四〇分ごろ、全員無事到着しました。帰りは白根・加羅倉温泉で汗を流し、バスの中で乾杯！ 九時ごろに川越に着き、またお酒とおそばで夕食。（高野七郎）

第3回 三国山

一六三六日 法師温泉

一九九四年五月十五日（日） 雨

参加者十人

雨天決行、国道17号三国トンネル手前登山口から入る。雨もさほどのこともなく静かな林に分け入る感じだったが、いざ峠に出ると、視界三割のガスに加えて、すごい風と横殴りの雨。突風に飛ばされそうだ。

ダメダメダメ！ だれの年を考えても即下山は当然、そのために、二ヶ月前にちゃんと下見しておいた旧道があるではないか。

残雪は跡形もなく消え失せて、薄緑色に化粧したブナ林に包まれた道。野鳥が飛びかう中に身を置くと、しばし詩人になった心境だ。が、だれにも詩がすぐできるわけではない。去り難い気持ちを振り切って歩くうち、小さな沢を越す。忘れていた谷川の水の味だ。大



1994年 三国山

名や旅人がお、か、こ
で峠を越えたと
き、この清水を手
ですくって飲んだ
という往時がしの
ばれる。

いつしか雨もや
み、モヤに包まれ
た中を歩く。一〇
〇〇mもの高い山
中に、広い往還が
現れる。不思議な
空間だ。この旧道
は、遠くは信玄の
駒返しの湯とか、
近くは戊辰戦争の
古戦場跡とかがあ

って、昔から重要な街道であったことがうかがえる。その古戦場の
大般若塚からが、四〇分の急な下り坂だが、この辺りのブナやヒメ
シヤラの原生林は見事である。

ひざが笑い出したころ、バスが回ってきていた17号国道に降り立
った。後はいつもの通り温泉へまっしぐら。法師の湯も下見済み。

極楽、極楽。

(岩堀弘明)

第4回 鼻曲山

一六五五m 霧積温泉

一九九四年十一月二十日(日) 小雨のち晴れ

参加者 川口泰、岩堀弘明、関口洋介、金井毅夫、澤田敏夫、長
島威

参加者わずかで、ちと寂しい。岩堀先輩の用意してくれた九人乗
り四駆を長島先輩が小雨の中を運転。ちよつと怖いのは先輩だから
だけではない。軽井沢バイパスで道を間違えたが、霧積温泉には予
定通り到着。ここで川口先輩が合流、やつと六人の大部隊となる。
先輩、遠くからご苦労様です。

金湯館に車を置き出発。雨も上がり、一同の日ごろの行いの証明
となる。快調に登った熊笹の中は、行き合う人もなく、挨拶の煩わ
しさもないが、ちよつとがっかり。勇姿を見せたい色気もあるのだ。
急登は十六曲峠と鼻曲山の直下だけ。山頂で和気あいあいの昼食。
長島先輩の用意してくれた水割りは甘露。同じ道を引き返して、金
湯館でいつものように風呂に入つて、いつものように酒盛り、私は
運転があるから茶盛りで、バスで来られなかったことを悔いた。も
つと大勢参加しろ！

金湯館から走り始めて一〇分、みんな白河夜船の高イビキ、悔し
紛れに急ブレーキかけてみたが一同やつぱり人事不省、なおさら悔
しくなる。その上、関越道合流点から渋滞が始まり、東松山インタ
ー手前でとうとう動けなくなる。仕方なくここから一般道路へ。午

後七時いつもの場所に到着、皆を起こし再会を確認し合ひ解散。拙者はハンドル係の貧乏くじを痛感した。
(澤田敏夫)

第5回 両神山

一七二三頁 両神温泉

一九九五年五月十三日(土)

高校を卒業して四十年近くたって、山岳部OB会から初めて山行のご案内をいただきました。深田久弥氏の日本百名山の一つということでしたから、年甲斐もなく初参加を決意しました。そのころの中高年の登山ブームが、この時とばかりに心を弾ませてくれ、息子の使ったリュックサックにスーパーマーケットで買った果物や非常食などを大量に詰め込んで、準備万端整えました。

当日は地元の古島さんのフランス製の車に乗せてもらって川越の集合場所に向かい、仕立てられたバスに乗り換えて日高市を経由して国道299号を一路西進しました。秩父には「秩父連峰共和国」という自然愛好家たちの集まりがあり、私も参加しましたが、それを機関紙の題名にしたのは彩の国づくりにも通じると感じてました。埼玉県には甲武信岳、雲取山などの県境をまたぐ百名山がありますが、両神山は古くから信仰の山として開かれ、近隣の人々にがめられてきた名山です。

小森川の白井差小屋しらいざすに到着して支度を整え登り始めたところ、大手旅行社のツアーで中高年のグループでにぎわい、数珠つなぎの様相を呈してペースが乱れました。やがて、一位ガタワの鞍部にたど

り着いて一本立ててから、ぬかるみの道を登り両神社にお参りした直後に疲労を感じ、頂上を目指すのをあきらめました。リュックの重荷に耐えかねたのでした。

雨上がりで、ヤシオツツジがうなだれながらも赤紫の花がきれいに咲いていたのが印象的で、下界を眺めながら、同行の方と昼食をとり、体力の回復に努めました。

間もなく、一七二三頁の頂上を極めた人たちが戻ると、長島さんらに「フルーツの缶詰がおいしい」と言われ、登頂隊の成功に少しでも役立てたかと安どしました。下りは、荷が軽くなったのに、登りより疲れ、昇竜ノ滝まで出迎えてくれた先輩の川口さんから「今日は君の雅号の楽山に反して苦山だったね」と冷やかされました。帰りは両神村の薬師の湯で汗を流し、多くの方々のおかげで無事に帰れたことを今でも感謝しています。

ほろほると 山吹散るや 滝の音 芭蕉の心 改めて知り

(木村良次)

第6回 上田太郎山

一一六四頁 東部温泉

一九九五年十一月三日(祝) 快晴

参加者 川口泰、岩堀弘明、川上康夫、岩崎清彦、長島威、石井秀世、古島照夫、柴谷明、高野七郎

OB会山行も、昨年から公式に春秋の年二回となったが、いまだ

秋の参加者は春に比べて少ない。今回も九人しか集まらず、結局、乗用車二台に分乗となった。

太郎山は奥日光の方が有名だが、あちらは「たろうさん」で、こちらは「たろうやま」という。標高も二二六七メートルに対し一一六四メートルと丘のような山だが、上田市を眼下に見下ろす眺めはきつと素晴らしいだろうと想像した。

佐久インターで降り、広域農道を走って上田市山口にあるリング園に車を置かせてもらい勇躍出発。ここは今や上信越自動車道の工事真っ盛りで、太郎山を貫くトンネルの工事現場の辺りを回り道して、登山口の道標を見つけて山道に入る。尾根コースは最初から急な階段で、樹林帯を行くためほとんど眺めは利かないが、今を盛りの紅葉と一丁目ごとに置かれているらしい小さな石灯籠に慰められ、高度もぐんぐん稼げて気持ちがいい。

所々で互いに写真を撮ったり撮られたり、やがて太郎山神社の赤い鳥居が現れる。社殿を通過し五分ほど登ると難なく頂上に到達。広い芝の山頂には数組のパーティーが先着している。上田市のシンボリックな市民の山で、毎日登ってくる人もいるらしい。

見晴らし抜群。眼下の上田市街とキラキラと光りながら悠然と流れる千曲川、そして遠くのまろやかに盛り上がった蓼科と平らな美ヶ原、それにぎざぎざ八ヶ岳、さらには秩父、南アルプス、東は根子岳、四阿山、湯ノ丸、そして西にはすっかり冠雪した北アルプスの山々、と想像した通り三六〇度以上！の眺望である。

ここで昼食となったが、わざわざアルコールまで運び上げられた

方（敬語使用）のご相伴にあずかり、しばしの至福の時を過ごしたのち、林道コースを一気に駆け下りてしまおう。

全体で四時間半ばかりの行程であった。舗装道路に出てからは、工事車両が頻繁に通る道をリング園まで行き、園主のリングの育て方に感心したり、みやげのリングなどを選んだりした。東部町の温泉施設「遊楽里館」に立ち寄り、疲れを癒やした。

川越に着いても、まだ疲れの取れない六人は「幸すし」のこもになって打ち上げを行い、天候の特異日を祝った。

（岩崎清彦）

第7回 吾妻耶山

一三三三三 川古温泉

一九九六年六月五日（水）

参加者 川口泰、岩堀弘明、川上康夫、長島威、高野七郎、磯田久男

いつも土、日ばかりでは商店や仕事の都合で参加できない人もいるのではないか。今回は初の試みで、平日とした。しかし参加人数は芳しくない。やはり土日でなくてはだめか。

川越を六時に出発して、月夜野から仏岩トンネルの小さな駐車場に九時前に着いた。赤谷越かかやこまで三十分、尾根道は今までの黒木の林と打って変わって、新緑みずみずしい山道のアップダウン。フィトンチッドが体中に染み込んでゆくの分かりそう。これだから山はやめられない。今ごろ家で寝転がったり、会社でこき使われている人

は気の毒になる。

仏岩はどうしてこんなに仏様にそっくりになったのか。見方によって仏頭のように、また後ろ向きの大仏様みたいに見える。時間はたんまりあるので鎖やロープで仏様の胸元あたりで一時間も楽しませていただいた。おつむのてっぺんまで登っては恐れ多い。それは実際難しいクライミングなのだ。高崎の観音様は体内に入るが、仏岩は外を這う。標高はこちらの方が高いぞ。

何とも見事な新緑の中をいい気持ちで進む。途中のシャクナゲやミツバツツジはもう名残だけだが、スマレの花が多い。頂上近くの窪地には残雪もあった。この辺りは二重山稜になっていて、道標もなんだか複雑で何度来てもすつきりしない。

何かの気配に目をやると、何とカモシカがいた。赤谷川の谷間はまだ彼が暮らせる環境がある。そういえば、夏のこの尾根には、雨の日にはヒルがいる。私は思いがけなく出会ったことがあるが、カモシカ君と違って決して歓迎したい相手ではない。でもヒルも自然の豊かな証拠だろう。

吾妻耶山頂には十一時四十分に着いた。ちょっとした広場には大きな石祠が三基祭られて神社の境内のよう。この祠をどうやってここにすえたのか。信じる人の心に圧倒される。

昼食を挟んで二時間くらいいて、ゆっくりした。下界は霞むほどの無風快晴の上天気。谷川連峰がくつきり見える。あの残雪の稜線を今ごろ歩いていたらさぞかしと思う。

順調に下山して、OB会いつものパターンの温泉と食事。川古温

泉の露天風呂は新緑の中で、川のせせらぎを聞きながらうっとり。一時間近くも。次は湯宿ゆじやくに移動して「やまいち屋」のソバ。

OB会の平日山行は今回限りとせざるを得ないと納得したが、今後の参考になった。(高野七郎)

第8回 東麓ノ登山 一二二七が 高峰温泉

一九九七年六月七日(土) 晴れ

参加者 松崎、川口、八木、可児、奥村、岩堀、川上、藤野、神田、岩崎、木村、千野、金井、長島、染谷、古島、澤田、加島、黒沢、中川

「コース」川越(6・05) 〓 高峰高原(9..15 〓 30) 〓 水ノ登(10..25 〓 35) 〓 東麓ノ登1等△(11..30 〓 12..20 〓 13..25) 〓 西麓ノ登(12..45 〓 13..00) 〓 池ノ平駐車場(14..00 〓 05 〓 50) U池ノ平湿原 〓 高峰高原ホテル(15..10 〓 16..00) 〓 小諸のソバ屋(アルコール効果、時間失念) 〓 川越(20..30)

昨年の拙著上梓がきっかけで、大勢の川高山岳部OBと知り合った。いまだに山が忘れられない人たちが中心となって年に二回の懇親山行をやっているという。それじゃあなつかしい面々にしばらくぶりで会えると、早速仲間入りしたというわけ。

ところがマイクロに乗り込んだら、ほとんどがオールドOBばかり。私と「同じ釜の飯を食った」連中は一人もいないじゃないか。



1997年 東麓ノ登山

拍子抜けしてしまったが、つらつらおもんみるに、彼らはいま職場の中堅で、山登りなんかいうつつ抜かしてる場合じゃないんだろう。でも、もし彼らが「ゴルフだ、麻雀だ」と騒いでいるんだったら許

しがたい。そんな暇があるんなら、山に出て来いってんだ！

一行の中に一人だけ女の子がいたのにヤタマゲた。はて、川高山岳部にはメツチエンはいなかったはずだが。女性、それも美人とくれば、拙者に文句なんぞあるはずないが、なるべく鼻の下が長くならぬように気をつけてた。後で分かったんだが、結婚したばかりの木村さんが、新妻ひとり家に置いてくるのがもったいないんで山に連れてきちゃったんだそう。私みたいに山の神さまから離れたたくって山に来てるのとはドエライ違いだ。だが、歴史は繰り返すというではないか。いまに見ておれ。どう見ても一心同体と拝見するこのカップルの年齢は、締めてちょうどOBとおなじくらいになるんだから、あんまりヤカないことにしよう。

老いてなお山を恋うOBの心意気を天がよしみ給うたか、梅雨に入ったというに上天気だ。それなのに、この青空を恨んでる御仁ごじんがいたとはね。リーダーの岩堀さんが、自慢のゴアの雨具を、まだ一度も使ってないところぼす。「ご持参、今後もお忘れなくね」とは、さすがにだれも口に出さない。

高峰高原は新緑の真つただ中。まずは記念撮影。自分の顔は見えないから、みんなすましたものだ。水ノ登への尾根は砂礫、岩、低木と、変化に富んだ登り。先頭を行く幹事「幸すし」さんは、どん尻の老いばれなんか構わずにどんどん行っちゃまう。カラマツの初々しい緑の針、シヤクナゲの紅のほころび、はるかな北アルプスの山並み。そよ吹く風がカッコウの眠たそうな声を運んでくる。足元のイワカガミ、ツガザクラに交じる白い花はウメハタザオか。

水ノ登から籠ノ登への稜線の、北側は風衝の林、南側は断崖で、いかにも高山。ザレた斜面にモカシカ君を発見した一同は子どもみたいに歓声を上げる。私はこのいわゆる「七千尺コース」をスキーでたどった若かりしころを思い出して、腰半抜けの今、独りなつかしんでいた。

やつと東麓ノ登のゴロタ石の頂上に出た。とつくに息切れしてたので、ホツとした。川高山岳部は、OBになるとナンデエこんな足が速くなるんだらう。さんざん悩んでいたのだが、頂上でのびていたらパツとひらめいた。

「そうか、あのキスリングの重圧を卒業したからだ！」

西麓ノ登へは元気な者だけが行く。私も、決して元氣じゃないが、年寄りの冷や水といこう。両峰の鞍部は、ガンコウラン、ミネズオウ、クロマメノキの緑のカーペットが敷かれたロックガーデン。こんな別天地がほんの一足の所にあつたとはね。

東麓ノ登からは、カラマツ林を急降下。一面のマイヅルソウの中に、シロバナノエンレイソウが花盛りだった。がやがや登ってくるおばちゃんたちの中に、この花みために楚々としたマドンナの親戚が一人ぐらいいないもんかとキョロキョロしていたら、道に張り出した木の根っこにけつまずいた。

駐車場から往復した池ノ平湿原は、ササ原に変わりつつあつて、期待外れのくたびれもうけ。レンゲツジのつぼみはまだ堅かった。

このまま真つすぐ帰るとは川高山岳部OB会の良心が断じて許さぬ。高峰高原ホテルの湯上がりは、佐久平野の眺めをつまみにした

ビールが空きつ腹に染みた。小諸の町に下ると、今度はソバ屋に上がり込んで、窓いっぱい展開する浅間連山の肴でまたビール。今日費やしたエネルギーを取り返したうえに、たんまりお釣りが頂けた。

OBが山で足が速くなる理由はまだあつた。一刻も早く温泉でりん君なんか会いたかつたんだね。それに、今日は特別参加の若い奥さんを意識したのは私だけじゃなかつたんだと気が付いたじゃん。

(松崎中正)

第9回 黒斑山

二四〇四号 高峰温泉

一九九七年十月二十五日(土) 晴れ

参加者 松崎、川口、奥村、和田、岩堀、岩崎、長島、星野、染谷、高野、黒沢、加島、宇都野、三瓶

「コース」川越(6:15) ≡ 車坂峠(9:10 ≡ 9:30) | 尾根通し | 避難小屋(10:55) | 黒斑山(11:45 ≡ 12:55) | 沢沿い・中通り | 車坂峠(14:10 ≡ 15:30) ≡ 小諸(16:30 ≡ 18:30) ≡ 川越(21:00)

車坂峠の上り口に高原野菜直売所の掘つ立て小屋がある。ここにあいそいいおばさんの得意先は、わが川高山岳部OB会のおじさんとみた。帰りに売り切れご免では困る。まずおおざっぱに注文しておいて先を急ぐ。

山行の目的とするところは、山登りと野菜の買い出しとどっちなのか、なんだかあやしい光景だ。

峠の温泉も大事なお目当てだから、ないがしろに出来ない。湯上がりのビールが自販機で品薄になつてはタイヘンと、幹事長は気をもんでいる。

総勢十四人とは前回より不景気だが、帰りはバスの腹に野菜がいっぱい詰まるからそんなことは計算済みか。風花の飛ぶ中を登り出す。峠のカラマツは秋の真つ盛りで、金の針が背中に入った日にはチクチクたまらん。メンバーの年齢の開きは四十歳以上というのと、「じゃあおれは最年長だ」

と、のたもう松崎顧問は威張っているのか、悲しんでいるのか。どっちにしても年は取り返しはつかないことだ。

湯の平の上にデーンと浅間山を見上げるピークからいったん下つて急に登り返すと、ヘンナ名前のトミーの頭。ここで蛇骨岳まで行く者と黒斑くろくまでもうご馳走様のお方と二手に分かれて、若い連中は先行する。

シーズンの土曜とあつて黒斑の頂上は人の山。今日だけは、黒斑の標高は確実に二倍高くなつてはいるはず。蛇骨方面は通行止めの札が下がっているが、そんなことは無視されて、そっちも昼食中の有象無象であふれ返っている。

浅間本峰が次第にはつきり見えてきて、前掛山の向こうの火口から噴煙が上がってゆくのが雄大だ。やっぱり浅間は生きてるんだ。前掛を左にトラバースして登ってゆく人がアリのようだ。眼下の湯

の平の奥に円い小さな池が二つ光っている。

峠の温泉には、皆さんご満悦の様子。こんな高いところに温泉とは。下の高峰温泉からくみ上げているのなら、標高差は三〇〇メートルははずだ。

バスは野菜満タンで一路川越へなんて、そりゃあ味気ない。まず小諸のそば屋へ。峠のビールと下界のとどっちがうまいか、飲み比べ。なんだかんだと盛り上がった。

ちなみに、直売所のおばさんの正札は、うずら豆一袋、下仁田ネギ一束、白菜二つ、大根三本、とろろいものムカゴ、リンゴなどなど、なんでも一〇〇円ずつ。ロハみたいなものだ。これから合同山行は、いつも車坂にキマリつと！ だけど、今度来たときには店はつぶれちゃってるかもネ。
(加島篤人)

第10回 飯縄山

一九一七 戸隠高原

一九九八年五月三十日(土)曇り

参加者 松崎、川口、岩堀、川上、岩崎、金井、石井、長島、染谷、高野、田村、遠藤、磯田、黒沢、石井、宇都野(不参加)加島、真下

【コース】 川越(6:05) ≡ 信濃町IC(9:00) ≡ 中社(9:30

〜9:35) | 飯縄山西登山口(9:55) | 萱ノ宮(10:30〜10:

35) | 南登山道分岐(11:40〜11:45) | 飯縄神社(12:00〜12:

05) | 飯縄山(12:15〜13:30) | 瑠璃山リフト上駅(14:20〜

14：30）―戸隠高原ホテル（15：15～17：45）―信濃町IC（18：10）〓川越（21：20）

OB会のあることは前から知っていた。しかし山に登らなくなつて十年以上経つし、上の世代のOBが多そうなので、何となく気兼ねしていた。しかし前年秋の山行案内に、結婚するので不参加と返信したところ、立派な祝電をいただいた。そのお礼のためもあつて、初めて参加したわけだ。

朝早く集合場所へ着くと、予想通り顔も知らないOBばかり。やっぱりちよつぱり不安を覚えたが、同期の小久江の顔が見えたときほつとした。バスの中の自己紹介で、自分が参加者最年少であることを知る。さらに自分の父親と同年齢のOBが参加していることに驚いた。

何回目かのあくびが終わると、バスは登山口に到着した。みんな思い思いのペースで登り始める。休憩も昼食も好き勝手である。川高山岳部はこんなに自由だったつけ？ なんといい加減なんだ！

久しぶりののんきな山登りに戸惑いながらも、何とかペースをつかんで登っていった。

高校時代からの悪い癖で、周りの景色や草花など見ないのは相変わらずだ。じゃ、何見てるかかって？ 山にや美人がいるわけなし、結局おれのワイフが一番なんて思っている、いつの間にやら頂上に着いていた。

それでもやっぱり山はいいなあと素直に思えた。下りはさすがに

顔も心も、ひざと同じように笑いながらも、目的地のヒュッテに三番目くらいに到着した。まだまだ体力は落ちてないなと思つたが、同時に、果たしてこれから先、同行したOB諸先輩と同じように山に登れるとはとても思えなかった。

それくらい皆さん達者だった。一風呂浴びたあと宴会が始まる。これがとても楽しかった。世代は違えど、やはり元川高生。しかも同じ山岳部である。いつの時代も考えることは同じだなと思ひながら先輩方の話を聞いた。

そして集合時の不安はどこへやら、次の山行も参加するだろうなとほんやりと思つていた気持ちは、帰りのバスの中の引き続く宴会を経て確信へと変わったのである。今度はあくびは出ないどころか、目的地が遠い意味がよく分かった。（真下俊哉）

第11回 子持山

一九九八年十月二十四日（土）曇り

参加者 松崎、八木、岩崎、木村、澤田、金井、長島、染谷、高野、遠藤、萩原、加島

【コース】川越（6：20）〓赤城IC（8：20）〓子持神社下（8：30～8：35）―子持神社（8：55）―唐沢川3号橋（9：10）―5号橋（9：20）―獅子岩への分岐（9：30）―電波反射板のあるピーク（10：30～10：40）―獅子岩（大黒岩）（11：00～11：25）

―子持山1等△（12：20～13：00）―柳ヶ峰（13：45）―十二ノ沢

(13・45) — 5号機 (14・30) — 子持神社 (参拝20分) — 神社下
(15・20) — 15・30) — 子持村温泉センター — 伊香保IC — 川越
(21・20)

九州の単身赴任が長く続いたため、OB会の山行に当初は参加できなかつたが、帰埼後最初に子持山に登る機会を得た。参加は久しぶりなのに、皆さんとは慣れ親しんでいる空気があり、ゆとりもあつたのはうれしい。

登りはじめは大変苦勞した。というのは、まず舗装の車道を一時間近く歩く羽目になつたからだ。せっかく車道が続いているのなら、車に乗れたかつたのは、私だけではあるまい。次には、取り付いた山道がはじめひどく急だつたから。正規の登山道でなかつたらしい。あしの短い私には、股を大きく広げないと登れない。風景を見る余裕も仲間と話をする体力もなかつた。ひたすらはいつくばつて登り続けた。

やつと電波の反射板のある尾根にはい上がると、すごい岩が尾根の左に突つ立っているのが見えた。今の尾根道は快適だが、あの大黒岩に登るのかと思うと不安になつた。近づくと、ちゃんと巻き道があるではないか。元氣な連中は鉄ばしごと鎖で岩に登つたが、君子は危うきに近寄らなかつた。

見晴らしがよくなつたが、山腹の紅葉はいま一息で、朝方の雨はやんで、青空ものぞいてきたのに、ちょっと残念である。柳ヶ峰の分岐の先で、やつと頂上に立つた。三時間四十五分とは、私には十

分にご馳走さまだつた。十二社などのありがたそうな石のほかに、一等三角点の標石。一等とは、顧問によれば、傍らの石祠と同じくありがたしいものらしい。

雲が動いて、谷川連峰が見え出す。東には赤城や武尊もちらちらしてきたが、お昼が済んだので下らねばならぬ。さっきの柳ヶ峰からの急坂はみんな真剣だつた。大ダルミで左折、沢沿いとなる。唐沢川沿いに駐車場は幾らでもあるのに、なぜあんな遠くから歩いたのだろう。やはり川高山岳部は、兵ぞろいだと思つた。

子持神社にもうでたら、境内の杉の巨木の中にいい万葉歌碑があつた。帰宅して調べた。

児毛知山 こもちやま 若かへるでの わか もみつまで

寝もと我は思ふ わ 汝はあどか思ふ (巻第十四)

(子持山の、このカエデの若葉がもみじするまで、ずっと寝たいと俺は思う。お前はどうかね。共寝の床で男が問いかけた形の歌)

・ 児毛知山 — 「子どもを持つ」意をこめる。 ・ 若かへるで — 「かへるで」はカエデの木。 ・ もみつ — 紅葉・黄葉する。 ・ 寝も — 「寝む」の訛り。 あど — いかに。

おわりに、小生より一学年下の長嶋威君には、高校時代の山行はもとより、私が川越プリンスホテル開業の業務についたときにも数限りない恩恵をうけた。おかげで久しぶりの川越生活であつたが、短期間にとけ込むことができた。この機会にお礼を申し述べたいと

思う。持つべきものは友であることをつくづく感じながら山岳部に感謝いたします。
(澤田英教)

第12回 庚申山

一八九二日 水沼駅温泉センター

一九九九年五月九日(日) 晴れ

参加者 松崎、川口、岩堀、川上、岩崎、関口、沢田、長島、石井、高野、染谷、古島、荻原、黒沢、加島、宇都野、八島、中川、新保、矢部、小久江、真下、戸部

「コース」 川越(6:05) ≡ 銀山平(9:10 ≡ 9:20) — ノ鳥居(10:20 ≡ 10:25) — 鏡岩(10:55) — 猿田彦神社跡(11:45) — 山巡りコース分岐(12:30) — 庚申山(13:05) — 展望台(13:10 ≡ 13:35) — お山巡りコース分岐(14:00) — 銀山平(16:45 ≡ 16:50) ≡ 水沼駅温泉センター(17:30 ≡ 19:30) ≡ 川越(19:30)

ミズキが白い泡のような花を平らに広がった枝につけている。関東平野は新緑の真っ只中。

「こないいい天気じゃ置いてゆかか。おれがゴア雨具を持ってくと、いつも雨は降らないからな」

「いえいえ、岩堀社長、ぜひ持ってってくださいよ」

岩堀代表幹事の高級ゴア雨具はみんなのお守りだ。

かじか荘のすぐ先にゲートがあるから車道を歩かねばならぬ。そ

れが大の苦手な松崎中正先生とご一緒する。

「私の山靴は、舗装は歩かないという約束でバーゲンで買ったんだ。これじゃあ靴屋に怒られちゃうよネ」

と、ご機嫌斜めだが、間もなく砂利道になったので、お供も少しはほつとする。今までずいぶん先生と山を歩いてきたが、藪山や道のない山は平気なのに、いい道をこれほどいやがる御仁ごじんは珍しい。いい道は、山じゃないよネ」

足尾の新緑は始まったばかり、深い庚申川。早くも先頭とラストはずいぶん離れた。「一の鳥居」の先で、斜面にわく、うまい清水にありつく。「九四丁目」など、信仰登山のころの石の標識が残っている。水面沢沿いの鏡岩、夫婦蛙岩。参道に残るネズコの大木。「ダケカンバに交じって、樹皮が荒れているあれはヤエガワカンバだよネ」

今日の山は植物の勉強になりそうな不吉な予感。

庚申山荘の先にシカの頭骨が落ちていた。なんで俺たちのほうをにらんでるんだ。岩壁の下に来ると、ご老体の顔つきが変わった。コウシンソウだという。

「こりゃあ、この山の特産だが、花は終わって、ほら、干からびた花茎の先が岩壁の上の方を向いてるだろ。こうしてタネを親株の上の岩場にくっつけて繁殖する作戦なんだよネ」

この人は英語の先生だったはずなのに、いつから植物に転向したんかいな。聞いたら、

「山に関するものは何でも面白いよネ」

コメツガ林の中に残雪を見ると、やっと頂上。皇海山が松木沢源頭の急斜面をこつちに向けて、すつくと立っている。山体中央に一筋の雪渓が光っているのが劇的な眺めだ。日光白根のドーム、大、小真名子を従えた男体山がダケカンバ越しに大きい。雲が動いて皇海の右に白い山が現れた。山博士は即座に至仏、小至仏とのたまった。こんな景色の中で昼飯とは豪華なことよ。銀座のレストランもここにはかなうまい。いつも行ってるわけじゃないけど。

帰りに、来た道と違ったコースをとったのは、先生の

「どこかに〇〇が咲いてるはずだよネ」

のご託宣のため。お山回りの分岐を左に取り、メガネ岩、鬼のひげすりなどの険しい岩場を越して、ササ原の下りになると、しめたッ、アカヤシオの花盛り！ 凄い、すごい。二人とも大満足。

「今日のOBのうちで、これが見られたのは私たちだけじゃないかネー」

おかげで、エンジンかけて待ってるバスにはビリのビリにたどり着いた。

(荻原克則)

第13回 至仏山 二二二八 片品温泉

一九九九年十月二日(土) 晴れ

参加者 松崎、八木、川口、岩堀、岩崎、沢田、石井、長島、染谷、高野、古島、遠藤、戸部、荻原、黒沢、宇都野、加島、中川、真下、三瓶



1999年 至仏山山頂にて

「コース」 川越(6..05) 〓 戸倉 〓 鳩待峠(9..20) 〓 9..30 | オヤマ沢田代(11..05) | 至仏山1等△(12..05) 〓 12..40 | 山ノ鼻小屋(14..25) 〓 14..45 | 鳩待峠(15..45) 〓 16..00 | 〓 川越(21..30)

(21..30)

至仏山は、川高山岳部に入って初めての個人山行で登った山だ。一年生の夏休みだから一九八四年、ということは十五年ぶり。そのときは、同期の一年生六人全員で行った。それ以後は、山に対する思いやスタイルに各人違いが出てきたためか、一緒に行くことはなかった。だからこの山は山岳部同期全員で行った、初めて最後の思い出の山だ。同期のうちの数人とは、今

でもOB山行に一緒に行けるのは、うれしいことだ。

今回は日帰りなのでデイバック一つの身軽さ。鳩待峠からの登りも余裕だ。高一の時は、テントによる二泊三日の縦走だったので、結構な量を担いでいた。しかも格好は、思いつきり体育会系。尾瀬ヶ原の木道を歩いている時は、ハイカーから異様なものを見る目が向けられていた。確か、メンバーにはキスリングを背負っている者もいて、木道のすれ違いに思いつきり邪魔になっていた。

至仏山からは山ノ鼻へ下る。あのとときも、今回と同じように鳩待峠から至仏山に登って、山ノ鼻に下りた。一九九〇年から七年間、この道は植生保護のために通行禁止になっていた。私たちが行った当時は、多数の登山者に踏み荒らされたり、水が流れたりして深くえぐれてしまつて、大きな岩がたくさん顔を出していた。その岩も、蛇紋岩のため、つるつるに磨かれたようになっていて、よく滑り、非常に歩きづらかった。それが今では立派な木道や木の階段が整備され、植生が保護されるとともに歩きやすくなった。ここまでの整備について、関係者の努力は大変なものであつたと思う。

山ノ鼻からは鳩待峠へ戻る。そこから車で移動して、いつものように温泉と食事で締めた。

今回の至仏山は、懐かしい思いとともに、植生保護の重要さと困難さを実感した山行となつた。自然保護を考えると、山は征服するものではなく、登らせていただくものと思つたほうがよいだろう。

追記・平成二十年現在、植生保護と登山者の安全確保のため、至仏山と山ノ鼻の間は上り専用になつている。さらに、尾瀬は平成

十九年に日光国立公園から独立して、会津駒ヶ岳周辺などとともに二十九番目の国立公園となつた。(三瓶達生)

第14回 袈裟丸山 一九一〇年 水沼駅温泉センター

二〇〇〇年五月二十日(土) 雨のち晴れ

参加者十三人

「コース」 川越(6:15) 〓 小中口登山口(9:10) 〓 9:40 〓 八重樫原(10:00) 〓 後袈裟丸山(12:30) 〓 13:00 〓 八重樫原登山口(15:00) 〓 15:10 〓 水沼温泉センター(15:30) 〓 16:30 〓 川越(18:30)

いつもなら一番電車で眠たい目をこすりながら山とは逆方向の集場合所まで出向かねばならぬのに、今朝は荻原君のピッカピカサーフが拙宅に横付けのはず。おかげでお出迎えとは願つてもない。

と、大名気取りでいたら、車内に畏れ多くも岩堀ボスの姿があつて出はなをくじかれた。これじゃ拙者はあわや小名に格下げかと、がっかりしたが、幸い若い斎藤君がお供してきたので、当方名前にあやかつて中名というところ。

昨夜からひどい降りだ。これじゃ山はどうせ中止に決まつると。温泉に入って一杯だろうと、温泉セットだけは念入りにチェックしてきた。

登山口に着いてもまだ景気よく降つてるから、シメタと思つた。

ところが、あに図らんや、だれ一人として温泉！ を口にする勇
者がおらぬ。さすが川高山岳部OBだけのことはあると、内心が
っかりしながらステテコなんかは脱いで、チュウセイは濡れネズ
ミになる覚悟をした。

雨の新緑が目にも染みる。はなから急登。トウゴクミツバツツジ
の紅い花が、よくぞお出でなすった、とあきれ顔だ。

ボスがさっそうとトップ。それもそのはず、待ちにまつた新調
ゴア雨具の使えるときがついに来たというわけ。私は、使い古し
の折り畳み傘の骨がいつ折れるかとはらはらしながら、とほとぼ
よぼよぼ後を追う。

八重樺原を過ぎると、いよいよ幹事連中推奨おくあたわざるツ
ツジ、アカヤシオのお出迎え。花は登るにしたがってどんどん勢
ぞろい。ガスに煙るシラカバ林の中の満開の花は雨に濡れて、花
弁の縁に水滴をきらめかせてうつつむいている。この愛らしさ、い
とおしさを何に例えよう！ 半世紀も前、初めて手を握り合っ
たときの私の山の神さまみたいだナア。そんなこと懐かしがって
るから、ボスとの距離は開くばかりだ。

私は山ではあまり休まぬ。なぜかという、老生は足が遅いから、
人さまと同じにのんびり構えていてはどんどん遅れてしまうから
だ。今回もなるたけ先行して、へそくりため込んでたのに、若い
連中は、「アレッ、年寄りが行っちゃったよ」と、あわてて追いつ
いてくる。全く思慮が足りないというか、いたわりの心に欠けて
るといふか。二〇年先が楽しみだ！（おっと、そのころ拙者はい

ないんだナ）

とうとう足が前に出なくなっと思つたら、バンザイ、そこは
ついに頂上だった。ぐるりはびっしりと樹林で、どっち向いて
も眺めゼロだから気もめぬ。萩原君が早速コーヒーを入れてく
れたので、手のひらから水にとび込んだ金魚みたいに生き返った。
下りは楽ちん。小生は登山より下山に自信がある。エンジンブレ
ーキがすり減ってるから速い。さっきのプレミアムコーヒーがあ
と少し余計だったらよかったに、最後の急坂でしりもちついた。

下山祝いで盛り上がるうと水沼駅温泉センターに駆けつけると、
渡良瀬の谷間には、不思議や、雲一つない青空が広がっていた。

第15回 蓼科山

二五三〇㍑

(松崎中正)

二〇〇〇年十月二十八日(土) 晴れ

参加者十九人

「コース」 川越岩堀建設駐車場(5..30) 〓 佐久IC(7..30)

〓 大河原峠(8..30 〓 8..50) | 將軍平(10..05 〓 10..15) | 蓼

科山1等△(11..00 〓 12..00) | 將軍平(12..45 〓 12..50) | 天

祥寺(13..35 〓 13..40) | 亀甲池分岐(13..50) | 大河原峠

(14..30 〓 14..55) 〓 立科温泉(15..30 〓 17..30) 〓 川越(20..

00)

集合はいつもの場所だが、時刻はいつもより早い。蓼科山は遠く、

その上、道が込むためだ。しかし朝の到着は私が最後だった。

蓼科山は私にとっては初めての挑戦である。スキー場、避暑地、キャンプ地といったイメージしか頭にはなかった。バスで上へ上へと上っていくと周りの山々が目に飛び込んでくる。われわれのコースは蓼科牧場経由で山頂までの最短距離のようだ。いつもスケジュールは同期の高野七郎君と後輩の加島君におまかせだが、できたら登るエネルギーまでも彼らにおまかせしたいものだ。

今回のメンバーの中には、同じ所沢から初参加の糟谷熊先輩がいた。知っているように書いているが、実はバスの中の自己紹介で初めてお目にかかったのであります。先頭グループはいつも元気な岩崎先輩と石井先輩だ。

ひととき急坂を登りつめると台地にたどり着いた。將軍平で、戸締めめの山荘が一軒ひっそりと建っていた。後続隊を待つ間、一服休憩とあいなつた。

いよいよ大岩が重なった急坂だ。一時間ばかり登りつめると広々とした山頂にたどりついた。はるか北アルプス、南アルプス、間近に八ヶ岳連峰、薄く富士山まで見ることができた。これらの説明はいつものことながら松崎先生がしてください。先頭隊だけで写真を撮り合っていると、後続の糟谷先輩一団が到着したが、風が冷たいので一同小屋に飛び込んだ。

さすが二五〇〇を越す高さだけあって、薄い氷がはっていた。小屋の主人は上福岡の出身で、シーズンだけ小屋を経営している。暖まって昼食とした。毎回話題を提供して笑いをふりまく長島先輩。

ご自慢のゴアテックスをまとったもの静かな岩堀先輩。

バスに戻るや、一路温泉へ。温泉というより共同浴場というほうがふさわしい所。今日の山行の反省会を兼ねながら飲むビールのうまいこと。おいしく飲むための山行だと、毎回統括して参加しているのが私の本音かもしれない。幹事のご苦労に感謝して登った蓼科、飲んだ酒でありました。(染谷 明)

第16回 赤城山

一八二八 水沼駅温泉センター

二〇〇一年五月二十日(日) 晴れ

参加者 松崎、川口、岩堀、岩崎、関口、沢田、長島、古島、高野、戸部、荻原、東海林、宇都野、加島、真下、三瓶、齋藤
 「コース」 大洞(9:30) — 駒ヶ岳(9:35) — 黒松山(10:20)
 昼食、出発(11:05) — 花見ヶ原独標(12:50) — 花見ヶ原キャン
 プ場着(13:10)

赤城山は私にとって山登りの原点ともいえる山だ。子供時代の大半を過ごした県北部の行田の街からは最も間近に大きく見える山で、冬晴れの日には尾根のひとつひとつの巒^{むら}までが数えられ、関東平野の真中で育った私には山への興味と期待をかきたてるのに十分であった。昨年の蓼科山に続き、赤城山となったことは、ひそかに深田百名山踏破を狙う私にはうれしい。

これまで赤城山はケーブルで登った地蔵岳だけなのに、一応踏破



2001年 赤城山

したと○をつけていた。しかし今回は赤城の最高峰、黒松山を極めるのだから。立派に◎がつけられる。一緒に行く先輩の間では、いまだ自動車道も開通していない時代に、新入生歓迎登山で行ったこ

とも話題
となつて
いた。

赤城山
は南面か
ら、すな
わち埼玉
県側から
眺めるの
が一番素
晴らしい
ように思
う。関越
道を北へ
向かうに
つれ、赤
城山独特
の姿――
あのゆっ
たりした

裾野の上に、多数のピークが重畳ちゅうじょうとしていいる山容――が崩れてく
るのに失望させられるのは私だけだろうか。

前橋ICから赤城道路経由で大沼湖畔の大洞へ九時二〇分に到着
した。登山に先立ち、まずコース選定について松崎先生から「黒松
山から花見ヶ原へ抜けるコースを是非とりたい」との強い要望が出
た。

すなわち、「このコースは運転手付きの車で来た今回を逃すと、
もう皆さん一生行くチャンスはないと思いますよ。気の弱い(?)
私があえていうのだから間違ひありません」とのご託宣たくせんに一同えら
く納得。車ははるばる下山地点へ回って待機してもらうことにし
て、国民宿舎「赤城緑風荘」のそばから、まずは駒ヶ岳への登山道
へ入った。

ここからしばらくは樹林帯の山道を登る。眼下には大沼おの、小沼を
見渡せ、快適な登りが続く。三個所の鉄階段を過ぎるとまもなく駒
ヶ岳山頂だが、立派な名前に似合わず、小さくて目立たないピーク
だ。振り向くと地藏岳が指呼の間に望める。

ここからはいったん、黒松山との鞍部の大ダルミへと下ってゆく。
好天の休日のせいも、途中で多くの登山客とすれ違う。いつもなら
山で出会うのは中高年の女性が圧倒的に多いのだが、今日は若い人
や子供も目立つ。

鞍部から黒松山へは、滑りやすい赤土と、露岩の目立つ斜面の急
登となり、いつもながらわがパーティーは、健脚先行組と、樹木や
山野草を愛でながらの後続追込込み組とに自然と分かれた行動とな

る。

間もなく鳥居と石碑の建つピークに出た。そこから黒松山頂まではすぐだ。広い頂上には、一等三角点と小山のように積まれた石があり、やや低木が邪魔になるが、南面に広がるは関東平野、北方に見える上越国境の山々の中に谷川岳らしいのが見える。日光と、遠くは上信越の山並み。浅間山も見える。近くには百名山の皇海すかい、また以前行った袈裟丸山が東北方向に見え、庚申山はその陰になるらしい。

大勢の登山者で満杯の山頂なので、まちまちに昼食を取り、記念撮影をしてから花見ヶ原へ向う。黒松大神を経て緩やかな傾斜が続く小径を行くが、樹林帯で展望は利かない。しかし足元には笹が茂り、カラマツ、ダケカンバなどの林のそこにツツジが咲き始めていて素晴らしい。

少しガスがかかると幽玄な雰囲気をかもし出す。ここでも松崎先生の講釈（登山学？）を拝聴しながら、リョウウブとヒメシヤラの木肌の違いや、ムラサキヤシオツツジ、ミツバツツジ、ヤマツツジの違いなどを実習した。

平素控えめな先生が、珍しく強力にこの素晴らしいコースを薦めてくださった意味が分かった。

写真を撮りながら、間もなく花見ヶ原キャンプ場へと出た。ここから遠く赤城山麓を遠回りして待っていてくれたマイクロバスに乗り、恒例の「温泉ひとつ風呂」につかるため、わたらせ渓谷鉄道水沼駅温泉センターへと向った。

(岩崎清彦)

第17回 日光白根山 二五七八 白沢村望郷の湯

二〇〇一年十月二十日（土） 晴れ

「コース」 川越（5:45） 〓 川越IC 〓 沼田IC（8:00） 〓 丸沼高原スキー場（9:00） 〓 ゴンドラ山頂駅（9:40） 〓 9:50 〓 10:00 〓 丸沼高原スキー場コース下の分岐（10:30） 〓 森林コース合流（11:00） 〓 君待岩（11:00） 〓 11:20 〓 11:30 〓 ガレ場森林コース上の分岐（11:50） 〓 山頂（12:00） 〓 12:50 〓 弥陀ヶ池（13:40） 〓 13:50 〓 菅沼登山口（15:30） 〓 （渋滞） 白沢村望郷の湯 〓 沼田IC 〓 川越

例によって、岩堀先輩の駐車場に集合。五時半出発であるが、何か雰囲気がおかしい。長島先輩がバスに乗らないのだ。川越祭りのため参加できないのだそうだ。その上、染谷は風邪でダウン。ともかく、定刻にバスは出発した。

関越道で高野の携帯に関口先輩から「次のSAで待ってる」との指示。結局一人参加者が増えて多少にぎやかになった。しかし、なにしろ両巨頭がいないのだから静かだ。いつもと違う上品静謐な山行になるだろうとは、参加者全員の一致した観測である。しかも天気は無風快晴ときている。加島幹事から目的地変更の提案があり、白根山へ行くことになった。下見によると、林道工事のため、男性山は無理とのことであった。幹事さんご苦労さま。

丸沼高原スキー場から標高二〇〇〇mまでゴンドラで一気、終点

から歩き出す。なだらかな樹林帯で快適だ。霜柱を踏みしめて進むと、やがてガレ場の急登にさしかかる。「君待岩」なんてしゃれた所もあるが、息切れが激しい。

地衣類の付着した岩場を抜けると山頂である。「関東以北の最高峰の三百六十度の大パノラマ」のうたい文句通りで、特に眼の前の男体山一帯は見事な景観である。

昼食休憩後、弥陀ヶ池コースで下山。黒沢君は、一人で金精山を回ってきたとは、健脚にあきれる。

帰り道、白沢村の望郷の湯の祝杯となった。松崎先生が挨拶で、「いい天気だいい天気だと騒ぐと、山の神に聞こえて大風になったりすることがよくあるというから、静かだねえと、そつと言う方がいい」とおっしゃった。山中では油断禁物ということだろう。

次回の山行には、階段上がり二割増のトレーニングをして、頑張るぞオ!

(古島照夫)

第18回 黒姫山

二〇五三㊦ アステイ黒姫

二〇〇二年五月十八日(土) 雨

参加者 松崎、川口、岩堀、岩崎、澤田、長島、星野、石井、高野、

田村、戸部、荻原、加島、真下、三瓶、斎藤

「コース」 大橋登山口(9:20)―古池、新道分岐発(10:50)―

しらたま平発(12:40)―黒姫山頂―黒姫乗越―姫見台発(2:45)

―黒姫高原スキー場―アステイ黒姫(4:30)

川越を早朝五時半に出発したのに、登山口の大橋に着いたのが九時。今回の山は、かなり遠い。

OB会に参加するのは、四回目である。最初が蓼科山で、次が赤城山、そして奥白根山。今までの山は、登山口から三時間ほどで山頂に着いているが、今回は四時間以上はかかるという。

一番若いくせに体力的に心配だった。なにせ、この前、体重を測ったら、八十七キもあったのだ。これでは、登山中、おながが重くて、すぐ息が切れてしまうだろう。登山口の大橋の標高が、約一一〇〇㊦。大体、三峰神社の標高と同じである。そして、山頂が二〇五三㊦。雲取山より高い。これを四時間で登るのだ。かなり、きつそうだ。しかし、数年前、大洞川から和名倉山まで、一日で登り切っている。今回も、何とかなりそうだと、最初のうちは思っていた。

登山口の大橋から少し戻り、種池への山道へ入る。最初のうちは、緩い登り坂で、特にきついということはない。種池には木道があり、池畔へ行ってみる。池は、水の流入口も流出口もないそうである。どのように、水量を一定に保っているのだろうか。

しばらくして古池に出る。こちらは川をせき止めていて、かなり大きい。水門もある。人造の池だ。何人かの人が休んでいた。池の左側に回り、なおも行くとも木道がある湿原になった。池を半周ほどすると池から離れ、左の山腹に取りつく。

天気はあまり良くない。皆、雨具を着けている。雨の中の山行は

袈裟丸山以来だそうだ。このあたりでは、私は松崎先生と真下と一緒だった。

一瞬、雨の音が強くなったと思ったら沢の音だった。その沢を渡ると、急坂になってきた。じきに新道分岐に着いた。

真下はここでも休まずに、どんどん先へ行っている。さすがに強い。彼は二十分も先に、しらたま平に着いてしまい、皆が来ないので、不安になってしまったそうだ。

私は当然のことながら、ここで休む。そして水を飲んだ。加島さんが、このペースなら山頂まで行ける、と言っていた。しかし、私はこの先、しらたま平への登りで体力の限界を知ることになる。

しらたま平へは、最初は緩い登りだった。しかし山頂までの標高差からも分かるように、途中からかなりの急登となった。おまけに、雨もだんだんと強くなってきた。道の真ん中を水が流れていて、足場も悪い。このころから私は皆から遅れ始めた。足を何回か滑らせながら登ってゆくと残雪があった。少し傾斜が緩くなると、そこがしらたま平だった。私はそこに座り込んでしまい、写真に入る気力も失せていた。

おにぎりを一個食べきれないうちに、山頂隊はもう出発してしまった。私は残念だが、ここから、降りることに決めた。

上り坂は下りになると、なお始末が悪い。道はぐちゃぐちゃである。ステッキが途中でポキリと折れてしまった。

前を下る岩堀さんはストックの四駆で、着実に降りている。私は何回か転んでしまった。もういやになってくると、そこは新道分岐

だ。やっと車道となり、だから歩きで出発点の大橋に着いた。バスの中で着替えをし、ビールを飲んで生き返った。バスは温泉のあるアステイ黒姫へと向かった。

今回の山行で残念だったのは、やはり山頂へ行けなかったことだ。しかし、体力トレーニングをする暇もないので、今後はあまり無理をしないで参加しようと思う。ともかく私も年を取ったものだ(といっても、参加者の中では一番若い!)。

(斎藤雄一)

先発グループの紀行――

私たちは、しらたま平での昼食もそこに後続グループの到着を待って出発、二〇分ほどの霧雨の中の休憩であった。そういえば今回の山行はほとんど休みらしい休みも取らずの強行軍だ。結構きつく、今までのわれわれグループの数ある山行では、あまり感じたことのないほどの疲れた。

しらたま平から黒姫山頂へは二重火山である黒姫の外輪山の尾根を、西端からぐるっと回って北上するかたちで行くが、南と東が笹原で開けた快適な縦走路である。天候さえよければ素晴らしい眺めだろう。まったく残念だ。

小さなアップダウンを幾つか繰り返して頂上へ。小さな祠と壊れた方位盤があるだけ、ここでもそそくさと記念撮影をして黒姫乗越へと向かった。今回は時間的に厳しい行程である上に雨にたたられたことも加わってか、全員ついつい先を急いでしまう。ここから姫見台への下り道は下見をしていないコースだという。

地図の上では比較的易しいように見えるが、現実とは違っていた。まず踏み跡があまり見られず、少なくともここ数日は人が通った気配がない。その上残雪と倒木や枝が山道の所々を覆いかくすように一同の行く手を阻む。そのため予想以上に時間がかかり、先行する者も時々立ち止まっては全員を確認しながらの下山となった。ケルンのある姫見台を過ぎるころから残雪はなくなるが、急な傾斜に岩と木の根が混在する下山路は、疲れた体にはこの上なくこたえる。

ようやく黒姫スキー場へと出るが、相変わらず霧雨に煙っている。ここからゲレンデ内を下ることになったが、ぬれた土も草もとても滑りやすく、何回か足を取られての転倒を繰り返し、ほうほうの体でスキー場下へとたどりついた。ここからしらたま平からの引き返し組との待ち合わせ場所であるアステイ黒姫へは、まだ車道を結構歩かねばならず、全体を通してかなりのアルバイトを強いられた。古池周辺の湿地帯の水芭蕉とリュウキンカが混在する群落、今を盛りのミツガシワや新緑のカラマツ林、それに当地の名産竹細工の原料になるといふネマガリダケの密生する急斜面を行く登山道など、記憶に残る山行であった。またぜひ天気の良い時にもう一度来て挑戦してみたいものだ。

(岩崎清彦)

第19回 谷川岳 一九七七

二〇〇二年十月十二日(土) 晴れ

参加者 松崎、川口、岩堀、川上、岩崎、澤田、長島、星野、石井、

齊藤雄二、染谷、高野、遠藤、戸部、東海林、宇都野、加島、渡辺、真下、斎藤雄一、小野、小野奥様、丸富
 「コース」 川越IC⇨水上IC⇨(谷川岳ロープウェイ)⇨天神平
 —谷川岳往復—天神平⇨谷川温泉(一泊)

七年前に川越高校山岳部OB会があるのを知ってから、初めての参加である。今まで仕事に追われて余裕がなかったから、という理由のほかに、今度結婚したので妻に登山を理解してもらおうという意味があった。天神尾根なら、初心者の妻でも大丈夫だろうと思っただけは、結局、途中で妻がけがをして引き返すことになってしまった。

とても天気がよかった。妻と斎藤雄一さんの三人で、早朝の関越道を飛ばし、恐らく一番乗りだろうと思っていたら、ロープウェイ乗り場に到着したのは、驚いたことにダントツのピリであった。さすが山岳部OB、山の行動が早い、と感心してしまった。

九時半ごろ、皆さんバラバラに歩き始める。まれに見る快晴であったが、そのために、多くの登山者が、登山口から頂上まで途切れることなく行列を作っている。

しばらく歩いていくと、木道に出たのだが、北側の木道はぬれており、初心者には、私が説明してもどう歩いていいのかわからないようであった。

途中、妻は少し下り気味の木道で転倒して体を打ってしまった。三〇分ほど様子を見たが、引き返すことにした。私自身も、高一の

ときにはじめての歩荷訓練で、奥多摩鷹ノ巣山から日原へ下る途中の雨の木道で転倒し、危うく谷底に落ちそうな恐怖を味わったから、彼女にも無理はさせられないと判断し、今回は谷川岳の山頂はあきらめた。私が怖い経験をして登山を続けたように、妻もめげずに登山を続けてくれればいいと思っっている。

登山口でしばらく待っていると、一時半ごろには皆さんが集まり、宴会会場へ移動しはじめた。谷川温泉の共同浴場で汗を流し、青雪山荘をお借りしての宴会となった。

妻を連れての宴会はとても勇気が要ることだ、と後で皆さんに言われたが、私としては、将来、妻が登山を正しく理解してくれる（要は、私が山に行くと言ったら文句言わないようにしてもらう）ためにも、宴会には絶対参加しようと思っっていた。

宴会では多くの方々と親睦が深められ、とくに星野さんからは深夜に人生勉強の講義を受けた。松崎中正先生は、私の現在の勤務先でかつて校長をなさっていたこともあり、いつかお話ししてみたいと思っっていたので、このような形でお会いできてうれしかった。

翌朝、昨日の豪華な鍋の汁を使った雑炊を頂き、高速のすいている午前中に帰ることができた。今後ぜひ参加したいと思う。

も少し続けさせていたきたい。私は中学一年の時から、「山と溪谷」で読んだ沢野ひとしのエッセーの内容がずっと気にかかってきた。彼は、結婚して子育てに一息つくまでずっと山に行くことができず、四十代になってから、椎名誠らと爆発的にまた山を始めるのである。

昨年、職場の上司と苗場山から赤湯に行ったが、その帰り道で、「結婚したら山は無理だろう」と言われたりもして、やっぱりそうなのかなあ、とちょっと悩んでいた。だったら、妻も連れていってしまえばいいのだ、と考えたのである。

とりあえず、今後、妻の参加はないと思うが、ちょっとでも登山を分かってもらえただろうか？ 皆さんとは違って、私なりの目的があるOB会山行だった。

最後になるが、今まで山行に参加することができなかったことを悔いている。なぜなら、七年前にOB会の全会員名簿を作成する段階で、パークファミリアの沢田さんと、お宅にお邪魔して打ち合わせをさせていただいたこともあったのに、それ以来お会いできない状況になっていたことも、つゆ知らぬままだったから。

今後、今までの分を埋め合わせるべく、また、われわれの同期やその周辺の世代も積極的に取り込んで、さらにOB会を盛り上げられるように努めたい。

(小野徹生)

第20回 日光高山

一六六八日

二〇〇三年五月十七日(土) 曇り

参加者 松崎中正、川口泰、岩堀弘明、岩崎清彦、澤田英教、斉藤雄二、長島威、星野光伸、高野七郎、染谷明、戸部秀明、鷹皆勝之、東海林均、入澤清、加島篤人、宇都野正敏、斎藤雄一、三瓶達生
「コース」 川越⇨沼田インター⇨金精峠⇨竜頭滝⇨熊窪⇨小鞍部⇨

高山山頂―滝上―竜頭滝Ⅱ湯の家―湯の湖レストハウスⅡ川越

新緑の季節を感じさせる静かな山であった。行程は厳しくなく名は知られていないけれども、深い味わいがあった。私にとつてはOB会に参加したからこそ出会えた山だ。このような山の楽しさをこれから多くのOBと分かち合いたいと思う。

曇りがちで、二日前から降っていた雨はやんだものの、どんよりとした空模様であった。例年よりも早く梅雨前線が北上しているのかもしれない。

日本ロマンチック街道としゃれた沼田街道をマイクロは金精峠に向かう。峠付近ではまだ残雪が見えた。

竜頭滝着九時。現地集合で初参加の鷹贅、入沢君を含め総勢十八人で、九時四〇分出発。

新顔二君は、OB会のホームページを見て参加してくれたのと、ホームページが実際に目に見える形で活用されたことを知って、うれしかった。

多少肌寒い中を、日光プリンスホテルわきの登山道を中禅寺湖畔に沿って小一時間ほど。地図上では平坦な湖岸の歩道に見えるが、実際は湖に向かって山が急激に落ち込む断崖の上部に道が通っていて、多少は山登りの雰囲気である。左手には中禅寺湖が、右には高山たかやまがそびえる中を湖の波音を聞きながら歩くのは、普通の登山では味わえないものだろう。

その後、湖畔沿いに千手せんじゆがはまヶ浜がはまに向かう道と高山に向かう登山道と

の分岐に到着、自然に数人ずつのメンバーに分かれて登り始めた。なだらかな登り坂の快適な気分四〇分ほどで視界が開けた鞍部に到着。時々日が差すくらいに天候が回復してくる。

さらに四〇分ばかり、やや急な道をたどると山頂に立った。参加者全員が十二時までには集った。

木立の山頂の南側には湖畔がちらちら。曇りで視界はあまりよくないが、北西には日光白根も望めた。

昼食を済ませ、竜頭滝を目指して下山を開始したが、山頂北側直下にアズマシクナゲの自生地があり、株は少ないけれども、ちょうど見ごろで、しばらく足を止めて見とれた。

ピンクの花は、つぼみのときのほうが色が濃く真紅であるのはなまめかしい。

松崎先生にアズマシクナゲは花卉が五枚でホンシクナゲは七枚だと見分け方を教わる。高校時代の恩師から今も教えていただけているのは、幸せなことだ。シクナゲはヒマラヤが原産地で、ネパールの国花でもある。この花も何万年も前にヒマラヤあたりから、はるばるやって来たのだろう。そういえば今年はエベレスト初登頂の五十周年だなどと山道を下りながら思いをめぐらす。一時半ごろ竜頭滝に到着した。

バスで湯の湖ホテルに行き、温泉に入って汗を流したが、よい硫黄泉で、すこぶる爽快であった。その後、日光湯元ロッジで夕食を兼ねて宴会を行い、現役の川高山岳部に寄付をしたことなどが報告された。川越帰着は午後七時半過ぎだった。

(戸部秀明)

第21回 白毛門 — 笠ヶ岳 一七二〇頁

二〇〇三年十一月二日(日) 快晴

参加者 松崎、八木、岩堀、岩崎、関口、澤田、星野、染谷、高野、

戸部、東海林、黒沢、宇都野、加島、三瓶、斎藤

「コース」東黒沢出合(登山口) — 松ノ木沢の頭 — 山頂 — 松ノ木沢の頭 — 東黒沢出合(登山口)

谷川岳の東側、湯檜曾川を挟んで位置するこの白毛門・笠ヶ岳(大倉山)登山の日程は、今年九月六日の幹事会で決めた。

六時に川越を出発、行楽季三連休の中日だが、マイクロバスは順調に水上に着いた。登山口の駐車場で記念撮影の後、八時半に出発。往復コースで、下山会は登山口からすぐの所でなので、今回は山中自由行動とした。

ブナ林の紅葉を見ながら少し行くと、アスナロや五葉松など大木の多い岩尾根帯の急登が続く。カエデやツツジの仲間の紅葉と木の根っこや岩の感触を楽しみながら登る。

「快調に」といいたいところだが、パーティーはばらけながら二時間かけて松ノ木沢の頭に着いた。私は岩堀さんの後を登っていたら、先頭グループだった。

この辺りから開けた尾根となり、無風快晴で眺め良し。ただし、平地の気温二十五度という暑さで全員汗のかき通し。このため脱水症状気味の人がいたのは、今後の反省材料だ。

今回は、若手の早足・引つ張りがいなかったので、松ノ木沢の頭から私は単独行動をとり、白毛門十一時十五分、笠ヶ岳十二時五分。上天気過ぎてか、遠くの方はかすんでいるが、まあ最高のコンディションといえる。

下り始めてすぐに、笠ヶ岳へ向かう三瓶君とすれ違った。松ノ木沢の頭十三時四十分で主流部に合流した。その後の岩尾根下りはヒヤヒヤもしたが、何とか全員四時ごろまでには無事下山し、「翠仙」での入浴と下山会。汗をたくさんかいたので、ビールがうまい。

今年は、春山行の日光高山とともに秋山行も好天に恵まれ、参加者の満足度は高かった。(高野七郎)

第22回 平標山 — 一九八四頁

二〇〇四年六月十九日(土)

参加者 松崎中正、川口泰、八木一郎、岩堀弘明、関口洋介、井上雅弘、澤田英教、長島威、星野光伸、石井秀世、染谷明、高野七郎、田村昭雄、戸部秀明、黒沢資到、宇都野正敏、加島篤人、真下俊哉、三瓶達生、鷹鷲勝之、入澤清

「コース」元橋登山口 — (平標新道経由) 平標山の家 — 平標山 (一部)の者仙ノ倉山往復 — 松木山 — 元橋

今回の山行は、「良い山、良い天気、良いアレンジ」に尽きる。「その心は？」と問われれば——

平標山たいらびょうやま

平標山はアプローチもよく、短時間で山頂に立てる。山容はたおやかで、高山植物も多様で笹原も美しい。田中澄江『花の百名山』にもリストアップされており、当日も沢山の登山客でにぎわっていた。駐車場や山頂での人込みには、雪山登山でしか来たことになかった身には正直びっくりだった。

良い天気とは、日程が決まった瞬間から「六月〃梅雨」の短絡思考で、当日は絶対雨と決め付けていたベシミストのわが身には、うれしい誤算だった。仙ノ倉山頂の展望こそなかったが、この時季としては十分過ぎるお天気であった。

良いアレンジは幹事さんの尽力による。下山後の二居宿「宿場の湯」もよかったし、宴会をした越後湯沢駅前のそば屋も美味だった。加島・宇都野コンビは絶妙。将来の長島・星野予備軍とみた。宇都野さんは生徒会長を勤めたほどの人物。加島さんは数年前まで青学ワンゲル部顧問であり、山に関しては実力者であるのはもちろん、何せ人柄がいい。嫌な顔ひとつ見せずに裏方仕事を黙々とこなす。物心ともに会を支えてくれる諸先輩あつてのわれわれ若手陣(?)だが、実務部隊として、この二人がいてくれることは心強い。

六・三〇 川越発。マイカー登山が主流の今、川越からだと同越方面は本当にアクセスがいい。大荷物を背負い夜行列車に乗り込んだのが懐かしい。もう二度とあんなことはできない。便利といえ、山行準備における、コンビニの存在も大きい。今回もバスは二度も停車し、仕入れも万全。

バスでは田村さんと隣であった。東洋大山岳部のご出身という本

格派。カラコラム遠征の話など聞くうちに、九時半過ぎには登山口に到着。仙ノ倉を目指す先発隊八人は写真撮影後、すぐスタート。

一一・〇〇 水場着。平元新道はここまでで、これ以降が本格的な登りとなる。途中、林道沿いに別荘が数棟あったが、自分なら購入はしないと、買えもしないのに、思ってしまう。先発隊が小休止していたら巨漢宇都野氏が追いついてきた。一同、慌てて出発!

一一・二〇 平標山の家。久しぶりの運動で少々疲れたが、高野さんが若い女性に水をお分けすると申し出たのに丁重に断られたのは見逃さない。実は小屋裏に豊かな水場があり、冷たくていい感じ。駐車場から三〇分も荷揚げしたのがちよつと恨めしい。ここから見る平標のパノラマは雄大。だいぶ気が乗ってきた。

一二・一〇 平標山頂。登山道というよりは階段を登りつめて山頂に到着。途中、平標山頂を巻いて直接、仙ノ倉に至るルートもあったが植生保護のため封鎖。そちらのコースには池澗もあるそう。初夏には池澗がよく似合うと信じているけど。山頂は池袋西口公園並み。違うのは年齢層。「中中年登山ブーム」とつぶやいて、自分も四十一歳のいい中年であることを思い出す。長居は無用と、谷川連峰最高峰、仙ノ倉を目指す。途中のお花畑は圧巻だった。花音痴で鳴る私でもミヤマキンバイ、ハクサンコザクラ、ハクサンイチゲ、コイワカガミくらいは確認できた。「来て良かった!」と思った瞬間、もくもくと雲が湧いてきた。ま、いいか。

一二・五〇 仙ノ倉山頂。加島さんと、少し遅れて高野さん、三瓶君が上がってきた。山頂で昼食と思いきや、弁当はバスの荷棚だ!

よほどしょげていたのか、美男子！三瓶君がおにぎりを分けてくれた。あいにく展望はなし。でも、この季節、降らないだけでも御の字だ。山の神様は欲張りが嫌いだ。山頂滞在二〇分。平標までのピストンは、雲上の散策だった。

平標山頂をスルーして、間もなく平標往復のメイン隊に追いつく。山頂で一時間強、至福の時を過ごしたそう。合流後、一行は途中、花の写真など撮影しながら、のんびり、登山口まで戻った。それにしても途中、真下を通った送電線鉄塔の恐ろしく大きいこと！高さ一二〇メートル。道理で下の登山口付近からもよく見えるわけだと納得。一五時半 下山。今回もいい山旅であった。ピールののど越しのさわやかなこと！

(黒沢資到)

第23回 吾妻耶山

—大峰山 一三三三メートル—二五五メートル

二〇〇四年十一月七日(日)

参加者 松崎中正、川口泰、八木一郎、岩堀弘明、澤田英教、長島威、星野光伸、石井秀世、染谷明、高野七郎、戸部英明、東海林均、宇都野正敏、加島篤人、斎藤雄一、真下俊哉

一ヶ月前の带状疱疹で右顔面がカサブタだらけになった。半月前の十月二十三日には新潟で大地震が起きた。自他ともにこんな有様で、今回の山行はとても無理だとあきらめていた。それが、医者から無理をしなければ大丈夫とのご託宣をもらい、開き直って参加を

決めたのが前日という始末である。年がいもなく興奮したのか夜半に目覚めてしまい、ボーっとしたまま川越に着いたのは出発一〇分前だった。

定刻六時にいつもの通りバスで出発。途中、松崎先生を拾って東松山ICから関越道に入る。皆さんのご挨拶や近況報告、さては冷やかしやらと、にぎやかな車内。たちまち月夜野インターを過ぎて、高野さんから、あの台形が吾妻耶山、その左の平らが大峰です、と教えられて元気が出てきた。

仏岩トンネル入り口の駐車場に到着。全員で記念撮影して、八時半過ぎに出発した。

尾根上にスックと立つ奇岩、仏岩に着くと、岩場に挑戦している若い人たちを見て、小生も挑んでみたが、途中の岩穴を潜るところで足元が覚束なく、自重した。柔らかな日差しの中にいささか盛り過ぎた紅葉とスギ・ヒノキのコントラストがきれいだった。「これですよ、山は！」前日までとはえらい違いで、登山気分浸っている自分に驚く。

のんびりと進んでゆくと、左手が断がいとなって落ち込み、きつい登りなってきたなと思ったところで宇都野君が大きなペットボトルを抱えて休憩中、

「これからが大変ですよ。下見のとき、ここから一時間半かかりました」との仰せである。なるほど、ジグザグにたどりながら、一歩一歩足元だけ見つけて登るうちに、がけ際の直進路は通行止めとなっていた。回り道に入ったがこちらにも結構急坂が続く。左手の松

に彩られた巨大な花崗岩の上に、直進路を上がる元気な松崎先生を見ながらさらに登ると広い平地に着いた。ここが山頂とは早合点、それはさらに三〇〇ほど行ったところであった。仏岩からおおよそ二時間の道のりである。

頂上は笹に囲まれた小さな広場で、江戸時代に建立されたという神社の、巨大な石の遺構が真田家の六文銭を刻んで残っていた。皆でどうやって運んだのか話題となったが、答えは出なかった。北方には、前回登った平標や仙ノ倉から谷川岳に続く国境の山々が頂上に雲を乗せてそびえ、右手には水上の町から武尊、日光に続く山並みがうつすらとかすんで一望できた。

昼食となったが、川越から「幸すし」がここに出張してきたのは驚いた。鍋、コンロや食材、水を皆で運び上げ、山頂で煮込んだ特製豚汁である。缶ビールつきと、文句の言いようがない。この上ないご馳走の後、しばしの昼寝で、山上の天国を存分に堪能した。

正午に頂上を後にして、尾根道を大峰山に向かう。雑木林の中の道は厚い落ち葉のクッションでまことに気持ちいい。小さなピークを越え、木の根のはう道を下って峠まで下りると、中年のご婦人二人に出会った。「もう何十回か登れば頂上ですよ」と励まされ、一気に登ってNHKのテレビ塔が立つ大峰山頂に到着した。しかし全然見晴らしが利かず、地図にある展望台もだめ。

キレットからの急登は、安全対策なのだろうが、アルミの長いハシゴがついてまったく興ざめだった。ぶつぶつ言いながら大峰沼への分岐点まで下り、ここから倒木で荒れた道をたどってサイクルス

ポーツセンター駐車場に着いたが、待ち合わせ場所はさらに一キロばかり先、やっと本日の第二ステージ湯宿温泉へと向かったのである。

国道に面した湯宿には昔ながらの風情が残っていた。湯元館では、早速風呂に行く。小さいけれど、かけ流しの湯は透明で良く温まった。飲用も効ありとかで湯船の縁に湧いている湯を柄杓で飲んだ。

懇親会が待っていた。いかにも地元の人と見えるおばさんたちの手で、大変ゆつくりと、山女の塩焼きや山菜のてんぷらなどが次々に運ばれた。ビールも酒もとてもうまかった。話や座が弾んだが、小生は川越からの家路を考えて少々飲んで我慢、残念でならない。代わりに料理はほとんど平らげたところで、うどんとご飯が一度に出た。おばさんがしきりに勧めてくれたが、とてもとても。

心配した高速の渋滞もさほどではなく、午後八時半、無事川越に帰着した。お世話になった、岩堀、長島、高野、加島、宇都野の幹事さんに心からお礼を申し上げてペンをおく。(八木一郎)

第24回 湯ノ丸山 二一〇一頁

二〇〇五年六月二十五日(土)

松崎中正、川口泰、岩崎清彦、木村良次、長島威、染谷明、高野七郎、田村昭雄、戸部秀明、荻原克則、黒沢資到、宇都野正敏、加島篤人、米山博久、真下俊哉、斎藤雄一

昨年末地元埼玉に単身転勤となり、一つ先輩の黒沢さんから電話

を頂いた。同期の加島さん、宇都野さんと四人で久しぶりに一緒になったときに、今回の山行に誘われた。もうかれこれ十六年間、そういうえば結婚してから全く山へ登っていない。多少心配であったが、行程も短いので大丈夫と聞いて参加することにした。運動もしていないので、運動靴すら持つておらず、登山用品をそろえることから始めると、気持ちワクワクしてきた。

川越では雨を心配していたが、まさに梅雨の中休みの絶好の天気。参加者はいつもの方々とのこと。上信越自動車道を進むバスの中では近況報告、当日の行程などの話。車窓から妙義山もはっきりと見ることができた。楽しいバス旅。

そばの売店でとうもろこしを焼く香ばしい香りがしてくる中でまずは記念撮影。湯ノ丸山はスキー用のリフトを利用すると、途中のつつじ平までは楽に登れる。おばさんハイカーも多く、登山ブームを実感する。見た目より結構きつい登りだ。日差しも強い。ゆつくと景色を楽しみながら登る。レンゲツツジは満開だ。

左手にリフトの終点を過ぎて、つつじ平に着くと、ここはツツジの大群落。あたり一面蜜のにおいがする。大勢の人が花の中で写真を撮っている。一番良い時季に来られたことを改めて実感する。それにしてもなんと人が多いことだろう。こんなに一度に人間が山に入って大丈夫なのかと心配になる。自分も仲間のくせに。

いよいよ最後の登りで頂上を目指す。見た目はきつそうだが、ちようにお昼時で上り下りとも渋滞していたので、景色を楽しみながらゆつくりと登れた。振り返る浅間山方面もかすんで見える。

頂上からは三六〇度の展望。二千餘峰をこんな手軽に登れるなんて。天候に恵まれ、とても幸運であった。頂上にはそれぞれのベースで昼にはみんな到着して、目の前に次に目指す烏帽子岳を見ながら弁当を楽しんだ。いい汗をかき、ここまでは順調。一安心。

これからはバスの中で話があったように行程が分かれる。角間峠経由で「雪山賛歌の碑」を見に行かれた先輩もいたが、私は烏帽子岳へ向かうことにした。いったん湯ノ丸山を反対側に下った鞍部から烏帽子岳への上り。思ったほどきつくはなかったが、疲れが出てきて、日ごろの運動不足を感じた。

烏帽子岳は湯ノ丸山と違い、登る人の数は少ない。稜線まで登ると、すばらしい展望とツツジ。それにしてもどこへ行ってもツツジがある。だれかが植えたみたいだ。ここから尾根伝いに行くと頂上である。頂上からの眺めも最高。山に登ってよかったと思うひと時であった。しばし景色を堪能する。

下りはさっきの鞍部まで引き返し、湯ノ丸山の巻き道を地蔵峠へと向かう。ほとんど平らの道で、子供のころ近くの雑木林を歩いている感じがした。結構な速さで歩いたので、あつという間につつじ平との分岐に到着。キャンプ場にはいい水場もあった。顔を洗うと冷たくとても気持ちいい。一三時半地蔵峠に到着。

碑を見に行かれた先輩たちも戻り、バスに乗ってお楽しみの温泉に向かう。いい汗をかいた後の温泉は最高。私はこういう生活を送っていた。座敷での恒例の宴会では、とても幸せな気分でお酒を飲む。その席でなぜか私が山行記を書くことになってしまった。

帰りのバスでまた飲みながら、学生時代の話が盛り上がった。川越には二〇時過ぎに到着。長島先輩主催のお疲れさま会。家ではぐっすり眠った。

(米山博久)

第25回 赤沢山 一四五四呎

二〇〇五年十一月五日(土)

参加者 松崎中正、岩堀弘明、木村良次、関口洋介、澤田英教、長島威、星野光伸、石井秀世、斉藤雄二、田村昭雄、戸部秀明、東海林均、宇都野正敏、加島篤人、真下俊哉、斎藤雄一、黒沢資到、川口泰

予報は雨だというのに抜けるような青空だ。きつと高野幹事長が、欠席のためだろう。車内では、日ごろかあちゃんに押さえつけられているらしい黒沢君が「晴れだ！晴れだ！」と大はしゃぎ。自称気の小さい松崎先生が、「そんな声が天の神様に届くと、雨になっちゃう」と妙な心配をしている。前回の「弁当置き忘れ事件」や「混浴温泉の椿事」^{ちんじ}など、わいわい騒がしいやりとりの中、たちまち法師温泉赤沢スキー場入り口に着く。

まずは、記念写真。カメラマンは、お相撲さんだし宇都野君、彼が構えた最新式のデジカメが、一円玉くらいに見えた。マイクロバスは、途中の事故にそなえて、一二時まで、ここに待機しているとのことなので、おれはひそかに、だれかがバテたら、付き添いが



2005年 赤沢山 赤沢林道赤沢入り口で

てら、一緒に下って四万の温泉でお先に一杯と、もくろんでいたのだが、あてが外れた。

今年は、紅葉も外れだそうだが、逆光の中、ブナやカエデの黄色や真っ赤な葉っぱが、しきりに降りかかるさまは悪くはない。そんな風流には目もくれず、どんどん先を急ぐ連中は、早く下って一杯とたくらんでるに決まってる。みんな考えは同じだ。

コース中ただ一個所の水場の辺りでは、ブナ、ミズナラ、トチの巨木に目を見張る。心地よい二時間で、赤沢峠に着く。何人かが稲包山に登ろうと出かけた。汗かいてビールの味を良くしようとのノンベエの魂胆は丸見えだが、おれはそんなかつたるいことしなくても、いつも酒はうめえ。

松崎先生は、峠のあずまやに着くやいなや、例の「ドカベン」をがつつき出したので、みんな目を見張った。銀シャリの上に焦げたアブラゲがべたりと一枚、お主いわく、「山では、焚き火でアブラゲをさっと焼いて、しょうゆをジュツとかけ、かじりながらコーヒー飲むのが最高」と。おれならコーヒーより「アツカン」さ。

昼飯が済んで、御老体、腰を上げたから下るのかと思つたら、なんと、「さあヤブこぎに行くぞ」。どうやら峠の南、道のない赤沢山へ登るらしい。峠まで、やっと歩いてきたんみたいだから、おれはいやな予感がした。というの、この辺は人間の生き血が大好物の「山ヒル」が沢山いると聞いていたから。貧血ぎみのおれには命にかかわる問題だが、お主だつてもうそんなに血は多くはないだろうから気になった。おれは考えた揚げ句、血の気のある「いけにえ」

をささげることにした。そのかさされたお供何人が一緒に、背丈もあるヤブに消えていった。御老体は別人のように元気で先頭に立つて、「三角点は山のでっぺんにあるはず！」。

静かな頂上からは、おむすびみたいにとんがった稲包山や、花のおわつたシャクナゲやサラサドウダンの大木が、深山の雰囲気をもし出していったそう。これがホントの山登りと、御仁は子供のようにうれしがってた。

全員無事予定の峠越えをした。四万温泉で一風呂浴びて、中之条に出て食事をする。美人の女将おかみのこないいお店を予約しておいてくれた幹事さん、ありがとう。ご参加の皆様お疲れさまでした。またの機会にお会いしましょう。

⑩ 椿事はだれも忘れようたつて、忘れないだろうが、もう片方の弁当は——

小川インターで先に降りた田村氏から、帰りのバスに電話があつた。

「私は迎えにきたカアチャンに釜めしのお土産買って来たんだが、それを網棚に忘れた。みんなで食ってくれ」

幹事の幸すしは悩んだ末に、提案した。

「みんなで分けたつてなん粒かずつだ。けんかになるから、松崎先生に奥さんの土産に」

後になって聞いたんだが、田村氏はお土産もないとカアチャンに怒られ、先生はカアチャンとどっちが好きなおかずを食うかでもめたんだそう。どっちみち、忘れたんが悪い。十個も買ってきて忘

れたんだったら話は別だけど。

(星野光伸)

第26回 苗場山 二一四五頁

二〇〇六年六月二十四日(土)

参加者 松崎中正、滝沢茂樹、八木一郎、岩崎清彦、澤田英教、長島威、星野光伸、石井英世、斉藤雄二、高野七郎、遠藤孝、鷹背勝之、入沢清、黒沢資到、加島篤人、真下俊哉、斎藤雄一

例によってマイカーで参加。熊谷在住の私にとって、上越方面の山行の場合、川越まで戻ってバスで行く気になれず、わがままを言っただけでマイカーで参加させてもらっている。赤城SAで合流。松崎先生と鷹背さんが私の車に乗り換える。雑談をしながら走ると、アツという間に湯沢ICに。入山チェックのゲートを無事通過し、町営駐車場へ。さすが人気の百名山、すでに満車状態だ。

ゲートでは登山者はフリーパスだが、山菜取りは入山不可だとか。山菜を生活のかてにする地元民を保護するという理由から一般者の入山を規制しているのだが、フリーパスにすると町の人は根こそぎ採ってしまってしまふから仕方がないのだ。ウド、フキ、コゴミ、なんでも株のうち何本かはのこしておくのが地元の人々の鉄則だ。コシアブラなんか、芽が出るそばから採られてしまつて、ついには望みして、枯れている姿を見るのは哀しい。

後続バスに乗り換え和田小屋まで入り、幹事から下山時刻が告げ

られて皆それぞれ出発する。ジジババ山岳会などは、隊列を作つて一斉に出發、休息するが、さすが自由な気質の川高スタイルだといつも思う。苗場は、数本のルートがあり、そのうちのこの祓川コースは、アプローチがよく一〇〇分付近まで車で入れるため人気が高い。この付近は、シラネアオイやコイワカガミ、サルナシがきれいだ。時間的にはすでに山頂へは行ける時間ではなくなつてしまつた。とりあえず、雷清水まではと下ることにする。ここの読み方は「かみなりしみず」と思っていたら、松崎先生から「かんなりしみず」だと教えていただいた。さすがである。館岩の湯の花温泉にある「大嵐山」も「おおあれやま」と読むのだとも。地名の読み方は難しいものだ。

さて、今回はここまでと決め込んだら大休止、冷たくて美味い水も豊富にあるので、ゆっくりと昼食にする。若手や元気な高野さんらは山頂を目指しているらしい。松崎先生は、珍しい？ 高山植物を探しにさらに下つていった。天気はあまりすっきりせず、山頂もガスの中で望めない。何年か前、紅葉の時期に来たときは、意外とどっしりとした山頂に驚いたのを覚えている。

下山は同じコースを下る。残雪もかなりあるためガスも出てきた。下ノ芝からはゲレンデを、山菜を少しいただきながら下る。なんとか制限時間内に和田小屋に到着し、下山祝い(ビール)で乾いた喉を潤す。松崎先生が遅いと思っていたら、危うくカッサダムの方へ降りてしまふそうになったとあわてて下つてこられた。

下山後は、街道の湯で汗を流し、越後湯沢市内で名物へぎそばと

ビールで下山を祝う。皆はバスに乘車、私は翌日、日本海で鯛を釣るべく寺泊へと高速を走る。釣果はというと……。

最近、家人に「毎週のように山に行つて遊んでばかりでそんなに楽しいのか」とよく言われるが、「楽しいだけではなく苦しいことも沢山ある。だから遊んでいるのではなく、むしろ山は修行だ！」と答えている。

高校から本格的に山を始めて三十五年、これからも「修行」を続けていくつもりである。
(入沢 清)

第27回 大岳山・御岳山

一二六七頁・九二九頁

二〇〇六年十一月十一日(土)

参加者 川口泰、岩崎清彦、木村良次、関口洋介、長島威、遠藤孝、鷹齋勝之、東海林均、黒沢資到、宇都野正敏、加島篤人、斎藤雄一

鶴ヶ島市内の東武越生線一本松駅近くを南北に走る「鉄砲道」という道路がある。そのいわれは知らないが、三キロほどの間、一直線の道である。その道を、南へ向かつて行くと、真正面にずっと大岳山が見える。

ちよつと昭和新山に似ている姿は(後者のほうが前者に似ていると言るのが正しいけど)、奥多摩の山の中でも際立っていて、山岳同定のポイントである。

高校時代、歩荷訓練で、氷川から御前山を経て目指したことがあ

ったが、大雨に遭い、体調不良を訴える者もいて、はるか手前で下山したことがあった。

道なし、藪山がお決まりの歩荷には珍しく整備されたコースであったにもかかわらず、敗退したことを、特異な山容を目にするたび思い出していた。

今回、紅葉狩りを兼ねて、さらに楽な御岳山經由で大岳山に行けることを、かなり前から楽しみにしていた。

参加者が多くないので、バスは使わずに、木村先輩、加島氏のワゴン車で、いつものように川越を出発した。しかし、この雨模様では、御岳まで上がって雨なら、またの機会に、と私は内心決めていた。だから雨具は持たず、途中のコンビニで傘を買い、これが必要になったら戻るつもりだった。

八時にはケーブル駅駐車場に着き、現地参加の川口、遠藤両先輩と合流、ケーブルカーで御岳山に向かった。天候はずっと、降らず降らずみといったところで、さてさて、どうしたものか。

第一の目的である御岳神社は、下見済みだったので、斎藤君と二人巻き道を行く。低くなっている雲の中に入っているようで、展望はまったく見えないが、雲間に古木が見え隠れして、幽玄な景色となっている。どうせ雨だからと、カメラを持ってこなかったことを悔いた。

御岳神社からの道との合流点で、参拝のメンバーを待ち、いざ、大岳山へ。だからだらとした道をしばらく進み、東屋で休憩をとる。晩秋の曇天はかなり寒い。ここから、やや急な登りとなり、息を切

らしつつ進む。

登りきった所は、大岳山との鞍部の峠で、ザックを降ろし座り込んでみると、遠藤先輩が、「この岩石園は、見る価値がある」という。整備された遊歩道を進んでいって、滝や溪谷の眺めを堪能した。こんなことで、今回の山行は終了した。

青梅の簡保施設で入浴し、川越に帰って幸すしで打ち上げた。ここで、俳優の古谷一行氏と巡り合い、記念撮影に及んだのは全くの蛇足。

(宇都野正敏)

第28回 小野子山

一二〇八頁

二〇〇七年五月二十日(日)

参加者 松崎、川口、岩崎、関口、木村、澤田、長島、染谷、高野、田村、鷹觜、入澤、黒沢、宇都野、加島、斎藤

今回は貸し切りバスでなく、「幸すし」から参加者の車に分乗して出かけました。高山村の赤芝登山口に九時前に到着し、支度を整えて記念の写真を撮りました。

私の趣味の一つは、デジカメで撮った写真に腰折れを詠み込み、これを絵手紙形式の「写短の絵はがき」と称してお送りすることです。

登山口の案内板にあった天然記念物のゴヨウツツジは、登り始めてから一時間後、白い花の大木を見ることができました。同行の後

輩の宇都野君は、高級カメラを手に「これを見たくて来たので、もう引き返してもいい」と、いつもながらの満足そうなヒズ・ペースでした。

そのツツジはガイドブックによれば、「姉妹ツツジ」の姉ツツジで、妹ツツジはさらに登ったところにあったそうですが、すでに枯れてしまったようです。シロヤシオで、根元周り一・三七^m、樹高は五・三^mあるとのこと。周囲に柵をめぐらして手厚く保護されていました。

次の小さなピークに着くと一気に北側の視界が開け、一度鞍部へと下って登り返すと小野子山の頂上(一二〇八^頁)に立ちました。展望は素晴らしく、榛名山、谷川岳、赤城山など名だたる山々と眼下の利根川の先に広大な関東平野を見渡すことができました。歩調を合わせた宇都野君、斎藤君と一緒に記念写真を撮り、昼食をとりましたが、健脚を誇る参加者の多くは中ノ岳から十二ガ岳方面へ向かっていたようです。

思えば、父母のふるさとに近いこの山には、半世紀前の学生時代に逆のコースで登ったことがあり、若さに任せて東にそびえる子持山まで欲張ったものでした。

帰りは平成の大合併で渋川市に編入された金敷地区の温泉につかり、日暮れ前に川越に戻って、幸すしで恒例の下山日、待ちをして私は思い出を新たにしました。

父母の里 群馬の山に OBと 登りて極む 子持山かな

(木村良次)

第29回 乾徳山

二〇三二頁

二〇〇七年十月二十四日(水)

参加者 川口泰、可児一男、岩堀弘明、岩崎清彦、澤田英教、長島威、石井秀世、高野七郎、田村昭雄、宇都野正敏、加島篤人

「コース」 川越→勝沼IC→大平荘→道満尾根→扇平→乾徳山→扇平→太平荘→勝沼IC→川越

参加者の日ごろの心掛けよろしきか、日本列島高気圧真つ只中の登山日和となった。相模原の川口さんは直接出発地の大平荘に直行してきた。

大平荘—扇平

登り始めの二〇分ぐらいは、急な坂道であるが、道満尾根まで比較的歩きやすい広葉樹林の山道である。扇平まで平坦な林道を、はらはらと散る葉を踏みしめて進む。途中見晴らしい個所では、雲上の富士山が一服の絵だ。右手前方には、これから登る乾徳山が紅葉の衣を着ておいでおいでしている。

楽な山道を一時間ほどでスキ原の扇平に到着。一ヶ月前には愛らしい花が咲いていただろう。ここも富士山の眺めが素晴らしい。

扇平—乾徳山

こんな調子でこのまま行ってほしいと思っていたが、すぐに傾斜が増して足場はガレた山道となる。山頂近くなるとさらに岩場が多くなり、周りの景色を見るところでなくなってきた。

第一の鎖付きの岩場、髭剃り岩がそびえ立って待っていた。岩は登山で角が滑りやすくなっているが、何とか二、三個の巨石をクリア、岩のすき間を抜けると、突然視界が開ける。南側にまた富士山、と南アルプスも見えて、のんびりしたいが、そんな思いが断ち切られるように頂上への最後の関門、鎖付きの岩場、天狗岩が行く手を拒むように垂直に突っ立っている。

登りきると、眼前にドームの乾徳山の頂上が待っていた。

山頂—太平荘

山頂からの眺望は素晴らしい、いまや紅葉盛りの黒金山、奥秩父の山々そして金峰山、甲武信岳と見渡せる。しかし足場はゴツゴツの岩で休むところが少ない。

昼食をとり、後続メンバーと入れ替わりに下山、天狗岩をアルミの梯子と綱を使って巻いた。岩とガレの道を下り扇平に到着、道満尾根経由でバスの待つている大平荘に戻った。

この山には、視界の良いところが随所であり、扇平から頂上までのスリリングな岩場とともに、日本の人気の山になっているのも納得である。

川口、岩堀、岩崎諸先輩の健脚に脱帽。それに、可児先輩の絶景スケッチの出来具合をぜひ拝見したいものだ。

午後三時半過ぎにバスで笛吹温泉へ。一風呂浴びてから塩山の割烹そばや「七福」で親睦会、川越に戻ったのは二〇時近かった。

(石井秀世)

第30回

粟ヶ岳

一二九三頁

加茂美人の湯

二〇〇八年五月二十四日（土）晴れ

参加者 滝沢、岩堀、岩崎、長島、石井、斉藤、高野、鷹薮、入澤、黒沢、加島

粟ヶ岳と聞いてピンとくる岳人はそんなにいない。特に関東人にとってはそうだろう。山歩き四半世紀、登った山はほとんど承知しているつもりだが、粟ヶ岳はバンザイだった。

幹事長の高野さんが、春山にこの山を推薦したらしい。幹事の人である私は、皆さんに連絡するために早速資料を集めにかかったが、あまりガイドブックがない。打田鉄一『関越道の山88』と分県登山ガイド『新潟県の山』くらいなものだった。差し当たり後者をコピーして配った。

粟ヶ岳へのアプローチは長い。川越から三条燕インターまで二五〇^キ！ 時速一〇〇^キで走っても高速だけでたっぷり三時間の計算だから、入山口の県民センターに到着したのが一〇時一五分。急いで支度して出発する。

清流沿いの林道を二〇分ほど歩き、こぢんまりしたダムを左岸へ渡り、山にかかる。地元の加茂山岳会（粟ヶ岳は行政的には三条市ではなくて加茂市に属する）が設置した鉄製の立派なナンバープレートが行程の目安となる。ナンバー一〇が山頂だ。最初の急な道を登ること四〇分、三合目のベンチのある尾根に出て展望がやや開け

る。ここからしばらくは傾斜がゆるみ、歩きやすくなる。所々で山頂の辺りが望めるようになった。

ヒメサユリが咲いている。淡いピンクの花にはほのかな香りがある。名といい、姿といい何ともいいえない。飯豊朝日ではずいぶんお目にかかってきたが、ここでも会えたのはうれしい。疲れも忘れて見とれた。

三日前の天気予報では完全に雨で、覚悟してやって来たのだが、予報がいい方にそれで、天気がよくて暑いくらいだ。そのためベースがどんどん落ちてくる。いつも元気な黒沢さんは今回も半パンだが、正解だ（と思ったが、後で了解）。私は彼に先頭を任せて石井さんと五合目、六合目と着実に進む。粟ヶ岳ヒュッテが建つ七合目からは、頂上は北峰と中峰に隠れてまだ見えないからなおさら遠く感じる。この時点ですでに正午。北峰への登りは最後の急登だ。左手には雪田が目立ってくる。同時に虫が多くなってきた。防虫網付きの帽子をかぶっている人は、この山をよく知っている地元の人に違いない。

北峰から中峰、さらに山頂へと続く稜線は、一三〇〇^キ足らずの高さとはとても思えない霧囲気のある山道であった。さすが越後の山だ。南には大きく守門岳^{すもんだけ}、北には御神楽岳^{みかぐらだけ}や磐梯山、飯豊連峰などの山々がよく見える絶景である。

ただ本当に虫が多い。ムシは無視なんてしゃれてる場合ではない。ちっけなハエみたいだが、中には刺すヤツもいて、じっとしてられない。防備手薄な黒沢さんは石井さんと早々と退山（退散、下

山)したが、私は後続を待とうと、少し滞在する。高野、鷹薮、入澤、長島の四さまが次々に登ってくる。岩堀さんから数人は北峰まで頑張ったようだ。時間は一四時ちようど、バスの発車時刻が決めているのでゆっくりしてはいられない。

下山には思いのほか手間取った。けっこう距離を感じる。鷹薮さんが遅れはじめる。足の古傷が痛み出したか。下山が得意な長島さんもさすがに疲れがたまったのか苦労していた。全員バスに戻ったのが一六時四五分。

「加茂美人の湯」で入浴、露天風呂に浸って、さつきまで歩いていた粟ヶ岳を仰ぎ見ると、みんなよく登ったなど感心すると同時に、うれしさが込み上げてきた。三条インター一九時五〇分、川越二二時四五分、皆さん本当にお疲れさまでした。(加島篤人)

第31回 茅ヶ岳 一七〇四頁

二〇〇八年十月二十六日(日)曇り

参加者 川口泰、関口洋介、澤田英教、長島威、高野七郎、田村昭雄、鷹薮勝之、入澤清、宇都野正敏、加島篤人、真下俊哉

東西に優美な裾を引くコニーデの茅ヶ岳は、中央線に乗っている人からよく八ヶ岳と見間違われる。「二七八ツ」なんて呼ばれるのは気の毒だ。

今や中高年に人気の「百名山」の張本人、深田久弥にとって、茅

ヶ岳は「姿が美しく、品格のある」、お気に入りの山だった。その彼は、何人かの気の合った友だちとこの山に登っていて、帰らぬ人となった。このため、静かだった茅ヶ岳は深田久弥終えんの山としてクローズアップされることになった。登山口には「百の喜びあり」の碑が建てられている。

八王子ジャンクションが完成して、川越から中央自動車道沿いの山に行くことが便利になった。が、私にはかえって不便だ。いままでのように関越道沿いの山に行くのなら、小川町に住む私は、途中の嵐山パーキングエリアでマイクローに乗り込むことができたから。

おかげで、まだ暗い四時起床。川越に行くと、今日は参加者が少ないため、バスでなく加島さん、宇都野さんの車二台に分乗するのだという。勝沼付近の強い雨も深田公園ではやんでいた。

三十分ばかりアカマツ、カラマツのほぼ平らな樹林帯を歩くと林道と交差、その後はなだらかな登りが続き、一時間半ほどで巨岩の立ちはだかる女岩の水場に着く。なぜ女性なのか、とにかく水がおいしい。女岩を右からからんで、急な登りに息を切らすと、辺りの紅葉がきれいになる。しばらくの急登で、尾根に出ると傾斜が緩やかになる。金峰山や八ヶ岳方面が見えてきた。

深田久弥の墓標は、登山界に有名な人の割にはつましかなかった。しかし私にはさすが山男と、かえって好感が持てた。供えてあったあめ玉にスズメバチが三匹集っていた。深田久弥は昭和四十六年三月二十一日の午後、ここで脳卒中を発病し、六十八歳の生涯を終え



2008年 茅ヶ岳登山口にて

ている。入山口から歩いて二時間のここでの脳卒中は致命的だったろう。日本ばかりかヒマラヤなどの文献にも詳しい彼の死は惜しまれる。私たちは花や線香が供えてある碑に合掌して、心からの哀悼の意をささげた。

岩がちの尾根を左から回り込むように登ると富士山が見えてきて、ほどなく頂上に到着した。十時半だった。展望には定評ある頂上だが、富士山、金峰山、八ヶ岳のほかは、いまいちである。南アが中腹まで雲の中なのは残念だ。

北西に尾根つづきの金ヶ岳に高野さんと入澤さんがアタックしたが、ほかの者はここで打ち止め。それぞれ持参した弁当を広げ、一時間ばかり登山談義に過ごす。誠に楽しい時間である。

茅ヶ岳は、さすがに人気のある山だ。ツアーらしい団体が次から次へと登ってくる。そんなに広くない山頂にゆうに百人はいただろうか。この盛況に深田久弥はいかがし召しかと、ふと思った。

二人が戻ってきたのですがすぐに下りにかかる。登ってきた道ではなく、平行している西側の尾根コースを取る。途中からは草原状の歩きやすい防火線の道で、ノンストップで登山口まで下ってしまった。登山口では地元の養蜂家が自慢のハチミツを売っていた。

例の通り、近くのリゾートホテルで一風呂浴びて、自家用車で現地集合した川口、鷹薺、入澤さんと別れた。周りの山が白い季節に、空気が澄んでいるときを狙って、是非とももう一度展望の頂上に立ちたいものだ。

(田村昭雄)

編集後記

記念誌の資料としては、手近の合同山行の記録のほかには、校友会誌と山岳部報とがあった。前者は母校の図書館の「明治文庫」によく保存されており、戦前の記録はその中から集めることができた。しかし後者のうち、「わんだらあ」の前身の部報「秩父峯」は、ついに三号までしか探し出せなかったことは遺憾であった。これらから記録をピックアップするに当たっては、年度の推移の中で、バラエティーに富む内容を念頭に置いた。

記念誌であるからには、OBの文章は欠かせない。今は山から離れていても、当時の思い出だけでもいい。山岳部の活動が現在の彼らの生活にどう関わっているかも興味がある。投稿案内の意外な反響には、さすが川高山岳部OBの感を深くした。以上は、順次ホームページ上にストックしていったが、上梓以前の、未整理の内容の公開が果たして正解であったであろうか。一冊にまとめるに際し、九十年にわたる山岳部の記録を戦前と戦後とに分け、戦後は二分して三部構成とした。それにOB会合同山行を加えた。

第一部戦前の部は、今となつては貴重かつ興味ある記録である。第二部・第三部の寄稿・取材原稿の一部には、年度ごとのスペースに合わせ、多少の手直しをさせていただいた部分がある。

るのをお許し願いたい。写真のキャプションや人名をもっと詳しく記したかったが、時間的にそれは無理であった。

活字離れがいわゆる現在、ただの文字の羅列はいただけでない。出来るだけ多くの方にご覧いただくには、どうしたらよいか。編集の苦心は実ここにあった。文章の推敲は当然としても、目で各年度が見渡せる簡明なレイアウトを工夫すること、視覚に訴えるために写真、コラム、カットなどをできるだけ多用すること、などに心がけたが、結果はいかがなものであろうか。

OBの皆さんには、本誌発行の費用のために寄付をお願いしたところ、絶大なご心配を賜った。また、寄稿はもちろん、情報・資料の提供などについても、多大なご協力をいただいた。これらのご支援なくしては、この記念誌は到底日の目を見ることはなかつたであろう。

皆さんのこうしたバックアップの下に、岩堀代表幹事をはじめとする編集委員会の十人は、上梓という結晶に向かって、それぞれの持ち場において、工夫と努力とを重ねることができたのであった。

山岳雑誌の名門「岳人」の東京新聞出版局のお世話になれたことはうれしい。数々のわがままなお願いをかなえてくださった植木幹雄編集部長、元岳人編集部の横内勝春氏にはお礼の言葉もない。

二〇〇九年一月

『青春の彷徨』編集委員会編集長 松崎中正

加島 篤人
宇都野 正敏
岩堀 弘明
井上 雅弘
石井 秀世
編集委員

松崎 中正
長島 威
鷹薙 勝之
高野 七郎
斉藤 雄二

青春の彷徨

—埼玉県立川越高等学校山岳部創立 90 周年記念誌—

発行日 2009 年 5 月 10 日
発行 埼玉県立川越高等学校山岳部 OB 会
OB 会事務局 〒350-0041 川越市六軒町 1-3-10
岩堀建設工業（株）内
電話 049-225-5111
ホームページ <http://www5c.biglobe.ne.jp/~kawa3-ob>
制作 東京新聞出版局
〒100-8505 東京都千代田区内幸町 2-1-4
印刷 長苗印刷株式会社

ISBN 978-4-8083-0917-6 C0075 ¥2857E
定価 3,000 円（本体価格 2,857 円 + 税）